

# 豊 後 府 内 7

中世大友府内町跡第20次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター



万寿寺 東北部上空から



万寿寺 南上空から





万寿寺 空中写真



新ノ土庄 区〇城跡及び築石跡



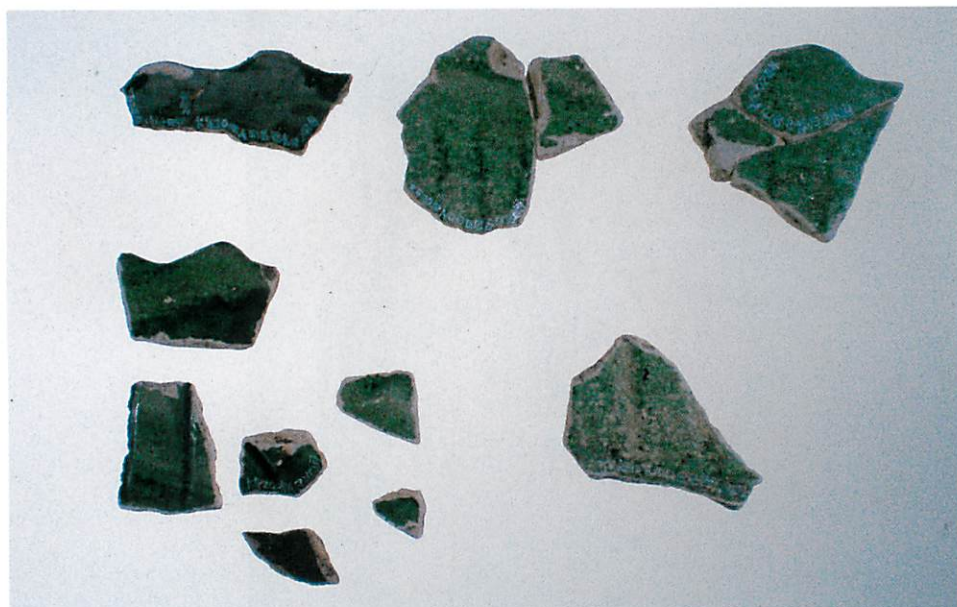
府内町跡20次調査A区 A-SB01



府内町跡20次調査C区 全景







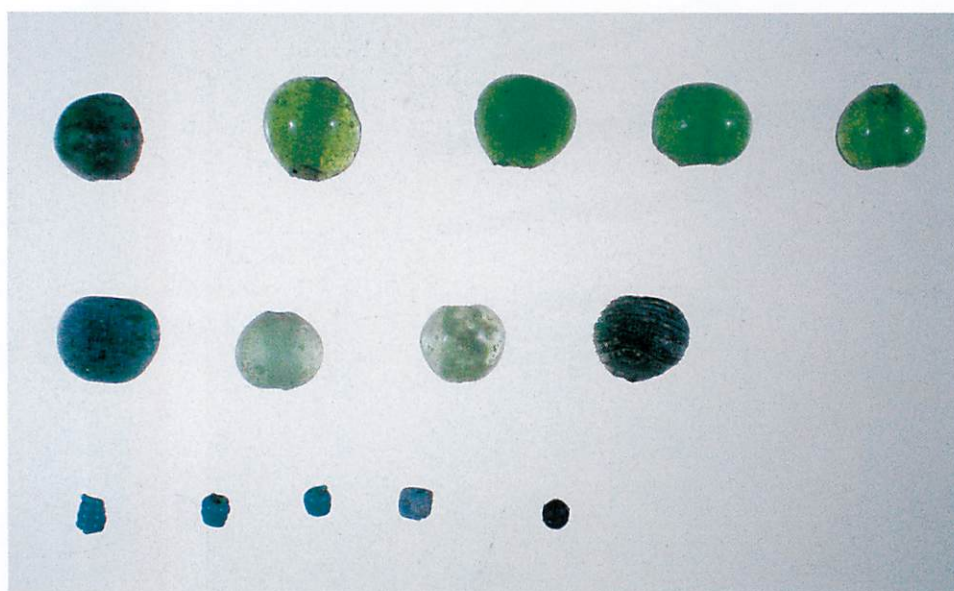
府内町跡20次調査A区 出土磁窰窯系陶器



府内町跡20次調査A区 出土龍泉窯系青磁



府内町跡20次調査A区 出土玉類



府内町跡20次調査B区 出土ガラス玉類

# 序 文

本書は、大分県教育委員会が国道10号古国府拡幅事業に伴い、国土交通省大分河川国道事務所から委託され実施した中世大友城下町跡発掘調査の報告書です。

大分市にあるこの遺跡は、かつて九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれ、その周辺には町屋や寺院が建ち並び、中世において「府中」とか「府内」と呼ばれる豊後国の中心地でした。近年の発掘調査は、こうした中世都市の構造や、そこで暮らした人々の生活の様子を明らかにしています。

本書に収録した第20次調査区は、戦国時代の「府内」の町の景観を描いたと伝えられる「府内古図」で見れば、その中でも最大面積を持つ「万寿寺」の北西隅に当たります。室町時代の「万寿寺」は禅宗寺院の官位制である五山十刹制のなかに数えられる九州最大級の規模と格式を備え、大友家と密接な関係を持っていました。

発掘調査では、「万寿寺」を創建した頃の溝、境内に建ち並んでいた建物の跡、16世紀の北側の境となる大規模な堀の跡、僧侶たちが利用した井戸などが検出されました。また、こうした遺構の中からは、当時、中国大陸からもたらされた青磁や白磁をはじめ、国内各地の窯業地で生産された壺や甕が出土し、「万寿寺」の交流範囲の広さを知ることができました。そして、16世紀の堀はすぐに埋め立てられ、屋敷地や街路に変わることがわかり、古文書では知ることの出来ない事実が明らかになりました。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深めるための一助となるとともに、学術研究資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、こころから感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 小 玉 学 司



# 例 言

1. 本書は、大分市元町に所在する中世大友府内町跡第20次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道10号古国府拡幅事業の実施に伴い、国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 中世大友府内町跡第20次調査は平成14年5月から平成15年3月にかけて実施した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は調査担当者が行ったほか、明大工業と国際航業に委託した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については調査員のほか、沓岐尾可奈子・大野瑞恵（大分県埋蔵文化財センター嘱託）があたり、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理作業員の多大な協力を得た。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系と（ ）内の世界測地系の数値を併記している。
8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。  
SD：溝、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SE：井戸、SF：道路および道路状遺構、SP：柱穴および小穴  
SX：その他の遺構（不明遺構・集石遺構・整地層など）
9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。  
青花 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）  
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）  
白磁 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）  
**備前系陶器**  
乗岡 実「中世備前焼甕（壺）の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料付第1回・第2回研究資料』所収 2000年）  
乗岡 実「近世備前焼播鉢の編年案」（『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会 2002年）  
**中国南部産焼締陶器鉢**  
吉田 寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.28 2003年）  
**京都系土師器および土師質土器**  
塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」（『博多研究会誌』第6号 1998年）  
塩地潤一「九州出土の京都系土師器皿」（『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年）  
坂本嘉弘「中世大友府内町跡出土の土師質土器編年」（『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年）  
**吉備系土師器碗**  
山本悦代「吉備系土師器碗の成立と展開」（『鹿田遺跡－第5次調査－（医学部および同付属病院管理棟新設予定地）』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年）  
瓦 森田 克「屋瓦」（『摂津高槻城』高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会）
10. 本書の執筆は第1～3・6章を坂本嘉弘、第4章を後藤晃一が行った。
11. 本書の編集は、坂本嘉弘・後藤晃一で協議して行った。

# 目 次

## 第1章 はじめに

第1節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の体制	4
第2節 遺跡の立地と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	6
第3節 報告書作成にあたって	9
1. 府内古図と街路名称の設定	9

## 第2章 中世大友府内町跡第20次調査A区

第1節 調査の経過と概要	10
1. 調査の経過	10
2. 遺構の概要	10
第2節 遺構と遺物	16
1. 溝及び関連遺構	16
2. 建物遺構	41
3. 土坑	44
4. 井戸	86
5. 柱穴及び柱穴状遺構	90
6. 整地土及び包含層	96
第3節 小 結	110

## 第3章 中世大友府内町跡第20次調B区

第1節 調査の経過と概要	111
1. 調査の経過	111
2. 遺構の概要	111
第2節 遺構と遺物	117
1. 溝及び関連遺構	117
2. 土坑	170
3. 井戸	211
4. 建物遺構	224
5. 柱穴及び柱穴状遺構	232
6. 各土坑・柱穴出土遺物	235
7. 整地土及び包含層	238
第3節 小 結	250



第4章 中世大友府内町跡第20次調査C区	
第1節 調査の経過と概要	251
第2節 遺構と遺物	259
1. 溝	259
2. 土坑	303
3. 包含層出土遺物	312
第3節 小結	319
第5章 自然科学的分析	
第1節 中世大友府内町跡第20次調査C区出土人骨について	321
1. はじめに	321
2. 人骨所見	321
3. まとめ	322
第2節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査	324
1. はじめに	324
2. 資料	324
3. 鉛同位体比の原理	325
4. 分析方法	325
5. 測定値の表し方	325
6. 化学組成	326
7. 結果	326
8. 考察	326
第6章 総括	
第1節 文献・絵画資料から見た万寿寺	332
1. 万寿寺の変遷と意義	332
2. 16世紀の万寿寺	332
3. 禅宗寺院と万寿寺の構造	334
第2節 考古学から見た万寿寺跡の西北隅	336
1. 万寿寺の建立期	336
2. 14世紀の万寿寺	336
3. 16世紀の万寿寺西北隅	337
遺物観察表	341
写真図版	379
報告書名抄録	406

# 挿 図 目 次

## 第 1 章

- 第1-1図 中世大友城下町跡発掘調査状況 ……………2  
第1-2図 大分平野の地形と主要遺跡 ……………5

## 第 2 章

- 第2-1図 府内町跡20次調査A区位置図 ……………10  
第2-2図 中世大友府内町跡20次  
調査A区遺構配置図(折込) ……11~12  
第2-3図 A-SD1501実測図 ……………17  
第2-4図 A-SD1501上層出土遺物実測図 ……………18  
第2-5図 A-SD1501下層出土遺物実測図 ……………19  
第2-6図 A-SD1501出土遺物実測図(1)……………20  
第2-7図 A-SD1501出土遺物実測図(2)……………21  
第2-8図 A-SD1501出土遺物実測図(3)……………22  
第2-9図 A-SD1501出土銅銭実測図 ……………23  
第2-10図 A-SD1501出土瓦実測図 ……………24  
第2-11図 A-SD1504実測図 ……………25  
第2-12図 A-SD・SK1505実測図 ……………26  
第2-13図 A-SK1505実測図 ……………27  
第2-14図 A-SK1024実測図 ……………28  
第2-15図 A-SD・SK1505出土遺物  
実測図(1) ……………29  
第2-16図 A-SD・SK1505出土遺物  
実測図(2) ……………30  
第2-17図 A-SD・SK1505出土遺物  
実測図(3) ……………31  
第2-18図 A-SD・SK1505出土遺物  
実測図(4) ……………32  
第2-19図 A-SD・SK1505出土銅銭  
実測図 ……………32  
第2-20図 A-SD1506出土遺物実測図(1)……………34  
第2-21図 A-SD1506出土遺物実測図(2)……………35  
第2-22図 A-SD1506出土遺物実測図(3)……………36  
第2-23図 A-SD1506出土遺物実測図(4)……………37  
第2-24図 A-SD1506出土遺物実測図(5)……………38  
第2-25図 A-SD1506出土遺物実測図(6)……………39  
第2-26図 A-SD1506出土遺物実測図(7)……………40  
第2-27図 A-SD1506出土銅銭実測図 ……………40  
第2-28図 A-SB001のA-SP026実測図……………41  
第2-29図 A-SB001実測図 ……………42

- 第1-3図 中世大友城下町跡と周辺の  
戦国時代遺跡 ……………7  
第1-4図 「府内古図」と街路名称の設定 ……………9  
第2-30図 A-SB001の柱穴出土遺物実測図 ……43  
第2-31図 A-SB001のA-SP026  
出土遺物実測図 ……………43  
第2-32図 A-SK040・A-SK041・  
A-SK042・A-SP069・  
A-SP070実測図……………44  
第2-33図 A-SK052出土銅銭実測図 ……………45  
第2-34図 A-SK041・A-SK042・  
A-SP069・A-SK040  
出土遺物実測図 ……………46  
第2-35図 A-SK102実測図 ……………47  
第2-36図 A-SK102出土遺物実測図 ……………47  
第2-37図 A-SK112・A-SP113・  
A-SP114実測図……………48  
第2-38図 A-SK112・A-SK113・  
A-SK114出土遺物実測図 ……………48  
第2-39図 A-SK1010実測図 ……………48  
第2-40図 A-SK1010出土遺物実測図 ……………49  
第2-41図 A-SK1013出土銅銭実測図 ……………50  
第2-42図 A-SK1013・A-SK1013(A)  
実測図 ……………50  
第2-43図 A-SK1013出土遺物実測図 ……………51  
第2-44図 A-SK1012・SK-A1014実測図 ……52  
第2-45図 A-SK1014出土遺物実測図 ……………52  
第2-46図 A-SK1014出土玉類実測図 ……………52  
第2-47図 A-SK1017実測図 ……………53  
第2-48図 A-SK1017出土遺物実測図 ……………53  
第2-49図 A-SK1018・A-SP1035  
・A-SK1036実測図 ……………54  
第2-50図 A-SK1018出土遺物実測図 ……………54  
第2-51図 A-SK1019出土銅銭実測図 ……………55  
第2-52図 A-SK1019実測図 ……………55  
第2-53図 A-SK1019出土遺物実測図 ……………55  
第2-54図 A-SK1023実測図 ……………56  
第2-55図 A-SK1023出土遺物実測図 ……………57

第2-56図	A-SK1026実測図	57	第2-97図	A-SK1094出土遺物実測図	74
第2-57図	A-SK1030実測図	58	第2-98図	A-SK1096・A-SK1097実測図	75
第2-58図	A-SK1030出土遺物実測図	58	第2-99図	A-SK1096出土遺物実測図	75
第2-59図	A-SK1035出土銅錢実測図	58	第2-100図	A-SK1099実測図	76
第2-60図	A-SK1039実測図	59	第2-101図	A-SK1099出土遺物実測図	77
第2-61図	A-SK1039出土遺物実測図	60	第2-102図	A-SK1099出土銅錢実測図	77
第2-62図	A-SK1042実測図	61	第2-103図	A-SK1100実測図	78
第2-63図	A-SK1042出土遺物実測図	61	第2-104図	A-SK1100出土遺物実測図	79
第2-64図	A-SK1043実測図	62	第2-105図	A-SK1101出土実測図	80
第2-65図	A-SK1043出土遺物実測図	62	第2-106図	A-SK1101銅錢実測図	80
第2-66図	A-SK1050・A-SK1051・ A-SK1052実測図	63	第2-107図	A-SK1101出土遺物実測図	80
第2-67図	A-SK1051出土遺物実測図	63	第2-108図	A-SK1104実測図	81
第2-68図	A-SK1056実測図	64	第2-109図	A-SK1104出土銅錢実測図	82
第2-69図	A-SK1058実測図	65	第2-110図	A-SK1104出土遺物実測図	82
第2-70図	A-SK1058出土遺物実測図	65	第2-111図	A-SK1105出土遺物実測図	83
第2-71図	A-SK1059出土遺物実測図	66	第2-112図	A-SK1105・A-SK1106 実測図	83
第2-72図	A-SK1059実測図	66	第2-113図	A-SK1107実測図	83
第2-73図	A-SK1065出土遺物実測図	66	第2-114図	府内町跡20次調査A区土坑 出土遺物実測図	85
第2-74図	A-SK1065実測図	66	第2-115図	A-SE1045実測図	86
第2-75図	A-SK1068出土遺物実測図	67	第2-116図	A-SE1045出土遺実測図(1)	88
第2-76図	A-SK1068実測図	67	第2-117図	A-SE1045出土遺実測図(2)	89
第2-77図	A-SK1069実測図	67	第2-118図	A-SK1045出土銅錢測図	89
第2-78図	A-SK1069出土遺物実測図	67	第2-119図	府内町跡20次調査A区主要 柱穴実測図	91
第2-79図	A-SK1070実測図	68	第2-120図	府内町跡20次調査A区主要 柱穴出土遺物実測図	92
第2-80図	A-SK1081出土遺物実測図	68	第2-121図	府内町跡20次調査A区柱穴 出土遺物実測図	93
第2-81図	A-SK1081実測図	68	第2-122図	府内町跡20次調査A区各遺構 出土遺物実測図	94
第2-82図	A-SK1082出土遺物実測図	68	第2-123図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(1)	97
第2-83図	A-SK1082実測図	68	第2-124図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(2)	98
第2-84図	A-SK1083実測図	69	第2-125図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(3)	99
第2-85図	A-SK1083出土遺物実測図	69	第2-126図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(4)	100
第2-86図	A-SK1084実測図	70	第2-127図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(5)	101
第2-87図	A-SK1084出土遺物実測図	70			
第2-88図	A-SK1089出土遺物実測図	71			
第2-89図	A-SK1089実測図	71			
第2-90図	A-SK1091出土遺物実測図	71			
第2-91図	A-SK1091実測図	72			
第2-92図	A-SK1092出土遺物実測図	73			
第2-93図	A-SK1092実測図	73			
第2-94図	A-SK1093実測図	73			
第2-95図	A-SK1093出土遺物実測図	73			
第2-96図	A-SK1094実測図	74			



第2-128図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(6) ……………	102
第2-129図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(7) ……………	103
第2-130図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(8) ……………	104
第2-131図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(9) ……………	105

### 第3章

第3-1図	府内町跡20次調査B区 位置図 ……………	111
第3-2図	中世大友府内町跡20次調査 B区遺構配置図(折込) ……………	113~114
第3-3図	B-SD001・B-SD002 出土遺物実測図 ……………	118
第3-4図	B-SD003・B-SD004・ B-SD064・A-1506実測図 (折込) ……………	121~122
第3-5図	B-SD003出土遺物実測図(1) ……………	123
第3-6図	B-SD003出土遺物実測図(2) ……………	124
第3-7図	B-SD003出土遺物実測図(3) ……………	125
第3-8図	B-SD003出土遺物実測図(4) ……………	126
第3-9図	B-SD003出土遺物実測図(5) ……………	127
第3-10図	B-SD003出土遺物実測図(6) ……………	129
第3-11図	B-SD003出土遺物実測図(7) ……………	130
第3-12図	B-SD003出土遺物実測図(8) ……………	131
第3-13図	B-SD003出土遺物実測図(9) ……………	132
第3-14図	B-SD003出土遺物実測図(10) ……………	133
第3-15図	B-SD003出土遺物実測図(11) ……………	134
第3-16図	B-SD003出土遺物実測図(12) ……………	135
第3-17図	B-SD003出土遺物実測図(13) ……………	136
第3-18図	B-SD003出土遺物実測図(14) ……………	137
第3-19図	B-SD003出土遺物実測図(15) ……………	138
第3-20図	B-SD003出土遺物実測図(16) ……………	139
第3-21図	B-SD003出土遺物実測図(17) ……………	140
第3-22図	B-SD003出土銅銭実測図 ……………	141
第3-23図	B-SD004出土銅銭実測図 ……………	142
第3-24図	B-SD004出土遺物実測図(1) ……………	143
第3-25図	B-SD004出土遺物実測図(2) ……………	144
第3-26図	B-SD004出土瓦実測図(1) ……………	146
第3-27図	B-SD004出土瓦実測図(2) ……………	147

第2-132図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(10)……………	106
第2-133図	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(11)……………	107
第2-134図	府内町跡20次調査A区 出土銅銭実測図 ……………	108
第3-28図	B-SD004出土瓦実測図(3) ……………	148
第3-29図	B-SD004出土瓦実測図(4) ……………	149
第3-30図	B-SD004出土瓦実測図(5) ……………	150
第3-31図	SD-B004出土瓦実測図(6) ……………	151
第3-32図	B-SD004出土瓦実測図(7) ……………	152
第3-33図	B-SD004出土瓦実測図(8) ……………	153
第3-34図	B-SD004出土瓦実測図(9) ……………	154
第3-35図	B-SD004出土瓦実測図(10) ……………	155
第3-36図	B-SD064出土遺物実測図(1) ……………	157
第3-37図	B-SD064出土遺物実測図(2) ……………	158
第3-38図	B-SD064出土遺物実測図(3) ……………	159
第3-39図	B-SD064出土遺物実測図(4) ……………	160
第3-40図	B-SD064出土遺物実測図(5) ……………	161
第3-41図	B-SD064出土遺物実測図(6) ……………	162
第3-42図	B-SD064出土遺物実測図(7) ……………	163
第3-43図	B-SD064出土遺物実測図(8) ……………	164
第3-44図	B-SD064出土遺物実測図(9) ……………	165
第3-45図	B-SD064出土遺物実測図(10) ……………	166
第3-46図	B-SD064出土遺物実測図(11) ……………	167
第3-47図	B-SD064出土銅銭実測図 ……………	168
第3-48図	B-SK015出土遺物実測図 ……………	169
第3-49図	B-SK015出土銅銭実測図 ……………	170
第3-50図	B-SK015実測図 ……………	170
第3-51図	B-SK016出土実測図 ……………	171
第3-52図	B-SK016出土遺物実測図 ……………	171
第3-53図	B-SK018出土実測図 ……………	172
第3-54図	B-SK018出土遺物実測図 ……………	172
第3-55図	B-SK020実測図 ……………	174
第3-56図	B-SK020出土遺物実測図(1) ……………	175
第3-57図	B-SK020出土遺物実測図(2) ……………	176
第3-58図	B-SK020出土遺物実測図(3) ……………	177
第3-59図	B-SK020出土遺物実測図(4) ……………	178

第3-60図	B-SK020出土銅錢実測図	179	第3-101図	B-SK132実測図	198
第3-61図	B-SK022実測図	179	第3-102図	B-SK132出土遺物実測図	198
第3-62図	B-SK022出土遺物実測図	179	第3-103図	B-SK134実測図	199
第3-63図	B-SK023・B-SK024実測図	180	第3-104図	B-SK145実測図	199
第3-64図	B-SK023出土銅錢実測図	181	第3-105図	B-SK146実測図	200
第3-65図	B-SK023・B-SK024 出土遺物実測図	181	第3-106図	B-SK146出土遺物実測図	200
第3-66図	B-SK031実測図	182	第3-107図	B-SK147出土遺物実測図	201
第3-67図	B-SK047実測図	182	第3-108図	B-SK147実測図	201
第3-68図	B-SK047出土遺物実測図	183	第3-109図	B-SK153実測図	202
第3-69図	B-SK048実測図	183	第3-110図	B-SK153出土遺物実測図	202
第3-70図	B-SK048出土遺物実測図(上層)	184	第3-111図	B-SK153出土銅錢実測図	202
第3-71図	B-SK048出土銅錢実測図	185	第3-112図	B-SK157実測図	202
第3-72図	B-SK048出土遺物実測図(下層)	185	第3-113図	B-SK157出土遺物実測図	202
第3-73図	B-SK057出土遺物実測図	186	第3-114図	SK-B161実測図	203
第3-74図	B-SK057実測図	186	第3-115図	SK-B161出土遺物実測図	203
第3-75図	B-SK060出土遺物実測図	186	第3-116図	SK-B164実測図	203
第3-76図	B-SK060実測図	186	第3-117図	SK-B170実測図	204
第3-77図	B-SK063実測図	187	第3-118図	SK-B170出土遺物実測図	204
第3-78図	B-SK063出土遺物実測図	187	第3-119図	SK-B177実測図	204
第3-79図	B-SK066実測図	188	第3-120図	SK-B177出土遺物実測図	204
第3-80図	B-SK066出土遺物実測図	188	第3-121図	SK-B178実測図	205
第3-81図	B-SK096出土遺物実測図	189	第3-122図	SK-B179実測図	205
第3-82図	B-SK097実測図	190	第3-123図	SK-B179出土遺物実測図	205
第3-83図	B-SK097出土遺物実測図	191	第3-124図	SK-B184実測図	206
第3-84図	B-SK098実測図	192	第3-125図	SK-B184出土遺物実測図	206
第3-85図	B-SK098出土遺物実測図	192	第3-126図	SK-B187実測図	207
第3-86図	B-SK100実測図	192	第3-127図	SK-B187出土遺物実測図	207
第3-87図	B-SK107実測図	193	第3-128図	府内町跡20次調査A区土坑 出土遺物実測図(1)	208
第3-88図	B-SK107出土遺物実測図	193	第3-129図	府内町跡20次調査A区土坑 出土遺物実測図(2)	209
第3-89図	B-SK113実測図	193	第3-130図	B-SE006実測図	211
第3-90図	B-SK113出土遺物実測図	193	第3-131図	B-SE006出土遺物実測図	212
第3-91図	B-SK122出土遺物実測図	194	第3-132図	B-SE009出土銅錢実測図	213
第3-92図	B-SK122実測図	194	第3-133図	B-SE009実測図	214
第3-93図	B-SK124実測図	194	第3-134図	B-SE009出土遺物実測図(1)	215
第3-94図	B-SK124出土遺物実測図	194	第3-135図	B-SE009出土遺物実測図(2)	216
第3-95図	B-SK126実測図	195	第3-136図	B-SE009出土遺物実測図(3)	217
第3-96図	B-SK126出土遺物実測図	196	第3-137図	B-SE010実測図	218
第3-97図	B-SK128出土遺物実測図	197	第3-138図	B-SE010出土遺物実測図	219
第3-98図	B-SK126実測図	197	第3-139図	B-SE010出土銅錢実測図	220
第3-99図	B-SK131実測図	197	第3-140図	B-SE017実測図	221
第3-100図	B-SK126出土遺物実測図	198			

第3-141图	B-SE017出土遺物実測図	222	第3-159图	府内町跡20次調査B区各 柱穴出土遺物実測図	236
第3-142图	B-SE056出土遺物実測図	223	第3-160图	府内町跡20次調査B区各土坑・ 柱穴出土銅錢実測図	237
第3-143图	府内町跡20次調査B区建物 遺構配置図	224	第3-161图	府内町跡20次調査B区出土 遺物実測図(1)	239
第3-144图	B-SB190実測図	225	第3-162图	府内町跡20次調査B区出土 遺物実測図(2)	240
第3-145图	B-SB191実測図	226	第3-163图	府内町跡20次調査B区出土 遺物実測図(3)	241
第3-146图	B-SB192実測図	227	第3-164图	府内町跡20次調査B区出土 遺物実測図(4)	242
第3-147图	B-SB193実測図	228	第3-165图	府内町跡20次調査B区出土 遺物実測図(5)	244
第3-148图	B-SB194実測図	229	第3-166图	府内町跡20次調査B区出土 遺物実測図(6)	245
第3-149图	B-SB195実測図	229	第3-167图	府内町跡20次調査B区出土 遺物実測図(7)	246
第3-150图	B-SB196実測図	230	第3-168图	府内町跡20次調査B区出土 遺物実測図(8)	247
第3-151图	B-SB197実測図	230	第3-169图	府内町跡20次調査B区出土 銅錢実測図	248
第3-152图	B-SB198実測図	231			
第3-153图	B-SB199実測図	231			
第3-154图	B-SB200実測図	231			
第3-155图	B-SP133実測図	233			
第3-156图	B-SP133出土遺物実測図	233			
第3-157图	府内町跡20次調査B区主要 柱穴実測図	234			
第3-158图	府内町跡20次調査B区主要 柱穴出土遺物実測図	235			

#### 第4章

第4-1图	府内町跡20次調査C区位置図	251	第4-18图	C-SD01出土遺物実測図(13)	280
第4-2图	中世大友府内町跡20次調査 C区遺構配置図(折込)	253~254	第4-19图	C-SD01出土遺物実測図(14)	281
第4-3图	調査区東壁土層図(折込)	255~256	第4-20图	C-SD01出土遺物実測図(15)	282
第4-4图	調査区西壁土層図(折込)	255~256	第4-21图	C-SD01出土遺物実測図(16)	283
第4-5图	C-SD-C001・C-SD-C010実測図	261~262	第4-22图	C-SD01出土遺物実測図(17)	284
第4-6图	C-SD01出土遺物実測図(1)	268	第4-23图	C-SD01出土遺物実測図(18)	285
第4-7图	C-SD01出土遺物実測図(2)	269	第4-24图	C-SD01出土遺物実測図(19)	286
第4-8图	C-SD01出土遺物実測図(3)	270	第4-25图	C-SD01出土遺物実測図(20)	287
第4-9图	C-SD01出土遺物実測図(4)	271	第4-26图	C-SD01出土遺物実測図(21)	288
第4-10图	C-SD01出土遺物実測図(5)	272	第4-27图	C-SD01出土遺物実測図(22)	289
第4-11图	C-SD01出土遺物実測図(6)	273	第4-28图	C-SD01出土遺物実測図(23)	290
第4-12图	C-SD01出土遺物実測図(7)	274	第4-29图	C-SD10出土遺物実測図(1)	292
第4-13图	C-SD01出土遺物実測図(8)	275	第4-30图	C-SD10出土遺物実測図(2)	293
第4-14图	C-SD01出土遺物実測図(9)	276	第4-31图	C-SD10出土遺物実測図(3)	294
第4-15图	C-SD01出土遺物実測図(10)	277	第4-32图	C-SD02・C-SD12実測図	295
第4-16图	C-SD01出土遺物実測図(11)	278	第4-33图	C-SD02出土遺物実測図	296
第4-17图	C-SD01出土遺物実測図(12)	279	第4-34图	C-SD02・C-SD12出土 遺物実測図	297



第4-35図	C-SD04実測図	298	第4-52図	C-SK10出土遺物実測図(3)	310
第4-36図	C-SD04出土遺物実測図	298	第4-53図	C-SK10出土遺物実測図(4)	311
第4-37図	C-SD05実測図	299	第4-54図	C-SK10出土遺物実測図(4)	312
第4-38図	C-SD05・C-SD06出土 遺物実測図	299	第4-55図	府内町跡20次調査C区 出土遺物実測図(1)	313
第4-39図	C-SD07・C-SD08・ C-SD09実測図	300	第4-56図	府内町跡20次調査C区 出土遺物実測図(2)	314
第4-40図	C-SD11実測図	301	第4-57図	府内町跡20次調査C区 出土遺物実測図(3)	315
第4-41図	C-SD11出土遺物実測図	302	第4-58図	府内町跡20次調査C区 出土遺物実測図(4)	316
第4-42図	C-SK01実測図	303	第4-59図	府内町跡20次調査C区 出土銅銭実測図(1)	317
第4-43図	C-SK01・C-SK02出土遺物 実測図	304	第4-60図	府内町跡20次調査C区 出土銅銭実測図(2)	318
第4-44図	C-SK05実測図	304	第4-61図	府内町跡20次調査C区 遺構変遷図	319
第4-45図	C-SK01・C-SK02出土 遺物実測図	305	第4-62図	府内町跡20次調査C-SD01 出土京都系土師器法量分布図	320
第4-46図	C-SK06実測図	305			
第4-47図	C-SK08実測図	305			
第4-48図	C-SK08出土遺物実測図	305			
第4-49図	C-SK10実測図	306			
第4-50図	C-SK10出土遺物実測図(1)	308			
第4-51図	C-SK10出土遺物実測図(2)	309			

## 第5章

第5-1図	頭骸骨(正面観)	323	第5-8図	第5-7図の拡大図	329
第5-2図	前頭骨病変部拡大図	323	第5-9図	今回測定した金属製品とこれまで 測定した中世大友町跡出土 金属製品及び鉛玉の鉛同位対比 ( <sup>207</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb- <sup>208</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb)	330
第5-3図	上顎骨・歯牙	323	第5-10図	今回測定した金属製品とこれまで 測定した中世大友町跡出土 金属製品及び鉛玉の鉛同位対比 ( <sup>207</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb- <sup>208</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb)	330
第5-4図	頭骸底に見られる切痕	323			
第5-5図	大友府内町跡から出土した 金属製品の鉛同位対比 ( <sup>207</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb- <sup>208</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb)	328			
第5-6図	第5-5図の拡大図	328			
第5-7図	大友府内町跡から出土した 金属製品の鉛同位対比 ( <sup>207</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb- <sup>208</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb)	329			

## 第6章

第6-1図	中世大友府内町跡20次調査区 遺構変遷図	339
-------	-------------------------	-----

付図

中世大友府内町跡20次調査区遺構配置図

# 目 次

## 第1章

第1-1表 中世大友城下町跡調査一覧表(1) ……3	第1-2表 中世大友城下町跡調査一覧表(2) ……4
----------------------------	----------------------------

## 第2章

第2-1表 中世大友城下町跡20次調査 A区遺構一覧表(1) ……13	第2-3表 中世大友城下町跡20次調査 A区遺構一覧表(3) ……15
第2-2表 中世大友城下町跡20次調査 A区遺構一覧表(2) ……14	

## 第3章

第3-1表 中世大友城下町跡20次調査 B区遺構一覧表(1) ……112	第3-3表 中世大友城下町跡20次調査 B区遺構一覧表(3) ……116
第3-2表 中世大友城下町跡20次調査 B区遺構一覧表(2) ……115	

## 第4章

第4-1表 中世大友城下町跡20次調査 B区遺構一覧表(1) ……252	第4-3表 府内町跡20次調査 C区西壁土層観察表 ……258
第4-2表 府内町跡20次調査C区 東壁土層観察表 ……257	

## 第5章

第5-1表 頭骨計測値 ……322	第5-5表 中世大友府内町跡から出土した 製品に関する鉛同位対比值 ……327
第5-2表 頭蓋小変異観察表 ……323	
第5-3表 府内町跡12・20次調査出土の 測定金属製品一覧表 ……324	第5-6表 付録 蛍光X線スペクトル ……331
第5-4表 中世大友府内町跡から出土した 製品の化学組成 ……326	

# 遺物観察表目次

遺物観察表1 府内町跡20次調査A区 出土遺物観察表(土器・陶磁器類)① ……341	遺物観察表5 府内町跡20次調査A区 出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤ ……345
遺物観察表2 府内町跡20次調査A区 出土遺物観察表(土器・陶磁器類)② ……342	遺物観察表6 府内町跡20次調査A区 出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑥ ……346
遺物観察表3 府内町跡20次調査A区 出土遺物観察表(土器・陶磁器類)③ ……343	遺物観察表7 府内町跡20次調査A区 出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑦ ……347
遺物観察表4 府内町跡20次調査A区 出土遺物観察表(土器・陶磁器類)④ ……344	遺物観察表8 府内町跡20次調査A区 出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑧ ……348



遺物観察表9 府内町跡20次調査A区	遺物観察表30 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑨ ……349	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑭ ……366
遺物観察表10 府内町跡20次調査A区	遺物観察表31 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑩ ……350	出土遺物観察表(土製品・石製品)① ……367
遺物観察表11 府内町跡20次調査A区	遺物観察表32 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土製品・石製品)① ……350	出土遺物観察表(土製品・石製品)② ……368
遺物観察表12 府内町跡20次調査A区	遺物観察表33 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土製品・石製品)② ……351	出土遺物観察表(玉・ガラス製品) ……368
遺物観察表13 府内町跡20次調査A区	遺物観察表34 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(玉・ガラス製品) ……351	出土遺物観察表(瓦類)① ……369
遺物観察表14 府内町跡20次調査A区	遺物観察表35 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(金属製品) ……352	出土遺物観察表(瓦類)② ……370
遺物観察表15 府内町跡20次調査A区	遺物観察表36 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(瓦) ……352	出土遺物観察表(銅銭) ……370
遺物観察表16 府内町跡20次調査A区	遺物観察表37 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(銅銭) ……352	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)① ……371
遺物観察表17 府内町跡20次調査B区	遺物観察表38 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)① ……353	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)② ……372
遺物観察表18 府内町跡20次調査B区	遺物観察表39 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)② ……354	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)③ ……373
遺物観察表19 府内町跡20次調査B区	遺物観察表40 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)③ ……355	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)④ ……374
遺物観察表20 府内町跡20次調査B区	遺物観察表41 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)④ ……356	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤ ……375
遺物観察表21 府内町跡20次調査B区	遺物観察表42 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤ ……357	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑥ ……376
遺物観察表22 府内町跡20次調査B区	遺物観察表43 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑥ ……358	出土遺物観察表(土製品・石製品)① ……376
遺物観察表23 府内町跡20次調査B区	遺物観察表44 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑦ ……359	出土遺物観察表(土製品・石製品)② ……377
遺物観察表24 府内町跡20次調査B区	遺物観察表45 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑧ ……360	出土遺物観察表(玉・ガラス製品) ……377
遺物観察表25 府内町跡20次調査B区	遺物観察表46 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑨ ……361	出土遺物観察表(木製品)① ……377
遺物観察表26 府内町跡20次調査B区	遺物観察表47 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑩ ……362	出土遺物観察表(木製品)② ……378
遺物観察表27 府内町跡20次調査B区	遺物観察表48 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑪ ……363	出土遺物観察表(瓦) ……378
遺物観察表28 府内町跡20次調査B区	遺物観察表49 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑫ ……364	出土遺物観察表(銅銭) ……378
遺物観察表29 府内町跡20次調査B区	
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑬ ……365	

# 写 真 図 版 目 次

巻頭写真図版 1	万寿寺東北上空から 万寿寺南上空から	写真図版 7	B-SK047 ……………385 B-SD003 B-SD003土層断面 B-SD064面 B-SD004瓦出土状況 B-SD004
巻頭写真図版 2	万寿寺空中写真	写真図版 8	B-SD003とB-SK020 ……………386 B-SK020全景 B-SK020近景 B-SK048 B-SK184 B-SK063
巻頭写真図版 3	府内町跡20次調査C区全景 府内町跡20次調査C区出土小柄 府内町跡20次調査A区 A-SB01	写真図版 9	B-SE009 (井戸) ……………387 B-SE006 (井戸) B-SE010 井戸内の挿鉢 B-SE010 裏込めの石 B-SK015 B-SD004出土状況
巻頭写真図版 4	府内町跡20次調査A区出土 磁甕窯系陶器 府内町跡20次調査A区出土 龍泉窯系陶器 府内町跡20次調査A区出土玉類 府内町跡20次調査B区出土ガラス玉類	写真図版 10	タイ産陶器 (四耳壺) ……………388 朝鮮王朝産陶器 (舟徳利) 備前系陶器 (掛花入れ) B-SK1505のこね鉢 スタンプ文のある瓦質土器
第1章		写真図版 11	備前系陶器のヘラ記号 ……………389 石鍋 亀山系須恵質土器とその格子叩き目
第2章		写真図版 12	金銅製品 ……………390 分銅 土製玉 石製品 (滑石製)
第3章		写真図版 13	常滑系陶器 ……………391 備前系陶器 (挿鉢) 備前系陶器ヘラ記号 1 備前系陶器大甕のヘラ記号 備前系陶器ヘラ記号 2
第4章	C-SD01を西側から望む ……………260 府内古図C類 ……………260	写真図版 14	吉備系土師器 ……………392 瀬戸美濃系陶器 土鍋 東播系須恵質土器 瓦質土器 (鉢)
第5章			
第6章			
写真図版 1	府内町跡20次調査区と万寿寺跡 (西上空から) ……………379		
写真図版 2	府内町跡20次調査区全景写真 ……………380		
写真図版 3	府内町跡20次調査と国道10号線 ……………381 府内町跡20次調査A区全景		
写真図版 4	府内町跡20次調査各溝の接合部 ……………382 府内町跡20次調査B区礎石建物群		
写真図版 5	A-SB01近景1 ……………383 A-SB01近景2 A-SB01の礎盤の川原石 (A-SP026) A-SK1505 A-SD1505		
写真図版 6	A-SD1501 ……………384 A-SD1501土層断面 A-SD1506 A-SK1017 A-SE1045(井戸) A-SK1039		

写真図版15	B-SK048出土在地系土師質土器 ……393	写真図版21	C-SK01遺物出土状況 ……399
	B-SK184出土在地系土師質土器		金箔土師器出土状況
	B-SK047出土土師器		C-SK05完掘状況・遺物出土状況
写真図版16	B-SD004出土各種瓦 ……394		C-SK06遺物出土状況
写真図版17	B-SD004出土丸瓦の製作痕 ……395		C-SK08遺物出土状況
	九州タイプの吊り紐痕		C-SK10遺物出土状況(1)
	本州タイプの吊り紐痕		C-SK10遺物出土状況(2)
写真図版18	C-SD01〔上層〕遺物出土状況 ……396		瀬戸美濃系陶器出土状況
	C-SD01〔上層〕青磁人物像燭台		備前系陶器出土状況
	出土状況		京都系土師器出土状況
	C-SD01〔中層〕遺物出土状況	写真図版22	C-SD01出土遺物〔備前系陶器〕 ……400
	C-SD01〔中層〕粘質土内遺物出土状況		C-SD01出土遺物〔土師質土器〕
	C-SD01〔中層〕猿形木製品出土状況	写真図版23	C-SD01出土遺物〔瓦質土器〕 ……401
	C-SD01〔中層〕華南三彩・舟形徳利		C-SD01出土遺物〔土製品〕
	出土状況	写真図版24	C-SD01出土遺物〔石製品・ガラス
	C-SD01〔下層〕遺物出土状況(1)		製品・金属製品〕 ……402
	C-SD01〔下層〕遺物出土状況(2)		C-SD01出土遺物〔木製品〕(1)
写真図版19	C-SD01〔下層〕燭台出土状況 ……397	写真図版25	C-SD01出土遺物〔木製品〕(2) ……403
	C-SD01〔下層〕土師質土器出土状況		C-SD10出土遺物〔備前系陶器〕
	C-SD01〔下層〕下駄出土状況	写真図版26	C-SD10出土遺物〔土師質土器〕 ……404
	C-SD01〔下層〕舟形木製品出土状況		C-SD10出土遺物〔木製品〕
	C-SD01〔下層〕C-SD01・C-SD10		C-SD02出土遺物
	切り合い状況	写真図版27	C-SD04出土遺物 ……405
	C-SD10遺物出土状況		C-SD05出土遺物
	C-SD10人骨出土状況(1)		C-SD11出土遺物
	C-SD10人骨出土状況(2)		C-SK05出土遺物
写真図版20	C-SD01直上 街路検出状況(東から) ……398		C-SK10出土遺物
	C-SD01・C-SD10完掘状況(東から)		包含層出土遺物
	C-SD02遺物出土状況		
	C-SD12遺物出土状況		
	C-SD04遺物出土状況		
	C-SD11遺物出土状況		
	C-SD05・C-SD07・C-SD08		
	・C-SD09遺物出土状況		
	C-SD05・C-SD07・C-SD08		
	・C-SD09完掘状況		



# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経緯

### 1. 調査に至る経過

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から、九州の玄関口としての役割を果たしてきた。中でも大分川左岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海路に加え、鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が顕著になると、県庁所在地である大分市は、東九州の交通の要衝となった。そうした中、明治44年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

ところが、昭和40年代以降の自動車交通量の増加は、大分駅周辺の交通状況に変化を起し、鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。そこで、これらを解消するため昭和45年、「大分市国鉄線高架化促進期成同盟会」が設立され、25年後の平成7年に大分駅周辺総合整備事業の「大分駅付近連続立体交差事業」として採択された。このため、国道10号線も鉄道の跨線橋である万寿橋を解消する必要性が生じた。国土交通省ではこれに併せ、道路幅を拡幅し、顕徳町交差点付近の交通混雑の緩和、沿道環境の改良、交通事故の防止など、道路交通の安全と円滑化を計るため、「国道10号古国府拡幅事業」を計画した。

一方、大分川左岸沿いには、自らキリシタンとなり、南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、街路・町屋の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は昭和31年に刊行された大分市史の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に欠けた。その後、昭和63年に刊行された大分市史・中巻では「府内古図」と、明治時代の地籍図と照合し、さらに現状の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、大分川に沿った東西約0.7km、南北2.2kmの規模の戦国時代の「府内」を再現することができ、平成5年に「中世大友城下町跡」として周知遺跡となった。

「一般国道10号古国府拡幅事業」は、この戦国時代の「府内」を南北に貫く土木工事となり、しかもこの町の中核部である大友館の東側を通過するものであった。そこで、大分県教育委員会は、事業主体者である国土交通省と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

### 2. 調査の経過

大分県教育委員会は「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う、中世大友城下町跡の発掘調査を、平成12年6月から開始した。しかし、この遺跡に対する発掘調査は、平成8年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴う、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施していた。また、前年度から「大分駅付近連続立体交差事業」に伴う調査も開始されており、同じ遺跡を2つの組織が発掘調査する状況であった。そこで大分市教育委員会と協議を行い、遺跡全体を「中世大友城下町跡」とするが、大友館部分は「大友館跡」、町屋跡部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査手順に調査次数を重ねることとした。

こうして、「一般国道10号古国府拡幅事業」の最初の調査として「府内町跡9次調査」が実施され、本書で報告する「府内町20次調査」は平成14年に実施された。この調査区は、対象面積が南北約100m、東西約21mの約2100㎡あることから、調査区の北側3分の1をA区・残り3分の2をB区とし、3組の調査班を投入し実施した。そして万寿寺の北側境の堀をC区とし、その北側の「府内町跡21次調査」の担当者が調査を行った。その開始順序は、A・B区を平成14年5月下旬から開始し、C区は出水が予想され、渇水期の平成14年12月から着手した。そして、平成15年3月中旬に

府内古図

大友館  
万寿寺大友館跡  
府内町跡

第1節 調査の経緯



第1-1図 中世大友城下町跡発掘調査状況 (数字は調査次数)

平成18年12月現在

第1表 中世大友城下町跡調査一覧(1)

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書刊行	調査内容
府内町跡1次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成16年3月	幅約10mの道路
府内町跡2次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成16年3月	
府内町跡3次	大分市教委	平成9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成15年3月	10基の備前焼の甕蔵
府内町跡4次	大分市教委	平成10年度	マンション建設	上市町	平成14年3月	名ヶ小路の街路の一部
府内町跡5次	大分県教委	平成11～13年度	JR日豊・豊肥線高架	御蔵場	平成17年3月	御蔵場の土塁
府内町跡6次	大分市教委	平成11年度	J A 葬祭場	寺小路町・万寿寺		万寿寺の南限の堀？
府内町跡7次	大分県教委	平成12・13年度	JR日豊・豊肥線高架	清忠寺町	平成18年3月	第1南北街路・屋敷墓
府内町跡8次	大分県教委	平成12年度	JR日豊・豊肥線高架	柳町・館の南側	平成17年3月	15世紀の溝・土塁
府内町跡9次	大分県教委	平成12・13年度	国道10号拡幅	御所小路町	平成17年3月	御所小路の街路
府内町跡10次	大分県教委	平成13・14年度	JR日豊・豊肥線高架	上町・祐向寺	平成19年3月	キリシタン墓
府内町跡11次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	称名寺		称名寺の西側の堀
府内町跡12次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友館・桜町・名ヶ小路町	平成18年3月	大友館の東北隅・礎石建物
府内町跡13次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	御内町	平成17年3月	ヴェロニカメダイ出土
府内町跡14次	大分市教委	平成13年度	マンション建設	唐人町	平成15年3月	井戸
府内町跡15次	大分市教委	平成13年度	スーパー建設	御北町		
府内町跡16次	大分県教委	平成13年度	JR日豊・豊肥線高架	上市町	平成18年3月	短冊形地割の町屋
府内町跡17次	大分市教委	平成14年度	ポンプ場建設	横町・清忠寺		横町の街路・鍛冶屋跡
府内町跡18次西	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友館・街路	平成18年3月	大友館と第2南北街路
府内町跡18次東	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	桜町	平成18年3月	大友館の東側の町屋
府内町跡19次	大分市教委	平成13年度	国庫補助 範囲確認	柳町		陶製井筒の井戸
府内町跡20次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	万寿寺	平成19年3月	礎盤建物・北境の堀
府内町跡21次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	堀之口町	平成17年3月	府内型メダイ出土
府内町跡22次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町	平成18年3月	第2南北街路
府内町跡23次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺		
府内町跡24次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺・寺小路町		万寿寺の塔の確認
府内町跡25-1次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	ノコギリ町		
府内町跡25-2次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	祐向寺	平成18年3月	16世紀代の掘立柱建物群
府内町跡25-3次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町		
府内町跡25-4次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町		16世紀後半の道路状遺構
府内町跡25-5次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	町外		
府内町跡25-6次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	祐向寺	平成18年3月	
府内町跡26-1次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	中町・テウス堂付近	平成18年3月	
府内町跡27-1次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	妙蔵寺		
府内町跡27-2次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	御北町		
府内町跡28次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	桜町	平成18年3月	
府内町跡29次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	万寿寺		万寿寺内の区画溝
府内町跡30次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	後小路町		14世紀代の町屋
府内町跡31次	大分県教委	平成15年度	JR久大線高架	瑞光寺		
府内町跡32次	大分市教委	平成15年度	個人・市道拡幅	中町・テウス堂付近	平成18年3月	
府内町跡33次	大分市教委	平成15年度	国庫補助 範囲確認	御内町の南限付近	平成15年3月	15・16世紀後半の大溝
府内町跡34次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	柳町		万寿寺西側境の堀・礎石建物
府内町跡35次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	後小路町・万寿寺		
府内町跡36次	大分県教委	平成15年度	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町		
府内町跡37次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御蔵場		
府内町跡38次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御所小路町		推定御所小路跡・南北大溝
府内町跡39次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	中町		
府内町跡40次	大分県教委	平成16年度	JR日豊・豊肥線高架	御内町		
府内町跡41次	大分県教委	平成16年度	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町		御蔵場の周辺の街路と町屋
府内町跡42次	大分県教委	平成16年度	国道10号拡幅	万寿寺		
府内町跡43次	大分県教委	平成16年度	国道10号拡幅	万寿寺		萬寿寺西側境の堀・礎石建物
府内町跡44次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	御西町		
府内町跡45次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	中町・コレジオ堂付近		
府内町跡46次	大分市教委	平成16年度	駐車場建設	万寿寺		
府内町跡47次	大分市教委	平成16年度	店舗建設	称名寺		
府内町跡48次	大分県教委	平成16年度	工業用水管	妙ヶ小路	平成18年3月	名ヶ小路
府内町跡49次	大分県教委	平成16年度	工業用水管	柳町・街路		
府内町跡50次	大分市教委	平成16年度	個人住宅 浄化槽	ノコギリ町・街路		御蔵場の西側の街路と側溝
府内町跡51次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北街路・御内町		萬寿寺西北隅・大友館東南隅
府内町跡52次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北街路・大友氏館		第2南北街路・大友館の東部
府内町跡53次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀		
府内町跡54次	大分市教委	平成17年度	浄化槽	称名寺の東		
府内町跡55次	大分県教委	平成17年度	庄原佐野線	御蔵場		
府内町跡56次	大分市教委	平成17年度	国庫補助 範囲確認	御西町		
府内町跡57次	大分市教委	平成17年度	市下水道	名ヶ小路町		
府内町跡58次	大分市教委	平成17年度	アパート建設	御所小路町		
府内町跡59次	大分市教委	平成17年度	市下水道	桜町		
府内町跡60次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	萬寿寺西側の堀		
府内町跡61次	大分県教委	平成17年度	J R 久大線高架	瑞光寺		
府内町跡62次	大分市教委	平成17年度	確認調査	第1南北街路		街路跡

## 第1節 調査の経緯

調査回数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書刊行	調査内容
府内町跡63次	大分市教委	平成18年度	確認調査	御西町		
府内町跡64次	大分市教委	平成17年度	アパート建設	御西町		
府内町跡65次	大分市教委	平成17年度	確認調査	御西町		
府内町跡66次	大分市教委	平成17・18年度	確認調査	御西町・大友館		
府内町跡67次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町		
府内町跡68次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	萬寿寺		
府内町跡69次	大分県教委	平成18年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店		御蔵場西側の街路・六角井戸
府内町跡70次	大分市教委	平成18年度	市下水道工事	来迎寺		
府内町跡71次	大分県教委	平成18年度	J R久大線高架	瑞光寺		蔭ヶ池の一部
府内町跡72次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	称名寺		名ヶ小路の北側側溝
府内町跡73次	大分市教委	平成18年度	桜ヶ丘雨水幹線	萬寿寺西側の堀		
府内町跡74次	大分市教委	平成18年度	民間共同住宅建設	大雄院の北側		
府内町跡75次	大分県教委	平成18年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店		備前焼搦鉢と中国産青花皿
府内町跡76次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	称名寺		

「府内町跡20次調査」全体が終了した。

埋蔵文化財  
センター

なお、平成16年度からは文化課から独立した調査組織となった大分県教育庁埋蔵文化財センターが、この事業に伴う発掘調査を継承して担当し、全体の発掘調査回数も平成18年12月現在、76回に至っている。

また、大分県教育委員会では中世大友城下町跡の発掘調査の刊行にあたっては、大分県土木建築部の「大分駅付近連続立体交差事業」、国土交通省の「一般国道10号古国府拡幅事業」など、委託先に関わらず、「豊後府内」を書名とし、副題に事業名を明記した。そして「豊後府内1」を「大分駅付近連続立体交差事業」に伴う発掘調査「府内町跡5・8次調査」の成果として平成16年度に刊行した。「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う発掘調査の最初の報告書は「府内」の御内町にあたる「府内町跡9・13・21次調査」の調査成果を「豊後府内2」として平成16年度に刊行した。そして平成17年度の「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う発掘調査報告書は「豊後府内4」で、平成18年度の本報告書は、萬寿寺跡の北西隅にあたる「府内町跡20次調査」の成果を「豊後府内7」として報告する。

### 3. 調査の体制

「一般国道10号古国府拡幅事業」の発掘調査は平成11年8月から開始されたが、この事業区域の西側大友館跡に隣接して「大友館跡」が想定されており、この遺跡に対して平成11年度から国指定史跡のための確認調査を大分市教育委員会が実施することになった。このように、大規模な土木事業が重要遺跡に近接して実施されることとなり、土木事業と遺跡保存の調整が行われる場面も想定できることから文化庁と協議を行い、調査指導者を平成12年度から大分県教育委員会と大分市教育委員会が各1回、年2回開催し、その指導を受けながら調査を実施することとした。

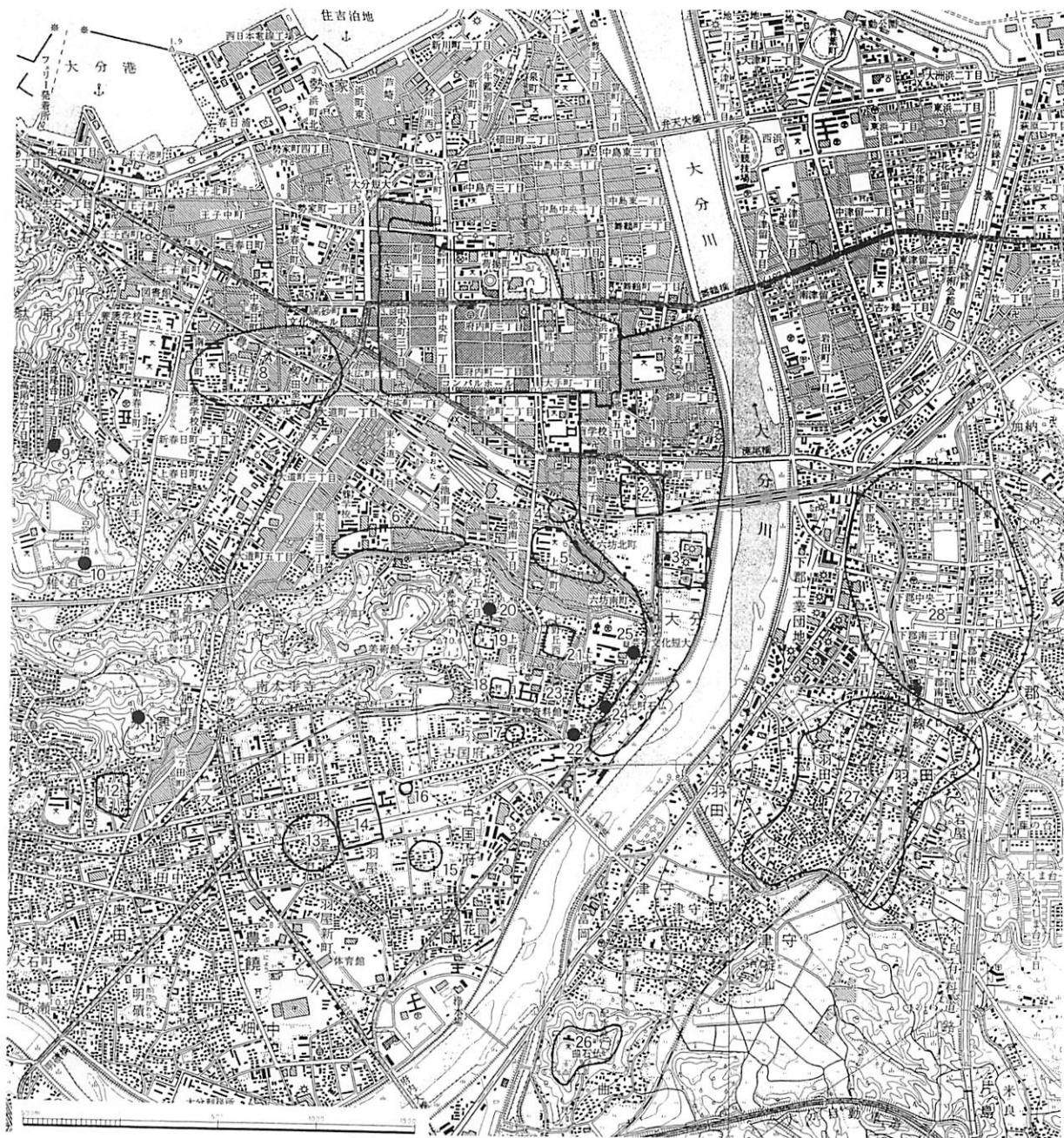
本書に報告する府内町跡20次調査を実施した平成14年度の発掘調査は以下の体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

平成14年度

調査指導者	河原純之（千葉大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官）
文化課長	岩男 康晴
参事兼課長補佐	麻生 祐治
参事兼課長補佐	清水 宗昭
受託事業担当主幹	坂本 嘉弘（府内町跡20次調査B区担当）
副主幹	友岡 信彦（府内町跡18次東区調査担当）



主査	山本 恭弘 (府内町跡20次調査B区担当)
主査	榎島 隆二 (府内町跡22次調査担当)
主査	後藤 晃一 (府内町跡21次・20次調査C区担当)
主事	恒賀健太郎 (府内町跡20次調査A区担当)
嘱託	加藤美成子
嘱託	阿比留史郎
嘱託	井上 索裕
嘱託	畔津 宏幸



第1-2図 大分平野の地形と主要遺跡

1. 中世大友城下町跡 2. 大友館跡 3. 万寿寺跡 4. 上野町・顕徳寺遺跡 5. 若宮八幡遺跡 6. 東大道遺跡 7. 府内城・城下町  
 8. 東田室遺跡 9. 亀甲山古墳 10. 古宮古墳 11. 千人塚古墳 12. 永興遺跡 13. 羽屋園遺跡 14. 金剛宝戒寺跡  
 15. 石明遺跡 16. 町口遺跡 17. 岩屋寺遺跡 18. 円寿寺 19. 金剛宝戒寺 20. 上野廃寺 21. 大友上原館跡  
 22. 岩屋寺石仏 23. 龍王畑遺跡 24. 元町石仏 25. 大臣塚古墳 26. 守岡遺跡 27. 羽田遺跡 28. 下郡遺跡群

第2節 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。そうした中、中世以降今日に至るまで、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、政治経済の中心地となる。この地域は、東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40～30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山(628m)へと続く標高80mから100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

こうした地域の中で、中世大友城下町跡は東部の大分川沿いに形成された都市遺跡である。府内古図に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や、元地形が残されている部分からの観察から、低湿地の広がり確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、府内古図に描かれる舟入に続き、近世府内では、府内城の縄張りの外郭である東側の外堀に継承されている。

中世大友城下町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。こうした土層の堆積状況は、大分川に近いほど厚く、中世大友城下町跡の井戸の調査では、大分川に近い「府内町跡8次調査」や「府内町跡17次調査」では、4m近くあるが、大分川から遠い、「府内町跡5次調査A区」や「府内町跡10次調査」では2mに満たない深さであった。

この沖積土の堆積時期は、下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8世紀頃の遺物が出土している。その間は無遺物層であり、おそらく短期間に2～3m堆積し形成されたものと考えられる。

2. 歴史的環境

別府湾に近い大分川左岸地域の古墳時代には、4世紀代の前方後円墳で、三角縁神獣鏡を出土した亀甲山古墳が、この地域を見下ろす西側の丘陵上に築造される。5世紀代になると、大分川や右岸の下郡地区を見下ろす上野丘陵の先端部に前方後円墳の大臣塚古墳が築造される。こうしたなか、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるようになるのは7世紀後半である。その代表的な遺跡として国指定史跡として整備されている古宮古墳がある。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱(672年)で大海人皇子(天武天皇)側について活躍した大分君恵尺(えさか)・稚臣(わかみ)の墓と想定されている<sup>1)</sup>。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の掘方をもつ大型掘立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている<sup>2)</sup>。

その後に設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された龍王畑遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての底をもつ掘立柱建物や築地塀跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司の館跡の可能性が指摘されている<sup>3)</sup>。この遺跡の東北部には8世紀～9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺

(1) 後藤宗俊「古宮古墳考」『大分県地方史』117 大分県地方史研究会 1985年

(2) 坪根伸也・塩地潤一「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ」『大分県地方史』163 大分県地方史研究会 1996年

(3) 高橋信武「大分県大分市上野遺跡群龍王畑遺跡」『日本考古学年報』50(1997年度版) 日本考古学協会 1999年

元町石仏 石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後の政治の中心地であったと考えられている。

こうした、古国府・上野丘陵の状況は、その周辺である大分川右岸でも確認され、下郡遺跡では、8・9世紀の大型建物跡や井戸跡などが検出されている。また、中世に「府中」・「府内」と呼ばれるようになる地域でも同様な遺構が認められる。すなわち、「府内町跡8次調査」では大型の掘立柱建物が検出されており、「府内町跡18次東調査」では井戸跡が確認されている。こうした遺構の広がり、この地域の広範囲に認められる。

11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の天喜元年(1053)、康平2年(1059)、承保4年(1077)に「勝津留畠四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後に守護職として下向した際、「高(隆)国府」を強引に割譲する。このため「高国府」「勝津留畠」については守護所の設置場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、二方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、府内古図に描かれた「府内」の初元的な位置づけがなされている<sup>(1)</sup>。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは仁治3年(1242)の新御成敗状



第1-3図 中世大友城下町遺跡と周辺の戦国時代遺跡

1. 中世大友城下町跡 2. 高崎城跡 3. 金谷迫城跡 4. 賀来氏館跡 5. 尼ヶ城跡 6. 雄城城跡 7. 石明遺跡 8. 町口遺跡
9. 岩屋寺遺跡 10. 大友上原館 11. 東大道遺跡 12. 守岡城 13. 津守遺跡 14. 片島遺跡 15. 下郡遺跡 16. 千歳城跡
17. 猪野新土井遺跡 18. 猪野中原遺跡 19. 横尾遺跡 20. 沖ノ浜 (推定)

(1) 鹿毛敏夫「戦国大名の外交と都市・流通—豊後大友氏と東アジア世界—」思文閣出版 2006年

で、都市の規範を示す条項が書かれている。このような文書資料では、13世紀代に豊後の中心地である府中が、都市として成立していた様子を示す<sup>(1)</sup>。

石明遺跡 しかし、こうした状況は考古資料で証明できていないわけではない。「勝津留畠」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明遺跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、最初に豊後に下向した三代大友頼泰初期の守護館の指摘もある。

万寿寺 14世紀代になると、徳治元年（1306）に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友城下町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。

町口遺跡 この時期の遺跡は、「府内」周辺でも多く確認されている。上野丘陵の南側の町口遺跡では地籍図に短冊形区割りが認められ、発掘調査の結果、16世紀後半の町屋跡が確認されている<sup>(2)</sup>。また、

下郡遺跡 大分川の右岸にある下郡遺跡群の津守遺跡・片島遺跡・下郡遺跡でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されており、異様な居館は、さらに東の猪野新土井遺跡、猪野中原遺跡、横尾遺跡でも発掘調査されている。こうした遺跡からは、「府内」と同じように、中国南部や東南アジアのからの貿易陶磁器が出土しており、規模の違いはあるものの、同じレベルの集落が存在していたことを示している。

高崎城 さらに、防御体制を見ると、「府内古図」の「府内」の南側にある上野丘陵に土塁と堀を廻らす上原館があり、その南側の大分川を渡った場所には、独立性の強い守岡丘陵があり、山城的な存在である。この様な城館は金谷迫城・雄城城・尼ヶ城・千歳城など数箇所が確認されている。そして、西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城、「高崎城」として知られている。

このように、16世紀代の府内は、府内古図に描かれていない部分も含め、その構造が論じられている<sup>(3)</sup>。

(1) 玉永光洋「豊後府内の形成と寺院」『都市と宗教』中世都市研究4 中世都市研究会 1997年

(2) 讃岐和夫「豊後国府推定地周辺の発掘調査 大分市古国府・羽屋地区の近年の調査から」『大分県地方史』117 大分県地方史研究会 1985年

(3) 坪根伸也「守護大友氏と豊後府内(府中)の空間構造」『守護所・戦国城下町を考える』第12回東海考古学フォーラム岐阜大会 2004年





## 第2章 中世大友府内町跡第20次調査A区

### 第1節 調査の経過と概要

#### 1. 調査の経過

中世大友府内町跡第20次調査の調査区は「府内古図」の復元案上では万寿寺跡の西北隅にあたる。この場所の現状は、水田と畑地になっており、特に万寿寺の北側境と想定されている場所は東西方向に幅約10mの細長い水田があり、遺跡の東側を北流し、別府湾に注ぐ大分川へ続いている。この細長い水田は、周辺の水田や畑地よりも約0.5mから1m低く、現状の地形からも堀の存在が推測されている。

府内町跡第20次調査区はこの万寿寺北側境の堀と推測される部分から南に約100m、東西幅約21mの約2100㎡の範囲で、西側に南北に走る国道10号線に沿って設定した。しかし、中世大友城下町跡は遺構密度が高く、しかも文化層が複数枚にわたる。このため年間の発掘調査面積は約800㎡しか完了できなかった。そこで、この調査区を3分し、万寿寺北境の堀をC区、それから南に約700㎡をA区、その南の1400㎡をB区として発掘調査を実施した。

A区は重機で表土である水田耕作土を除去し、16世紀代に形成された整地土層を露出させた。この段階では、遺構は明確でなく、全面を20～30cm掘り下げた。その結果、14世紀から16世紀までの遺構がほぼ全面に分布することが判った。そこで、順次遺構の掘り下げをし、出土遺物の状況で時期の決定を行った。

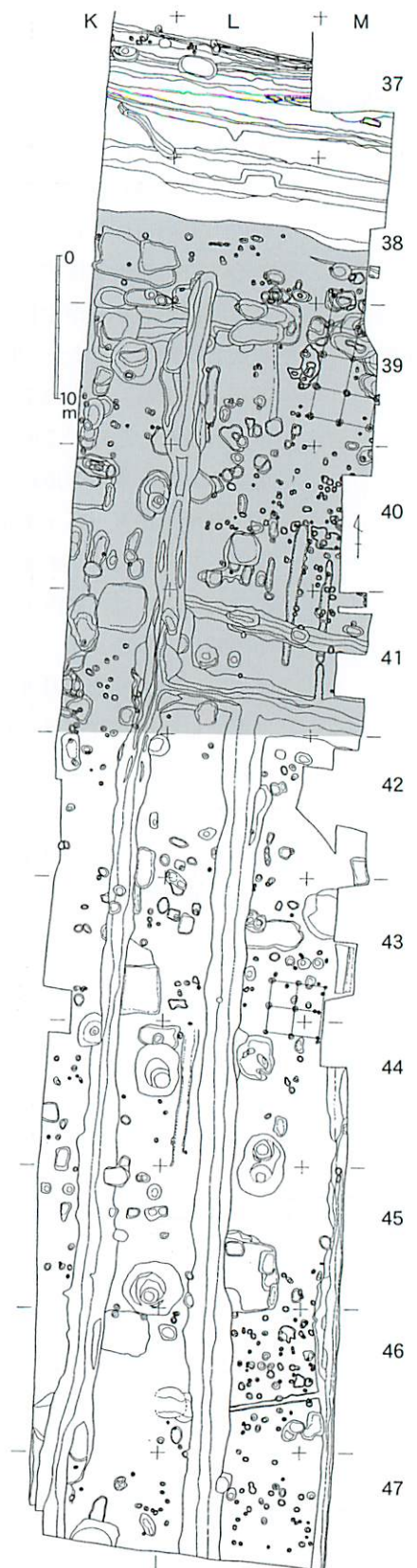
#### 2. 遺構の概要

中世大友府内町跡第20次調査A区で検出された遺構の種類は、溝とその関連遺構、さまざまな形状・規模の多数の土坑、井戸1基、底に扁平な石を配した柱穴による礎盤建物が1棟、配置は不明であるが不規則に掘り込まれた多数の柱穴状遺構などがある。

溝は、8条を検出したが、南側のB区から延びるものは規模も大きく、万寿寺の区画や「府内」の町割りに係わる可能性が高い。時期も14～15世紀と16世紀が認められ、前者は万寿寺の創建時から最盛期にかけての遺構の可能性が高い。府内町跡第20次調査B区から北に延びてきたものが、東方向に直角に屈曲する。

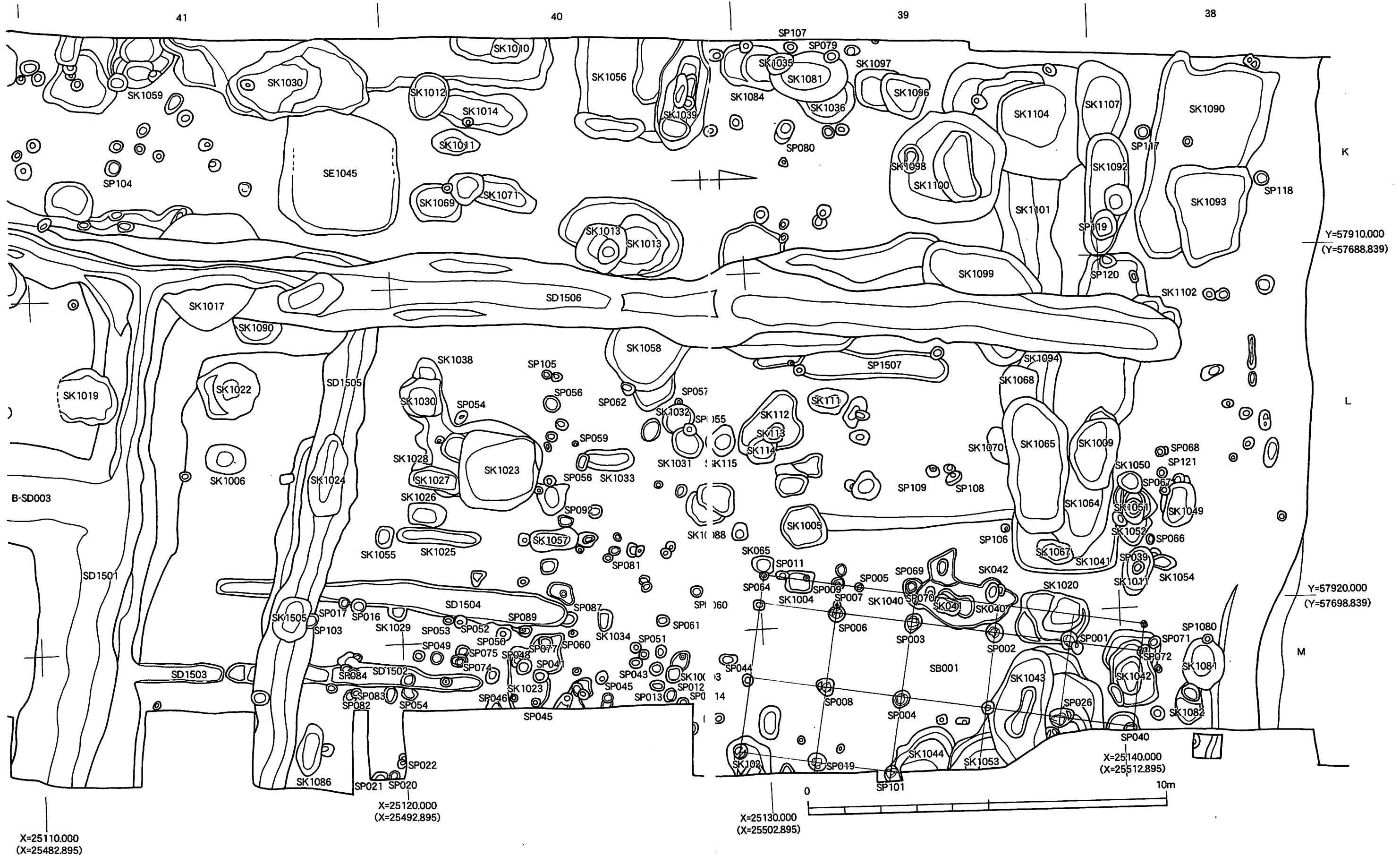
土坑は16世紀代のもは規模が大きい傾向にある。万寿寺北側境の堀の近くで検出された礎盤建物の時期は、14世紀末から15世紀である。A地区で検出された井戸は16世紀後半の1基のみである。また多数検出された柱穴と土坑の区別は規模と形状で行ったが、本来は機能差であるが、それは区分できなかった。

礎盤建物



第2-1図 府内町跡20次調査A区位置図





第2-2図 府内町跡20次調査A1 区遺構配置図 ( )内は世界測地系

第2-1表 中世大友府内町跡第20次調査A区遺構一覧表(1)

本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
A-SB01		礎盤建物	M-39	14世紀中葉～後葉	庇付き5間×2間以上の規模	41
	S-001	ビット	M-39			
	S-002	ビット	M-39			
	S-003	ビット	M-39			
A-SP004	S-004	ビット	M-39	14世紀中葉～後葉	SB01礎盤	42
A-SP005	S-005	ビット	M-39	14世紀中葉～後葉	SB01礎盤	42
A-SP006	S-006	ビット	L-39	14世紀中葉～後葉		
	S-007	ビット	L-39			
	S-008	ビット	L-39		SB01礎盤	
	S-009	ビット	L-39			
	S-010	ビット	L-39			
	S-011	ビット	L-39	14世紀代		
	S-012	ビット	M-40			
A-SP013	S-013	ビット	M-40	14世紀代		92
	S-014	ビット	M-40			
	S-016	ビット	L-41			
	S-017	ビット	L-41		古代	
	S-018			14世紀代		
A-SP019	S-019	ビット	M-39	14世紀中葉～後葉	SB01礎盤	42
A-SP020	S-020	ビット	M-41	14世紀代		93
	S-021	ビット	M-41	14世紀代		
	S-022	ビット	M-41			
	S-023					
	S-024					
A-SP025	S-025	ビット	M-39	14世紀中葉～後葉	SB01礎盤	41
A-SP026	S-026	ビット	M-39	14世紀中葉～後葉	SB01礎盤	41
A-SP036	S-036			15世紀前葉		90
	S-039	ビット	L-38			
A-SK040	S-040	土坑	M-38	14世紀中葉～後葉	SB01礎盤	42
A-SK041	S-041	土坑	L-39			44
A-SP042	S-042	ビット	L-39	14世紀後半～15世紀前葉		45
A-SP043	S-043	ビット	M-40	14世紀代		90
A-SP044	S-044	ビット	M-40			44
A-SP045	S-045	ビット	M-40	14世紀代		90
	S-046	ビット	M-40			
	S-047	ビット	M-40	14世紀代		
A-SP048	S-048	ビット	M-40	14世紀代		93
	S-049	ビット	M-40			
	S-050	ビット	M・L-40			
	S-051	ビット	M-40			
A-SP052	S-052	ビット	L-40	15世紀後半～16世紀	銅銭	45
	S-053	ビット	L-40			
	S-054	ビット	M-41			
	S-055	ビット	L-40			
A-SP056	S-056	ビット	L-40	14世紀代		93
	S-057	ビット	L-40			
	S-058	ビット	L-40			
	S-059	ビット	L-40			
A-SP060	S-060	ビット	L-40	14世紀代		93
	S-061	ビット	L-40	14世紀代		
	S-062	ビット	L-40			
	S-063	ビット	L-39			
A-SP064	S-064	ビット	L-39	14世紀代		93
A-SP065	S-065	ビット	L-39	14世紀代		93
	S-066	ビット	L-38			
	S-067	ビット	L-38			
	S-068	ビット	L-38			
A-SP069	S-069	ビット	L-39	14世紀～15世紀前半		45
A-SP070	S-070	ビット	L-39	14世紀～15世紀前半		45
	S-071	ビット	M-38			
	S-072	ビット	M-38		SB01礎石	
	S-073			14世紀代		
	S-074	ビット	M-40			
A-SP075	S-075	ビット	M-40	14世紀代		93
	S-076	ビット	M-40			
A-SP077	S-077	ビット	M-40			90
A-SP078	S-078			14世紀代		93
A-SP079	S-079	ビット	K-39	14世紀代		93
	S-080	ビット	K-39	16世紀代		
A-SP081	S-081	ビット	L-40		弥生	90
A-SP082	S-082	ビット	M-41			90
A-SP083	S-083	ビット	M-41	14世紀代		90
	S-084	ビット	M-41	14世紀代		



第1節 調査の経過と概要

表2-2 中世大友府内町跡第20次調査A区遺構一覧表(2)

本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
A-SP085	S-085	ピット	M-40	14世紀代		90
A-SP086	S-086			14世紀代		93
	S-087	ピット	L-40	14世紀代		
	S-088	ピット	L-40		古代	
	S-089	ピット	L-40			
A-SP090	S-090			14世紀代		93
A-SP091	S-091			14世紀代		93
	S-092	ピット	L-40			
A-SP101	S-101	ピット	M-39	14世紀代	SB01礎盤	43
A-SK102	S-102	土坑	M-40	14世紀後半?		47
A-SP103	S-103	ピット	L-41	14世紀代		90
A-SP104	S-104	ピット	K-41			92
	S-105	ピット	L-40	14世紀代		
A-SP106	S-106	ピット	L-39	14世紀代		92
A-SP107	S-107	ピット	K-39	14世紀代		93
A-SP108	S-108	ピット	L-39			93
	S-109	ピット	L-39			
	S-110	ピット	L-39	14世紀代		
	S-111	ピット	L-39	14世紀代		
A-SK112	S-112	土坑	L-39	14世紀後半		47
A-SP113	S-113	ピット	L-39	14世紀末~15世紀前葉		47
A-SP114	S-114	ピット	L-39	16世紀後葉~末葉		47
	S-115	ピット	L-40	14世紀代		
	S-116	ピット	L-38	14世紀代		
A-SP117	S-117	ピット	K-38	16世紀後葉~末葉		92
A-SP118	S-118	ピット	K-38	14世紀代		93
A-SP119	S-119	ピット	K-38	16世紀後葉~末葉	水屋甕	93
A-SP120	S-120	ピット	L-38	14世紀代		
A-SP121	S-121	ピット	L-38	14世紀代		93
A-SP122	S-122	ピット	K-38			
A-SP123	S-123	ピット	K-41	14世紀代		93
	S-124	ピット	K-41			
A-SP125	S-125	ピット	K-41	16世紀後葉~末葉		93
A-SP126	S-126	ピット	L-38	14世紀代		93
A-SP131	S-131			14世紀代		93
A-SP132	S-132			14世紀代		
A-SP163	S-163			14世紀代		93
A-SK1001	S-1001	土坑	L-38	14世紀代		84
	S-1002	土坑	L-38			
	S-1003	土坑	M-40			
	S-1004	土坑	L-39	14世紀代		
A-SK1005	S-1005	土坑	L-39	16世紀後葉~末葉		84
A-SK1006	S-1006	土坑	L-41		備前	
A-SK1009	S-1009	土坑	L-38・39		砥石	84
A-SK1010	S-1010	土坑	K-40	16世紀後葉~末葉		48
	S-1011	土坑	K-40	16世紀代?		
A-SK1012	S-1012	土坑	K-40			49
A-SK1013	S-1013	土坑	K-40	16世紀後葉~末葉	銅銭	49
A-SK1014	S-1014	土坑	K-40	16世紀後葉~末葉	ヒスイ玉	52
A-SK1017	S-1017	土坑	K・L-41	16世紀後葉~末葉	石列	52
A-SK1018	S-1018	土坑	K-39	16世紀後葉~末葉	埴塙・土玉	54
A-SK1019	S-1019	土坑	L-41	16世紀後葉~末葉	銅銭	55
A-SK1020	S-1020	土坑	L・M-39	14世紀?		84
	S-1021			14世紀代		
A-SK1022	S-1022	土坑	L-41			84
A-SK1023	S-1023	土坑	L-40	14世紀代	「ひねり土」銘の備前系大甕	56
A-SK1024	S-1024	土坑	L-41	14世紀後半	SD1505に切られる	27
A-SK1025	S-1025	土坑	L-40	14世紀		84
A-SK1026	S-1026	土坑	L-40			57
	S-1027	土坑	L-40	14世紀代	炭が塊で残存	
	S-1028	土坑	L-40	14世紀代		
A-SP1029	S-1029	ピット	L-40・41	14世紀代		94
A-SK1030	S-1030	土坑	L-40	16世紀後葉~末葉		58
A-SP1031	S-1031	ピット	L-40	14世紀代		94
	S-1032	土坑	L-40			
	S-1033	土坑	L-40			
	S-1034	土坑	L-40	14世紀代		
A-SK1035	S-1035	土坑	K-39		銅銭2点	59
A-SK1036	S-1036	土坑	K-39	16世紀後半?		59
A-SK1037	S-1037	土坑	L-40		円形土器片加工品	84

表2-3 中世大友府内町跡第20次調査A区遺構一覧表(3)

本報告での 遺構番号	調査時の 遺構番号	遺構の 性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載 頁
	S-1038	土坑	L-40			
A-SK1039	S-1039	土坑	K-40	16世紀後葉	集石・タイ産四耳壺	59
A-SK1040	S-1040	土坑	L・M-39	14世紀後半～15世紀前葉		44
A-SK1041	S-1041	土坑	L-38・39	16世紀後葉～末葉		84
A-SK1042	S-1042	土坑	M-38	14世紀前葉～中葉		60
A-SK1043	S-1043	土坑	M-39	14世紀中葉～後葉		62
A-SK1044	S-1044	土坑	M-39	14世紀代	S-101を切る	84
A-SE1045	S-1045	井戸	K-40・41	16世紀後葉～末葉		86
A-SK1047	S-1047			16世紀後葉～末葉		84
A-SK1049	S-1049	土坑	L-38	14世紀後半～15世紀前葉		84
A-SP1050	S-1050	ピット	L-38			63
A-SK1051	S-1051	土坑	L-38	14世紀後半		63
A-SK1052	S-1052	土坑	L-38			63
A-SK1053	S-1053	土坑	M-39	14世紀代		84
A-SP1054	S-1054	ピット	L-38	14世紀代		94
A-SK1055	S-1055	ピット	L-41	14世紀代		95
A-SK1056	S-1056	土坑	K-40	16世紀後葉～末葉	集石	64
	S-1057	土坑	L-40			
A-SK1058	S-1058	土坑	L-40	14世紀後半	燭台	65
A-SK1059	S-1059	土坑	K-41	14世紀中葉～後葉		66
A-SK1060	S-1060	土坑				84
A-SK1061	S-1061	土坑		16世紀後葉～末葉		84
A-SK1062	S-1062			14世紀代		84
A-SK1063	S-1063			14世紀中葉～後葉		84
A-SK1064	S-1064	土坑	L-38・39	14世紀後半～15世紀前葉		84
A-SK1065	S-1065	土坑	L-39		火鉢	66
A-SK1066	S-1066				古代の土器	84
	S-1067	ピット	L-39			
A-SK1068	S-1068	土坑	L-39	16世紀後葉～末葉	天目茶碗・石臼	67
A-SK1069	S-1069	土坑	K-40	14世紀末～15世紀前葉		67
A-SK1070	S-1070	土坑	L-39		集石	68
A-SK1071	S-1071	土坑	K-40	14世紀代		84
	S-1072					
A-SK1073	S-1073			14世紀代		94
	S-1079					
A-SE1080	S-1080	ピット	M-38	14世紀末～15世紀前葉		95
A-SK1081	S-1081	土坑	M-38	14世紀代	常滑系甕	68
A-SK1082	S-1082	土坑	M-38	14後半		68
A-SK1083	S-1083	土坑	L-41	14世紀中葉～後葉		69
A-SK1084	S-1084	土坑	K-39	16世紀後葉～末葉	漳州系青花2点・褐釉陶器の壺	69
	S-1085			16世紀代		
A-SK1086	S-1086	土坑	M-41	14世紀末～15世紀前葉		94
	S-1087	土坑	L-39	14世紀代		
	S-1088	土坑	L-40	14世紀代		
A-SK1089	S-1089	土坑	M-41	14世紀中葉～後葉		71
	S-1090	土坑	L-41	16世紀末葉	S-1017・1506に切られる	
A-SK1091	S-1091	土坑	K・L-38	16世紀後葉～末葉	青銅製品・焼土	71
A-SK1092	S-1092	土坑	K-38・39	16世紀後葉～末葉	焼土	73
A-SK1093	S-1093	土坑	K・L-38	16世紀後葉～末葉	焼土・六角青花盃	74
A-SK1094	S-1094	土坑	L-39	16世紀後葉～末葉		74
A-SK1095	S-1095			16世紀代		94
A-SK1096	S-1096	土坑	K-39			75
A-SK1097	S-1097	土坑	K-39	14世紀後半～15世紀前葉		75
A-SK1098	S-1098	土坑	K-39	16世紀代		94
A-SK1099	S-1099	土坑	K・L-39	16世紀後葉～末葉	S-1506を切る	75
A-SK1100	S-1100	土坑	K-39	16世紀後葉～末葉		78
A-SK1101	S-1101	土坑	K・L-39	15世紀後葉以前	備前・銅銭	79
A-SK1102	S-1102	土坑	L-38	16世紀末葉	S-1506に切られる	94
A-SK1103	S-1103			16世紀代		94
A-SK1104	S-1104	土坑	K-39	15世紀末葉～16世紀前葉	永楽銭	81
A-SK1105	S-1105	土坑	K-39	16世紀後葉～末葉	焼土	83
A-SK1106	S-1106	土坑	K-39	16世紀後葉～末葉	銅銭	83
A-SK1107	S-1107	土坑	K-38・39	16世紀末葉		83
	S-1108	土坑	L-38	14世紀代		
A-SD1501	S-1501	溝	L・M-41	14世紀末葉～15世紀前葉 16世紀後葉～末葉	B区のB-003とつながる A-SD1506から東に分岐	16
A-SD1502	S-1502	溝	M-40・41	16世紀後半		23
A-SD1503	S-1503	溝	M-41	16世紀後半		23
A-SD1504	S-1504	溝	L-40・41	16世紀後半		25
A-SD1505	S-1505	溝	L・M-41	14世紀中葉～後葉		25
A-SK1505	S-1505	土坑	L-41	14世紀末葉～15世紀前葉	捏鉢内から銅銭3枚	25
A-SD1506	S-1506	溝	K-39～41・L-38～41	16世紀後葉～末葉	B区のB-064と同じ	33
	S-1507	土坑	L-39			
	S-1512			14世紀代		
A-SP1606	S-1606			16世紀後葉～末葉		94

第2節 遺構と遺物

1. 溝及び関連遺構

府内町跡20次調査A区では、規模や形状に差はあるが、6条を溝として考えた。これらの溝は、基本的には南北方向に構築され、一部はほぼ直角に東方向に屈曲する。このうち、A-SD1501・A-SD1505・A-SD1506は、規模も大きく、検出された位置が、万寿寺跡の西北隅の寺域内であることから、その構造にかかわるものと推測する。これ以外は、細く、浅い溝であり、中には10mに満たないものもある。時期は、14世紀前半から16世紀後半である。

A-SD1501 (第2-3図)

A-SD1501は、A区の南端で東西方向に約14mを検出した。方向はW-9°-Nである。この溝の規模と形態は、上面の幅が約3m、底面の幅は約0.7m、深さ約1.2mで、断面が逆台形をしている。底部は、西から東に緩やかに傾斜し、その高低差は約20cmである。また、この遺構は、南側のB区のB-SD003やB-SD064(A-SD1506)の時期の異なるふたつの溝と交わり、複雑な状況を見せる。土層断面ではこのことを反映し、掘り直しの跡が観察できた。第2-3図によると、規模と形状は、上面の幅が約1.8m、底面の幅約1m、深さ約60cmで、断面の形状はU字状を呈し、最初に掘られた溝よりも約60cm浅い。底面の傾斜は出土遺物の時期から想定すると、西に傾斜し、A-SD1506と合流する。

この遺構から出土する遺物は上層と下層で様相を異にする。代表的な遺物は、第2-4~2-10図に99点を図示した。第2-4図1~12と第2-6図44・48、第2-7図67・68・70・73は上層出土の遺物である。第2-6図44は暗緑色の釉の上に刷毛で白色釉を塗った、朝鮮王朝系粉青沙器の可能性が強い。第2-4図1と第2-6図48は備前系陶器であるが、1は徳利の底部で、48は小型の鉢である。2・3は底部に糸切り痕のあるロクロ成形の在り系土師質土器の坏である。4~6・66・67・69・72は京都系土師器で、7は内面に刷毛目調整のある瓦質の鉢である。8は口縁部の周辺に突帯を巡らす鍔付の土鍋である。9は口縁部の形態や硬く焼成されていることから東播系須恵質土器の鉢と考えられる。10は口径約33cmの土師質土器の大型の鉢である。11は大型の瓦質土器の底部で、火鉢であろうか。12は、弥生土器の甕形土器の底部で、混入品である。12・13は、紡錘形の土錘である。

一方、下層出土の遺物は、第2-5図に図示したものが主要なものである。15~27は底部に糸切り痕のあるロクロ成形の在り系土師質土器である。これらの中には、15~17の皿とそれ以外の坏が認められる。さらに、25は底部がやや小さく口縁部が内湾する、塊状の形態を呈する。28は口縁部に自然釉が付いた東播系須恵質土器の鉢であり、30も須恵質土器でその底部の可能性が強い。29は内面に刷毛目、外面は指圧痕のある土鍋である。31も須恵質土器の底部であるが、器壁は厚く備前系陶器の擂鉢の可能性が考えられる。32~34は同じ器種の資料である。ロクロ成形の在り系土師質土器の皿に脚を付けたもので、燭台と考えられる。35はフィゴの羽口の資料で、空気孔の径は2.5cmである。36は扁平な土製品で、37は紡錘形の土錘の完形品で、7.2gである。38は小型の砥石である。

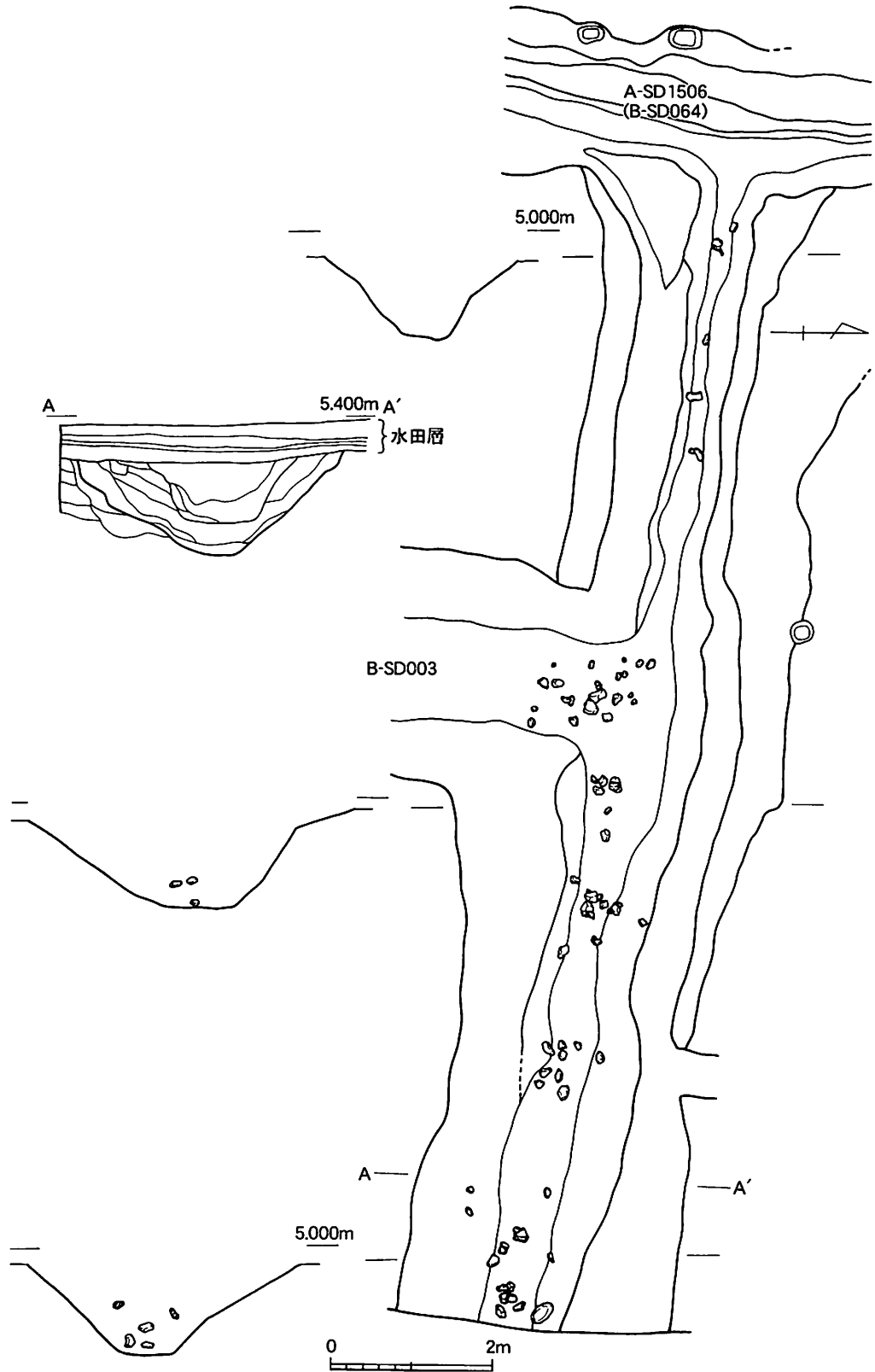
このように、発掘調査の途中で上層と下層で遺物の様相が異なることに気づき、分層して遺物を取り上げたが、それ以前の多くの遺物は一括した。その遺物は第2-6~2-10図に図示した。第2-6図39~41・43・45~47は貿易陶磁器である。39は龍泉窯系青磁碗である。40は青白磁で合子の蓋である。41も青白磁の小型の壺である。43は景德鎮窯系青花碗で、45は中国産の褐釉陶器の底部である。46は磁窰窯系の大鉢の口縁部の破片で、47は華南三彩の魚形水滴の小破片である。

42は国産陶器で、瀬戸美濃産の天目碗である。49~51と第2-8図86は備前系陶器で、49は小型、52は大型の徳利形で、52の底部には×印の記号が描かれている。また、50・51は擂鉢であるが、

粉青沙器  
備前系  
  
土鍋  
東播系  
土錘  
  
燭台・フィゴ  
土錘  
  
龍泉窯系  
景德鎮窯系  
華南三彩  
瀬戸美濃系  
備前系

50は7本の櫛歯で、口縁部に直角に挿り目を入れた14世紀末、51は10本の挿り目を口縁部に対し斜めに挿り目を入れた、16世紀後葉と考える。86は底部径17.2cmの大甕の底部である。

53・55は内面に刷毛目があり、外面は指圧痕のある瓦質の鉢である。55は口縁部周辺が幅広く肥厚する。54は口縁部が屈曲する土鍋の資料である。



第2-3図 A-SD1501実測図 (1/80)



第2節 遺構と遺物

第2-7図56~66はロクロ成形による在地系土師質土器である。器種は56の皿とそれ以外の坏で構成されるが、坏には61・63のように、他に比べると底部の直径が、口縁部径に対し小さく、口縁部が内湾気味に立ち上がる塊状のものも存在する。また、口縁部断面の形態は、58は底部近くが厚く、口縁端部が尖るように成形しているのに対し、59・62・65は底部近くの器壁は薄く、中位で厚くなる成形をしている。また、62・65の底部には板目圧痕が残る。

67~79は非ロクロ成形による京都系土師器である。計測できる法量は69が8.4cm、70・71が約10cmで、72・74・76・79は12cm強、73・75・77は14cm前後である。なお、78は他の京都系土師器に比べると、器高が高く、約3cmで、坏形をしている。

80は口縁部が外反する甕で、胴部は内外面とも刷毛目で器面調整している。胎土は硬緻で、焼成は瓦質である。

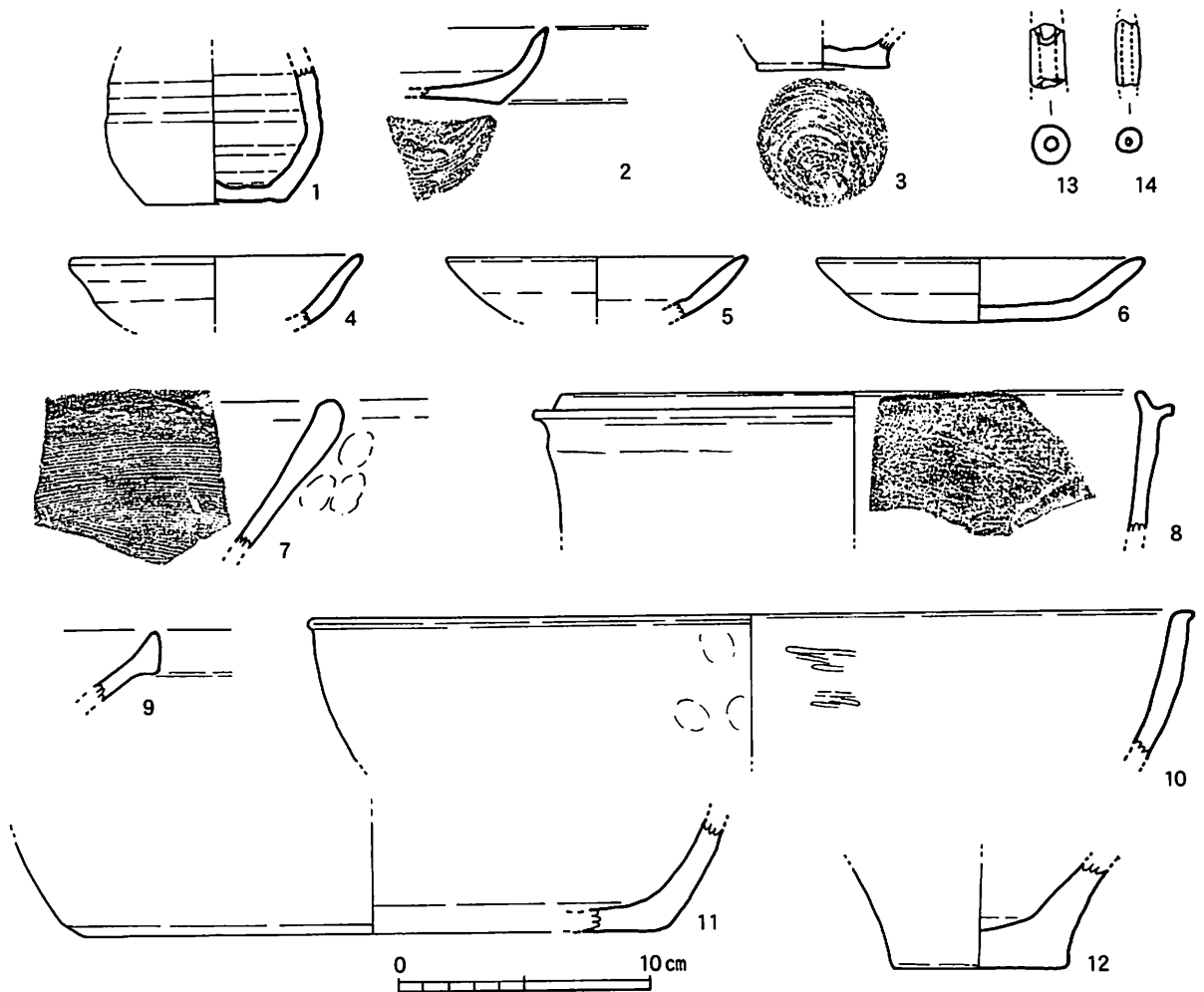
東播系

81・83・85は東播系須恵質土器の鉢である。81・83は口縁部の資料で、81には注口部が認められ、自然釉が付着している。83は口径27.5cmで底部近くまで残る。85はその底部であり、これらの器面は撫でで仕上げられている。

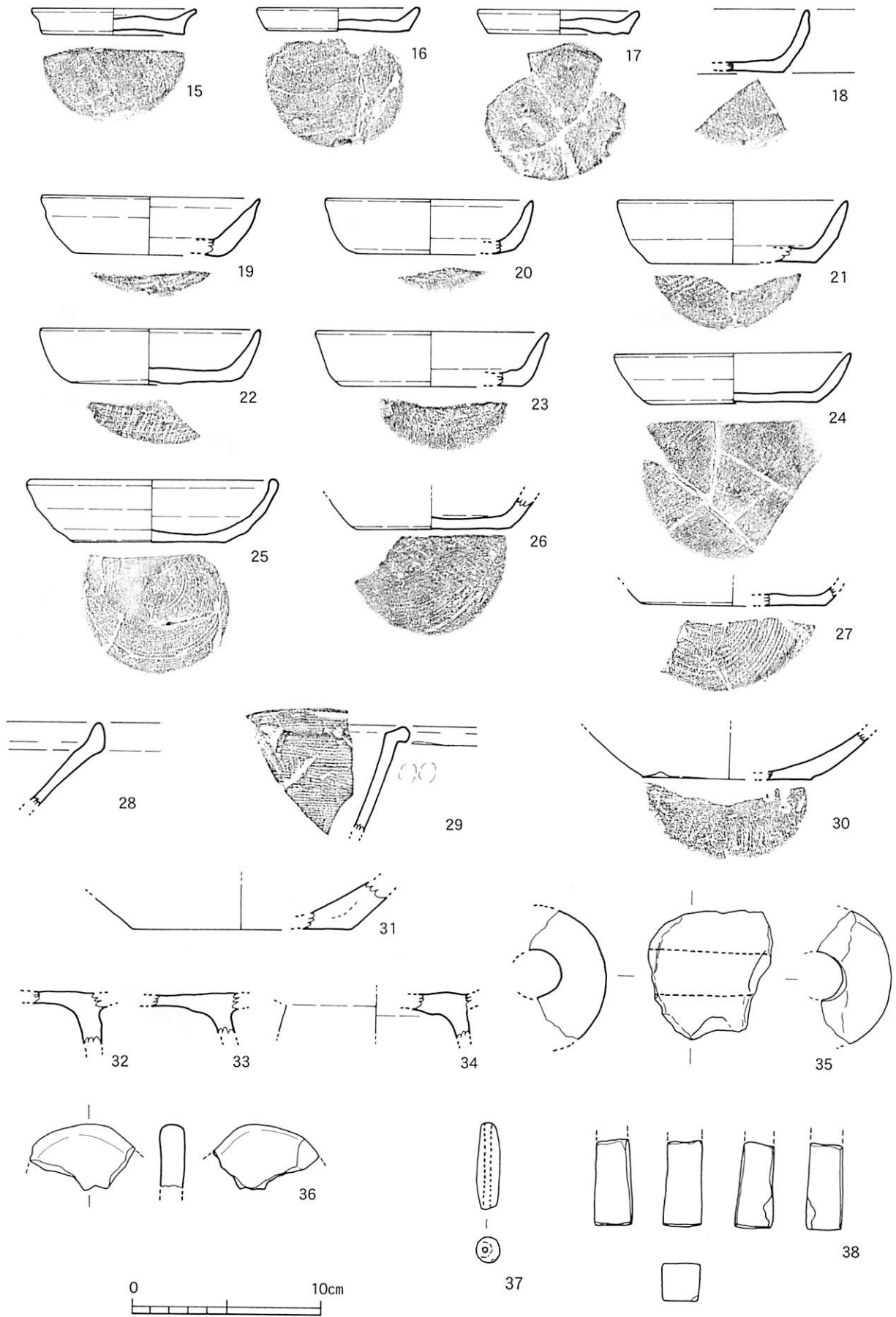
防長系挿鉢

82は、口縁部内面がカマボコ状に肥厚した瓦質の挿鉢である。挿鉢目は8条の櫛歯状工具で、口縁部に直角に施文されている。いわゆる防長系挿鉢である。

87は胴部のふくらみがなく、口縁部が外反する甕形土器である。口縁部周辺は横撫でで、胴部外面は縦方向の刷毛目調整である。88は尖る端部を内側に巻いた約4cmの資料で、甕形土器の把手と考える。



第2-4図 A-SD1501上層出土遺物実測図



第2-5図 A-SD1501下層出土遺物実測図

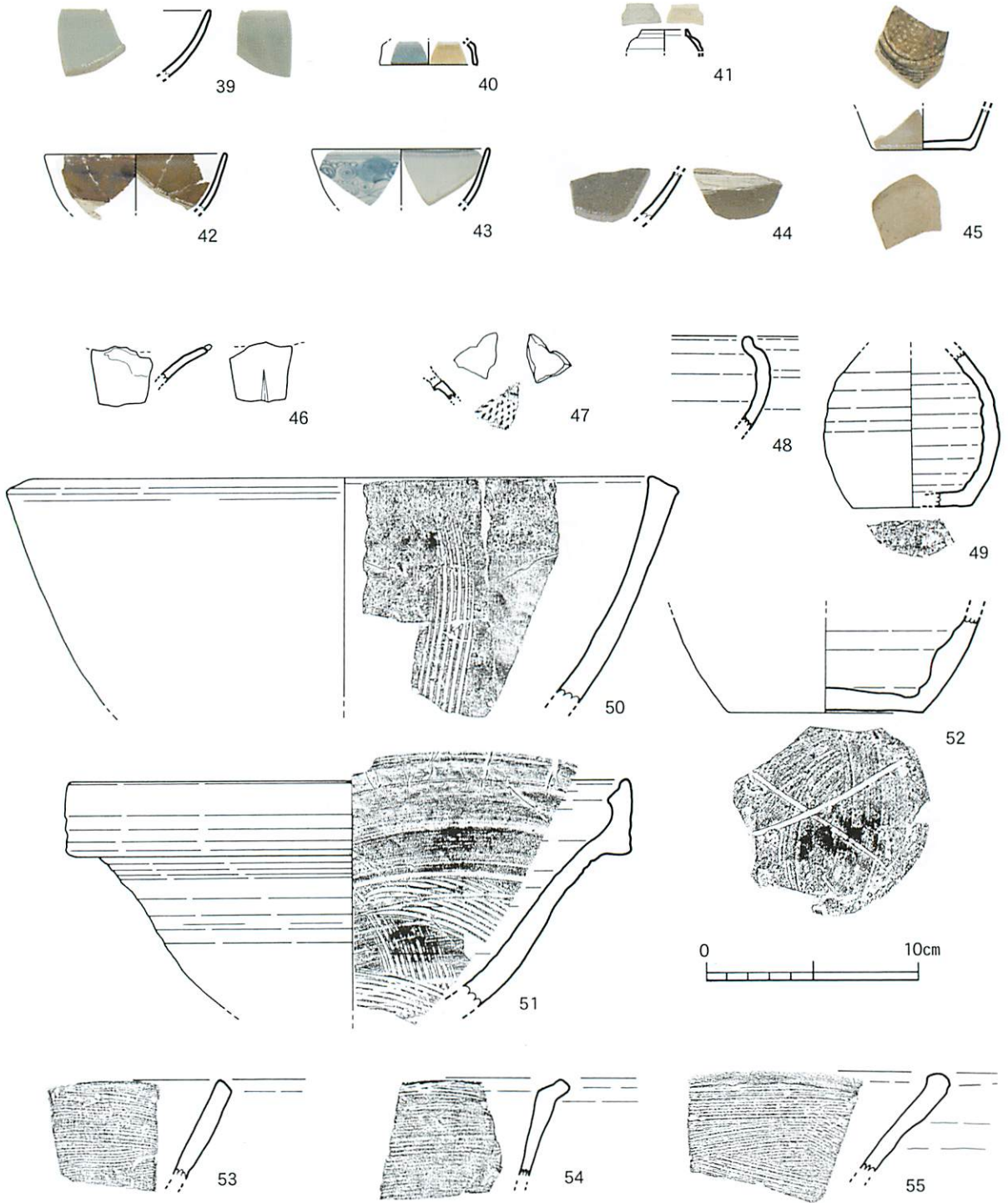
第2節 遺構と遺物

89は、ロクロ仕上げの高台付の壺形土器である。焼成は須恵質で、灰白色を呈しており、古い備前系陶器の可能性もあるが、区別は困難である。87~89は古代の遺物と考える。

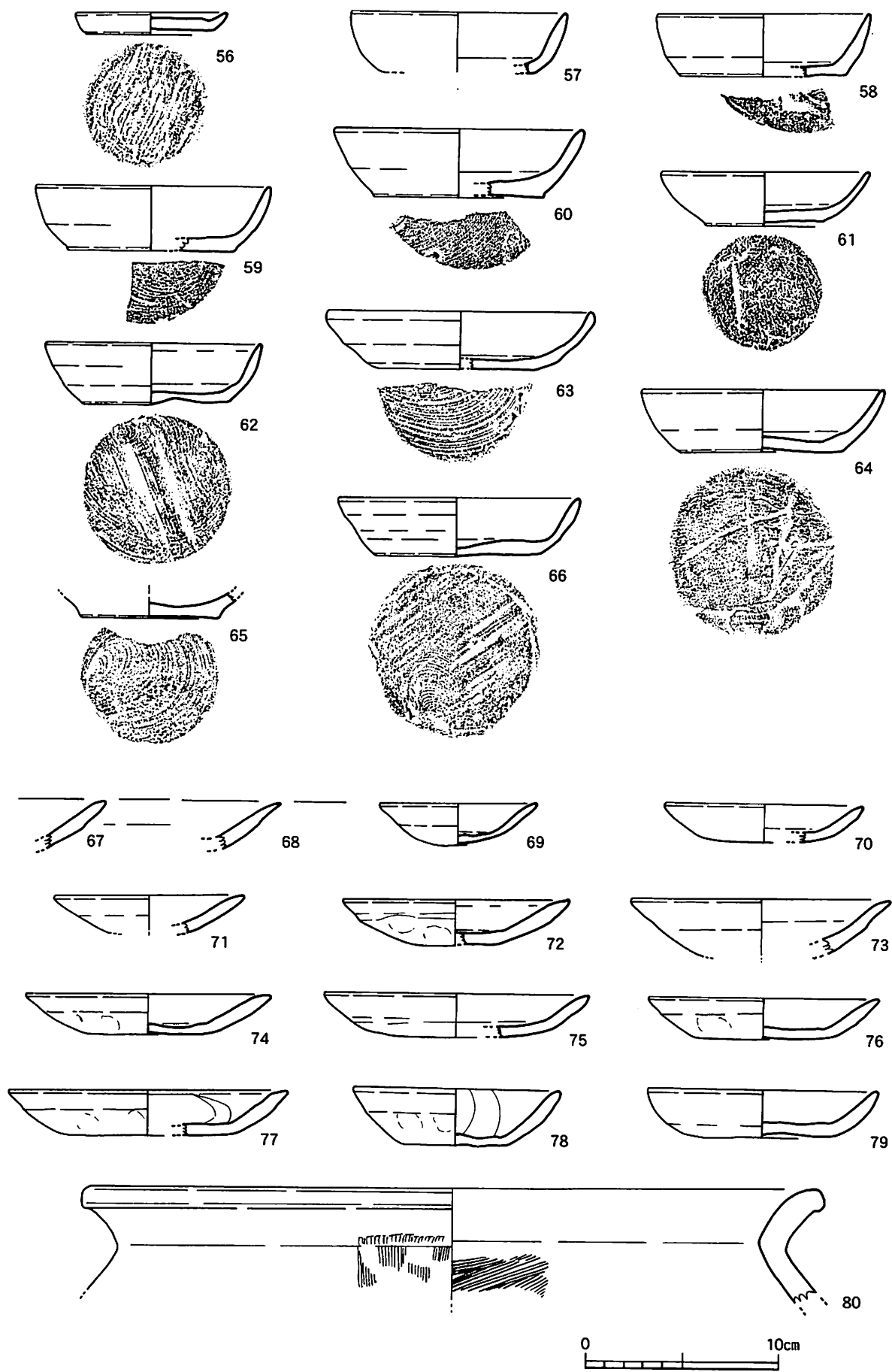
古墳時代  
弥生土器  
銅銭

90は高坏の脚部で、91は壺形土器、92は甕形土器の底部である。90は古墳時代前期、91は弥生時代後期、92は弥生時代中期のものとする。

第2-9図は出土した銅銭である。93・96は篆書体で書かれた「元祐通寶」で、初鑄は1086年(北宋)である。96は一部を破損している。94は真書体の「天聖元寶」で初鑄は1023年(北宋)である。95は篆書体の「紹聖元寶」で初鑄は1094年(北宋)である。95・96は上層からの出土である。



第2-6図 A-SD1501出土遺物実測図(1)



第2-7图 A-SD1501出土遺物実測図(2)



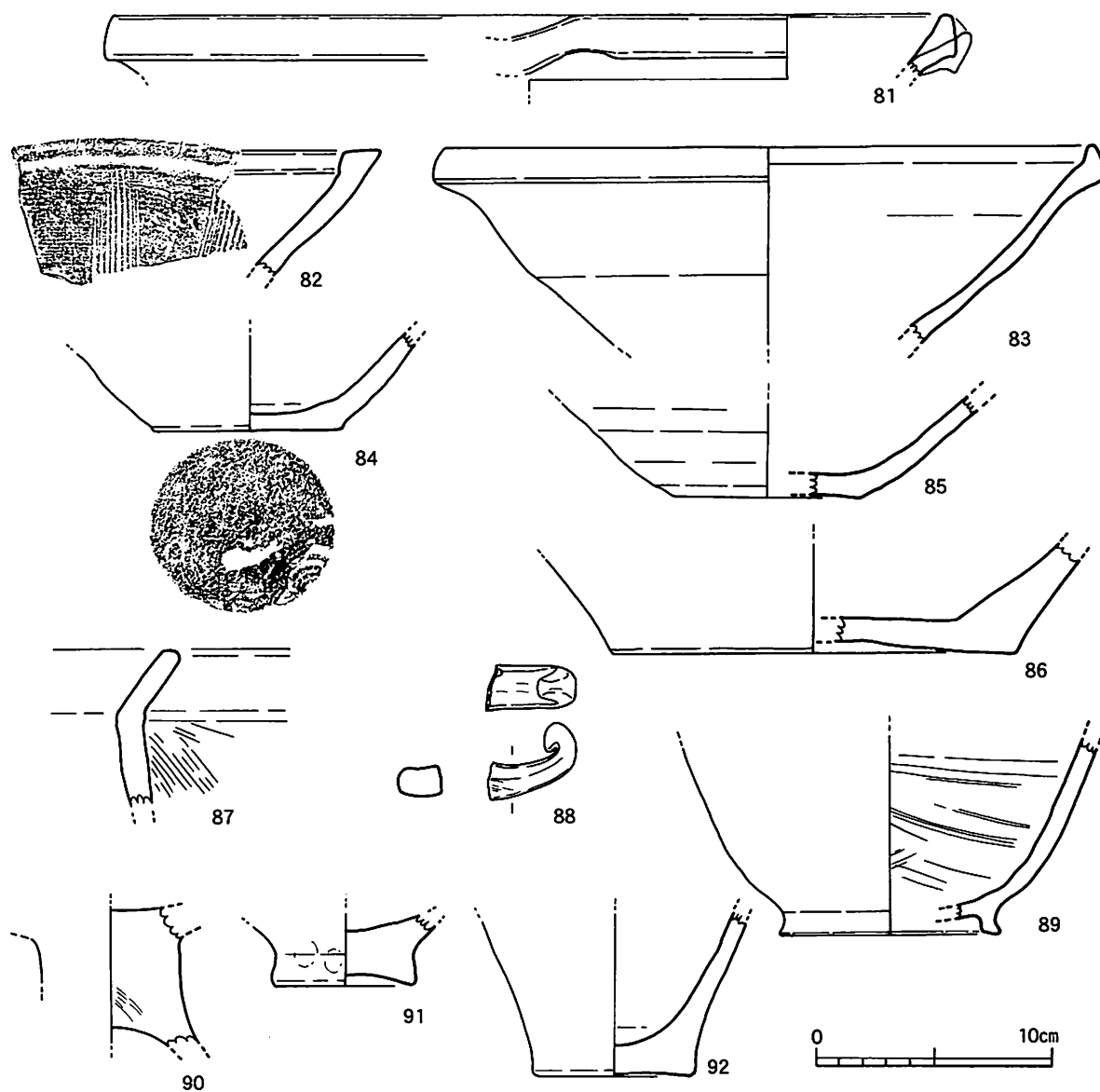
## 第2節 遺構と遺物

軒平瓦

97～99は平瓦である。97は軒平瓦で、文様の中心飾りが残されており、左右に唐草文が展開していることが判る。98・99は平瓦の幅が判る資料である。98の幅は28.5cm、99はやや狭く21.3cmである。また、瓦の反りも98に比較すると99は平坦である。

以上がこの溝から出土した遺物であるが、土器の様相と土層断面の観察から、2時期が存在すると思われる。ひとつは上層出土土器に見られるように16世紀後葉から末葉の京都系土師器を含む時期である。一括して遺物を取り上げた中にも、67～79に見られるように京都系土師器が一定量存在する。また、備前系陶器の播鉢である51も16世紀後葉から末葉と編年されている。

もうひとつの時期は、下層出土土器に代表されるように、ロクロ成形による在来系土師質土器である。この土器も一括して遺物を取り上げた中に56～66に図示したように、多く出土しており、備前系陶器の播鉢である50や東播系須恵質土器の鉢なども同時期と想定される。これらの遺物からこの時期は、14世紀末から15世紀前葉と考えられる。そこで、このA-SD1501との掘削時期とA-SD1506・B-SD003の関係を推測すると、14世紀末から15世紀前葉にB-SD003が南北方向に存在し、L-41区で東に直角に屈曲する。その後、この溝は埋め立てられ、16世紀後葉から末葉にA-



第2-8図 A-SD1501出土遺物実測図(3)

SD1506が南北方向に掘削される。その際に、この溝は、深さも幅もほぼ半分のみ掘り返されたと推測できる。

A-SD1502 (第2-2図)

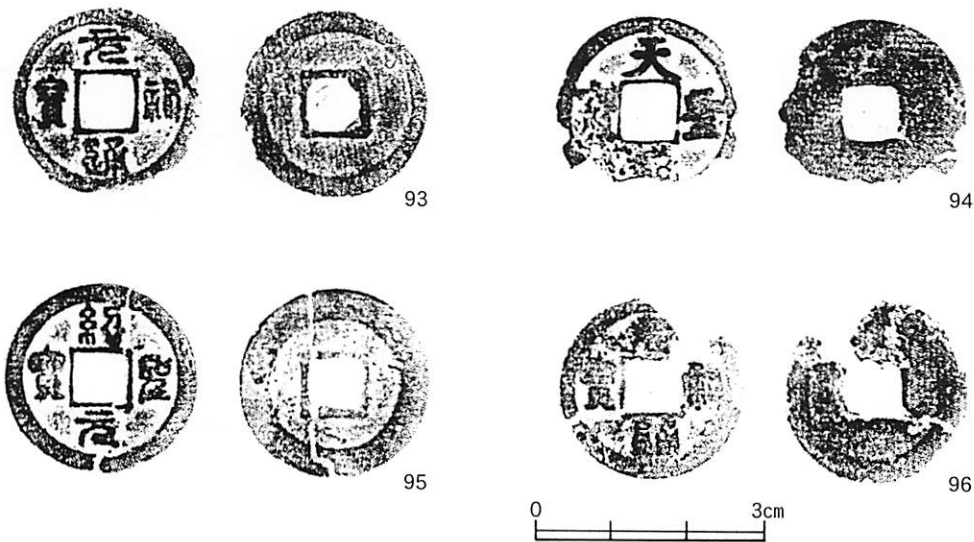
A-SD1502はほぼ南北方向に約7m検出された溝状遺構である。規模は、幅約50cmで、深さは約20cmである。床面はほぼ平坦であるが、半分より南側はさらに約10cm程度掘り下げられている。遺物は土器の小破片が出土したが、その一部を第2-122図12・13に図示した。12は京都系土師器の小皿で、口縁部内面にススが付着しており、灯明皿として使用している。また、13は紡錘形の土錘である。12の京都系土師器から、この遺構の時期は、16世紀後半と考えられる。このことは、遺構の南部分が、A-SD1505と切り合い、その前後関係は、このA-SD1502が新しいことと矛盾しない。さらに、溝の方位も、北から東に約4度振り、16世紀後半の街路を中心とした町割りの方位と同じであり、このことから、同時期の遺構の可能性が高い。

灯明皿  
土錘

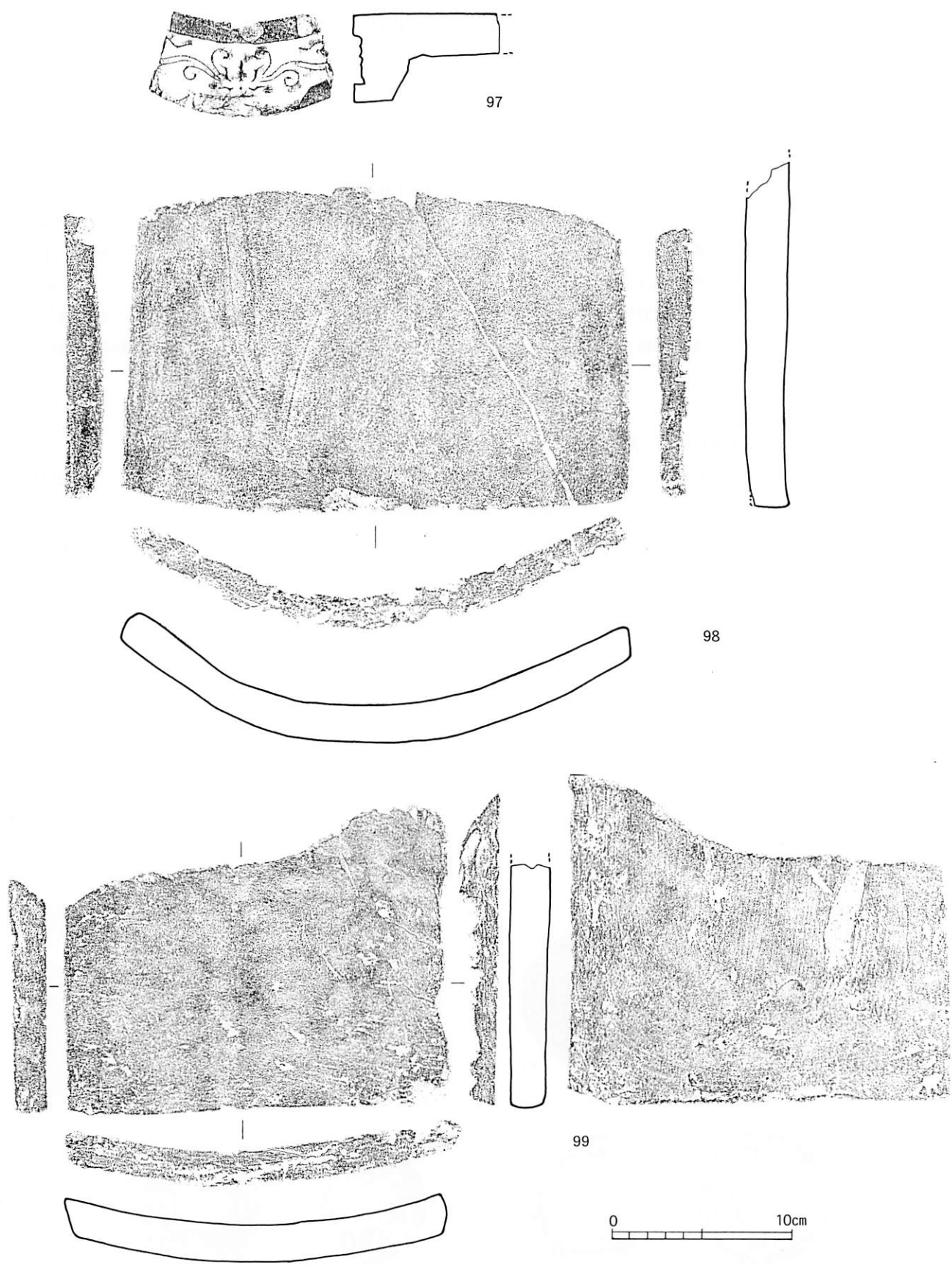
A-SD1503 (第2-2図)

A-SD1503はA-SD1502のすぐ南側に接続するよう同じ方向性をもって検出された。本来は同じ遺構の可能性が高い。幅も約50cmで、深さも約20cmを測り、床面は平坦である。

遺物は小破片が少数出土したが、時期を明確に判断できない。しかし、A-SD1503と関連性の強い遺構であるならば、16世紀後半の可能性が高い。



第2-9図 A-SD1501出土銭実測図



第2-10図 A-SD1501出土遺物実測図

A-SD1504 (第2-11図)

A-SD1504は、主軸をほぼ南北方向に取る長さ9.7mで、幅は北がやや広く80cm、南が40cmである。深さは約20cmで、床面は平坦である。

遺物はロクロ成形による在地系土師質土器が7点と備前系陶器3点の小破片が出土したが第2-122 図14に1点のみ図示した。この土器は、14・15世紀の、底部に糸切り痕のあるロクロ成形の在地系の土師質土器の坏である。しかし、A-SD1505との切り合い関係は、このA-SD1504が新しく、遺構の方向性は、東側に約2m離れた位置で検出されたA-SD1502・A-SD1503と平行しており、両者との関連が強い可能性がある。そうすると、この遺構も、16世紀後半の可能性が強いと考える。

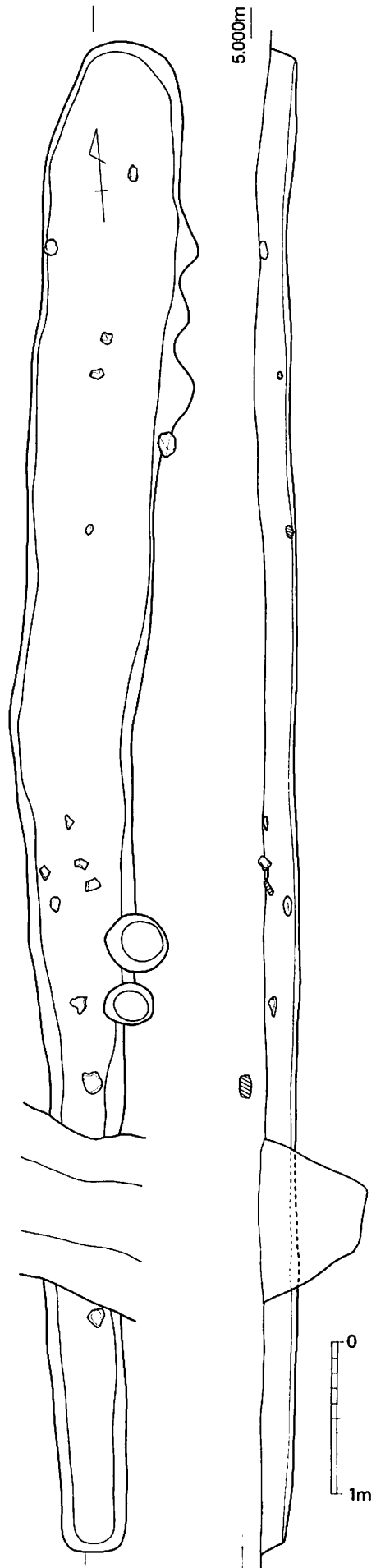
A-SD1505 (第2-12図)

A-SD1505は、A区の南で東西方向に約12mを検出した。方向はW-10°-Nである。この溝の規模と形態は、上面の幅が約1.5m、底面の幅は約0.5m、深さ約0.5mで、断面が逆台形をしている。底部は、西から東に緩やかに傾斜し、その高低差は約20cmである。この溝には2ヶ所に土坑が掘り込まれているが、調査の最終段階にその存在が判明したため、遺構名を西側の細長い土坑をA-SK1024とし、東側の隅丸方形を溝と同じA-SK1505とした。こうした遺構は、溝との関連が深いと考え、報告はこの項で行う。

A-SK1505 (第2-13図)

確認されたA-SK1505の規模は、短軸約0.9m、長軸約1.3mで、平坦な床面は、短軸約0.4m、長軸約0.7mの緩い隅丸の長方形を呈する。床面は溝であるA-SD1505の床面より約15cm深い。その前後関係は、遺物の出土状況から見ると、土坑の方が新しい。

遺物の出土状況としては、溝全体から見ても、この土坑周辺からロクロ成形の在地系土師器の坏が集中して出土している。特に、鉢の内面底部に3枚の銅銭が置かれた状態で出土しているが、これらは全て土坑が埋まって行く段階に埋納、あるいは廃棄されたものと考えられる。

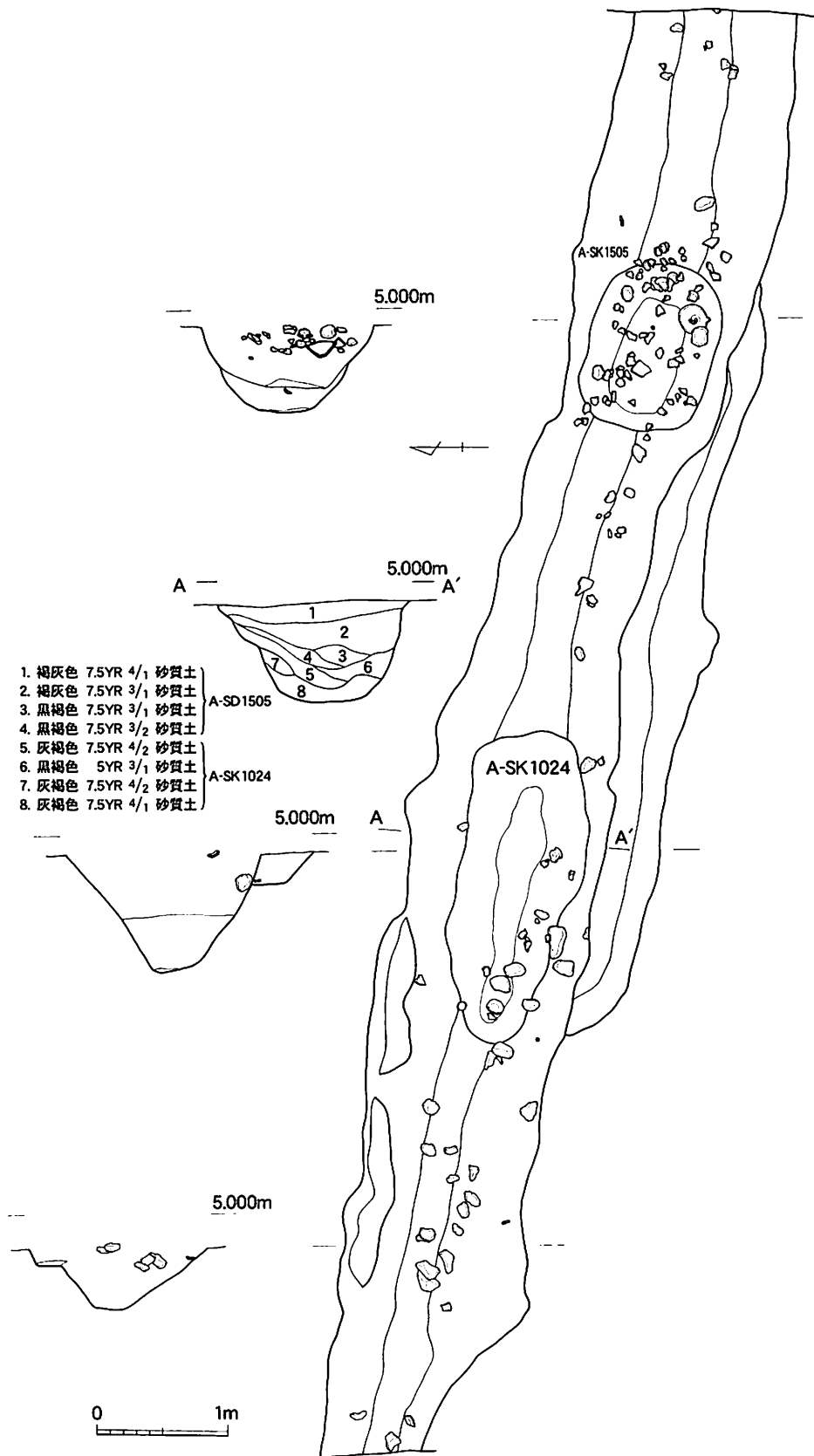


第2-11図 A-SD1504実測図



第2節 遺構と遺物

遺物はA-SD1505全体からの出土として第2-15~2-19図に73点を図示したが、A-SK1505とその周辺から出土したものは、2~5・8~10・12~15・17~30・33・34・37・43・47~50・54と



第2-12図 A-SD・SK1505実測図

銅銭の69～71である。2～5・8～10はロクロ成形による在地系土師器の皿である。いずれも口径は約8cmで、口縁部の立ち上がりは小さく、特に8～10は、底部の器壁が厚く、その特徴が明確である。

この皿とセットになるのが12～15・17～30・33・34・37・43のロクロ成形による在地系土師器の坏である。特に第2-15図12～15・17～29・第2-16図30の口径は10.5cm～13.2cmであるが、12cm前後が中心である。器高は3.4cm～4.4cmを測るが、4cm前後のものが目立つ。口縁部の形成は、底部から外傾して立ち上がり、端部は外反気味になり尖る特徴を持つ。

54は口径21cm、底径8.7cm、器高8.5cmで、注口部を持つ鉢である。口縁部は外面が肥厚し断面が三角形を呈する。器面調整は、外面が横撫でで、指圧痕が残るが、内面は横方向の刷毛目が観察できる。胎土には斜長石・角閃石・石英が含まれ、色調は灰色や暗灰色をしており、焼成の甘い須恵質である。この完形品の資料は銅銭3枚を入れ、底部を下にし、埋置した状態で検出された。

56は口縁部が屈曲する土鍋の破片である。61は内外面とも刷毛目調整の後、撫で仕上げで外面には指圧痕が残される。口縁部断面は三角形で、色調は淡灰褐色を呈するが瓦質の土鍋と考える。

54の内底部に貼り付いた状態で出土した銅銭は69～71であるが、69・70は篆書体で書かれた「政和通寶」で初鑄は1111年（北宋）である。71は篆書体で書かれた「宣和通寶」で初鑄は1119年（北宋）である。

銅銭と鉢を埋置

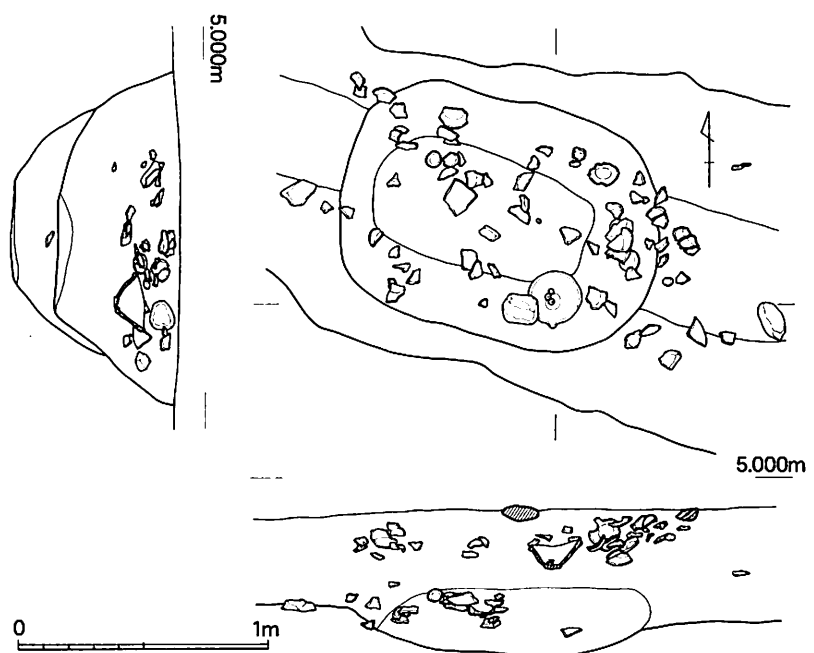
銅銭

A-SK1024（第2-14図）

A-SK1024はA-SD1505に沿って細長く検出された土坑である。確認された土坑の規模は、上面の長軸が約2.4m、短軸が約0.9m、平坦な底面は長軸約1.8m、短軸約0.2～0.3mで、A-SD1505の底面より約30cm深く掘り込まれている。溝の底面を精査中にこの土坑を検出したため、両者の前後関係は明確ではない。

この遺構の上面や周辺から出土した遺物は、第2-15図1、第2-16図40・41・44・45がある。1のロクロ成形による在地系土師質土器の皿は、口径7.8cmで、底部から口縁部の立ち上がりは器壁がほぼ均一である。

在地系土師質土器の坏の40は口径が13cmであるが、底径は8.1cmで口縁部が内湾気味に立ち上がる。41は口径12cm、底径7.8cmで、側面観が逆台形状である。44は口径12.3cm、底径8.4cmで、口縁部断面を見ると、底部からの立ち上がり部より、上位の器壁が厚く、三角形状になる。45は口径12cm、底径7.7cmで、底部からほぼ均一の厚さで、口縁部が立ち上がる。



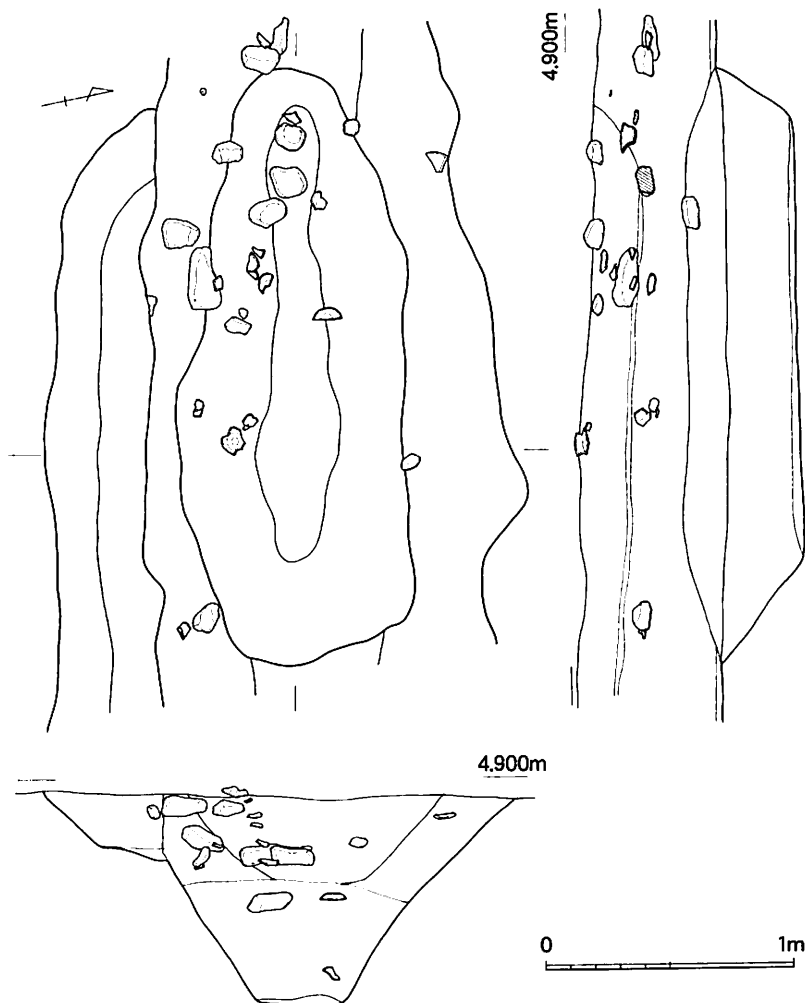
第2-13図 A-SK1505出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

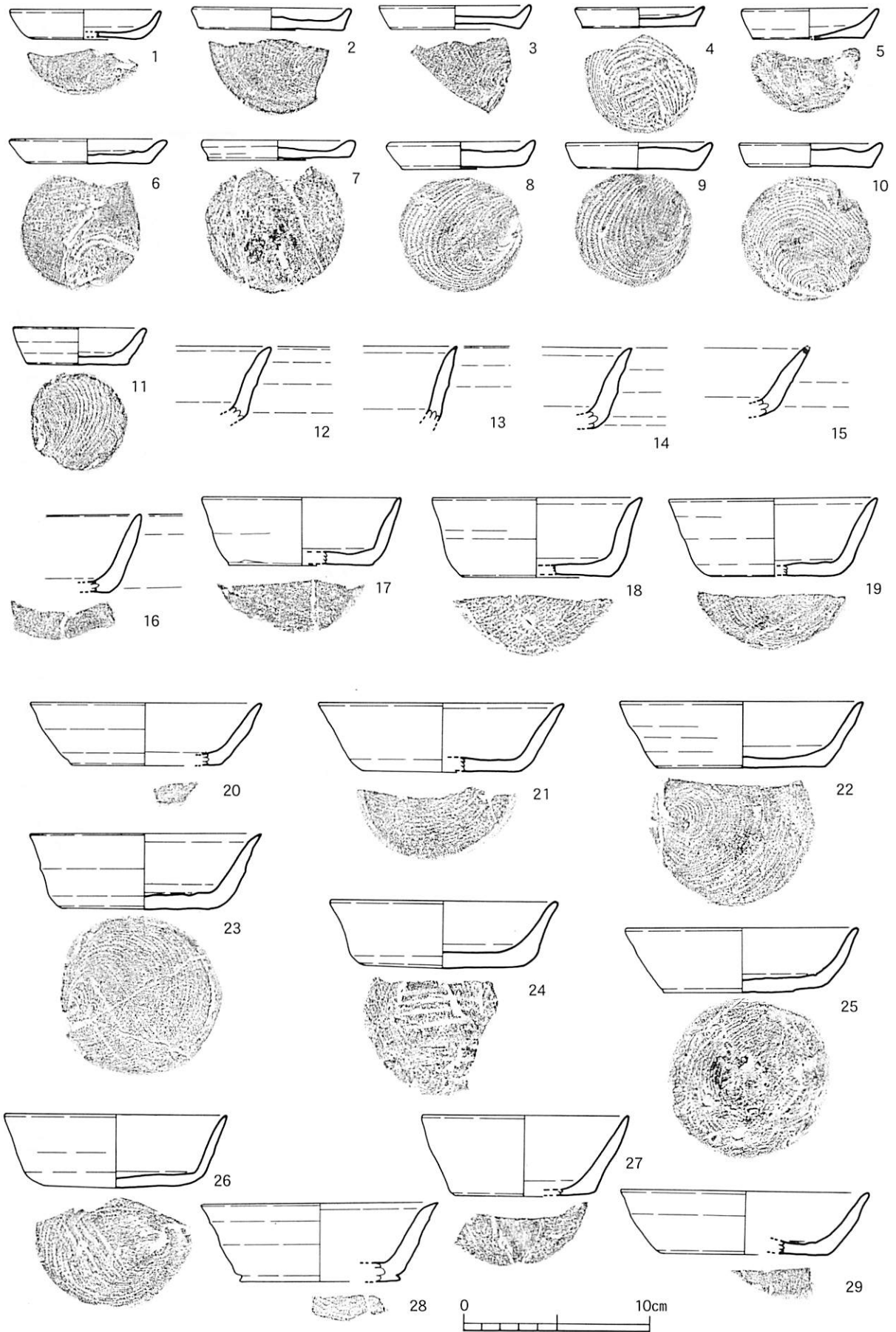
以上がA-SD1505と重複する二つの土坑とそれに関連する出土遺物であるが、これ以外を、溝出土の遺物とし、その報告を行う。ロクロ成形による在地系土師質土器の皿は6で口径8.1cmであり、底部から口縁部にかけてほぼ同じ厚さの器壁で立ち上がる。坏は16・31・32・35・36・39・42である。16はA-SK1505出土と同類であり、この遺構に伴う遺物の可能性が強い。31は口径10.8cm、底径8.7cm、器高3.6cmで、口縁部の器壁は中位で若干厚くなる。32は口径12.6cm、底径8.8cm、器高3.4cmで31と同様、底部から立ち上がった口縁部の中位が厚くなる。35は、口径12cm、底径8.2cm、器高3.6cmで、口縁部内側にススが不連続に付着しており、灯明皿として使用されている。36は口径12.6cm、底径8.6cm、器高4.1cmで、底部には板状圧痕が付着している。39は口径11.4cm、底径6.8cm、器高3.6cmで口縁部は内湾気味に立ち上がり、碗状の器形になる。42も39と同様の器形で、口径12.2cm、底径7.8cm、器高3.6cmで口縁端部が尖る。

瓦器坑  
東播系  
亀山系

52は色調が黒色の瓦器坑の底部である。わずかに高台の痕跡が残る。53・55は口縁部断面が三角形になる東播系須恵質土器の鉢で、須恵質である。57・58は口縁部が屈曲する土鍋である。器面調整は内面が横方向の刷毛目で、外面は撫で仕上げである。59・60は須恵質の壺形土器である。両者とも口縁部は横撫でであるが、60の外面は格子目の叩きで仕上げられており、亀山系須恵質土器である。



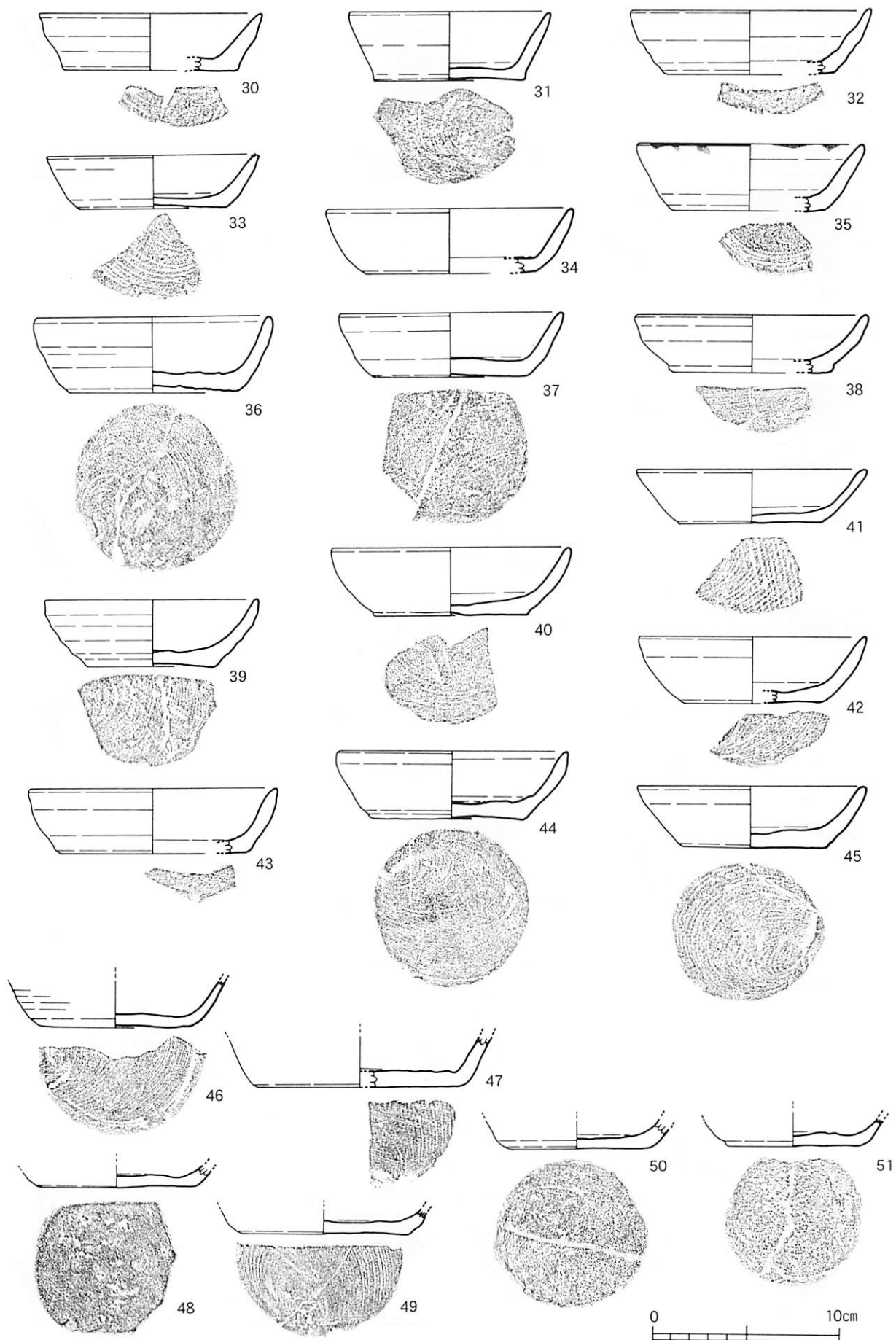
第2-14図 A-SD1024実測図



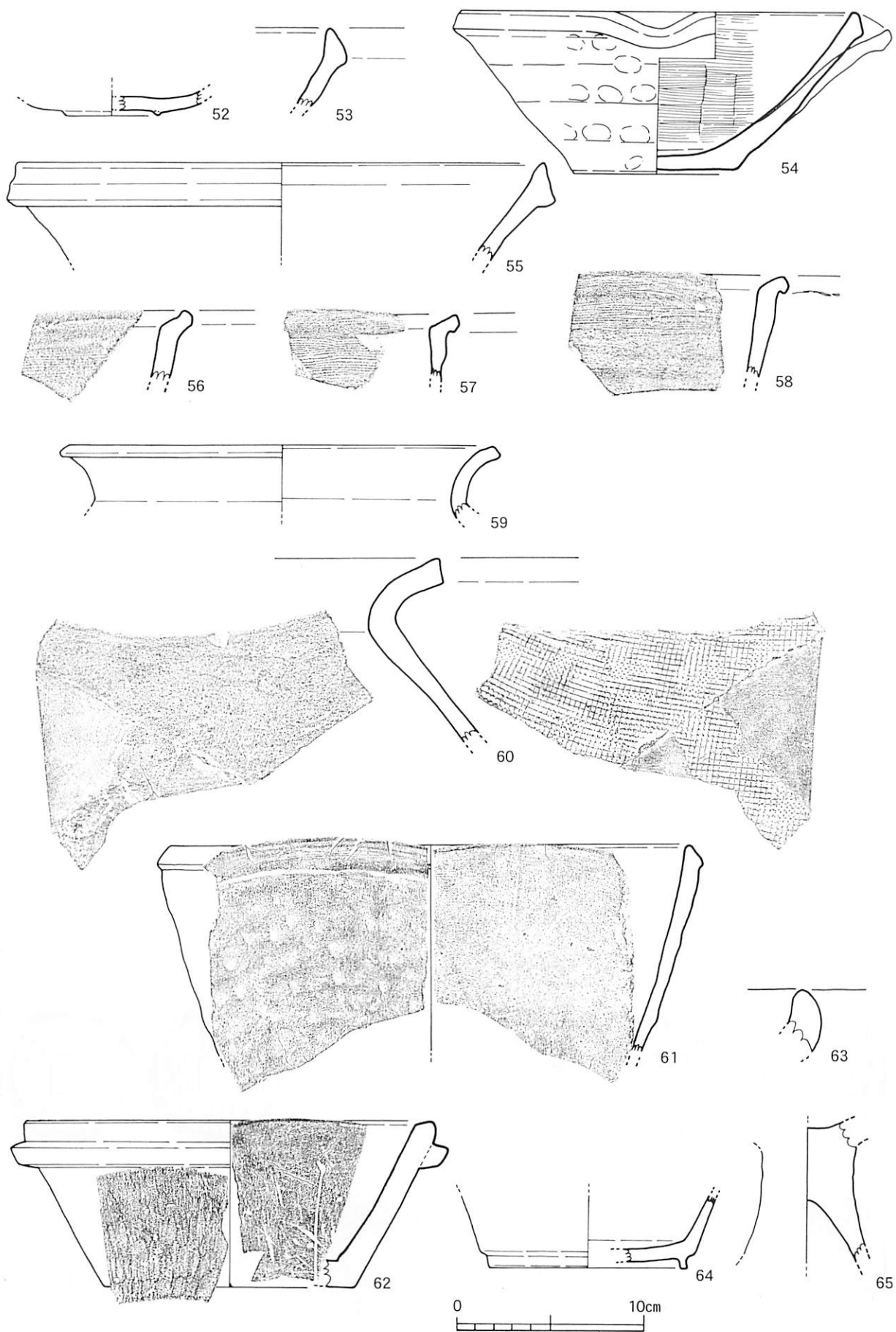
第2-15図 A-SD・SK1505・A-SK1024出土遺物実測図(1)



第2節 遺構と遺物



第2-16図 A-SD・SK1505・A-SK1024出土遺物実測図(2)



第2-17図 A-SD・SK1505・A-SK1024出土遺物実測図(3)

## 第2節 遺構と遺物

滑石製石鍋 62は口径22cm、底径9.1cm、器高13.8cmの滑石製の石鍋である。口縁部外面に幅約1.4cmの突帯が造り出されている。器面は内外面ともに縦方向に削られ、成形された痕跡が残る。外面にススが付着しており鍋として使用している。63は埴塙の口縁部である。

埴塙

64は底径10.6cmの高台の付いた須恵器の坏である。65は高坏の脚部の資料である。64は8世紀後半から9世紀前半、65は弥生時代のものである。

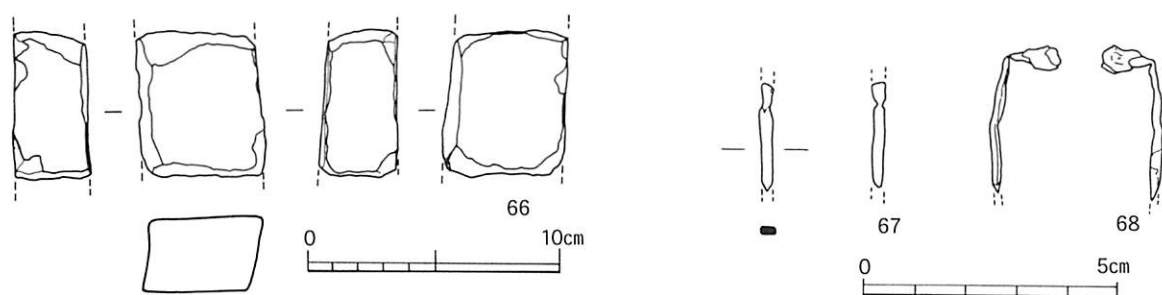
砥石

66は両端を欠くが、四面を磨り面とした砥石である。67・68は青銅製品であるが、器種や用途は不明である。

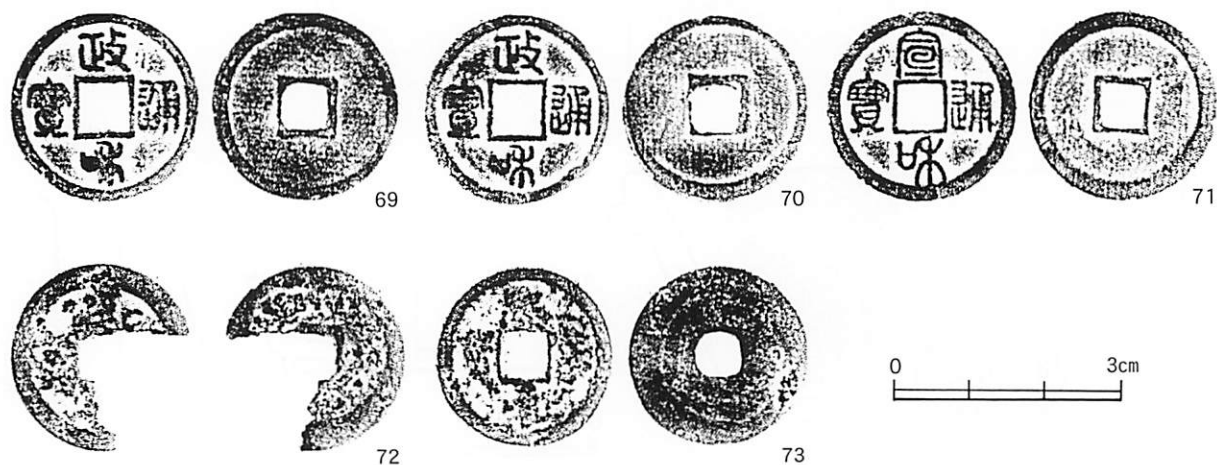
銅銭

銅銭は第2-19図72・73の2点が出土しており、72は上部に「咸」、左に「寶」の可能性のある文字が見える。73は真書体で書かれた「熙寧元寶」で初鑄は1068年（北宋）である。

これらの3つの遺構の前後関係と時期は、A-SD1505とA-SK1024の関係は不明確であるが、14世紀後半代と考える。A-SK1505は遺物の出土状況や土師質土器の型式変化等を考慮すると、A-SD1505に明らかに掘り込まれたもので、14世紀末から15世紀前葉と考えられる。



第2-18図 A-SD・SK1505出土遺物実測図(4)



第2-19図 A-SD・SK1505出土銭実測図 (69~71はSK1505出土)

## A-SD1506 (第2-2図・第3-6図)

A-SD1506は府内町跡20次調査A・B区を南北に貫くように約90mにわたり検出された。このため、同一遺構であるが名称は、A区ではA-SD1506とし、B区ではB-SD064として調査を実施した。

ここでは、遺構全体の概要を述べつつ、A区の部分であるA-SD1506の報告を行う。

A区で検出されたA-SD1506は概ね方位をN-6°-Eとなるものの、区画性に乏しい。すなわち、完掘後の底面の状況を見ると、緩やかに蛇行している。しかも幅も一定ではなく20~80cmを測る。また床面も平坦ではなく、L-40区の部分では約2.5mの範囲で約20cm高くなっている。深さは起伏があるものの、1m前後は保たれている。検出面での状況も、幅が一定ではなく、1.5m~2mを測る。この溝は万寿寺北境の堀の約3.5m手前で端部が確認され、その部分でも深さは1.1mを測る。

出土遺物は、第2-20図に約1mの深さの溝を上・中・下層の3段階に区分して取り上げた遺物を図示した。1~12は上層から出土した資料である。1~5は京都系土師器で、1は口径が11.6cmで器高の高い壙形になる。2は口径9.6cm、器高1.9cmで、3の口径は10.8cm、器高1.8cmである。4の口径は10.2cm、5の器高は11.8cmである。6・7は口縁部が屈曲する土鍋であり、7の復元口径は31.9cmである。内面は横方向の刷毛目で調整されているが、外面は撫で仕上げである。8は口縁部に突帯が巡る瓦質土器で、罫付の土鍋の可能性が高い。9は底径8.4cmの柱状の土製品で、燭台と考える。10も土製品であるが、土鍋の脚であろうか。11・12は扁平な砥石の破片である。12は片面に縦方向の調整痕が残されており、赤間石の可能性が高い。

13~22は中層出土の主要遺物である。13~15はロクロ成形による在地系土師質土器である。13はいびつであるが口径は約7.5cmの皿である。14・15は坏であるが、15の口径は12.2cmで、口縁部中位が厚く、断面は三角形状になる。16~19は京都系土師器の坏である。いずれも復元口径であるが、16は9.0cm、18は10.6cm、17は12.6cm、19は14.4cmである。20は口縁部が屈曲する土鍋で、21は滑石製の石鍋の破片である。22は、口径23.9cmの東播系須恵質土器の鉢である。

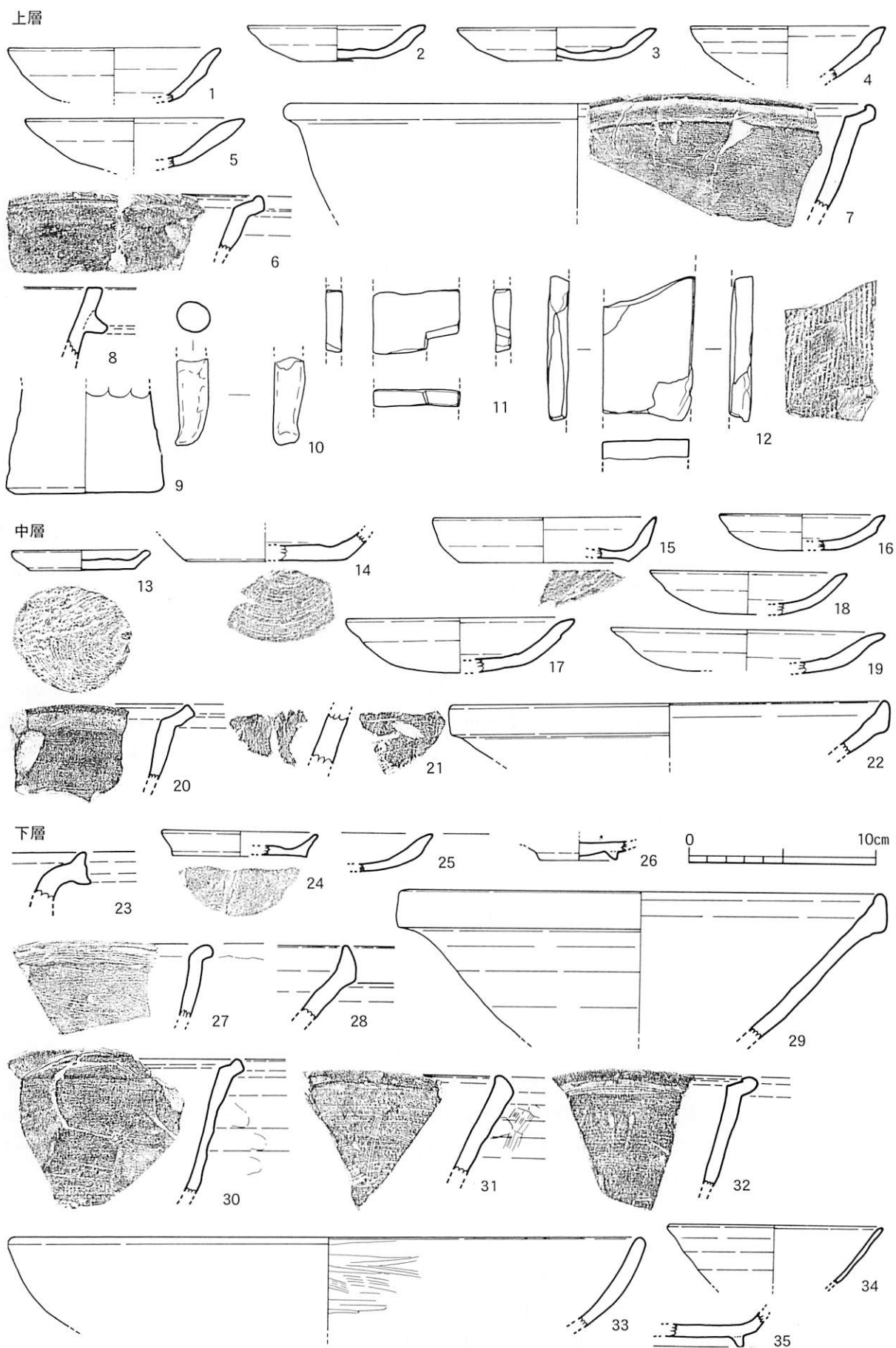
23~35は下層出土の主要遺物である。23は常滑系陶器の甕の口縁部である。24はロクロ成形による口径8.4cmの在地系土師質土器の皿である。25は京都系土師器で、26は白色をした吉備系土師器の底部の資料である。27・30・32は口縁部が屈曲する土鍋である。31も瓦質であり、土鍋と考えられる。28・29は東播系須恵質土器の鉢である。29の口径は26cmである。33は鉢形をした口径33.6cmの瓦質土器である。34・35は古代の土師器壙で、34は口径11.8の壙で、須恵質であるが、14世紀代の瀬戸美濃系陶器の可能性が高い。35は高台付の土師器で、器面は篋磨きで仕上げている古代の資料である。

第2-21~2-27図の36~95はA-SD1506から出土したもので、一括して取り上げたものである。

36~39・41・42は貿易陶磁器である。36は漳州窯系青花皿で、38は同じく口径14.4cm、底径5cm、器高6.1cmの青花碗で、外面下に芭蕉葉文が描かれている。37・39・41は景德鎮窯系青花皿である。復元底径は、37が6.0cm、39が11.2cmで大皿である。41には「・・・年造」の銘が確認できる。42は龍泉窯系の青磁製品で、装飾品で飾られた動物の臀部である。

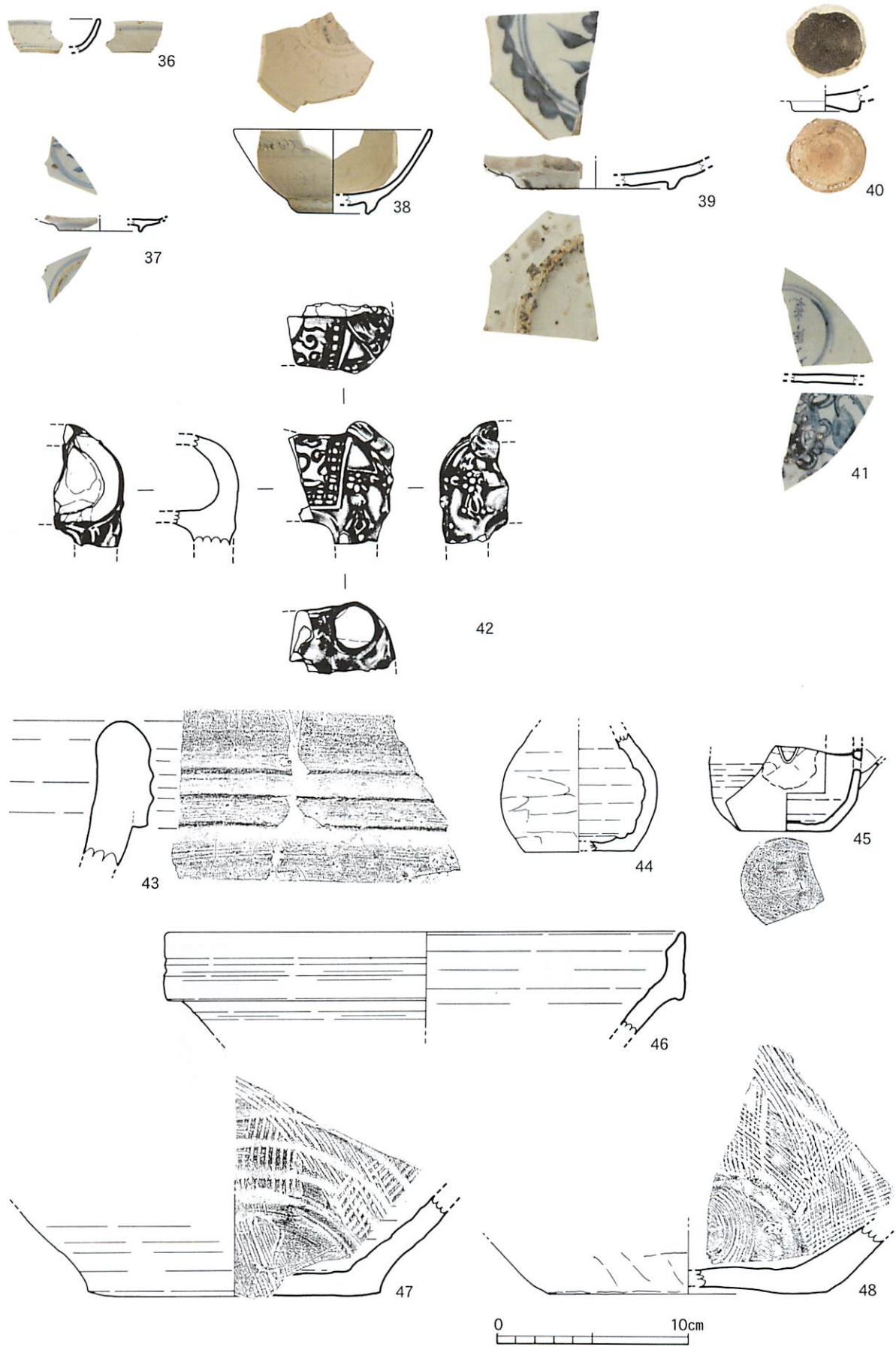
40は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗の底部である。底径は4.3cmであるが、周囲を打ち欠き円盤状に仕上げている。43~48と76は備前系陶器である。43は口縁部外面を肥厚した大甕である。44は底径5.4cmの小壺又は小型の徳利と推測される。45は注口部を持つ容器で、底径は4.8cmで、底にヘラ記号が描かれている。46~48は播鉢である。46は口径27cmで、47と48の底径は、15.4cmと14.2cmであり、播り目は口縁部に直角に入れ、その後斜め方向を加えている。76もわずかに口縁部に直角に入れられた播り目が確認でき、14世紀代の播鉢である。

第2節 遺構と遺物

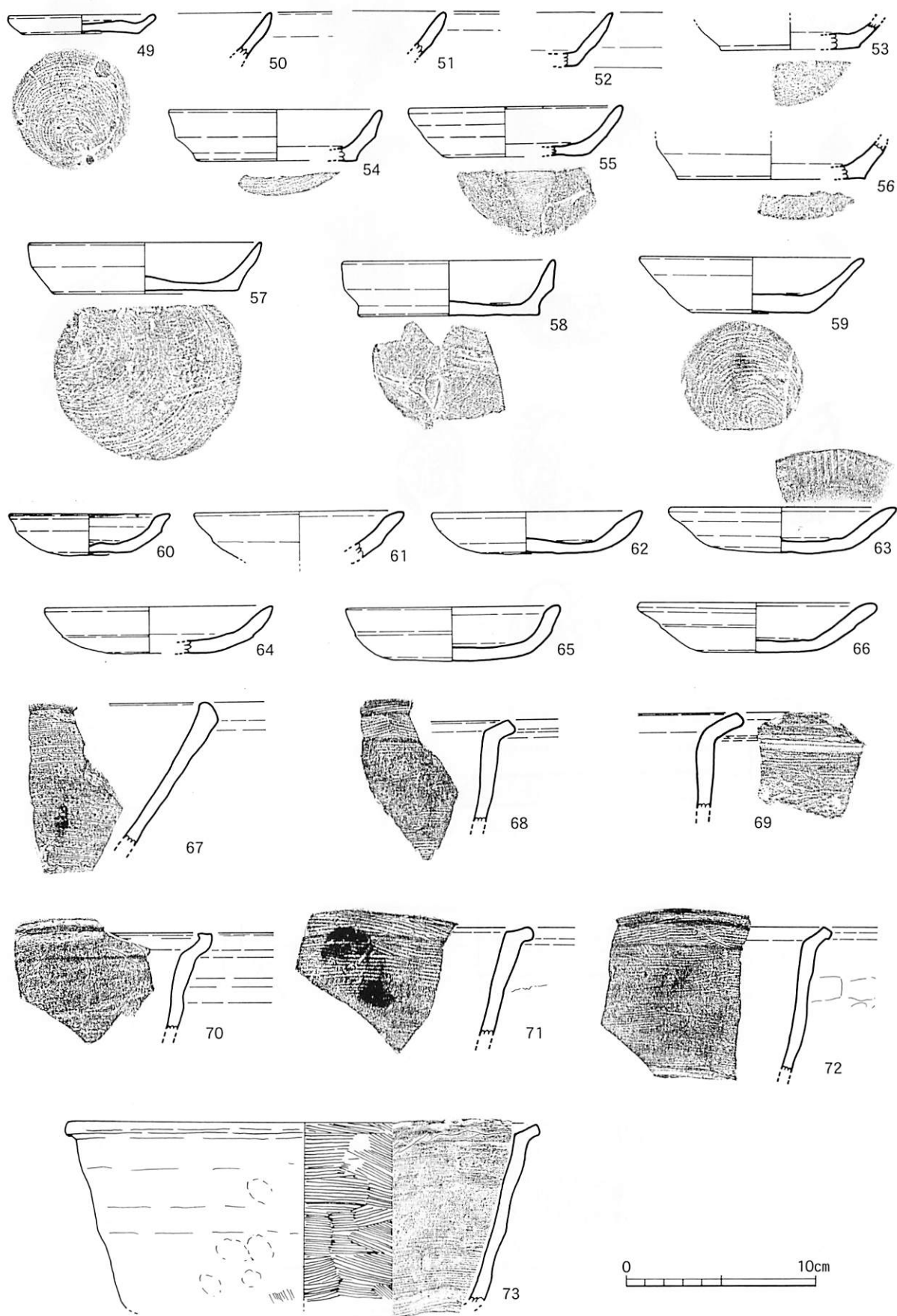


第2-20図 A-SD1506出土遺物実測図(1)

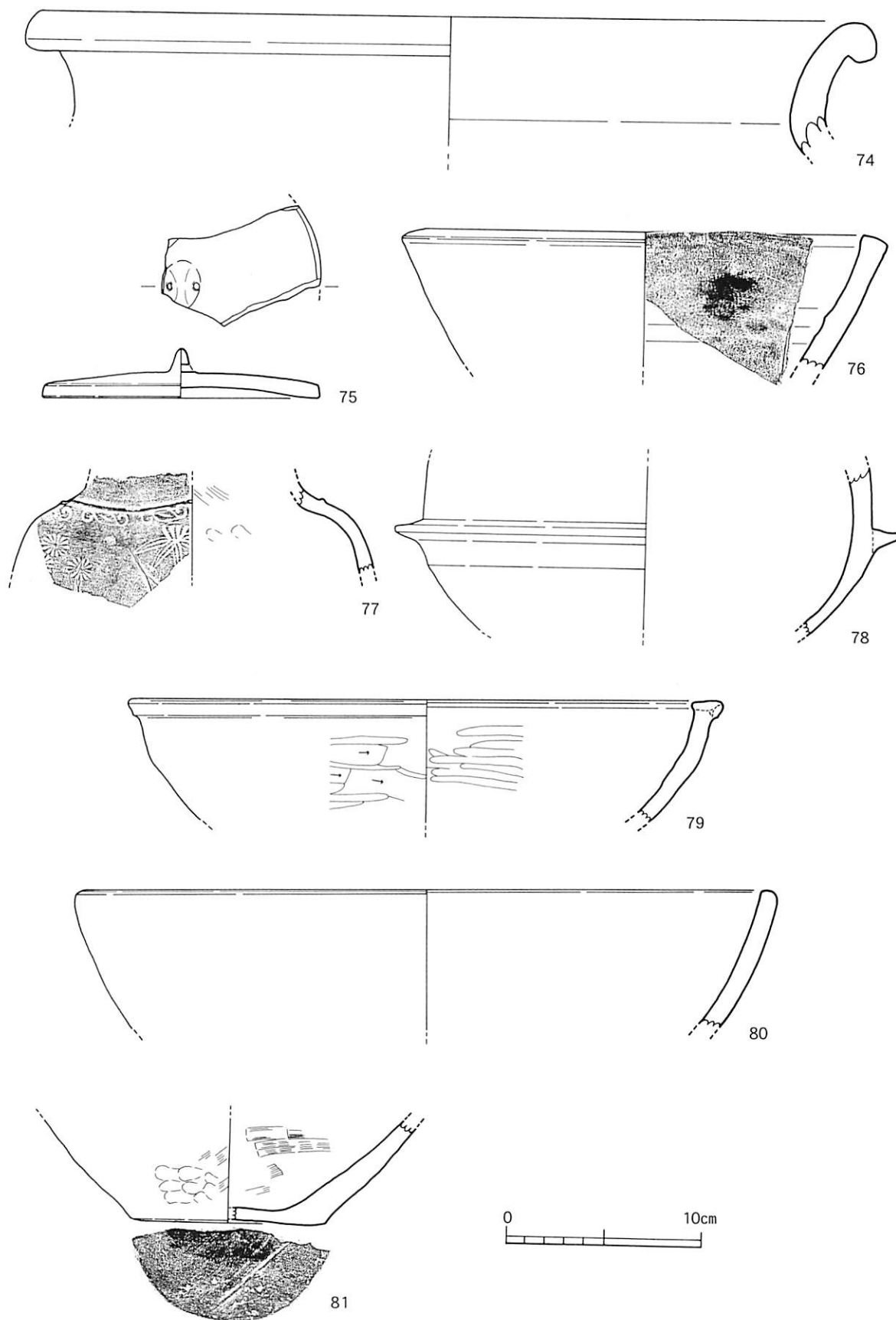




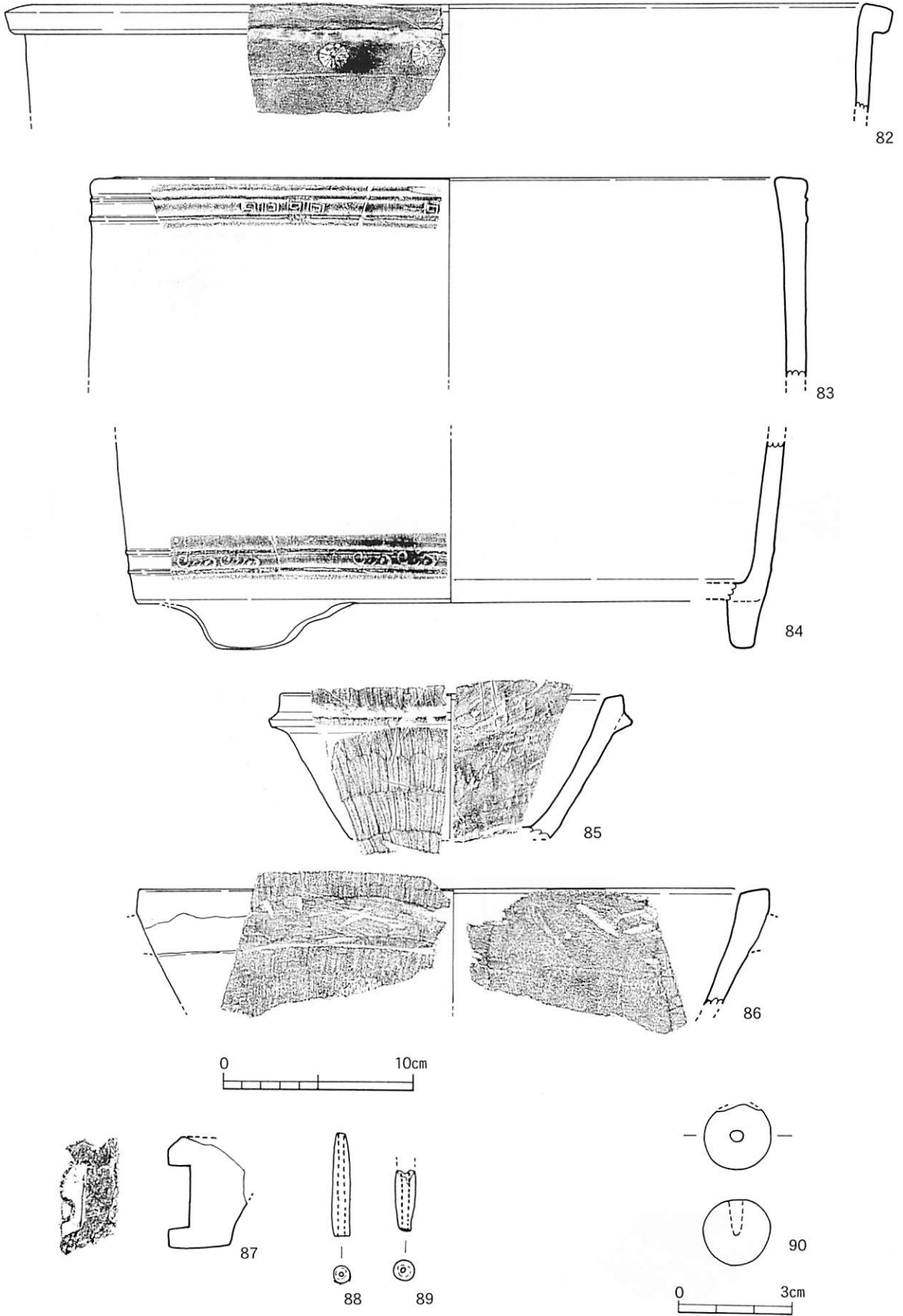
第2-21図 A-SD1506出土遺物実測図(2)



第2-22図 A-SD1506出土遺物実測図(3)



第2-23図 A-SD1506出土遺物実測図(4)



第2-24図 A-SD1506出土遺物実測図(5)

第2-22図49～59は、ロクロ成形の在地系土師質土器である。49は口径7.8cm、底径6cmの皿である。これ以外は坏であるが、50～52は口縁部の資料である。底部の資料である53・56の底径は、7.1cmと9.8cmである。54は口縁部の中位が肥厚し、口径11.2cm、底径は8.4cm、器高2.7cmで、55は口径12.4cm、底径は9cm、器高2.6cmである。57は口径12.2cm、底部は9.6cm、器高2.7cmである。58は口縁部中位が肥厚し、断面が三角形状になり、口径11.4cm、底部は9.6cm、器高3cmを測る。58は側面観が逆大形状に口縁部が開き、口径11.8cm、底部は6.2cm、器高3cmである。

灯明皿

60～66は京都系土師器の皿で、60は口径8.4cmで、口縁部周辺にススが付着しており、灯明皿として使用されている。口径は61が11cm、62は12.2cm、63は12cm、64が13cm、65は11.4cm、66は12.6cmであるが、65は口縁部の立ち上がる角度が異なり、器高も2.9cmと他の同類の土師質土器よりも高く、坏状になる。

土鍋

67～73は土鍋である。67は口縁部が屈曲せず外傾し、肥厚する。内面は横方向の刷毛目、外面は撫でて器面調整されている。これ以外は、口縁端部が外側に屈曲する形態の土鍋である。いずれも、器面調整は67と同様、内面は横方向の刷毛目、外面は撫でて仕上げられている。75は大形の破片から復元したものであるが、口径は25cmで、外面には指圧痕が残る。胴部は外傾し、底部は丸底になると推測できる。

備前系

74は口径42cmの甕で、外反する口縁部の端部は玉縁状に肥厚する。須恵質で灰褐色をしており、備前系陶器の可能性が高い。

75は口径14.8cmの蓋である。中央部には先端の尖ったつまみが付けられており、これに横方向の孔が穿かれている。胎土に砂粒は少なく精製粘土が使用され、焼成は橙色であるが、瓦質土器と考える。77は胴部上位に連続したスタンプ文を入れられた瓦質土器である。胴部最大径で18.8cmを測る壺形土器である。78は器面を研磨された瓦質土器で羽釜と考える。胴部最大径部に突帯をめぐる。この部分より下位はススが多量に付着している。79は口縁部を肥厚した口径30.6cmの暗褐色をした瓦質土器の鉢である。器面調整は内外面ともに横方向の篋磨きで調整されている。80は口径



第2-25図 A-SD1506出土遺物実測図(6)



第2節 遺構と遺物

36.1cmの鉢形土器である。色調は灰褐色をしているが、内外面横方向の撫で仕上げで、瓦質土器の範疇に入ると考える。81は底径10cmの瓦質土器の底部である。内面は横方向の刷毛目で、外面は指押圧が残る。焼成の不十分な須恵質土器の可能性もある。

**瓦質土器火鉢** 第2-24図82~84は瓦質土器の火鉢である。82は口径43.5cmで、口縁外端部が「コ」の字状に肥厚し、その下位には菊花文のスタンプ文が連続して施文されている。83は口径37.9cmで、直口する口縁端部がやや肥厚し、その外面に約1cm間隔の細い突帯を巡らせ、さらに間に2回押捺を1単位とした雷文のスタンプ文を施文している。84は83の底部の可能性があり、底径は33cmで、脚が3ヶ所に付く。底部外面には約1cm間隔の細い突帯を巡らせ、その間に横向きの「S」字文を2回押捺し1単位としたスタンプ文が施文されている。

**滑石製石鍋** 第2-24図85・86は滑石製の石鍋である。85は底部を欠くが、口径18cm、底径10.5cm、器高は約8cmで、口縁部外面には断面三角形の突帯が削り出されている。内面は平滑に仕上げられているが、外面は4段にわたり、縦方向に削り成形した痕跡が残る。86は、口径33.2cmの石鍋であるが、割れた後再利用するためか、口縁部下の突帯が削られている。器面は、内面が平滑に仕上げられているが、外面は縦方向に削り成形した痕跡が残る。

**平瓦唐草文** 87は平瓦である。瓦当部の幅は約6cmで、唐草文の端の一部が確認できる。88・89は紡錘形の土錘である。88は完形品で長さ5.5cm、最大径0.9cm、重さ5gで、89は一部を欠くが、長さ3.2cm、最大径3.2cm、重さ3gである。90は直径1.7cmの球形の土玉である。1ヶ所中心部まで穴が開けられている。

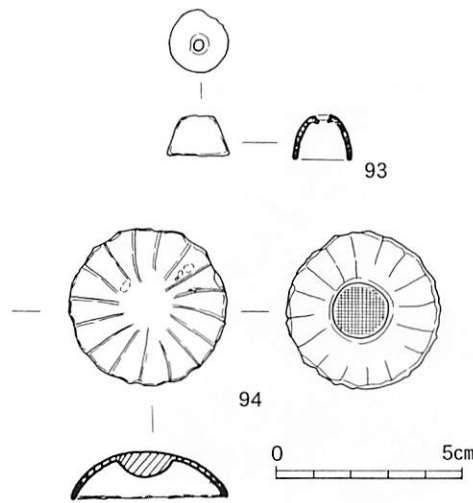
第2-25図91・92は同一個体と考えられる須恵質土器の大甕である。91の口縁部は外反し、内外面横方向の撫でで仕上げられており、外面は肩部から下位は交差する叩き調整で格子状になっている。また内面は、同心円状の叩き痕が認められる。92はその底部で丸底になると推測するが、外面は肩部と同様の叩きであるが、粗雑であり、内面は粗い刷毛目が認められる。

**青銅製品** 第2-26図93・94は青銅製品である。93は直径1.6cm、高さ1.1cm、重さ2.1gの釣鐘状の形態をし、頂上部に径0.3cmの穴が見られる。また、94は、直径4.1cm、高さ1.2cmの半球形で、全体を16等分し、菊花文状に仕上げている。また頂部内面には直径1.4cm、厚さ0.5cmの突起する部分がある。2点とも何らかの飾り金具と推測される。

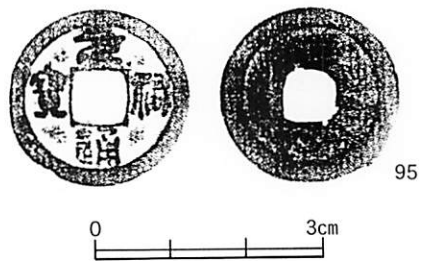
**銅銭** 第2-27図95の銅銭は、篆書体で書かれた「元祐通寶」で初鑄年は1086年（北宋）である。直径2.4cm、重さ2.4gである。

このA-SD1506からは、多くの14・15世紀代の遺物を出土する。しかし、遺構内からは一定量の16世紀後半の備前系陶器の挿鉢や、16世紀後葉から末葉の京都系土師器、16世紀後葉の漳州窯系青花碗などが出土しており、16世紀後葉から末葉と考

える。



第2-26図 A-SD1506出土遺物実測図(7)



第2-27図 A-SD1506出土銅銭実測図

2. 建物遺構

府内町跡20次調査A区では、多くの柱穴の可能性のある掘り込みが検出された。しかし、掘建柱建物としてまとまるものは少ない。ただ1棟のみ、調査区の東北隅で川原石を礎盤とした大型建物が確認できた。これをA-SB01として報告をする。

A-SB01 (第2-29図)

A-SB01は万寿寺の北境の堀の南側で検出された南北5間、東西2間以上で西側に半間の庇が付く大型の建物である。方位はN-9°-Eで、第1南北街路とほぼ同じである。その構造は、南の一系列と、西側の途中3ヶ所不明な1列の2列は柱穴内に礎盤とする石がなかったが、他の検出された12ヶ所の柱穴の内、11ヶ所に柱を支えるための人頭大の扁平な川原石が据えられている。すなわち、建物の主要部分を支える柱穴には川原石が礎盤として置かれている。柱間は南北間が南から2.24m、2.12m、2.28m、2.12m、2.12mであり、東西間は西から0.8m、2.15m、2.08mである。これらの柱間は7尺で設計された可能性が強い。

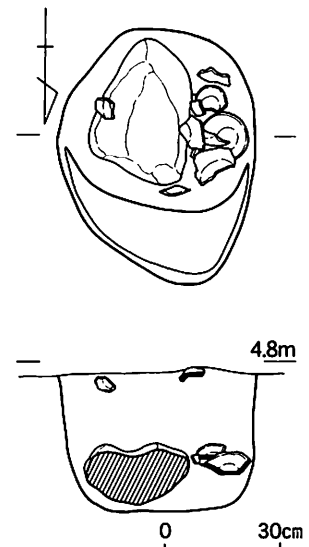
遺物は、各柱穴で見られるが、第2-28図に図示したA-SP026からまとまって出土している。この遺構は長径1.02m、短径0.78mで検出面から約30cmで二段堀になっており、深い方に57cm×37cmの扁平な川原石を埋めている。遺物はやや空間のあるこの石の西側で集中的に出土しており、地鎮祭祀行為

鎮などの祭祀行為が想定できる。出土遺物は第2-31図の4~16に図示したが、全てロクロ成形の在地系土師質土器である。5は口径8cm、底径6cm、6は口径9cm、底径6.4cmで、器高はいずれも1.3cmの皿である。9~15は坏である。完形品又はそれに近い11は口径12.7cm、底径8.5cm、器高3.4cmで、12は口径13.6cm、底径9.3cm、器高3.4cm、14は口径12.6cm、底径8.2cm、器高3.2cmであり、口縁部は内湾気味に立ち上がり、中位で厚みを増し、口縁端部は尖る。7・8は皿との中間形態の小型の坏で、7は口径8.3cm、底径7.1cm、器高1.6cmで、8は口径7.3cm、底径8.2cm、器高2.3cmである。

16は流れ込みと考えられる土製品で、土鍋の脚と考える。

その他の柱穴からの出土遺物は第2-31図1~3と第2-30図に図示した。A-SP001は第2-31図1~3であるが、いずれもロクロ成形の在地系土師質土器である。1・2は皿であり、3は口径11cm、底径7cm、器高2.7cmの坏である。A-SP004出土遺物は第2-30図1の土鍋であり、A-SP005出土遺物は2のロクロ成形の在地系土師質土器の坏である。3はA-SP006出土の遺物であるが、ロクロ成形の在地系土師質土器の皿に脚を付ける燭台の可能性が強い。4・5はA-SP019出土のロクロ成形の在地系土師質土器の坏の底部である。6はA-SP040出土のロクロ成形の在地系土師質土器の皿で口径8.2cm、底径6.4cm、器高1.6cmであり、7はその坏で、口径12.8cm、底径8.8cm、器高3.3cmである。

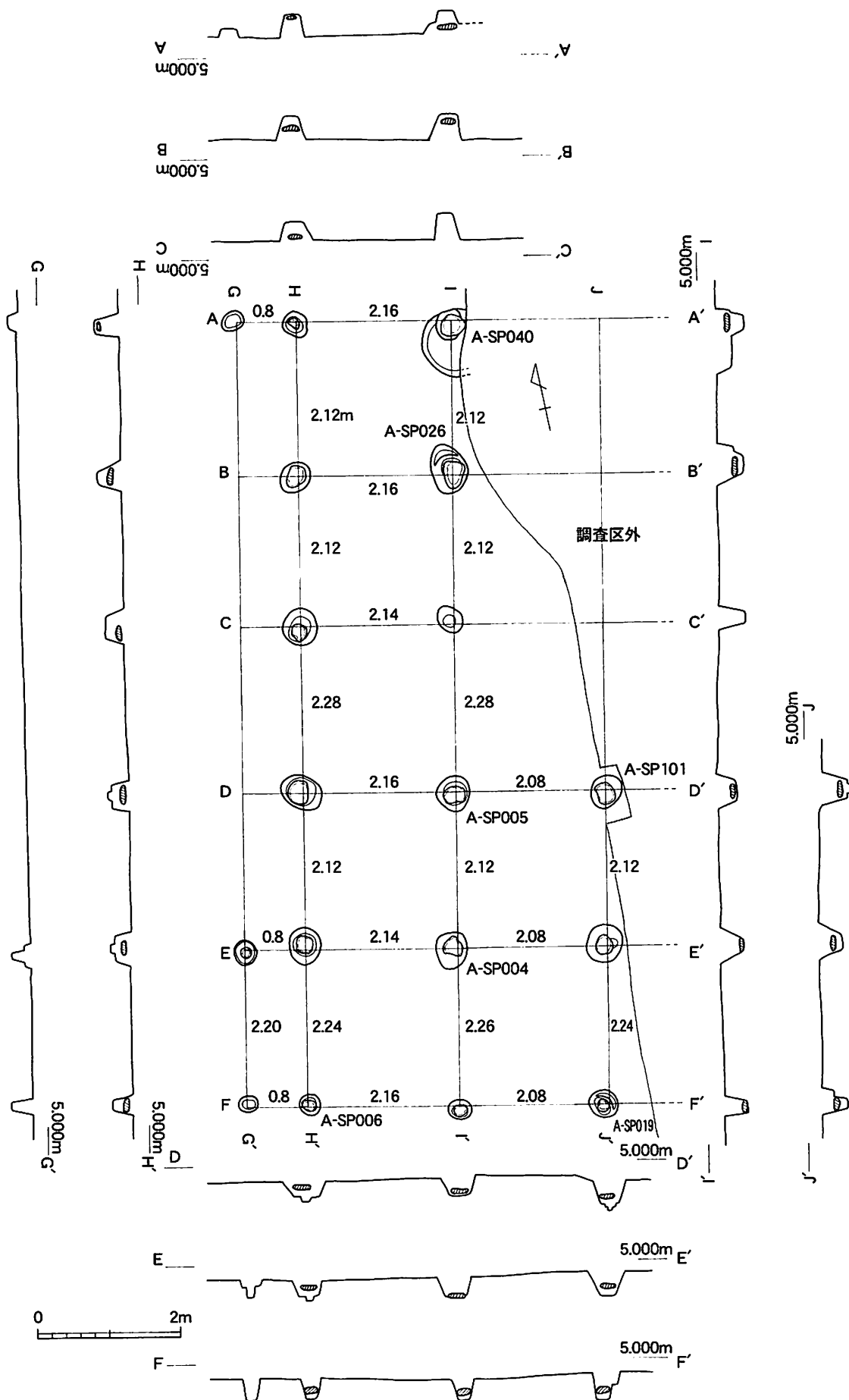
以上、このA-SB01と密接な関係で出土したと考えられるA-SP026の遺物を中心にこの遺構の建設時期を推定すると、ロクロ成形の在地系土師質土器の坏の口縁部形態から、14世紀中葉から後葉と考えられる。



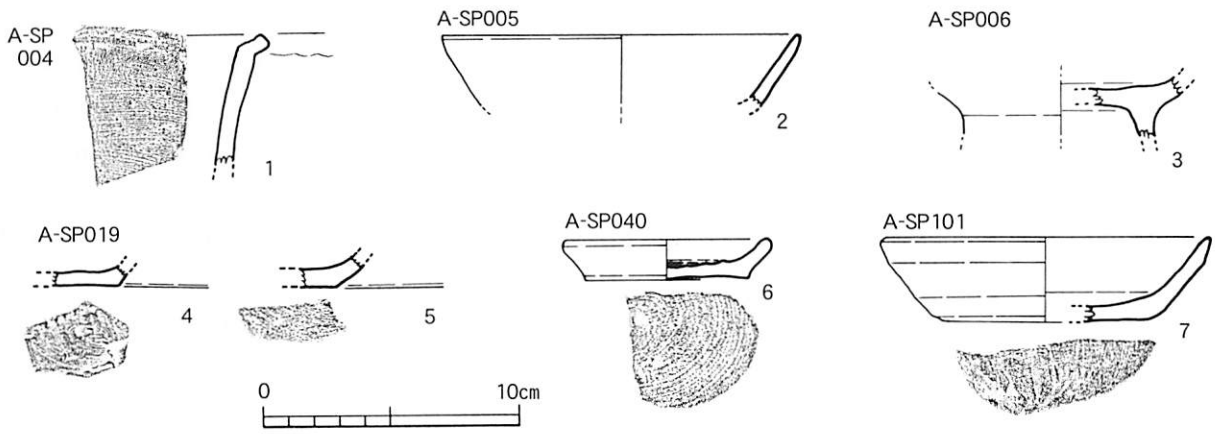
第2-28図 A-SB01のSP-026実測図

燭台

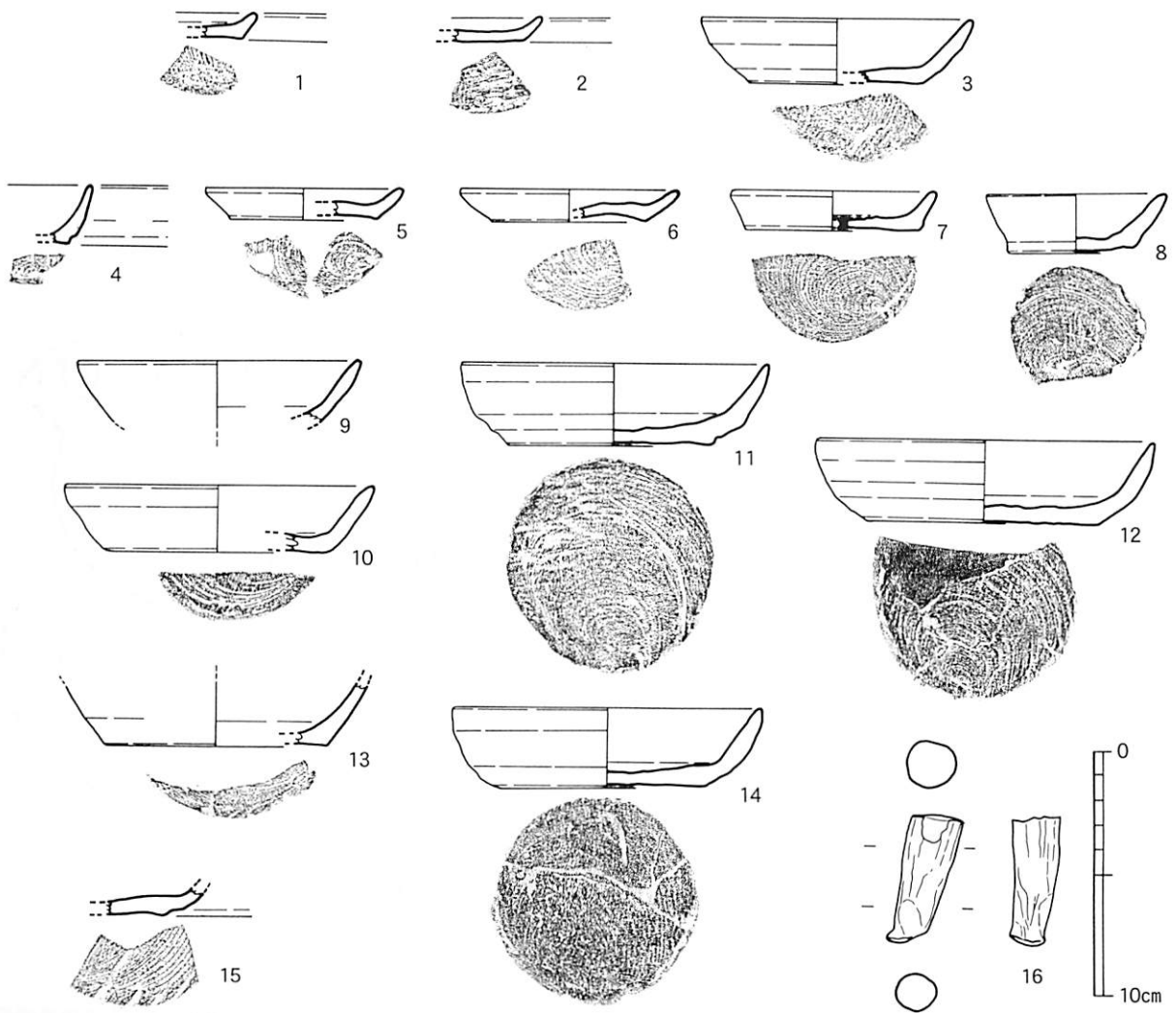
第2節 遺構と遺物



第2-29図 A-SB001実測図



第2-30図 A-SB001の柱穴内出土遺物実測図



第2-31図 A-SB001のA-SP026出土遺物実測図

3. 土坑

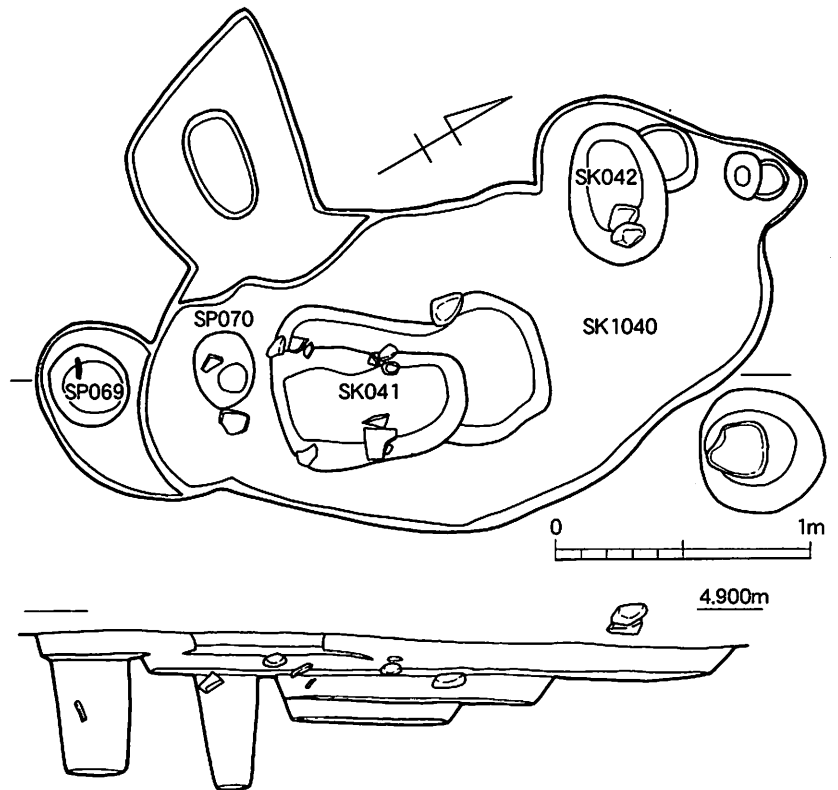
府内町跡20次調査A区からは、多くの土坑や柱穴が検出された。これらは、比較的大型のものを土坑、小型で検出面が円形に近いものを柱穴とした。ここでは、遺物がまとまって出土したものや、形態のしっかりした土坑を中心に、それと切り合う柱穴も報告を行う。

A-SK041・A-SK1040 (第2-32図)

A-SK041・A-SK1040は礎盤建物であるA-SB01の西側に隣接して検出された。土坑は幾つもの掘り込みが複雑に重複し、その前後関係は不明である。この中で、最大規模の遺構がA-SK1040で、南北2.8m、東西1.3mで深さ10数cmの床面が平坦な土坑である。これに長径約1m、短径0.5mで深さ約35cmの二段堀の土坑であるA-SK041がほぼ中央部に掘り込まれている。さらに、北端にはA-SP042、南端にはA-SP069やA-SP070の柱穴が検出された。この柱穴は、床面を精査している際に検出されたため、土層での切り合い関係を把握することは出来なかった。

これらの遺構から出土した遺物は第2-34図に図示したが、A-SK041の遺物は1～4である。4は口径36cmの瓦質土器の鉢である。ほぼ直口する口縁部は端部がやや肥厚し、断面が「コ」の字状に仕上げられている。器面は外面が横撫で、内面はヘラ磨きされており、色調は明褐色であるが、焼成の問題と考えられる。これ以外の3点はロクロ成形による在来系土師質土器である。1・2は皿で1の口径は8cm、底径は6.5cm、器高1.1cmである。2は口径7.4cm、底径6.2cm、器高1.6cmであり、3はロクロ成形による在来系土師質土器の坏で、図示はしていないが復元推定口径は12.8cmの坏である。

この遺構は、出土遺物から14世紀後半から15世紀初頭と考えられる。



第2-32図 A-SK1040・A-SK041・A-SK042・A-SP069・A-SP070実測図



古代瓦

A-SK1040出土の遺物は第2-34図8・9であるが、8は口径29.4cmの瓦質土器の鉢で、口縁部は斜めに立ち上がる。外面は横撫でや指押さえによる調整痕が認められ、外面は横方向の撫で仕上げである。9は格子目叩きと布目が見られ、古代の平瓦と考えられる。

A-SK1040の時期は14世紀代であろうか。

A-SP042 (第2-32図)

A-SP042はA-SK1040の床面で検出されたもので、上面の規模は、長径55.5cm、短径36cm、深さは約50cmで、床面は33cm×22cmを測り、平坦である。出土遺物は第2-34図5のロクロ成形による在地系土師質土器の皿である。器壁は薄く、器高は1cmで、口縁端部は尖る。

時期は遺物で見る限り、14世紀後半から15世紀前葉のものである。

A-SP069 (第2-32図)

A-SP069は検出面での径は約35cmのほぼ円形である。深さは約50cmで、平坦な底面の直径は約14cmである。出土遺物は第2-34図に図示した6・7で、6はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、7は直径33.4cmの瓦質土器の口縁部が直口し、端部が肥厚する鉢である。器面調整は外面が横方向の撫で、内面はヘラ磨きで仕上げられている。

時期は、14世紀から15世紀前半と考えられる。

A-SP070 (第2-32図)

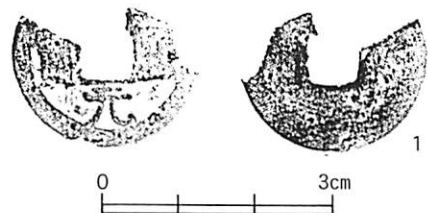
A-SP070は検出面が24cm×33cmの小さな柱穴である。深さは約60cmで、平坦な底面の規模は直径10数センチである。図示できる遺物は無かったが、ロクロ成形による在地系土師質土器の小片が多数出土している。時期は、14世紀から15世紀前半と考えられる。

A-SP052 (第2-2図)

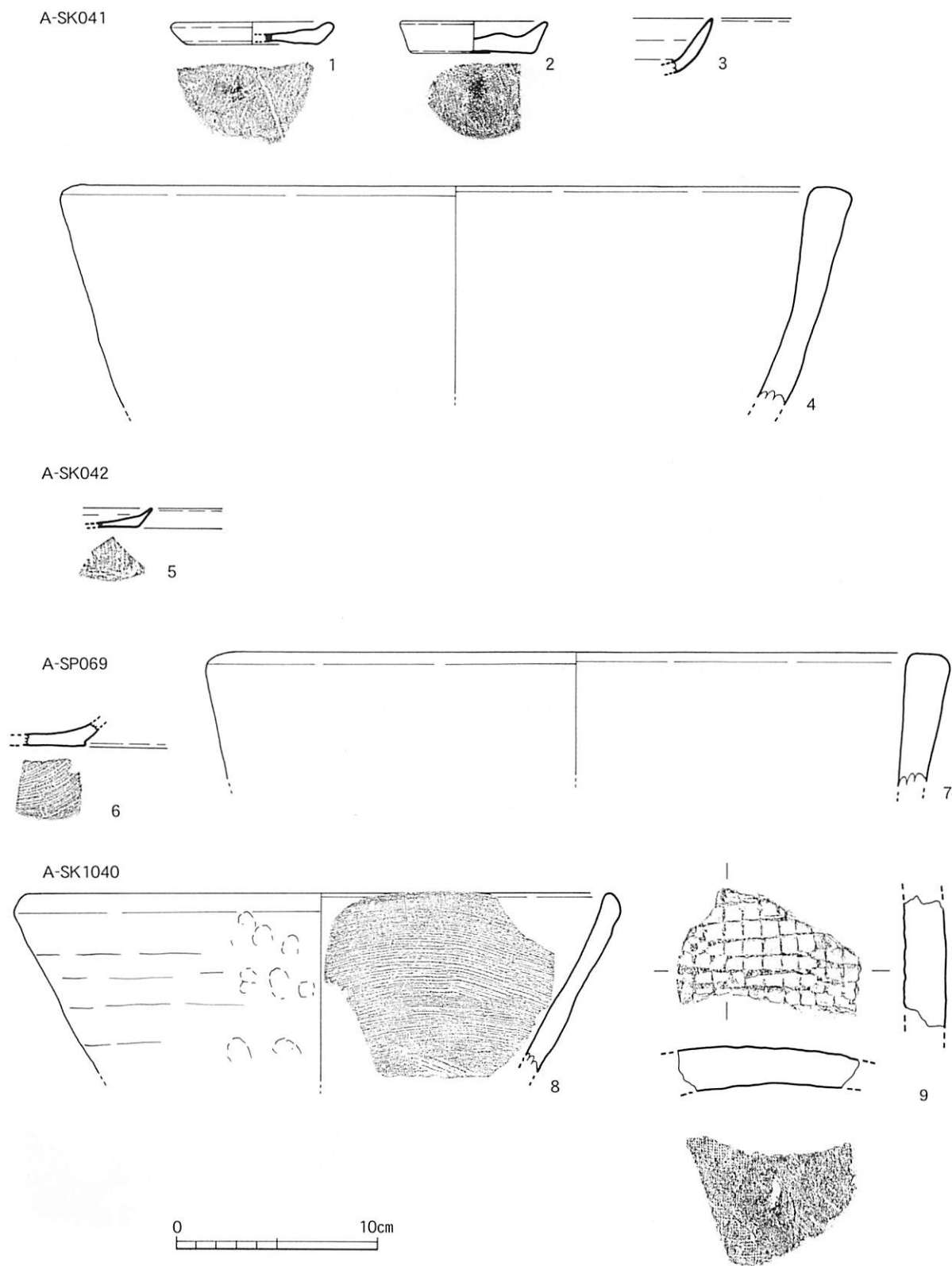
銅銭

A-SP052はA-SD1504の東側の縁で検出された柱穴である。検出面での大きさは40cm×35cmで、深さは45cmで、底面の規模は15cm×18cmである。出土遺物は第2-33図に図示した銅銭である。銅銭は一部を欠き、真書体で「口元通寶」と書かれているが銭種は不明である。他の出土遺物としては、瓦質土器と須恵質土器・備前系陶器の小破片が出土している。

時期は、備前系陶器の色調から15世紀後半代～16世紀代と推測する。



第2-33図 A-SP052出土銅銭実測図



第2-34図 A-SK041・A-SK042・A-SK069・A-SK1040出土遺物実測図

A-SK 102 (第2-35図)

A-SK 102は礎盤建物であるA-SB01の検出された柱穴のうち、南東隅の柱穴を含む土坑である。東側は調査区外になるため、全体を把握することは出来ないが、南北約1.1m、東西は1.2m以上ある。検出面からの深さは約20cmであるが、東側の調査区境がさらに約20cm掘り込まれ、二段堀になっている。また、この遺構の西隅で検出された直径37cm、深さ42cmの柱穴は、A-SB01の南側の川原石による礎盤を持たない列のものである。

東播系  
土錘

第2-36図の3点はこの遺構から出土した遺物である。1・2は口縁部外面を肥厚した東播系須恵質土器の鉢である。1には注口部の一部が確認できる。3は紡錘形をした土錘の完形品で、長さは5.5cm、直径1.1cm、重さは4.1gである。

時期は14世紀後半であろうか。

A-SK 112 (第2-37図)

A-SK 112は府内町跡第20次調査A区の中央北寄りのL-39とL-40の境で検出された遺構である。この遺構の規模と形状は、南北1.9m、東西1.6mで、北側の部分がやや凹む緩い「ハート形」をしている。深さは、浅く10数cmで、床面はほぼ平坦である。この遺構には、A-SP 113とA-SP 114のふたつの柱穴が掘り込まれている。しかし、この三者の前後関係を土層や遺構の切り合いで把握することは出来なかった。

A-SK 112の出土遺物は、第2-38図1に図示したロクロ成形による在地系土師質土器の小型の坏がある。この土器は、口径8.7cm、底径6.3cmであるが、器高は、器形がいびつなため、1.7~2.1cmを計る。

時期は14世紀後半と考える。

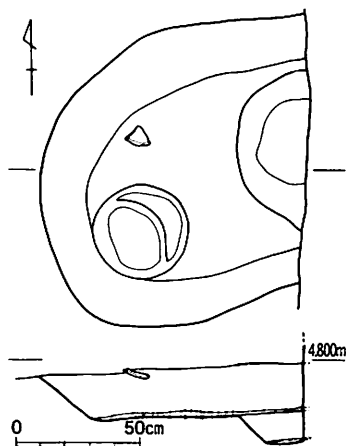
A-SP 113 (第2-37図)

A-SP 113はA-SK 112のほぼ中央部に掘り込まれた柱穴である。規模は直径約50cmで、深さはA-SK 112の床面から10数cmで、浅い。出土遺物は第2-38図2に図示したクロ成形による在地系土師質土器の坏があるが、小破片である。

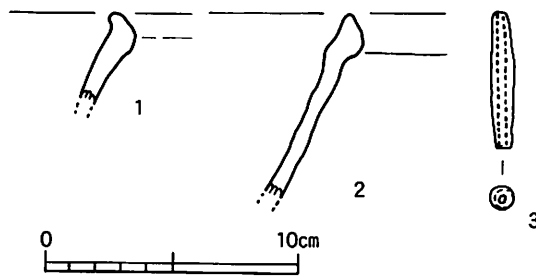
底部近くの器壁が厚く、口縁端部が尖る形態は、A-SK1505出土の在地系土師質土器と類似しており、時期は14世紀末から15世紀前葉の可能性が強い。

A-SP 114 (第2-37図)

A-SP 114はA-SK 112とA-SP 113と切り合う柱穴である。検出面での遺構の規模は、直径約85cmの円形を呈し、深さは約60cmで、床面の規模は約55cmで平坦である。出土遺物は第2-38図3~6であるが、4は器面に篋磨きが認められ、古代土師器の坏の可能性が強いが、3・5は非ロクロ系土師



第2-35図 A-SK102実測図

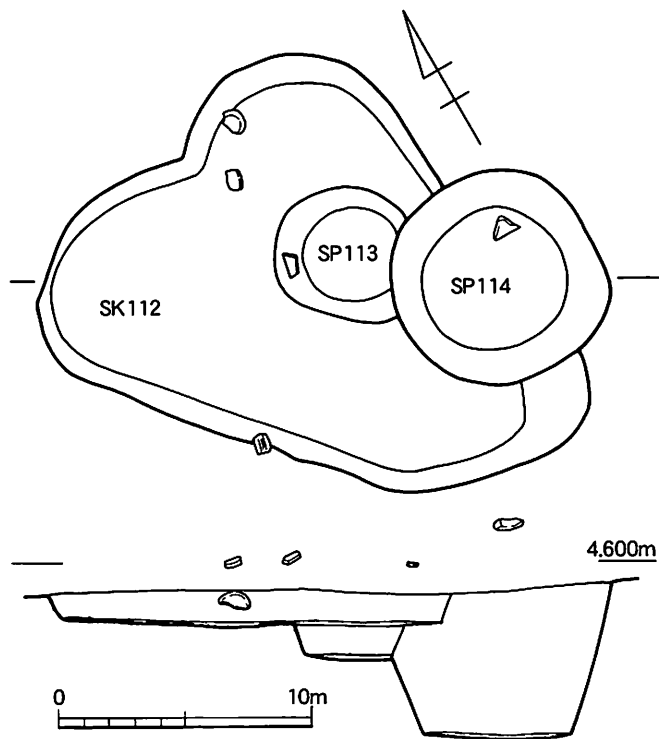


第2-36図 A-SK102出土遺物実測図

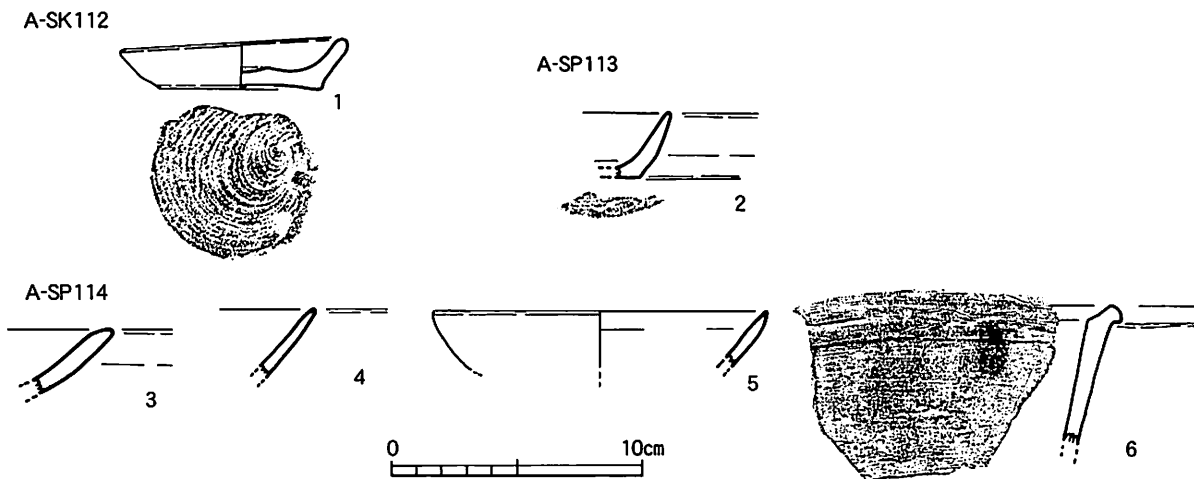
第2節 遺構と遺物

質土器である京都系土師器である。5は復元口縁13.2cmで、3ともども、器面は横方向の撫で仕上げである。6は口縁部を外側に屈曲する土鍋である。器面は外面が横方向に刷毛目で調整され、外面は撫でによる平滑な仕上げで、指圧痕も残る。

以上、A-SK112・A-SP113・A-SP114の3遺構の前後関係は、発掘調査時点では把握できなかったが、出土遺物から見ると、A-SK112・A-SP113は14世紀後半から15世紀初頭の可能性が強いが、A-SP114は京都系土師器が出土しており、16世紀後葉から末葉である。このことから、A-SK112・A-SP113の2遺構の前後関係はなお不明であるが、最後にA-SP114が掘り込まれたことになる。



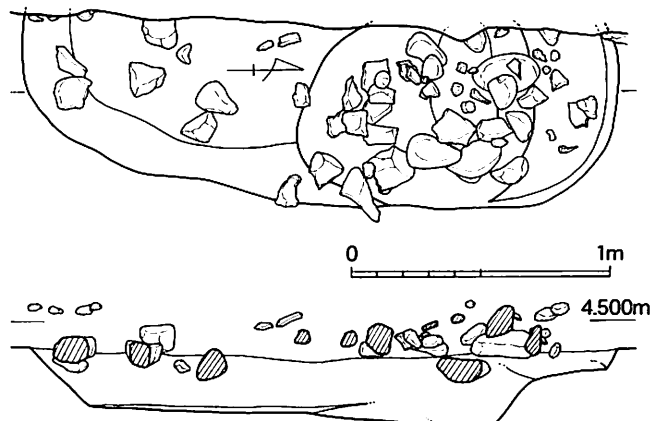
第2-37図 A-SK112・A-SP113・A-SP114実測図



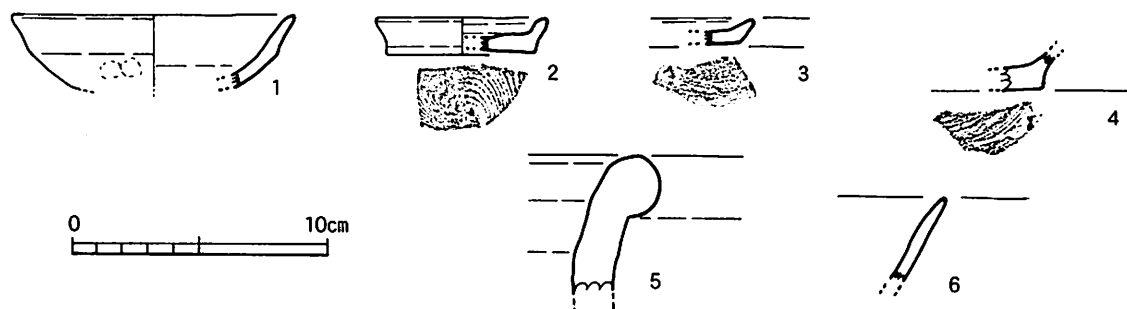
第2-38図 A-SK112・A-SP113・A-SP114出土遺物実測図

A-SK1010 (第2-39図)

A-SK1010はK-40の調査区西側で検出された遺構である。遺構の全体の形態を把握することは出来なかったが、調査できる部分を完掘した結果、遺構は二つの掘り込みから構成されることが判った。しかし、その時点までひとつの遺構としてとらえていたため、ここではひとつの遺構として報告を行う。ただこの二



第2-39図 A-SK1010実測図



第2-40図 A-SK1010出土遺物実測図

つの遺構の前後関係は、土層や遺物の出土状況からとらえることができた。

遺構はまず、南北約1m、東西約0.7mで深さ約0.3m、底面が南北約0.3m、東西約0.6mの南側が緩やかな斜面になる土坑が掘り込まれる。その後、南北約2.4m、東西約0.7m、深さ約0.25mの土坑が掘り込まれ、その底面はほぼ平坦であるが、北側が浅くなり、南北約2.1m、東西約0.6mの規模である。この後で掘り込まれた土坑には人頭大から拳大の石が多量に投げ込まれて、埋め立てられている。

出土遺物は第2-40図に図示したが、1は口径11.2cmの京都系土師器である。内外面撫で仕上げで、外面には指跡が残る。2～4はロクロ成形による在地系土師質土器で、2・3は皿である。2は口径6.8cm、底径6cm、器高1.5cmで、3も同じ器形である。4は、大きさから推定すると坏と考えられる。5はほぼ直立する口縁部の先端が玉縁状に肥厚する備前系陶器の壺である。6は撫で仕上げの薄い口縁部の資料であるが、器壁や形態から古代の土師器の坏と考える。

備前系

以上がA-SK1010であるが、二つの遺構の前後関係はわかるものの、時期については明確ではない。出土遺物も、図示したもの以外に龍泉窯系青磁の小片や、30点近いロクロ成形による在地系土師質土器が出土している。しかし、これらの中に16世紀後葉から末葉の京都系土師器が出土していることから、最終的な遺構の掘り込みはその時期と考える。

#### A-SK 1012 (第2-44図)

A-SK 1012はK-40区で検出された土坑で、先に報告したA-SK 1010の南東に約1m離れた場所にある。規模は上面の長軸が1.35m、短軸が約1mで、卵形をしている。深さは約35cmで、底面は平坦で長軸が1.2m、短軸が約0.9mである。

遺物は、備前系陶器や須恵質土器・瓦質土器など7点が出土したが、図示できるほどの良好なものはない。また、時期を知る手がかりとなる土師質土器は出土しなかった。

#### A-SK 1013 (第2-42図)

A-SK 1013は府内町跡20次調査区を南北に貫くA-SD 1506のK-40区の西側に接する位置で検出された。この遺構も、検出時の規模は南北約3.5m、東西約2.2mの楕円形をしており、ひとつの遺構と想定して掘り下げを行った。しかし、結果的には少なくとも3つの土坑が重なり合う遺構であることが判った。しかも、これらの遺構の前後関係は調査中に明確に把握することは出来なかった。遺構を掘り込みが浅い順に報告すると、最初に検出した規模とほぼ同じの南北約3.5m、東西約2.2mの楕円形をした土坑がある。この土坑は深さが15cm～20cmと浅く、底面も平坦でその規模も南北3.1m、東西約1.8m程度と想定出来る。次に、この土坑の南寄りに南北約1.5m、東西約1.8m、深さ約55cm、平坦な底面の規模が東西約0.9m、南北約1mの掘り込みがあることが判明した。さらに、



第2節 遺構と遺物

この土坑の北側と重複して上面が径約0.9mで、二段堀になった最深部までの深さ0.8mの土坑が確認され、この土坑の最深部周辺から出土した遺物はA-SK1013 (A) として取り上げている。

銅銭

出土した主要遺物は第2-41図の銅銭と第2-43図に図示したものである。銅銭は、真書体で書かれた「政和通寶」で初鑄造年は1111年（北宋）である。

瀬戸美濃系

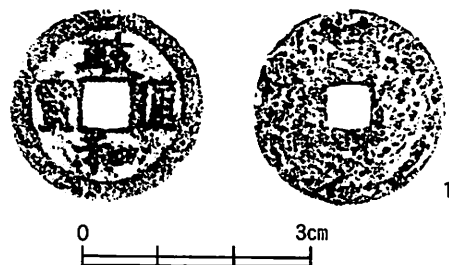
第2-43図2は小片であるが青磁の瓶と考える貿易陶磁器である。3は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。4～6は備前系陶器の播鉢である。4は口径26.1cmで、口縁端部がわずかに肥厚する。内面には7本の播り目が口縁部に直角に入れられている。5もほぼ同じ器形であるが、4よりも口縁端部の肥厚は明確になる。口径は25.2cmで、内面の播り目は明瞭ではない。6は口縁部が立ち上がる口径27.6cmの播鉢である。内面の播り目は斜めに入れられている。色調は4・5が灰色・灰褐色をしているが、6は海老茶色をしている。7はロクロ成形の在地区土師質土器の坏で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。

備前系

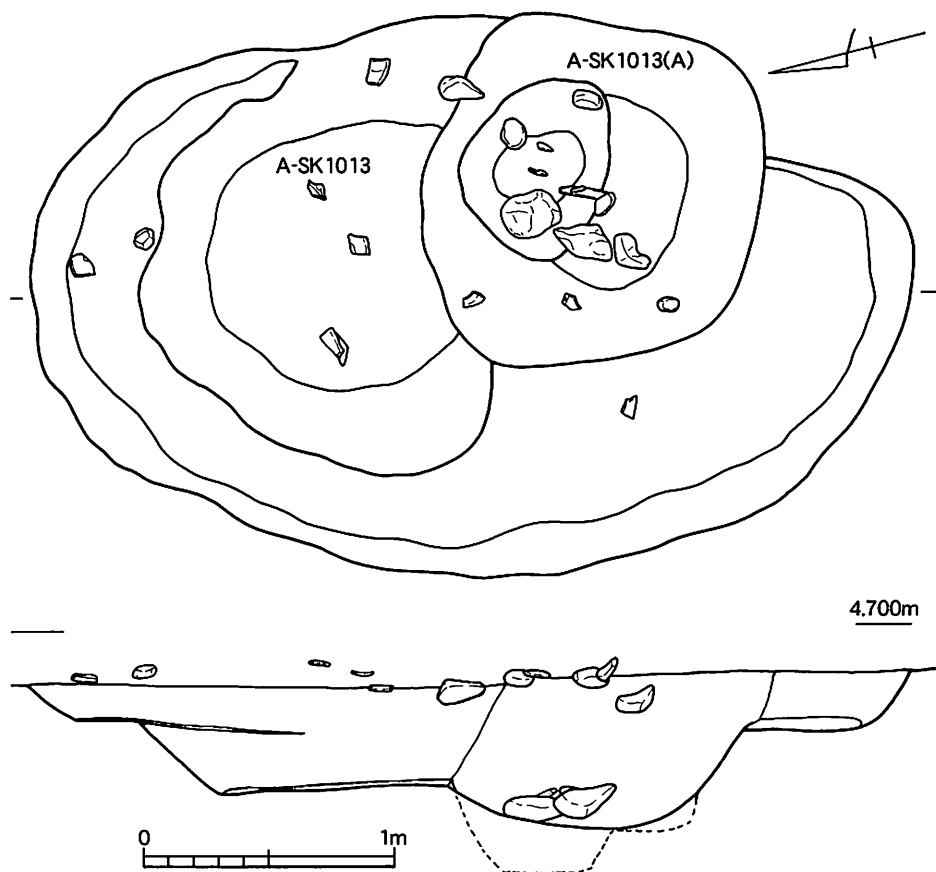
8～13は京都系土師器である。口径は8が9.4cm、9は12cm、10は11.8cm、11は12.2cm、13は11.6cmである。8～11は皿であるが、12・13は器高が高く、坏状になる。なお7～9・12は最深部を持つ土坑であるA-SK1013 (A) からの出土である。

土鍋

14～16は瓦質土器である。14は口縁部外側に長く突き出た突帯が巡る、鏝付の土鍋である。また、15は口縁部が屈曲する土鍋で、内面には横方向に刷毛目が入れている。16は、内湾する胴部に直口する口縁部が付き、端部は肥厚し、口唇部は平坦に仕上げられている。口径は35.8cmで、器面調整は胴部から口縁部周辺



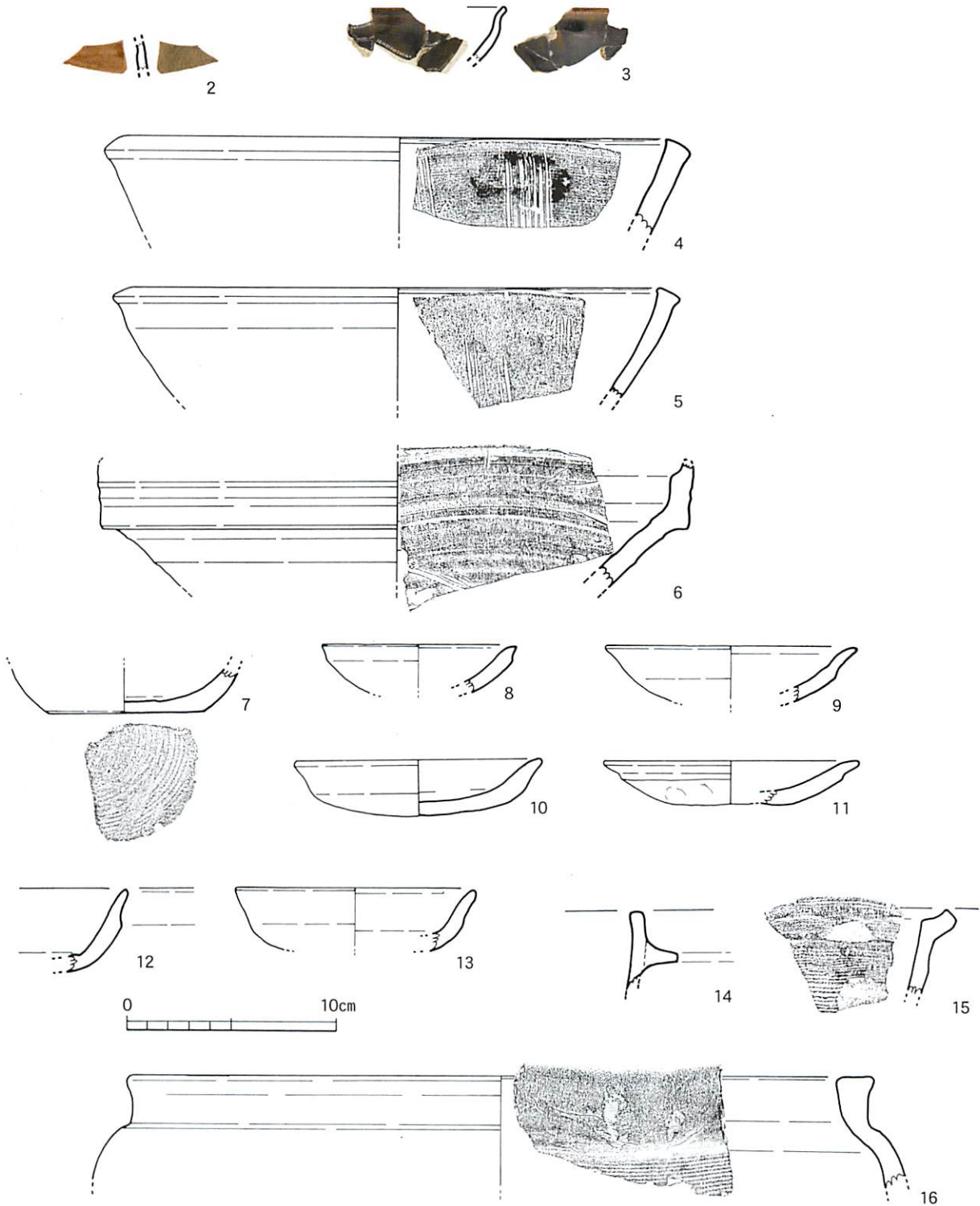
第2-41図 A-SK1013出土銅銭実測図



第2-42図 A-SK1013・A-SK1013 (A) 出土遺物実測図

は横方向の撫で仕上げで、胴部内面は横方向の刷毛目が認められる。色調は暗灰色である。

以上の状況から、この3つの掘り込みが重複する土坑は、最深部を持つ土坑であるA-SK1013 (A) が、16世紀後葉の可能性が強い。またこれ以外の土坑についてもロクロ成形の在地系土師質土器の出土が少なく、京都系土師器の出土が目立つ。また、図化はしていないが、景德鎮窯系や漳州窯系の小破片の青花が他の土坑に比較すると多く出土している。このことから、他の2つの土坑も16世紀後葉から末葉の可能性が強いと考える。



第2-43図 A-SK1013出土遺物実測図

A-SK1014 (第2-44図)

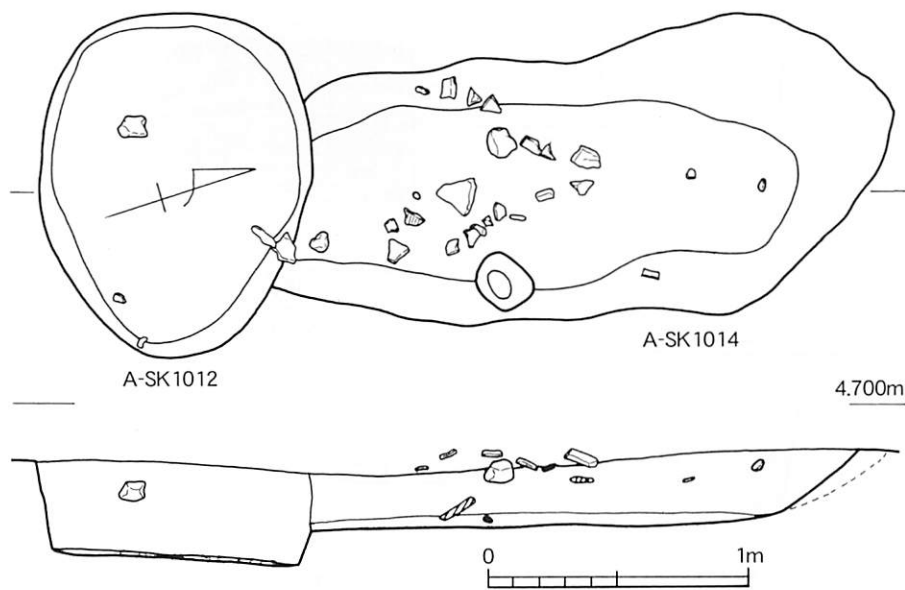
A-SK1014はA-SK1012の北側に切り合った状態で検出された。このため、先に報告したA-SK1010の東側に約1m離れて同じ方向に平行して掘り込まれた、ほぼ同規模の土坑である。土坑の規模は、南側は不明であるが南北約2.5m、東西約1mで、深さは28cm前後である。底面はほぼ平坦で、南北約2m、東西約0.7mである。床面に東側の壁際で、直径20cm、深さ30cmの柱穴を検出したが、この土坑との前後関係は不明である。

出土遺物は、貿易陶磁では景德鎮窯系青花碗や龍泉窯系青磁碗、備前系陶器・瓦質土器等が出土しているが小片が多く、第2-45図に景德鎮窯系青花碗を図示した。この資料は、口径7.4cmで、高台を欠く器高は4.8cmである。第2-46図は薄緑色のヒスイ製の玉である。上面径1.83cm、高さ1.55cm、幅1.35cmで、孔の径は0.5cmである。

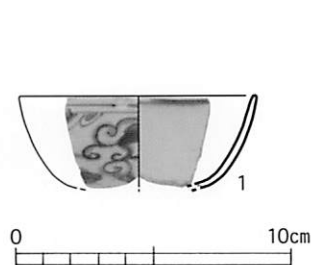
遺構の時期は、第2-45図の出土遺物から16世紀後葉と末葉と考える。

A-SP1017 (第2-47図)

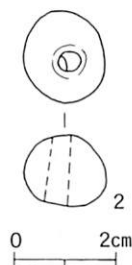
A-SP1017は、L-41区のア-SK1506の上面で検出された遺構で、この溝が埋め立てられた後に掘り込まれている。その規模は、南北2.04m、東西1.7mで深さは0.37mである。底面はほぼ平坦で南北1.26m、東西1.5mである。この遺構が埋め立てられた後に、上面には拳大の川原石が東西方向に並べられている。



第2-44図 A-SK1012・A-SK1014実測図



第2-45図 A-SK1014  
出土遺物実測図



第2-46図 A-SK1014出土玉類実測図

磁竈窯系  
瀬戸美濃系  
備前系

出土遺物は、第2-48図に図示した。1は磁竈窯系の鉢の碎片である。2は、瀬戸美濃系の皿で、底部外面が露胎である以外はオリーブ色の釉薬がかかる。口径10cm、高台の底径5.6cm、器高2.6cmである。3・4は備前系陶器である。3は播鉢で、口縁部内面には凹線状の段が付く。内面に播り目が僅かに見られる。

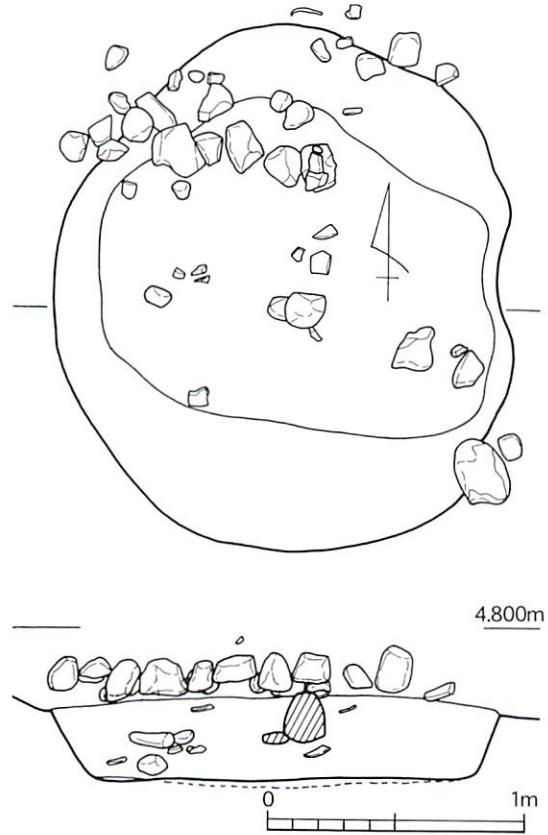
「井」の字

4は徳利状の器形である。口縁部を欠くが、高さ約12cmほど残り、底径は6.8cmで、底部外面の中央部に「井」の字状のヘラ記号が書かれている。

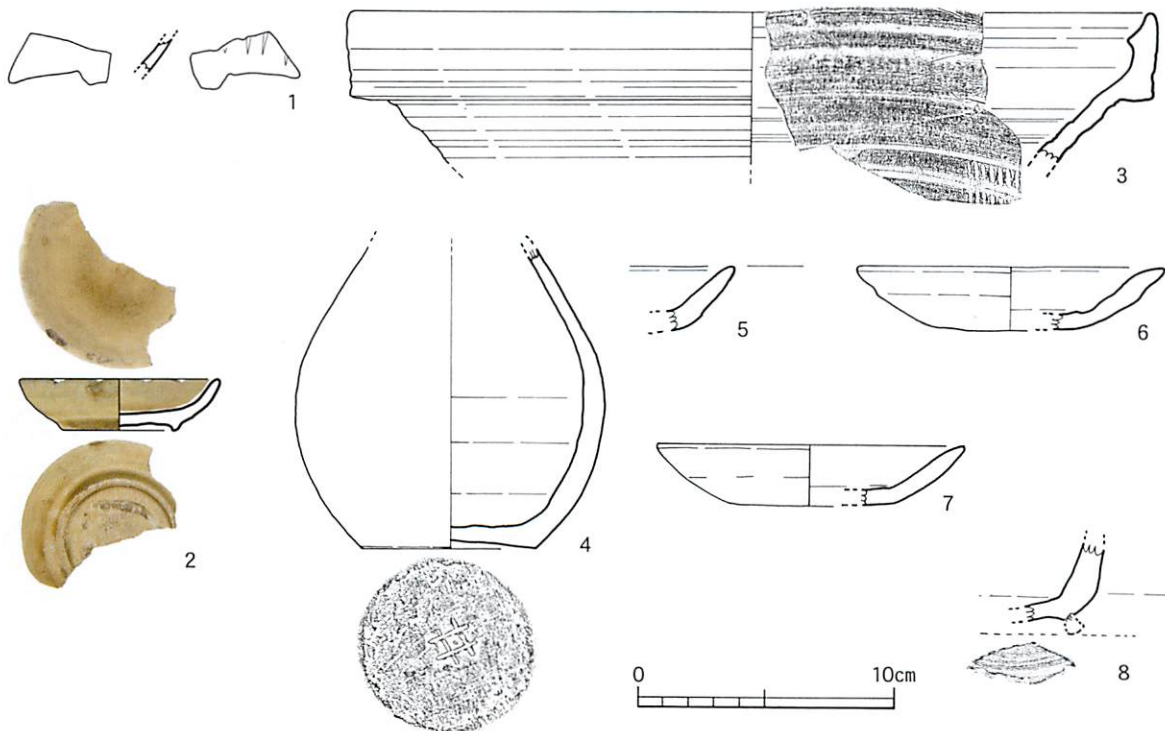
5～7は非ロクロ系の土師質土器である京都系土師器の皿である。5の口径は不明であるが、6・7は口径12cmである。器高は6が2.6cm、7は2.4cmである。これらは、器壁が厚く、中世大友府内町跡出土の京都系土師器の中でも新しい傾向を見せる。

8は、須恵質土器の小片である。高台は破損しており不明である。古代の遺物と考える。

この遺構の時期は京都系土師器が出土することから16世紀後半であるが、同じ時期の溝の上に構築されているという切り合い関係から、溝より新しいことが明らかである。備前系陶器の播鉢の形態や京都系土師器の器壁が厚いことから、16世紀後葉から末葉と考えられる。



第2-47図 A-SK1017実測図



第2-48図 A-SK1017出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

A-SK1018 (第2-49図)

A-SK1018は調査区の西際のK-39区で検出された土坑で、A-SK1036とA-SP1035と切り合う。A-SK1018は南北方向に長い楕円形の平面観を見せ、長軸である南北方向に2.3m、東西方向に1.4mで、深さは0.7mを測る。底面の状況はほぼ平坦で、規模は南北方向が1.4m、東西方向は約0.8mである。この遺構の東北部にはA-SK1036が検出され、南西側でA-SP1035が検出された。

備前窯系  
常滑系

出土遺物は第2-50図に図示したが、1は備前系陶器の鉢で器形は口縁が内湾し、胴部は球状に張る。外面底部はヘラ削りで仕上げられている。2は常滑系陶器の甕である。3はロクロ成形による在地系土師質土器である。

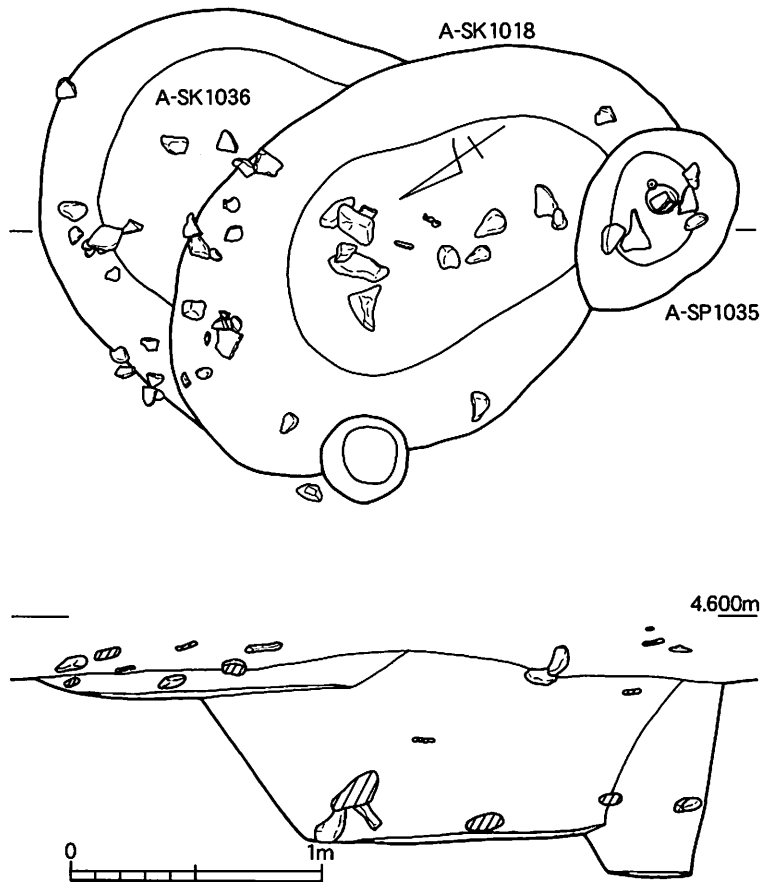
口径は7.6cm、底径6.6cm、器高0.9cmの皿である。4は瓦質土器の鏝付の土鍋の口縁部である。5はフィゴの羽口で、内径は約3cmが想定される。

フィゴ羽口

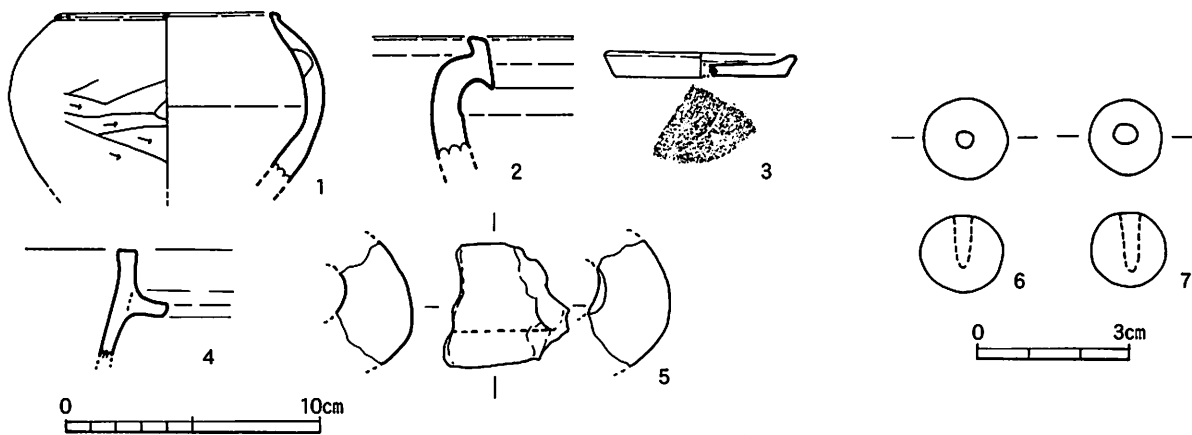
土玉

6・7は土玉であるが、穿孔は貫通していない。6は1.5×1.7cmの球形で、3.6gを測る。7も1.5×1.4cmの球形で、2.7gを測る。

時期は良好な資料はなく、14世紀代の遺物も含むが、1の備前系陶器の鉢は、新しい器種であり、これを軸に考え、16世紀後葉から末葉ととらえておく。



第2-49図 A-SK1018・A-SP1035・A-SK1036物実測図



第2-50図 A-SK1018出土遺物実測図

A-SK1019 (第2-52図)

A-SK1019は調査区の南端、L-41区で検出された土坑で、A-SD1501と切り合う。遺構の規模は南北約1.8m、東西1.6mで、深さは約0.5mである。床面はほぼ平坦で、南側には焼土面がある。床面の規模は南北1.5m、東西1.2mである。

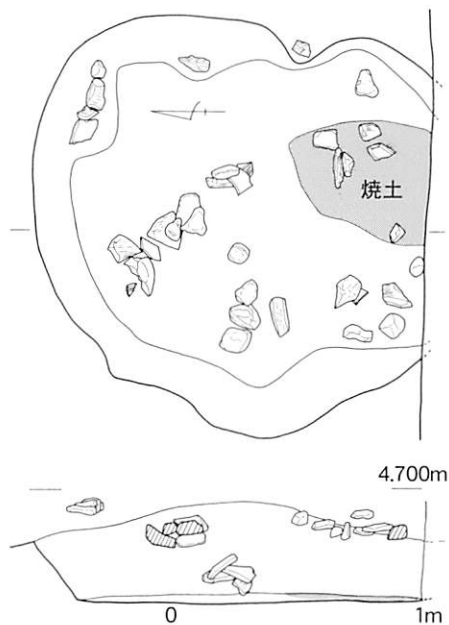
出土遺物は、第2-51・2-53図に図示した。1~6はロクロ成形による在り系土師質土器である。法量の判る2は口径8.8cm、底径6.6cm、器高1.6cmで、6は口径8cm、底径6.6cm、器高1cmである。1・2・6は皿であるが、3~5は坏で、5の口径は11.4cmで、器高は3と共に3.3cmである。7・8は京都系土師器で8の口縁端部にはススが付着している。9は口径21cmの須恵質土器の鉢である。10は土師質土器の甕で、11は瓦質土器の火鉢で、底部近くの細い二条の平行突帯の間には「横S字文」の2単位のスタンプが押されている。12は石臼の縁である。第2-51図の銅銭は初鑄年が1078年(北宋)の「元豊通寶」である。

以上の遺物から、この土坑の時期は15世紀前半の遺物を含むが、A-SD1501を切ることや、京都系土師器を含むことから16世紀後葉から末葉と考えられる。

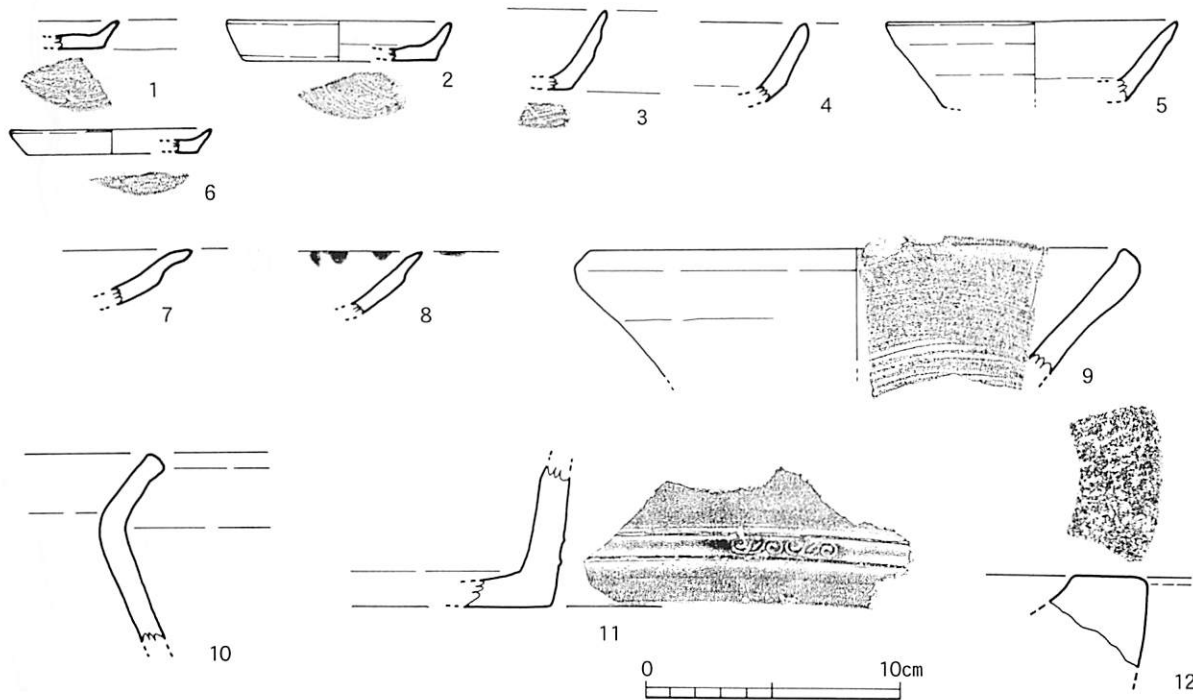
石臼  
銅銭



第2-51図 A-SK1019出土銭実測図



第2-52図 A-SK1019実測図



第2-53図 A-SK1019出土遺物実測図



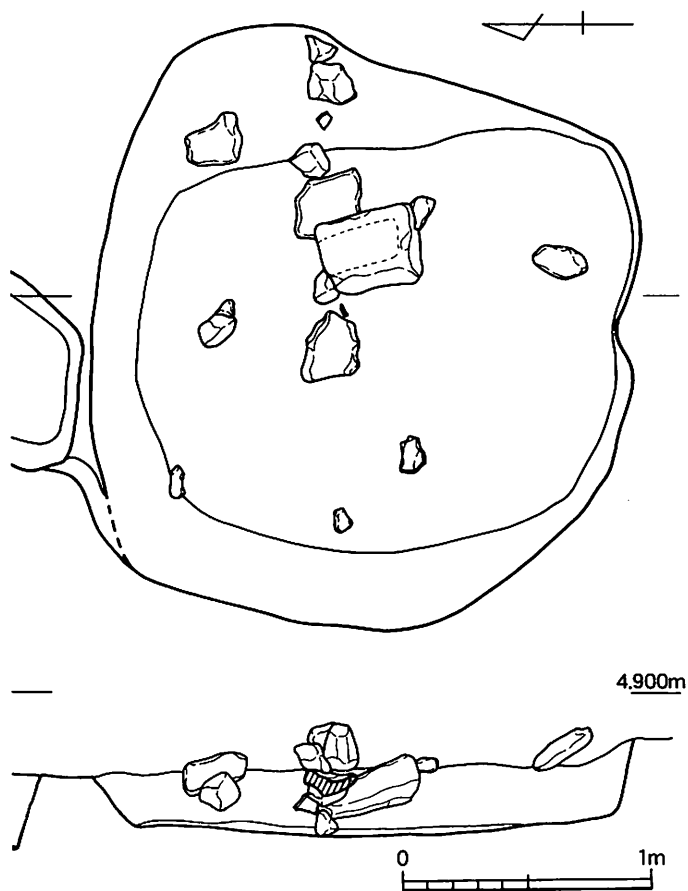
## 第2節 遺構と遺物

### A-SK1023 (第2-54図)

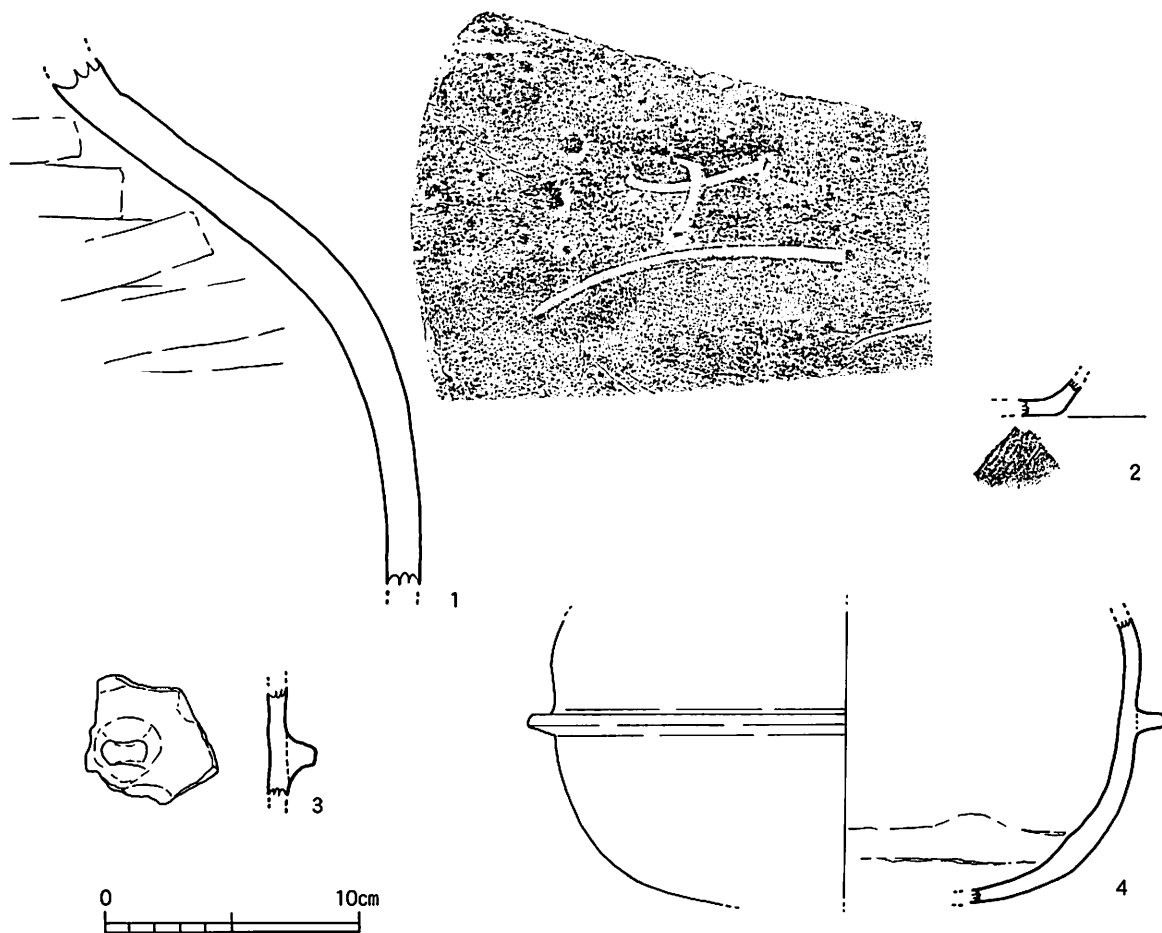
A-SK1023は調査区のほぼ中央、L-40区で検出された土坑で、南北2.1m、東西2.3m、深さ約0.4mを測り、床面は南北1.8m、東西1.6mで、ほぼ平坦である。

備前系 出土遺物は多くないが、第2-55図に図示した。1は備前系陶器の大甕で、肩部に「土」の文字「ひねり土」が見られ「ひねり土」の一部であろう。2はロクロ成形による在地系土師質土器である。3は土師質土器のつまみであるが、器種は不明である。4は胴部最大径部に鏝が巡る瓦質土器の茶釜と考えられる。鏝での復元径は約25cmである。

この遺構の時期は、1の備前系陶器の大甕が出土していることから16世紀後葉から末葉と考える。

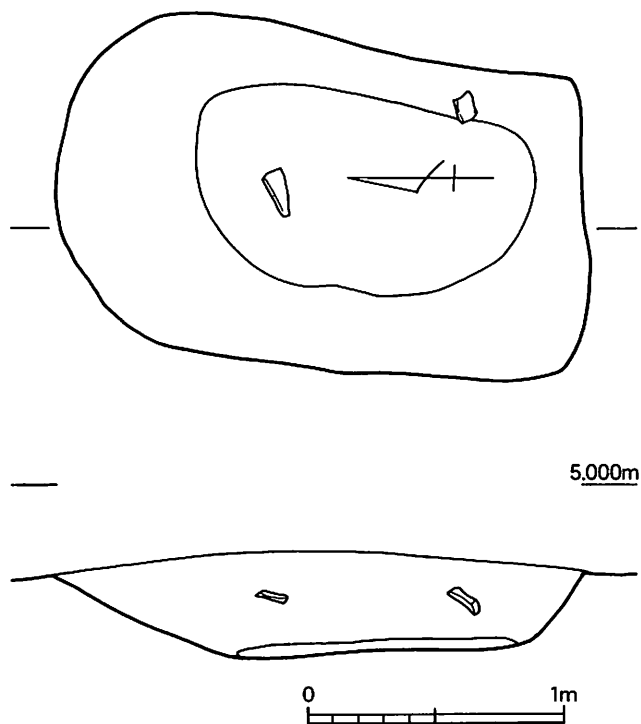


第2-54図 A-SK1023実測図



第2-55図 A-SK1023出土遺物実測図

**A-SK1026 (第2-56図)**  
 A-SK1026は、A-SK1023の南東に約50cm離れて検出された小規模な土坑である。規模は南北2.1m、東西1.2mで、深さは0.4mで、底面の規模は南北1.4m、東西0.8mである。  
 出土遺物は少なく、小破片であったため、図示はしておらず、時期を想定することも出来なかった。

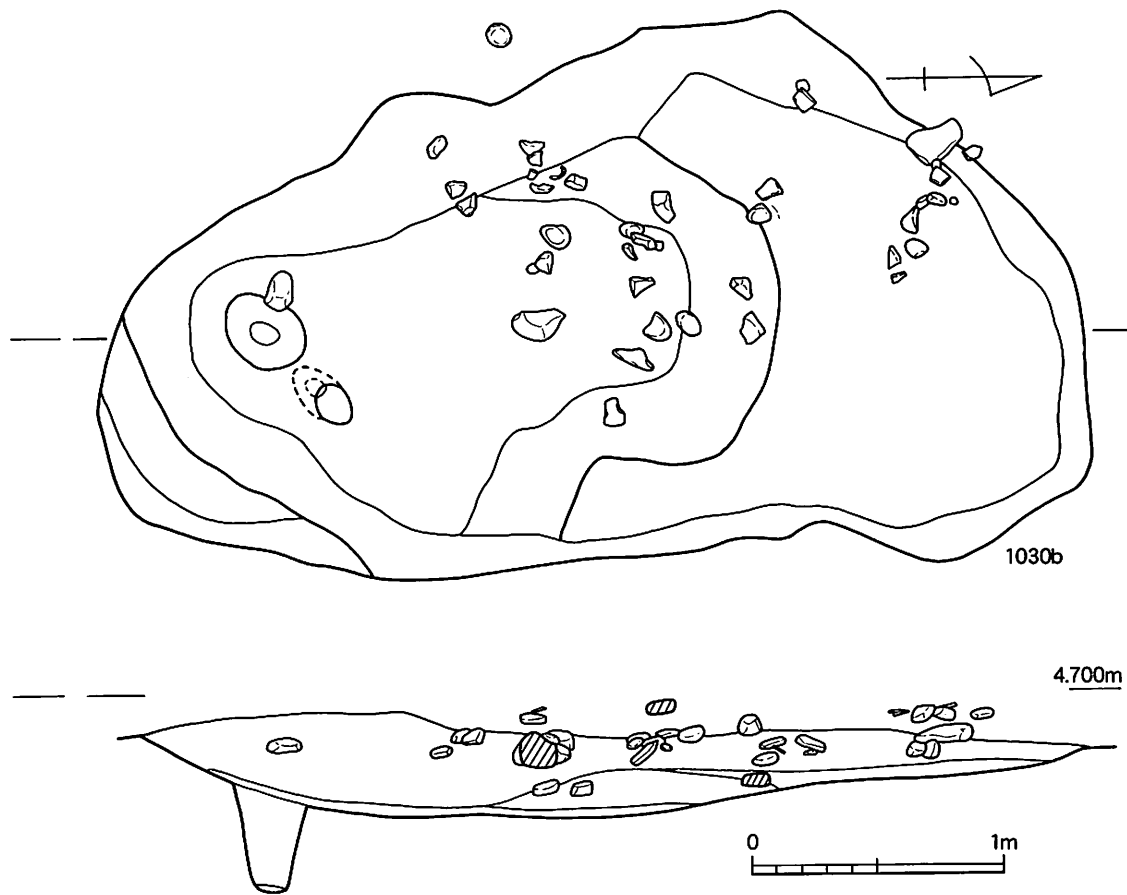


第2-56図 A-SK1026実測図

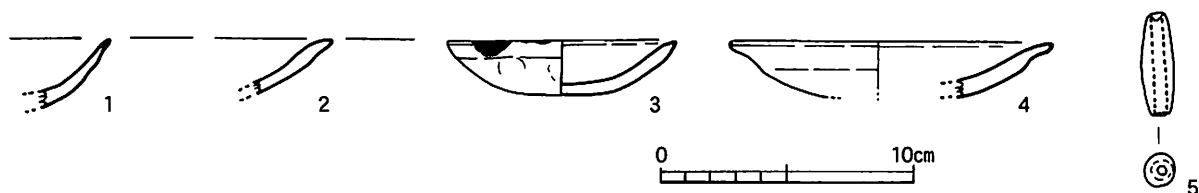
第2節 遺構と遺物

A-SK1030 (第2-57図)

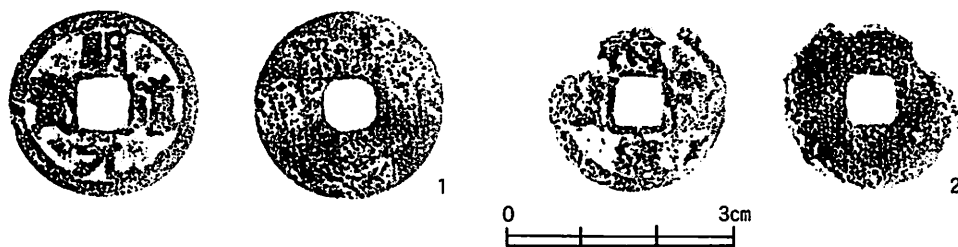
A-SK1030は調査区の西壁沿いのK-30区で検出された南北に長い楕円形の土坑である。検出面の規模は南北約4m、東西約2.1mで、床面の形状は緩い二段掘り状になり、北から南にかけて深くなる。最深部の深さは約40cmである。遺構の南端で直径約30cm、深さ約40cmの柱穴を検出した。



第2-57図 A-SK1030実測図



第2-58図 A-SK1030出土遺物実測図



第2-59図 A-SK1035出土銭実測図

土錘

出土遺物は、第2-58図に図示したが、1~4は京都系土師器である。法量が判る3と4は、口径が9cmと13.8cmであり、3の器高は2.1cmで、口縁部周辺にはススが付着している。5の土錘は、長さ4cm、直径1.2cm、重さ6.3gで、紡錘形をしている。

この遺構の時期は、図示した以外にも京都系土師器が多数出土しており、16世紀後葉から末葉と想定できる。

A-SP1035 (第2-49図)

A-SP1035はA-SK1018の南西部で切り合うように掘り込まれた柱穴である。上面の直径は、0.8mが想定され、深さも約0.8mである。底面の径は約0.45mで、柱穴としては規模が大きい。

銅銭貼付

出土遺物は、備前系陶器や瓦質土器がわずかに出土したのみであるが、2点の渡来銭が出土している。この2枚の銅銭は貼り付いた状態で出土した。第2-59図に図示したものであるが、1は真書体で書かれた「明道元寶」で、1032年(北宋)に初鑄造されたもので、直径2.5cmで2.7gである。2は真書体で書かれた「皇宋通寶」で、1038年(北宋)に初鑄造されたもので、直径2.4cmで1.4gである。

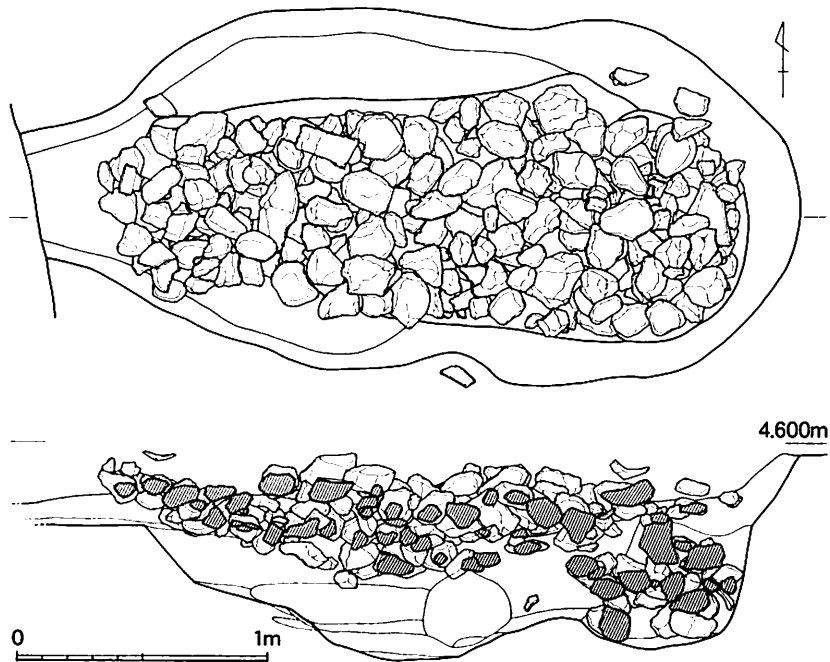
A-SK1036 (第2-49図)

A-SK1036は、A-SK1018の東北部で重なり合って検出された土坑であるが、A-SK1018にほとんど切り込まれているため、全体の形状や規模を把握することは出来ない。残された遺構の規模は、南北が約1.6m程度、東西が1.5m以上あり、深さは10cm程度で、平坦な床面に達する。

出土遺物は、極わずかであるが、景德鎮窯系青花碗が出土しており、16世紀後半の可能性が強い。

A-SK1039 (第2-60図)

A-SK1039は遺構の西端が調査区の西側の壁にかかる状態で検出された。検出面での遺構の規模は南北約1.5m、東西約3mあり、拳大の礫が充填されていた。実測図を見ると、この礫群は遺構の上部に集中し、東端は底面まで達している。遺構の深さは、約90cmであるが、底面は平坦ではない。数度にわたる掘り返しの結果と考えられる。そして、最後の土坑が礫を充填したものであろう。



第2-60図 A-SK1039実測図

## 第2節 遺構と遺物

出土した遺物は、第2-60図に図示したが、1は頸部の径が約18cmで、一部に白泥釉が観察されるタイ産陶器の四耳壺と考えられる。2は瓦質土器の鉢である。器面は撫でて、口縁部は丸く丁寧仕上げられている。3も瓦質土器で、底部に3ヶ所、脚が付く。底部の径は約18cmで、外面は撫でて丁寧仕上げられているが、内面は多方向の刷毛目で調整されている。器種は火鉢と考えられる。

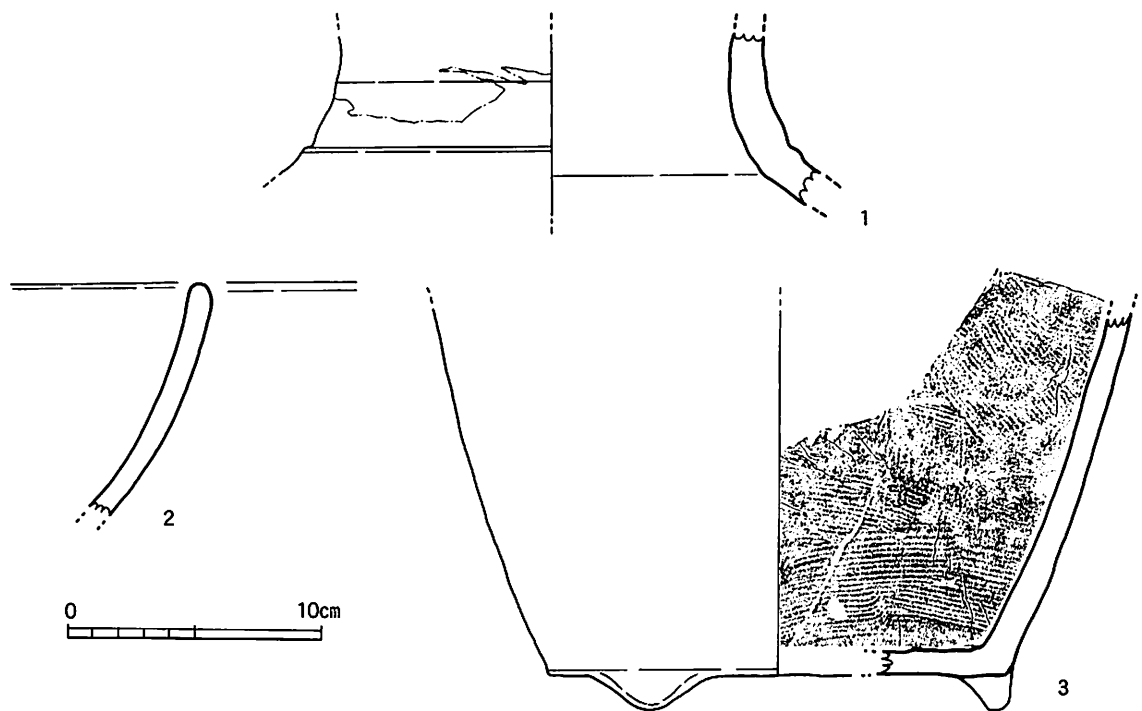
A-SK1039の時期は、図示はしていないが、京都系土師器が出土しており、1のタイ産陶器の四耳壺からも、16世紀後葉と想定できる。

### A-SK1042 (第2-62図)

A-SK1042は、調査区の東北部、M-38区で検出された土坑で、礎盤建物遺構であるA-SB01の北西隅の主柱穴と切り合う。検出時の規模は、南北1.4m、東西2.1mであったが、発掘調査の結果、三段に掘り込まれており、二段目の深さは約30cmで、二段目の底面は東西1.7m、南北1.1m、深さ約40cmである。そして、三段目は二段目の中央部に掘り込まれ、底面の規模は東西0.8m、南北0.45mで、検出面からの深さは約53cmである。

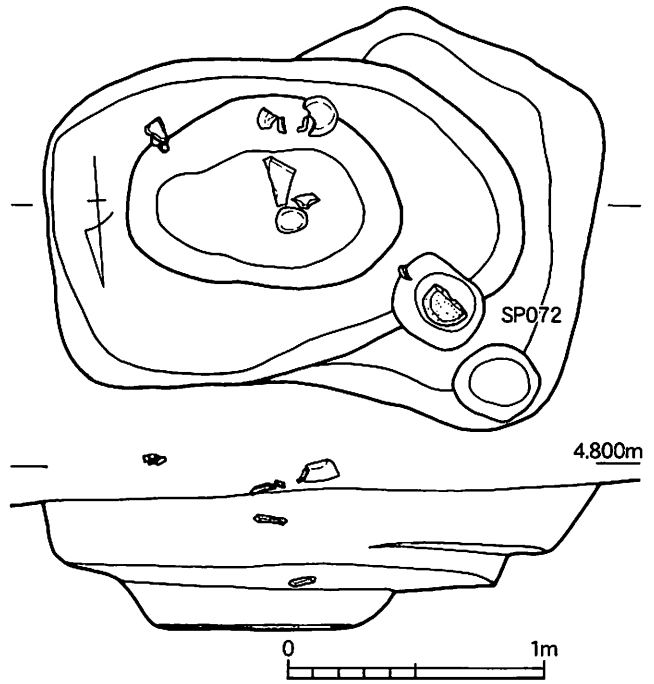
出土遺物は、第2-63図に図示したのが主要なものである。1～6はロクロ成形の在地系土師質土器の坏である。1は口径約12cm、2は口径11.5cm、底径8.4cm、器高2.8cmで底部近くが厚く、口縁端部は尖る。3は口径12.2cm、底径7.6cmで、器高は3.5cmあり、口縁部の立ち上がりはやや内湾する。4は口径12.6cm、底径8.2cm、器高3.2cmで、口縁部中位の器壁が厚い。5は口径12.7cmで、底径7.8cm、器高3.4cmである。6も径12.7cmで、底径7.8cm、器高3.1cmで、2点とも4と同様、口縁部中位の器壁が厚く、口唇部が尖る。

7は口縁部が屈曲する土鍋で、内面は横方向の刷毛目、外面は撫で仕上げである。8は胴部が球状に張り、口縁部が外反する、土師質土器の口径37.6cmの甕である。外面は木目の細かい縦方向の刷毛目、内面は粗い横方向の刷毛目で器面調整されている。

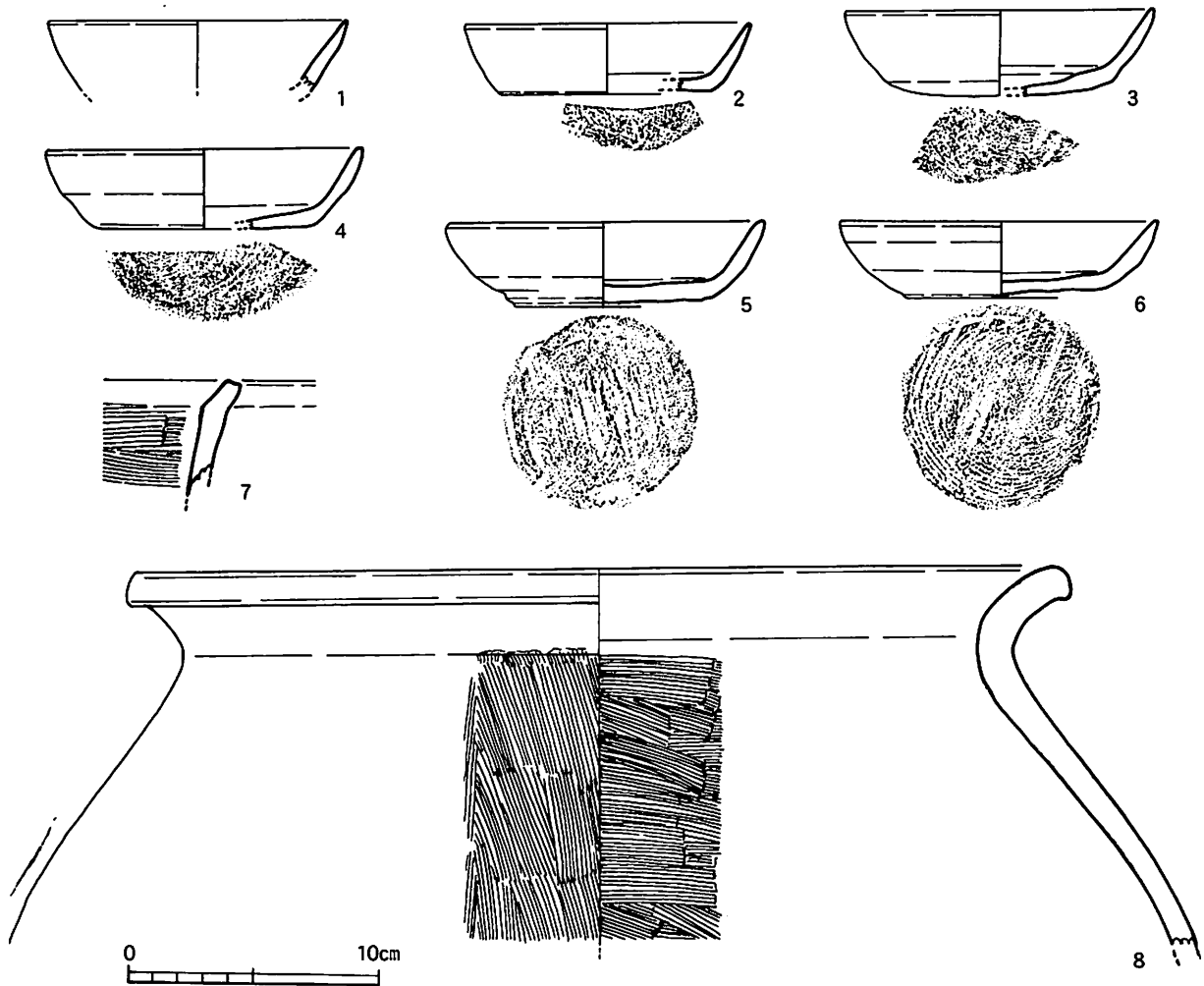


第2-61図 A-SK1039出土遺物実測図

このA-SK1042には、A-SB01の礎盤柱穴であるA-SP072が後で掘り込まれている。しかし、同じ建物の礎盤柱穴であるA-SP026出土の遺物と比較すると、口縁部中位の器壁が厚く、口縁端部が尖るなど、形態に大きな差は認められない。おそらく、14世紀前葉から中葉にかけての、同時期、あるいは極めて近い時期に掘り込まれた土坑であろう。



第2-62図 A-SK1042実測図



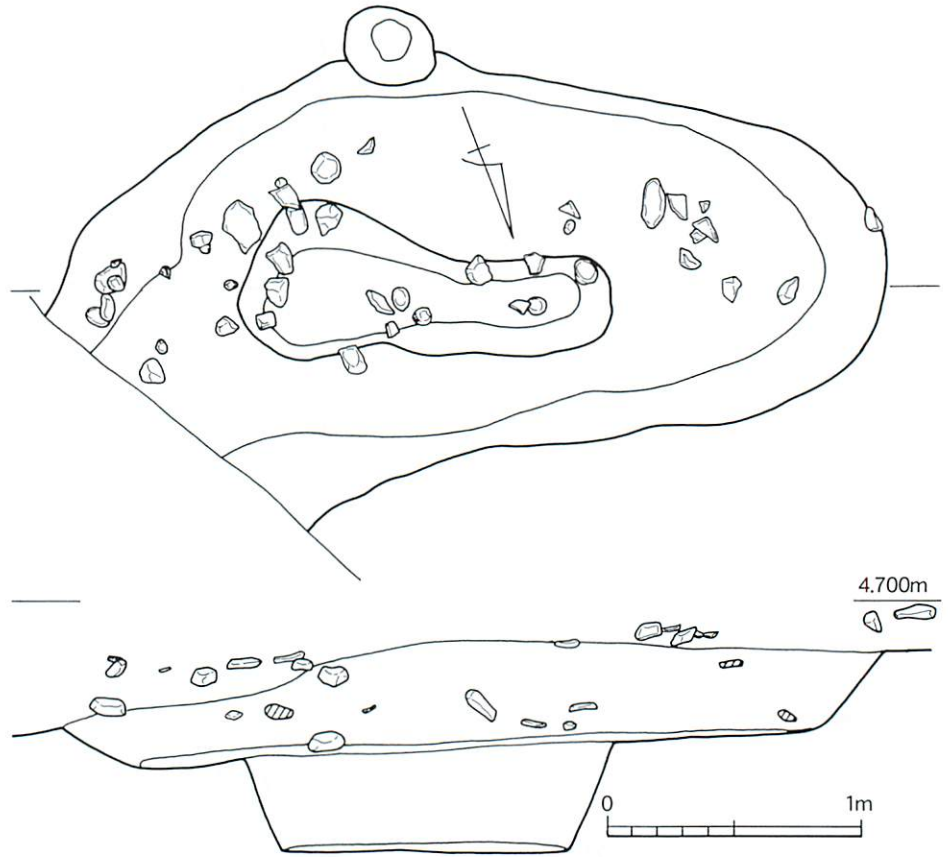
第2-63図 A-SK1042出土遺物実測図



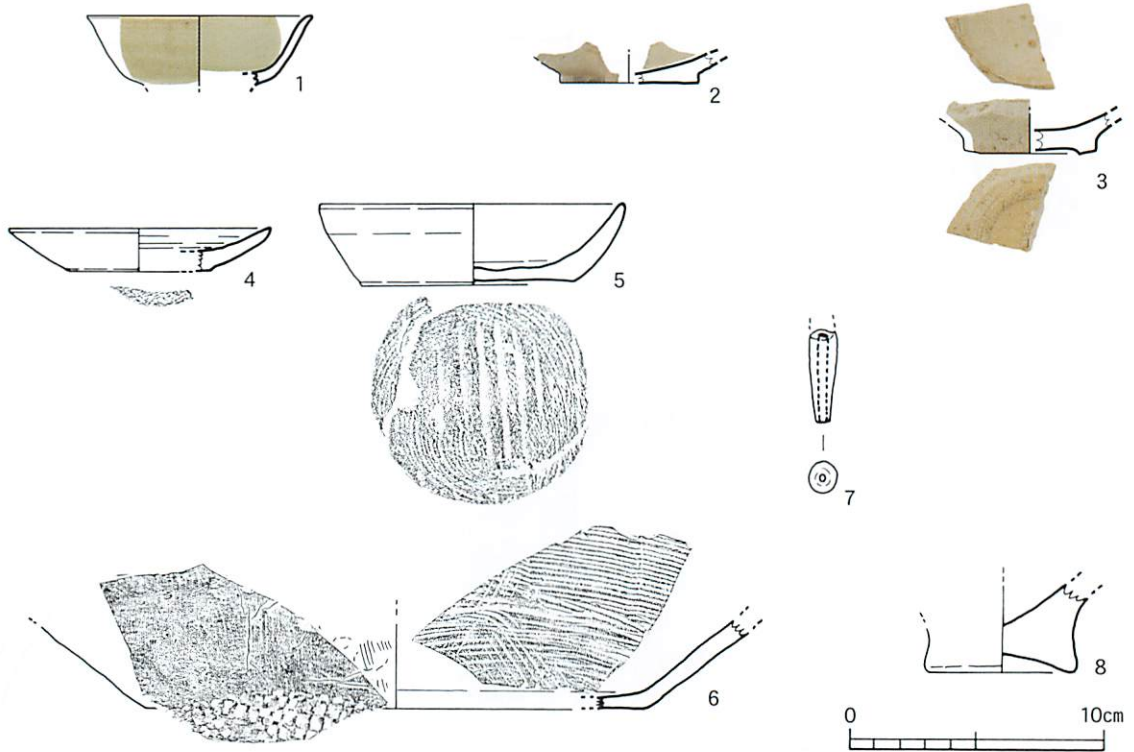
第2節 遺構と遺物

A-SK1043 (第2-64図)

A-SK1043はA-SK1042の約2m南で検出され、A-SB01と切り合う。遺構の規模は、検出



第2-64図 A-SK1043実測図



第2-65図 A-SK1043出土遺物実測図

面では東西3.3m以上、南北約1.5mであったが、発掘調査の結果、この土坑は二段掘りになっており、1段目は深さ約35cmで、底面は東西2.7m、南北1.3mである。二段目は中央部に掘り込まれ、東西約1.2m、南北約0.3mで、検出面からの深さは約0.8mになる。

龍泉窯系  
白磁

遺構からは拳大の礫が多く出土したものの、出土遺物は少なく第2-65図に代表的なものを図示した。1は龍泉窯系の口径13cmの青磁の碗である。3は白磁の碗の底部で、底径は7cmである。4は口径10.4cm、底径5.8cmで、器高1.7cmのロクロ成形の在来系土師質土器であるが、口縁部が「ハ」字状に開き、内面にロクロ回転による段が認められる。5は口径12.2cm、底径8.6cm、器高3.3cmで、口縁部の立ち上がりは底部近くの器壁が厚く、口縁部が尖る。

土錘  
弥生土器

6は瓦質土器の鍋であろうか。底径は19.8cmで、底面は、格子目の叩き、外面は横方向の撫で、内面は横方向の刷毛目で、器面調整されている。

7は半分を欠く紡錘形の土錘である。残された長さは3.8cm、幅1.1cm、重さ3.5gである。

8は底径6cmの弥生時代の甕形土器の底部である。弥生時代中期後葉である。

緑釉陶器

2は底径7.5cmの土師質土器の焼成であるが、器面は緑釉がかけられている8世紀後半から9世紀前半の古代の緑釉陶器である。

以上の遺物から、この土坑の時期は、4や5のロクロ成形の在来系土師質土器に新しい傾向が見られることから、14世紀中葉から後葉と考える。

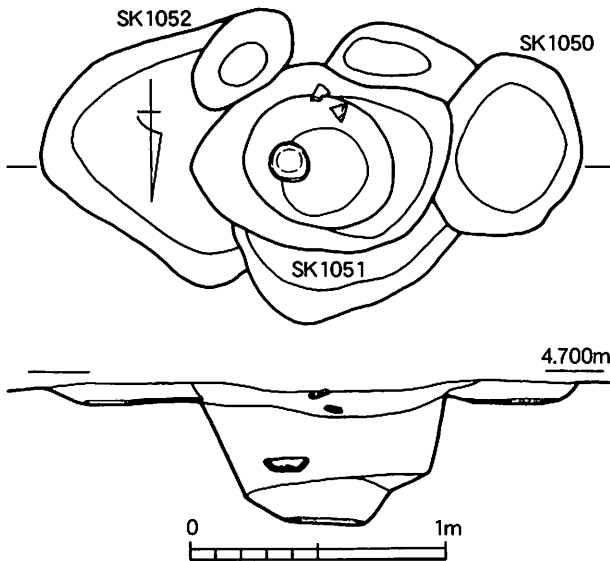
A-SK1050 (第2-66図)

A-SK1050・A-SK1051・A-SK1052は調査区の北側、L-38区で近接、切り合い関係で検出された。A-SK1050は上面が72cm×約60cmであり、深さは7～8cmで、底面は48cm×42cmである。遺構が小さいため、遺物は出土しておらず時期は不明である。

A-SK1051 (第2-66図)

A-SK1051はA-SK1050の東に接して掘り込まれ、上面が東西約1cm、南北約0.7mで、二段掘り状になった底は、検出面からの深さ約54cmである。底面は径約30cmである。

遺構内からは、ほぼ完形品のロクロ成形の在来系土師質土器の坏が出土している。図示したのは第2-67図の1で、同類の土器である。時期は14世紀後半と考える。

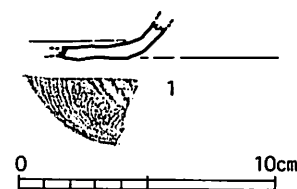


第2-66図 A-SK1050・A-SK1051・A-SK1052実測図

A-SK1052 (第2-66図)

A-SK1052はA-SK1051の東側でと切り合う。遺構の規模は、南北約1m、東西も1m近くあったと思われ、深さは7～8cmである。底面は南北約80cm、東西も約80cm程度と想定する。

遺物は遺構が浅いため、出土しておらず時期は不明である。



第2-67図 A-SK1051出土遺物実測図

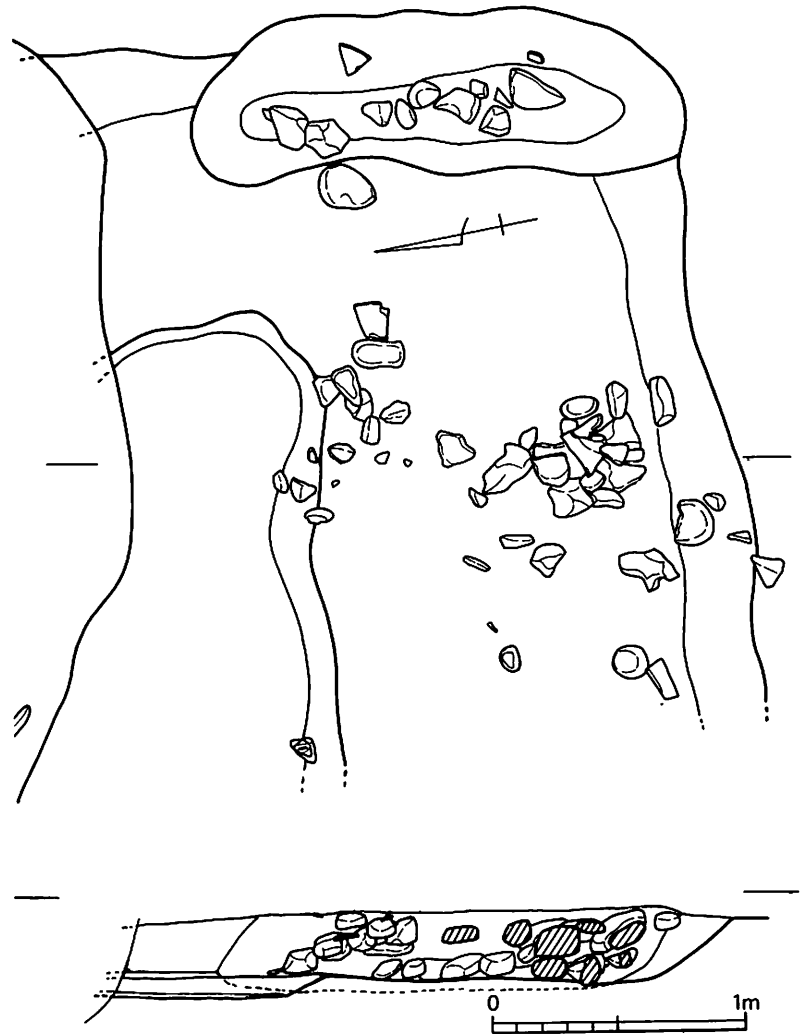
## 第2節 遺構と遺物

### A-SK1056 (第2-68図)

A-SK1056は調査区の中程西側の壁に接したK-40区で検出された遺構である。遺構は、調査区の西側の外から延びて、2.5mが検出された。その検出された遺構の規模は、東西2.5mで、北に延びる方形状で、深さは約30cmであり、中央部にさらに深さ10cm前後の底面が平坦な掘り込みがある。この掘り込みの北側は、先に報告した礫を充填した土坑であるA-SK1039と重複している。このため、南北方向の遺構の規模は不明である。

また、南東隅には南北約2m、東西0.6m、深さ35cmで、底面は南北1.5m東西30cmの細長い土坑が掘り込まれている。この土坑からは遺物は出土していないが、拳大の礫が多数出土している。礫の出土状況から、A-SK1056が埋め立てられた後に掘り込まれた可能性が強い。

A-SK1056は比較的規模の大きな遺構であるが、礫を多く出土するものの、遺物は少なく、須恵質土器や瓦質土器の小破片が出土したのみである。このため、遺構の時期を想定することはできなかったが、遺構の北側でこの遺構を切るA-SK1039は16世紀後葉から末葉と考えており、これよりも古いことは確実である。



第2-68図 A-SK1056実測図

A-SK1058 (第2-69図)

A-SK1058は調査区の中央部、L-40区でA-SD1506と遺構の西側の一部が重なり合った状態で検出された。基本的には、検出面の規模が南北1.3m、東西1.5mであるが、南西側にも浅い掘り込みが見られる。深さは約48cmで底は丸く掘られている。

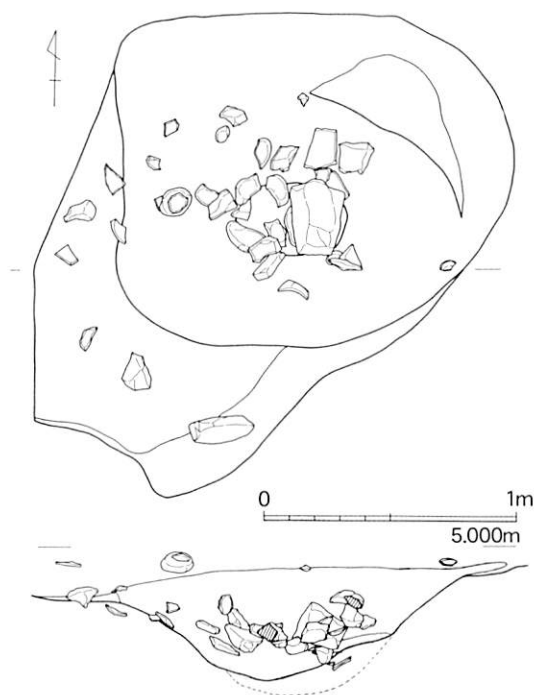
遺物は、第2-70図に図示したが、1はロクコ成形による在地系土師質土器の坏である。2も同様な技法で作成されたものであるが、口径9.4cmの皿に脚を付け、皿の底に焼成前の穿孔が認められる。器高は3.5cmで燭台の可能性が高い。3は瓦質土器の八角形の火鉢と考える。直口する口縁部は肥厚し、口唇部を平坦に仕上げ、角の部分に穿孔が見られる。外面には巴文のスタンプが連続して付けられている。器面調整は横方向のヘラ磨きで、黒色に焼成されている。4はこの火鉢の横断面で、角度が45°で八角形であることが判る。

燭台

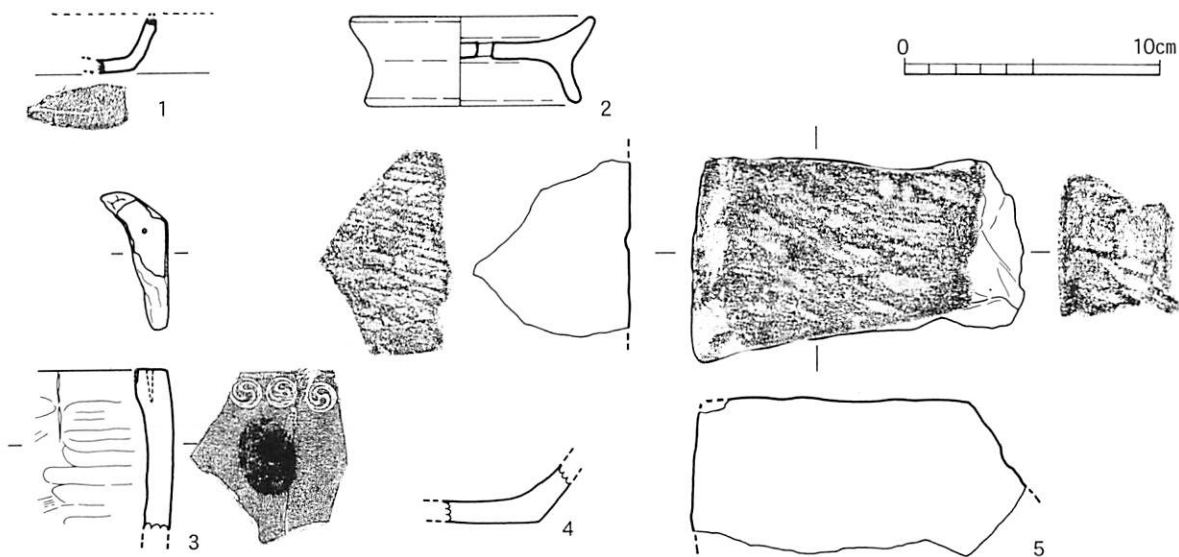
凝灰岩製切石

5は凝灰岩製の切石である。図面の上部・下部・裏面は破損しているが、残りの部分にはノミ跡と思われる加工痕が残り、角度は90°と125°に仕上げられている。

遺物はこの他、白磁や備前系陶器の破片や、須恵質土器・瓦質土器が出土している。これらから、この遺構の時期を推測すると、西側を16世紀後葉の溝で切られていることや、2の古いタイプの燭台が出土していることから、14世紀後半と考える。



第2-69図 A-SK1058実測図



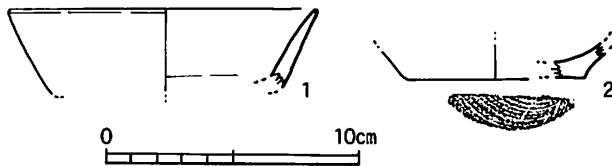
第2-70図 A-SK1058出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

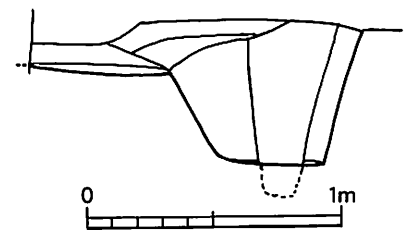
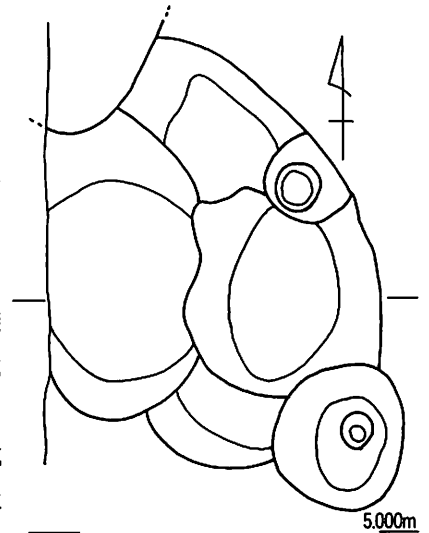
A-SK1059 (第2-72図)

A-SK1059は調査区の南西隅の壁際、K-41区で検出された遺構である。この遺構は検出時には一つと思われたが、掘り下げを行った結果、複数の土坑と柱穴が重なり合うことが判った。しかし、これらの遺構の前後関係を捉えることが出来ず、出土遺物も少なかった。そこで、検出された土坑・柱穴群をまとめて、A-SK1059とした。これらの遺構で、最深のものは、北寄りで検出された直径約40cmのもので、深さ約70cmである。また、その南側にある土坑は底面が南北65cm、東西43cmで比較的大きい。

出土遺物は、第2-71図に図示したが、2点ともロクロ成形による在来系土師質土器の坏である。1は口径12cm、2は底径7.4cmである。時期は、坏の形態から、14世紀中葉から後葉と考える。



第2-71図 A-SK1059出土遺物実測図

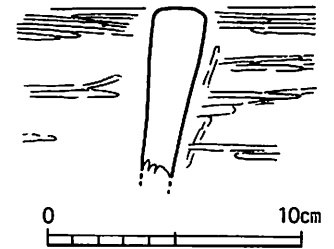


第2-72図 A-SK1059実測図

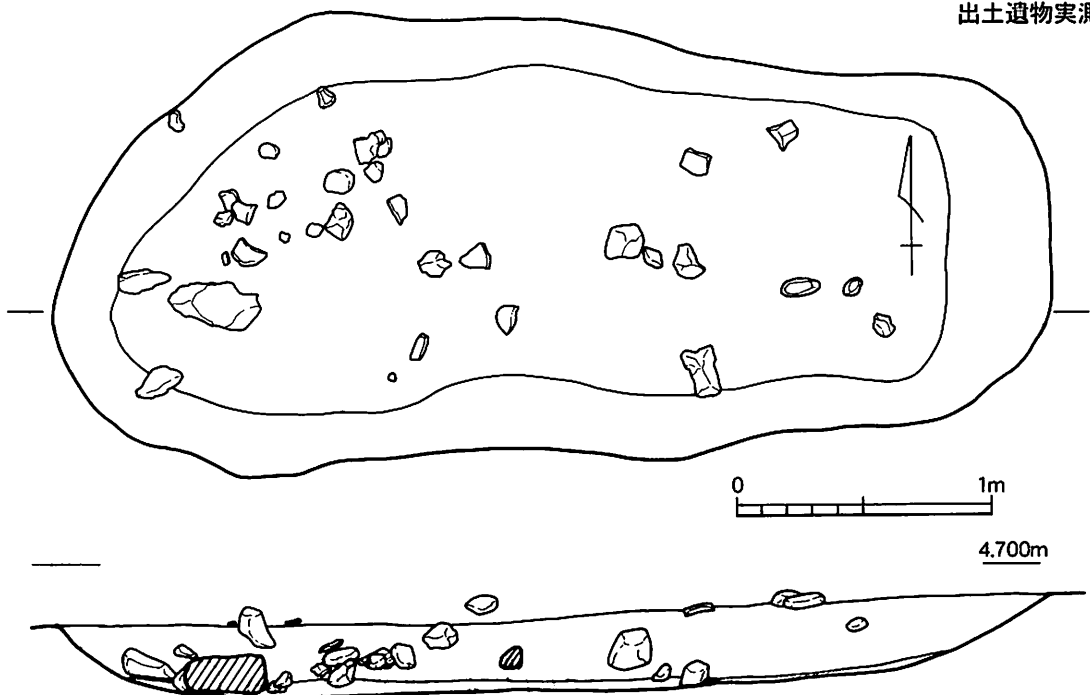
A-SK1065 (第2-74図)

A-SK1065は調査区の中央北寄りで検出された東西に長い土坑である。検出面での規模は東西3.9m、南北1.7mで、底面までの深さは30cmである。底面の規模は東西3.3m、南北1.2mである。

遺構の規模は大きいですが、内部からは人頭大から拳大の礫が多量に出土したが、遺物はわずかであった。



第2-73図 A-SK1065出土遺物実測図



第2-74図 A-SK1065実測図

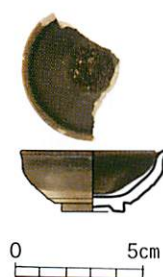
第2-73図に図示したのは、両面をヘラ磨きされた瓦質土器の鉢である。時期は不明である。

A-SK1068 (第2-76図)

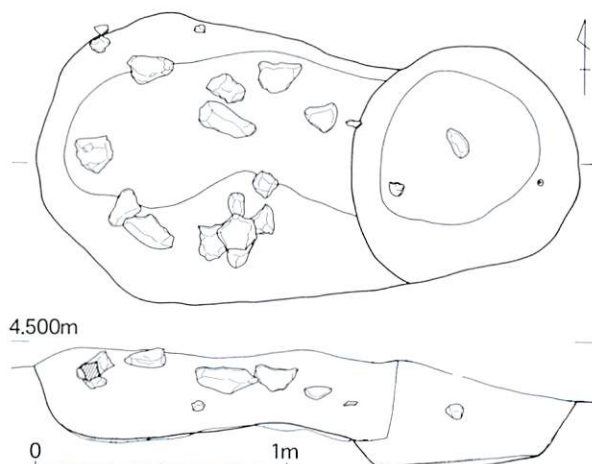
A-SK1068は、A-SK1065の上面で検出された土坑である。遺構は前後関係の不明なふたつの掘り込みから構成される。ひとつは東側の東西約90cm、南北90cm、深さ約40cmで、底面は東西60cm、南北60cmのほぼ円形の土坑である。もうひとつはこの土坑の西側に掘り込まれた、東西約1.4m以上、南北1.1m、深さ約30cmで、底面は東西1.2m以上、南北45cmの土坑である。

遺構内からは拳大の礫が出土しているが、遺物は少ない。第2-75図に図示したのは、口径7.4cm、底径3.4cm、器高3.2cmの瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。この他、京都系土師器も出土しており、遺構の時期は16世紀後葉から末葉と考える。

瀬戸美濃系  
天目茶碗



第2-75図 A-SK1068出土遺物実測図



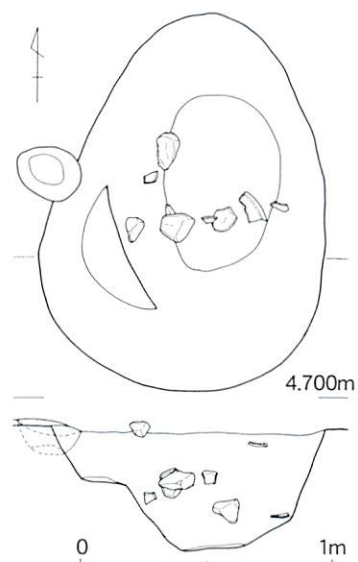
第2-76図 A-SK1068実測図

A-SK1069 (第2-77図)

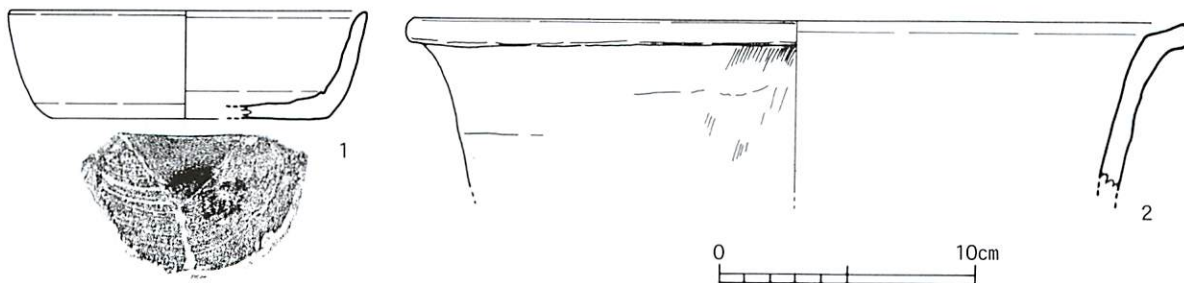
A-SK1069は調査区の南西部、K-40区で検出された土坑である。遺構の規模は、検出面で南北1.5m、東西1.1mの卵形をしており、掘り下げを行うと、約20cm下部で小さい段が確認され、最深部までは45cmであった。底面は、徐々に狭くなり、丸くなっているが、南北70cm、東西45cmの規模を測る。

土坑内からは、拳大の礫以外にも、第2-78図に図示した1のロクロ成形の在地系土師質土器の坏と、2の口縁部が外反する土鍋が出土している。1は口径14.2cm、底径11.4cm、器高4.3cmで、他の同時期の坏に比較すると大型である。2は、口径30.8cmのであり、口縁端部は横撫でであるが、内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目で器面調整されているが、一部は撫で消されている。

時期は、1の坏から14世紀末から15世紀前葉と考えられる。



第2-77図 A-SK1069実測図



第2-78図 A-SK1069出土遺物実測図

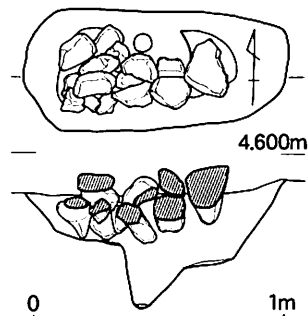


第2節 遺構と遺物

A-SK1070 (第2-79図)

A-SK1070は先に報告したA-SK1065の南側に接して検出された土坑である。その規模は、南北約50cm、東西約1mである。掘り下げの結果、土坑内からは礫が充填された状態で検出された。底面は中央部分が柱穴状に深く、最深部は検出面から約55cmある。

遺物は、遺構が小さく礫が多数のため少なく、瓦質土器の破片が1点のみ出土した。時期は不明である。



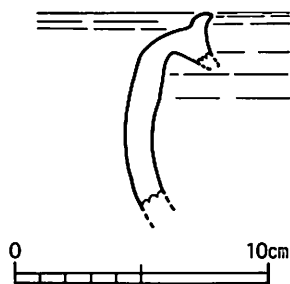
第2-79図 A-SK1070実測図

A-SK1081 (第2-81図)

A-SK1081は調査区の東北端部、L-38区で検出された遺構である。検出面の規模は、南北約1.2m、東西約1.4mである。掘り下げの結果、検出面から約75cmで底面に達した。底面は南北60cm、東西87cmで、平坦である。この遺構の西側で重なり検出された柱穴はA-SK1080で、深さは約30cmであった。

常滑系

出土遺物は、第2-80図に常滑系陶器の口縁部を図示したが、この他ロクロ成形の在来系土師質土器の坏の小破片が出土している。このことから、14世紀代の遺構と推測する。A-SK1080からもロクロ成形の在来系土師質土器の坏の破片が出土している。

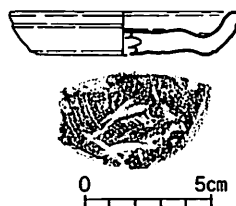


第2-80図 A-SK1081出土遺物実測図

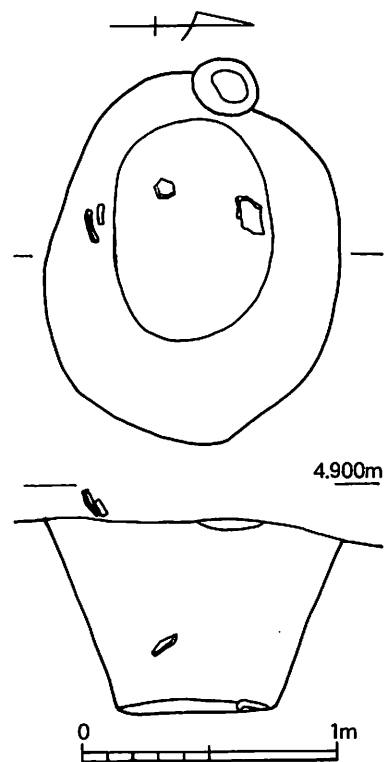
A-SK1082 (第2-83図)

A-SK1082はA-SK1081の東側に接して検出された土坑で、両土坑とも万寿寺の北側境界の堀に近い位置である。土坑の規模は、東西1.2m、南北0.7mで、深さ約20cmと約55cmの2段掘りになっている。遺物は検出面より上位でロクロ成形の在来系土師質土器の坏が出土しているが、この土坑に伴わない可能性が強い。

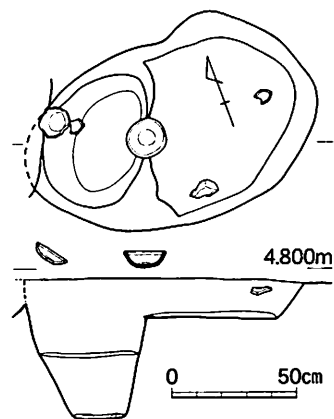
この土坑に伴う遺物は、第2-82図に図示したロクロ成形の在来系土師質土器の皿で、口径9.2cm、底径7.8cm、器高1.7cmで、14世紀後半と考えられる。



第2-82図 A-SK1082出土遺物実測図



第2-81図 A-SK1081実測図



第2-83図 A-SK1082実測図

## A-SK1083 (第2-84図)

A-SK1083は、L-41で検出された遺構で、南側が、A-SD1501と切り合う。規模と形状は、東西約75cm、南北約60cmの緩い三角形をしている。掘り下げた結果、遺構の壁は同じ状態で立ち上がる。壁はA-SD1501と切り合うため、一様ではないが、遺存状態の良好な部分の高さは、約25cm残っている。底面は、東西65cm、南北約50cmである。

遺構内からは出土した遺物の代表は、第2-85図に図示した2点のロクロ成形の在来系土師質土器の坏である。1はほぼ完形品の坏で、口径12.3cm、底径9.5cm、器高はいびつなため、3~3.2cmを測る。底部から立ち上がる口縁部の器壁は、下位が厚く、口縁先端部が尖る。2は完形品の坏である。口径12.4cm、底径7.1cm、器高3.5cmを測る。底部から立ち上がる口縁部の器壁は、上位が厚くなり、1の坏とは異なる。また、底部の径も1の坏に比較すると、2の坏の直径は、2.1cm小さく、全体的に碗状になる。

時期は、2の器形が中世大友城下町跡の14世紀代の遺構から出土しており、1の坏との組合せて14世紀中葉から後葉と考える。

## A-SK1084 (第2-86図)

A-SK1084は、調査区の西側の壁沿い、K-39区で検出された土坑である。遺構上面の規模は、南北約2m、東西1.3mであるが、北側はA-SK1018・A-SP1035・A-SK1036の遺構群と重なり合う。

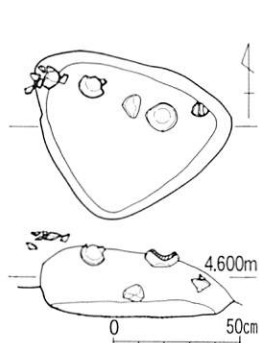
A-SK1084を掘り下げた結果、遺構は、深さ約45cmで一段目の底面が南側で検出され、さらに、北側は検出面から60cmのところまで底面を検出した。その規模は南北約80cm、東西は75cmで南側に向かいやや傾斜する。

遺構内からは礫も多数出土したが、代表的な遺物は、第2-87図に図示した。1~4は貿易陶磁器である。1は底径8.1cmの景德鎮窯系の青花碗の底部である。高台の断面は三角形である。2は底径10.1cmの龍泉窯系の青磁の皿である。3と4は同一個体の褐釉陶器の壺である。2点は接合しないが、口径は3.8cmで、底径は9cmで、器高は14.4cmである。高さ9.6cmの部分で屈曲し胴部最大径となり、18.1cmを測る。全体に褐色の釉がかかるが、底部周辺は露胎となっている。

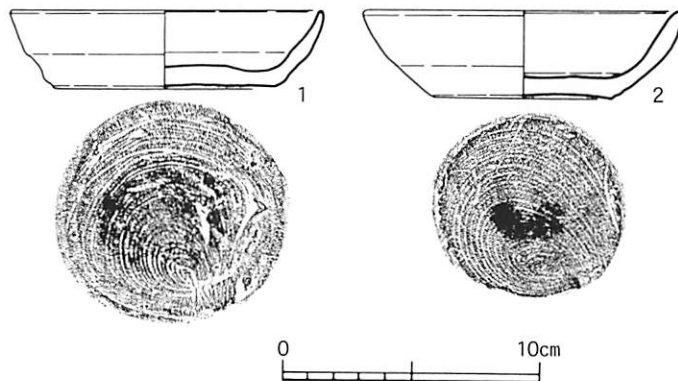
5・6は京都系土師器で、5は口径9.4cm、器高2.3cmであり、ほぼ完形品の6は、口径12.6cm、器高3.4cmである。7は瓦質土器の脚付きの火鉢である。器面は、内外面共に丁寧な撫で仕上げである。色調は本来なら黒色であるが、焼成の関係で明褐色となっている。

以上の遺物以外に、備前系陶器や須恵系土器の小破片が出土している。

この遺構の時期は、1の青花碗や5・6の京都系土師器が出土していることから、16世紀後葉から末葉と考えられる。

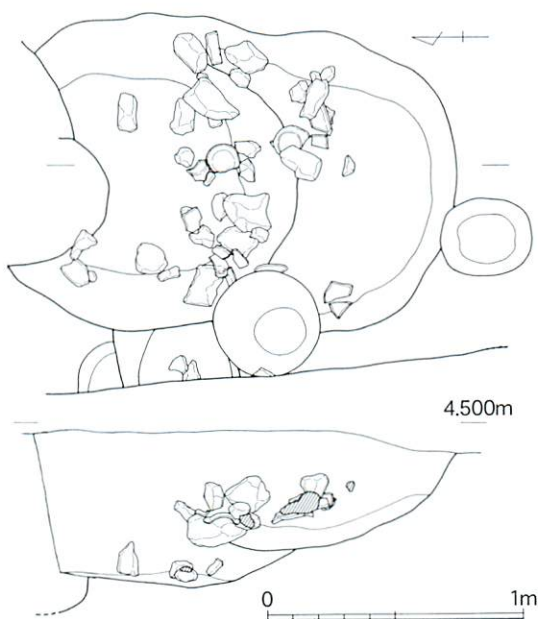


第2-84図 A-SK1083  
実測図

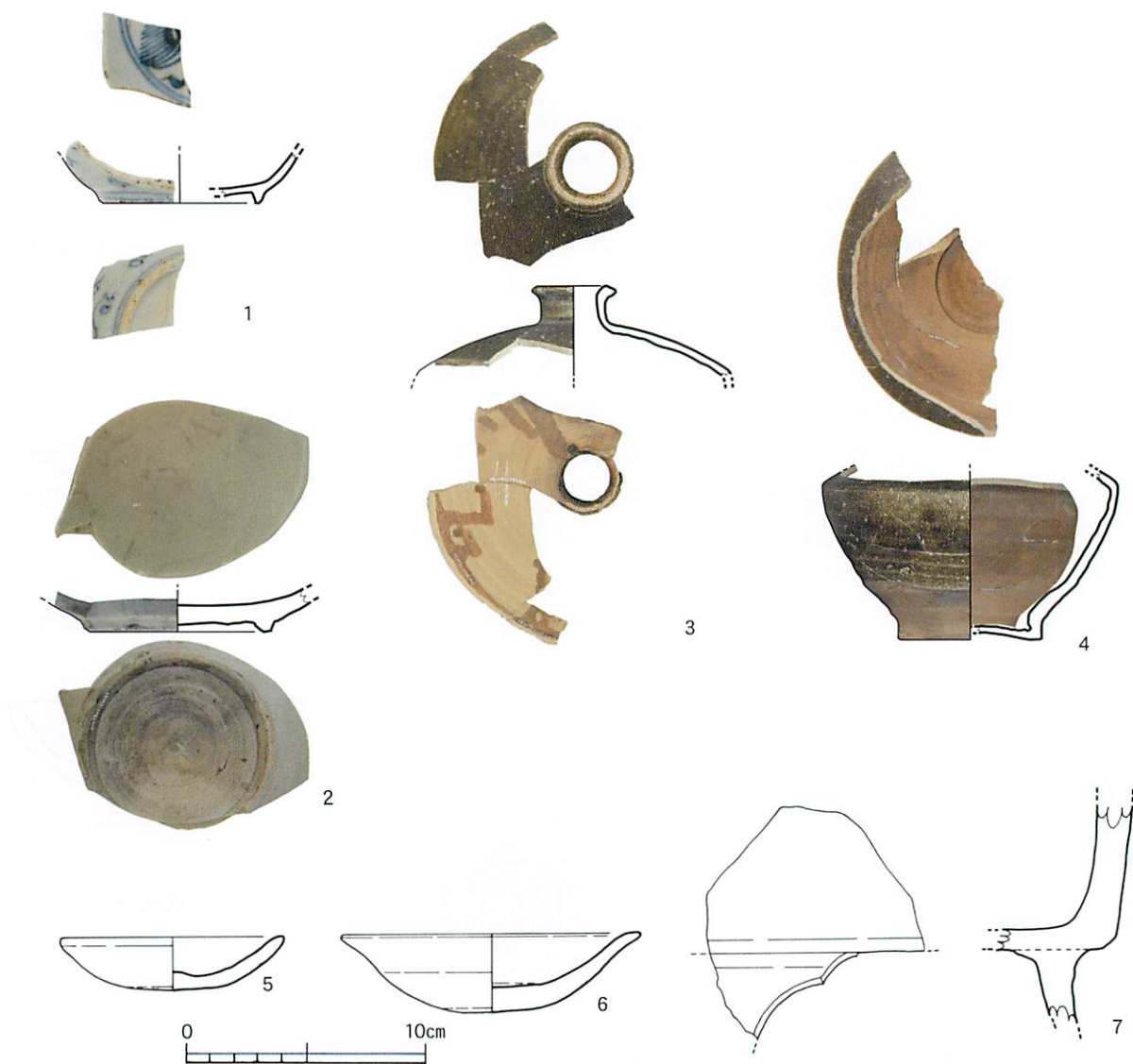


第2-85図 A-SK1083出土遺物実測図

景德鎮窯系  
龍泉窯系  
褐釉陶器



第2-86図 A-SK1084実測図



第2-87図 A-SK1084出土遺物実測図

A-SK1089 (第2-89図)

A-SK1089は、調査区の南東隅、M-41区で検出された遺構で、南側をA-SD 1505と切り合う。遺構の規模は、南側と西側は不明であるが、南北約1m、東西も約1mの円形の土坑と想定される。底面は南に傾斜し、径約70cmの規模である。壁の遺存状況は北側が良好で、約60cm残る。

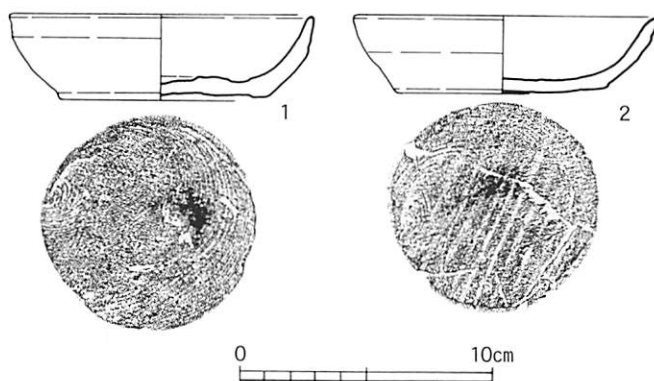
遺物の出土状況は、床面近くから2点のほぼ完形品のロクロ成形の在来系土師質土器の坏が出土している。第2-88図に図示した遺物がそれであるが、1は口径12cm、底径8.2cm、器高はいびつなため3.2cm~3.4cmを測る。底部から口縁部は、内湾気味に立ち上がり、器壁は下位が厚く、口縁先端部が尖るように仕上げられている。2は口径12cm、底径8.4cm、器高はいびつなため2.4cm~3.1cmを測る。底部から立ち上がる口縁部の器壁は上位が厚く、先端部が尖り、外反気味になる。また、糸切痕の残る底部には、板状の圧痕が付いている。遺物は、この2点以外に、図化していないが、龍泉窯産青磁碗や須恵質土器の小破片が出土している。

この遺構の時期は、出土したロクロ成形の在来系土師質土器の坏の形態から、14世紀中葉から後葉にかけてと想定する。

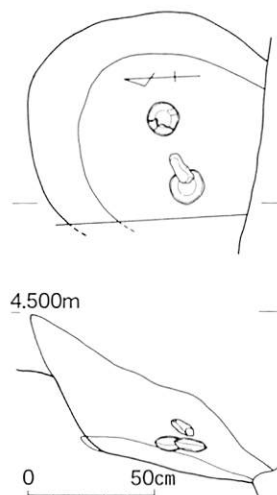
A-SK1091 (第2-91図)

A-SK1091は、調査区の北西隅、K-38区で検出された遺構である。北側は万寿寺北側境の堀である。遺構の東北部はA-SK1093と切り合う。遺構の規模は、南北の最大幅は約3m、東西は約6mの不定形をした土坑である。規模の大きな土坑であるが、底面までは深さはほぼ一定で、全面約30cmを測り、平坦である。

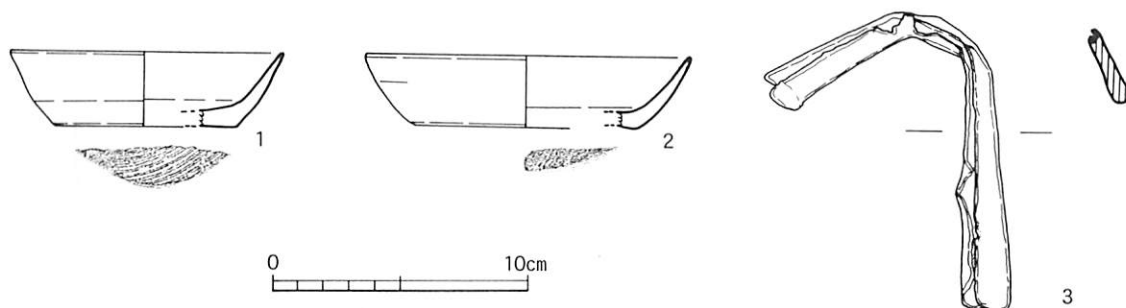
遺構内から出土した遺物は第2-90図に図示したが、1は口径10.8cm、底径7.2cm、器高3cmで、2は口径12.8cm、底径8.6cm、器高2.9cmである。2点とも、口縁部は底部から直線的に斜めに立ち上がり、先端が尖る。



第2-88図 A-SK1089出土遺物実測図



第2-89図 A-SK1089実測図



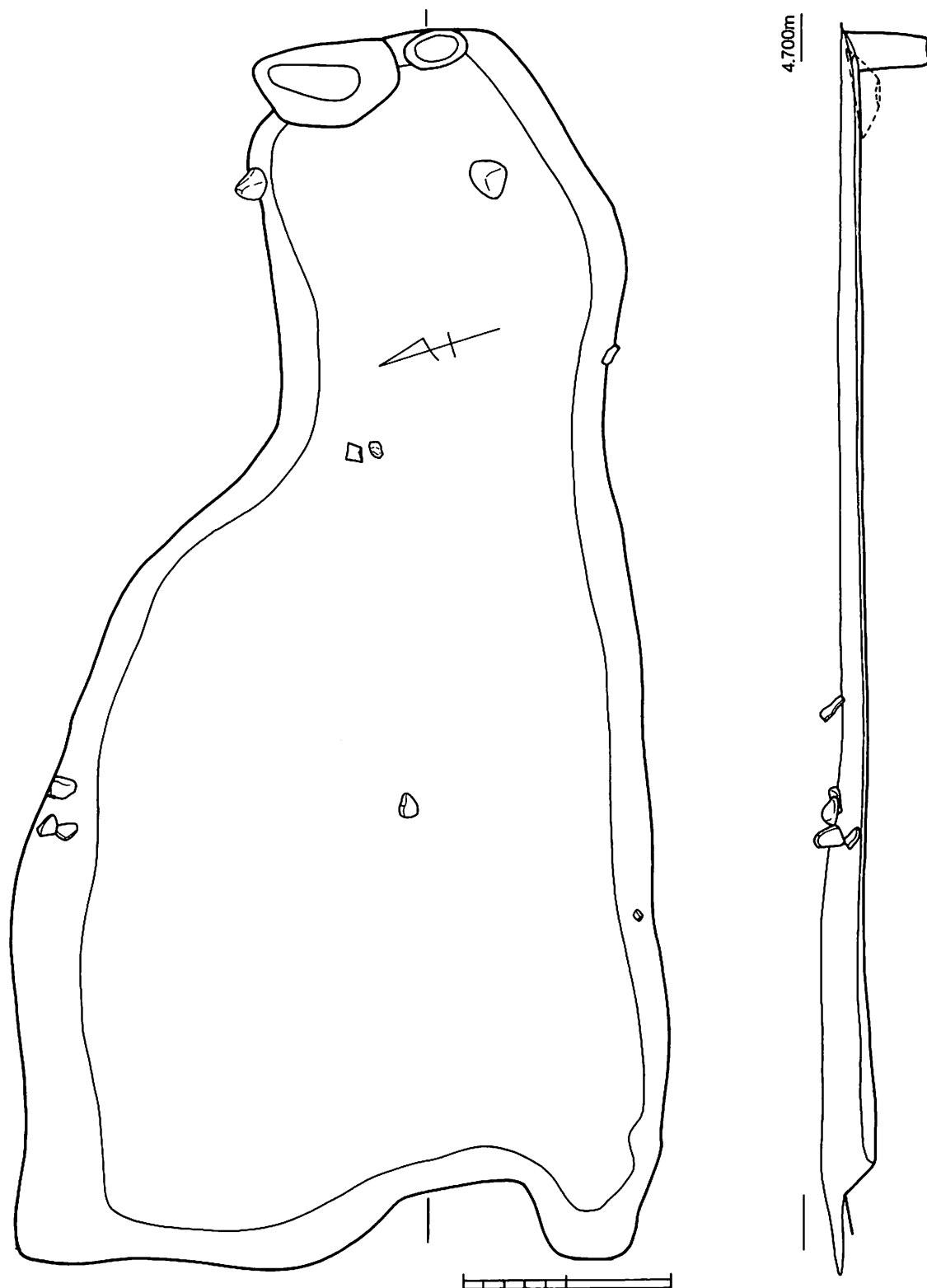
第2-90図 A-SK1091出土遺物実測図

## 第2節 遺構と遺物

### 青銅製品

3は青銅製品である。折れ曲がっているが、長さは約10cmである。遺物は、厚さ0.2~0.4cmの細長い青銅板を長軸方向に二つ折りにし、幅約1.6cmの製品に仕上げている。

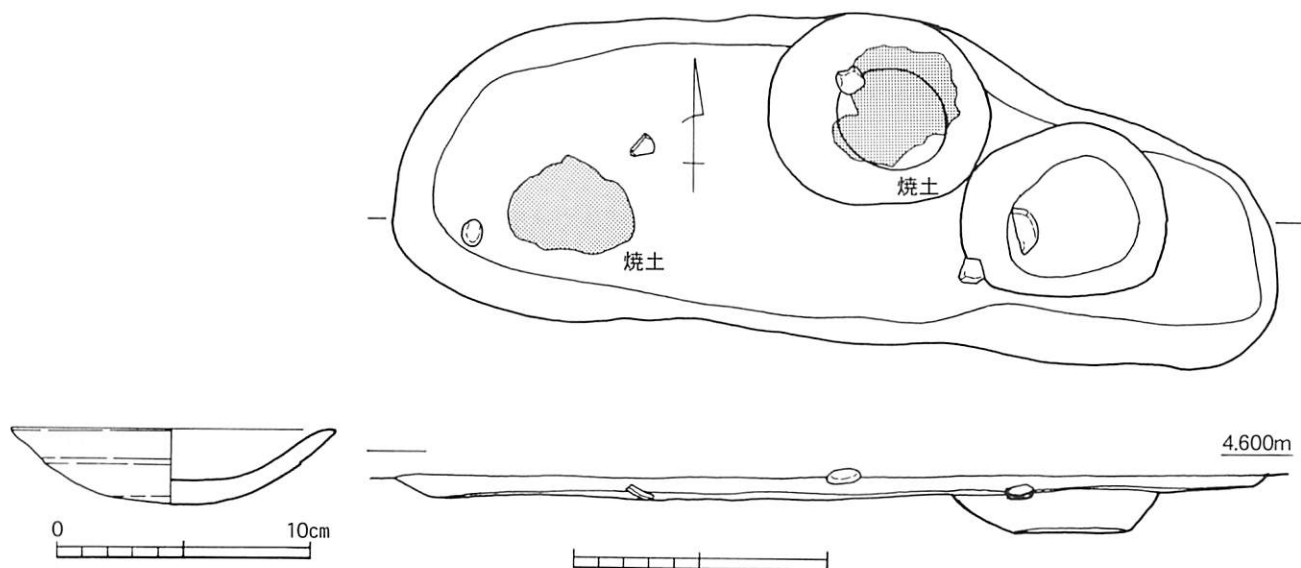
遺構の時期については、図示した2点のロクロ成形の在地系土師質土器の坏は、その形態から14世紀中葉から後葉と考えられる。しかし、図示していないが、遺構内からは龍泉窯産青磁碗なども出土するが、景德鎮窯や漳州窯系の青花碗や京都系土師器の小破片が一定量出土している。このためこの土坑の時期は16世紀後葉~末葉と想定する。



第2-91図 A-SK1091実測図

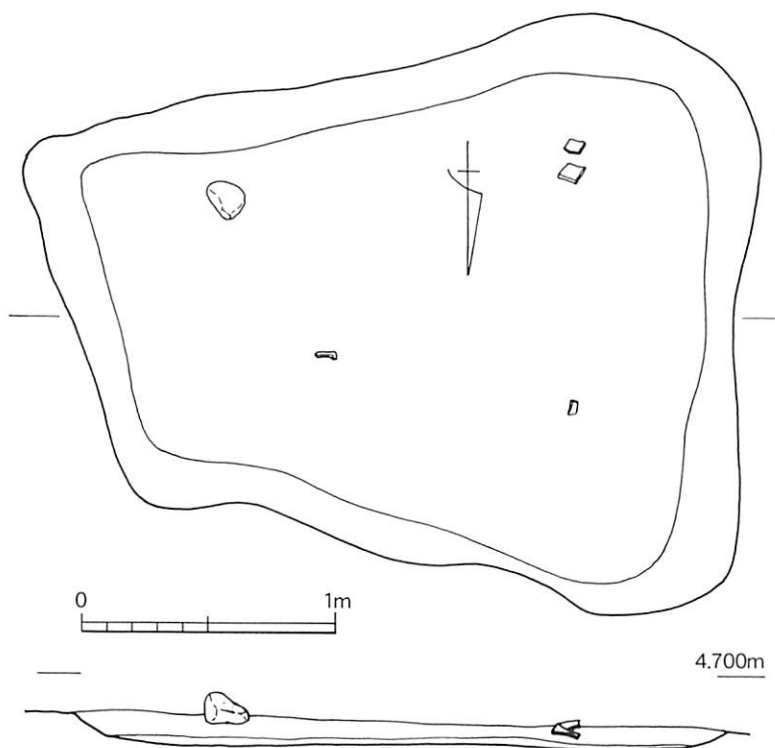
A-SK1092 (第2-93図)

K-38区で検出されたA-SK1092はA-SK1091の南側に隣接して検出された土坑である。遺構の西部はA-SK1104と切り合う。検出面での遺構の規模は東西3.5m、南北1.3mで、深さは約10cm

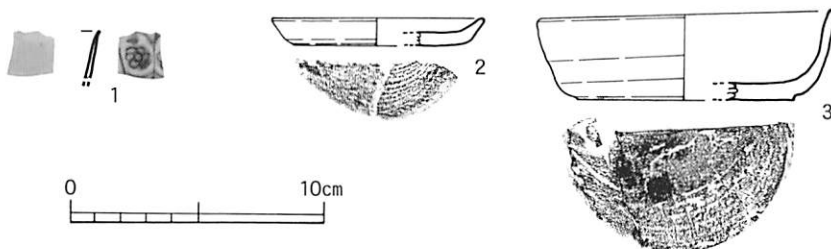


第2-92図 A-SK1092出土遺物実測図

第2-93図 A-SK1092実測図



第2-94図 A-SK1093実測図



第2-95図 A-SK1093出土遺物実測図



第2節 遺構と遺物

と浅い。底面の西側と中央部で、焼土の広がり確認された。中央部の焼土の下部には、直径75cmで、深さ約30cmの土坑を検出した。A-SK1092以前の土坑と考える。また、この土坑の東側に隣接して直径約70cm、床面からの深さ約15cmの土坑が検出された。

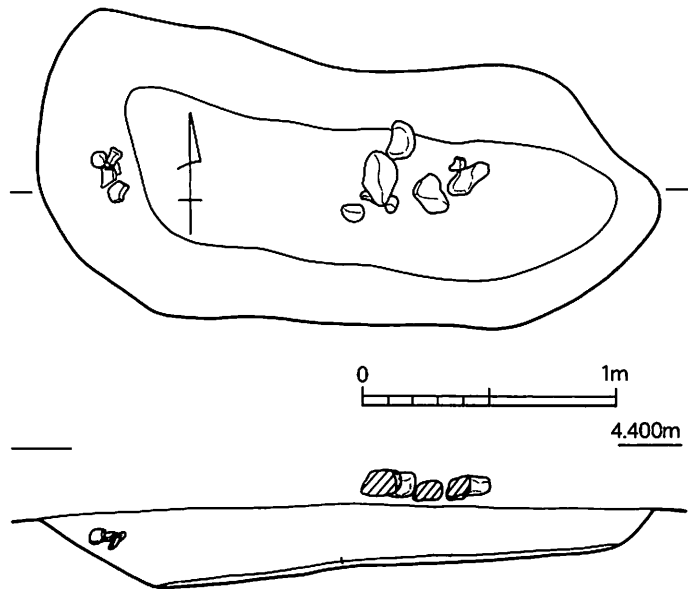
遺構内からは、第2-92図に図示した京都系土師器が出土している。その法量は、口径12.3cm、器高3cmで器壁は厚い。この他、景德鎮窯系青花の小破片が8点出土しており、この遺構の時期は、16世紀後葉から末葉と考えられる。

A-SK1093 (第2-94図)

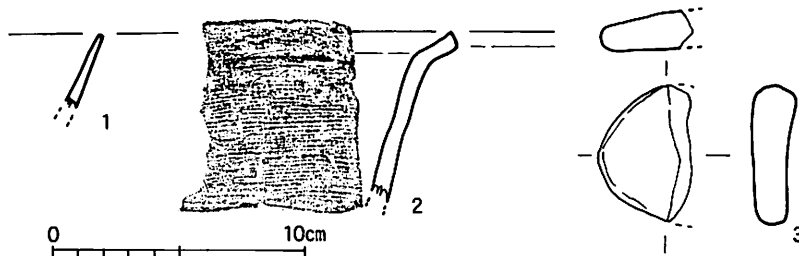
A-SK1093は、A-SK1091と切り合い関係で検出された。規模は南北2.4m、東西約2.7mで、西側を底辺にした台形をしている。深さは12~15cmでほぼ平坦である。

景德鎮窯系 第2-95図に図示した遺物は主要な出土遺物である。1は景德鎮窯系青花文の小坏で、横断面を六角形の小平見ると、上面観が六角形になる。遺構からはこの他、景德鎮窯系青花文の磁器の小片が数点出土している。2・3はロクロ成形による在地系土師質土器の皿と坏である。2の皿は口径8.4cm、器高1.1cm、底径6.6cmである。坏である3は、口径11.4cm、底径8.5cm、器高3.2~3.7cmで口縁部は直口気味に立ち上がる。

以上の他、龍泉窯系青磁碗や白磁、備前系陶器・常滑系陶器が出土しているものの、京都系土師器などの小片や景德鎮窯の青花文の磁器が出土していることから、A-SK1093の時期は、16世紀後葉から末葉と想定する。



第2-96図 A-SK1094実測図



第2-97図 A-SK1094出土遺物実測図

A-SK1094 (第2-96図)

A-SK1094は調査区の中央北寄りのL-39区で検出された遺構である。遺構の規模は東西2.5m、南北約1mで、東西に細長い。深さは西端が最深部で約30cmであるが、東端は15cmで、底面は傾斜している。遺構内からの遺物の出土は少ない。

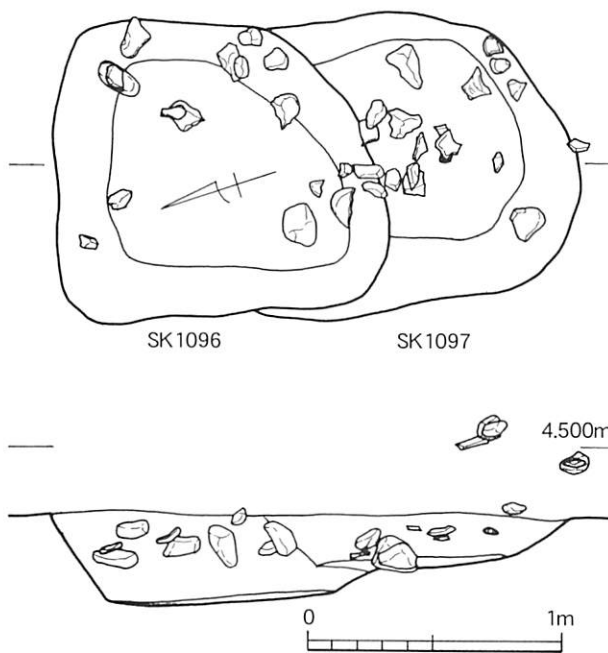
出土遺物は、第2-97図に図示したが、小片が多い。1は須恵器の坏の口縁部である。この調査区で多く出土する8世紀後半から9世紀前半のものと考えられる。2は口縁部が屈曲する瓦質土器の土鍋で、外面は横方向の撫で仕上げ、内面は横方向の刷毛目で器面調整されている。3は厚さ1.3cm、直径5.3cmの円形の土製品であるが、半分を欠く。重さは30gであるが、不明品である。遺物はこの他、備前系陶器や瓦質土器が出土している。

この遺構の時期は、決定付ける遺物の出土はない。しかし、切り合い関係にあるA-SD1506・A-SK1065・A-SK1068との関係から、16世紀後葉から末葉と考える。

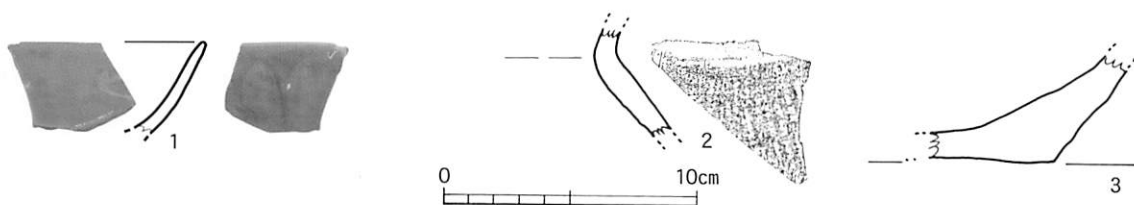
A-SK1096 (第2-98図)

A-SK1096はA-SK1097と切り合い、調査区の北寄りの西壁沿い、K-39区で検出された。A-SK1096の規模は南北約1.3m、東西約1.2mで、緩い方形を呈している。深さは33cmで、底面の規模は南北約1m、東西約0.8mである。

遺構内からは、拳大の礫が多数出土したが、遺物の数は少なく、ロクロ成形の在来系土師質土器と須恵質土器の小破片が4点出土したのみである。このため、遺構の時期は不明である。



第2-98図 A-SK1096・A-SK1097実測図



第2-99図 A-SK1096出土遺物実測図

## 第2節 遺構と遺物

### A-SK1097 (第2-98図)

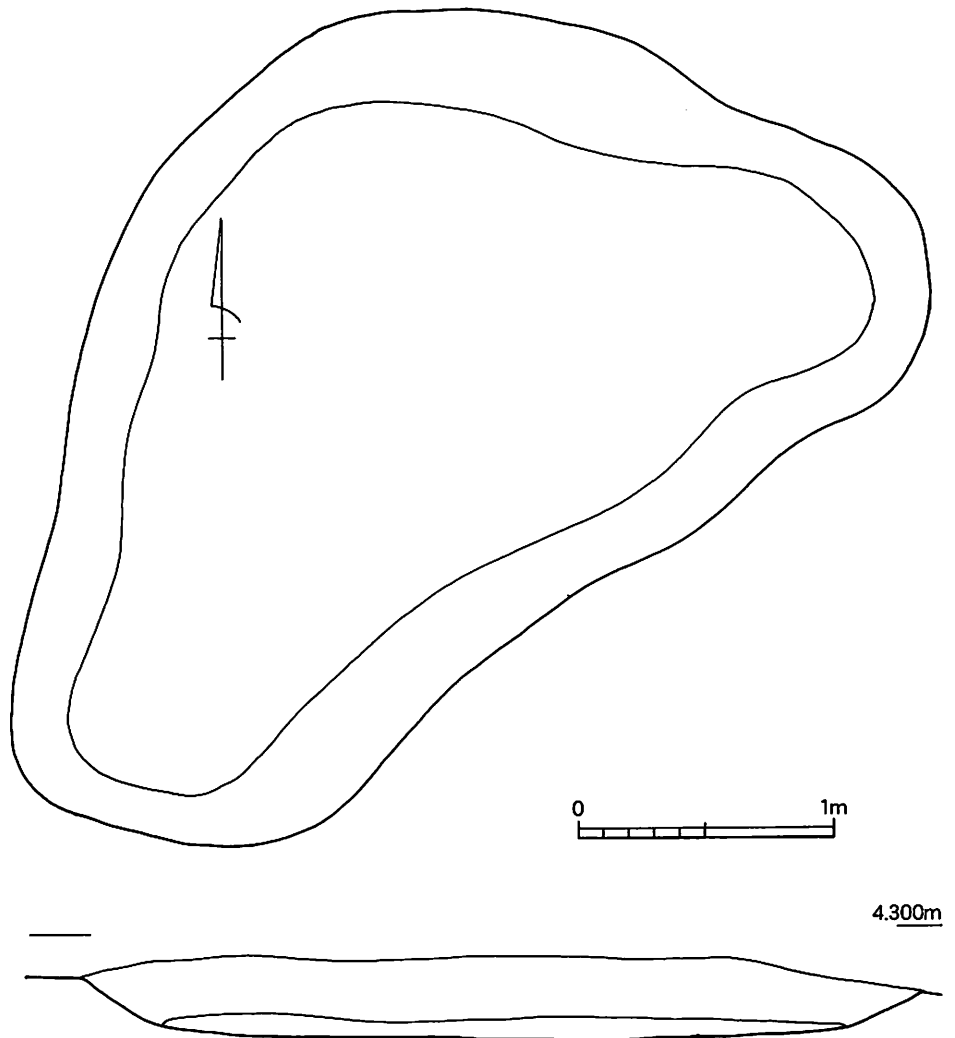
A-SK1097はA-SK1096と切り合い、発掘調査の結果、遺構の北側のほぼ半分の底面は不明である。

残された部分から推定できる遺構の規模は、南北1.2m以上、東西約1.2m、検出面からの深さは23cmで、底面の規模は、南北約1m、東西0.7mと想定する。

龍泉窯産

遺構内の底面に拳大の礫が多数見られるが、遺物もわずかながら出土している。第2-99図に図示した3点はその代表的な遺物である。1は龍泉窯系の青磁碗で、外面には鎬蓮弁が施文されている。2は須恵質土器の壺の肩部で、外面には叩き目の調整痕が付く。3は備前系陶器の大甕の底部で、ヘラ削り痕が認められる。この遺構からは、この3点以外に、土師質土器の甕、須恵質土器、瓦質土器などの小破片が出土している。

この切り合い関係にあるA-SK1096とA-SK1097の時期は、良好な状態で遺物が出土しないため、明確な時期を決定できない。ただ、京都系土師器や景德鎮窯系青花碗など、中世大友城下町跡で見られる16世紀的な遺物が出土していない。そこで、14世紀後半から15世紀前葉の時期を想定する。



第2-100図 A-SK1099実測図

A-SK1099 (第2-100図)

A-SK1099は調査区中央の北寄り、L-39区で検出された土坑である。土坑の規模は南北3.3m、東西3.3mで、平面形が緩い三角形をしている。深さは約30cmで床面は平坦である。遺構の真ん中を南北にA-SD1506が掘り込まれているが、A-SK1099はそれが埋め立てられた跡につくられている。

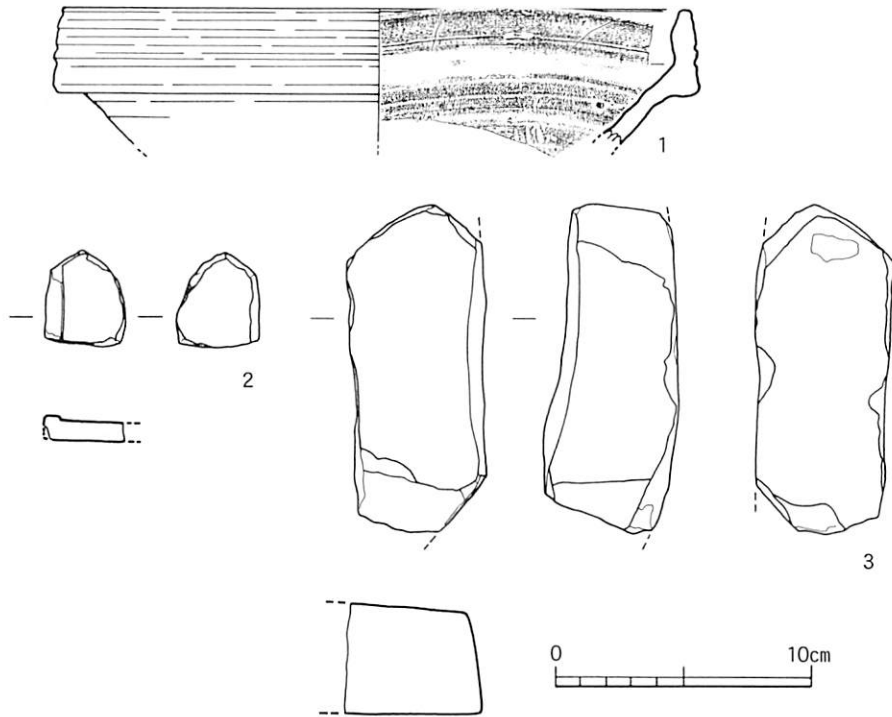
備前系

遺構内からは第2-101図に図示した遺物が出土した。1は備前系陶器の挿鉢である口径24.6cmで、内面に挿り目がわずかに認められる。2は碗の破片である。3は周辺を欠くが、長さ13cm、幅5.4cmが残されている。この3点以外にも、土坑からは、景德鎮窯系青花碗、龍泉窯系青磁碗、中国産白磁皿、ロクロ成形による在地系土師質土器、須恵質土器等の破片が出土している。

銅銭

また、第2-102図に図示した銅銭は真書体で書かれた「熙寧元寶」で初鑄年は1068年(北宋)である。

以上の遺物の出土状況や、遺構の切り合い関係から、A-SK1099の時期を考えると、A-SD1506よりも新しい16世紀後葉から末葉と想定できる。



第2-101図 A-SK1099出土遺物実測図



第2-102図 A-SK1099出土遺物実測図

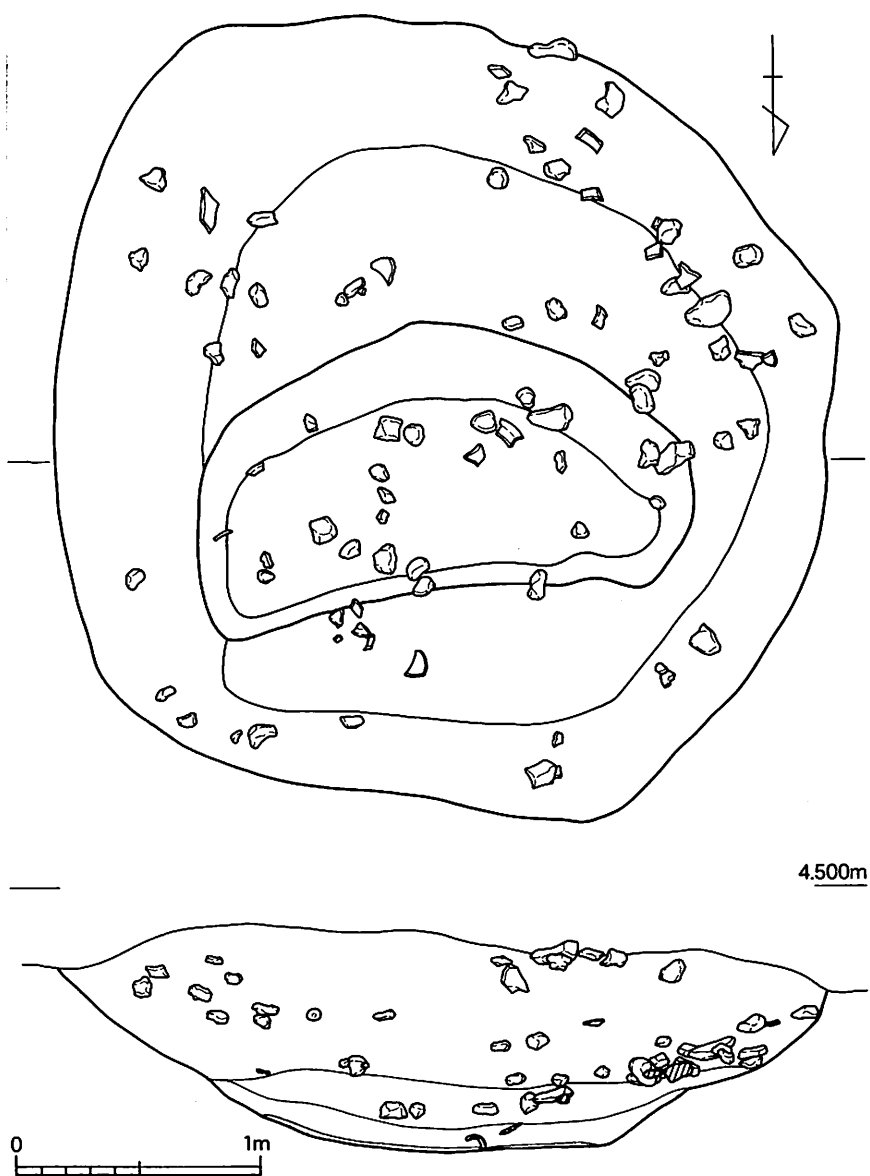
## 第2節 遺構と遺物

### A-SK1100 (第2-103図)

A-SK1100は調査区の北西部、K-39区で検出された土坑である。検出面では南北3.1m、東西3.1mのほぼ円形土坑で、深さは0.9mである。底面は不定形で、二段掘り状になっており横断面が丸くなっている。

龍泉窯系  
備前系

この遺構からの遺物の出土は比較的多く、第2-104図に図示したのがその主要なものである。1は龍泉窯系青磁碗である。2は備前系陶器の壺の口縁部である。3・4はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。3の口径は10.8cm、4は口径11.2cm、底径8.4cm、器高3.5cmで、糸切り底の底部には板目が付いている。口縁部の器壁は中位が厚くなり、先端は丸く仕上げている。5・6は京都系土師器で、口径は5が8.2cm、6は10.2cmで、器高は2点とも2cmである。ほぼ完形品の6の口縁部にはススが付着しており、灯明皿として使用されている。



第2-103図 A-SK1100実測図

7は口縁部が屈曲する土鍋である。外面は横方向の撫で、内面は横方向の刷毛目で器面調整されている。8は厚さ1.8cmの平瓦である。両面撫でで仕上げられている。9は口径42cmの瓦質土器である。器面はへら磨きされており、口縁端部はやや肥厚し、2cm幅の平坦面を造り出している。遺構内からは、これ以外に景德鎮窯系青花碗・龍泉窯系青磁碗・中国産白磁・備前系陶器・須恵質土器などの小片が多数出土している。こうした遺物の状況から、この遺構の時期を考えると、景德鎮窯系青花碗と京都系土師器が一定量含まれることから、16世紀後葉から末葉とする。

A-SK1101 (第2-105図)

A-SK1101は調査区の北西部で検出された遺構で、A-SK1099・A-SK1100・A-SK1104・A-SD1506と複雑に切り合う。このため、遺構の形態は不明確で、確認できる範囲では長さ約3mの溝状である。幅は約1.5mで、検出面からの深さは約60cmある。底面は平坦であるが、幅は30~70cmと一定していないが、断面は逆台形を呈する。発掘中に礫が多数出土したが、第2-105図に見られるように、これらは遺構が埋められる最終段階に投入されたものであろう。

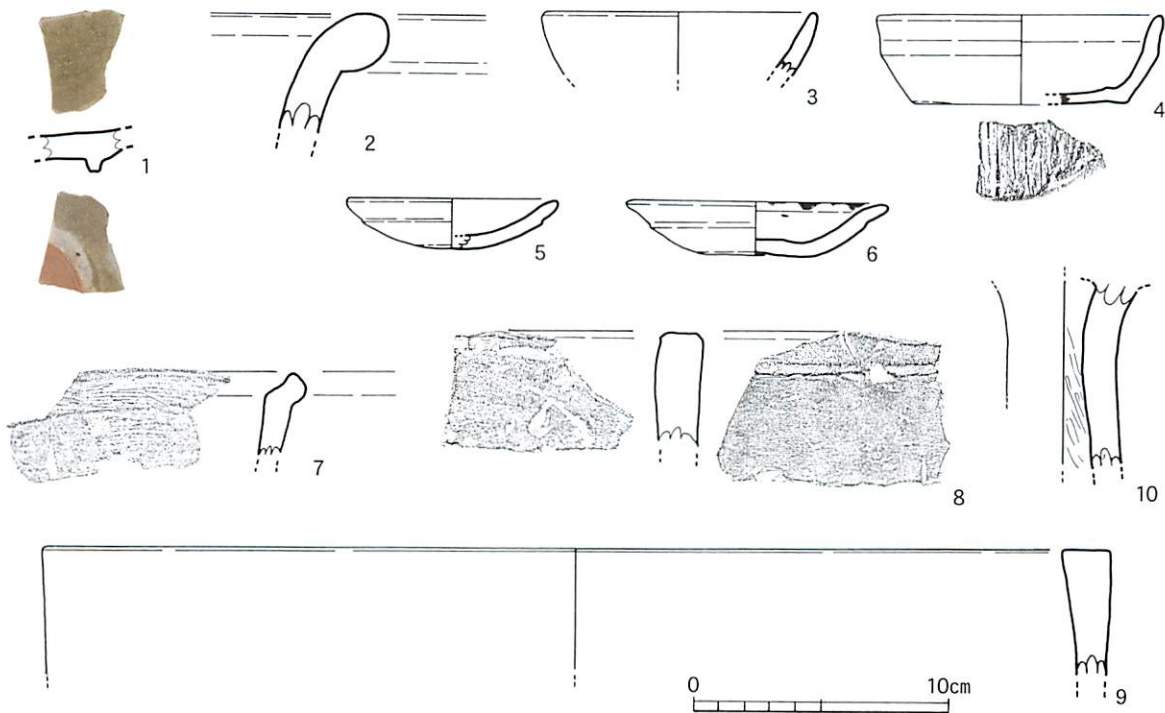
備前系

遺構から出土した遺物は第2-107図に図示したが、1は備前系陶器の口縁部が直立する壺である。口縁端部の肥厚は目立たない。2~4はロクロ成形の在り系土師質土器である。2は口径9.2cm、底径7cm、器高1.3cmの皿である。口縁端部が尖るように底部から引き出されている。3は非ロクロ成形の皿である。京都系土師器と胎土と焼成が類似し、焼塩壺の蓋の可能性もある。口径5cm、器高1.5cmである。4は口径10.1cm、底径5.4cm、器高2.1cmで、同種の土師質土器に比較すると底径が小さい。5は瓦質土器の鉢である。口縁部は内湾し、端部を肥厚させ、口唇部を平坦に仕上げている。外面は低い凸帯を平行して二条巡らせている。第2-106図の銅銭は初鑄年が1078年(北宋)の「元豊通寶」である。

焼塩壺の蓋

銅銭

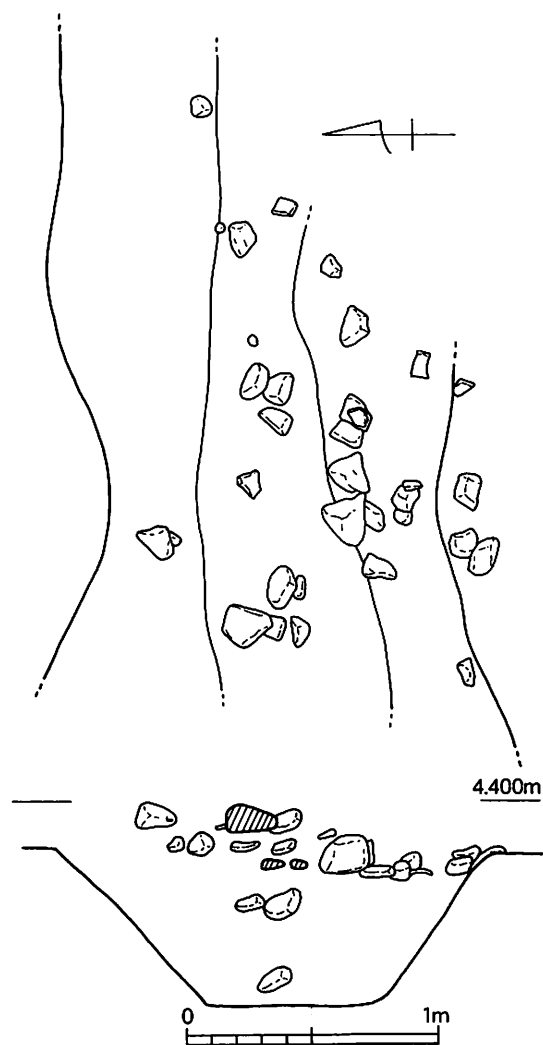
遺構の時期は、3の土師質土器は16世紀代の可能性はあるが、他の遺物やA-SK1099・A-SK1100・A-SK1104・A-SD1506との切り合い関係などから15世紀後葉以前と想定される。



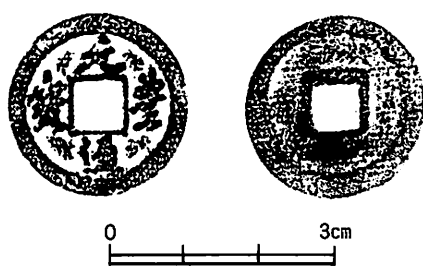
第2-104図 A-SK1100出土遺物実測図



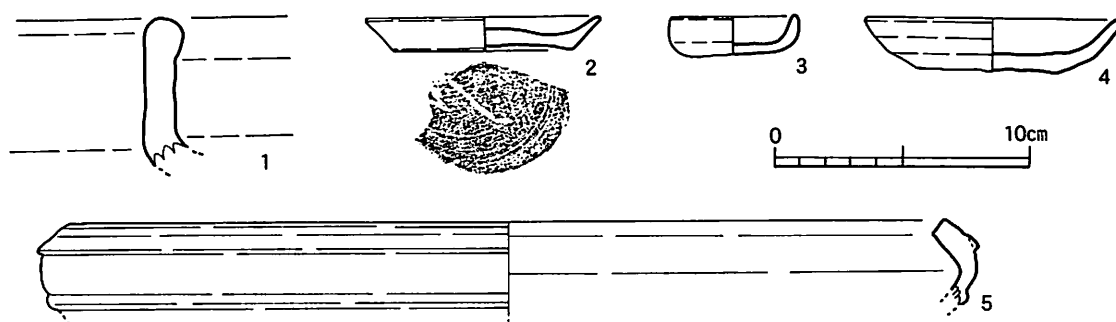
第2節 遺構と遺物



第2-105図 A-SK1101実測図



第2-106図 A-SK1101出土銭実測図



第2-107図 A-SK1101出土遺物実測図

A-SK1104 (第2-108図)

A-SK1104は、調査区の西寄り、K-39区で検出された土坑である。遺構の東南部を16世紀後葉から末葉のA-SK1100と切り合い、東側はA-SK1101、北側はA-SK1107と切り合う。土坑の規模は、上面が南北約4.2m、東西約3mの緩い方形をしている。遺構内を掘り下げた結果、北側の壁は緩斜面となっており、検出面から底面までの深さは約1mである。底面の規模は南北1.8m、東西1.65mである。

備前系

遺構内からは拳大の礫が多数出土したが、第2-108図に見られるように、上層と下層に分かれており、埋め立ての状況を知ることができる。遺物も多く、備前系陶器や在地系土師質土器など、約200点が出土している。第2-110図はその代表的な遺物である。1・2は備前系陶器の播鉢である。

1は口縁部が小さく屈曲して立ち上がり、先端部は尖る。内面には口縁部に直角に入れられた播目が認められる。2は口径26.4cmで、口縁部は屈曲して直立し、幅広の口縁帯を形成している。口縁



第2-108図 A-SK1104実測図

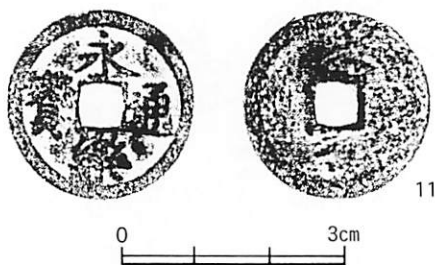
第2節 遺構と遺物

端部は丸く仕上げられ、外面は横ナデで、明確な凹線状の文様は認められない。内面には、8本単位の櫛歯状工具による挿目が4cm間隔で、口縁部に直角に施文されている。

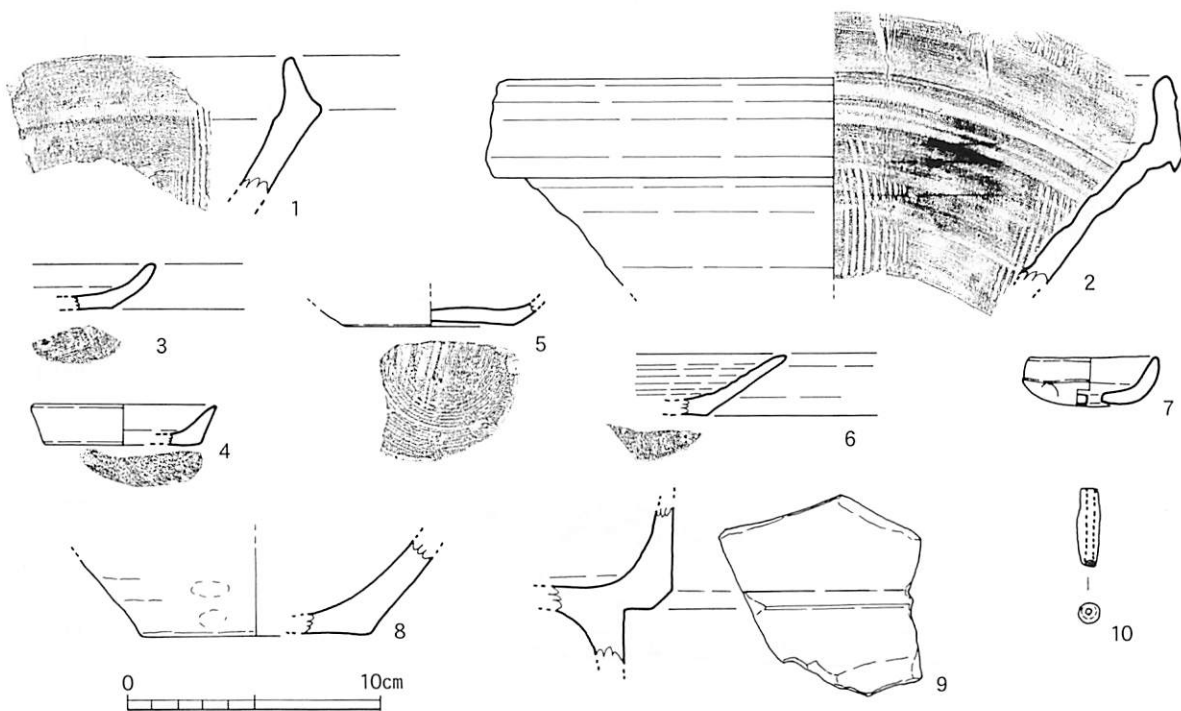
3～6はロクロ成形による在地系土師質土器である。3は器高1.5mの皿である。4は口径7.2cm、底径6cm、器高1.6cmの小型の坏である。5は底径6.6cmで、底部には糸切り痕の後、板目が付いている。6は口縁部が底部から直線的に伸び、内面にはラセン状の段が生じている。

器高は2.5mである。7は京都系土師器と同じ製作方法で胎土と焼成である。底部には穿孔が認められる。8は須恵質土器の底部である。器面調整は外面が横撫でで、東播系須恵質土器の捏ね鉢の底部と考えられる。9は瓦質土器で、鉢の脚部である。10は紡錘形の土錘で、長さ3.1cm、直径0.9cm、重さ1.9gを測る。遺物は、以上の10点以外にも龍泉窯系青磁や中国産白磁の小破片や、ロクロ成形による在地系土師質土器が出土している。第2-109図の銅銭は初鑄年が1408年（明）の「永楽通寶」である。

A-SK1104の時期は、出土遺物の中に、7のような京都系土師器が極わずかに含まれるものの、上面からの出土ととらえられる。また、周辺の遺構との切り合い関係も考慮すると、備前系陶器の挿鉢や6の内面にはラセン状の段がある在地系土師質土器の時期である15世紀末から16世紀前葉と考える。



第2-109図 A-SK1104出土銭実測図



第2-110図 A-SK1104出土遺物実測図

A-SK1105 (第2-112図)

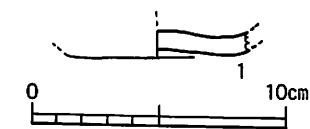
A-SK1105は北側でA-SK1106と南側で柱穴と切り合い関係にある。遺構の規模は、東側が未調査で不明であるが、遺構の規模は、南北約1.2m、東西も1m以上ある。深さは45cmで、底面は南北約70cm、東西50cm以上が想定される。

出土遺物は、第2-111図にロクロ成形による在地系土師質土器の坏を図示している。その他、龍泉窯系青磁・中国産白磁・瀬戸美濃系陶器・京都系土師器の小片が出土している。

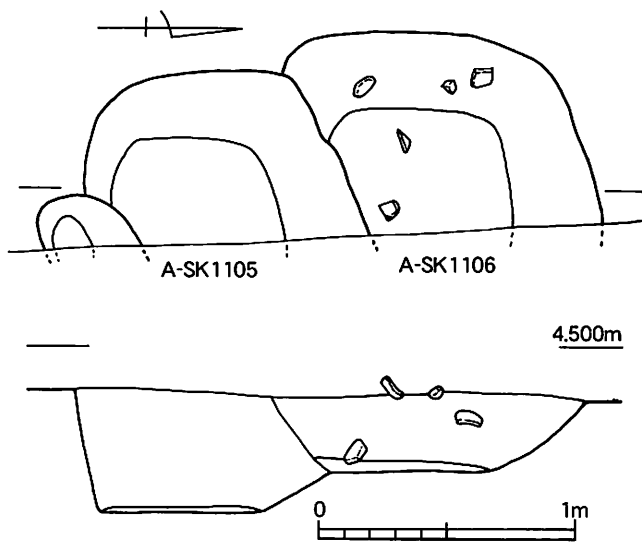
A-SK1106 (第2-112図)

A-SK1106はA-SK1105と南側で切り合う。土坑の規模は、南北約1.5m、東西1m以上、深さ30cmで、底面の規模は、南北約1m、東西50cm以上と推定できる。

遺構内からは、景德鎮系青花・瓦質土器・ロクロ成形による在地系土師質土器の小破片が出土している。



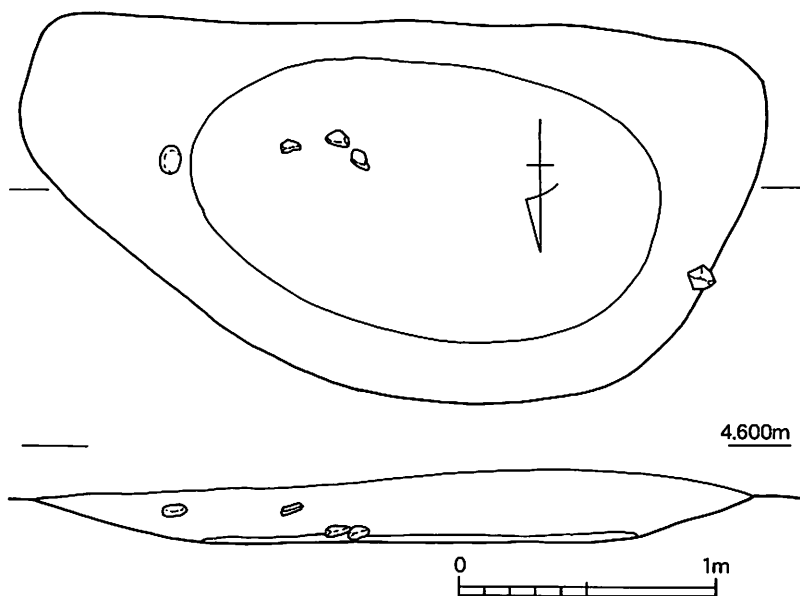
第2-111図 A-SK1105 出土遺物実測図



第2-112図 A-SK1105・A-SK1106実測図

A-SK1107 (第2-113図)

A-SK1107は調査区の北西隅、K-38区で検出された。南側を15世紀末から16世紀前葉のSK1104、東側を16世紀後葉から末葉と考えられるA-SK1107と切り合う。遺構の規模は、南北1.5m、東西2.9m、深さ約30cmで、底面の規模は南北1m、東西1.2mの楕円形をしている。



第2-113図 A-SK1107実測図

## 第2節 遺構と遺物

遺構内からは、小礫が出土したものの、遺物はほとんど出土していない。このため遺物から時期を決めることはできないが、他の遺構との関係で、16世紀末葉と考えられる。

### その他の土坑出土遺物

府内町跡20次調査A区で検出した土坑は、以上報告した以外にも、多く確認された。以下それらの土坑出土の遺物を第2-114図に図示し報告する。

A-SK1001 1・2はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。

A-SK1005 3は口径9cm、器高2.6cmの京都系土師器の坏である。器壁が比較的厚く、16世紀後葉から末葉と考える。

砥石

A-SK1009 4は砥石の破片である。

A-SK1020 5は口縁端部が肥厚する瓦質土器の口縁部である。

A-SK1022 6は8世紀後半から9世紀前半頃の土師器の蓋である。口径12.4cmで、器面は回転ヘラ磨きである。

A-SK1025 7はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、底径9.4cmである。底部に回転糸切の後、板目の圧痕が付く。

A-SK1037 8は土師質土器を円形に加工したメンコ状の土製品で、径3cmである。

A-SK1041 9・10はロクロ成形による在地系土師質土器の皿で、10の口径は8.4cm、底径6.6cm、器高1.3cmである。11・12は京都系土師器である。遺構の時期は16世紀後葉から末葉と考える。

A-SK1044 13は須恵質土器の底部である。外面は横撫でで調整されている。

A-SK1047 14~16・18はロクロ成形による在地系土師質土器で、14は皿である。15は口径11.4cm、底径7.4cm、器高3.3cmである。口縁部の器壁は中位で肥厚し、先端部は尖る。16は口径13.6cm、底径9cm、器高3.9cmである。口縁部の器壁は上位で肥厚する。18は底径9.6cmである。17は京都系土師器で器高が高い。19は口縁部が肥厚する東播系須恵質土器の鉢である。20は口縁端部が肥厚する瓦質土器である。器面は内外面横方向のヘラ磨きで調整されている。京都系土師器が出土しており16世紀後葉から末葉と考える。

東播系

A-SK1049 21~23はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。21は器高2.8cmである。口縁部は底部近くが厚く、口縁先端部に向けて尖るように成形している。22は口径11cm、底径8.6cm、器高3.4cmで口縁部は直立気味に立ち上がり、端部はやや外反する。23は口径11.8cm、底径8.6cm、器高3.1cmで口縁端部は直線的に延び、尖る。時期は14世紀末から15世紀前葉と考える。

A-SK1053 24は底径6cmのロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。

A-SK1060 25はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。

A-SK1061 26は口径12.2cm、器高2.3cmの京都系土師器で、16世紀後葉から末葉と考える。

A-SK1062 27は8世紀後半から9世紀前半頃の土師器の蓋と考えられる。28はロクロ成形による在地系土師質土器の皿で、器高は1.5cmである。口縁部の立ち上がりは小さく、底部の器壁は厚くA-SDI505出土の同類の皿に類似する。

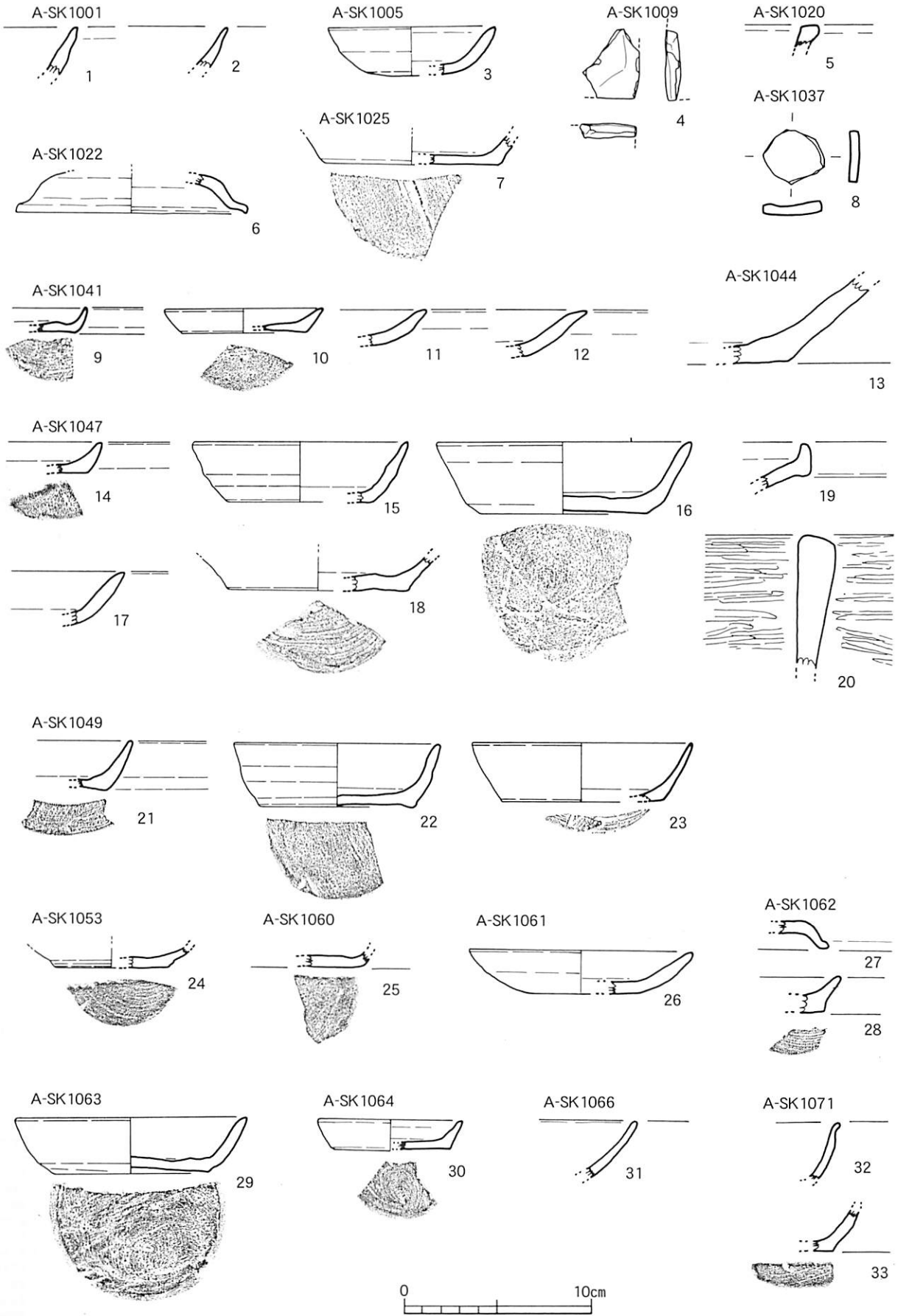
A-SK1063 29はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、口径12.4cm、底径8.4cm、器高2.9cmで、口縁部の器壁はほぼ一定で、先端が尖る。

A-SK1064 30は口径9.8cm、底径6.4cm、器高1.6cmのロクロ成形による在地系土師質土器で、口縁部の立ち上がりが高く、小型の坏である。

A-SK1066 31は、器壁が均一で薄く、器面調整は横方向のヘラ磨きであり、この調査区で出土する8世紀後半から9世紀前半頃の土師器の坏の口縁部と思われる。

内黒土器

A-SK1071 32は外面が褐色、内面が黒色の内黒土器である。33はロクロ成形による在地系土師質土器で、口縁部の立ち上がりから坏と考える。



第2-114図 府内町跡20次A調査区土坑出土遺物実測図



4. 井戸

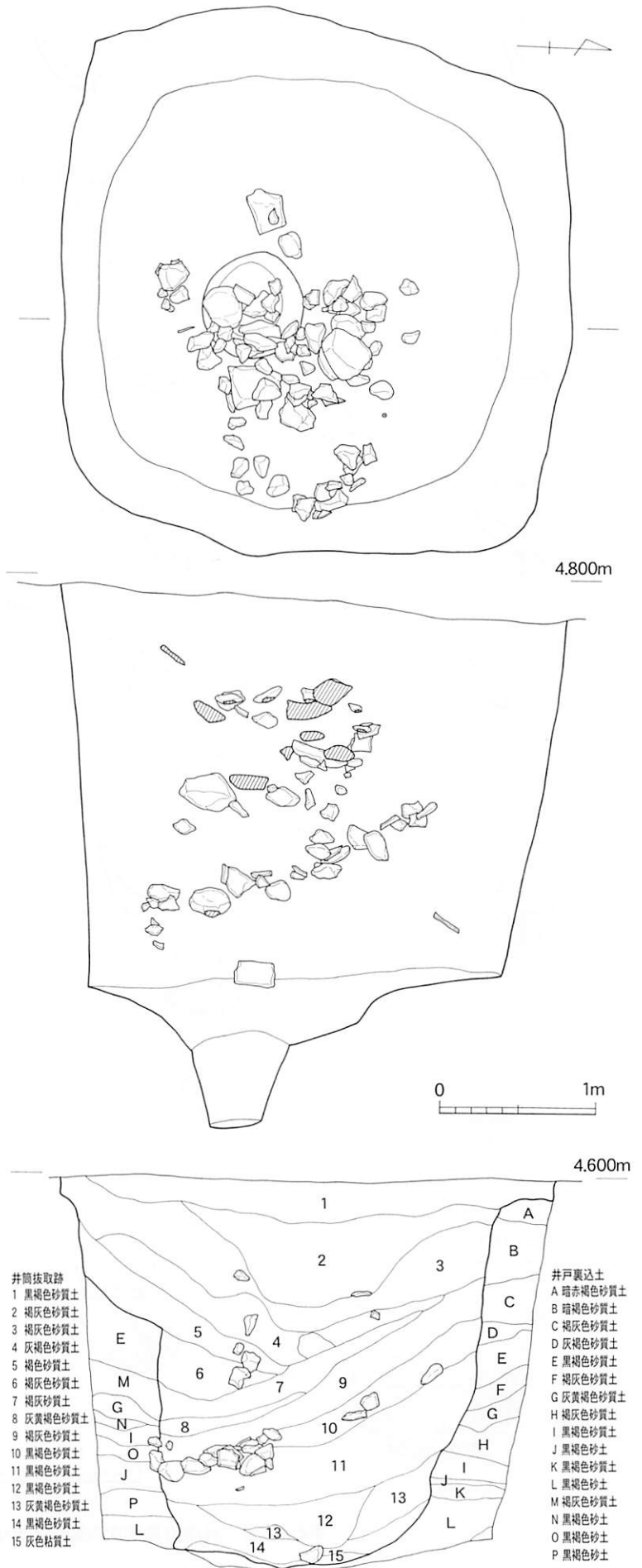
府内町跡20次調査A区からは井戸が1基検出されている。この調査区の周辺である北側の府内町跡21次調査区や南側の府内町跡20次調査B区では、数基の井戸が検出されていることから、井戸の空白地帯とも言える。

A-SE1045(第2-115図)

井戸遺構であるA-SE1045は調査区の南西隅、K-41区で検出された。井戸は、平面を南北8.2m、東西3.4mの緩い方形にとり、それをほぼ垂直に2.5m掘り下げ、竪穴を掘削している。それから、その底面のほぼ中央に、上面径約80cm、底面径約40cm、深さ約80cmの円形土坑が掘り下げ、最下部の井筒を設置したものであると思われる。

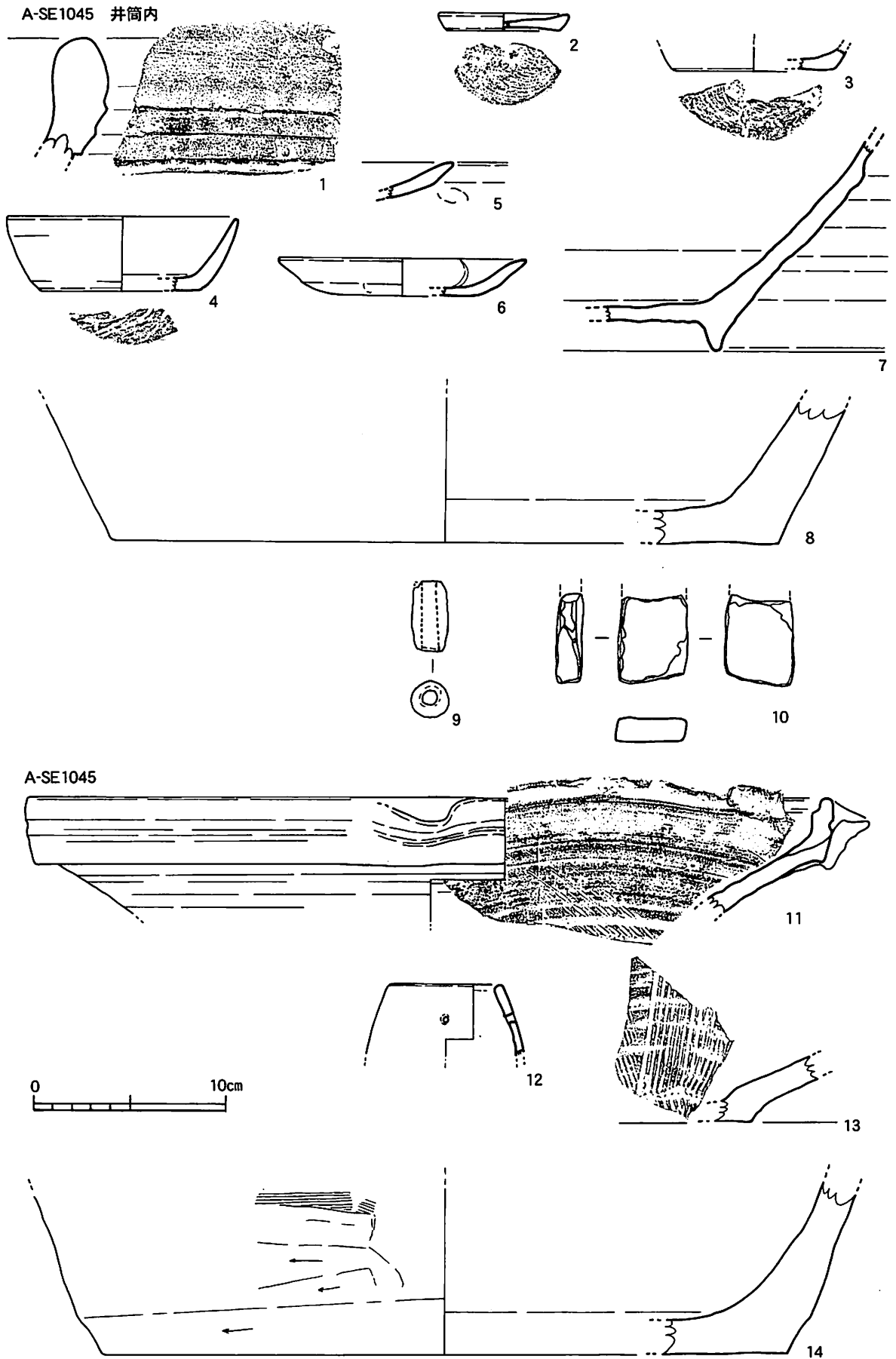
しかし、土層断面を観察すると、最下部まで完全に掘り返しが行われており、井筒は撤去されている。

出土遺物は、この掘り返しを行った時の埋め戻し作業の中で、大小の礫と一緒に廃棄されたものである。これらの遺物は、第2-116図に図示したが、1~10の井筒内と表示したのは、遺構の掘り下げ直後、中心部から集中的に遺物が出土したため、井筒が残っていると考え、取り上げを別にしたものである。しかし、結果的にはこの遺物も他に図示したものと同じ状況で埋まったものと推測される。

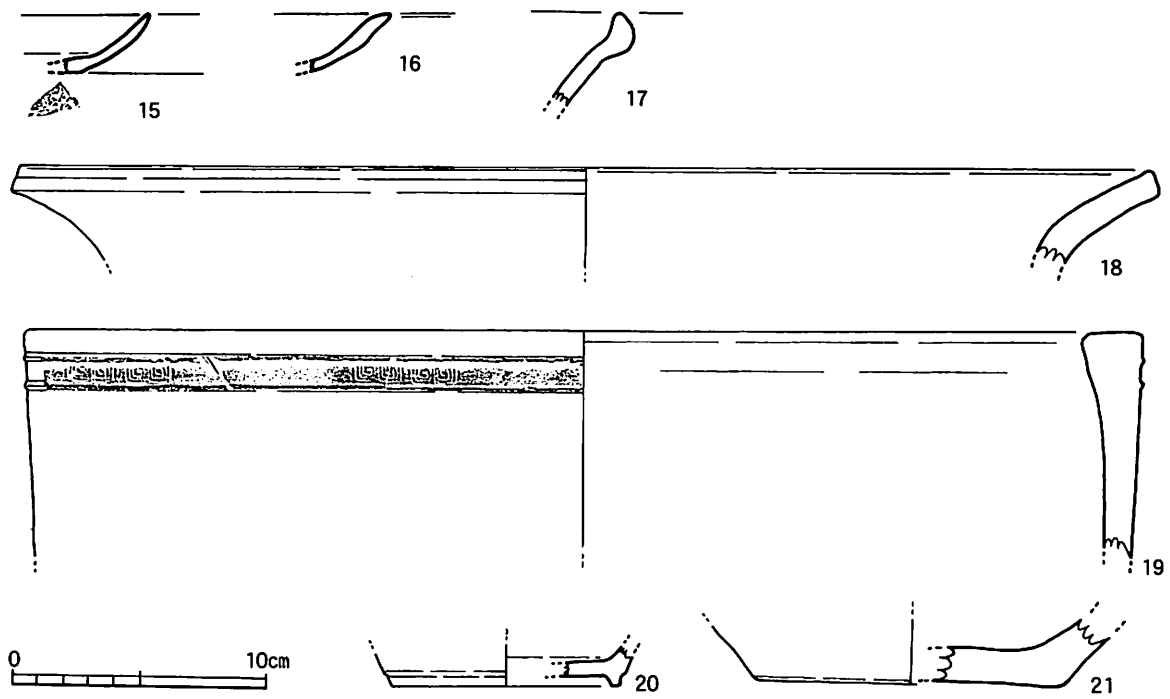


- 備前系 1は備前系陶器の大甕の口縁部である。2・3・4はロクロ成形による在地系土師質土器である。2は皿で口径7cm、底径6cm、器高0.9cmで、口縁部の立ち上がりはほとんど無く、端部が肥厚した状態である。3は底径8.4cmの坏で、4も口径12cm、底径8.4cm、器高3.9cmの坏である。この3点は、東側にあるA-SD1505と同類で、井戸を埋める際に混入したものと考えられる。
- 備前系 5・6は京都系土師器で、5は外面に指圧痕が残る。6は口径13cm、器高2cmで、内面には指による撫で上げ痕が残る。7は断面三角形の高台が巡る鉢の底部で、備前系陶器であろうか。8も備前系陶器で、大甕の底部で、底径35cmである。
- 土錘 9は土錘の完形品である。長さ3.7cm、最大径2cm、12.5gで、他の紡錘形の土錘に比較すると太くて穴が大きく、0.7cmである。
- 砥石 10は半分を欠くが、扁平な天草石製の小型の砥石である。残された長さは4.5cmで、幅は3.7cm、厚さは1.3cmである。
- 備前系 以下、第2-116図11~14・第2-117図の遺物は、A-SE1045の全体から出土した遺物である。11~14は備前系陶器である。11・13は挿鉢で、11は口径42cmで、注口部を持つ。口縁部内面には凹線状の窪みが巡る。挿り目は斜め方向に施文されている。13は底部であるが、ここにも斜め方向の櫛歯状工具による挿り目が施文されている。12は口縁部が内湾する器壁の薄い器種である。口径6cmの口縁部下には焼成前の穿孔があり、掛け花入れの可能性もある。14は底径36cmの、大甕の底部である。内面は横方向の撫でて、外面底部近くは、ヘラ削りによる器面調整で、自然釉が付着している。
- 第2-117図15はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、断面を見ると、口径に比較すると底径が小さい碗状の形態と考えられる。16は京都系土師器である。器面は横方向の撫でて調整されている。17・18は須恵質土器で、17は口縁部外面が肥厚する東播系の鉢である。18は口縁部が大きく外反する口径約45cmの大甕と考えられる。胴部は不明であるが、格子目叩きが想定され、亀山系須恵質土器と考えられる。
- 19は、瓦質土器の火鉢である。器面は内外面横方向のヘラ磨きで器面調整され、口径44cmの口縁部は肥厚し、口唇部は平坦に仕上げている。口縁部外面には平行に二条の細い突帯文が廻る。その間には2単位を1つとする雷文を並べて二度押す、スタンプ文が付けられている。
- 20は底径9cmの須恵器の坏である。底部に高台が付く、8世紀後半から9世紀前半と考えられる。21は瓦質土器の底部である。底径11.8cmで器面は撫でて仕上げで、器面調整されている。
- 銅銭 第2-118図22の銅銭は行書体で書かれた「紹聖元寶」で、初鑄年は1094年（北宋）である。
- 以上の出土遺物から、井戸の時期は、第2-116図5・6の京都系土師器や11の備前系陶器の挿鉢が出土していることから16世紀後葉から末葉に近い時期に機能していたものとする。

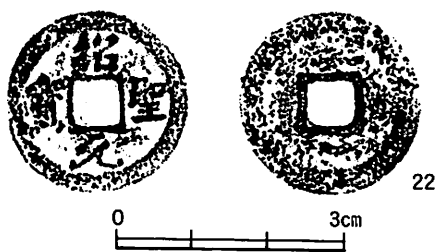
第2節 遺構と遺物



第2-116図 A-SE1045出土遺物実測図(1)



第2-117図 A-SE1045出土遺物実測図(2)



第2-118図 A-SE1045出土銭実測図

### 5. 柱穴及び柱穴状遺構

府内町跡20次調査A区では、さまざまな規模の掘り込みが検出された。このうち比較的大型のものを土坑として報告を行った。これに対し、小型の掘り込みは、直接建物とは結びつかないが、遺物の出土したものを中心に、柱穴及び柱穴状遺構として、第2-119図に遺構、第2-120・2-121図に遺物を図示し報告を行う。

#### A-SP036

A-SP036は南北40cm、南北40cm、深さ15cmの規模の浅い遺構である。出土遺物は第2-120図1～5に図示した。1・3・4はロクロ成形による在地系土師質土器である。1は口縁部のみで、3は底径9.2cmの底部である。4は口径12cm、底径8.2cm、器高4.1cmの坏である。2点の坏は底部周辺の器壁が厚く、口縁端部にかけて直線的に延び、先端が尖る。

2は口縁部を欠くが、底径3.6cmの須恵質であり、瀬戸美濃系陶器の坏と考える。5は底径6cmの瓦質土器の坏である。

この遺構の時期は、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏の形態から、15世紀前葉と考える。

#### A-SP043

A-SP043は直径32cm、深さ約50cmの遺構である。遺物は第2-120図6～8で、6の口縁部と、7の底径6.4cmの底部は、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。8は一部を欠くが残された長さは4.2cm、最大径1.1cm、重さ5.4gである。

#### A-SP045

A-SP045は直径約32cm、深さ26cmの遺構である。遺物は第2-120図9で、口縁部が屈曲する土鍋である。内面は横方向の刷毛目で、外面は横方向の撫でで、指圧痕が残る。

#### A-SP077

A-SP077は長径40cm、短径30cm、深さは22cmの遺構である。遺物は第2-120図10の、底径7.2cmのロクロ成形による底部の厚い在地系土師質土器の坏である。

#### A-SP081

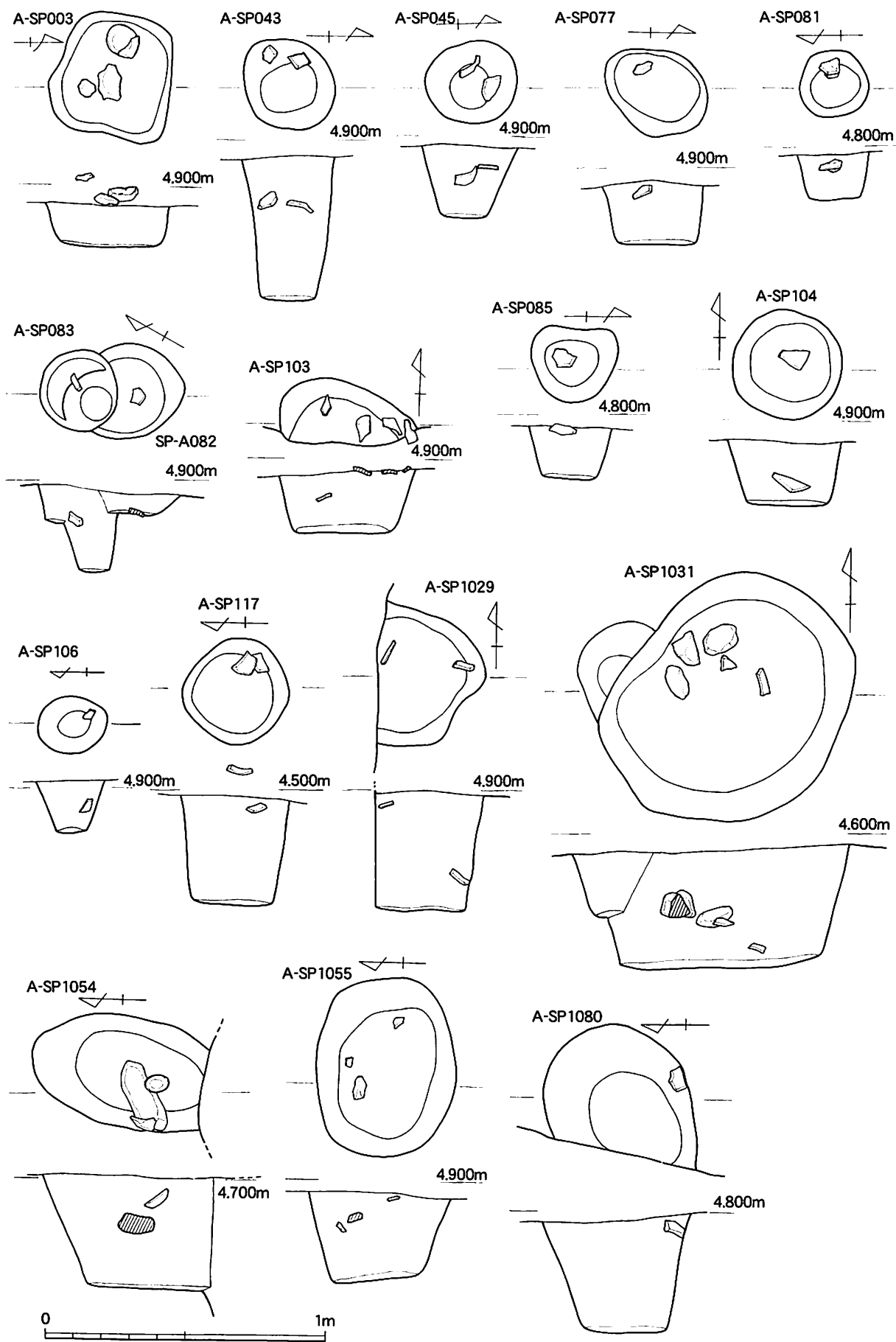
A-SP081は直径24cm、深さは15cmの遺構である。遺物は第2-120図11の土器で、底径6cmの上げ底の弥生時代の甍形土器である。磨滅しており、混入品と考える。

#### A-SP082

A-SP082はA-SP083と切り合う直径33cm、深さは7cmの遺構である。図示はしていないが、土師質土器の破片が出土している。

#### A-SP083

A-SP083はA-SP082と切り合い、直径28cm、深さは30cmの遺構で、二段掘りになっている。遺物は第2-120図の12のロクロ成形による在地系土師質土器の坏と瓦質土器の破片が出土している。



第2-119図 府内町跡20次調査A区主要柱穴実測図



第2節 遺構と遺物

A-SP085

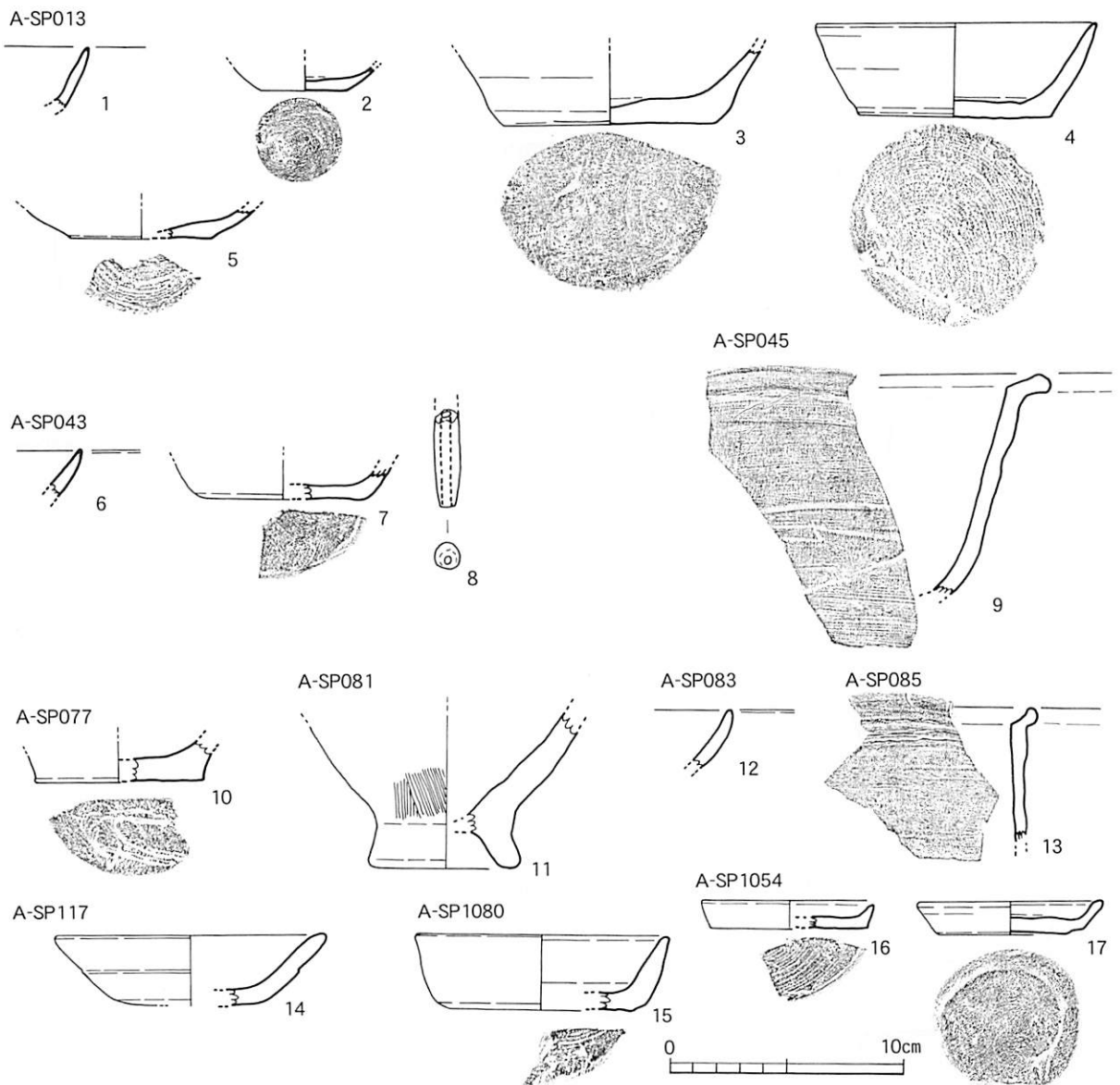
A-SP085は、東西27cm、南北32cm、深さ18cmである。遺物は、第2-120図に図示した13の口縁部が屈曲する土鍋である。

A-SP103

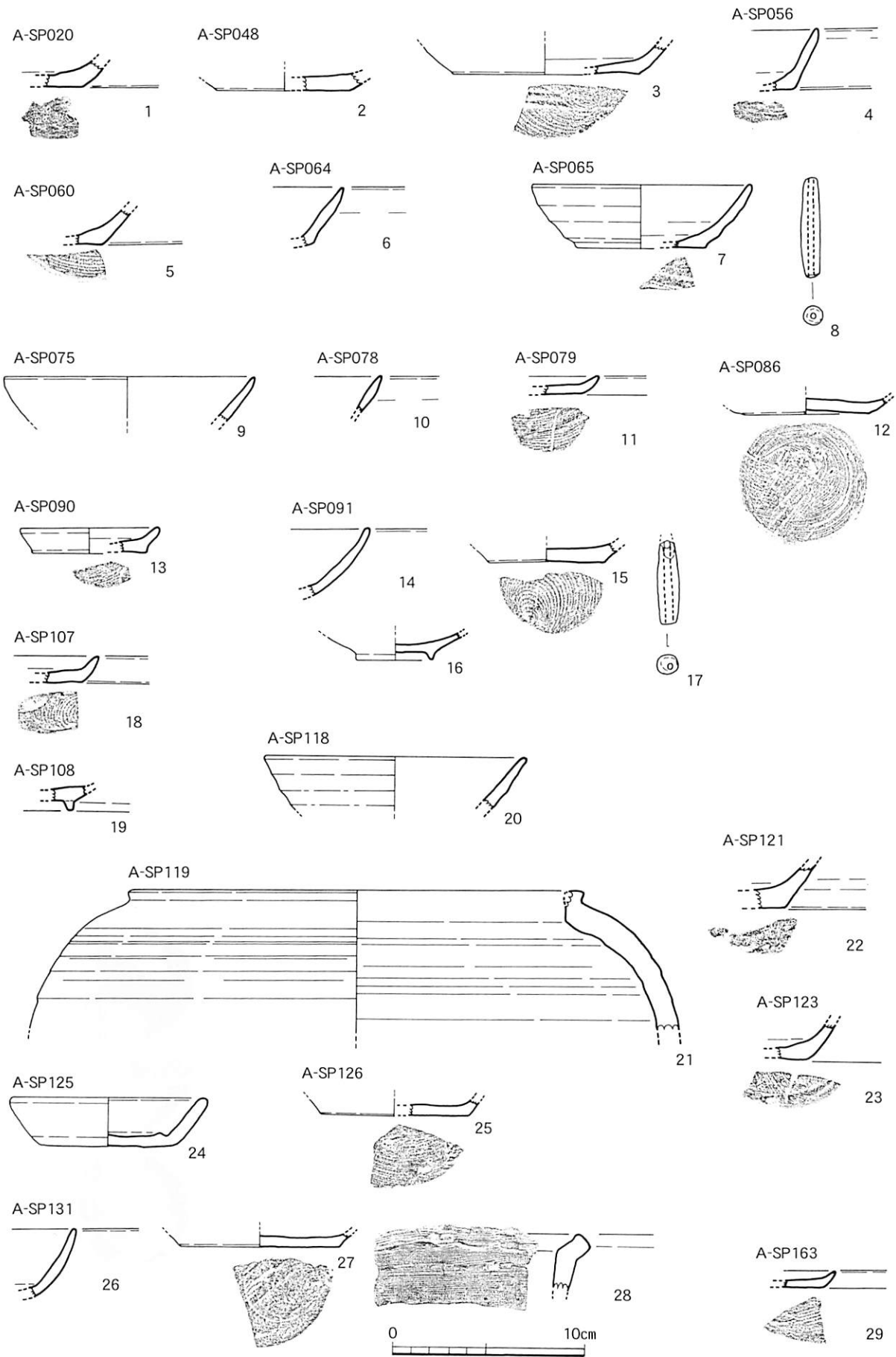
A-SP103は南側をA-SD1505と切り合う。確認できる規模は、東西50cm、南北20cm以上、深さ22cmである。遺物は、ロクロ成形による在地系土師質土器の破片が出土している。

A-SP104

A-SP104は直径39cm、深さ23cmで、遺構内からは、備前系陶器の小片が出土している。



第2-120図 府内町跡20次調査A区主要柱穴出土遺物実測図



第2-121図 府内町跡20次調査A区SP出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

A-SP106

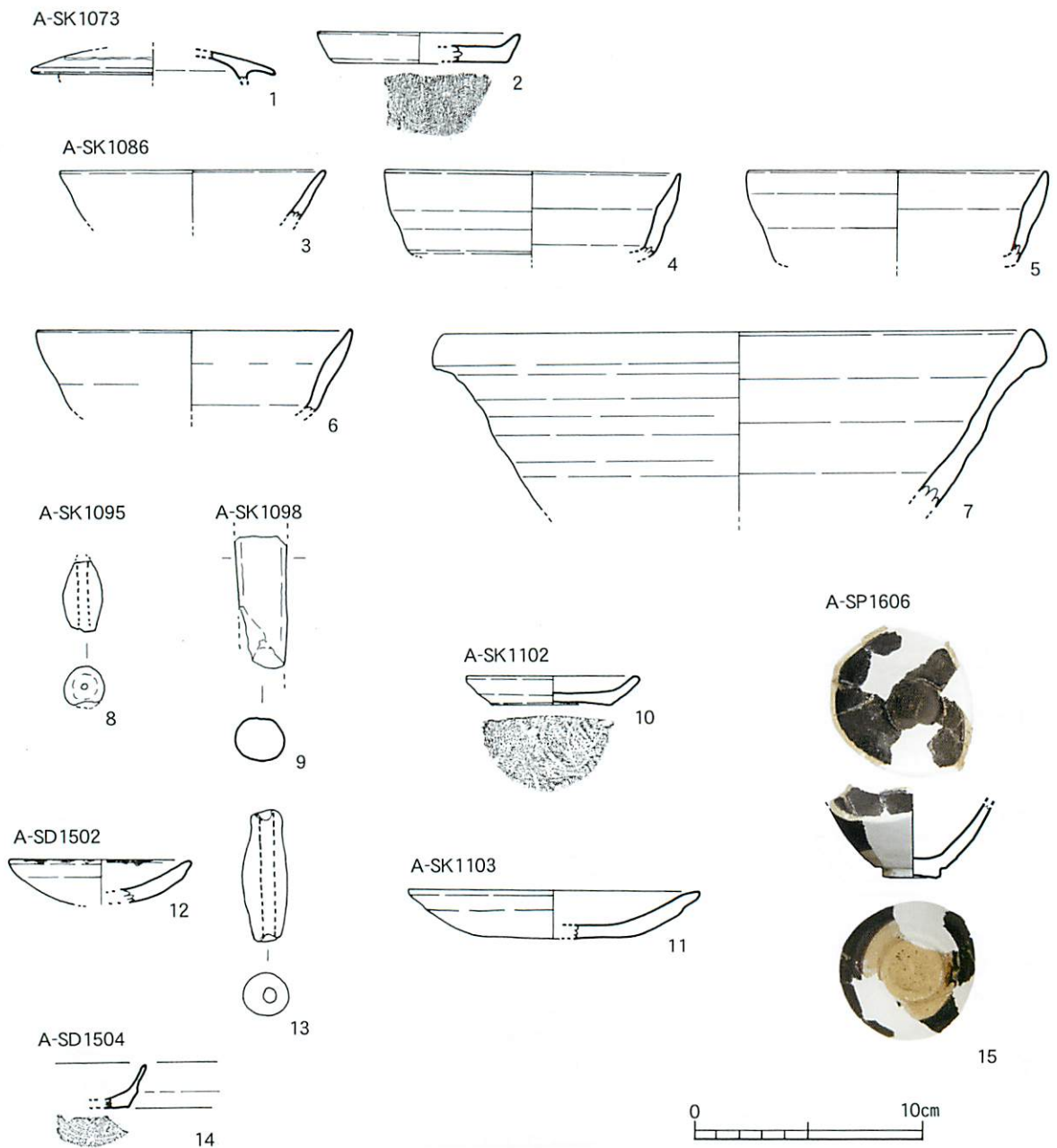
A-SP106は南北25cm、東西20cm、深さ18cmである。遺構内からは、ロクロ成形による在り系土師質土器の破片が出土している。

A-SP117

A-SP117は直径38cm、深さ40cmで、遺構内からは、第2-120図14の口径10.4cmの京都系土師器が出土している。16世紀後葉から末葉である。

A-SP1029

A-SP1029は西側の壁沿いで検出された直径約50cm、深さ43cmの遺構で、ロクロ成形による在り系土師質土器と須恵質土器の小片が出土している。



第2-122図 府内町跡20次調査A区各土坑出土遺物実測図

## A-SP1031

A-SP1031は南北90cm、東西80cm、深さ42cmの大型の遺構である。遺構内からは、礫のほか、ロクロ成形による在地系土師質土器の破片が出土している。

## A-SP1054

A-SP1054の南側は、京都系土師器を出土するA-SP1039と切り合う。遺構の規模は南北約70cm、東西40cm、深さも40cmである。出土遺物は、第2-120図に図示した16と17のロクロ成形による在地系土師質土器の皿で、口径7.4cm、底径6.8cm、器高1.1cmで、17は口径8cm、底径6cm、器高1.4cmである。

## A-SP1055

A-SP1055は南北約65cm、東西50cm、深さも33cmである。遺構内からは小破片であるが、ロクロ成形による在地系土師質土器、瓦質土器、須恵質土器が多数出土している。

## A-SP1080

A-SP1080は西側の壁沿いで検出された南北約52cm、東西55cm、深さも42cmである。遺構内から第2-120図15に図示した、底部周辺の器壁が厚く、口縁端部にかけて尖るように成形する、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。口径11cm、底径9cm、器高3.3cmである。

以上のほか各柱穴および柱穴状遺構から出土した遺物を第2-121図に遺構名を明記し報告する。

1～6はいずれも小破片であるが、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。2の底径は7cm、3は9.8cmで、口縁部である4は器高3.2cmである。7・8はA-SP065出土であるが7は口径11.6cm、底径6.8cm、器高3.3cmの碗形の在地系土師質土器である。また8は土錘で、長さ5.3cm、径1cm、重さ5.4gである。9～13はロクロ成形による在地系土師質土器で、9の口径は13.2cm、皿である11の器高は1cm、12の底部の径は6.4cmで、復元完形の13の皿は口径7.2cm、底径6cm、器高1.3cmである。

A-SP091からは14～17が出土している。15は底径6cmの在地系土師質土器の坏である。14・16吉備系土師器は色調が白く、底部は径4cmで断面三角形の小さい高台が付く吉備系土師器である。また17は一部を欠く土錘で、長さ4.5cm、径1.2cm、重さ4.7gである。

18は器高1.4cmの在地系土師質土器の皿である。19は小さい高台が付く瓦器碗の底部である。20は口径14cmの在地系土師質土器の坏である。21は備前系陶器で、口縁内端部を欠くが径21cmの水屋甕である。22～29の24は口径12.4cmの京都系土師器で、28は口縁部が屈曲する土鍋であるが、それ以外はロクロ成形による在地系土師質土器である。

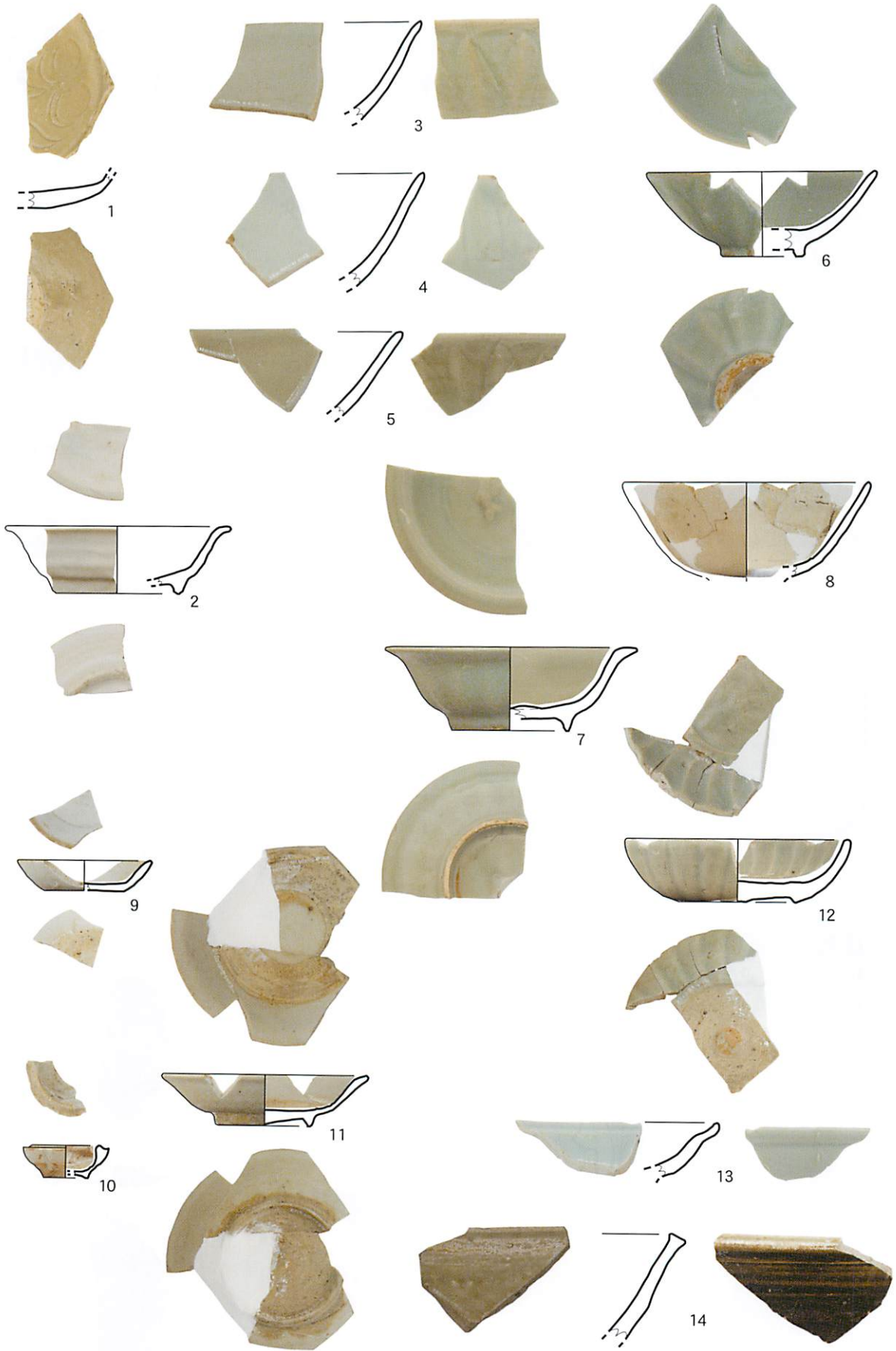
第2-122図は土坑出土の遺物である。1・2はA-SP1073出土で、1は備前系陶器の径10.6cmの受けの付く蓋である。2は口径9cm、底径7.8cm、器高1.3cmの在地系土師質土器の皿である。3～7はA-SP1086出土で、7は東播系須恵質土器の口径27cmの鉢であるが、それ以外はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。口径は3が11.6cmであり、4は12.8cm、5は12.8cm、6は13.5cmで口縁部の器壁は中位が厚く口縁端部は尖る器形で同一個体の可能性が高い。

A-SP1095出土は長さ3.3cm、最大径1.8cm、重さ6.8gの紡錘形の土錘である。9はA-SP1098出土で、土鍋の脚で、長さ5.8cm残されており、径約2.2cmである。A-SP1102からは10の在地系土師質土器の口径7.6cm、底径5.8cm、器高1.3cmの皿が出土しており、A-SP1103からは11の口径12.9cmの京都系土師器が出土している。16はA-SP1606出土で、底径3.1cmの瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。

## 6. 整地土及び包含層

府内町跡20次調査A区の調査では、表土の除去から遺構検出に至るまでの整地層、又は遺物包含層から多量の遺物が出土している。ここでは、それらの中から、主要な遺物を第2-123～2-133図に図示し、報告する。

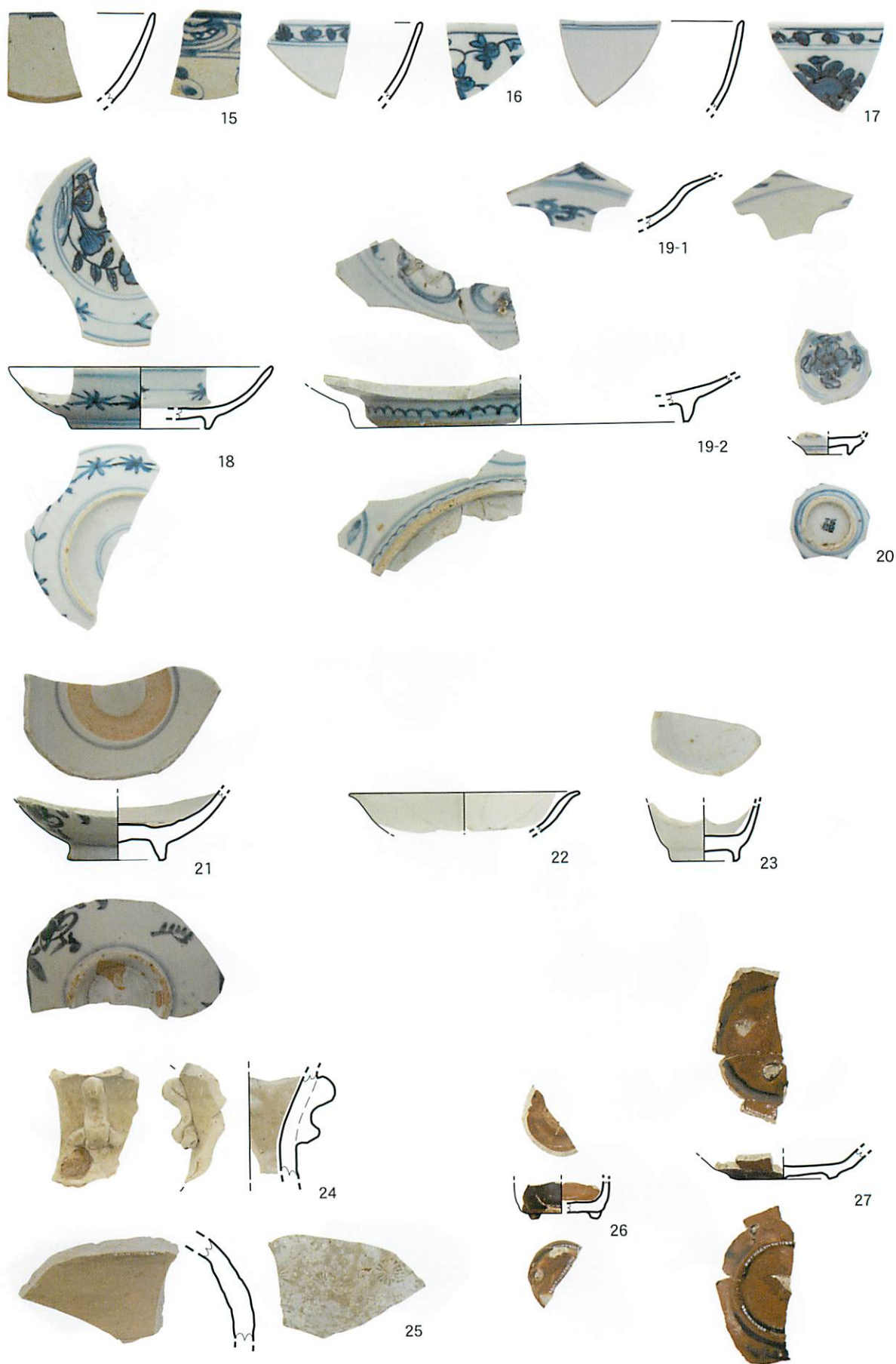
- 第2-123～2-125図の24～34以外は貿易陶磁器である。第2-123図の1は見込みに文様のある同安窯系青磁である。2は口径11cm、底径5.8cm、器高3.3cmの中国産白磁である。3～6は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、外面には鎬蓮弁が付く。図上復元できる6は口径11.8cm、底径3.4cm、器高4.9cmで外面に鎬蓮弁が巡る龍泉窯系青磁碗である。7も龍泉窯系青磁碗であるが、口縁端部が外反し口径は11.4cm、器高4.3cm、底径5.7cmで全面施釉され、見込みに双魚文の一部が確認される。8は口径12.2cm、残された器高は4.7cmの中国産白磁碗である。9は口径6.6cm、底径4.0cm、器高1.5cmの中国産の口禿の白磁皿である。
- 同安窯系  
龍泉窯系  
口禿白磁  
合子  
「富貴長春」  
景德鎮窯系  
漳州窯系  
瀬戸美濃系  
梅瓶  
瀬戸美濃系  
肥前系  
磁甕窯系  
舟徳利  
常滑系  
備前系  
掛花入れ
- 10は口径3.2cm、底径2.2cm、器高1.6cmの中国産青白磁の合子である。11は口径10cm、底径4.3cm、器高2.5cmの中国産白磁皿である。底部は蛇の目釉剥ぎである。12は口径10.4cm、器高3.0cm、底径5.6cmの龍泉窯系青磁皿である。見込みに「富貴長春」と推定される銘が確認される。13は、龍泉窯系青磁の皿で、14は中国産褐釉陶器である。
- 第2-124図の15～20は景德鎮窯系の青花磁器である。15～17は碗であり、18は口径13.2cm、底径6.6cm、器高3.1cmの皿である。19-2は底径16.9cmの大皿の底部で、19-1は、皿の口縁部である。20は底径2.1cmの小杯の底部である。見込みに花文、底面に「福」が書かれている。21は底径4.2cmの漳州窯系青花碗である。見込み部は蛇の目釉剥ぎである。22は口径11.6cmの皿、23は底径2.6cmの小杯で、中国産白磁である。第2-125図の24～27は瀬戸美濃系陶器で、24は細い頸部の瓶で、装飾が付く。25は梅瓶の肩部と考え、菊花文のスタンプが連続して付く。26は底径3.4cmの香炉と考える。3ヶ所に小さな脚が付く。27は底径4.8cmの皿で、全面施釉されており、見込みには胎土目が見られる。
- 第2-125図の28～33は瀬戸美濃系陶器の皿である。28は口径9.2cm、底径5.9cm、器高2.7cmで、高台内側は露胎である。29は口径11.4cm、底径6.4cm、器高1.9cmで、高台内側と見込み部は露胎である。30は口径11cm、底径7cm、器高2.3cmの折縁皿で見込みは露胎である。31は口径11cm、底径4.4cm、器高2.9cmの折縁ソギ皿である。見込み中央に菊花文がスタンプされている。32は口径11.3cmの折縁ソギ皿である。33は底径5cmの底部で、見込みに重ね焼きの跡が残る。
- 34は国内産で、肥前系陶器と考える。口径10.6、器高2.8cm、底部は碁笥底で、径は3.2cmを測り、外面の口縁部周辺以外は露胎で、見込みに胎土目が付く。
- 第2-125図35～41は磁甕窯系陶器で、口縁部は外反し輪花状になり、外面にヘラで文様が描かれる。小片であるが、器面には緑色の釉が付けられている。
- 42は朝鮮王朝産陶器の舟徳利の底部で、底径は10cmである。内外面撫で仕上げである。
- 第2-126図の43～45は常滑系陶器で、口縁部の折返し部の幅は3cmである。44と45の口径は、15.2cmと17.6cmで小型の壺であり、45の口縁部には自然釉が見られ、胴部最大径は21.6cmで、周辺は縦方向の刷毛目調整である。
- 46～59は備前系陶器である。46は口径6.2cmで、47と同一個体であり、最大径は8.2cmの掛花入れ考えられる。また、この2点と第2-116図12は同一個体と考えられる。48～52は口縁部が内湾する鉢である。中でも51は口径28.2cm、底径18cm、器高9.2cmで口縁端部がわずかに内湾する皿状をしている。底部にはヘラ記号が書かれている。また、52は口径14.8cm、底径8.8cm、器高4.9cmの鉢形である。いずれも器面は横撫で調整されている。53～56は徳利形と考えられる。53は口縁部で、口径3cmである。54～56は底部で、底径は54が5cm、55が7cm、56が5.2cmで、54と55にはヘラ記号が



第2-123図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(1)

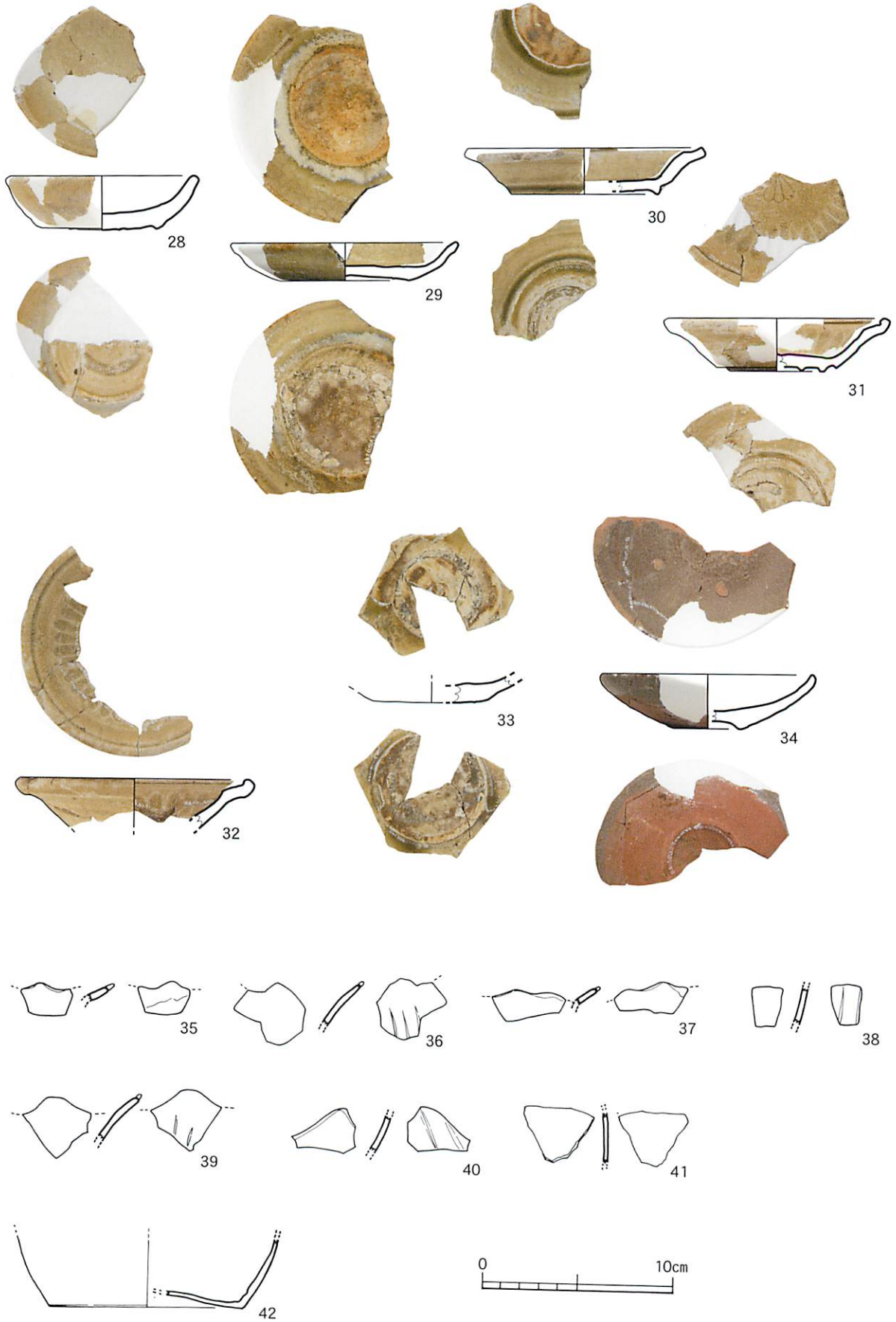


第2節 遺構と遺物



第2-124図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(2)

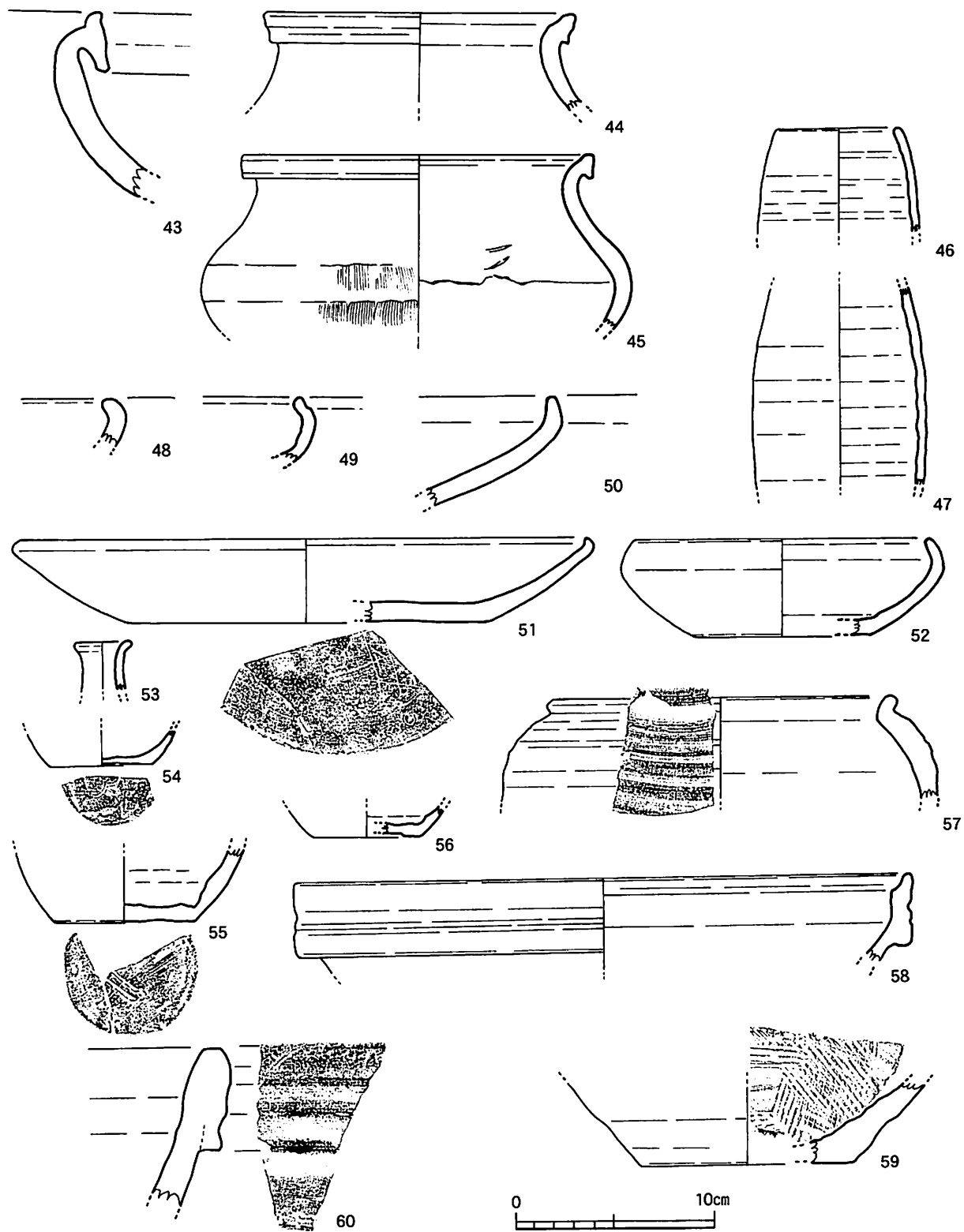




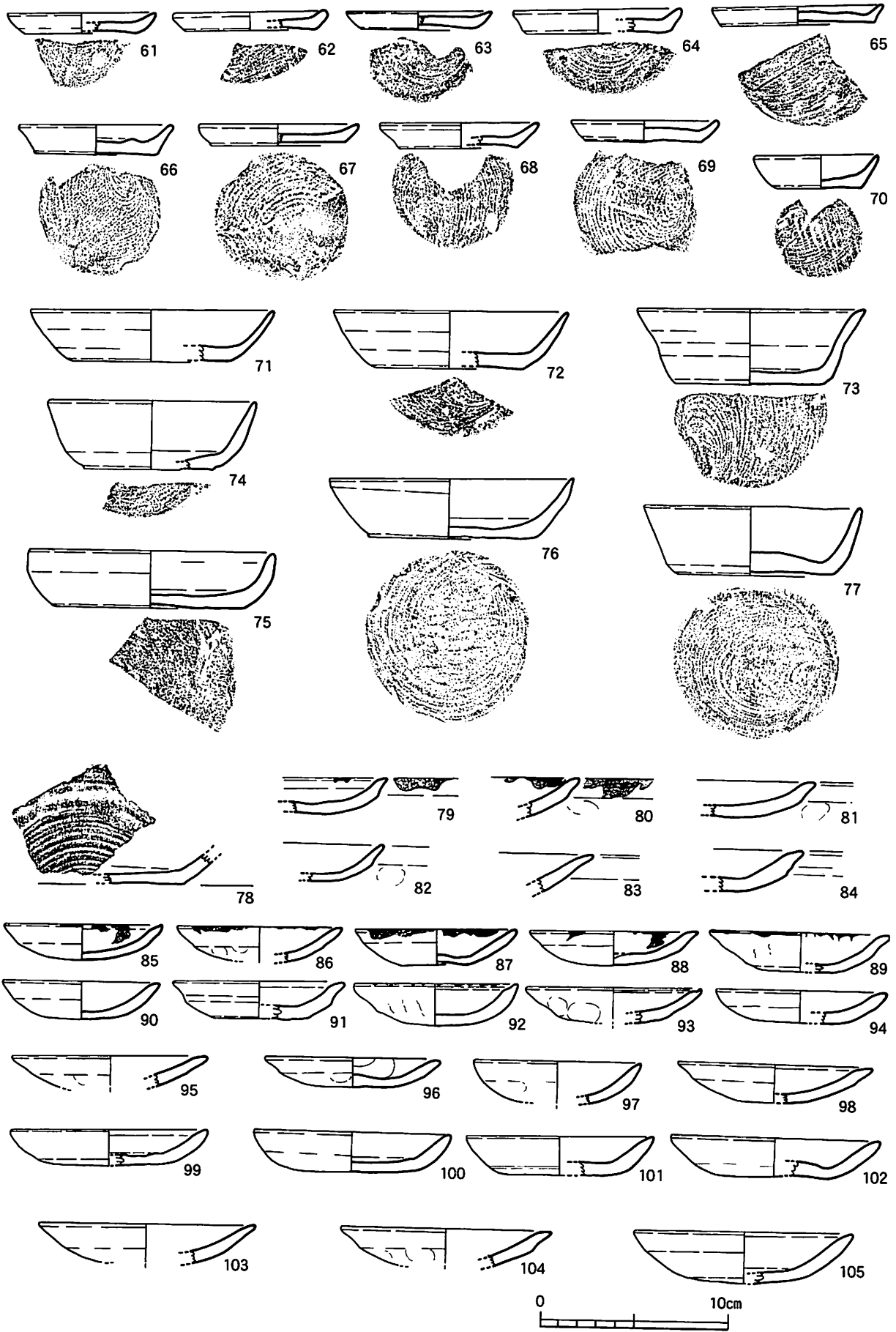
第2-125図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(3)

第2節 遺構と遺物

水屋甕  ある。また、56の底部は幅広の低い高台が廻り、精製粘土を使用している。57は口径17.4cmの水屋甕で、58は口径30.8cmの挿鉢で、底径10.4cmの59の底部斜め挿り目に加えらると想定される。60は大甕の口縁部である。

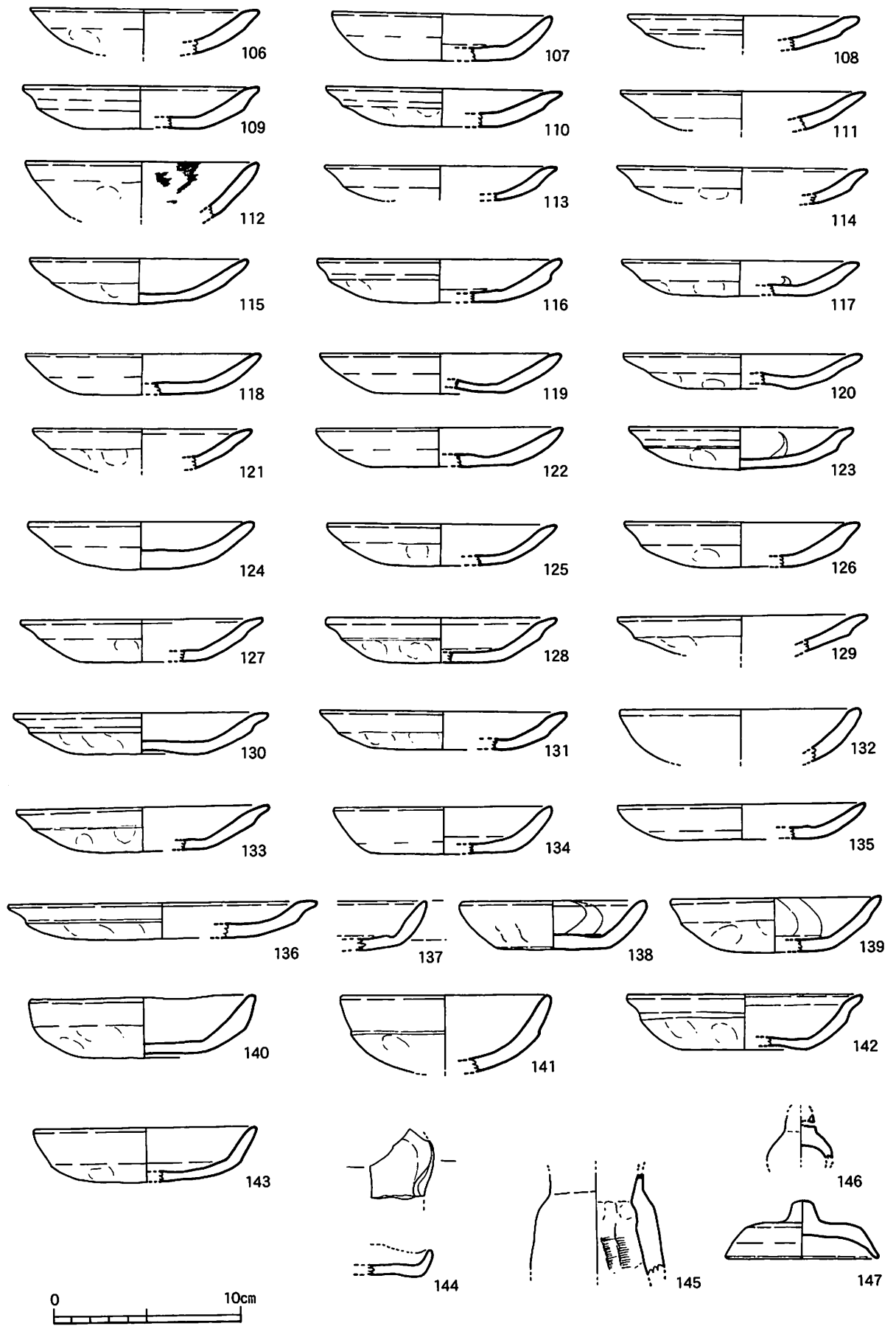


第2-126図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(4)

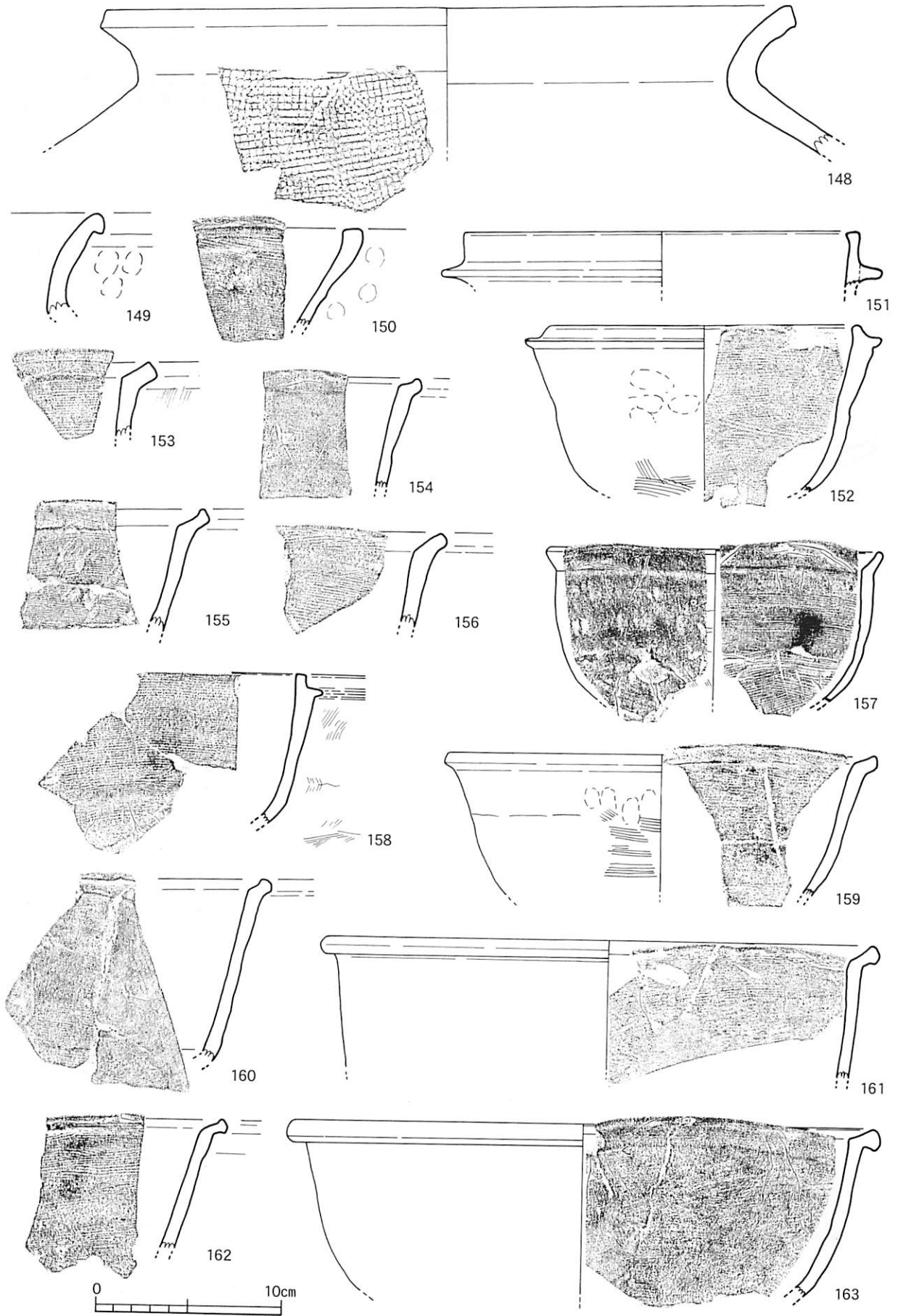


第2-127図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(5)

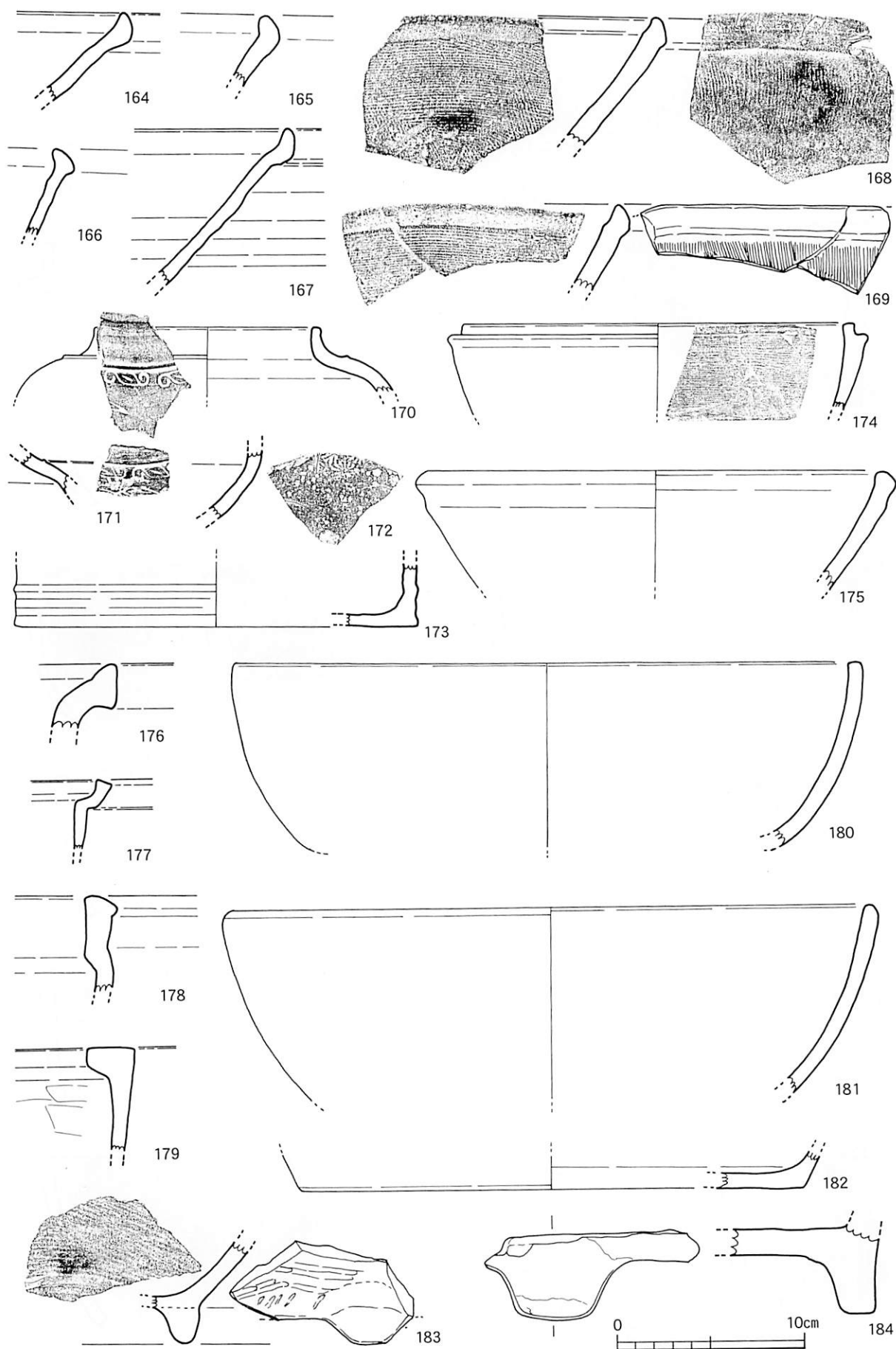
第2節 遺構と遺物



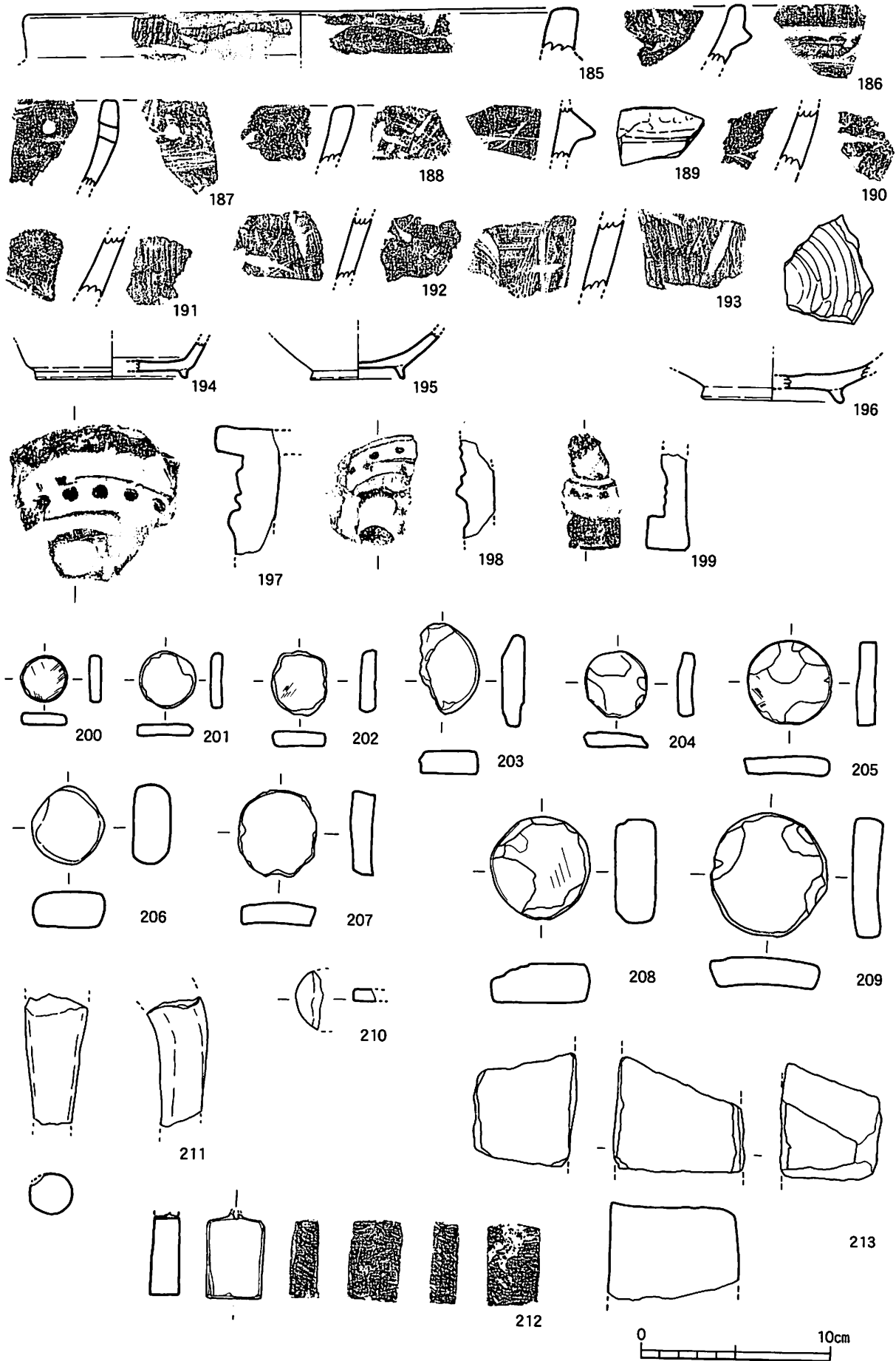
第2-128図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(6)



第2-129図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(7)



第2-130図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(8)



第2-131図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(9)



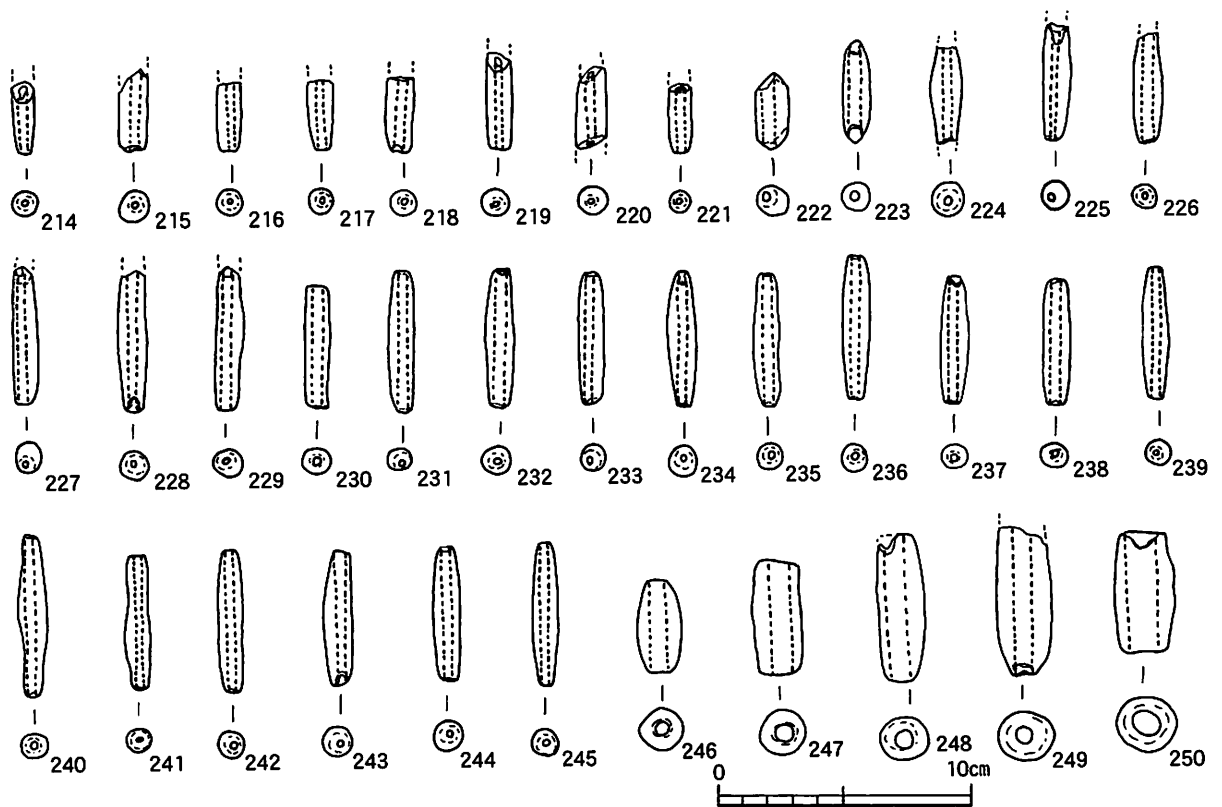
第2節 遺構と遺物

第2-127図の61~77はロクロ成形による在地系土師質土器の皿である。61~69の口径は64・65が9cmを超すが、他は8.5cm前後である。糸切された底径も、68が最大で口径より2.2cm小さい6.4cmであるが、他は1~2cm小さい。器高は、66は器高が1.6cmとやや高いが、他は1~1.4cmである。70は口径6.7cm、底径4.7cmに対し器高が1.8cmと高く、小型の坏状をしている。71~77は在地系土師質土器の坏である。口径は74・77がやや小さく11.2cmと11.6cm、76はやや「歪」であるが最大で13.2~13.5cmを測る。71と75は13cmで、72・73は12.6cmと12.2cmである。底径は74が最小で7cm、75が最大で10cm、他は8.5cm前後である。器高は、口縁部形態と関連し、内湾気味になる75は3cmと低いが、大きく外反する73は4cmである。また、口径が小さく底部周辺の器壁が厚く、口縁端部にかけて薄くなる74・77も3.7cmと比較的高い。これに対し、口縁部の器壁の薄い71、口縁部上位が厚くなる76などは3cm前後である。

第2-127図78もロクロ成形による在地系土師質土器の皿であるが、内面に小さな段が付き、口縁部は「ハ」の字状に開く。

第2-127図79~105・第2-128図106~143は非ロクロ系土師質土器である京都系土師器である。85~94・96・97は口径8~9cm前半台がほとんどで、小型である。これらのうち、85~89の口縁部にスガが付着しており、灯明皿として再利用されている。95・98~105の口径は、10.5~11.5cmが主体を占める。また、第2-128図106~135は、口径12cm台から13cm前半である。そして、最大の口径は136の16.4cmである。このように、京都系土師器は少なくとも4~5法量に分化していることが判る。京都系土師器の時期は、16世紀中葉以降のもので、器壁の薄い119は比較的古いタイプであるが、大部分は16世紀後葉から末葉に属する。137~143は口径が10~12cmであるが、器高は3cm前後と、先に報告した京都系土師器より1cmは高く碗形をしている。

灯明皿



第2-132図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(10)

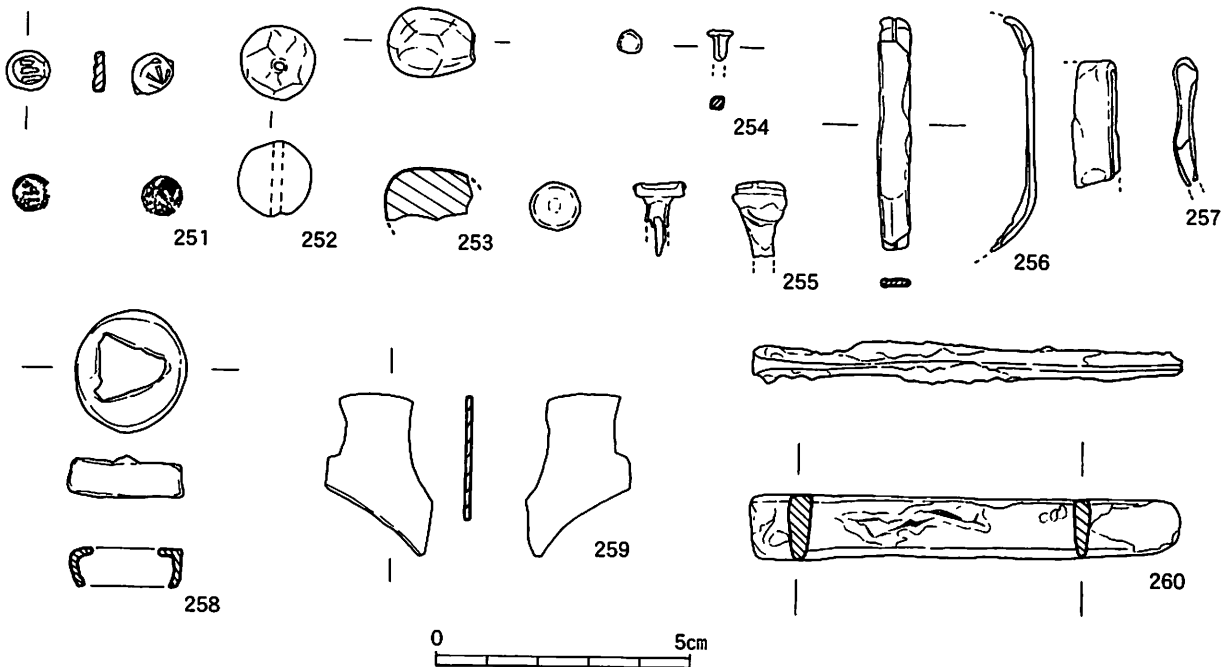
144は京都系土師器の口縁部2方向を内側に折り曲げて成形した耳皿である。145は頸部の径5cmの焼塩壺の破片と考える。146は上部につまみ状の突起が付き、そこに横方向に穿孔され紐状の形態を呈する。土鈴であろうか。147は口径8.2cm、器高3.1cmのつまみの付く蓋と考える。

第2-129図148は口縁部が外反し、胴部を格子目叩きで器面調整した口径36.8cmの亀山系須恵質土器の甕である。149も須恵質土器の口縁部で、外面には指圧痕が残る。

第2-129図150~163・第2-130図174は土鍋である。口縁部の形態は、150が外傾し口縁端部が肥厚する。内面は横方向の刷毛目で、外面は指圧痕があり、瓦質土器である。151は口縁部外面に突帯が廻る口径21.4cmの鍔付の土鍋である。152・158・第2-130図174は鍔付タイプの土鍋の突帯下位が肥厚した土鍋である。152の口径は16.4cmであり、器面調整は内面横方向の刷毛目であり、外面は指圧痕があり、底部周辺には刷毛目が残る。153~157・159~163は口縁端部が小さく屈曲する土鍋である。口径が計測できるものは、157が18.4cm、159が23.2cm、161が24.4cm、163が32cmである。このように、土鍋には大きさに各種類がある。器面調整は、内面は横方向の刷毛目であるが、外面は刷毛目のあと口縁部から胴部にかけて横方向の撫でや指押さえて調整している。なお、第2-131図211は6cm残された土鍋の脚である。

第2-130図164~167は口縁端部が肥厚する東播系須恵質土器の鉢である。器面は横方向の撫でて、内外面仕上げられている。166の一部には注口が認められる。また、167の口縁肥厚部の下位は変色しており、重ね焼きをしたものと思われる。

第2-130図168~184は瓦質土器である。168・169は口縁部が外傾する鉢で、内外面とも刷毛目で器面調整されている。170~172は同一個体である。口径12cmの壺形土器で、肩部に低い突帯が一条廻り、その下位に横方向の「S」字状スタンプ文が連続して押されている。また、胴部には菊花文のスタンプが押されている。A-SD1506出土の第2-23図77と同一個体の可能性が高い。173は底径21.5cmで、底部外端とその上位に細い突帯が巡る。175は口縁部外面に凹線が一条巡る口径24.4cmの鉢である。176~179は口縁部が屈曲する鉢である。176は外反し端部が肥厚する。177は口縁部が外側にクランク状に屈曲する。これに対し、178は内側にクランク状に屈曲する。さらに179は



第2-133図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(11)

第2節 遺構と遺物

内側に突出するように肥厚する。これらの器面はヘラ磨きで平滑に調整されている。180は口径33.6cm、181は口径34.2cmの鉢である。器面はヘラ磨きで、口縁端部を丸く仕上げている。183と184は以上の鉢の底部に付く脚である。これらもヘラ磨きで丁寧に仕上げられている。

滑石製石鍋

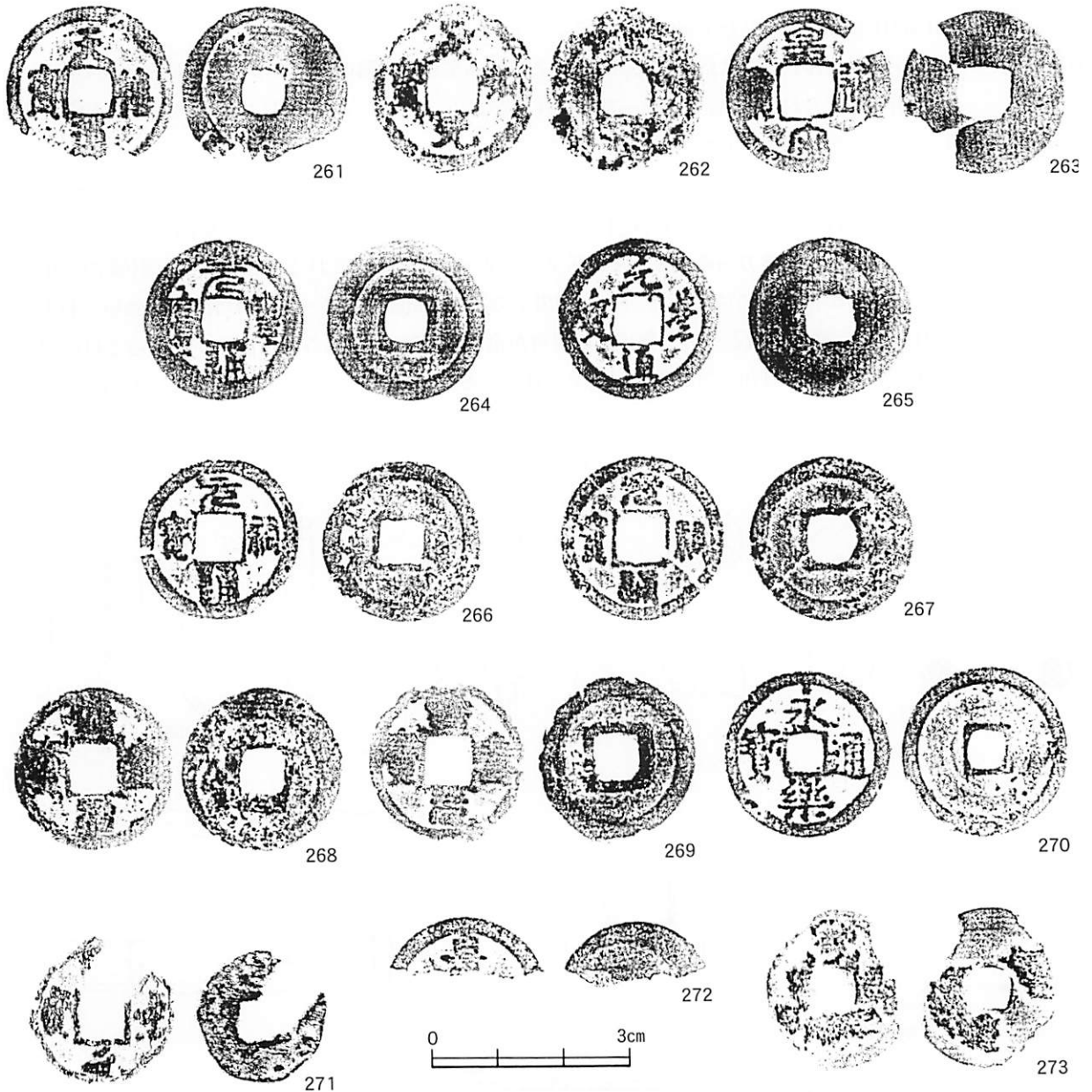
第2-131図185~193は滑石製の石鍋である。185の口径は29.6cmで、口縁部外面に186・189のような突帯が付く。また、187には穿孔が見られる。これら9点の滑石製品は、石鍋が破碎した破片の縁辺を研磨し、再利用している。

194は高台を持つ須恵器の底径8cmの坏である。195は底径5cmの瓦器碗である。196は底径7.4cmの土師器碗で、内面にヘラ磨き調整の跡が残る。

軒丸瓦

197~199は軒丸瓦である。瓦当には連珠文が見られ、中央には巴文があると推測される。

200~210は土師質土器の土器片を打ち欠き、研磨して円形に仕上げた遺物である。大きさは200が直径2.5cm、重さ5.7gで、最大は209で、直径約6.3cm、重さ92.2gである。素材も土器片が多いが、206・208は瓦と思われる。



第2-134図 府内町跡20次調査A区出土銅銭実測図

- 砥石 212・213は石製品で212は高さ4.5cm、幅3cm、厚さ1.4cmの滑石製で、上部に穿孔のあるつまみが付く。重さは50.2gである。213は大部分が打ち欠かれた砥石である。黄白色をしており、天草石の可能性はある。
- 土錘 第2-132図は紡錘形をした土錘である。37点を図示したが、半分近く破損している。完形品である230～250で、その様相を見ると、大きさや重量、形態から幾つかのグループに分類できる。214～245は細長い紡錘形をしており、長さは5.5cm前後に収まる。重量も5.5g前後である。次に大きいのが246で、長さ3.8cmと、短い紡錘形をしているが、重量は10.8gで、細長い紡錘形の倍近い重さである。次に重いグループは15.1gの247と17.3gの248である。しかし両者は形態が異なり247は側面観が長方形で4.7cmであるが、248は長く5.9cmを測る。次に、247の重量を増した形態が250で、重量は21.4gである。同様に、248の重量を増した形態が249で、一部を欠くが25.5g以上が想定できる。
- 太鼓形分銅 第2-133図に府内町跡20次調査A区から出土したガラス類似製品・金属を図示した。251は青銅製の太鼓形分銅である。大きさは、直径0.8g、厚さ0.2cmで、重量は0.5gで片面は丸く縁取りした中に「三」の字状の文様が陽刻されている。また、その裏面には「ノ」の字の傷状の文様が扇形に三つ陰刻されている。このタイプの太鼓形分銅は、中世大友城下町跡の調査でさまざまな大きさと重量が出土しているが、この資料が最小である。
- 水晶製の玉? 252と253は透明の玉である。水晶製の可能性が強い。252は直径1.5cmで、中央に1.5mmの孔が通っている。全体にヒビ状の亀裂が入る。253も同じ水晶製と思われる。破損しているため全体の形は不明である。
- 青銅製品 254はピン状の形態をした先端を欠くが残された長さ6mm、上面径4.5mmの青銅製品である。255は254を大きくした類似形態の青銅製品である。残された長さは1.5cmで、上面径は9.7mm、重さは1.3gである。256は長さ4.5cm、幅0.6cm、厚さ0.1cmの細長い青銅製品である。両端が湾曲する。257は厚さ約1mmの青銅製の板を二つに曲げた状態で出土した。残された形状は約2.4cm、幅0.7mmの二つ折り状である。258は直径2.2cm、高さ0.7cm、重さ3.3gの蓋状、あるいはキャップ状に仕上げた青銅製品である。259は、3.3cm×2.1cmの青銅板である。表面は平滑で、和鏡の破片の可能性もある。260は小柄と思われる青銅製品である。長さは8.4cmで、幅1.4cm、厚さ約0.5cmである。
- 銅銭 以上の他、錆びて粘土と一体化し、形状が不明になっている鉄器が多数出土している。
- 永楽通寶 第2-134図には出土した銅銭を図示した。261は真書体で書かれた「天禧通寶」で初鑄年は1017年（北宋）である。262は「景祐元寶」で初鑄年は1034年（北宋）である。263は篆書体で書かれた「皇宋通寶」で、初鑄年は1038年（北宋）である。264は篆書体で書かれた「元豊通寶」で、初鑄年は1078年（北宋）である。265は行書体で書かれた「元祐通寶」で、初鑄年は1078年（北宋）である。266・267は篆書体で書かれた「元祐通寶」で、初鑄年は1086年（北宋）である。268・269は篆書体で書かれた「紹聖元寶」で、初鑄年は1094年（北宋）である。270は「永樂通寶」で、初鑄年は1408年（明）である。271は銭の周辺を研磨し、小さくした銅銭である。銅銭の名称は不明である。272は銅銭の一部である。「景・・・」のみ判読できる。273は「寛永通寶」と考える。初鑄年は1636年（江戸）である。

### 第3節 小 結

府内町跡20次調査A区は、「府内古図」や明治時代の地籍図を基に、現在の地図上に復元した16世紀後半の豊後「府内」の中での位置は、万寿寺の北西の隅にあたる。発掘調査の結果、ほぼ全面から溝・廃棄用の土坑・礎盤建物・大小の柱穴状堅穴など各種の遺構が検出された。その時期は、おおきく14世紀中葉から15世紀前葉に属するグループと、16世紀後葉から末葉のグループの2時期に分けられる。

礎盤建物 14世紀中葉から15世紀前葉に属する主要遺構は、南北4間、東西3間以上に南側に7尺半、西側に約3尺の軒が付くA-SB01の礎盤建物遺構と、区画性の強い溝であるA-SD1501とA-SD1505である。これら以外の土坑も、A-SB01周辺で検出されている。A-SB01の礎盤建物遺構と二つの溝との関係は、同時期に存在していた可能性もあり、方位はN-9°-Eを基本とし、二つの溝はこれに直交する角度かまたそれに近い。また、距離関係はA-SB01の南端の柱穴列から南に約12.6m(42尺)離れてA-SD1505は掘削されている。この溝は、東端は調査区外に延びているため、不明であるが、西端は16世紀代の溝であるA-SD1506に切られているものの、この位置で終わると推測される。また、A-SD1505の南に掘削されている溝であるA-SD1501との間隔は、中心部間で、約6m(20尺)であり、両者はほぼ平行する。

第1南北街路 こうした主要な3遺構の施工角度は、第1南北街路の角度と同じである。この街路は府内町跡7次調査で、15世紀末葉から本格的に整備されるさらことが判明しており、それに先立ってこの街路の両側に大規模な溝が構築されている。また、府内町跡20次調査A区の北西方向に約150m離れた、府内町跡8次調査でもこの方位の15世紀代の溝が検出されていることから、14世紀中葉頃から万寿寺北辺部では、N-9°-Eを基軸とする計画的な町割りが行われていたことが推測できる。

16世紀後葉から末葉の遺構は、調査区の西寄りに南北方向に掘られ、万寿寺北境の堀の手前約3.5mの位置で止まる溝A-SD1506、万寿寺北境の堀から約25m南に掘られた井戸A-SE1045が主要な遺構である。このほか、廃棄土坑と推測される遺構が多く検出されたが、多くはA-SD1506周辺から調査区の西側で検出された。

こうした遺構分布の背景には、天正10年(1582)正月22日付けで大友義統が家臣の柴田筑前入道に対して発給した文書がある。義統条々と言われるこの文書には「萬寿寺築地之内并西之屋敷兩所、令所望候之事」とあり、16世紀後葉から末葉の万寿寺の西側沿いに町屋が建ち並んでいたことが判る。

「西之屋敷」 しかし、府内町跡20次調査A区からは、「築地之内并西之屋敷」と考えられる建物遺構は検出されておらず、井戸や土坑が検出されたのみである。こうした遺構群は町屋の裏手の状況を見せていることと推測される。そうすると、方位N-6°-Eを示すA-SD1506は「築地之内并西之屋敷」と万寿寺境内の境となる施設の可能性が考えられる。

以上の遺構のほか、注目される場所として、万寿寺北境の堀の南側に沿った幅約3.5mがある。この場所は、周辺に較べると遺構の掘削が少なく、検出されたA-SK1091・A-SK1093も深さが30cm・10数cmと浅い。しかも、この場所に沿った南側には東西方向に細長い土坑の掘り返しが行われた状態で検出された。こうしたことから、この場所には、万寿寺の区画施設が構築されていた可能性が強い。

万寿寺の区画施設については、先の文献に「萬寿寺築地之内并西之屋敷兩所」とあるように、また「府内古図」には省略され南側のみ記載と思われるが、白壁の築地と山門が描かれている。万寿寺北境の堀沿いにある遺構空白地帯は、このような文献・絵画資料に見られる「築地」が北側に亘っていたため、生じたことと想定できる。

## 第3章 中世大友府内町跡第20次調査B区

### 第1節 調査の経過と概要

#### 1. 調査の経過

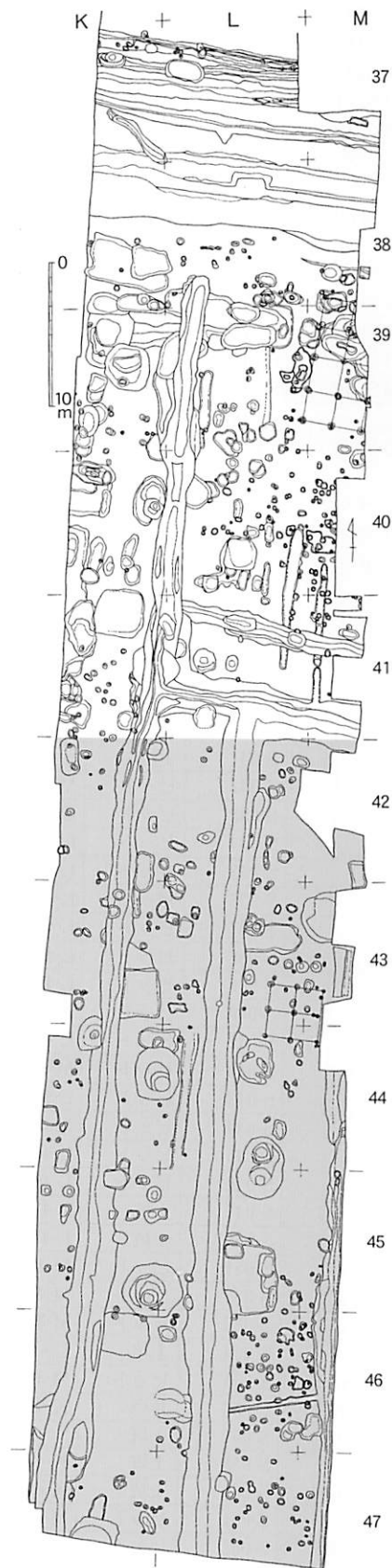
府内町跡第20次調査A区の南側、南北約55m、東西約21mの約1200㎡の範囲を府内町跡第20次調査B区として発掘調査を実施した。このため、調査区名はA区と連続し、東西方向に西からK・L・M、南北方向に北から42・43・44・・・47となる。

調査はA区と同時に開始し、表土である近世までの水田層を重機で除去した。その結果、16世紀代の整地層と想定される遺物包含層が露出した。その時点では、遺構の確認は出来なかったが、14世紀から16世紀にかけての遺物が散見された。発掘調査は、この整地層を掘り下げ、遺構の検出に努めた。調査区全面を約20cm掘り下げると14世紀から16世紀の主要な大型の遺構が確認でき、この大型遺構の調査を行いながら、さらに遺構検出面を精査し、土坑や柱穴の検出を行った。こうして検出された遺構は、南北方向の溝や井戸・礎盤建物・土坑・柱穴など多種にわたり、出土する遺物も8世紀後半から9世紀、14世紀代・16世紀代と幾つかの時代のまとまりが確認された。

#### 2. 遺構の概要

府内町跡第20次調査B区で検出された遺構は、A区でA-SD1506とした溝の南側約55mをB-SD064として調査した。また、A区で東西方向の溝として調査したA-SD1501と交わる溝をB-SD003とした。また、調査区の東壁沿いに瓦を多量に含む溝も検出された。井戸は調査区境のため完全に調査できなかったものを含め5～6基が確認された。井戸の時期は、14～15世紀代と16世紀後半代の2時期に分かれる。また土坑は形態や規模はさまざまであるが、ほとんどは廃棄土坑と思われる、埋土の中から遺物や礫が多く出土する。この他、注目される遺構として、礎盤建物がある。この遺構は主として、調査区の南西隅で集中的に検出され、幾度か建てかえが行われたようで複雑に重複する。

以上の中世遺構の他、調査区の南東隅であるL・M-47区では、8世紀後半から9世紀代の柱穴状の小堅穴が検出され、土師器の坏や甕が埋設された状態で出土した。



第3-1図 府内町跡20次B区位置図

礎盤建物

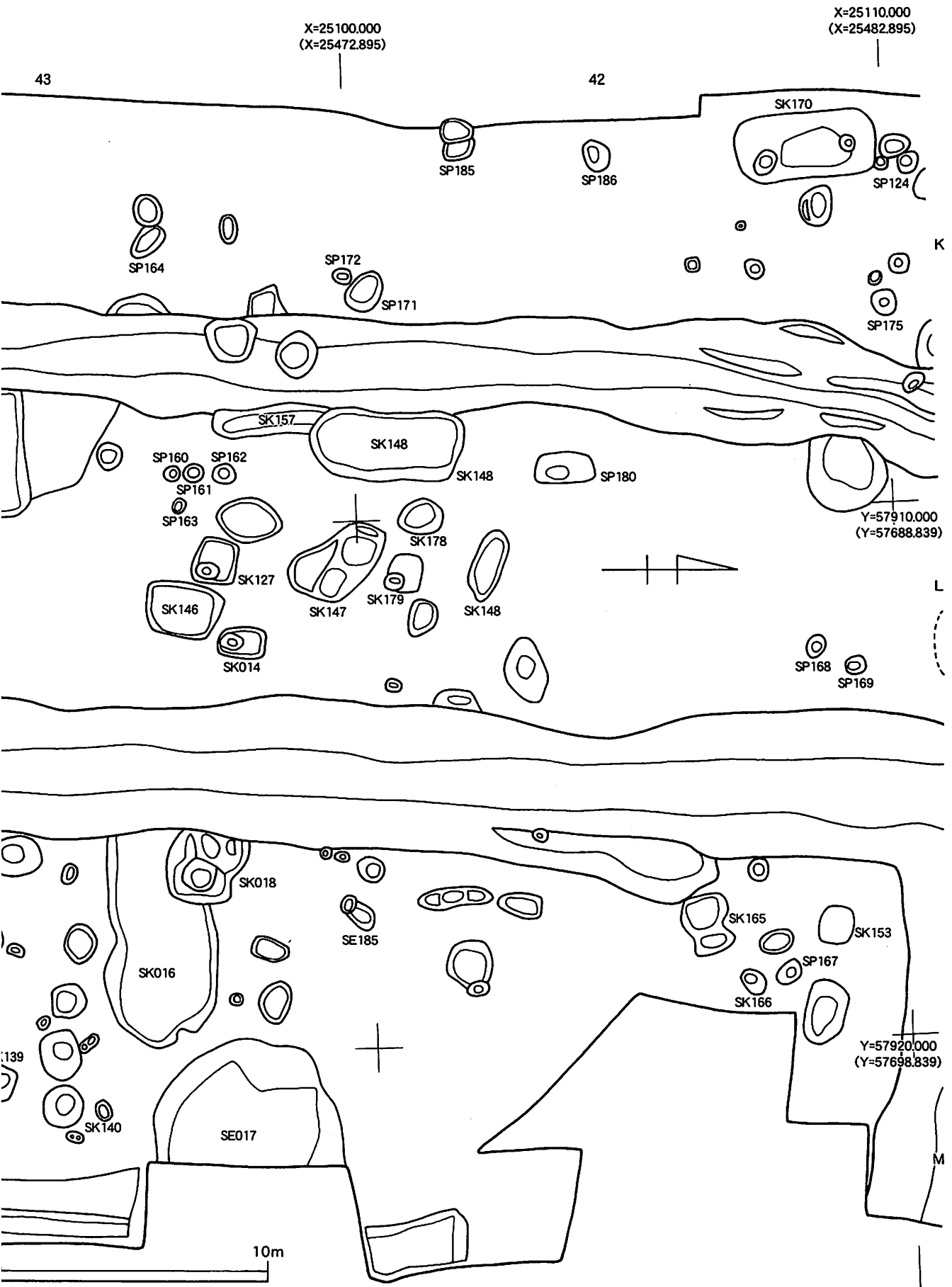
第1節 調査の経過と概要

第3-1表 中世大友府内町跡20次調査B区遺構一覧表(1)

本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
B-SD001	S-001	溝	K・L・M-46			117
B-SD002	S-002	溝	K-46・47			117
B-SD003	S-003	溝	L-42~47	14世紀末葉	万寿寺創建時に近い区画溝	119
B-SD004	S-004	溝	M-44~47	14世紀中葉~後葉	瓦が多量に出土	142
B-SE006	S-006	井戸	K-45・46	16世紀後葉~末葉		211
B-SE009	S-009	井戸	L-44・45	14世紀中葉~後葉	掘りかえされ隣接した井戸2基	214
B-SE010	S-010	井戸	K・L-44	16世紀後葉~末葉		118
	S-011		K・L・M-46		攪乱	
B-SK012	S-012	土坑	K-46	16世紀後葉~末葉		208
	S-013		L・M-42			
B-SK014	S-014	土坑	L-43		ガラス玉	208
B-SK015	S-015	土坑	K-46	16世末葉	折縁ソギ皿出土	170
B-SK016	S-016	土坑	L-43	16世紀末葉		
B-SE017	S-017	井戸	L・M-43	14世紀中葉~後葉		221
B-SK018	S-018	土坑	L-43	14世紀中葉~後葉	土師質土器7個体出土	172
	S-019	溝?	K-47			
B-SK020	S-020	土坑	L-45	16世紀後葉~末葉	大型土坑遺物多量出土	173
	S-021	土坑	M-47			
B-SK022	S-022	土坑	L-44	14世紀代?		180
B-SK023	S-023	土坑	L・M-46	14世紀中葉~後葉	土師質土器がまとめて出土	180
B-SK024	S-024	土坑	L-46	14世紀前葉?		181
	S-025	ピット	L-47			
	S-026	ピット	L-47			
B-SP027	S-027	ピット	L-47		土錘出土	235
	S-028	ピット	L-47			
	S-029	ピット	L-47			
	S-030	ピット	L-47			
B-SK031	S-031	土坑			SK020に切られる	182
B-SP032	S-032	ピット	M-47	8世紀後半	土師器塊	232
	S-033	ピット	L-47			
	S-034	ピット	L-47			
	S-035	ピット	L-47			
	S-036	ピット	L-47			
	S-037	ピット	L-47			
	S-038	ピット	L-47			
	S-039	ピット	L-47			
	S-040	ピット	L-47			
	S-041	ピット	L・M-47			
B-SP042	S-042	ピット	M-47			
	S-043	ピット	L-46			
	S-044	ピット	M-47			
	S-045	ピット	L-46			
	S-046	ピット	L-46			
B-SK047	S-047	土坑	L-47	8世紀後半~9世紀前半	甕を埋納	182
B-SK048	S-048	土坑	L-47	14世紀中葉~後葉	在地系土師質土器が上層と下層で一括出土	183
B-SP051	S-051	ピット	M-46	8世紀後半		232
B-SP052	S-052	ピット	M-46	14世紀中葉~後葉		232
B-SP053	S-053	ピット	M-46	8世紀後半		232
	S-054	土坑	L・M-46			
B-SP055	S-055	ピット	M-46	14世紀前葉	吉備系土師器出土	232
B-SE056	S-056	井戸	K-47	16世紀後葉~末葉		223
B-SK057	S-057	土坑		14世紀~15世紀前半		186
	S-058	土坑	K-47			
B-SK060	S-060	土坑	K・L-46	16世紀後葉~末葉		186
	S-061	ピット	M-46			
B-SP062	S-062	ピット	M-46	14世紀代		232
B-SK063	S-063	土坑	L-42	14世紀中葉~後葉	在地系土師質土器が3点出土	187
	S-064	K-43~47	溝			







第3-2表 中世大友府内町跡20次調査B区遺構一覧表(2)

本報告での 遺構番号	調査時の 遺構番号	遺構の 性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載 頁
B-SP065	S-065	ピット	L-46	14世紀代		235
B-SK066	S-066	土坑	L-46	14世紀代	8～9世紀の遺構を切る	187
B-SP067	S-067	ピット	L-46			233
	S-068	ピット	L-46			
	S-069	ピット	L-46			
B-SP070	S-070	ピット	L-46	14世紀末から15世紀前葉		235
B-SP071	S-071	ピット	L-46		土錘	236
	S-072	ピット	L-46			
B-SP073	S-073	ピット	L-46	8世紀代		235
	S-074	ピット	L-46			
	S-075	ピット	L-46			
	S-076	ピット	L-46			
	S-077	ピット	L-46			
	S-078	ピット	L-46			
	S-079	ピット	L-46			
	S-080	ピット	L-46			
B-SP081	S-081	ピット	L-46	8世紀後半		233
	S-082	ピット	L-46			
B-SP083	S-083	ピット	L-46	14世紀前半	口禿白磁	237
B-SP084	S-084	ピット	L-46	8世紀後半		233
	S-085	ピット	L-46			
	S-086	ピット	L-46			
	S-087	ピット	L-46			
	S-088	ピット	L-47			
B-SK090	S-090	土坑	K-47	16世紀後葉～末葉		208
B-SP091	S-091	ピット	L-42	16世紀後葉～末葉	備前系陶器の水屋甃	237
B-SK092	S-092	土坑	L-42			208
	S-093	ピット	L-42			
B-SP094	S-094	ピット	L-42	8世紀代		237
B-SK096	S-096	土坑	K-43	16世紀末葉	集石	188
B-SK097	S-097	土坑	K-44	16世紀後葉～末葉	備前系陶器のへら記号のある徳利	190
B-SK098	S-098	土坑	L-44	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器4点出土	192
	S-099	土坑	L-46			
B-SK100	S-100	土坑	L-46	16世紀後葉		192
B-SP101	S-101	ピット	L-46			233
B-SP102	S-102	ピット	L-46	14世紀後葉		237
	S-103	土坑	K-47			
	S-104	土坑	K-47			
	S-105	ピット	K-47			
	S-106	ピット	K・L-47			
B-SK107	S-107	土坑	L-43	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器出土	193
B-SK108	S-108	土坑	K-45・46	14世紀中葉～後葉		208
B-SP109	S-109	ピット	L-46	14世紀中葉～後葉		237
B-SP110	S-110	ピット	L-46	14世紀前葉	吉備系土師器	237
	S-111	土坑	L・M-44			
	S-112	土坑	L-44			
B-SK113	S-113	土坑	K-46	16世紀後半		193
	S-119	土坑	K-43			
	S-120	土坑	K-43			
B-SP121	S-121	ピット	L-46		砥石	237
B-SK122	S-122	土坑	K-45	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器2点出土	193
B-SK123	S-123	土坑	K-45	14世紀中葉?		203
B-SK124	S-124	土坑	K-44	16世紀後葉～末葉	漳州窯系青花	195
	S-125	ピット	K-44			
B-SK124	S-126	土坑	K-44・45	14世紀中葉～後葉		195
B-SP127	S-127	ピット	L-47	14世紀代		233
B-SK128	S-128	土坑	K・L-44	16世紀後葉		197
B-SK129	S-129	土坑	K-45	14世紀中葉～後葉		208

第1節 調査の経過と概要

第3-3表 中世大友府内町跡20次調査B区遺構一覧表(3)

本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
B-SP130	S-130	ピット	K-45	14世紀中葉～後葉		237
B-SK131	S-131	土坑	K-45			197
B-SK132	S-132	土坑	K-45	15世紀中葉		198
B-SP133	S-133	ピット	K-46	14世紀中葉～後葉	B-SB196の北西柱穴	232
B-SK134	S-134	土坑	L-45	14世紀代		199
B-SP135	S-135	ピット	K-45	14世紀末～15世紀前葉		237
	S-136	ピット	K-44			
	S-137	ピット	K-44			
	S-138	ピット	K-44			
B-SP139	S-139	ピット	M-43	16世紀末葉		237
	S-140	ピット	M-43			
B-SP144	S-144	ピット	M-45	14世紀代		237
B-SK145	S-145	土坑	L-46			199
B-SK146	S-146	土坑	L-43	16世紀後葉～末葉	見込みに「壽」の文字の青花	200
B-SK147	S-147	土坑	L-43	14世紀中葉～後葉		201
B-SK148	S-148	土坑	K-42	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器がまとめて出土	208
B-SP149	S-149	ピット	M-45		古代の坏	237
B-SP151	S-151	ピット	M-45	14世紀前葉	吉備系土師器	237
B-SK153	S-153	土坑	L-42		土玉	202
B-SK156	S-156	土坑	L-42	16世紀後葉～末葉		209
B-SK157	S-157	土坑	K-43	16世紀後葉～末葉		202
	S-158	ピット	K-43			
B-SP159	S-159	ピット	K-43	14世紀代		237
	S-160	ピット	K-43			
B-SK161	S-161	土坑	K-42・43	14世紀代		203
B-SP162	S-162	ピット	K-43			233
	S-163	ピット	K-43			
B-SK164	S-164	土坑	K-43			203
B-SP165	S-165	ピット	L-42	14世紀代		237
	S-166	ピット	L-42			
	S-167	ピット	L-42			
	S-168	ピット	L-42			
	S-169	ピット	L-42			
B-SK170	S-170	土坑	K-42		13世紀代の常滑系陶器	203
	S-171	ピット	K-42			
	S-172	ピット	K-42			
B-SK177	S-177	土坑	L-43	16世紀後葉		204
B-SK178	S-178	土坑	K・L-42	14世紀代		205
B-SK179	S-179	土坑	L-42	14世紀代		205
	S-180	ピット	K-42			
	S-182	ピット	L-43			
B-SK184	S-184	土坑	L-42	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器6点一括廃棄	206
B-SP185	S-185	ピット	K-42	16世紀後葉～末葉		233
	S-186	ピット	K-42			
B-SK187	S-187	土坑	L-43	14世紀末～15世紀前葉	東播系須恵質土器	207
B-SK188	S-188	土坑	K-42	16世紀後葉～末葉		209
B-SP189	S-189	ピット	K-42	14世紀中葉～後葉		236
B-SB190		建物	L-43			
B-SB191		建物	L-46			
B-SB192		建物	L-46			
B-SB193		建物	L-46			
B-SB194		建物	L-46			
B-SB195		建物	K-45			
B-SB196		建物	K-46	14世紀中葉～後葉		
B-SB197		建物	L-46			
B-SB198		建物	L-46			
B-SB199		建物	L-47			
B-SB200		建物	L-47			

## 第2節 遺構と遺物

### 1. 溝及び関連遺構

#### B-SD001 (第3-2図)

B-SD001はL・M-46区でB-SD003とB-SD004を繋ぐように検出された小規模な溝である。遺構の規模は幅約50cm、深さ約10cmで、底面は平坦である。方位はW-10°-Sであり、東西方向に約6mを発掘調査しているが、西側はB-SD003、東側はB-SD004と切り合い関係にあり、確認できなかった。

出土遺物は、第3-3図に図示したが、1は備前系陶器の揃鉢である。2・3は京都系土師器で、口径は2点とも12.6cm、4は胴部最大径部に突帯が廻る瓦質土器である。突帯部での径は29.1cmで、内面の一部に刷毛目、外面は横方向のヘラ削りのあと、磨きである。5は口径13cm、器高2.8cm、底径7cmの古代土師器の坏である。器面は回転ヘラ磨きで、底部は回転ヘラ切りである。

B-SD001の時期は、2点の京都系土師器が出土していることから16世紀後葉から末葉と考える。

#### B-SD002

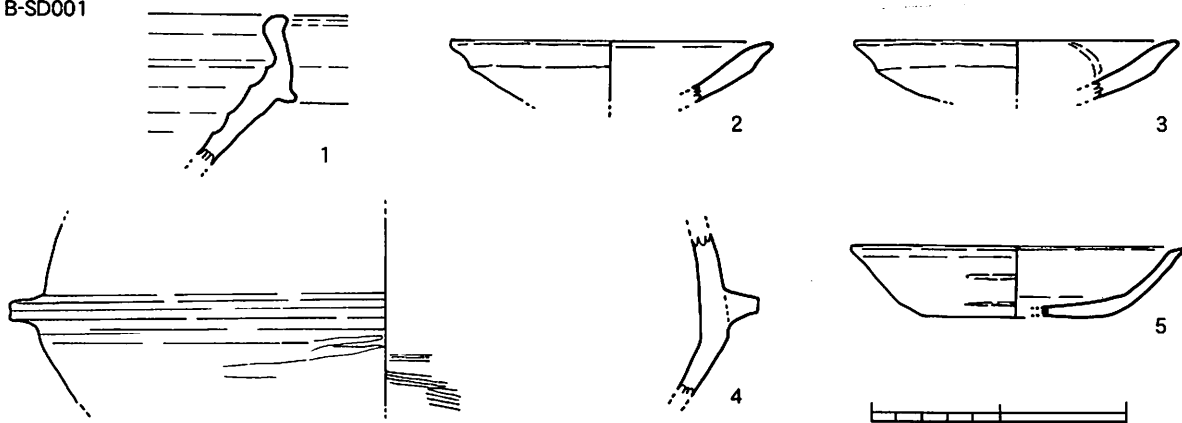
B-SD002は図示していないが、B-SD001の南に平行するように、L・M-46とL・M-47の間で発掘調査の初期の頃に検出された幅が約1.5m、深さ約10cm程度の東西に長い窪地状であった。遺構の輪郭が明確でなかったが、遺物がまとまって出土したため、溝状遺構として報告する遺物は第3-3図に図示したが、6は常滑系陶器の甕である。器面は内面が撫でであるが、外面は自然釉のため不明である。7は備前系陶器の揃鉢の注口部の資料である。8は亀山系須恵質土器の肩部である。頸部が横方向の撫でであるが、肩部外面には格子目の叩きによる器面調整痕が残されている。9は東播系須恵質土器の口縁部である。口縁端部が断面三角形に肥厚する。10・11は9の底部となるような東播系須恵質土器の鉢の底部の資料である。底径は10が8.3cm、11は11cmであり、器面は回転を利用した撫で、平滑に仕上げている。

12は口縁部の内外面をヘラ磨きで器面調整した土師器の坏である。13は口径11.7cmで、口縁端部は玉縁状に肥厚し、内外面ヘラ磨きの土師器の坏である。14は口縁端部をやや外反し、口唇部を尖らす。器面調整は内外面横方向の撫でであるが、底面は回転を利用したヘラ切りで切り離している。口径13.6cm、器高3.3cmである。15は口径20.5cmの甕形土器である。口縁部は器壁が厚く、外反するが、これに対し、胴部は薄い。器面調整は、口縁部外面と胴部内面は撫で、口縁部内面と胴部外面は横方向と縦方向の刷毛目調整である。16と17は高台付きの土師器の坏である。16は底径7.6cm、17は9cmで、器面調整は内外面とも横方向の回転を利用したヘラ磨きである。

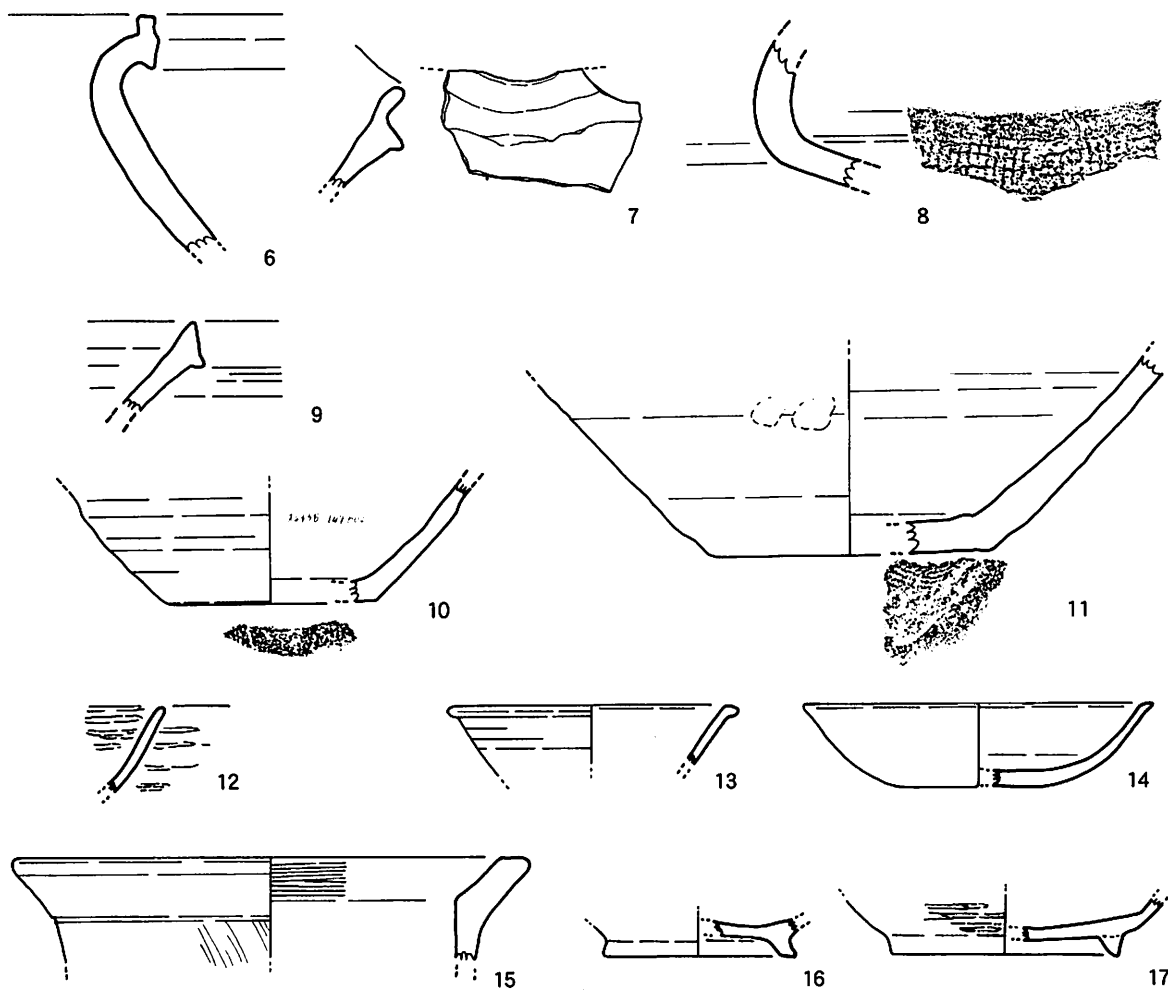
B-SD002の時期は、12~17のような8世紀後半から9世紀の前半の土師器が出土しているが、6~11は14世紀から15世紀前半の遺物であり、この時期に近いと考える。

第2節 遺構と遺物

B-SD001



B-SD002



第3-3図 B-SD001・B-SD002出土銅錢実測図

## B-SD003 (第3-4図上)

B-SD003は、調査区の中央部を南北方向に約55m検出された区画性の強い溝である。北側はA区のA-SD1501とT字状に交わるが、方位はN-2°-Eで、直交はしない。また、この溝の規模は、断面が逆台形状をし、上面の幅が約3m、底面幅は1.2m前後で、深さは約1.4mである。溝の底の傾斜は、南端の底面の標高が3.86mで、A-SD1501との交差部が3.61mであり、緩く北に傾斜している。

B-SD003からは多くの遺物が出土し、一部新しい遺構と切り合っていたため、後出の遺物が混入している。これらを合わせて、第3-5-3-22図に図示する。

上層

第3-5図は、B-SD003を掘り下げる際に部分的に約50cmごとに遺物を取り上げ、上層・中層・下層出土としたものである。1~7は上層出土のロクロ成形による在地系土師質土器である。1~4は口径が8~8.4cmの皿で、底径は6~7.4cm、器高は1~1.4cmである。5は口径7.6cm、底径4.2cm、器高1.9cmの口縁部が「八」の字状に開く皿である。口縁部にはススが付着し、灯明皿として使用されている。6・7は坏である。6は口径13.4cm、底径9.8cm、器高3.3cmで、口縁部の器壁は底部近くが厚く、先端が尖る。7は、口径12.8cm、底径10cm、器高2.6cmで、器壁は中位がやや厚く、口縁部が外反する。

中層

第3-5図8~17は中層出土のロクロ成形による在地系土師質土器である。8~12は、口径7.4~8.2cmで、底径5.4~7.2cmで、器高は0.9~1.4cmである。13は口径7.6cm、底径5.5cm、器高2.1cmで、器高が高く、小型の坏である。口縁部にはススが付着し、灯明皿として使用されている。14~17は坏である。14と17は口径が11.6cmと12.4cmに対し、底径は2点とも7cmと小さく、器高は3.1cmと2.8cmであり、椀状をしている。これに対し、15と18は口径が11.6cmと13cmであるが、底径は8.6cmと10cmで安定感がある。口縁部の器壁は、15は底部近くが厚いが、他の3点は中位から上位が厚くなっている。

灯明皿

下層

第3-5図18~23のロクロ成形による在地系土師質土器うち18は口径8.7cm、底径7.0cm、器高1.1cmの皿であるが、他は坏である。21は口径11.8cmであるが底径は7.8cmで、器高は3cmであり、口径に対し、底径が小さく椀状をしており、器壁は底部近くが厚い。19は口径12.4cm、底径8.6、器高2.9cmで口縁部の器壁は上位が厚い。20は口径12.5cmで、底径9cm、器高2.9cmで口縁部の器壁は中位が厚い。22も同様で、口径12cm、底径8cm、器高3.4cmである。23は口径11.8cm、底径9.0cm、器高3.2cmで、口縁部の器壁は、底部近くが厚く、先端部が尖る。

以上層位的に取り上げた遺物を見ると、14世紀中葉から後葉と考えられ、上層と下層で大きな差異を認めることは出来ない。そこで、第3-6-3-22図に出土した遺物を図示し、報告を行う。

双魚文

第3-6-3-7図は中国産陶磁器を中心に図示した。24~35は龍泉窯系青磁で、29・30・33・34以外には外面に鎬蓮弁が施文されている。また、底部のみの破片である34の見込み部には線描きの文様があり、35の見込み部には双魚文と推測される陽刻の文様があり、口縁部が屈曲する第2-122図7の形態になると思われる。法量は、29が口径14cm、底径6.3cm、器高4.7cmであり、33の口径は8cmである。

36~40は中国産白磁である。36は口縁部が玉縁になる形態である。37は口径11cmで、胴部が屈曲する。38は口径10.6cm、底径5.6cm、器高3.5cmで口縁部は口禿である。39も同じ器形で、口縁部が11.2cm、底径5.6cm、器高3.4cmで外反する口縁部は口禿である。40は口縁部が直線的で、端部が無釉の口禿であり、外面の底面から胴部下位にかけては露胎である。口径11cm。底径6.3cm、器高3.5cmである。

第3-7図は、一部国内産陶器を含む。41は景德鎮窯系青花碗である。42は褐色の発色をした磁器で、景德鎮窯系であろうか。43・44は小片であるが43は内面が白磁、外面は青白磁、44は内面が露胎、外面は青白磁で、これらも磁器であり、景德鎮窯系であろうか。45は櫛歯又は刷毛目状工具で



## 第2節 遺構と遺物

文様を描き緑青釉をかけている。46は口径3cm、底径2.7cm、器高0.5cmの極小の皿で、薄く釉がかかっている。瀬戸美濃系陶器であろうか。47は底径10.4cmの中国産陶磁器の梅瓶の底部と考える。48は底径6cmの須恵器緑釉の皿と考えられる。

49・50は直立する口縁部の端部が玉縁状に肥厚する。49は内外面ともに、白い化粧土を器面に塗り、緑色の釉をかけている。50は同様に褐色をしている。51と第3-8図51-Aに図示したものは同じ資料であるが、口径27.7cm、底径24.7cm、器高9.2cmの鉢である。底部外面は露胎であるが、他は淡黄褐色の釉がかかり、口縁部内面には鉄釉で文様が描かれている。さらに広い見込み部には鉄釉で「天下太平」と書かれている。49~51は磁甕窯系である。

「天下太平」  
瀬戸美濃系

第3-8図52~54は瀬戸美濃系陶器で、灰色をしており、法量は52が口径7.2cm、底径3.6cm、器高3cm、53は口径9.8cm、底径4cm、器高3cm、54は口径10.6cm、底径4.6cm、器高2.8cmである。

常滑系

第3-8図55~61・第3-9図は常滑系陶器の壺・甕である。55~57・60・61の口縁部は、受け口状や断面N字状の折り返しになる形態で、常滑系陶器の壺・甕でも13世紀中葉から後葉に編年されている。また、58・59・62・63は口縁部が3~4cmの縁帯状になっており14世紀後半である。また、61の肩部や64・67・68には押印文状の叩きが認められ、66にはスタンプ文がある。62の口径は38.6cm、63は47cmである。

備前系

第3-10・3-11図は備前系陶器である。69~79は頸部が直立し、口縁部は外反する。口縁端部は肥厚し、玉縁状になる。器面は横方向の撫でで、色調は灰色をしている。78は口径16.4cmで、肩部に二条の沈線が廻る。また、79は口径23.6である。これらの壺は13世紀末から14世紀後半に編年されている。80は口径13.6cmで胴部が菱形に張る。備前系陶器以外も考えられる。81は大型の甕の底部の資料であるが、常滑系陶器の可能性が高い。

第3-11図は備前系陶器の播鉢の資料である。82は口径32.4cmで、5~6本の櫛歯状工具で播目を口縁部に直角に入れている。84は口径31.3cm、底径11.9cm、器高14.8cmで、口縁下端部がわずかに肥厚する。内面は6~7本の櫛歯状工具で播目を口縁部に直角に入れている。83を含め、これら3点の口縁部形態は、14世紀代後半に編年されている。85の口縁部は口唇部が尖る断面三角形になり、播目が口縁部に直角に入る。この口縁部形態は15世紀前半に、86の口縁部が屈曲するタイプは15世紀後半に編年されている。87・88はこうした播鉢の底部で、口縁部から底部にかけて直線的に6~7本の櫛歯状工具で播目が施文されている。

第3-12図はロクロ成形による在地系土師質土器である。89~106は口径が小さく器高が低い皿である。皿の平均法量は口径約8cm、底径約6.5cm、器高約1.2cmである。器壁は93の底部は厚く、口縁部の立ち上がりも小さい。92も類似している。これら以外は、底部の器壁は薄く、口縁部の立ち上がりもしっかりしている。104の底部にはスタレ状の圧痕が残る。

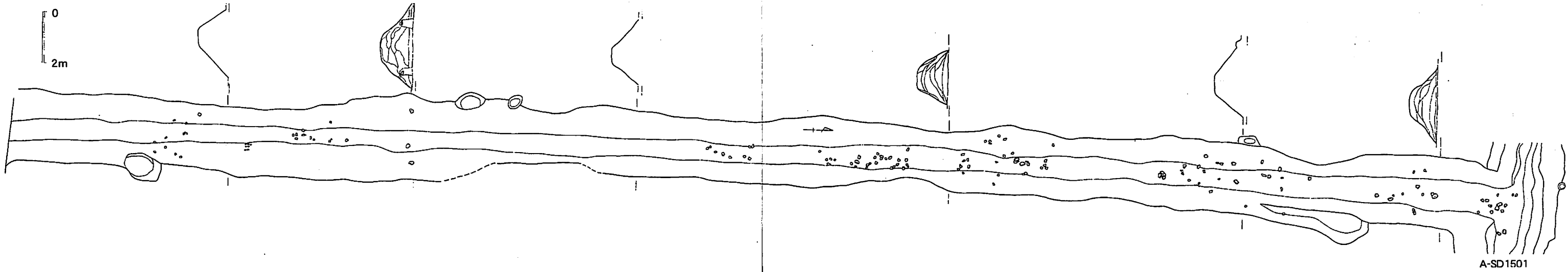
107~112は口径が小さく、器高が高い小型の坏である。これら6点の平均量は口径約7.3cm、底径約5.3cmで、皿よりも小さい。しかし器高は約2.2cmで、倍近くある。口縁部の立ち上がりは、107・112は逆ハの字状で、口縁端部が尖るように成形されている。109~111の口縁部は端部が丸く仕上げられている。小型坏の口縁部の器壁は底部近くを厚くしている。

第3-12図114~123・第3-13図124~132は坏である。平均法量は口径約12.1cm、底径約7.9cm、器高約2.9cmであるが、器形は118や131のように口径12.8cm、13.2cmに比較すると底径が6.6cm、7.2cmと小さく碗形になるものや、132のように口縁部が「ハ」の字状に開き、側面観が逆台形になるものなどがある。また、口縁部の立ち上がりは、125~128はやや内湾気味になり、器壁は底部近くが厚い121・124・127、上位が厚くなる120・122・128・130がある。なお、107・123・130は口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されている。

第3-12図113は口径11.4cm、器高2.1cmの京都系土師器で混入品と考える。

B-SD003

0  
2m



A-SD1501

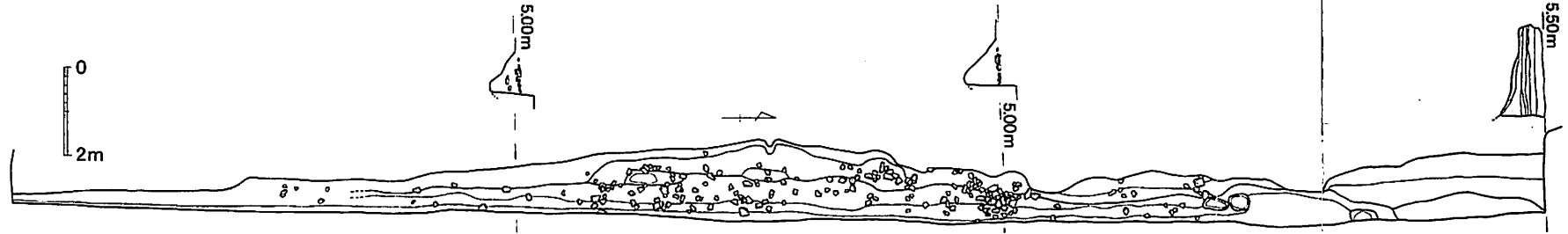
B-SD004

0  
2m

5.00m

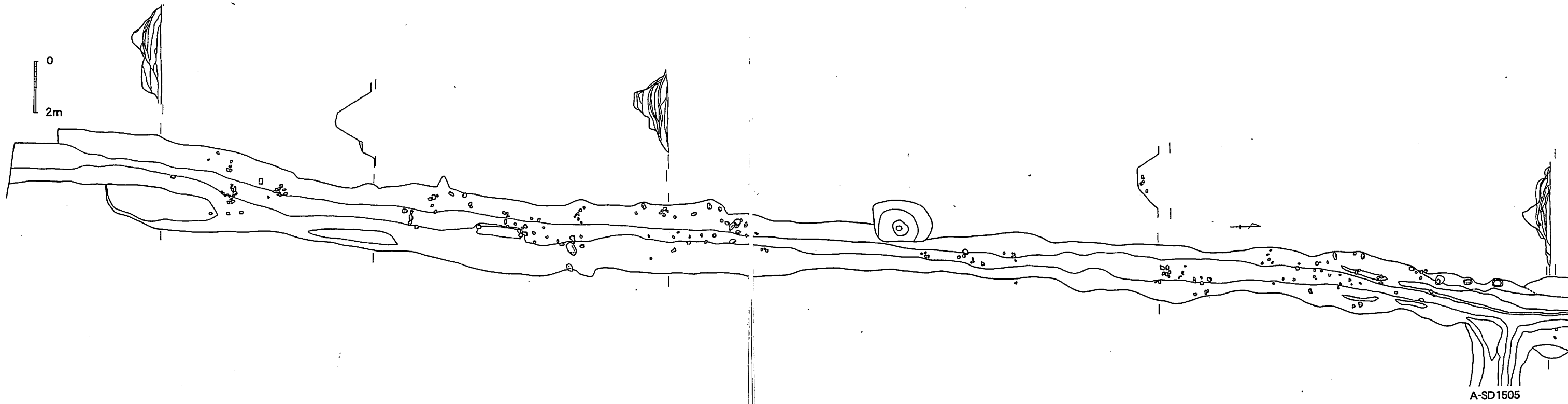
5.00m

5.50m



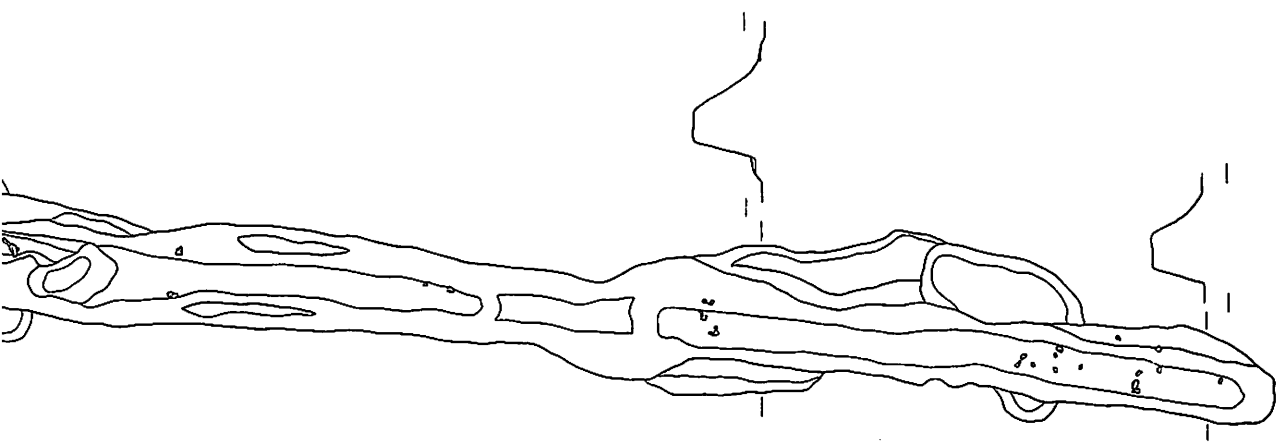
B-SD064 · A-SD1506

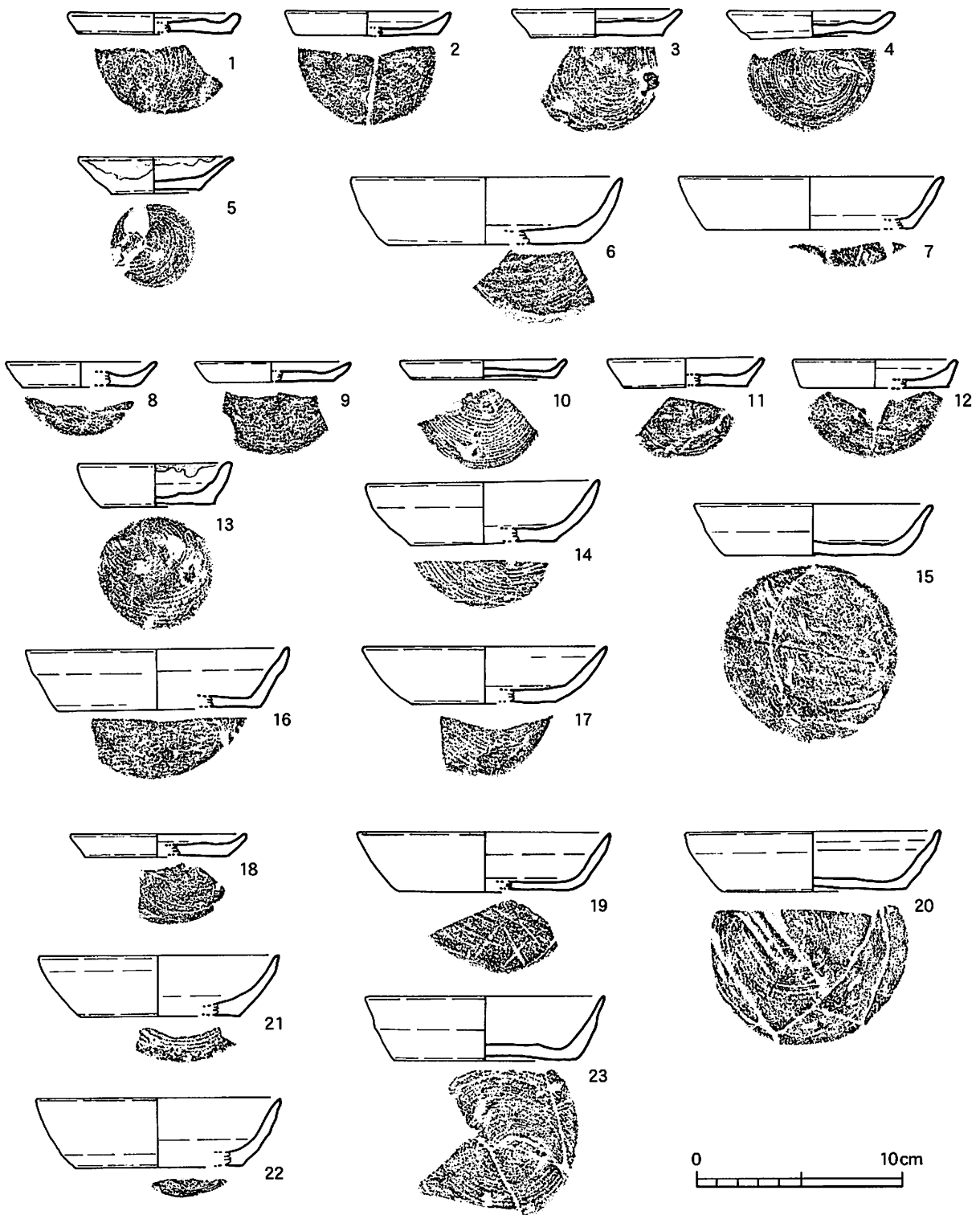
0  
2m



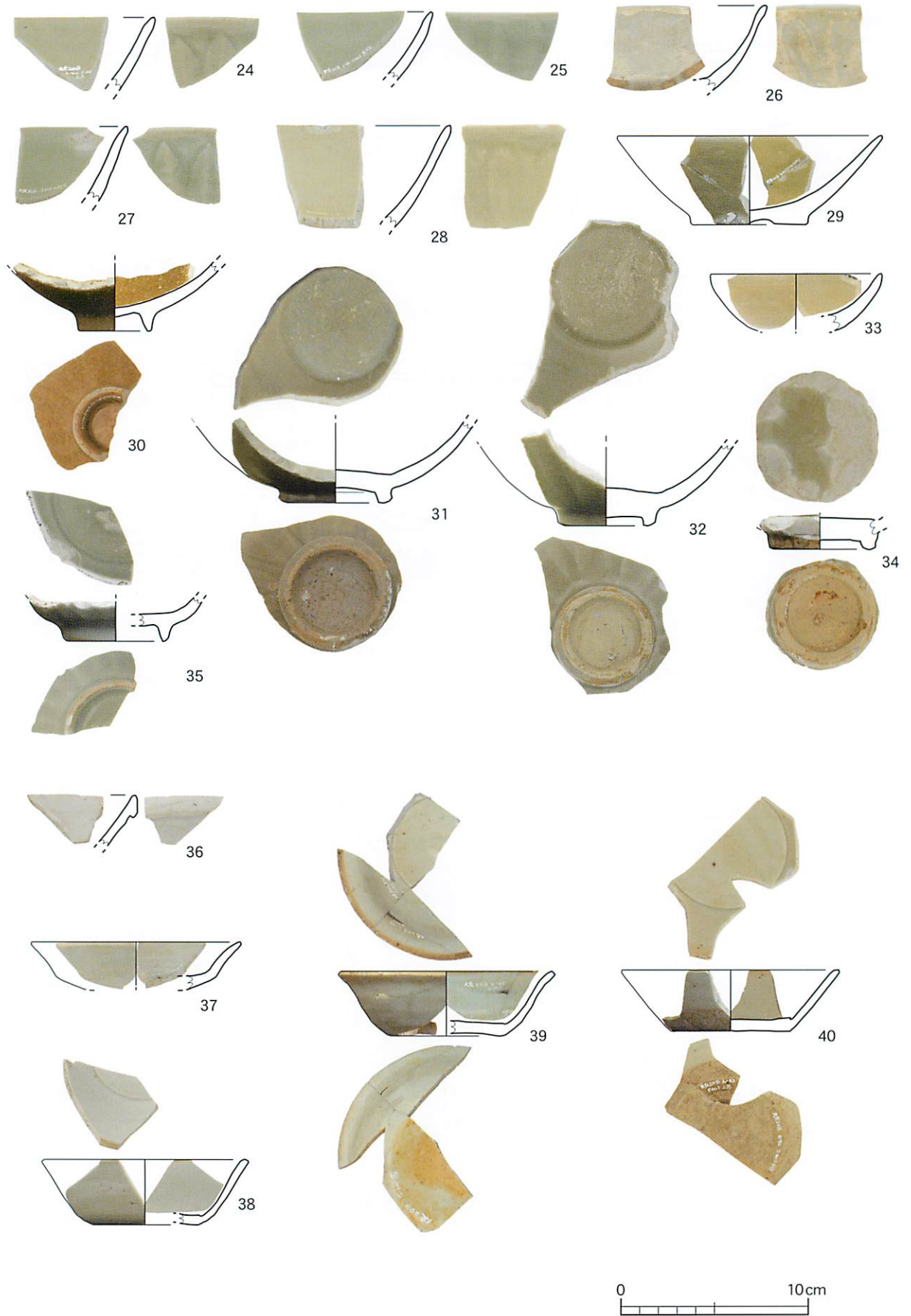
A-SD1505

第3-4图 SD-B003 · SD-B004 · SD-B064 (A-SD1506) 実測图

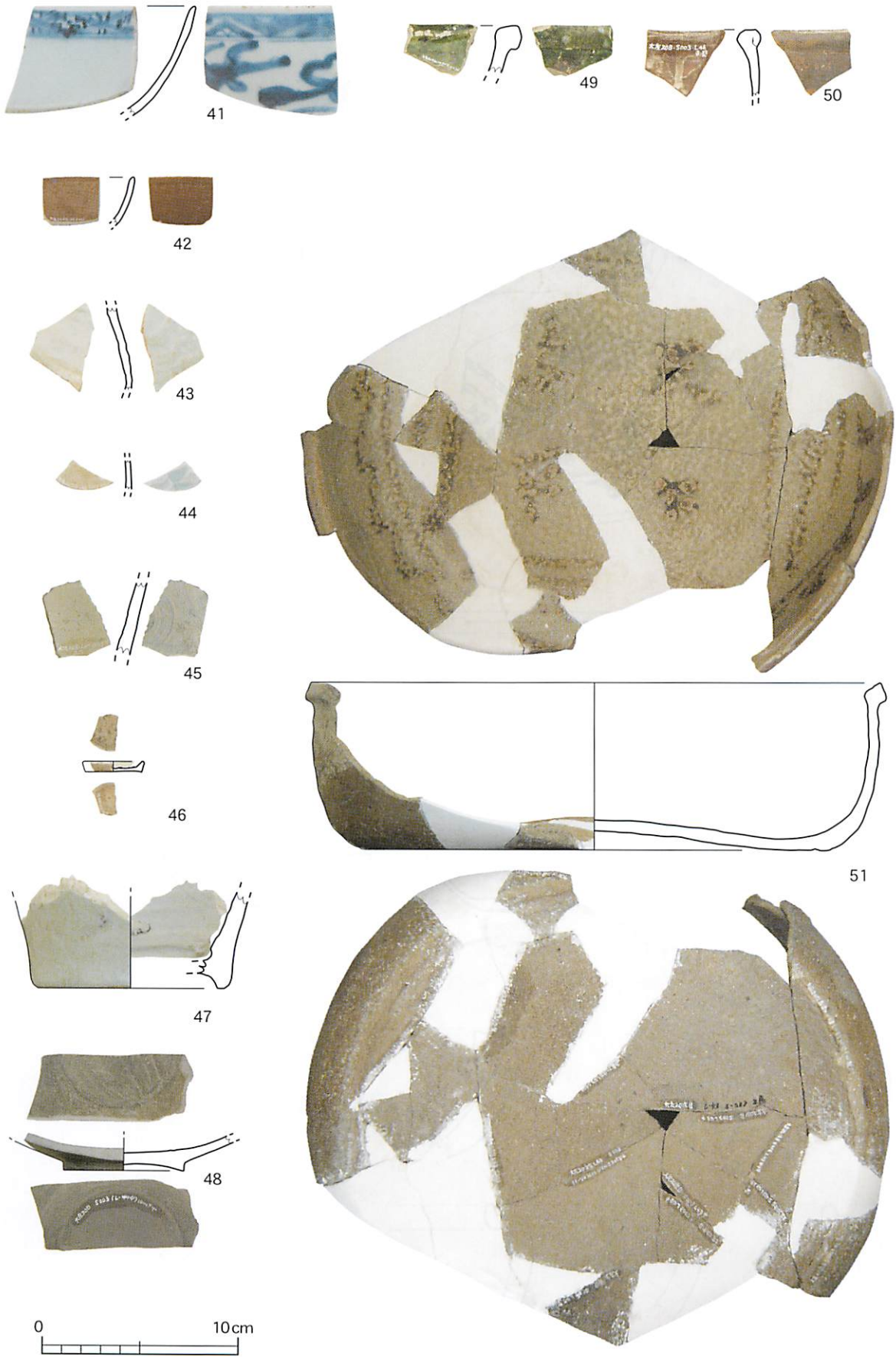




第3-5図 B-SD003出土遺物実測図(1)

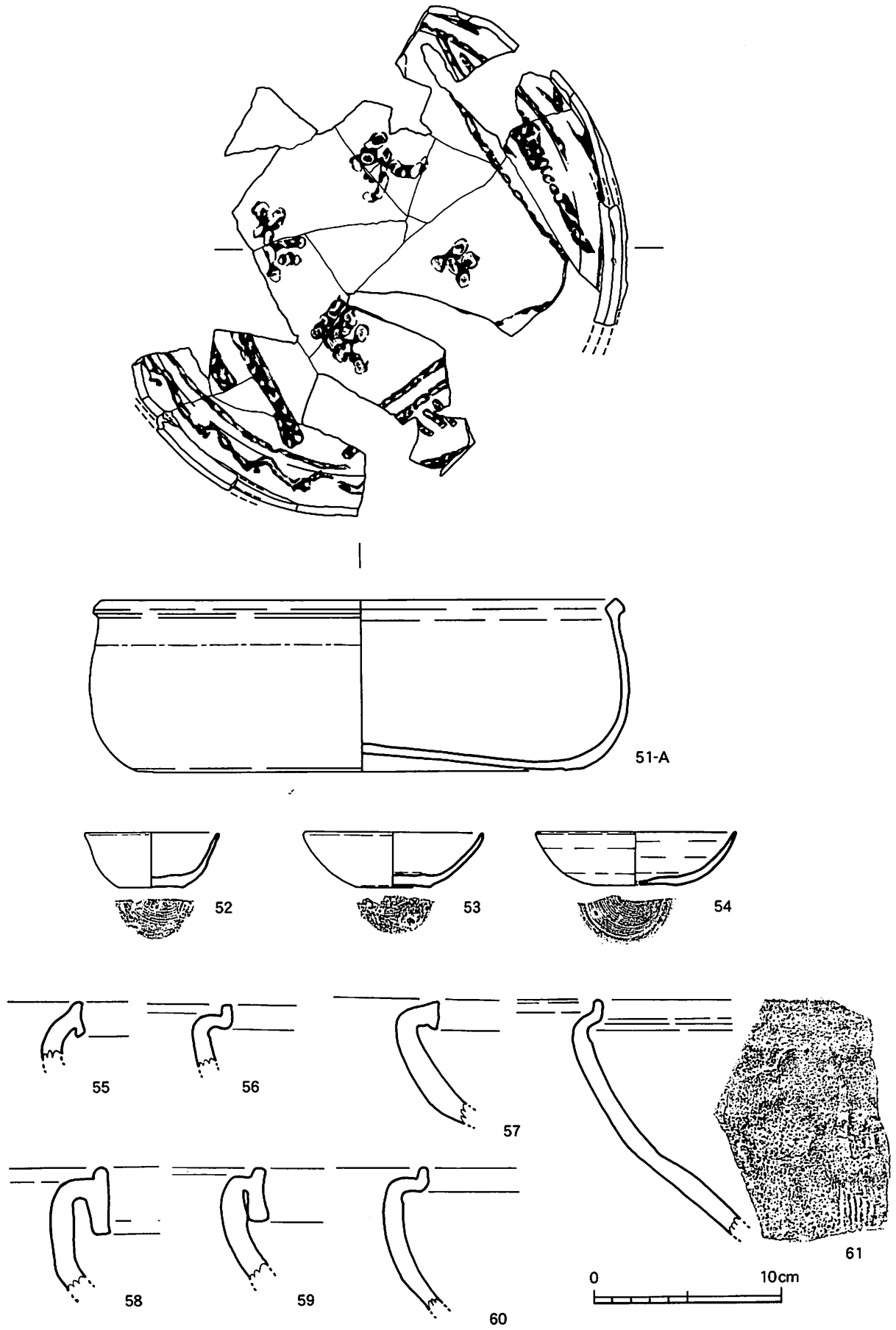


第3-6図 B-SD003出土遺物実測図(2)



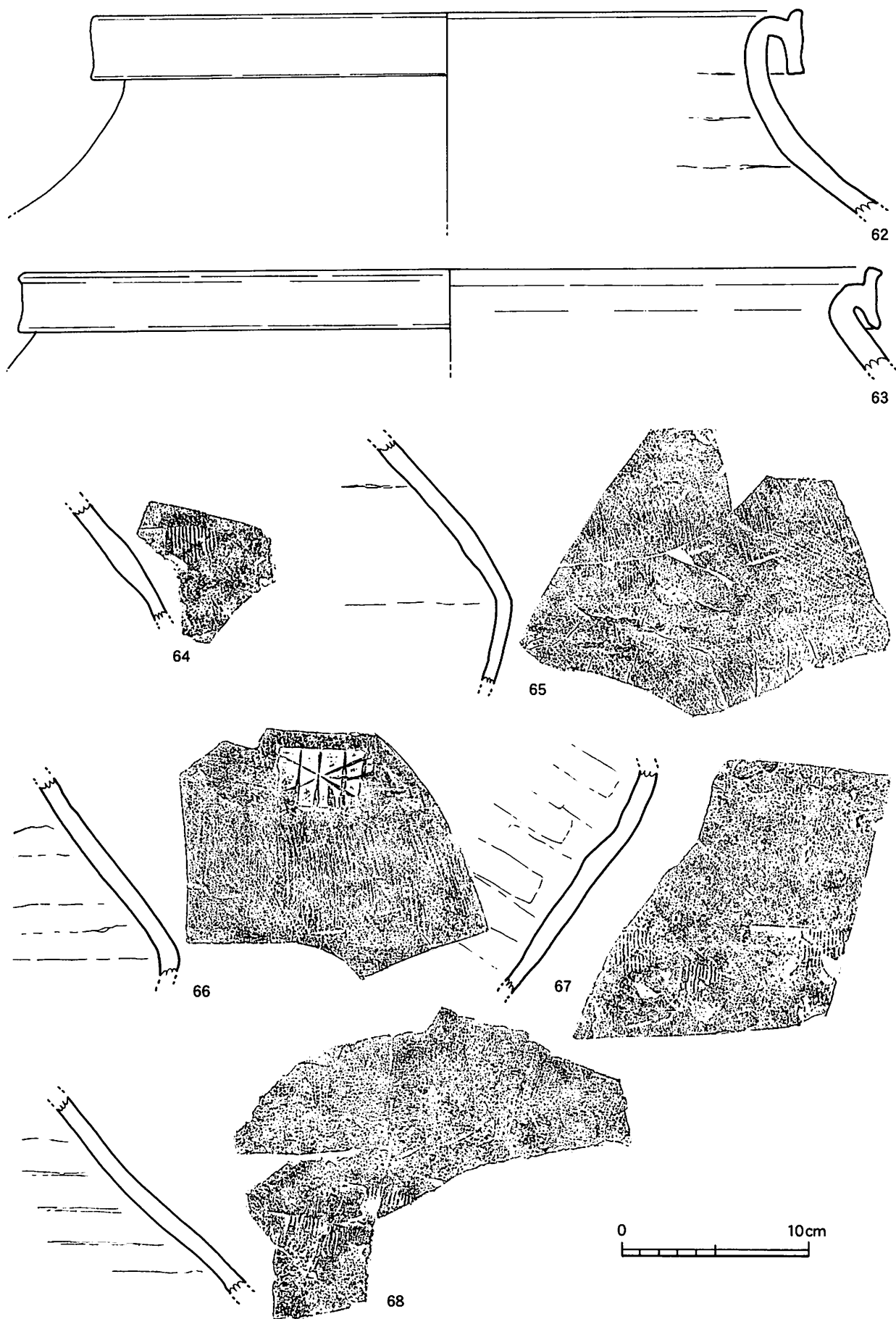
第3-7図 B-SD003出土遺物実測図(3)

第2節 遺構と遺物



第3-8図 B-SD003出土遺物実測図(4)





第3-9図 B-SD003出土遺物実測図(5)

## 第2節 遺構と遺物

第3-13図133~144は胎土が白色で、器壁が薄く、底部に高台が廻る特徴を持つ土師質土器で、吉備系土師器 吉備系土師器や早島式土器と呼ばれている資料である。口径は134が12cm、135が11.2cm、136が10.6cmである。底径は137~144の資料を見ると、平均4.4cmである。高台は粘土を貼り付けて形成しているが、簡略化している。これらは、岡山県で13世紀末葉から14世紀前葉に位置づけられている<sup>1)</sup>。

第3-13図145・146は色調が白色で、極めて薄く仕上げられた非ロクロ系の土師質土器である。145 京都系土師器 は口径8cm、器高1.8cmで、146は器高が2cm以上ある。搬入された古い京都系土師器の可能性はある。

第3-13図147・148の特徴は底部に焼成前の穿孔を持つ。147は口径8.7cm、底径7.6cm、器高1.2cmのロクロ成形の在り系土師質土器の皿であるが、中央部に径0.4cmの穿孔がある。また、148も底径5.8cmのロクロ成形の在り系土師器の厚い底部であるが、中央部に穿孔がある。149は口径が7.8cmの在り系土師質土器の皿に脚を付けたもので、中央部を欠くため確認できないが、他の調査区の出土例では、皿に穿孔がある。これら、3点は燭台として利用された可能性が強い。

第3-13図150~152・第3-14図は土鍋の資料である。B-SD003出土の土鍋には口縁部を外側に屈曲させる150~156のタイプと、口縁部外面に突帯を廻らす57~161の鑄付きタイプの2種類がある。口縁部を屈曲させる土鍋は、さらに屈曲が小さくなり、口縁部が肥厚した状態になる155と156がある。器面調整は、155を除き、内面は横方向の刷毛目、外面は刷毛目の後、横方向の撫でや指押さえで平滑に仕上げている。口径は153が24cm、154が29cm、155が34.4cm、156が32.6cmである。

鑄付きタイプの土鍋は、単純に突帯が廻る160、突帯の下位の器壁が肥厚する157・158、突帯が口縁部より上位に跳ね上がる159・161がある。器面調整は、いずれの鑄付きタイプの土鍋も内面は横方向の刷毛目であるが、外面は157・158が撫でや指押さえで、159~161は縦方向の刷毛目である。口径は158が23.1cm、160が21.6cmである。

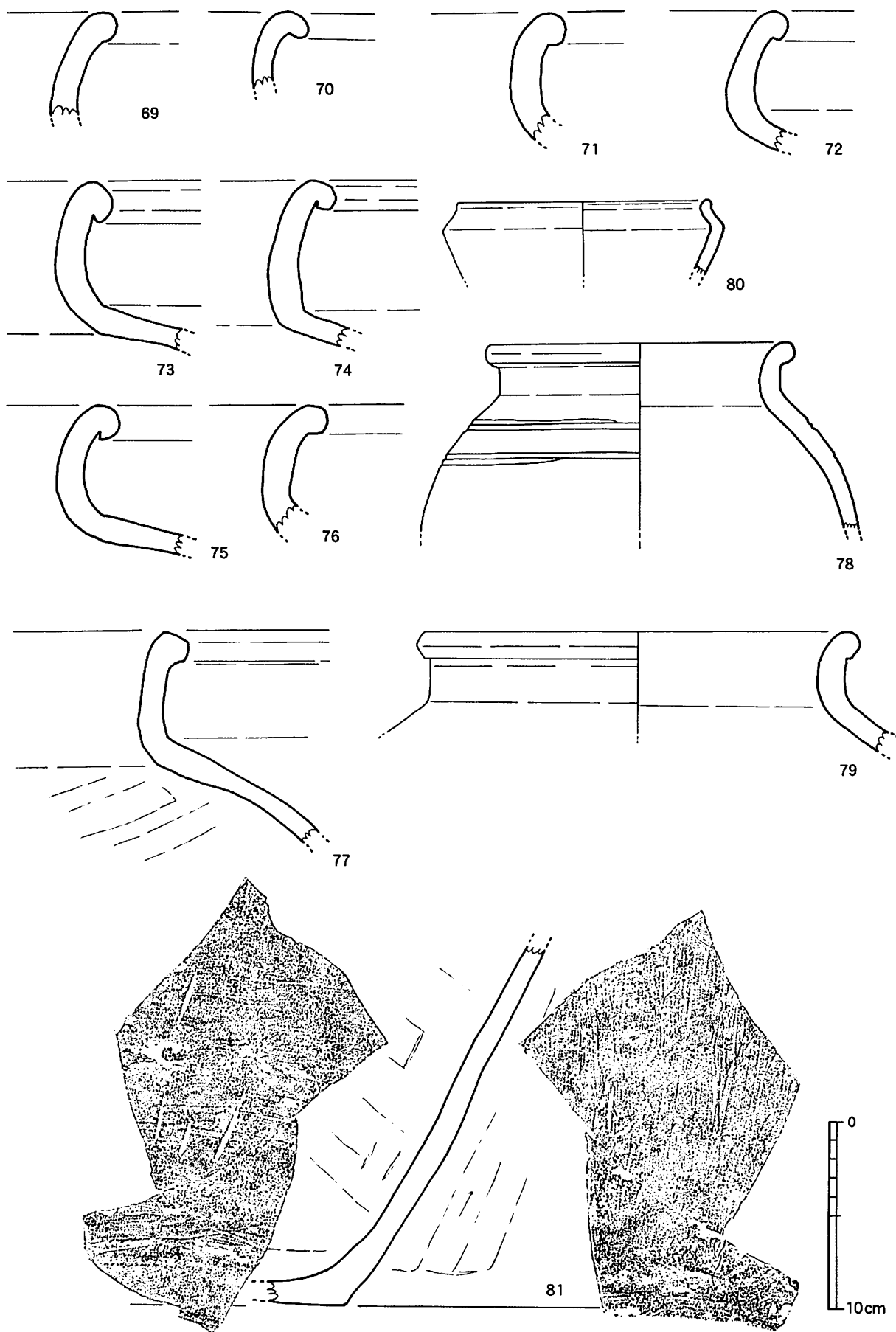
土鍋 162~164は土鍋の底部である。既述の二つのタイプのいずれか判断はつかないが、3点とも胴部下位で稜を生じて屈曲し、丸底になる。162は屈曲部での径が25cmである。器面は、内外面とも刷毛目で調整されている。163の屈曲部での径は24.6cmで、外面の丸底部は刷毛目調整で、その上位は指押さえである。164の屈曲部での径は23.6cmで、器面調整は外面が指押さえである。165は土鍋の脚である。

東播系 第3-15図の171以外は東播系須恵質土器の鉢である。口縁端部が外側に肥厚し、断面がカマボコ状や三角形になる特徴を持つ。器面調整は、回転を利用した横方向の撫で、外面の一部には176に見られるような指圧痕が残る。169は注口部の資料である。法量は口縁部が計測できる172は23.4cm、173は26.2cmで、底径が計測できる175は9cm、176が9.4cm、177が8.4cmである。また図上復元できた174は口径22.6cm、器高9.5cm、底径7.8cmである。

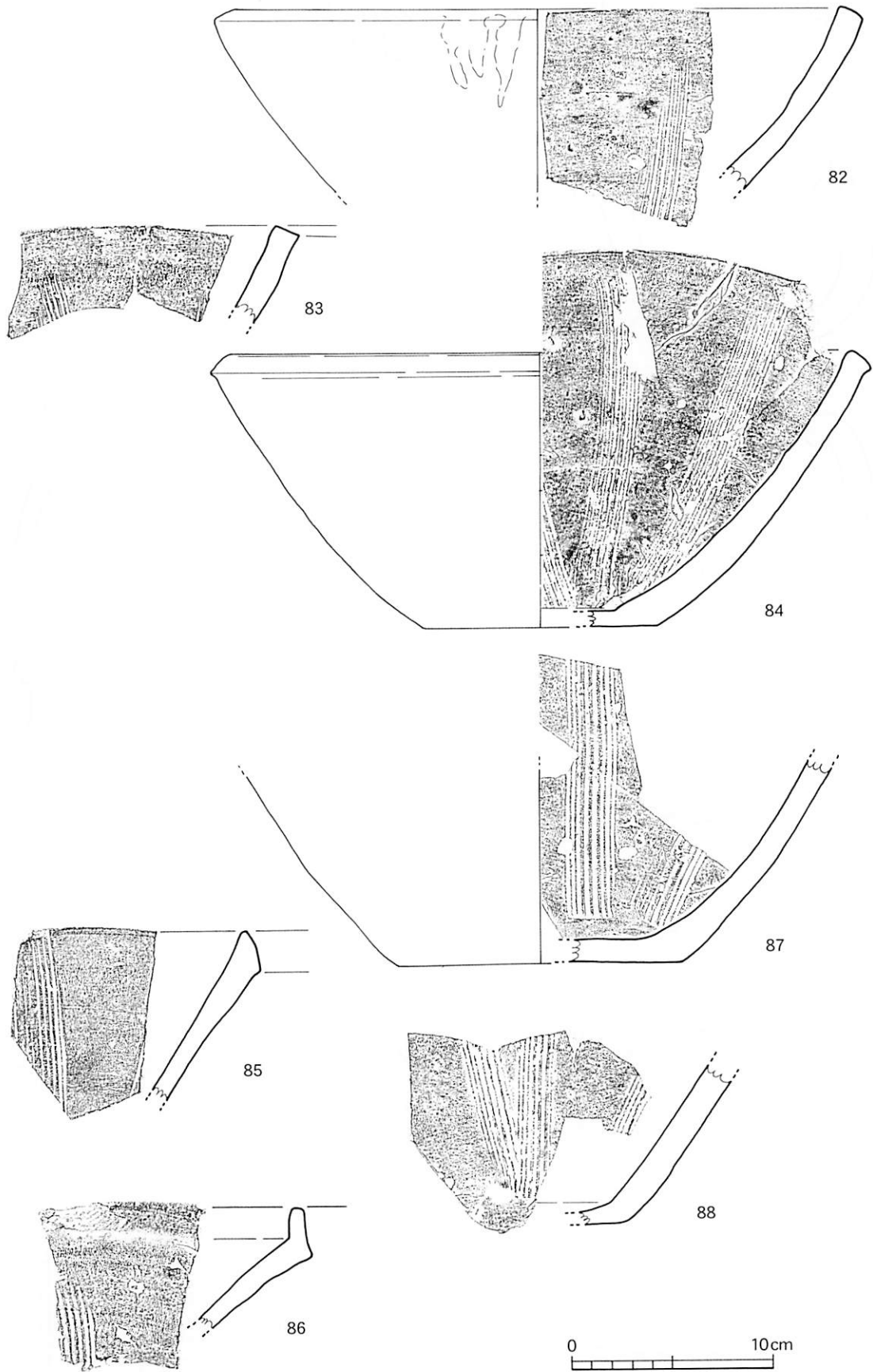
第3-16図は須恵質土器として10点を図示したが、焼成の不良な土器は瓦質土器と区別が困難である。178~180は外反する口縁部の資料で、横方向の撫で仕上げである。181は口縁部が屈曲して直立する鉢であるが、東播系須恵質土器の可能性もある。口径24cmである。182は小型の須恵質土器の壺で、底面に糸切り痕が残る。底径4cmである。183は肩部外面に格子叩きがある須恵質土器である。178の形態の口縁部が付くと思われる。頸部の径が40cmの亀山系須恵質土器である。184も同じ器形の甕で、胴部外面全体に格子叩きが残されている。185は綾杉状の叩き目が器面に残されている須恵質土器の甕である。187は外面に格子叩きが残る、底部が平底の甕である。186は径10cmの須恵質土器の底部の資料である。東播系須恵質土器の鉢の底部である。

亀山系 第3-15図171・第3-17・3-18図は瓦質土器である。171は内面の器面調整が斜目方向の粗い刷毛目である。第3-17図188~190は瓦質土器の碗の資料である。188の口径は12.4cm、底径は5.0cmで

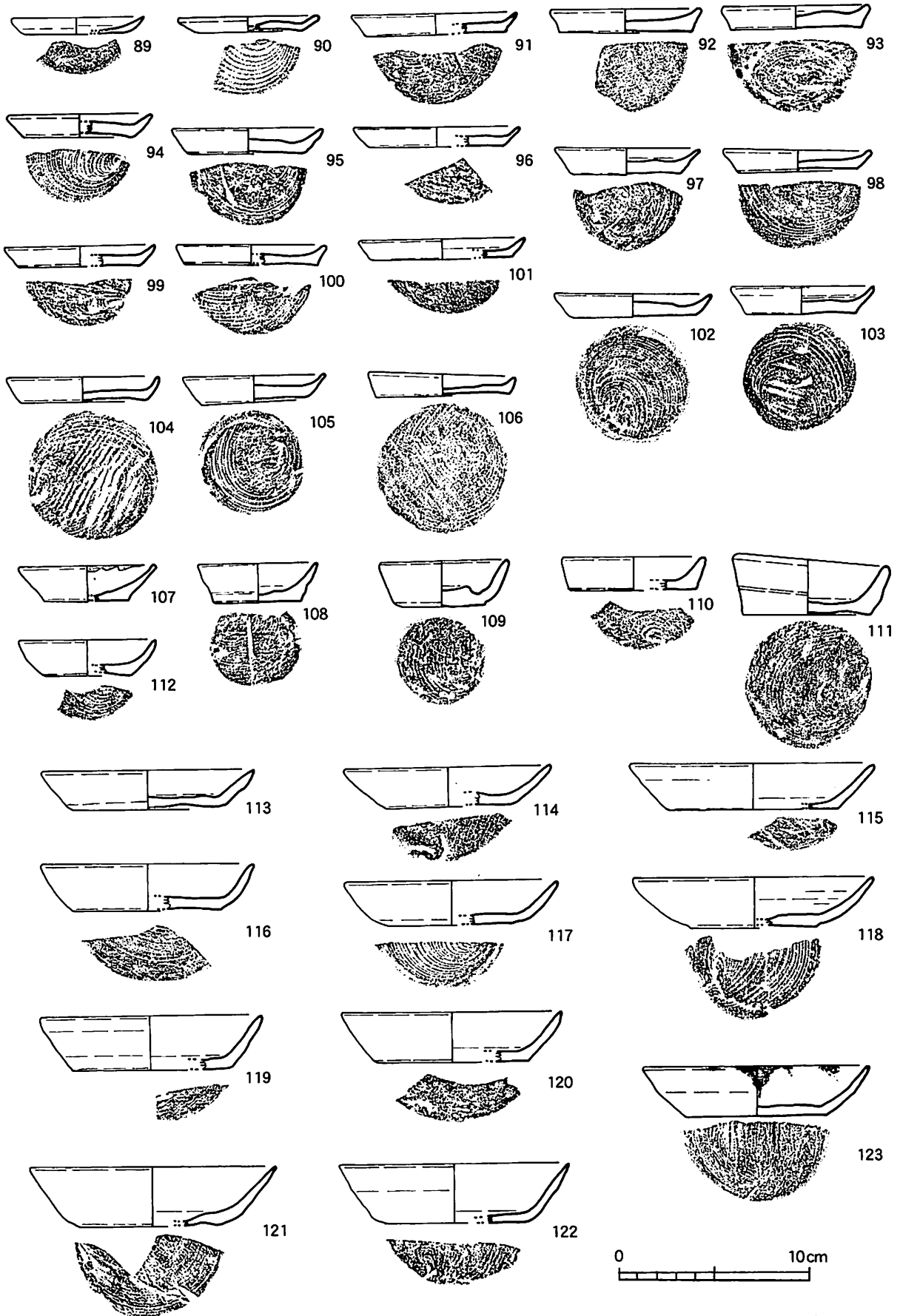
(1)山本悦代「吉備南部地域における古代末~中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会 1992年



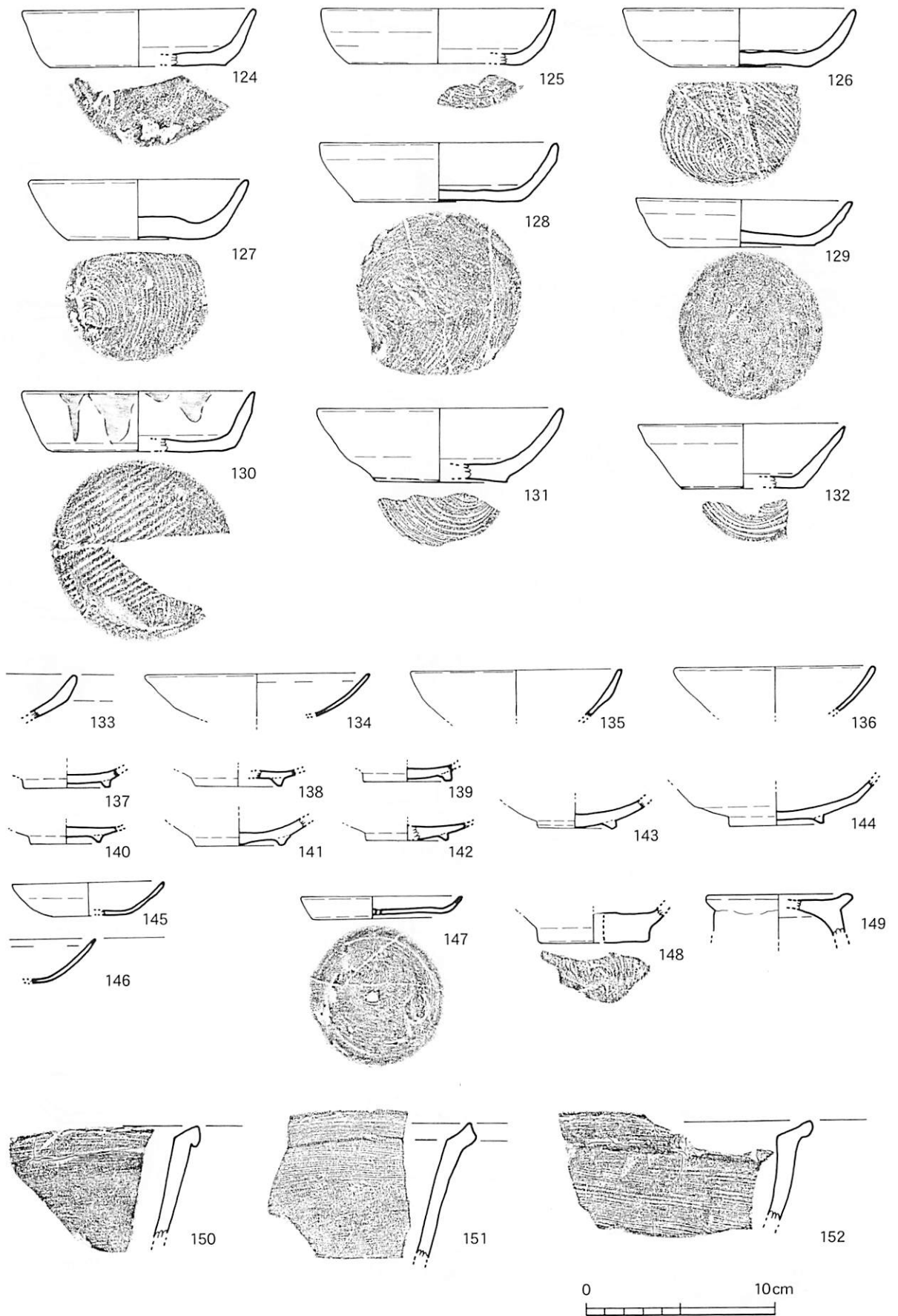
第3-10図 B-SD003出土遺物実測図(6)



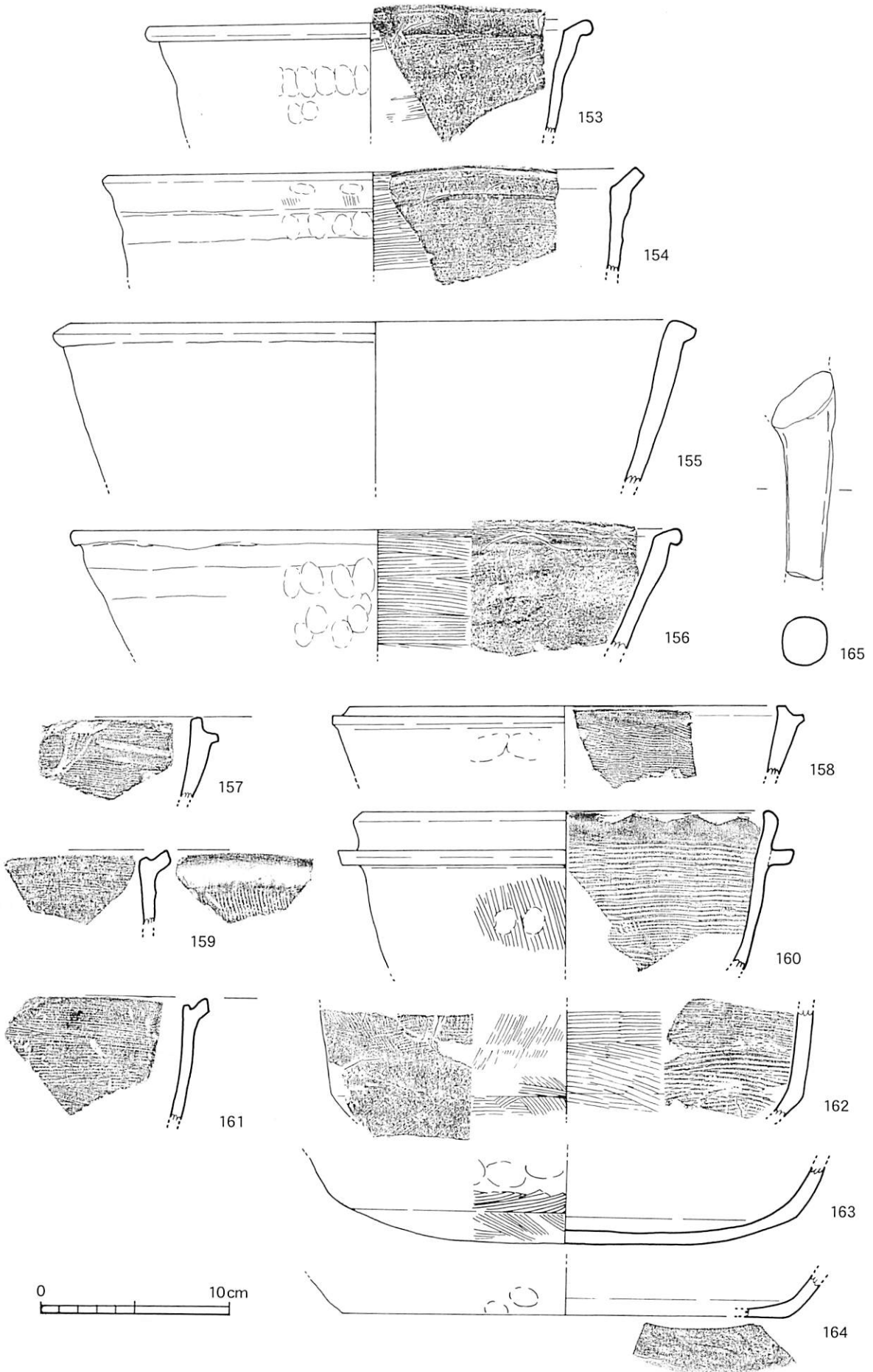
第3-11図 B-SD003出土遺物実測図(7)



第3-12図 B-SD003出土遺物実測図(8)



第3-13図 B-SD003出土遺物実測図(9)



第3-14図 B-SD003出土遺物実測図(10)



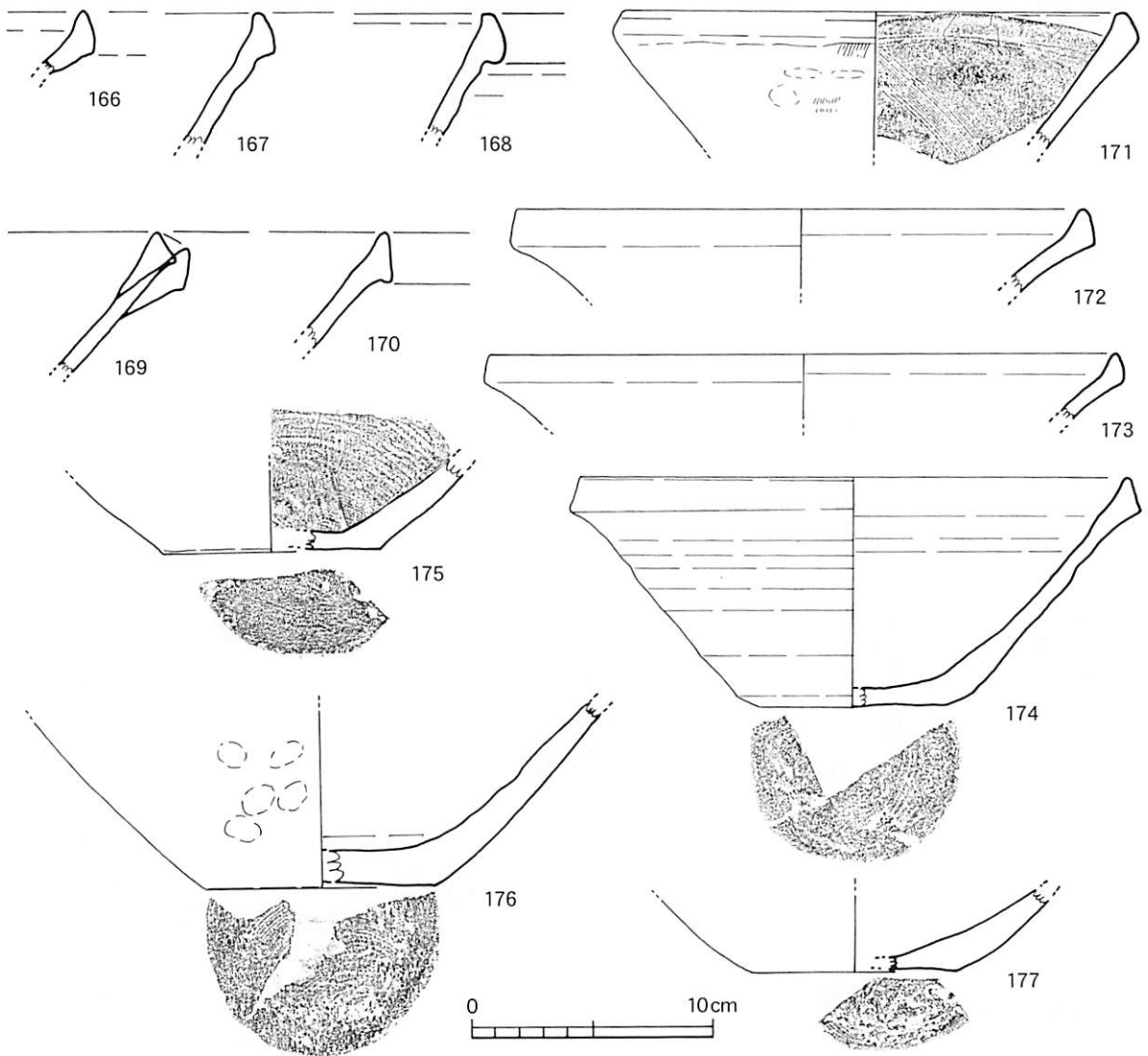
第2節 遺構と遺物

ある。191～199は鉢である。器面調整は内外面とも刷毛目で仕上げているが、外面はさらに撫でや指押さえの跡が194～197に見られる。また、200の内側には7～8本の櫛歯状工具で掃り目が入れられており、防長系掃鉢と考える。194の口径は34cmで、底径は195が10.4cm、196が10.8cm、197が9.2cm、198が10.2cm、199が10cm、200が11.2cmである。

第3-18図201・202・203は口径42cm・47.8cm・22cmの壺である。器面は口縁部が横方向の撫で、胴部には一部に刷毛目が残されている。204は全面横方向にヘラ磨きされた瓦質土器で、器高は6cmで、器形は上面観が方形になる。205は204を大型にした瓦質土器の角の資料である。全面ヘラ磨きされ、黒色に焼成されている。206と207の外面には菊花文が付いている。

第3-19図に図示したのは石製品・土製品・ガラス製品である。208～212は滑石製品で、本来は212の底径20.8cmの石鍋であったが、再加工している。210は両面に溝を入れており、切断作業の途中と考える。重量は208が22.2g、209が144.2g、210が118.2g、211が113.8g、212が78.8gである。213の長さは不明であるが、幅4cm、厚さ0.4～0.7cmの砥石である。

214～241は土錘である。241以外は紡錘形で、長さは3cm代と5cm代を含むが、ほとんどは4cm代であり、重さも5g前後のものが主体を占める。ただ241は側面観が長方形で、直径が大きく11.1gある。



第3-15図 B-SD003出土遺物実測図(11)

ガラス製品 242～247はガラス製の玉で、242～244は青色をした小玉である。ビーズ状に穴が開くが、外面は螺旋状になっている。245～247の玉は半分に欠けており、割れ面は研磨されている。245・146は緑色で、247は紺色をしている。直径は1cm弱である。

248は土製の玉で1ヶ所、竹串で突いたような跡が残る。

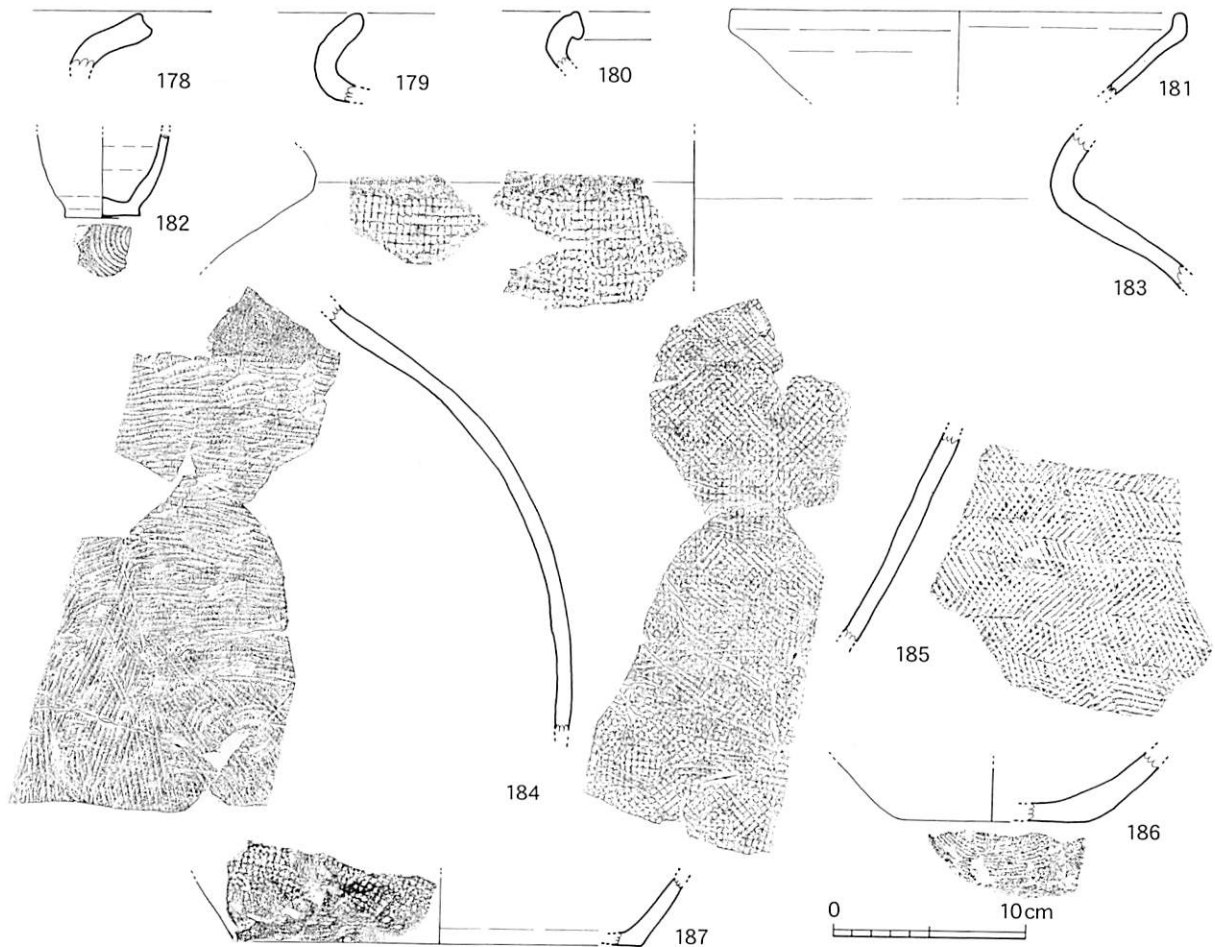
第3-20・3-21図は古代の遺物である。249は口縁部内面に沈線が廻る口径19.2cmの内黒土器である。251は底径6.0cmの土器で外面はヘラ磨きされている。252は口径18cmの土師器の皿である。内外面ヘラ磨きされている。253は口径19cmの須恵器の坏蓋である。250・254～259は底部が回転ヘラ切りの坏である。口径は13cm前後で、器高は3.6cm前後である。260～265は高台付きの坏である。底径は9cm前後である。なお、262・265は須恵器である。また、267も須恵器で、壺の底部と想定する。268と269は須恵器である。壺の口縁部と胴部である。270は口縁部が直口する土師器で口径は27cmである。甑と考えられる。

第3-21図271～274は胴部が直線的に延び、口縁部が外反する甕形土器である胴部外面は縦方向の刷毛目で、他は撫で仕上げである。口径は271が22.2cm、272が24.4cm、273が21.8cm、274が24.6cmである。275は胴部最大径が44.8cmの甕形土器である。時期は中世の可能性がある。276は弥生時代後期の壺形土器の口縁部である。277は古墳時代前期の高坏である。

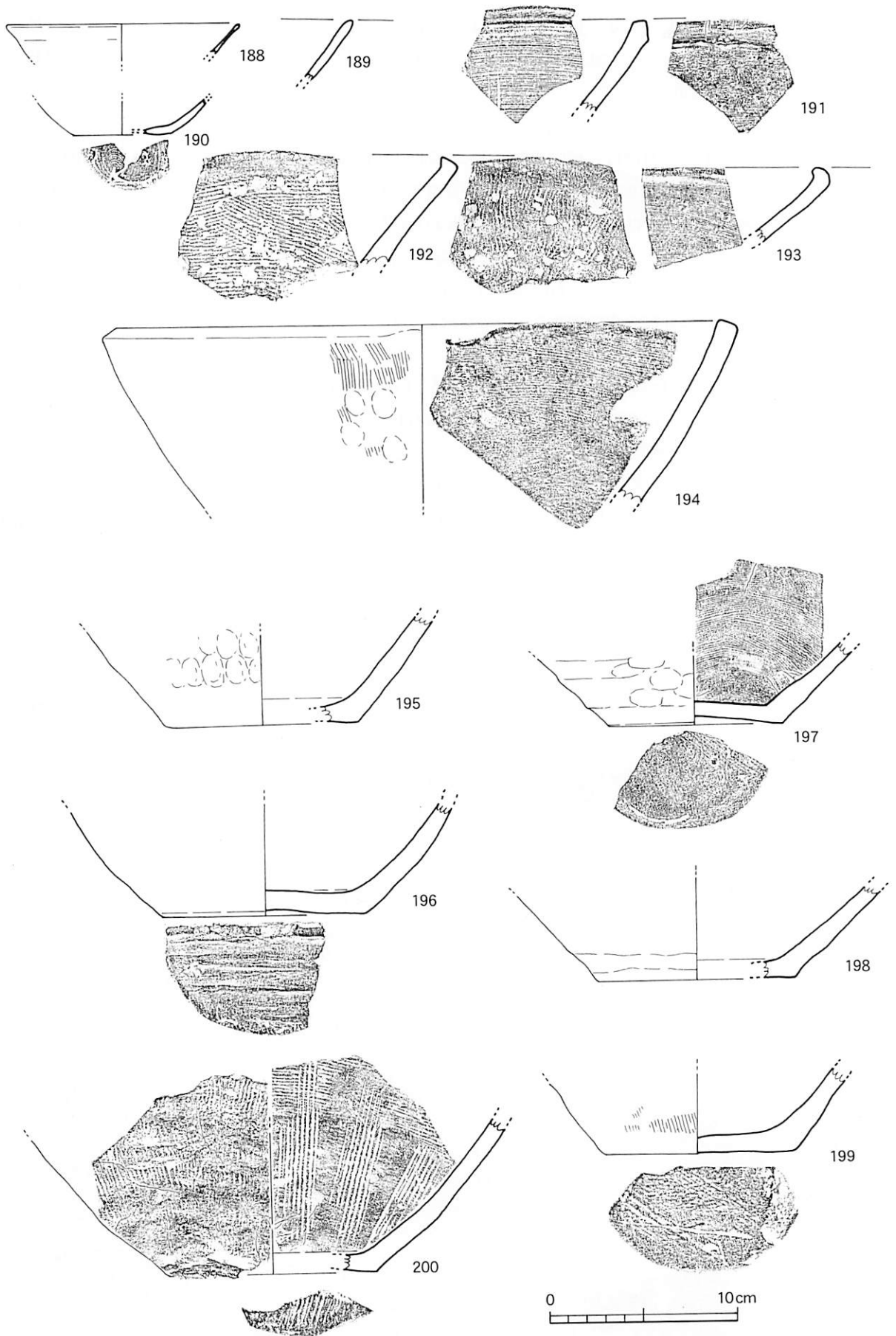
弥生土器

銅銭

第3-22図にはB-SD003から出土した銅銭を図示した。278は一部を欠くが「開元通寶」で初鑄年は845年（唐）である。279は「咸平通寶」で初鑄年は998年（北宋）である。磨輪銭の可能性はある。280は「景德元寶」で初鑄年は1004年（北宋）である。281は篆書体で書かれた「天聖元寶」



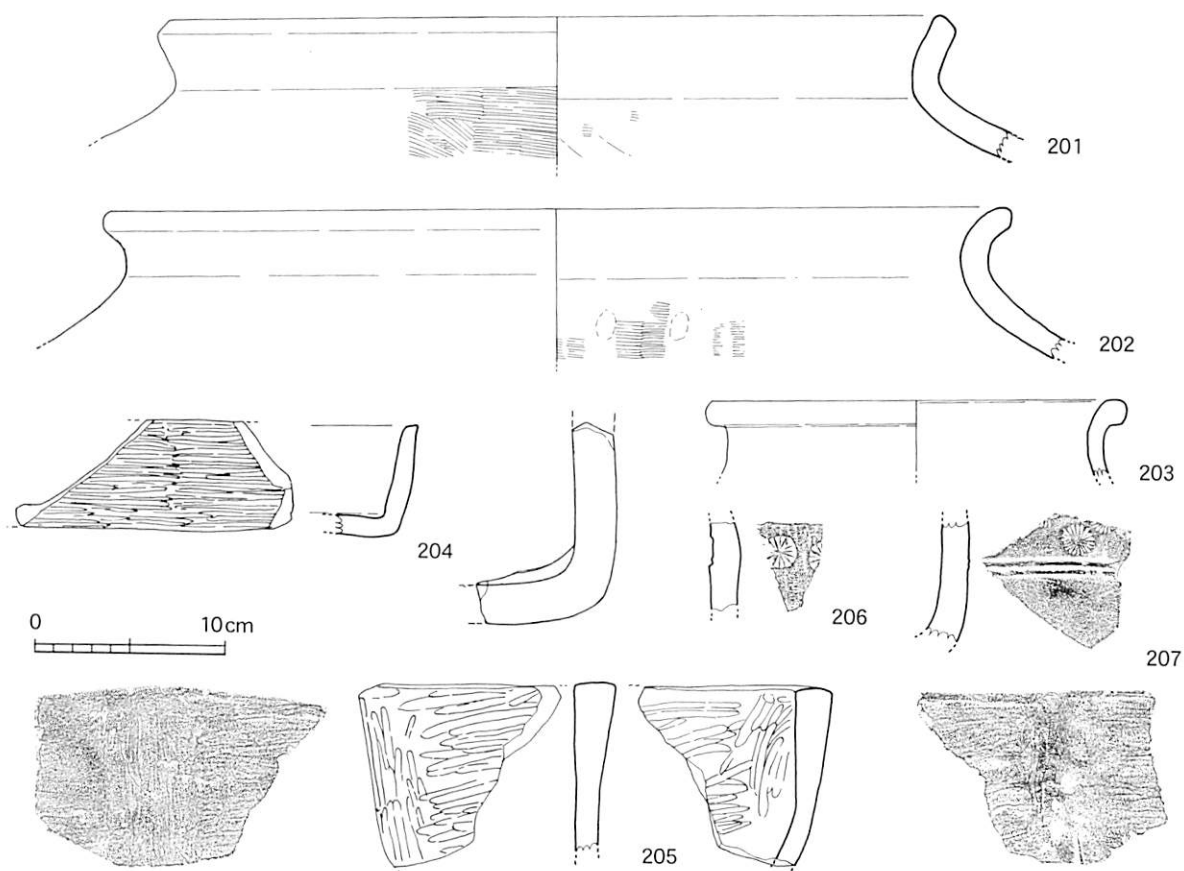
第3-16図 B-SD003出土遺物実測図(12)



第3-17図 B-SD003出土遺物実測図(13)

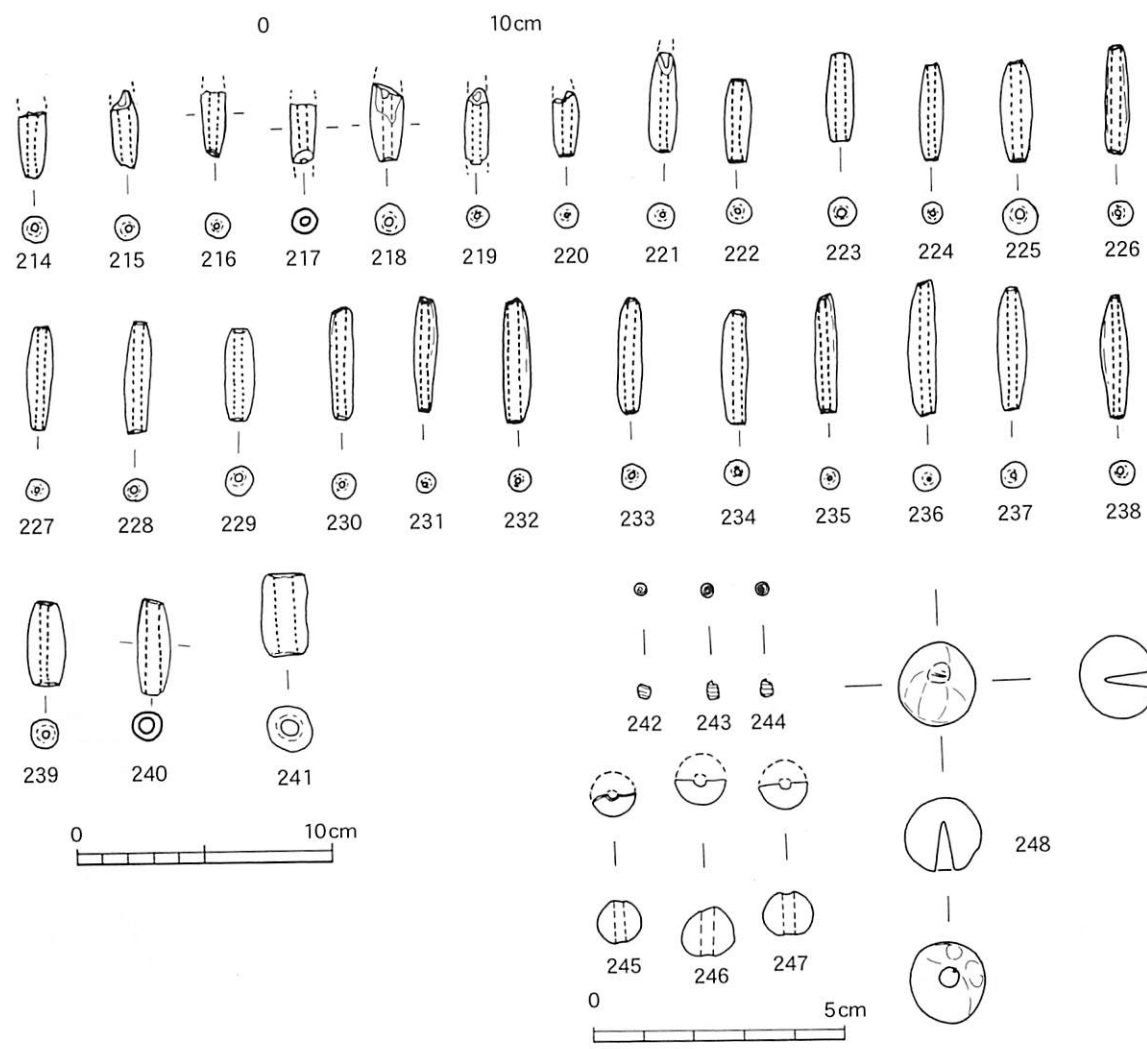
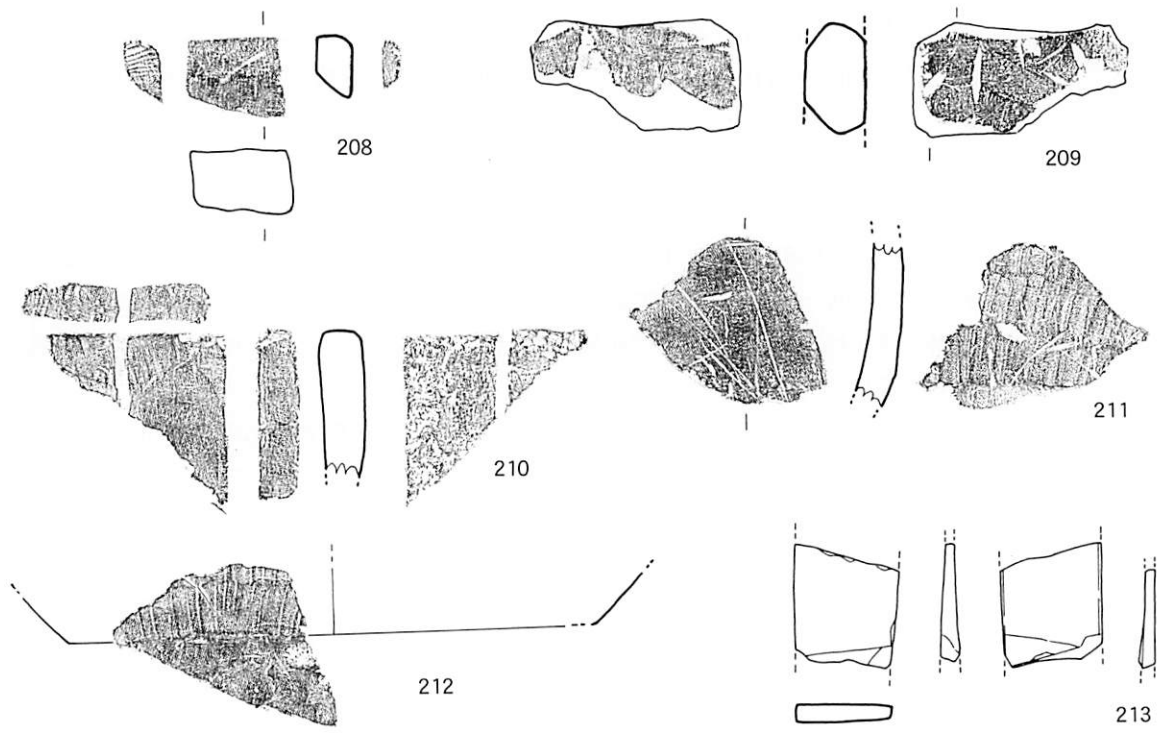
で初鑄年は1023年（北宋）である。孔の部分にズレがあり星形孔状である。282は真書体で書かれた「嘉祐通寶」で初鑄年は1056年（北宋）である。291の「元祐通寶」と貼りついて出土した。283は真書体で書かれた「治平元寶」で初鑄年は1064年（北宋）である。284・285は行書体、286は篆書体で書かれた「元豊通寶」で初鑄年は1078年（北宋）である。287は篆書体で書かれた「熙寧元寶」で初鑄年は1068年（北宋）である。288・290・291は行書体の「元祐通寶」で初鑄年は1086年（北宋）である。288は星形孔になっており、291は282と貼りついて出土した。289・292の「元祐通寶」は篆書体である。293・294は篆書体で書かれた「紹聖元寶」で初鑄年は1094年（北宋）である。295は真書体で書かれた「政和通寶」で初鑄年は1111年（北宋）である。296は錢貨名が全く読めないが、297は真書体の「元」「寶」が読めるものの、不明である。

B-SD003から出土した遺物の時期は13世紀後半から16世紀後葉まで及ぶ。しかし、15世紀以降の遺物はごくわずかで、溝を切る確認できなかった遺構からの出土と考える。古い時期の遺物の混入は当然ありうる。これらを除くと、遺構の時期は14世紀中葉から後葉と考える。

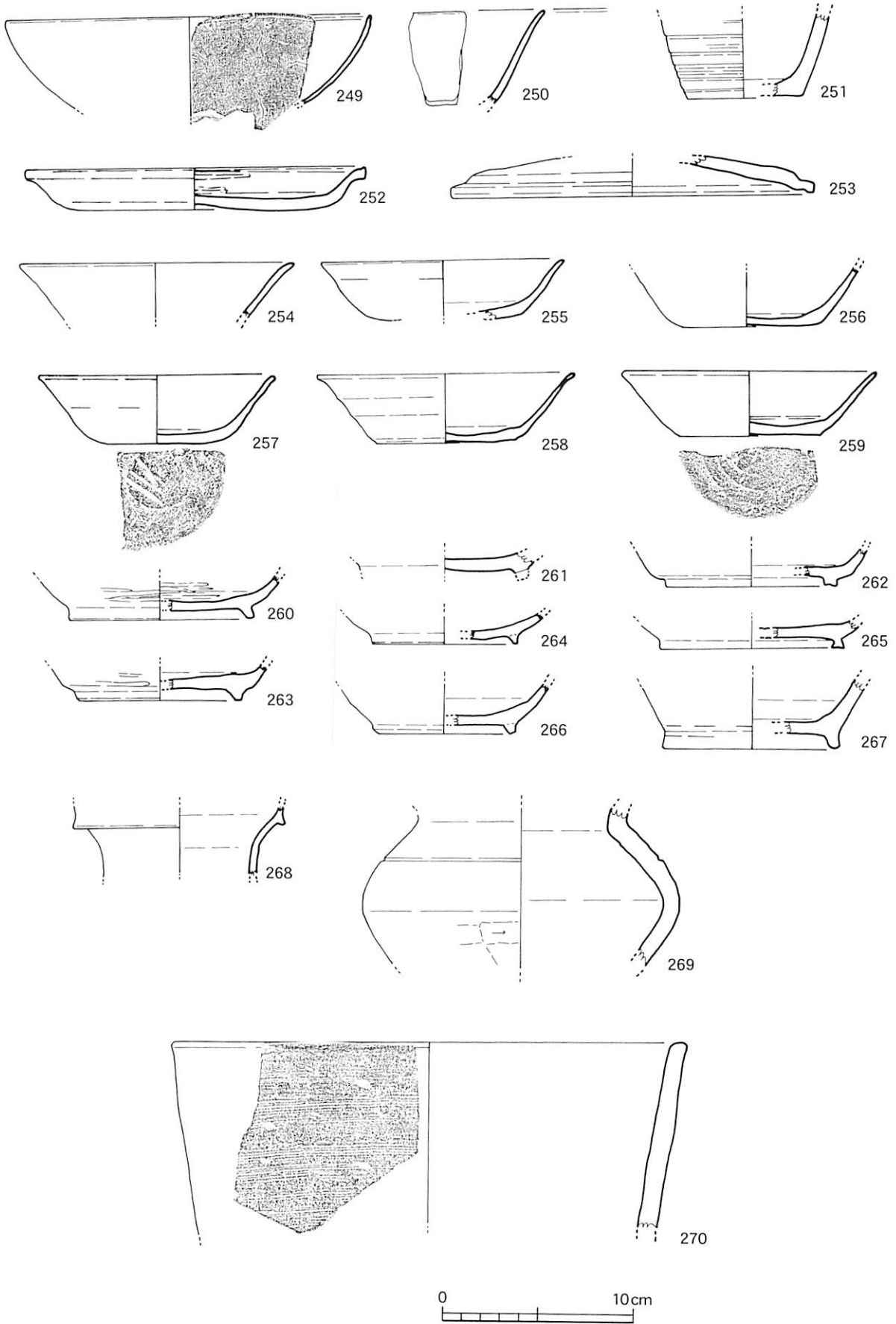


第3-18図 B-SD003出土遺物実測図(14)

第2節 遺構と遺物

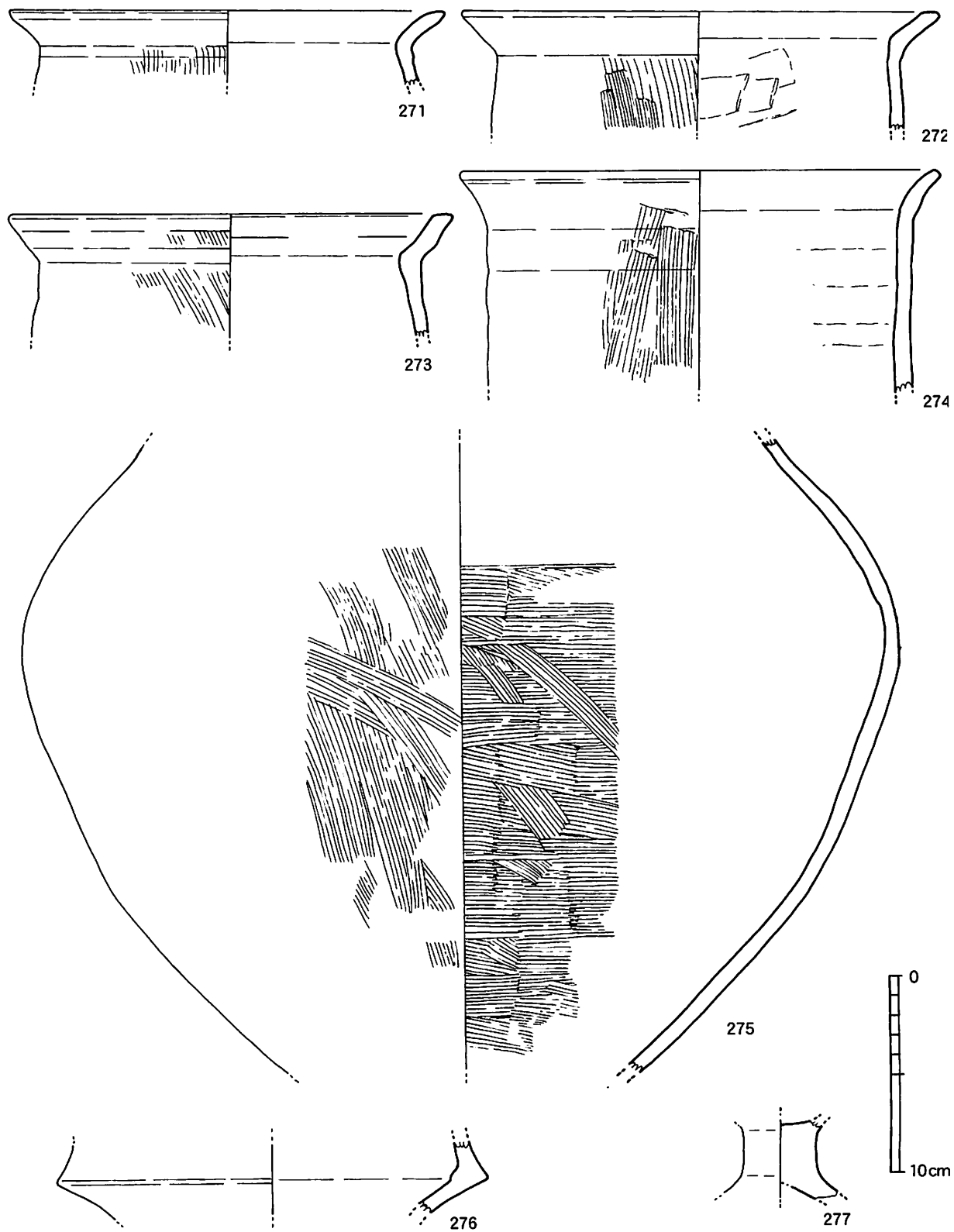


第3-19図 B-SD003出土遺物実測図(15)



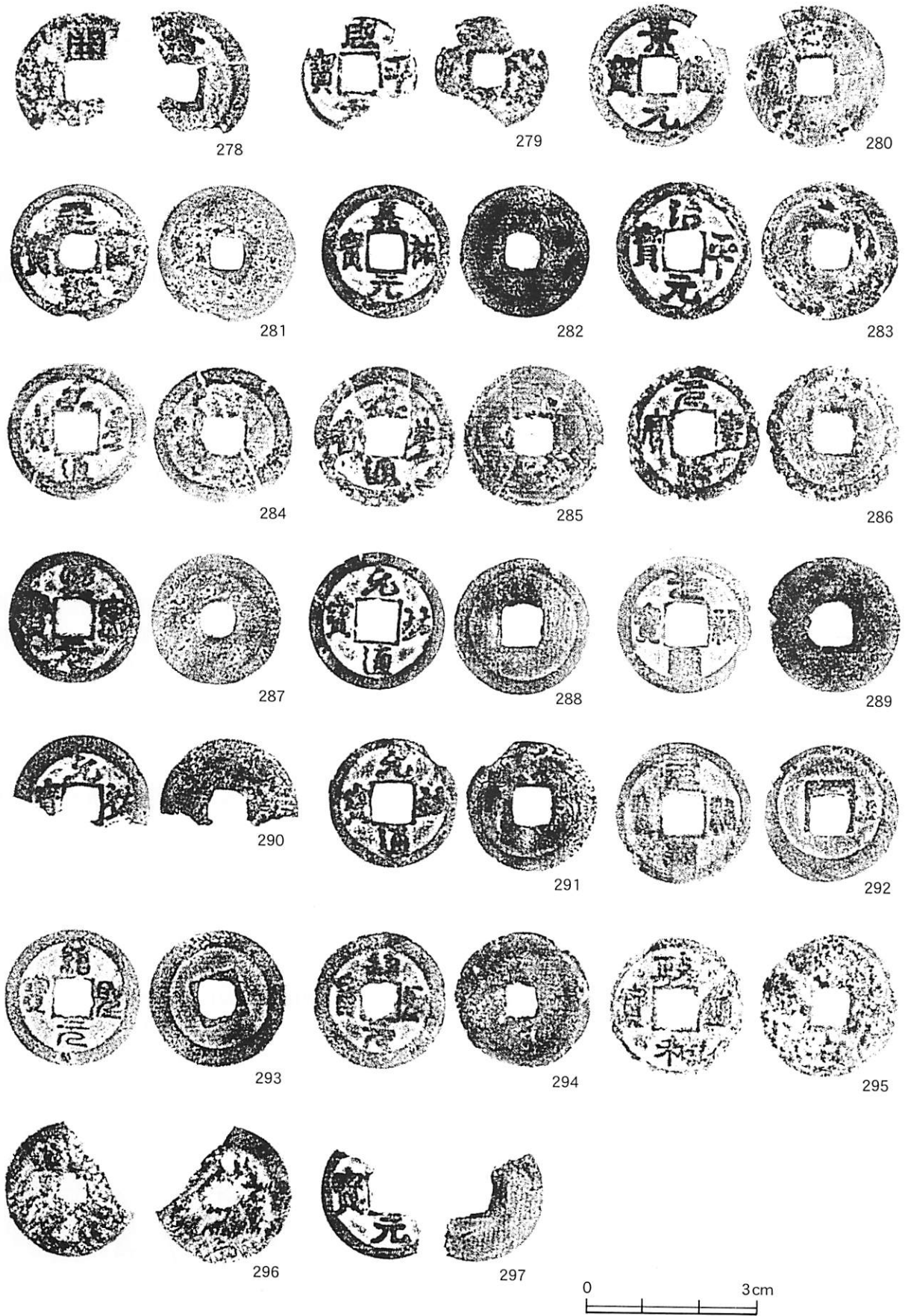
第3-20図 B-SD003出土遺物実測図(16)

第2節 遺構と遺物



第3-21図 B-SD003出土遺物実測図(17)





第3-22図 B-SD003出土銅銭実測図

B-SD004

B-SD004は調査区の東壁沿いで、南北方向に掘り込まれた状況で検出された溝である。溝は南北に約45m確認されたが、大半は調査区外で、西側の掘り込み面を調査したに過ぎず、深さは約50cmまでしか掘り下げることが出来なかった。溝は北端で東に屈曲すると考える。

遺物は溝の上面を中心に、瓦が廃棄された状態で多量に出土し、第3-23~3-35図に図示した。第3-24図1~3は龍泉窯系青磁碗である。外面には鎬蓮弁が施文されている。4・5は備前系陶器である。壺である4は外面に自然釉が付着し、5の播鉢の内面には口縁部に直角に6本の櫛歯状工具で掘り目が加えられている。

6~19は口縁成形による在地系土師質土器である。6~13は皿であるが、法量の平均は、口径8.3cm、底径6.6cm、器高1.1cmである。器形は8が底部の器壁が厚く口縁部の立ち上がりは小さいが、他は円盤状の粘土塊から口縁部を引き出している。12~19は坏である口径は、12.5cm前後で、底径も8.5cm前後、器高は15が2.4cm、16は2.9cmであるが、他は3cmを越える。器形は、14が口縁部の器壁が中位にあるが、16~19は底部周辺が厚くなっている。15は口縁端部が外反気味になる。

20~23は胎土が白色で、底部に高台が廻る非在地系の土師質土器で、吉備系土師器や早島式土器と呼ばれるものである。21は図上復元されたものであるが、口径11.2cm、底径4.3cm、器高3.1cmである。また、底部の資料である22・23は、21と同様の断面三角形の退化した高台が廻っている。底径は22が5.1cm、23が4.4cmで、B-SD003から出土した同類の資料と類似する。

24・25は小片であるが、土鍋と考える。24は口縁部が屈曲するもので、口縁部は撫でであるが、胴部の内外面に刷毛目が残る。また25は外面が横撫でであるが、内面は横方向の刷毛目で器面調整されている。26は外面に縦方向の刷毛目がわずかに残る土師質土器の壺の口縁部である。27・28は大きさに差があるが、器形は東播系須恵質土器である。口径は27が19.2cm、28は36.5cmである。

第3-25図の29は口縁部が直口する口径11.9cmの瓦質土器の鉢である。器面は横方向の撫でで仕上げられている。30・31も瓦質土器の鉢の口縁部である。内外面とも横方向のヘラ磨きで、30は口縁端部が肥厚し、口唇部は平坦である。

32~34は土錘である。32は両端を欠くが残された部分は、長さ3.3cm、直径1.3cm、重さ5.5gである。33は完形品で長さ5.1cm、直径1cm、重さ5gである。34は大型で、長さ6.3cm、最大径2.9cm、重さ49.3gである。また、36はガラス製と考えられる小玉で、長さ、径ともに0.3cmで、重さは0.1gである。35は長さ7.5cm、幅2.6cm、厚さ0.9cmの一部を欠く砥石である。

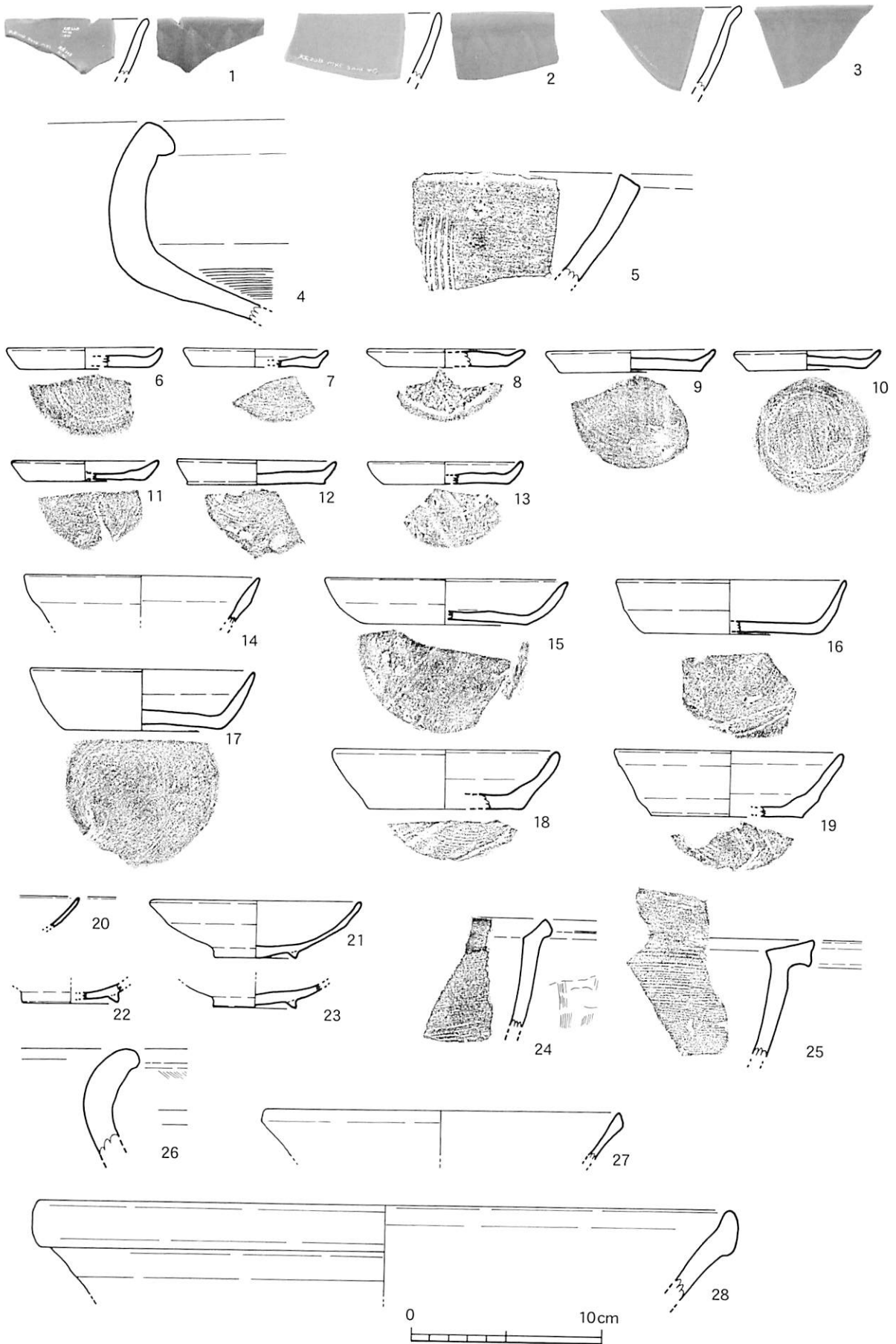
37・38は坏蓋で、37は宝珠形のつまみが付き、38の口径は19.3cmである。39~41は坏身で、口径は39が16.3cm、40は13.1cmで、41の底径は7.6cmである。器形は口縁端部が外反し、底部の高台は断面三角形である。器面調整は内外面とも横方向のヘラ磨きで仕上げられている。

42・43は口縁部が外反する甕形土器で、内外面撫で仕上げである。43の口径は19.5cmである。44は高坏の脚で、縦方向のヘラ削りにより、断面八角形に整えている。45は口径24.5cmの胴部が屈曲する鉢で、内外面とも撫でで器面調整されている。46は弥生時代後期の複合口縁壺の口縁部の資料である。外面は櫛描波状文とその上位に竹管刺突文が施文されている。47は全面刷毛目で器面調整された土師質土器の大型の平底の甕である。37~44は8世紀後半から9世紀前半のものであるが、47は中世のものであろう。第3-23図47は真書体で書かれた「熙寧元寶」の銅銭で初铸年は1068年(北宋)である。

第3-26~3-35図はB-SD004の上層から出土した瓦である。第3-26図48・49は鬼瓦で、48は厚さ2.8cmで、縦方向に珠文が並ぶ。49はヘラで刻み目を加えられた突

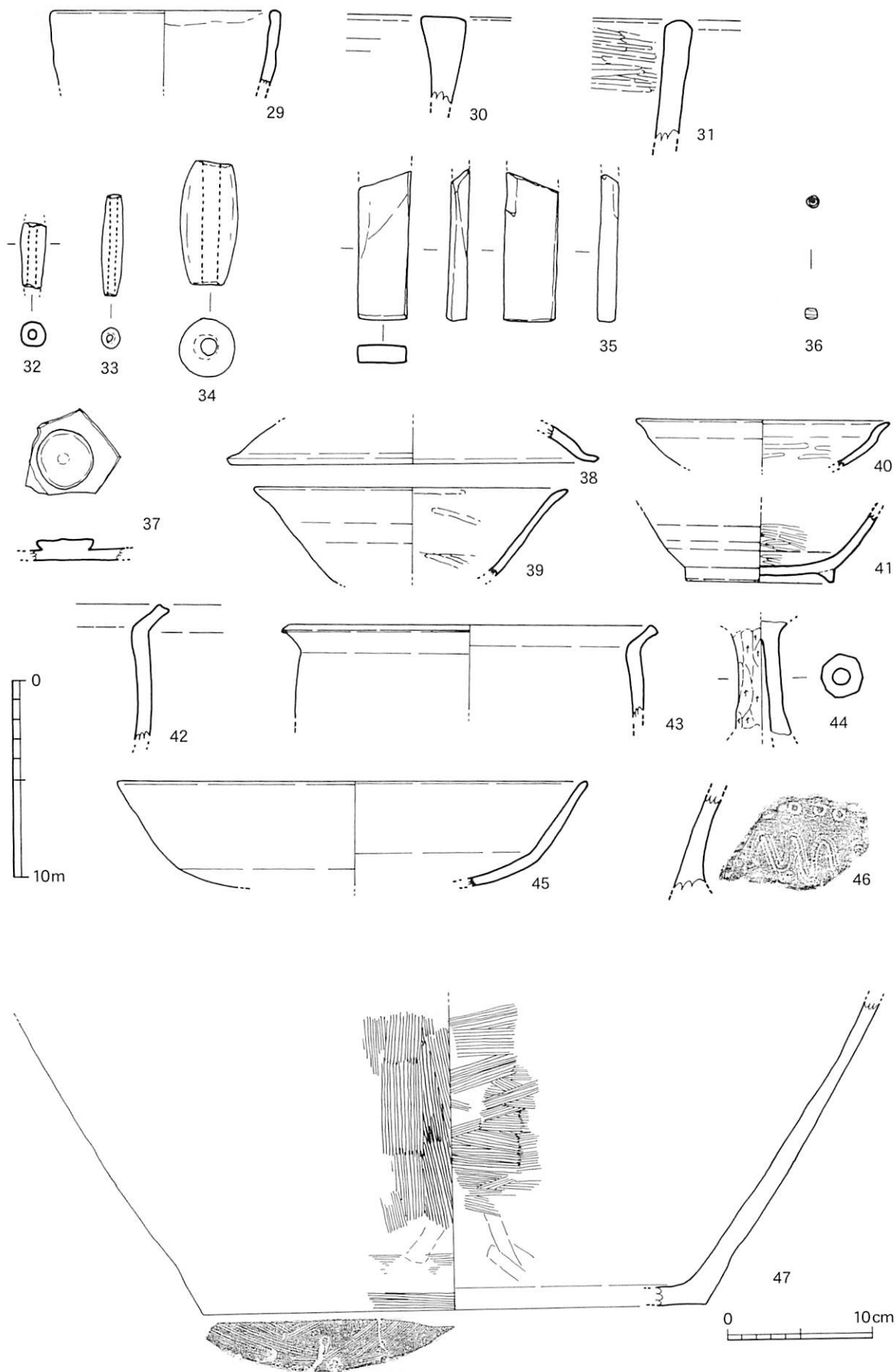


第3-23図 B-SD003出土実測図



第3-24図 B-SD004出土遺物実測図(1)

第2節 遺構と遺物



第3-25図 B-SD004出土遺物実測図(2)

帯が平行に付けられているが、部位不明である。50～59・第3-27図60は軒丸瓦である。瓦当部の良好な資料が少なく、全体を捉えることは困難であるが、57から、中央部に三巴文を配し、内圏線はなく、周辺に連珠文を施文する。外圏線は57以外には認められる。また、50・52は瓦部と瓦当との角度が鋭角であり。鳥衾の可能性はある。瓦面の外面はヘラ撫でであるが、内面は56・58～60に

コビキA

布目痕が残り、58にはコビキAの擦過痕がある<sup>1)</sup>。

丸瓦

第3-27・3-30図の61～85に丸瓦を図示した。63～69は軒に近い部位で、64は瓦当を付けるためのヘラによる斜め方向の連続した細かい傷が加えられている。63の瓦は幅16.8cm、厚さ2.8cmで、外面は縄目叩きの後撫でで平滑に仕上げられている。内面は布目と横方向に細い紐を10段以上に縫った痕跡である九州タイプの吊り紐の圧痕が残り、その下位は8.8cmの幅で横撫でされている。65の瓦も同様な成形で、内面に布目と九州タイプの吊り紐の圧痕が残り、下位の撫で幅は約5cmである。66は全面に布目が残り、下位の撫で幅は約3cmである。67の瓦の幅は16.8cmで、外面は縄目叩きの後撫でで平滑に仕上げられている。内面は布目の圧痕が残り<sup>2)</sup>、その下位は8cmの幅で横撫でされている。68の瓦は幅14.4cmで、外面は縄目叩きの後撫でで平滑に仕上げられ、内面は布目の圧痕が残り、その下位の横撫での幅は3cmである。69は外面を縦方向にヘラ撫でされており、内面はコビキAの斜め方向に擦過痕が残る。下位の横撫での幅は約4cmである。

九州タイプの  
吊り紐

70・73・74・77・78・79・81・85は玉縁部の資料である。玉縁の長さは70が5.2cm、73は4cm、79は8.4cm、81は4.4cm、85は4.6cmである。器面は外面が縄目叩きの後、縦方向のヘラ撫で、70・73・74の内面には布目と大きく波状になる吊り紐の圧痕が残る。73はさらに九州タイプの吊り紐に大きく波状になる吊り紐の圧痕が残る。74の幅は14cmである。77・78・81・85は布目のみが残り、79は九州タイプの吊り紐痕が残る。以上の他、内面に吊り紐痕の残る主な資料を図示した。61・76・82・84には九州タイプの吊り紐痕があり、71・75・80には大きな波状の吊り紐痕、72・83は九州タイプの吊り紐痕と大きな波状の吊り紐痕が見られる。

軒平瓦

第3-31図は、軒平瓦である。瓦当の文様は、86が連珠文で、他は均正唐草文である。文様は、同類である91・94に比較すると87の中心飾りの蓮華文や唐草文は明瞭であり、前者の2点が簡略化していることが判る。さらに、88の文様はさらに簡略化されている。

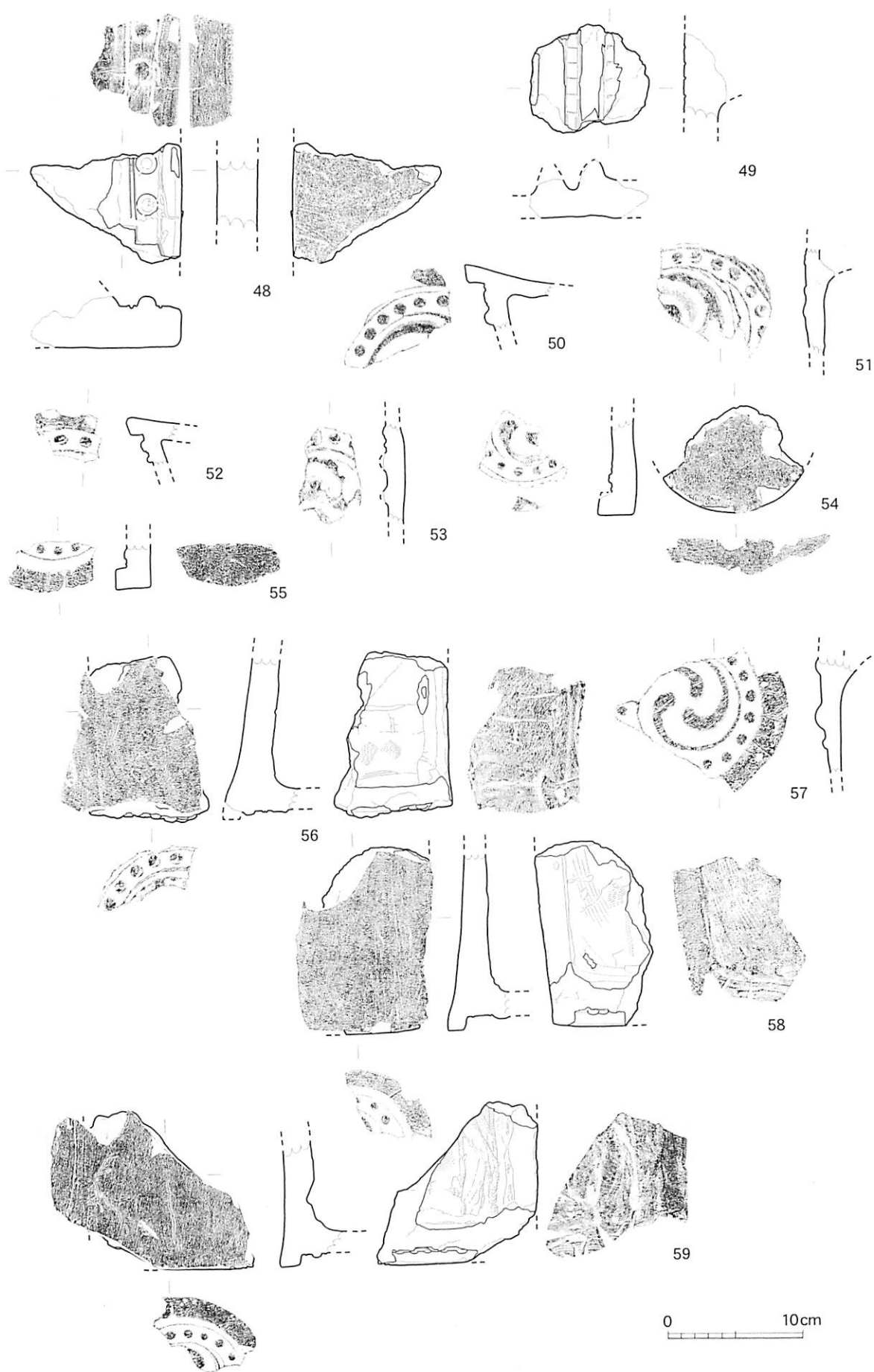
第3-31～3-34図は平瓦である。瓦の両面は縦方向の撫でで平滑に仕上げている。厚さは1.6cmから2.6cmであり、残りの良好な96では幅が24cmで、全形が判る97は、台形になり、上位幅20cm、下位幅約24.8cm、長さ30.4cmである。95は上位の破片であるが、釘穴が見られる。98～110も上位の破片であり、上辺の側面は、断面を見ると、横撫でで鋭角的に仕上げている。これに対し、下位の111～116の下辺の側面は直角に近く切断されている。

第3-35図の117は横断面が屈曲しており、雁振瓦であろうか。118～128は？である。厚さは3cm前後で、側面は直角に切られている。面は撫でで平滑に仕上げられているが、120はコビキAによる擦過痕が残る。118には押印による菊花文が施文されている。

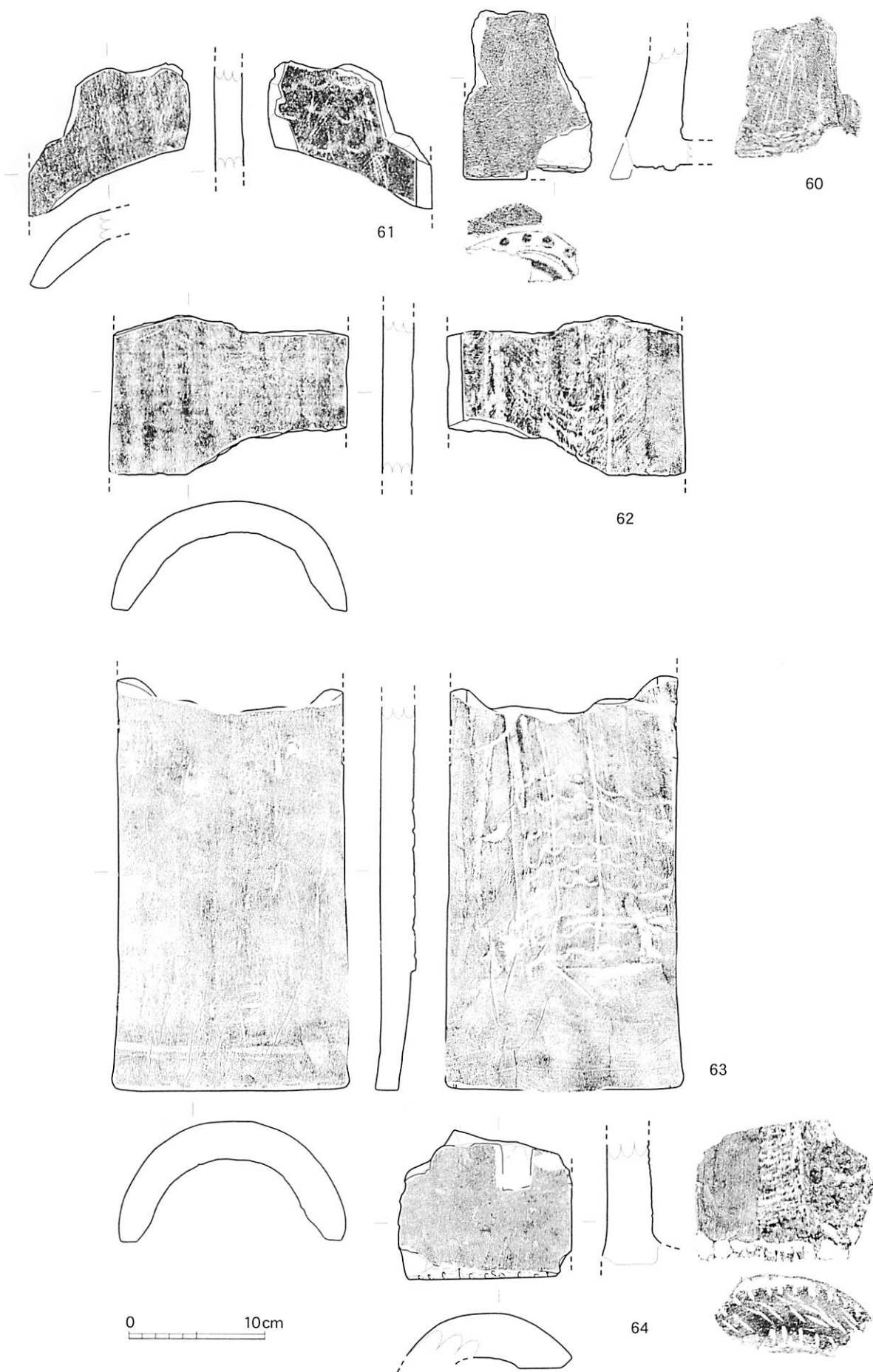
B-SD004の時期は、出土したロクロ成形による在地系土師質土器の形態や、備前系陶器の播鉢から14世紀中葉から後葉と考える。

(1)森田克行「屋瓦」『摂津高槻城』高槻市文化財調査報告書 第14冊 高槻市教育委員会 1984年

(2)山崎信二「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究所学報 第59冊 奈良国立文化財研究所 2000年

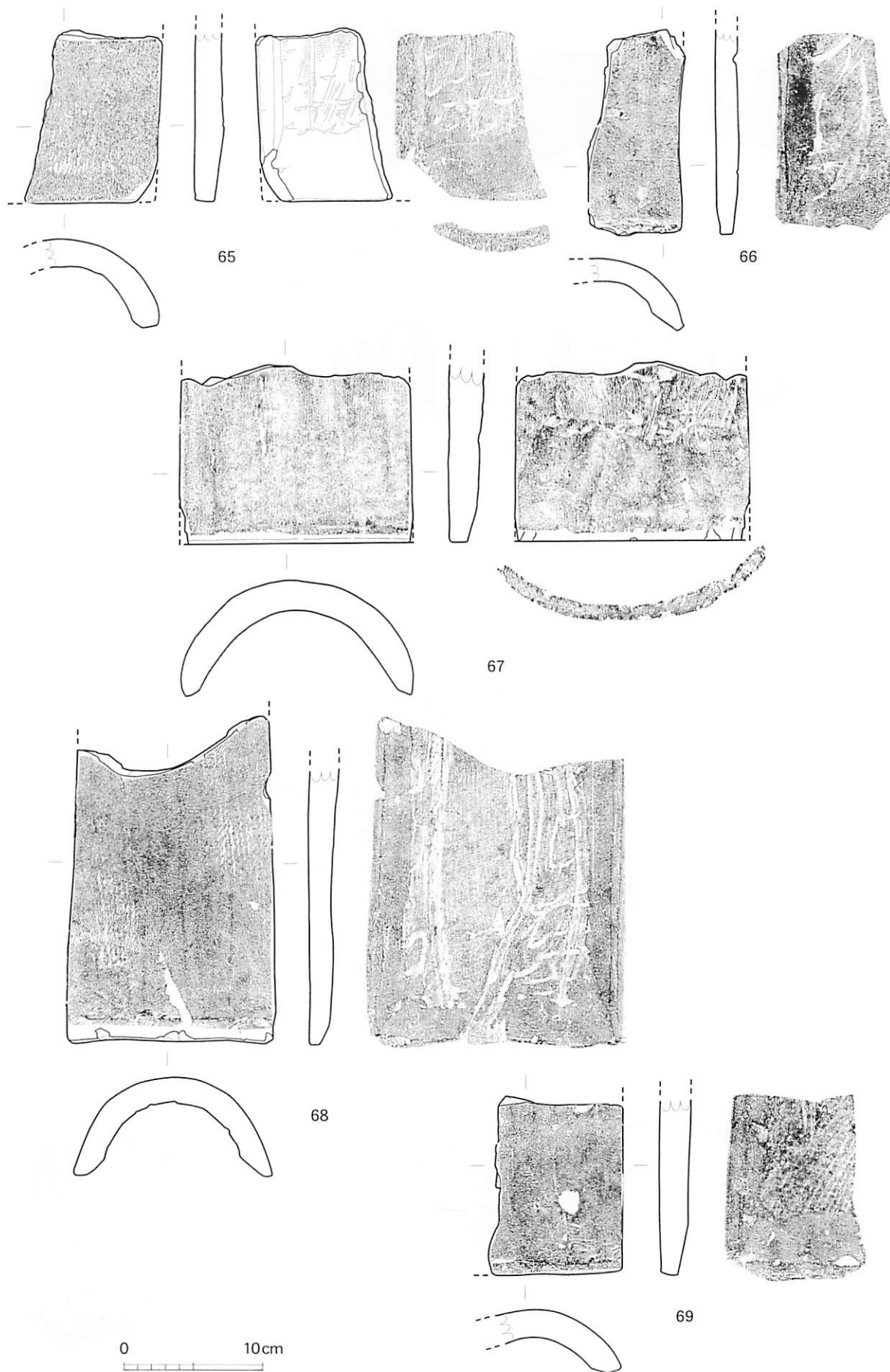


第3-26図 B-SD004出土鬼瓦・軒丸瓦実測図(1)

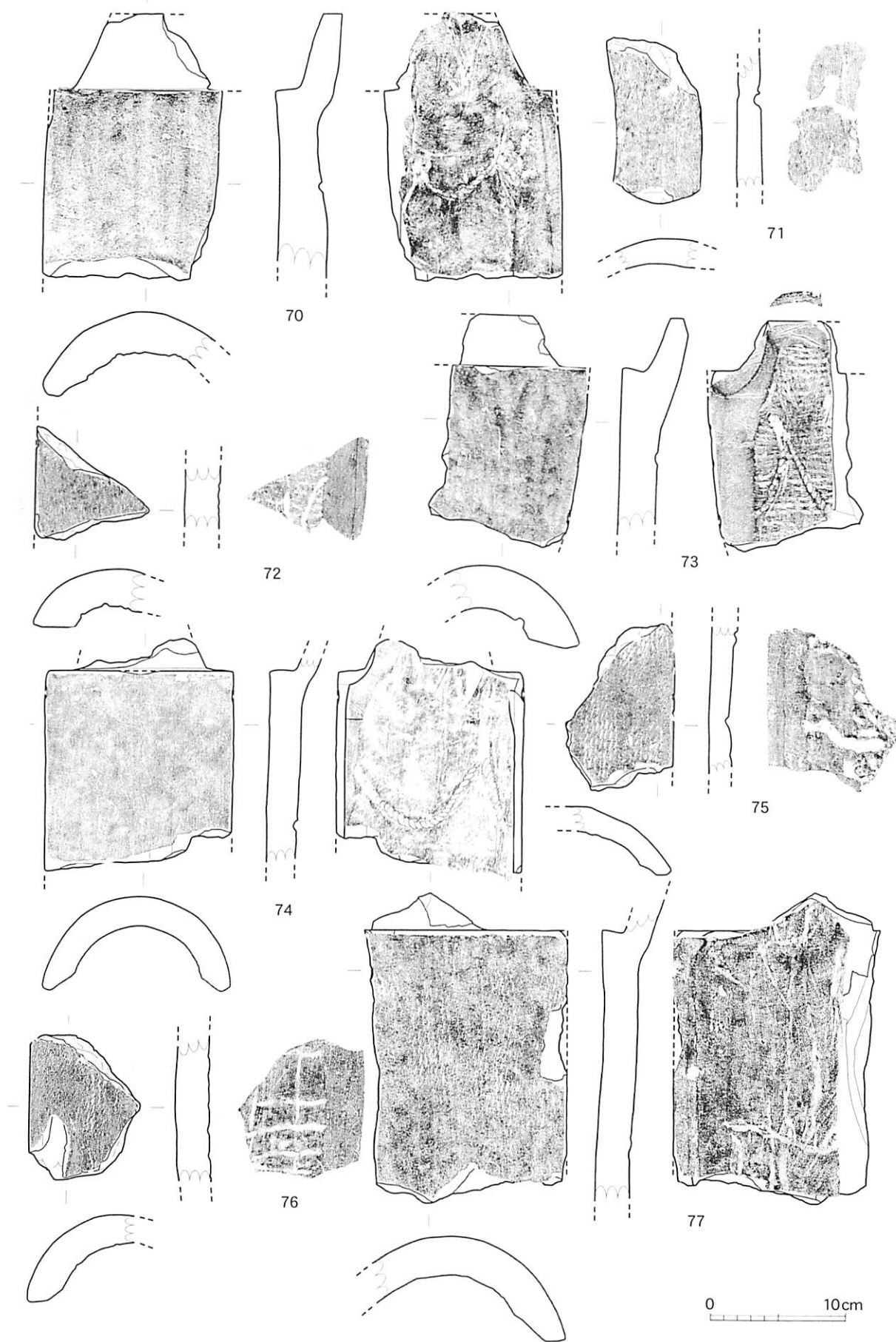


第3-27图 B-SD004出土丸瓦実測図(2)

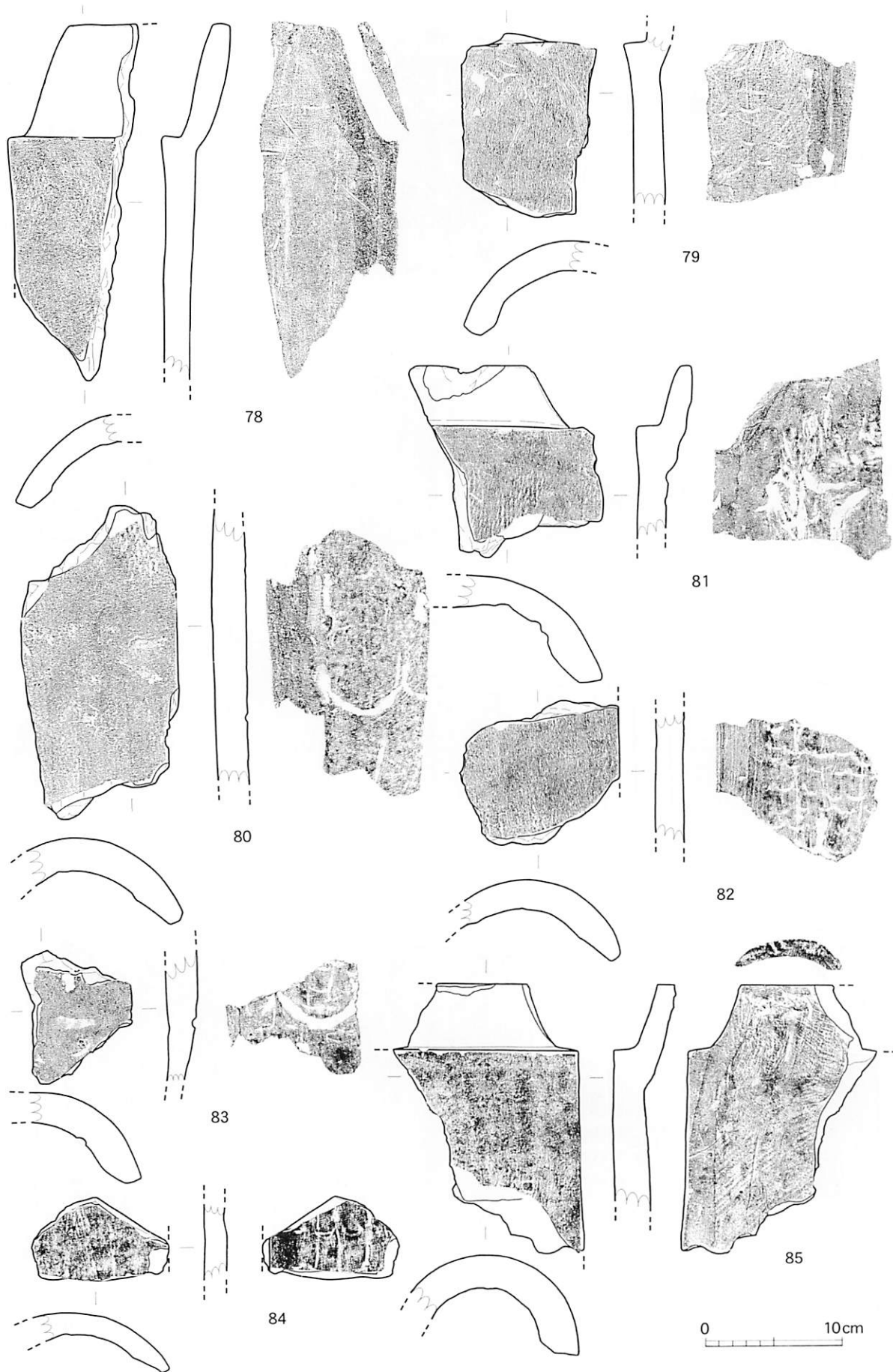




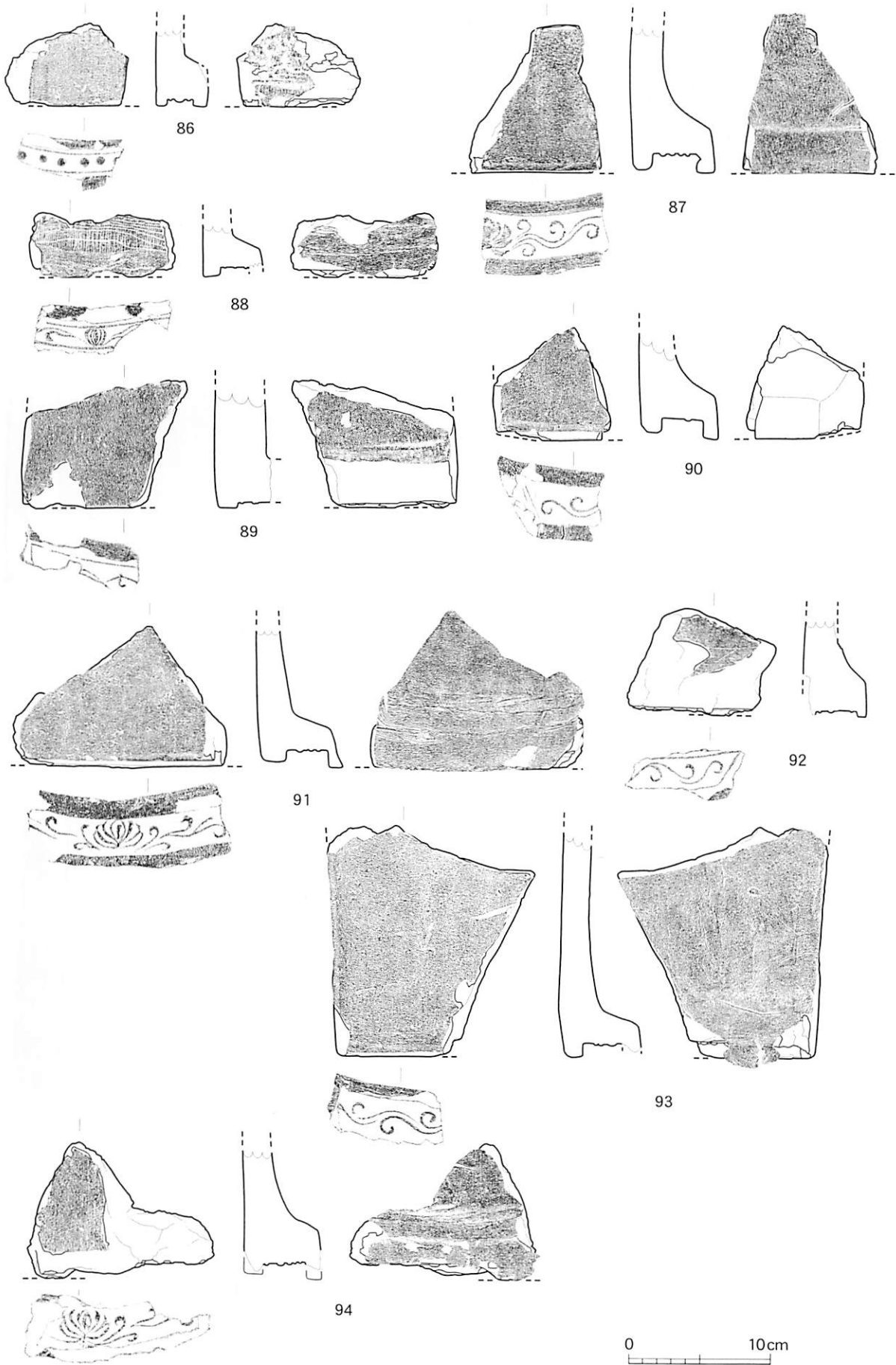
第3-28図 B-SD004出土丸瓦実測図(3)



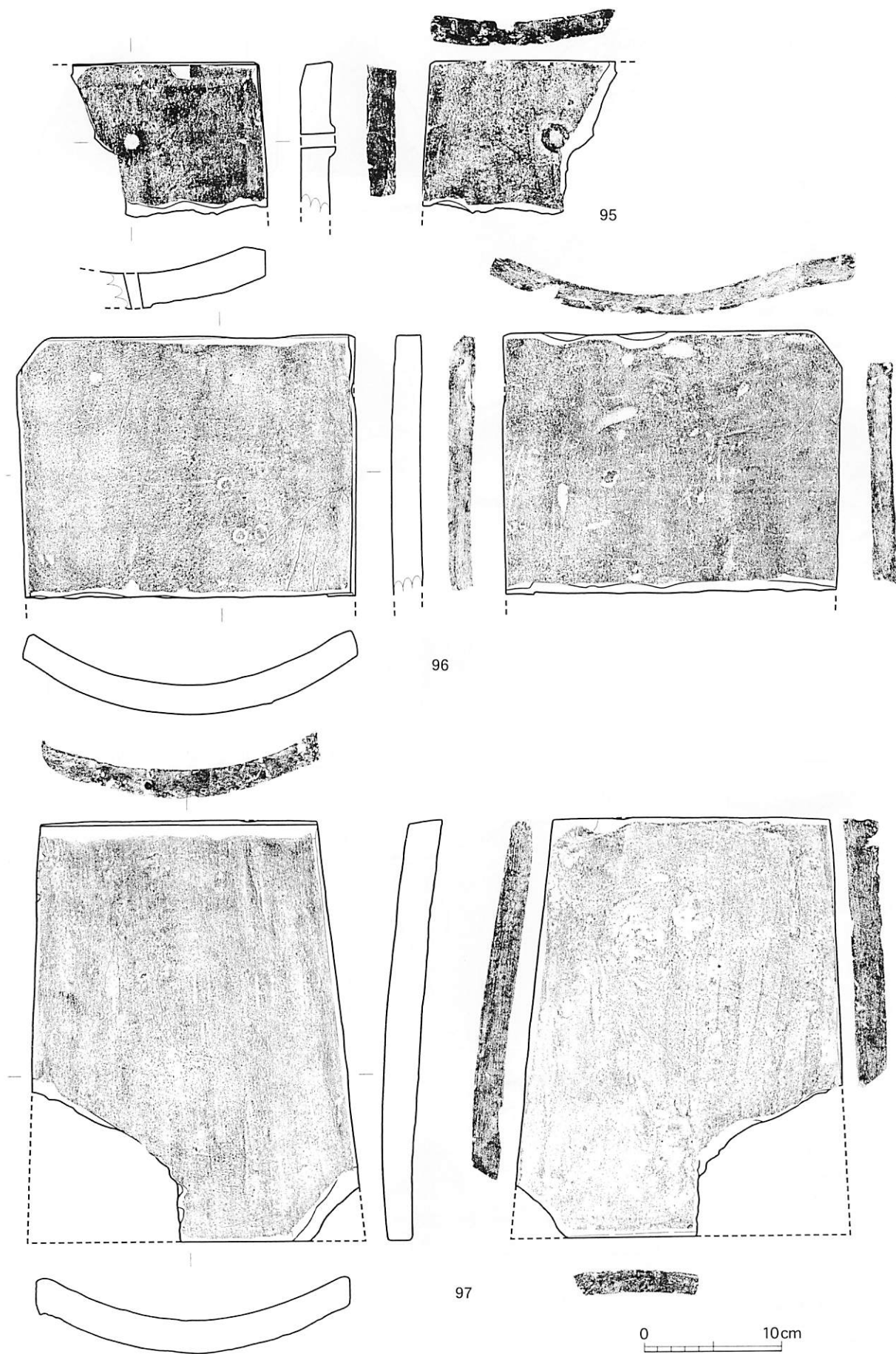
第3-29図 B-SD004出土丸瓦実測図(4)



第3-30図 B-SD004出土丸瓦実測図(5)

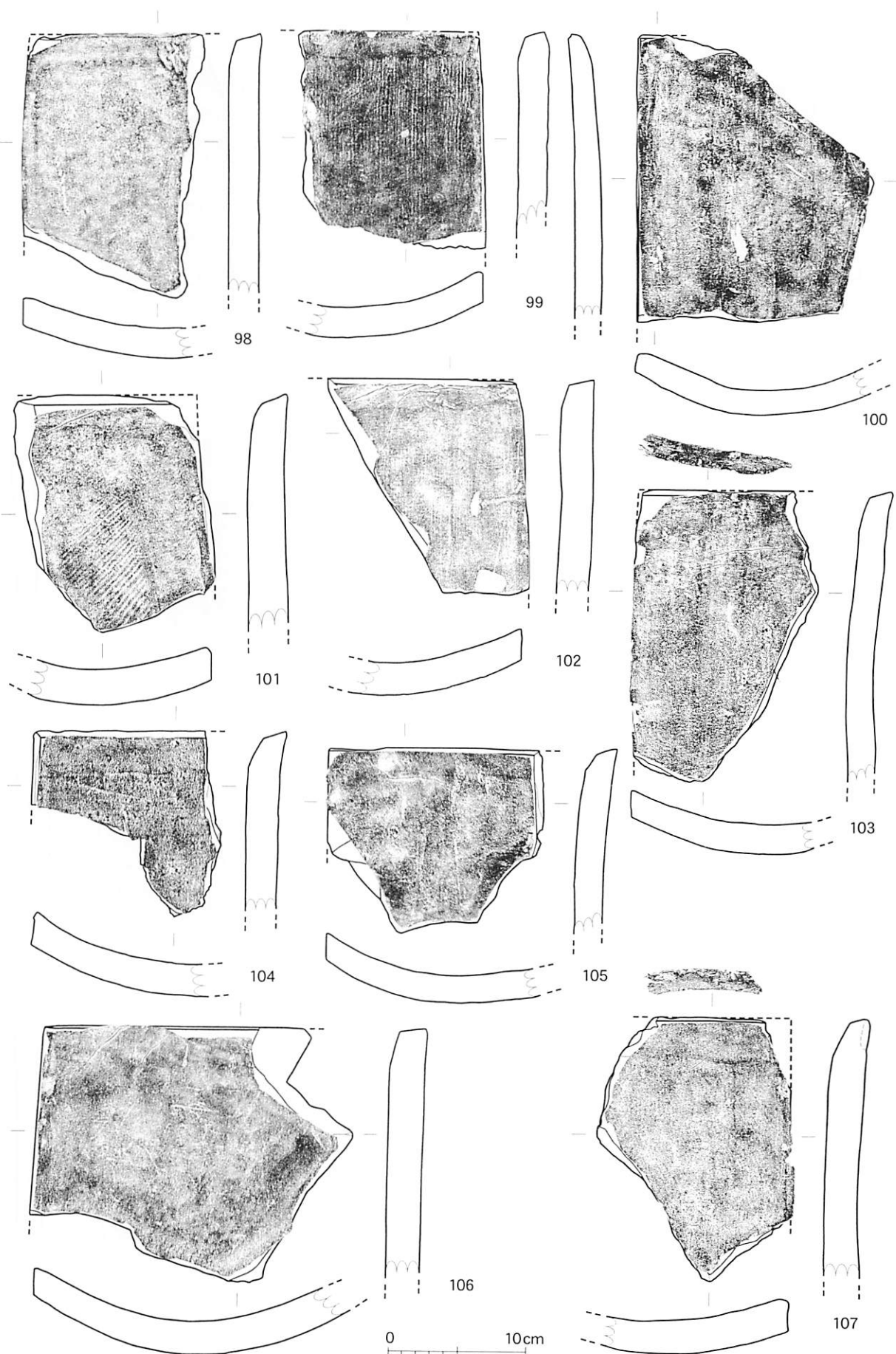


第3-31图 B-SD004出土軒平瓦実測図(6)

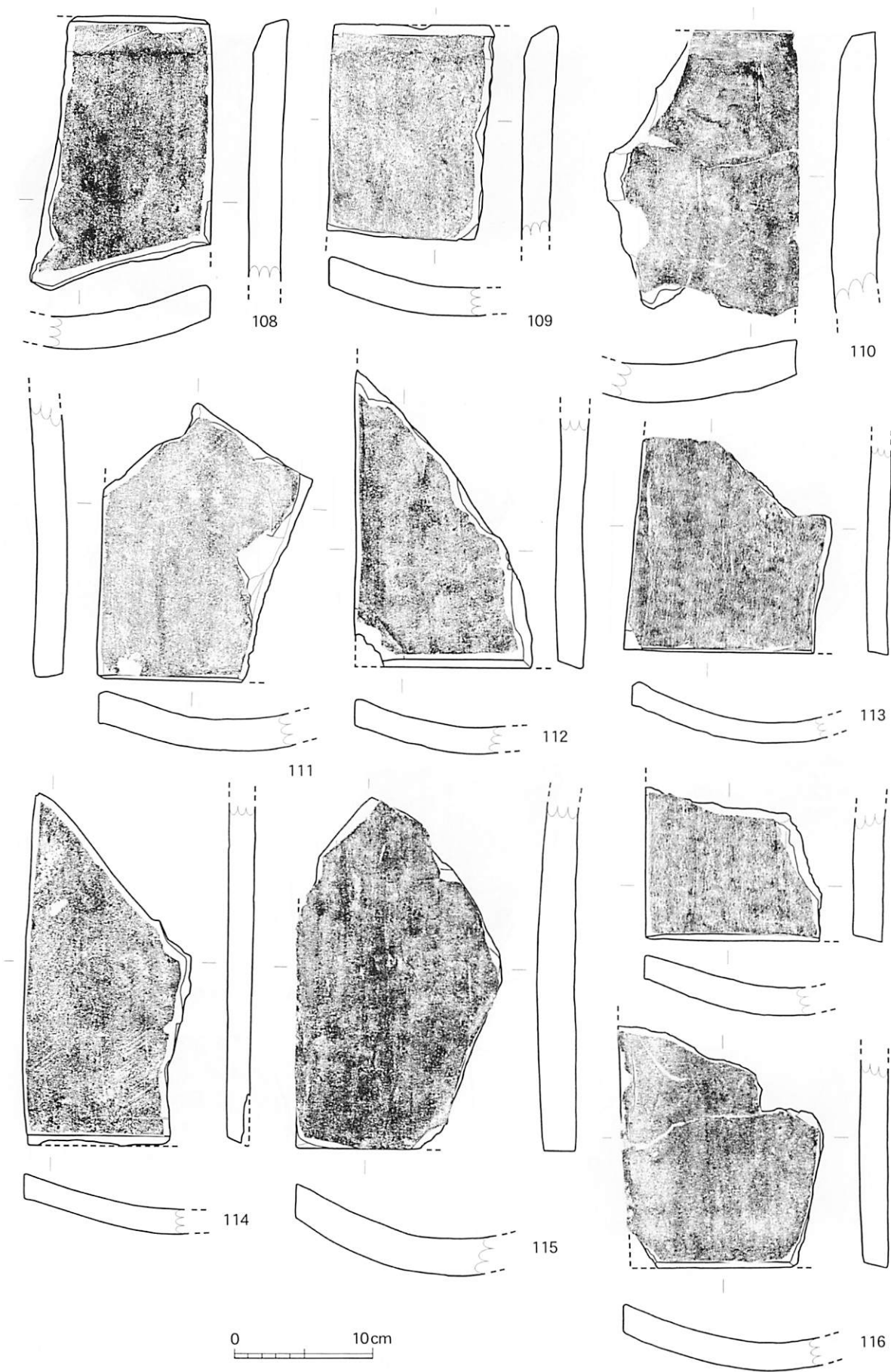


第3-32図 B-SD004出土平瓦実測図(7)



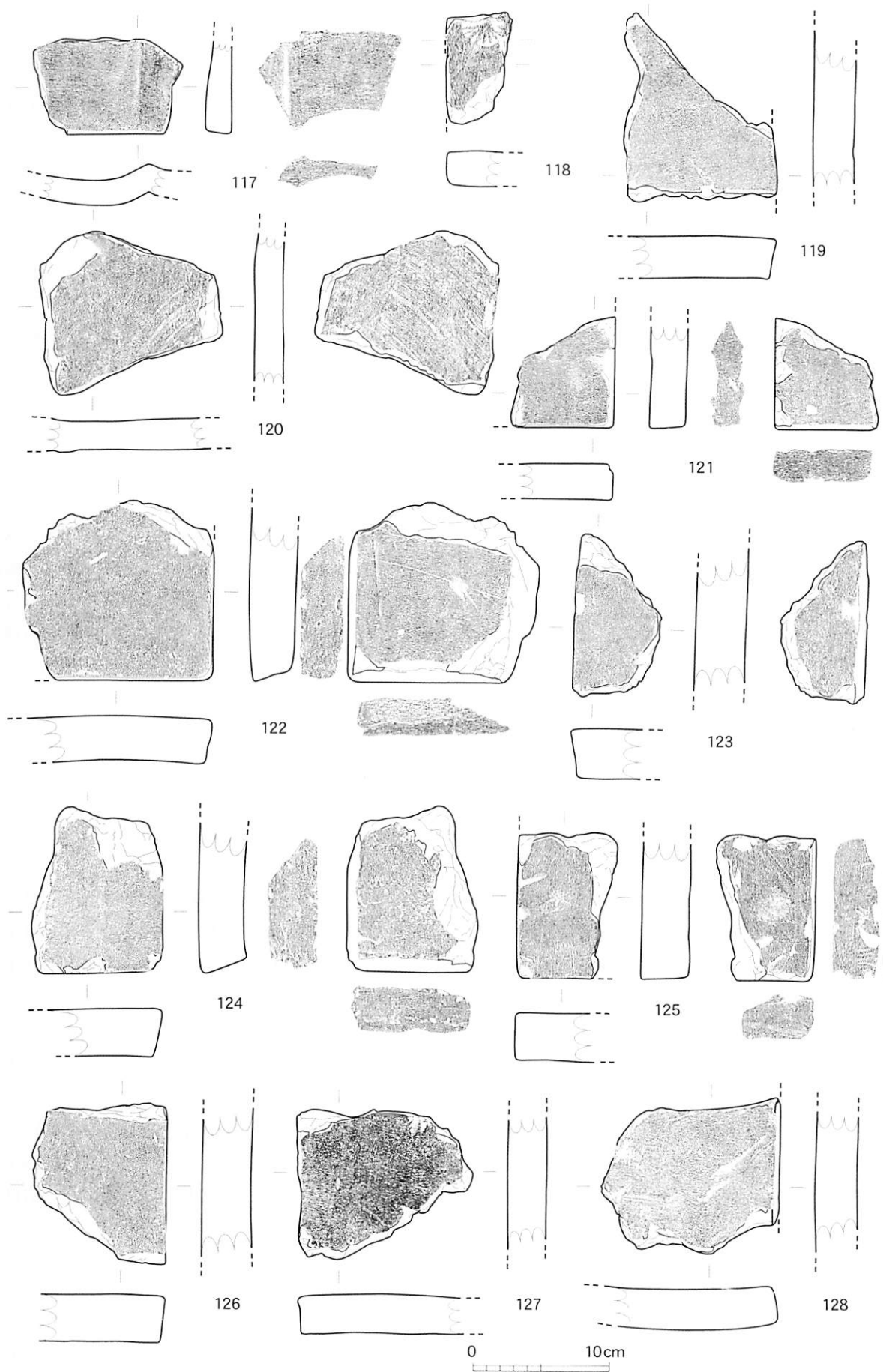


第3-33図 B-SD004出土平瓦実測図(8)



第3-34図 B-SD004出土平瓦実測図(9)





第3-35図 B-SD004出土埴実測図(10)

## 第2節 遺構と遺物

### B-SD064

B-SD064は調査区の西寄りを南北に貫く溝で、府内町跡20次調査A区でA-SD1506と接続する同じ遺構である。形態はB-SD003に比較すると企画性に乏しく、緩やかに蛇行し、特に南半分は顕著である。幅も約1.5mから3mで、底面の幅も0.3~1cmで、深さは1.6mであり、南端部が標高約3.5m、中程が3.7m、北端が約3.5mで中央部が高い。

出土遺物は第3-36~3-47図に図示した。第3-36図1~8は中国産青花で、1は口縁端部がわずかに外反する。2は口縁部が外反する皿で、小野編年の皿B2群である。3は口縁部が屈曲する小野編年の皿F群である。また、4は碁笥底になり、底径2cmの皿C群である。5の底径は7.8cm、6は8cmであり、皿F群の底部と考える。8は口径12.3cm、底径6.7cm、器高2.9cmで、底面に「年」の字のみが判読できる。小野編年の皿E群である。以上7点は景德鎮窯系青花である。7の底部は見込みに青花があり、外面は一部に露胎がある。底径5.8cmでの漳州窯系青花である。

景德鎮窯系

漳州窯系

龍泉窯系

同安窯系

9~14は龍泉窯系青磁である。9・10・12・14の外面には鎬蓮弁が施文されている。口径は12が15.2cm、13が10.8cm、14が16.6cmである。15は底径口径9.6cm、4.2cm、器高2.3cmの同安窯系青磁皿である。16は見込みに細いヘラ描きで花文が描かれている。黄褐色で、龍泉窯系の焼成の悪い碗であろう。

白磁

17~23は白磁である。17は口縁部が外反する。18は底径5cmで器壁は薄い。19は白磁の輪花皿である。20は口径10.4cm、底径5.2cm、器高2.9cmで、口縁端部は露胎でススが付着する。21は口縁部が玉縁になる白磁の碗である。22は器壁が厚い白磁の皿で、23は外面にヘラ描きで文様が入られ釉がかかっている。17~22は中国産白磁であるが、22と23は白磁の色調や器壁の厚さなどから朝鮮王朝産陶磁器の可能性もある。24は青色をした瑠璃釉の皿である。25・26は緑色をした磁甎窯系の鉢の小片である。

磁甎窯系

タイ産四耳壺

第3-37図27~30はタイ産陶磁器で、四耳壺の資料である。27は玉縁の口縁部で28~30は胴部の資料である。外面には白泥釉が付着しており、胴部破片である28には平行沈線が認められる。

瀬戸美濃系

常滑窯系

備前系

水屋甕

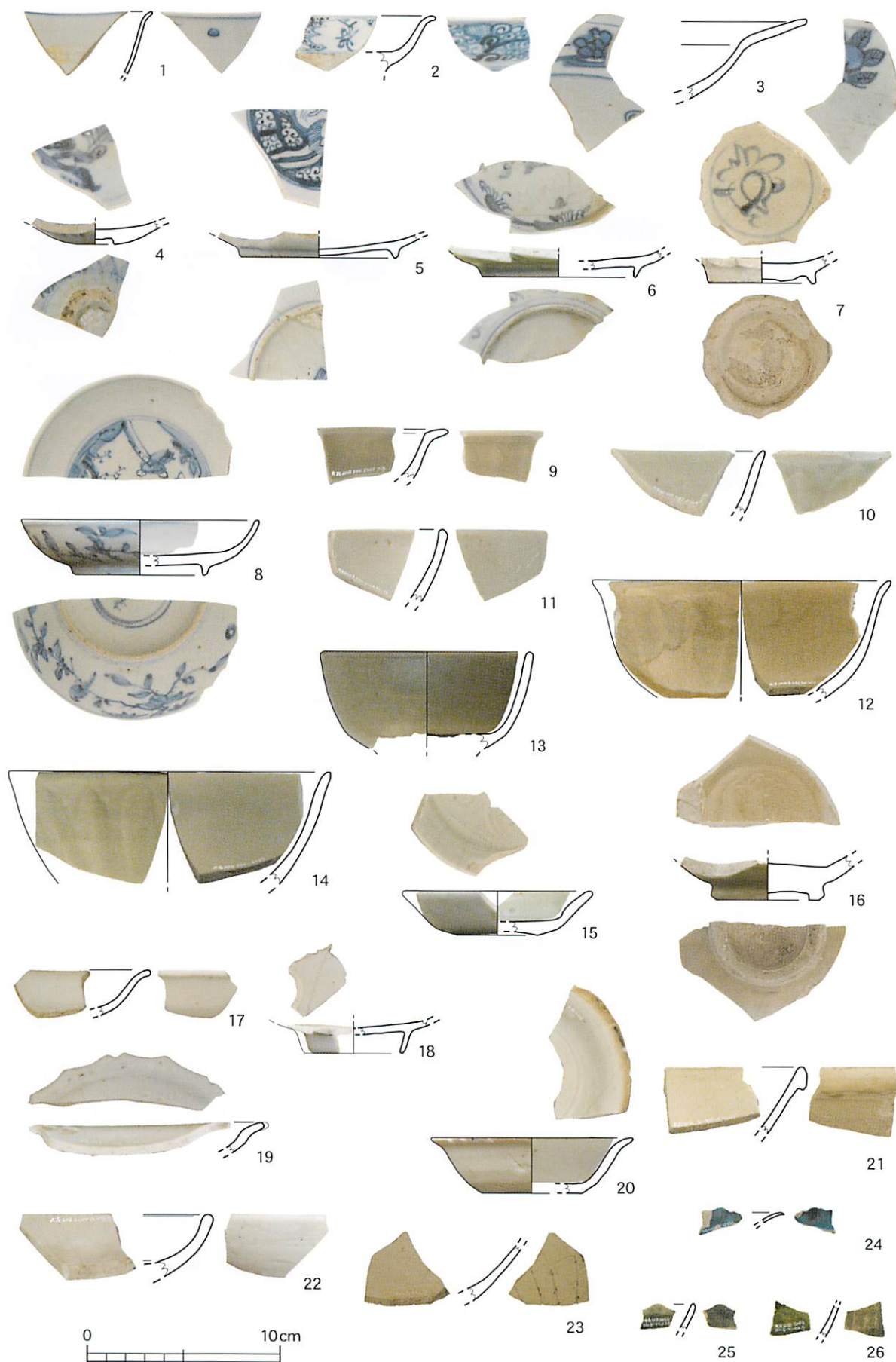
31・33・34は瀬戸美濃系陶器で、31は天目茶碗である。33は底径4.2cm、34は口径6.6cm、底径4.4cm、器高2cmの小皿である。32は常滑窯系陶器の壺で、口縁部は約2.5cmの縁帯を形成している。

第3-37図35~43と第3-38図及び第3-45図177は備前系陶器である。35は底径6cmの小型の徳利である。36~39は同一個体の可能性のある水屋甕である。口径は12cm、底径は15cmで胴部に低い突帯が1条廻り、下位にかけて、この器種独特の39の円形の浮文が貼り付く。40・41は壺の口縁部である。口縁部は直立し、外面が玉縁状に肥厚する。42~52は播鉢であるが、42・43は14世紀後半であるが、口径33cmの42は口唇部が「コ」の字状であるが、口径31.6cmの43は口縁部内端部が尖り、新しい傾向を見せる。内面には疎らに播目が付けられている。177は口径約50cmの大甕である。

44~50の播鉢は口縁部が屈曲して立ち上がり、縁帯部を形成し、口唇部は尖り、その下位の内面は凹線状になる。内面の播目は、46~50に見られるように口縁部に直角に入るものに、斜め方向のものが加わり、交差する。また50の底部内面にも十字に播目が入る。口径は45が28.2cm、46が29.2cm、48は注口部が認められ34cm、49が37.2cmである。45は図上復元され口径32.2cm、底径12.8cm、器高12.3cmである。これらは、16世紀後葉から末葉のものである。51と52は底部であるが、51は16世紀代、52は14世紀代と考える。

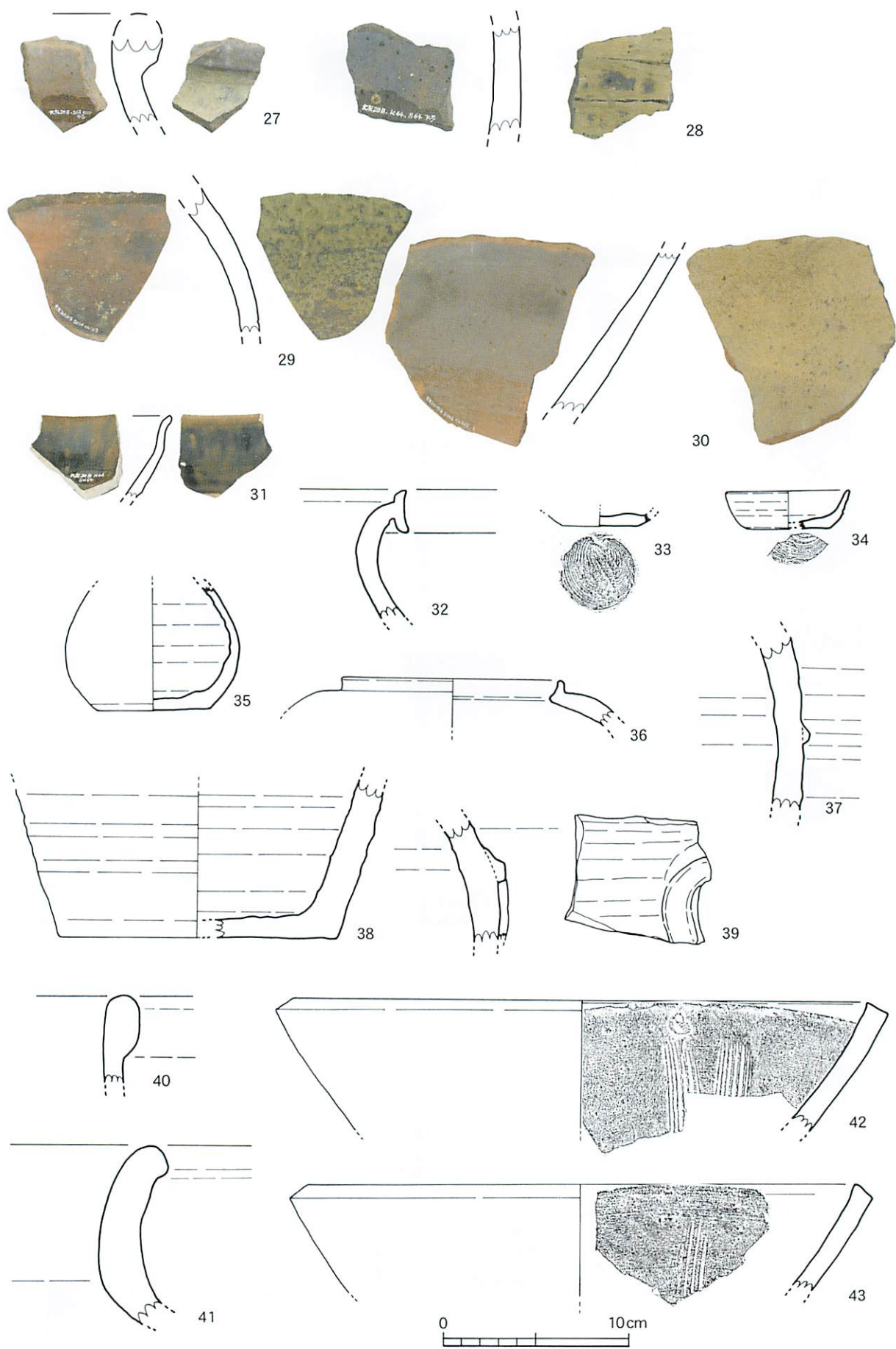
第3-39図と第3-40図84~95はロクロ成形による在地系土師質土器である。第3-39図53~67は皿であるが、67は口径8.4cmに比べ、底径は5.5cmで小さく、器高は2.1cmで高い特徴を持ち、他とは器形が異なる。これに対し、53~66の口径・底径・器高の平均は、8.4cm、6.8cm、1.3cmである。

68~95は坏であるが、93・94は口径13cmであるが、底径は7.6cmと6.6cmで、器高は3.1cmであり、口径に対し、底径が小さく、底部外端部が明瞭な稜を生じて、口縁部は内反り気味に立ち上がり、



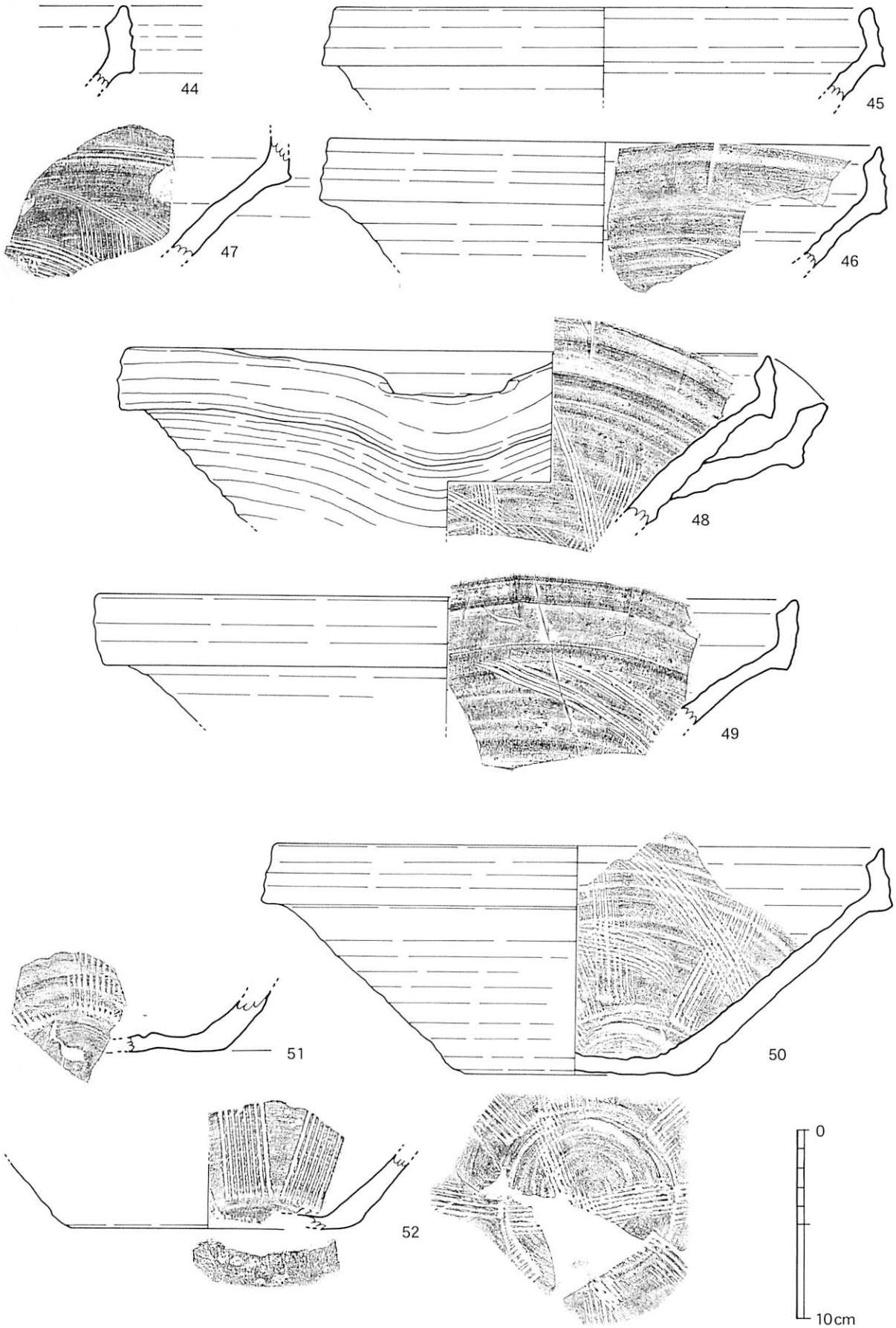
第3-36図 B-SD064出土遺物実測図(1)

第2節 遺構と遺物

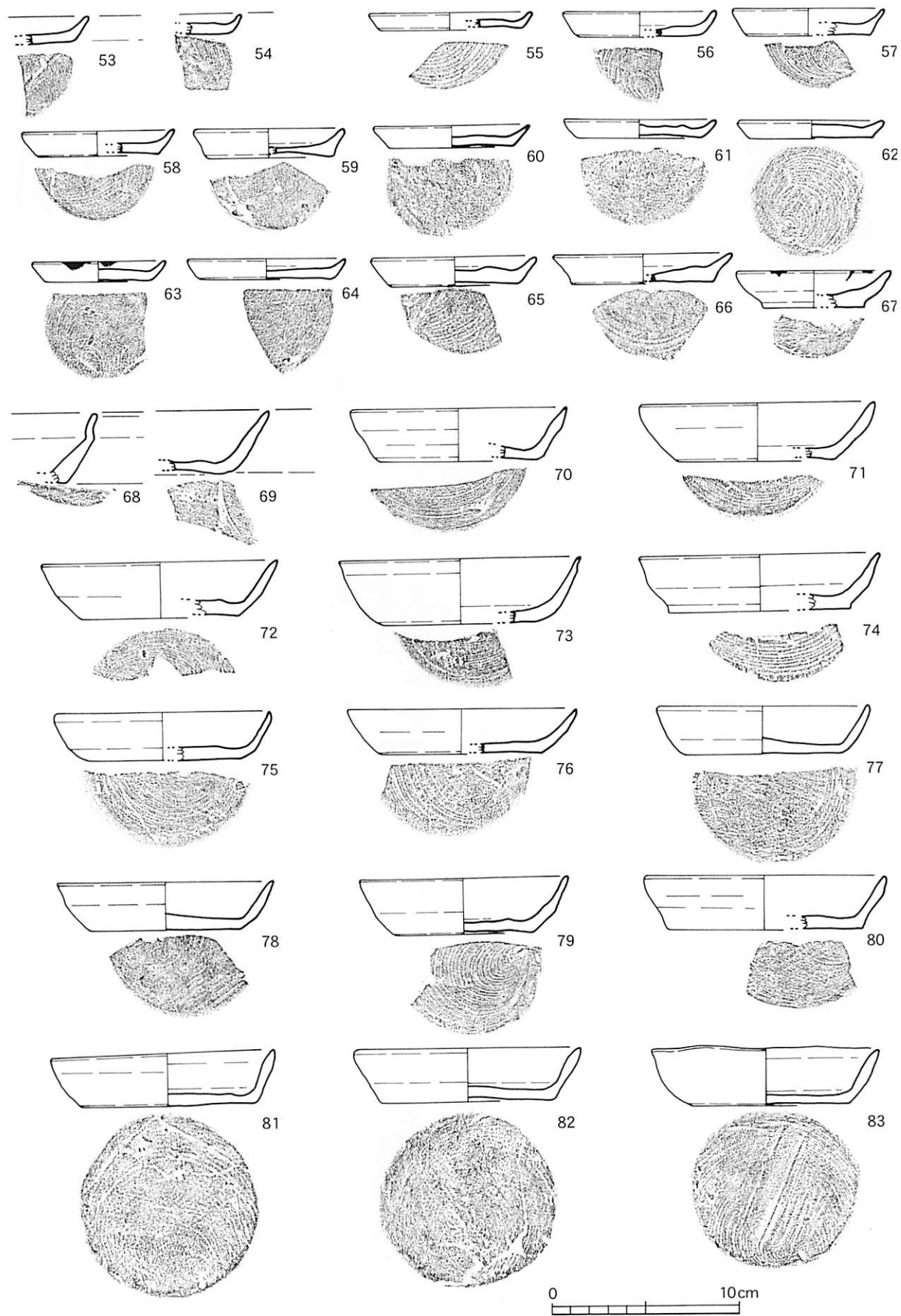


第3-37図 B-SD064出土遺物実測図(2)

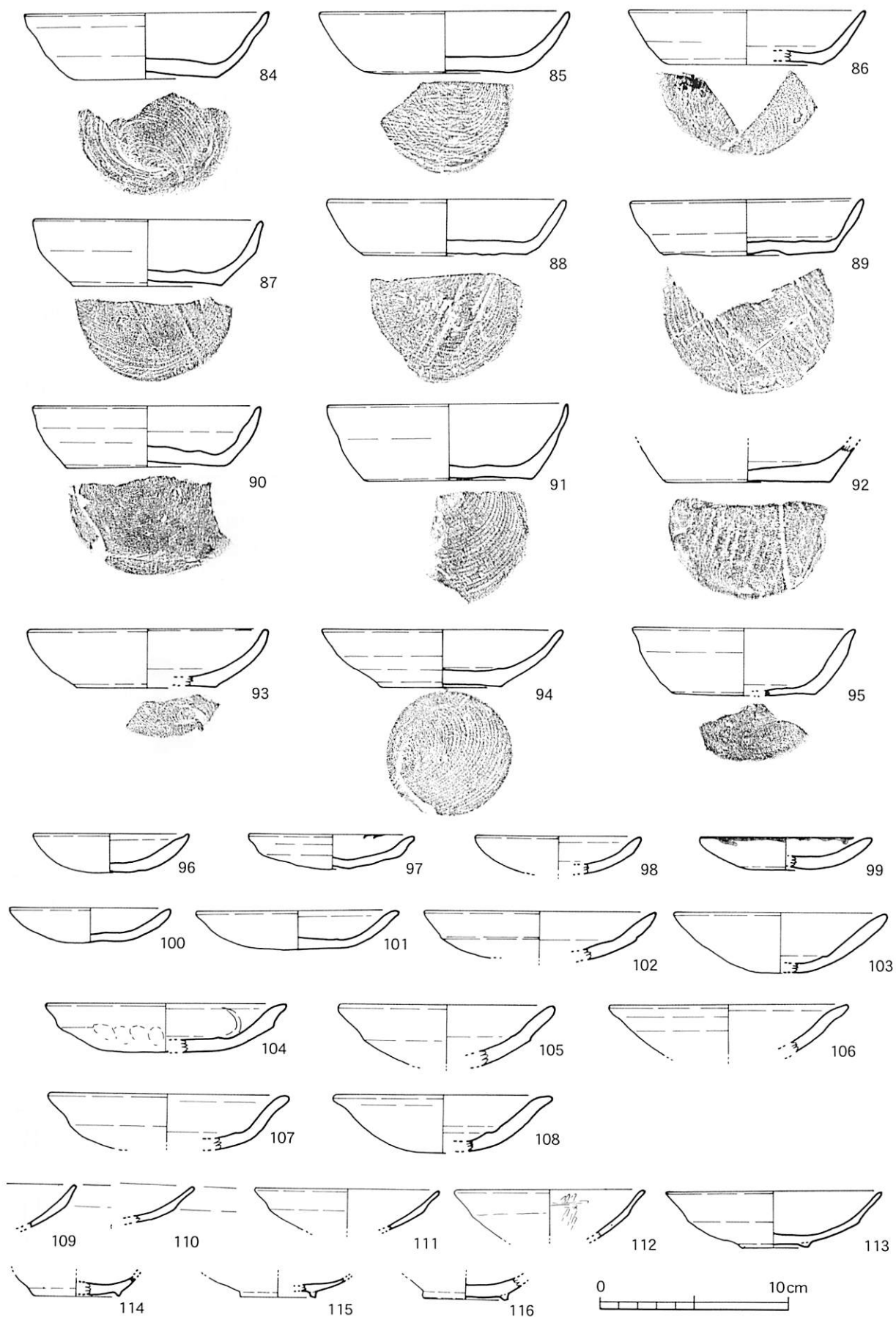




第3-38図 B-SD064出土遺物実測図(3)



第3-39図 B-SD064出土遺物実測図(4)

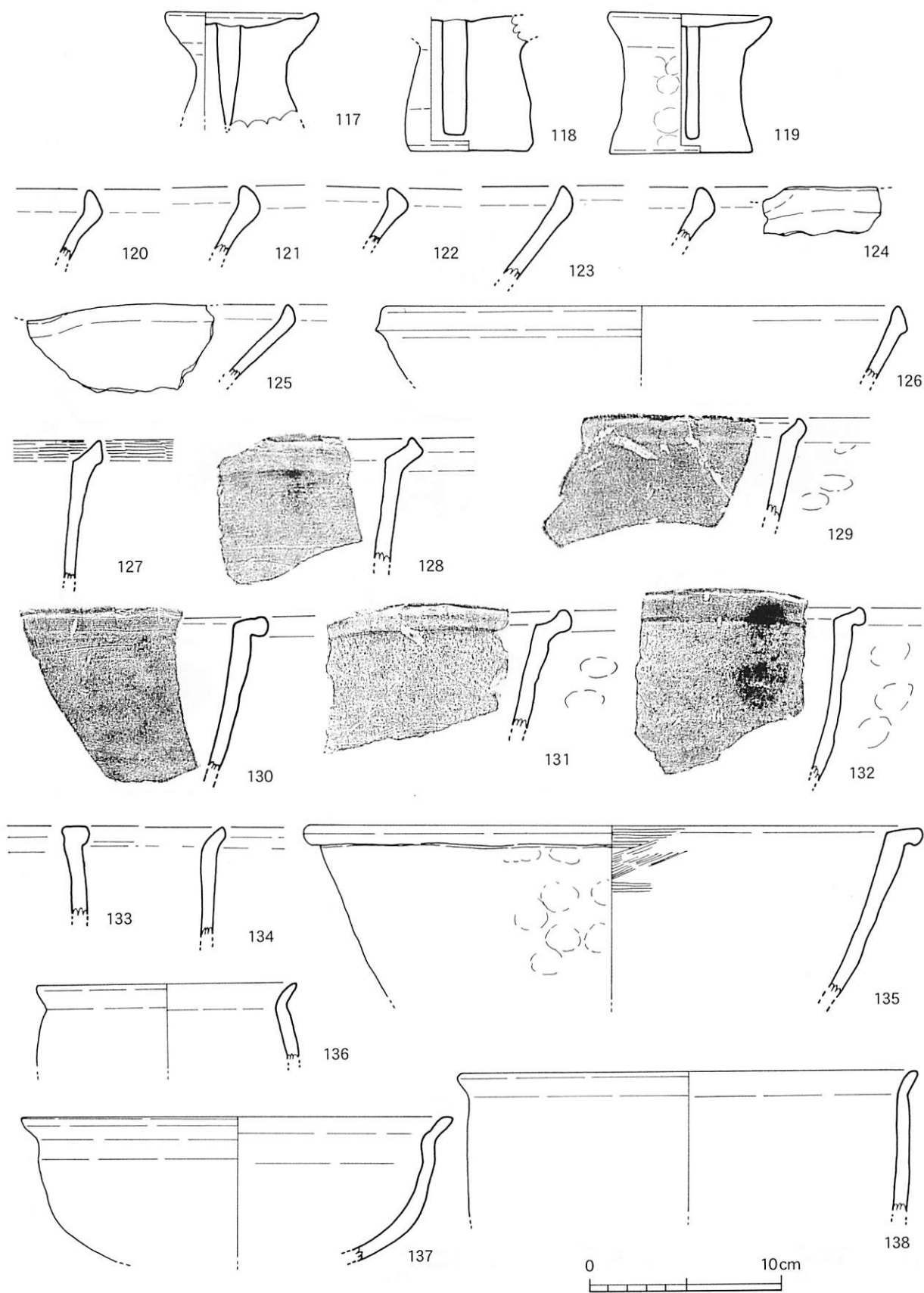


第3-40図 B-SD064出土遺物実測図(5)



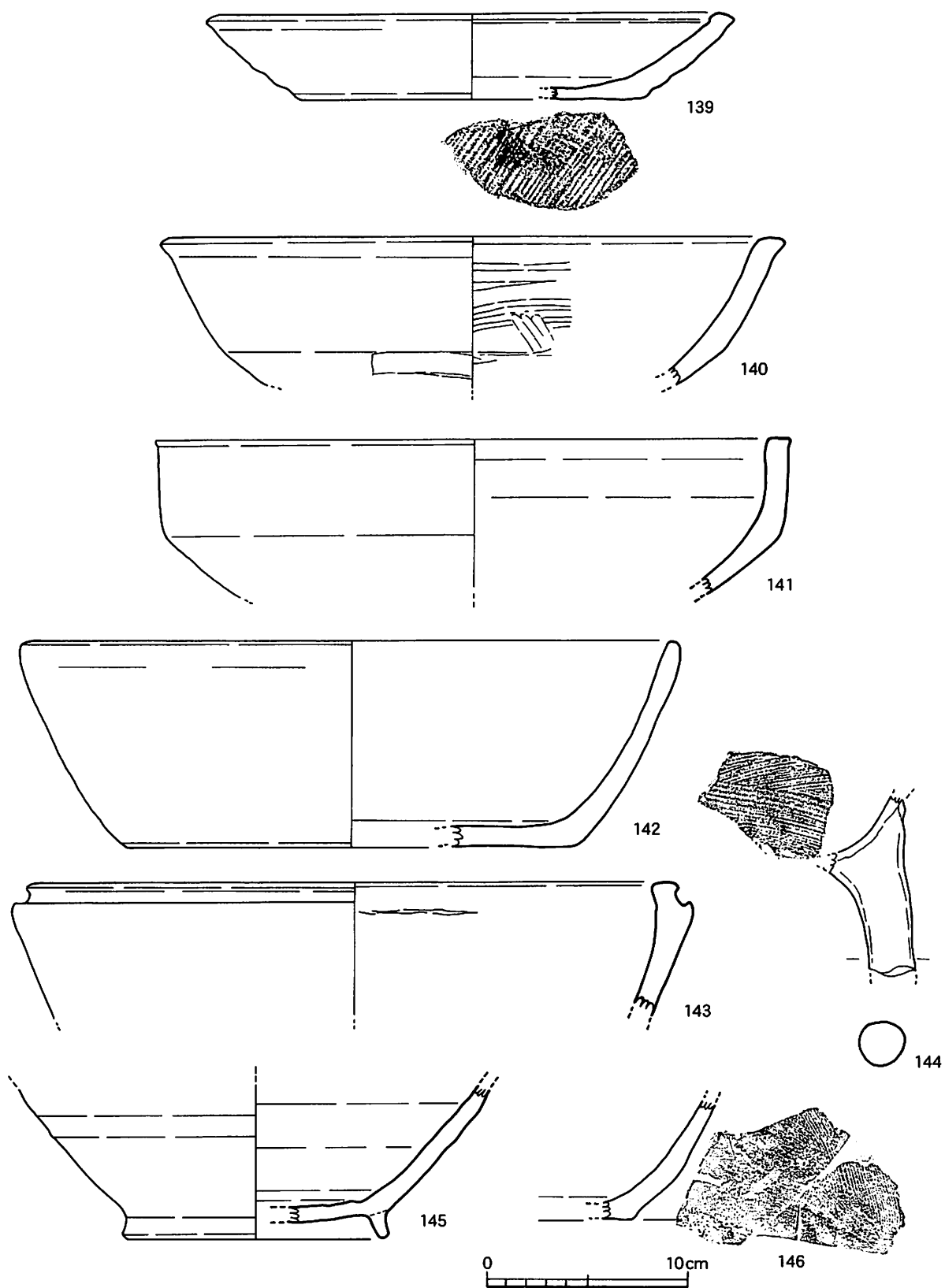
第2節 遺構と遺物

他とは器形が異なる。70~92・95の法量の平均は、口径12.4cm、底径8.6cm、器高3.1cmとなる。しかし、口縁部の器壁は、70~72・78・80~83・87・89・90・95は中位から上位が厚くなり、73・74・



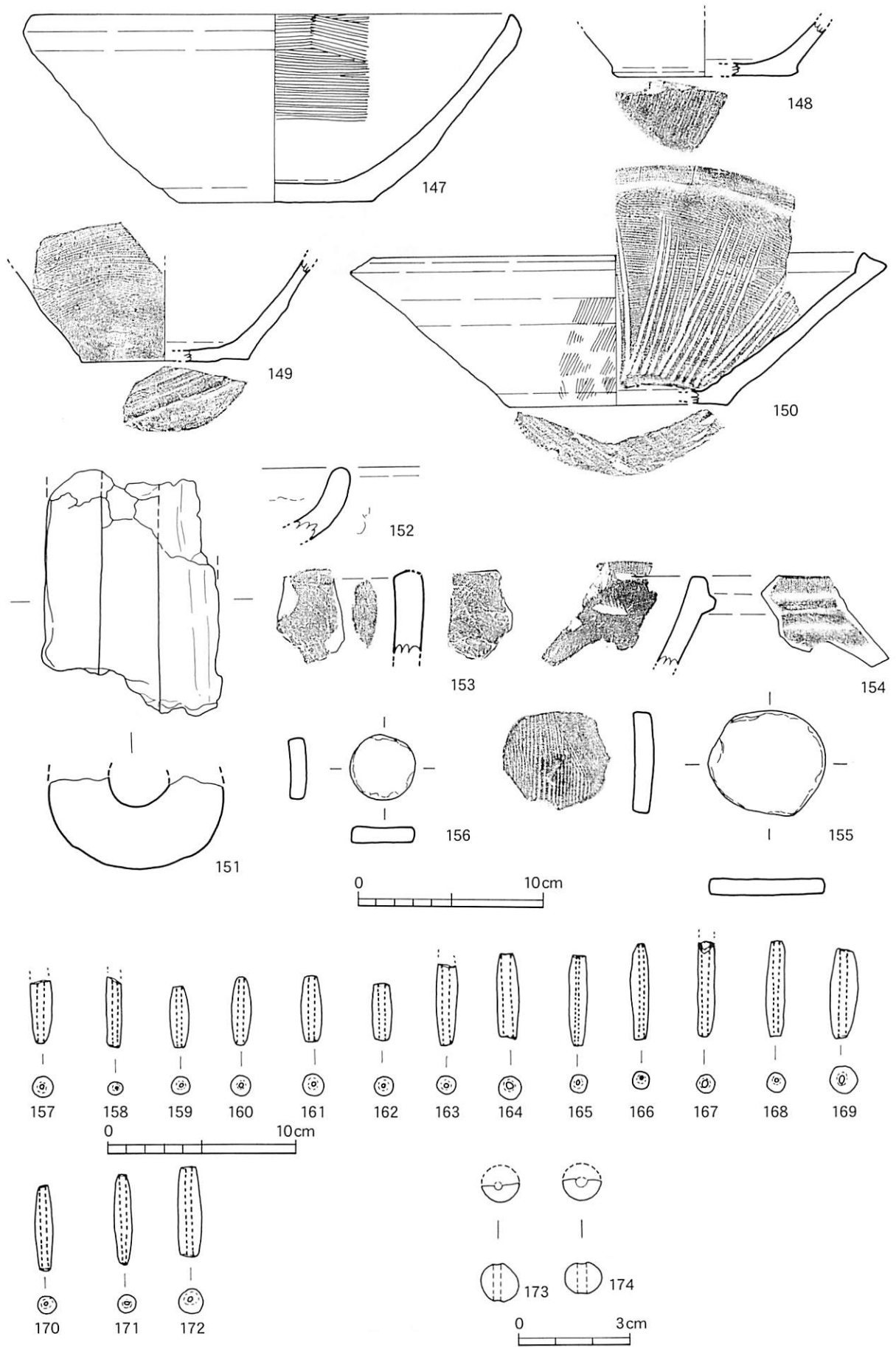
第3-41図 B-SD064出土遺物実測図(6)

76・79・85・86・41などは、底部と近くが厚くなり、口縁端部に向けて、尖るように立ち上がる。  
 また、83・88・89・92には板状圧痕が残る。



第3-42図 B-SD064出土遺物実測図(7)

第2節 遺構と遺物



第3-43図 B-SD064出土遺物実測図(8)

灯明皿 第3-40図96~108は非ロクロ系土師質土器である京都系土師器である。京都系土師器には法量分化が認められ、96~100の平均口径は8.8cmで、これに次ぐ大きさは、101~103・105・108で平均口径は11.7cmである。さらに104・106・107は12.9cmとなる。内面には、104のような、撫で上げ痕が認められる。また、99の口縁部にはススが付着しており、灯明皿として使用されている。

吉備系土師器 第3-40図109~116は他の土師質土器に比較すると色調が白色であり、吉備系土師器や早島式土器と呼ばれる土師質土器の皿である。図上で完形品に復元できる113は、口径11.6cm、底径3.5cm、器高3.1cmである。他の資料の口径は、111が10cm、112は10.2cmである。また、細い粘土紐を廻らせ形成される高台の断面は113・114が細い三角形になるが、115と116は「コ」の字状になる。底径は114が4.6cm、115は4cm、116は4.6cmである。

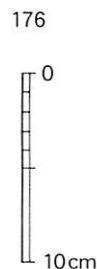
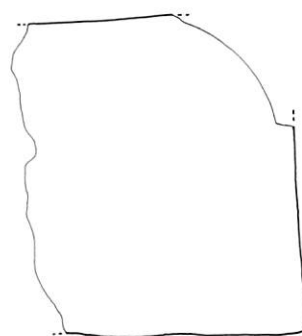
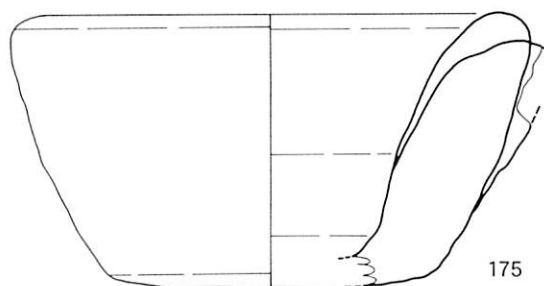
燭台 第3-41図117~119は中央の穴に木心を立て、燭台と理解している土製品である。上面は窪み、円柱状に成形された上位がやや細く、底部を広げて安定させている。117は底部を欠くが、上面径8cmである。118は上面を欠くが、底径は6.7cmで、器高は約7.5cmである。119は完形品で、上面径8.5cm、底径7.4cm、器高7.4cmである。

東播系 120~126は口縁端部が肥厚し、断面三角形になる東播系須恵質土器の鉢である。124と125は注口部である。126は口径27.2cmを測る。

土鍋 127~132・135は口縁部が屈曲する土鍋である。図示した7点とも土師質土器である。器面調整は、内面が細かい横方向の刷毛目で、外面は撫でや指押さえ痕が残る。135の口径は32.2cmである。

瓦質土器 133・134・136~138は瓦質土器である。133が口縁端部が肥厚する。134・136・137は類似する器形であるが、口径は136が13.4cm、138が24cmで甕形をしている。137は口縁部が屈曲し外反する鉢で、口径は22.6cmで、底部を欠くが器高は約25cmが推測できる。

第3-42図と第3-43図147~150は瓦質土器である。器形は鉢形をしており、器面はへら磨きや撫でで仕上げられている。第3-42図139は口径26.4cm、底径17cm、器高4.3cmである。140は口縁外端部が突出し、口径31.2cmを測る。141は口径31.8cmで、胴部中位で屈曲し、口縁部が直立する。142はタライ状の形態で、口径33cm、底径23cm、器高10.4cm、143は肥厚した口縁部外面に



第3-44図 B-SD064出土遺物実測図(9)

第2節 遺構と遺物

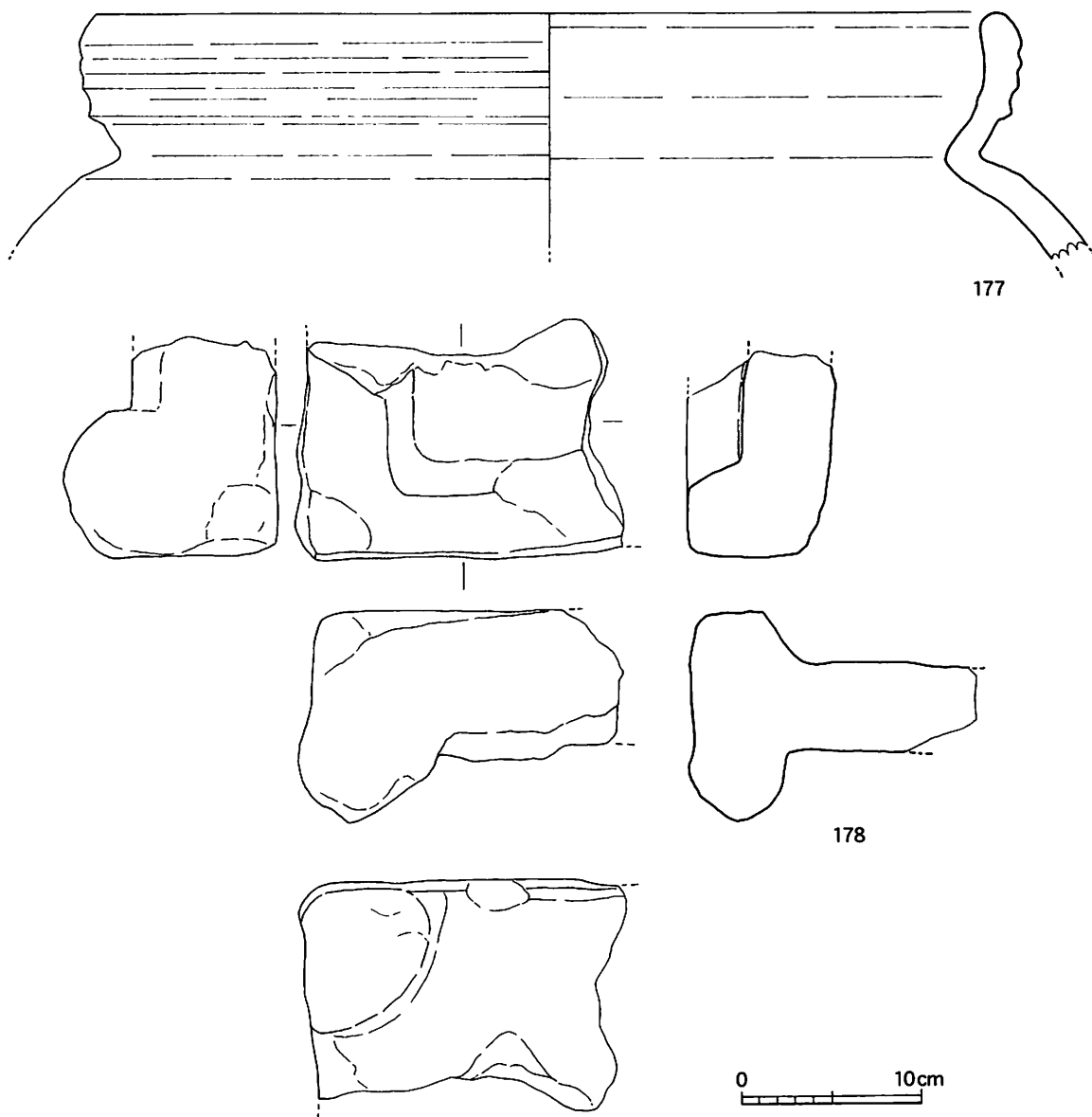
凹線が廻る。口径37.6cmである。144は土鍋の脚である。155は底径13.2cmの高台の付く底部である。147は内面が刷毛目仕上げの鉢で、口径26.6cm、底径10.6cm、器高10.1cmである。150は口径28.6cm、底径11.6cm、器高8cmで、口縁端部が肥厚し、内面は刷毛目調整の上に6本の櫛歯の工具で摺り目を入れている防長系摺鉢である。146・148・149は底部で、148・149の底径は9cmである。

埴塼 第3-43図151は外径9.3cmに径3cmの穴を開けた大型のフイゴの羽口である。また、152は埴塼のフイゴの羽口 口縁部の破片である。

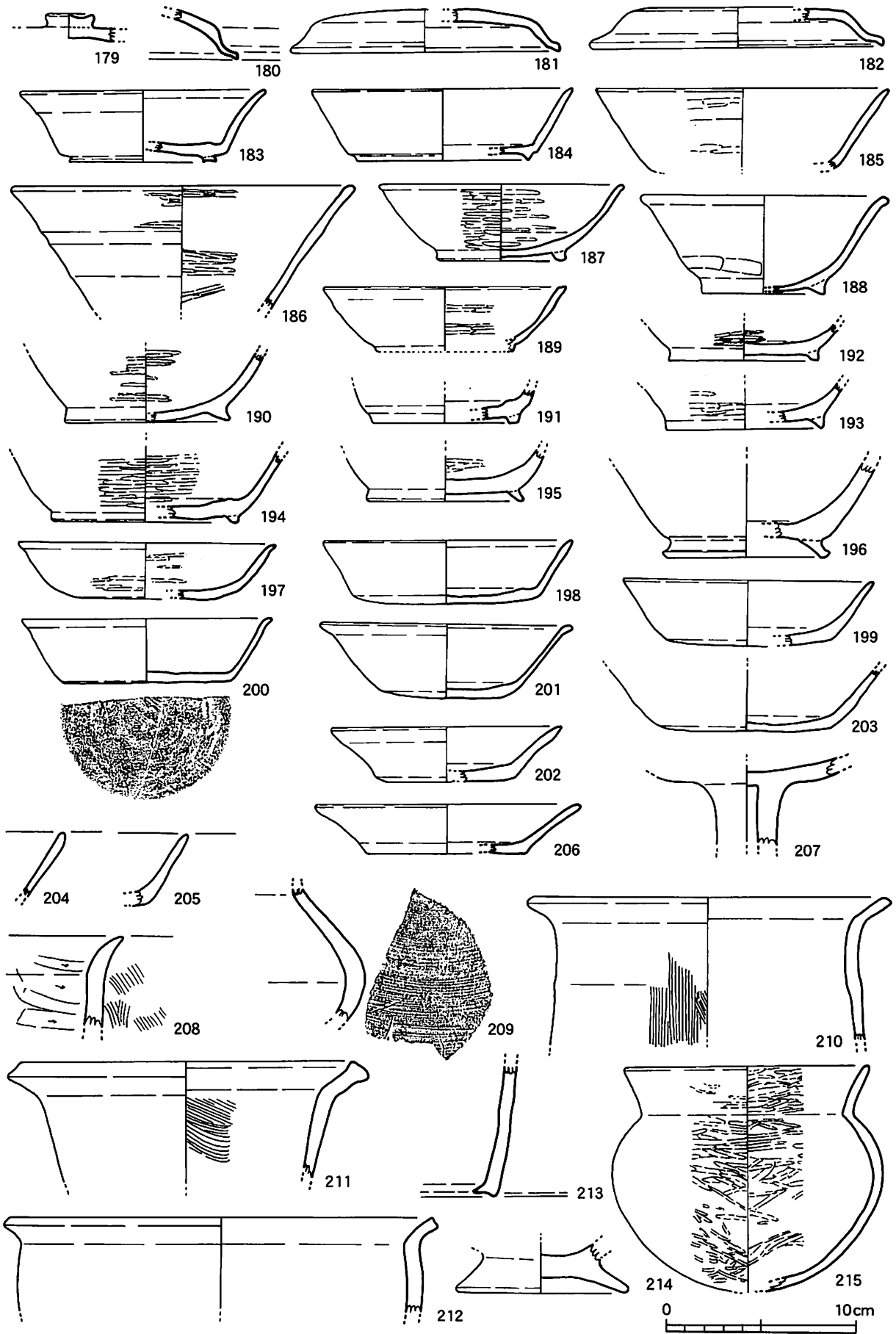
石鍋 152・154は滑石製の石鍋の破片である。154は銚が付く口縁部であるが、2点とも再加工されている。155・156は土器片を再加工し円盤状に仕上げている。155は径3.4m、12.6g、156は5.4×6.3cmで39.4gである。

土錘 158～172は紡錘形の土錘である、完形品の大きさから、159～162は長さ3cm台で4g前後であるが、164・165・166・168～172は5cm前後で5g前後である。

ガラス玉 173・174は緑色をした直径約1cmのガラス玉で、半分に欠けている。



第3-45図 B-SD064出土遺物実測図(10)



第3-46図 B-SD064出土遺物実測図(1)

第2節 遺構と遺物

無縫塔

第3-44図と第3-45図178は阿蘇凝灰岩製の石造品である。175は口径26.4cmで、注口があり、器高は14.4cmである。176は厚さ約17cmの八角形の石塔の台座と考える。無縫塔の一部の可能性が高い。178は方形で少なくとも四隅に脚が付く台である。高さは11.5cmで上面には高さ2.8cmの縁が付く。

第3-46図は214・215を除くと、8世紀後葉から9世紀前葉の遺物である。179～182は土師器の坏蓋で、179はその宝珠形つまみである。183～206は坏であるが、高台が付くタイプと回転ヘラ切りで仕上げる2種類がある。前者には183・180・191の須恵器や、190や195のような内黒土器が含まれる。また、196は高台付の壺の可能性が高い。器面は、須恵器を除き、全面ヘラ磨きで調整している。

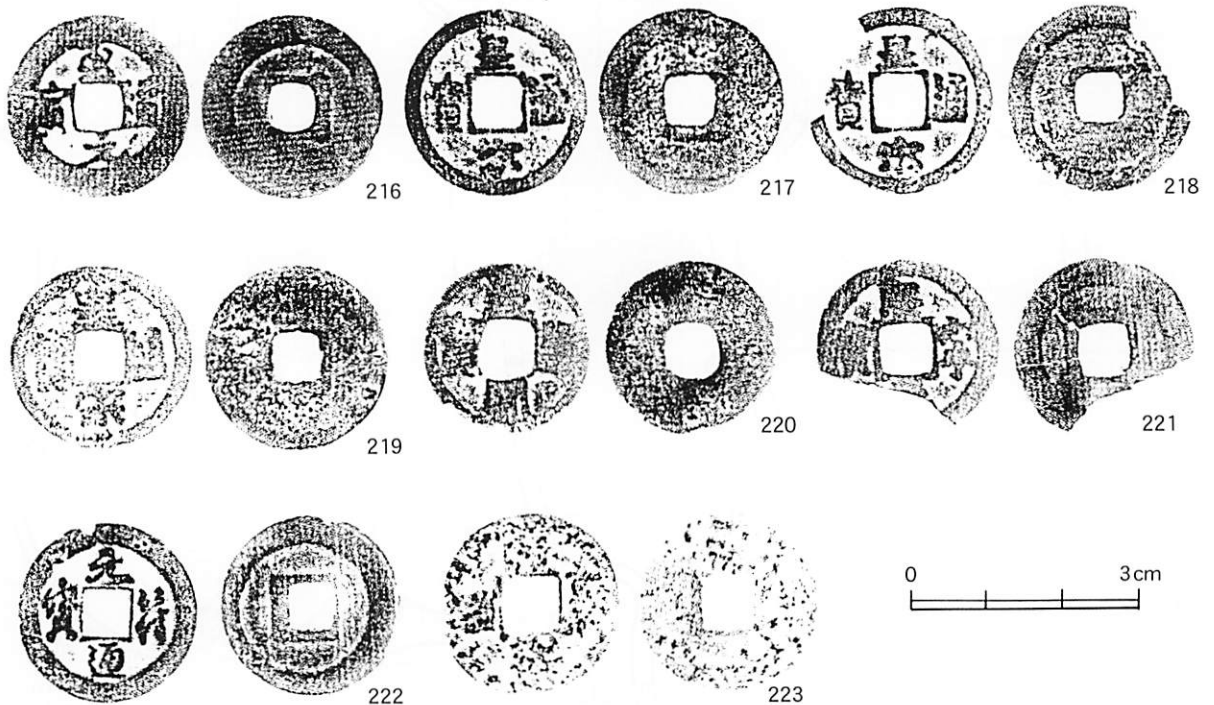
207は高坏で器面はヘラ磨きされている。208・210～212は甕である。胴部外面は刷毛目仕上げで、内面はヘラ削りである。209は須恵器で小型の壺と考える。213は甕と考える。

214は鉢形土器の脚であろう。215は古墳時代前期の小型丸底壺である。

銅銭

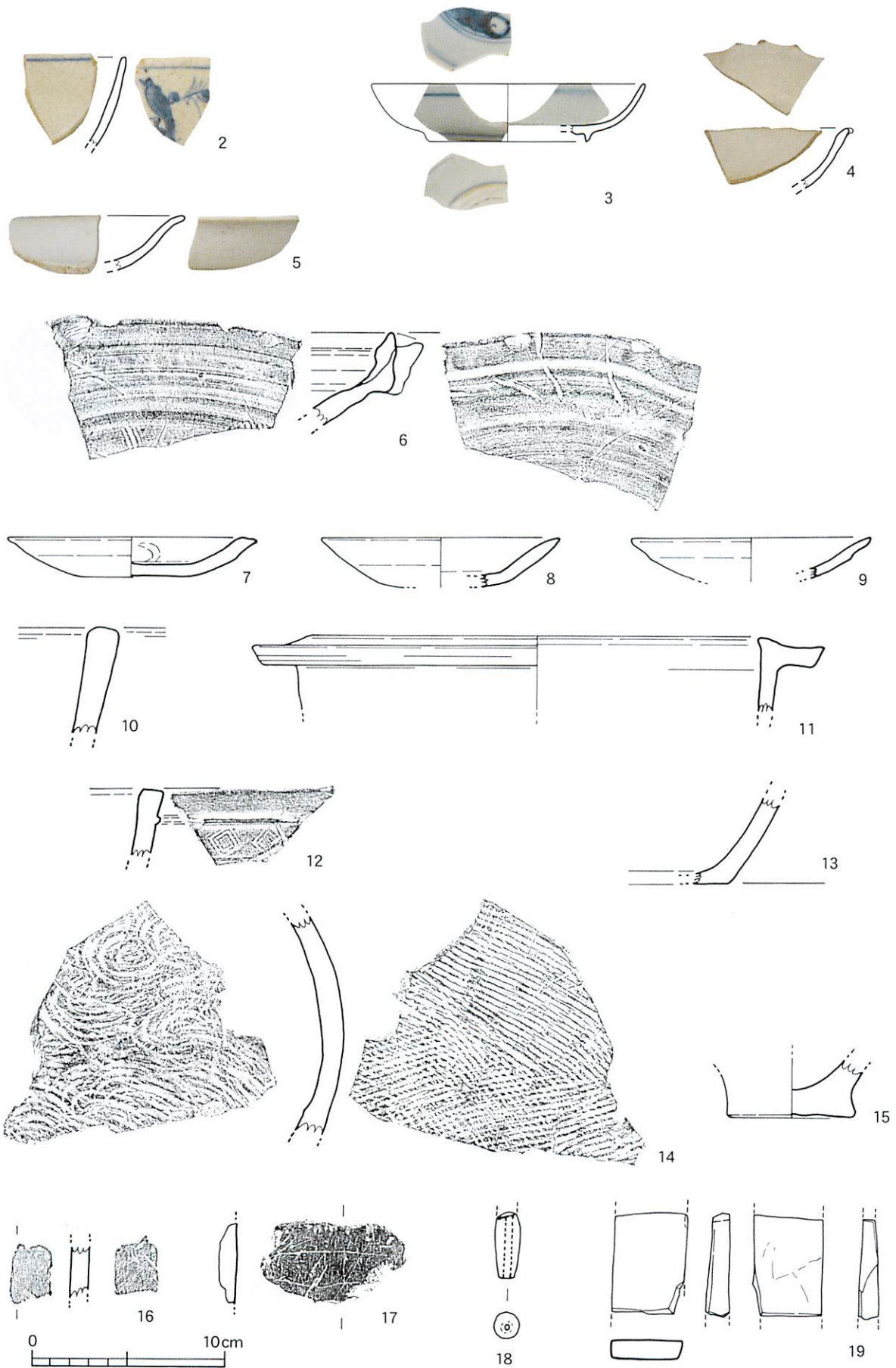
第3-47図にB-SD064から出土した銅銭8点を図示した。216は草書体で書かれた「至道元寶」で初鑄年は995年（北宋）である。217は真書体で書かれた「皇宋通寶」で初鑄年は1038年（北宋）である。217～219は真書体で書かれた「皇宋通寶」で220は篆書体である。初鑄年は1038年（北宋）である。221は真書体で書かれた「熙寧元寶」で初鑄年は1068年（北宋）である。222は行書体で書かれた「元符通寶」で初鑄年は1098年（北宋）である。227は判読不能である。

B-SD064からは古代に始まり、14世紀代の遺物が多量に出土した。しかし、京都系土師器や景德鎮窯や漳州窯系の中国産陶磁器、内面に斜め播目を持つ備前系陶器の播鉢が一定量あり、しかも遺構の底面近くからも出土している。このことから、B-SD064を16世紀後葉から末葉と考える。



第3-47図 064出土銅銭実測図





第3-48図 B-SK015出土遺物実測図

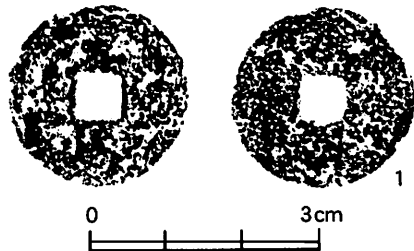
第2節 遺構と遺物

2. 土坑

B-SK015 (第3-50図)

B-SK015は調査区の南西隅で検出された土坑で、西側は調査区の壁で、東側はB-SD064と切り合う。確認できる遺構の規模は南北3.4m、東西2.5m以上で、中央部が最深で30cmを測り、皿状をしている。土坑の北側には、凝灰岩製の五輪塔の地輪や八角形の台座で、石列が東西方向に約1.5m構築されている。その方位は、W-7°-Nである。

遺物は第3-48図と第3-49図の1~19に図示した。1は判読不明の銅銭である。2~5は貿易陶磁器である。2は碗、3は皿の景德鎮窯系青花で、小野編年の皿E群の2は口径13.8cm、底径8cm、器高2.9cmである。4・5は中国産白磁である。6は備前系陶器の挿鉢で、斜め挿目が入る。7~9は京都系土師器で、口径は12.3~13cmである。10~13は瓦質土器で、11は鏝付の土鍋で、12は外面に菱形のスタンプ文が連続して施文される。14は内面に同心円文、外面に平行線の叩き目のある須恵質土器である。15は弥生土器の底部である。16・17は滑石製品で、18は一部を欠く土錘である。19は砥石である。



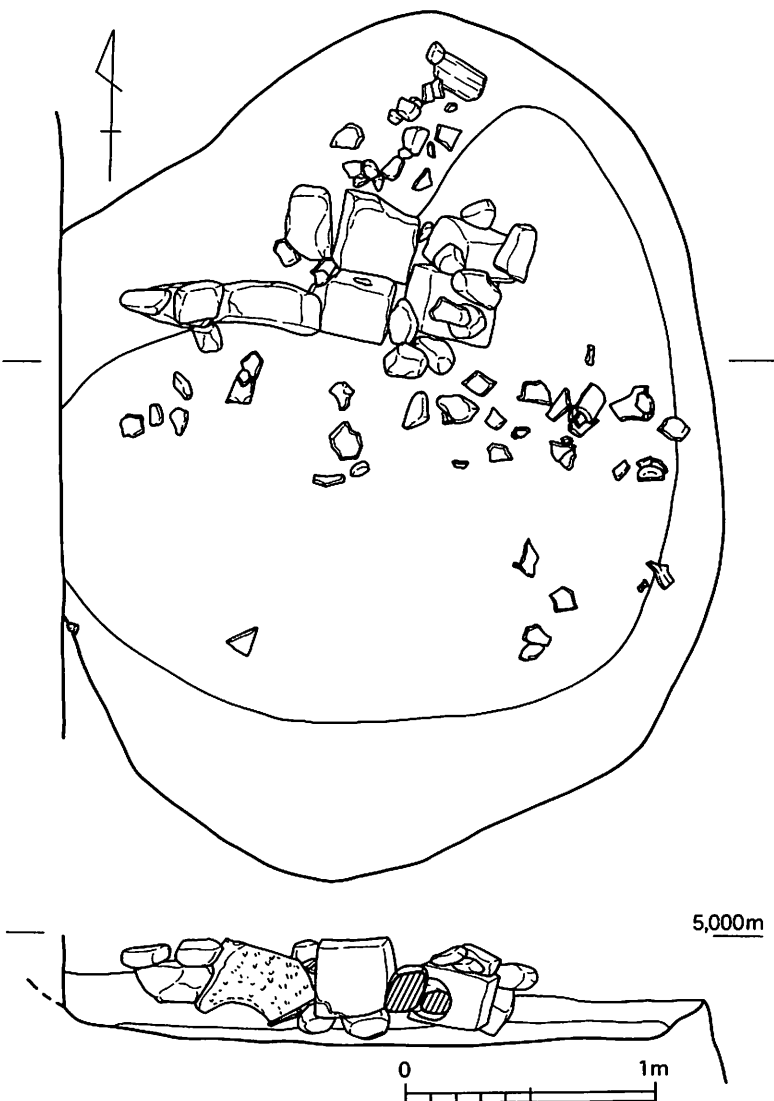
第3-49図 B-SK015実測図

B-SK015の時期は出土遺物から16世紀後葉から末葉と考える。

B-SK016(第3-51図)

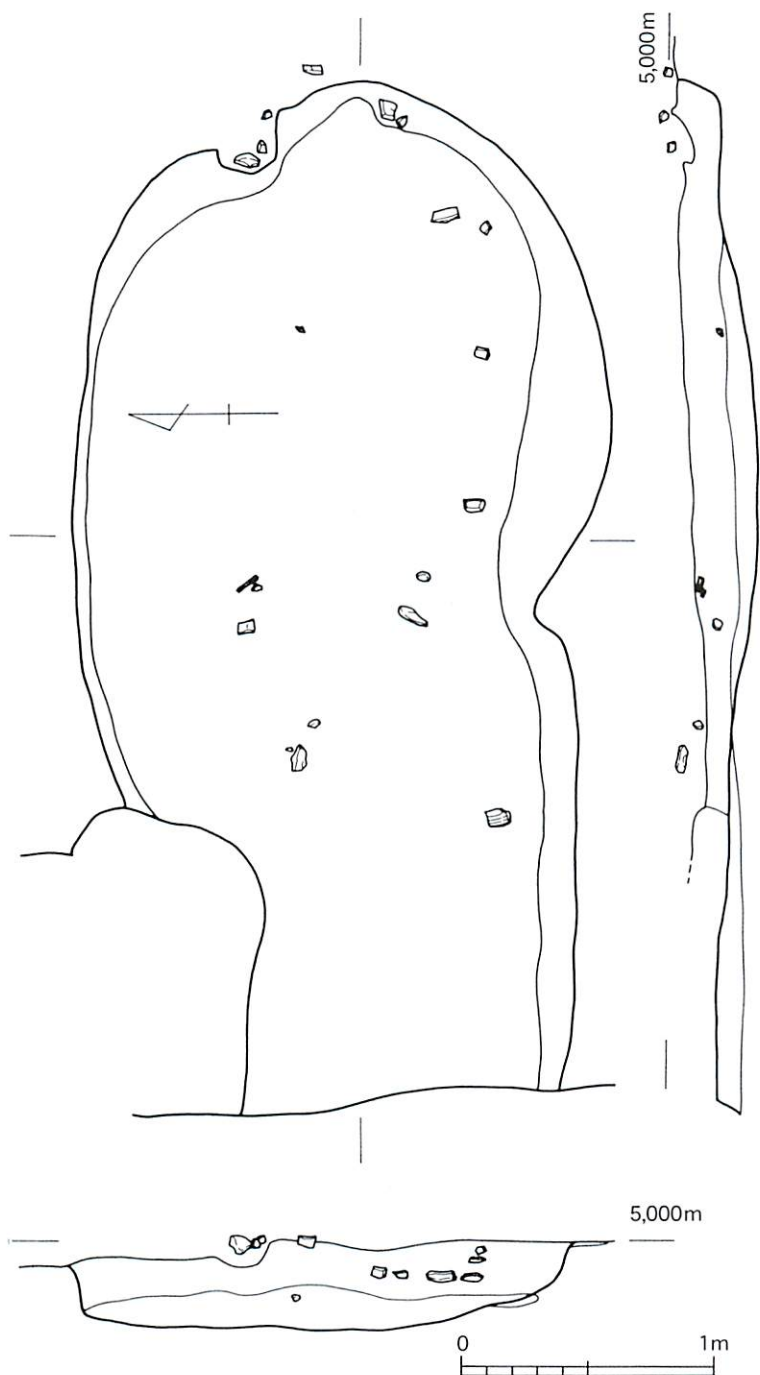
B-SK016は調査区の北寄り、西側をB-SD003、北西部をB-SK018と重複する。土坑の規模は南北約2m、東西4.2m以上で、東西に長い。深さは中央部が最新で約30cmである。

遺物は第3-52図に図示した。1は中国産白磁である。2は口縁部が屈曲し、端部が肥厚する瀬戸美濃系陶器の折縁ソギ皿である。3は口径12.3cm、底径7.6cm、器高2.1cmのロクロ成形による在地系土師質土器である。4は非ロクロ系の京都系土師器で、口径9.1cm、器高1.7cmである。5は東播系須恵質土器の鉢の口縁部である。

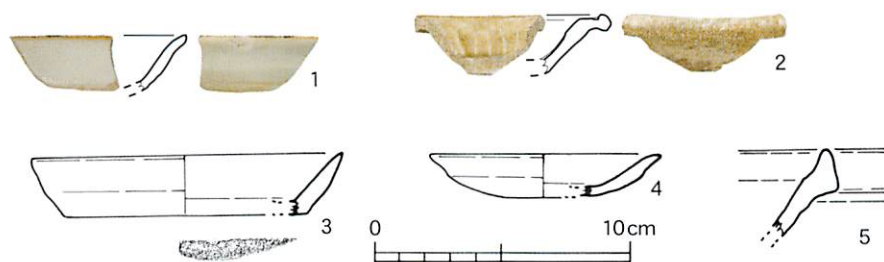


第3-50図 B-SK016実測図

B-SK016の時期は、  
B-SD003・B-SK018と  
の切り合い関係や、2の折  
縁ソギ皿が出土しているこ  
とから、16世紀末葉と考え  
る。



第3-51図 B-SK016実測図



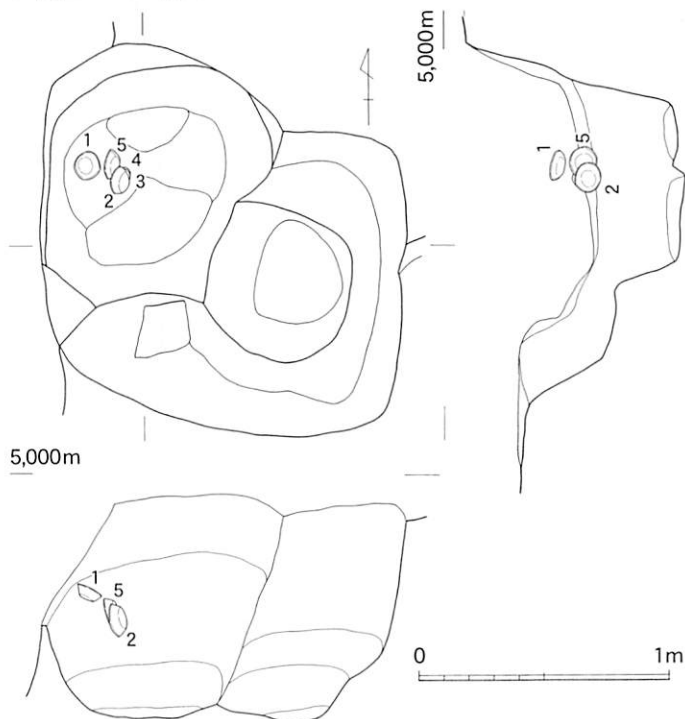
第3-52図 B-SK016実測図

B-SK018 (第3-53図)

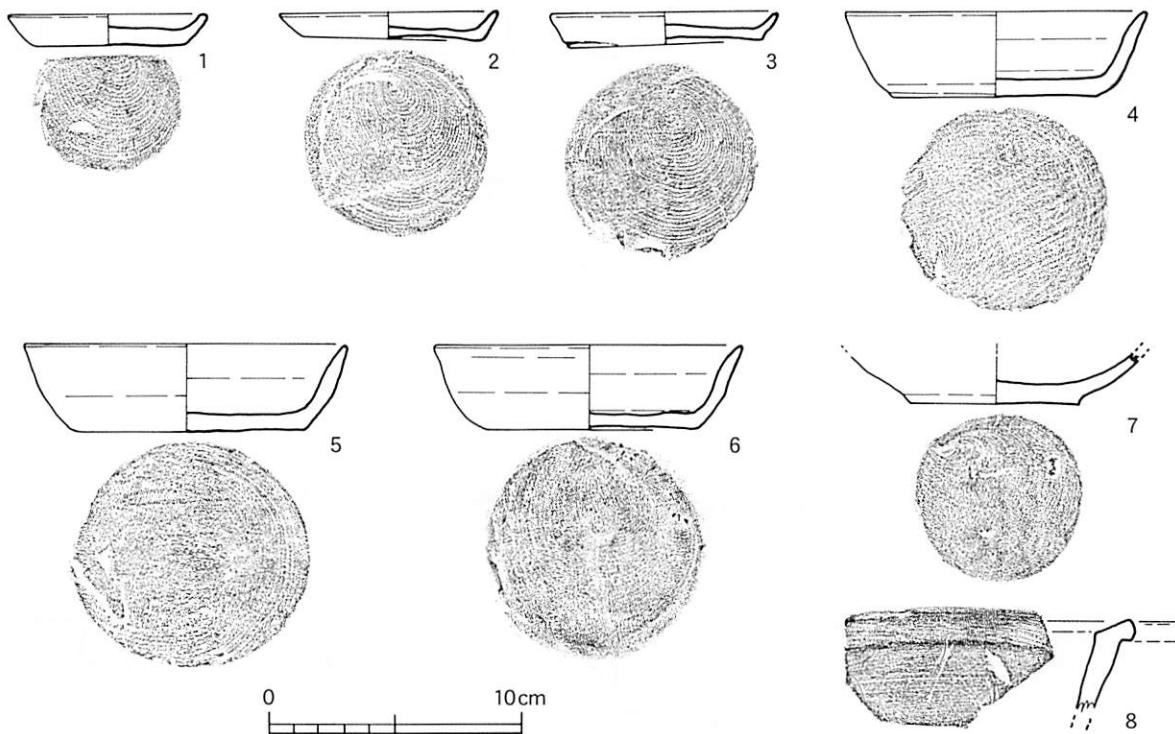
B-SK018はB-SD003と重複し、南半分の上面をB-SK016が切る。遺構の規模は東西約1.5m、南北1.5m、深さ約90cmで、ほぼ同規模の二つの土坑から構成される。

遺構内から第3-54図に図示したロクロ成形による在地系土師質土器がまとまって出土した。このうち、1～5は第3-53図に図示したように遺構の中位から完形品で、6も近接して一括して出土した。1～3は皿で1は口径7.8cm、底径5.9cm、器高1.3cmで、2は口径8.7cm、底径7.3cm、器高1.1cmで、3は口径9.1cm、底径7.5cm、器高1.4cmである。4～6は坏で、4は口径12cm、底径8.2cm、器高3.4cmで、5は口径12.7cm、底径9.3cm、器高3.4cmで、6は口径12.2cm、底径8.3cm、器高3.3cmでほぼ同規格である。口縁部も端部が外反する。7は底部が6.7cmで小さく、内湾気味に口縁部が立ち上がる碗状の器形になる。8は口縁部が屈曲する土鍋の口縁部の資料である。

B-SK018の時期は土師質土器の形態から14世紀中葉から後葉と考える。



第3-53図 B-SK018実測図



第3-54図 B-SK018出土遺物実測図

## B-SK 020 (第3-55図)

B-SK 020はB-SD003の上部に構築された大型の土坑である。規模は東西4m、南北5.2mで、深さは約50cmで、底面は大部分が平坦であるが、北壁沿いにB-SDK031、東壁部沿いにB-SDK 057などが掘り込まれている。遺構の内部には埋め立ての際に、礫を集中的に廃棄したためか3ヶ所で集石状態が検出された。

焼締陶器 出土遺物は第3-56～3-60図に図示した。第3-56図の1は底径3cmで、中国産焼締陶器の壺である。  
黒釉陶器 2は外反する口縁端部が玉縁になる中国産青磁の瓶である。3は底径10cmの、黒釉陶器の底部である。4は瀬戸美濃系陶器の梅瓶の底部で、径7.8cmである。

備前系 第3-56図5～12と第3-57図13・14は備前系陶器である。5は口径25.4cm、底径16.2cm、器高3.8cmの皿である。6～14は播鉢である。6～8・10・12は、口縁部である。口径は10が28.4cm、12が33.8cmであるが、口縁部の形態は口唇部内面に凹線状の窪みが一条廻る。また、播目は口縁部に直口するものと斜めになるものが交差する。8は注口部である。9・11・13の底部も同様な斜目播目である。14は斜播目が無い。底径は9が13.4cm、11は12.1cm、13は13.9cm、14は13.8cmである。

常滑系 第3-57図15・16は常滑系陶器で、15は底径14.4cm、16は胴部最大径部の資料で、肩部には菊花文状の円形のスタンプが押印されている。

17～19は瓦質土器であるが、17は鉢で外面に菊花文のスタンプが連続して2回押捺されている。18は胴部が張り、口縁部が外反する壺である。19は口径27.2cmで、口縁部が大きく外反し、端部が立ち上がる。器面はヘラ磨きされている。

東播系 20は東播系須恵質土器の鉢の口縁部である。21外面に突帯が廻る鈔付の土鍋である。22は須恵質土器での甕の肩部の破片で、内面に円形、外面には平行線の叩きによる調整痕が残る。

23は土師質土器の片口の付く鉢である。口径は19.5cm、器高11cmで、底部は丸底である。器面は横方向の撫でで仕上げられている。

石鍋 24・25は滑石製の石鍋の破片である。

吉備系土師器 第3-58図の26～31は吉備系土師器で、口径は28が11.2cm、29は10.4cm、30は12cmである。31の底径は5.1cmであるが、高台は退化縮小した断面三角形をしている。

第3-58図32～49はロクロ成形による在地系土師質土器である。32～35は皿で、32は口径7cm、底径は5.7cm、器高1.3cmである。33は口径8cm、底径は6.7cm、器高1.2cmで、34は口径8.3cm、底径は7.3cm、器高1.4cmである。35は口径8.4cm、底径は6.5cm、器高1cmである。

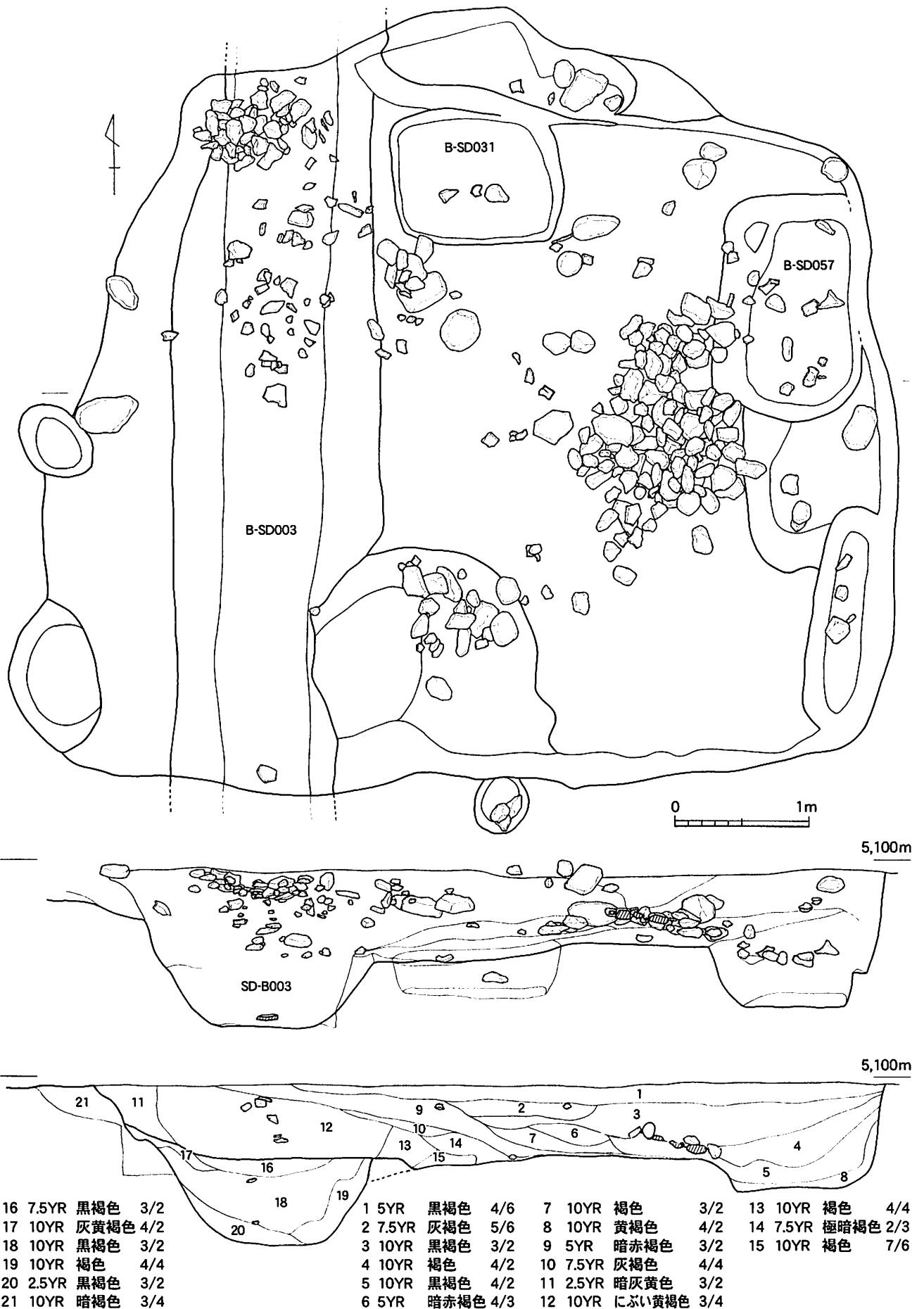
36～46は坏である。法量の平均は口径12.3cm、底径9.2cm、器高2.7cmである。口縁部の器壁の厚さは38～43・46のように中位から上位にかけて厚いものが目立つ。また底部には、42のような板状圧痕や39・43・46のようなスタレ状の痕跡が残る。

47～49は以上の皿や坏と同じロクロ成形の在地系土師質土器であるが、口径に比較すると底径が小さい15世紀末から16世紀前葉に編年される皿である。47は口径8.2cm、底径4.8cm、器高1.8cmで、48は口径7.8cm、底径4.3cm、器高1.7cm、49は口径7.5cm、底径4.8cm、器高2.4cmである。口縁部は逆ハの字状に開き、48の内面にはラセン状のロクロ目が残り、口唇部にススが付着する。

50～66は京都系土師器であるが、規格や器形で幾つかに分類できる。50は口縁部にススが付着し、口径8.8cm、器高2.2cmで最小である。次に大きいのが51・52で、口径11cm前後である。そして、53～59は口径12.5cm前後で、器高は平均2.6cmである。これに対し、60～65は口径に対し器高が高く、61・62は口径10.2cm、10.8cmと小さいが、器高は3.3cm、3cmと高く坏形をする。他の口径も63が12.3cm、64は11.8cm、65は12cmであるが、器高はいずれも3cm以上あり、坏形を呈している。

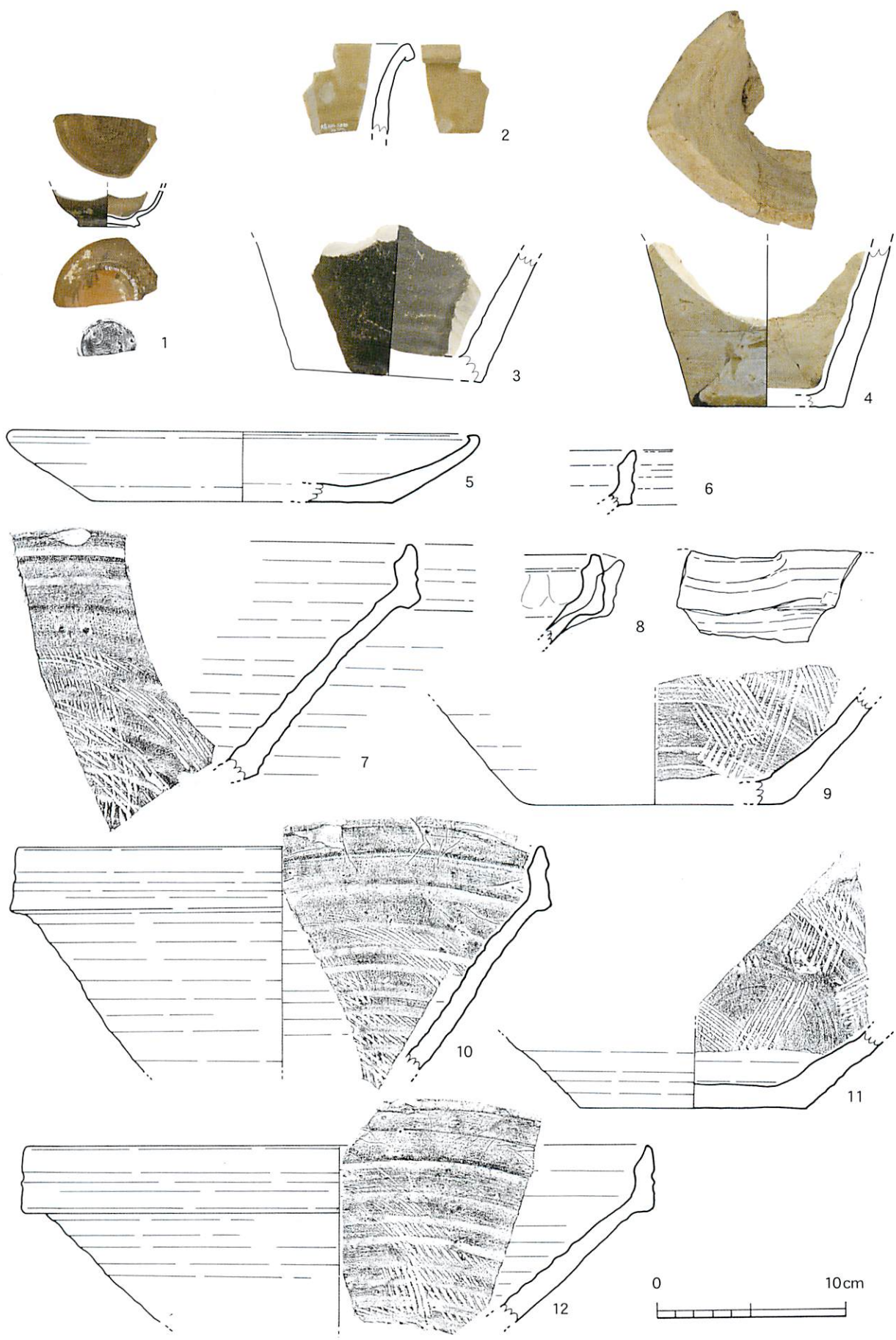
焼塩壺 66は口径6.3cm、器高1.9cm、底径4.9cmの小型のロクロ系土師器である。焼塩壺の蓋の可能性もある。

第2節 遺構と遺物



第3-55図 B-SK020実測図

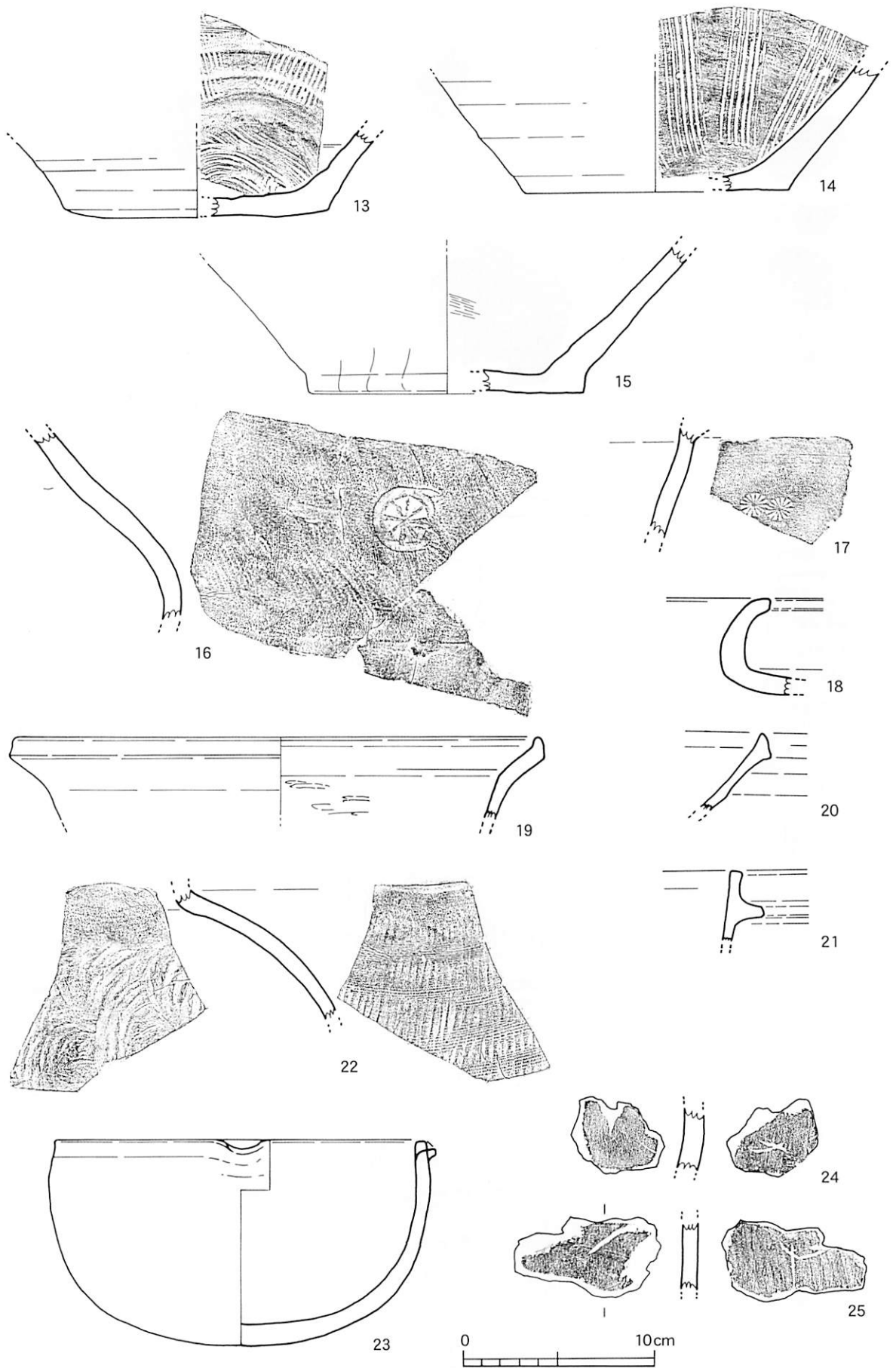




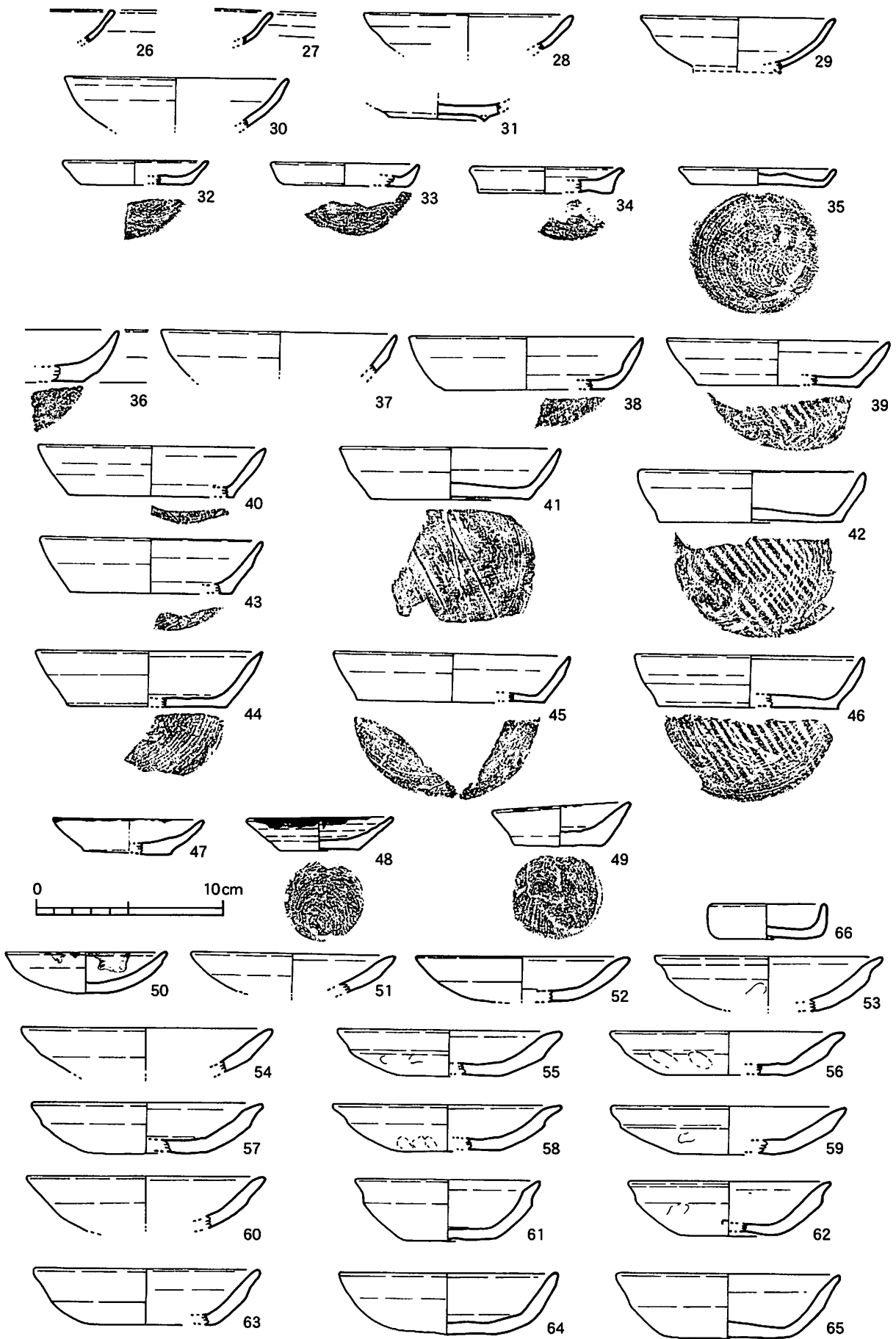
第3-56図 B-SK020出土遺物実測図(1)



第2節 遺構と遺物



第3-57図 B-SK020出土遺物実測図(2)



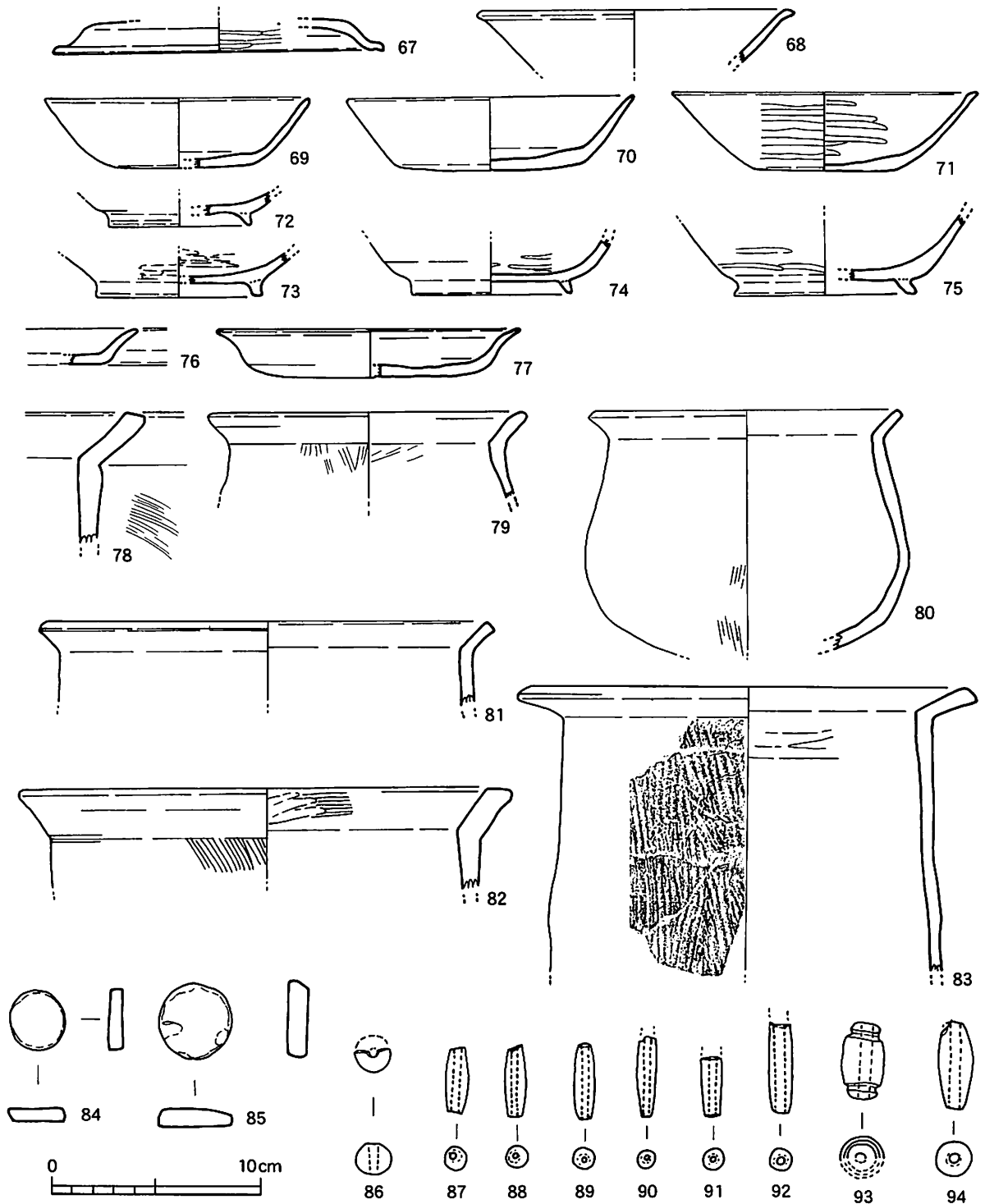
第3-58図 B-SK020出土遺物実測図(3)

第2節 遺構と遺物

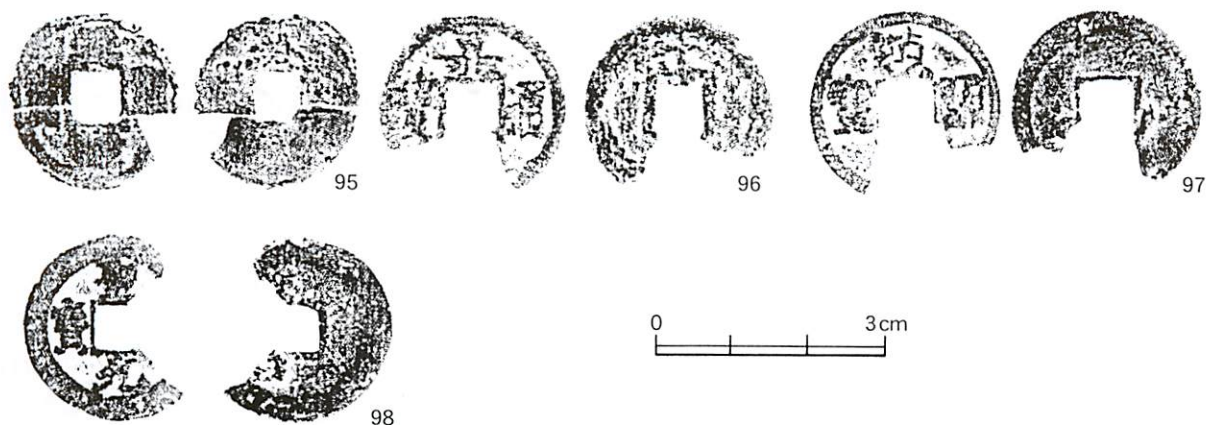
第3-59図67~83は8世紀後半から9世紀前葉の遺物で、67は土師器の坏蓋である。69~71は回転ヘラ切りの底部をもつ坏である。72~75は高台が付く土師器埴である。76・77は土師器皿である。これらの器面は横方向のヘラ磨きで調整されている。78~83は口径15cm前後と22cm前後の甕である。83は口径に対し、長胴である。口縁部周辺は横方向の撫で、胴部外面は縦方向の刷毛目である。83は口径に対し、長胴である。

84・85は土器片加工品で土器片を研磨し円形に仕上げている。84は2.7cm×3cm、85は3.5cm×4.8cmである。

ガラス製品 86は緑色をしたガラス製品である。半分に欠けるが径は0.8cmである。



第3-59図 B-SK020出土遺物実測図(4)



第3-60図 B-SK020出土銅銭実測図

土錘

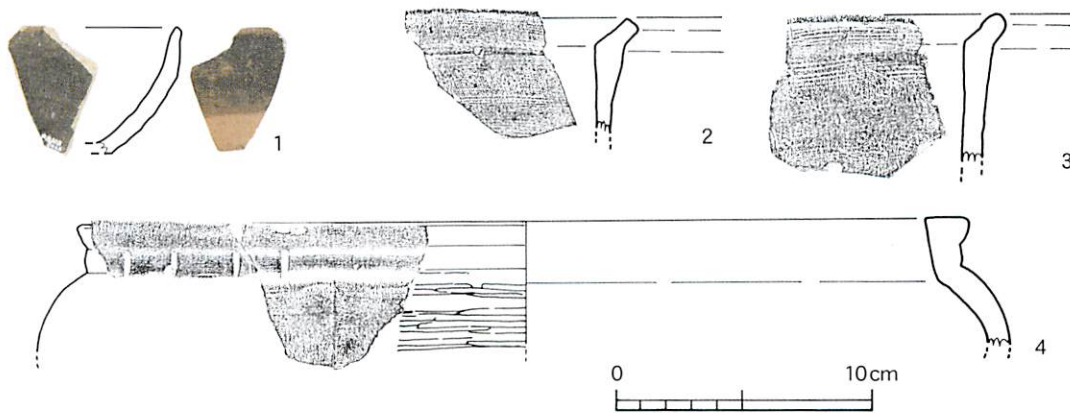
87～94の土錘は93以外外紡錘形をしている。規格は87～89は長さ3cm台、重さ4g程度であるが、90～92は長さ4cm以上ある。94は他に比較すると太く、重さも11.5gある。93は両端部に紐を巡らすくびれを持つ土錘である。長さは3.8cmであるが、重さは12.9gを測る。

銅銭

第3-60図95～98は銅銭である。95は篆書体で書かれた「天聖元寶」で初鑄年は1023年(北宋)である。96は「嘉定通寶」で初鑄年は1208年(南宋)である。



第3-61図 B-SK022実測図



第3-62図 B-SK022実測図

第2節 遺構と遺物

97は篆書体で書かれた「政」・「通」・「寶」は判読できるものの、錢銘は特定できない。98も行書体で書かれた「聖」・「元」・「寶」は判読でき「天聖元寶」の可能性はある。

B-SK020の時期は、京都系土師器や斜め掘り目の備前系陶器の播鉢が床面などから一定量出土することから16世紀後葉から末葉と考える。

B-SK022 (第3-61図)

B-SK022は調査区中程のL-44区で、B-SD003と西側を接し検出された不定形な浅い土坑である。遺構の規模は南北約3m、東西約2.4mで深さは10数cmである。床面にはさらに2ヶ所細長い10数cmの掘り込みが検出された。

瀬戸美濃系

遺物は第3-62図に図示した。1は器高4.9cmの瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。2・3は口縁部が屈曲するタイプの土鍋である。内面は横方向の刷毛目で器面調整されており、外面は横撫である。4は口径35.2cmの瓦質土器である。内外面横方向に丁寧にヘラ磨きされて、頸部にはヘラで連続的な刻み目が付く。黒色に焼成されている。

瓦質土器

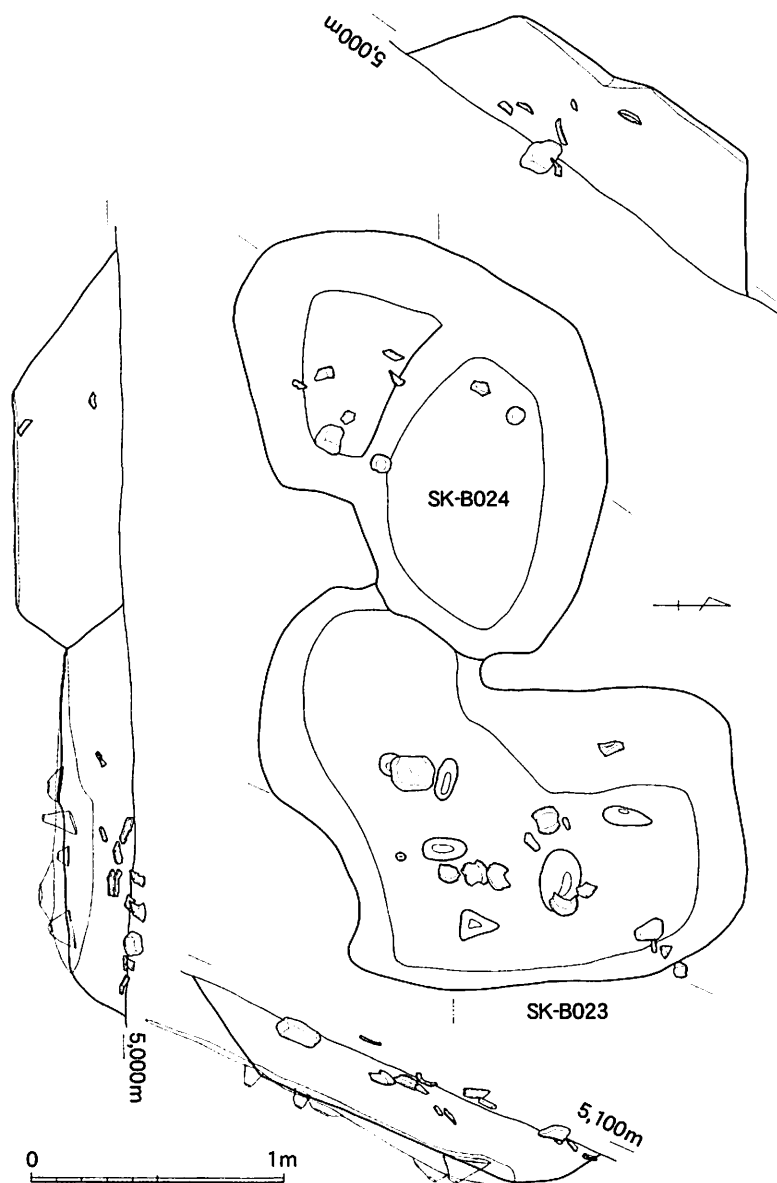
時期は14世紀代の可能性が強いが、決定できる良好な資料はない。

B-SK023 (第3-63図)

B-SK023とB-SK024は調査区東南部のL-46で検出された連続する2つの土坑である。B-SK023は南北約1.8m、東西約1.5mで、深さは約25cmの不定形土坑である。

遺構内から出土した第3-64図の銅銭は、篆書体で書かれた「天聖元寶」で初鑄年は1023年(北宋)である。錢銘間には4ヶ所穿孔されている。また、第3-65図2~7に図示したロクロ成形による在地系土師質土器は、7の坏以外は皿で、法量は、2が口径8cm、底径7.2cm、器高1.4cmで、3は口径7.8cm、底径6.5cm、器高1.2cmである。4は口径8.6cm、底径7cm、器高1.3cmで、5は口径8.8cm、底径7.7cm、器高1.2cmである。6は口径8.8cm、底径6.8cm、器高1.2cmである。7は坏で口径12.8cm、底径はいびつで

銅銭



第3-63図 B-SK023・SK024実測図



あるが8.7cm、器高は3.1cmである。

B-SK023の時期は、在地系土師質土器の形態から14世紀中葉から後葉と考える。

B-SK024 (第3-63図)

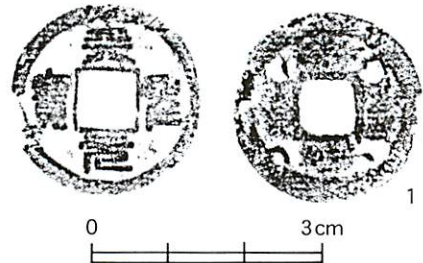
B-SK024は、B-SK023の南西部に接続するような位置で検出された土坑である。規模は、南北1.4m、東西1.5mで、深さは約45cmあり、二段掘りになっている。

龍泉窯系

遺構内からは第3-65図8~12に図示した遺物が出土している。8は底径8cmの龍泉窯系青磁碗である。見込み部にはヘラ描きの花文がある。9~11はロクロ成形による在地系土師質土器である。9は口径8.2cm、底径約7cm、器高約1cmの皿である。10は口径約8.8cm、底径約7.6cm、器高1.7cmの小型の坏である。11は口縁端部を欠くが、底径9.5cmの坏で、口縁部の器壁は中位から上位が厚くなる。12は断面三角形で径4.6cmの小さな高台が廻る吉備系土師器である。

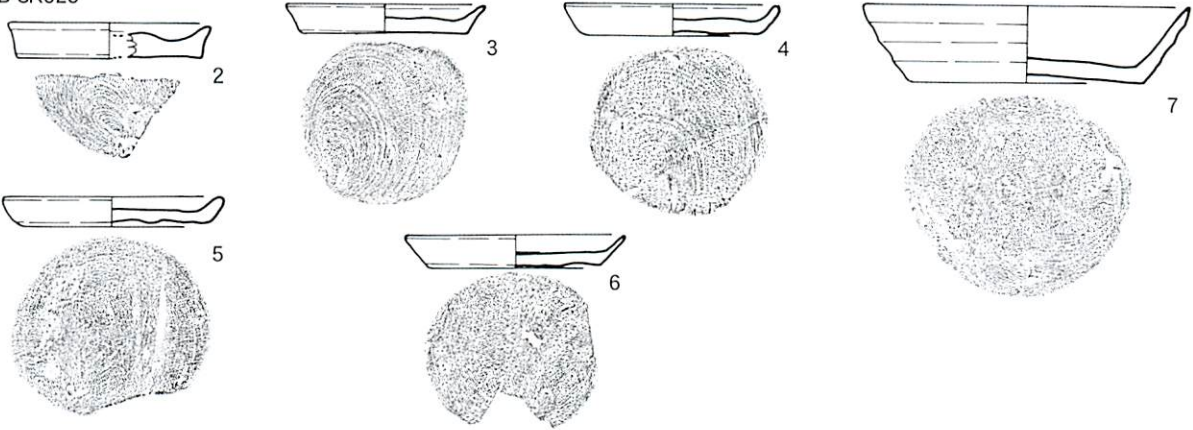
吉備系土師器

以上の出土遺物から、B-SK024の時期は、14世紀前葉の可能性があり、B-SK023と共に、この周辺で多数検出された、後述する礎盤建物群と係わると考える。

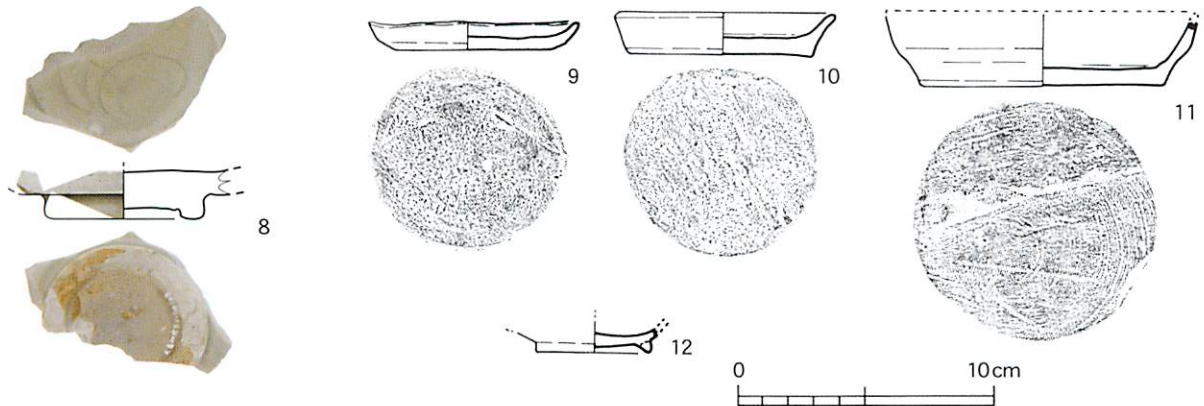


第3-64図 B-SK023出土銅銭実測図

B-SK023



B-SK024



第3-65図 B-SK023・SK024出土遺物実測図

B-SK 031 (第3-66図)

B-SK 031はB-SK 020の底面を精査中に検出された土坑である。検出面での規模は、東西1.26m、南北0.98mの隅丸長方形をしていた。底面は中央部が最深となる緩い船底状になり、検出面からの深さは30cmである。底面の規模も、東西1.1m、南北0.87mで、隅丸長方形をしている。

土坑内からの出土遺物は、図示出来るような良好な資料が出土しなかったが、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏の破片14点が礫と共に出土し、京都系土師器などは見られない。このため、時期は14世紀から15世紀代前半の可能性が強い。この隅丸方形の堅穴があった場所に16世紀後葉から末葉にB-SK 020を掘り込んだものと思われる。

B-SK 047 (第3-67図)

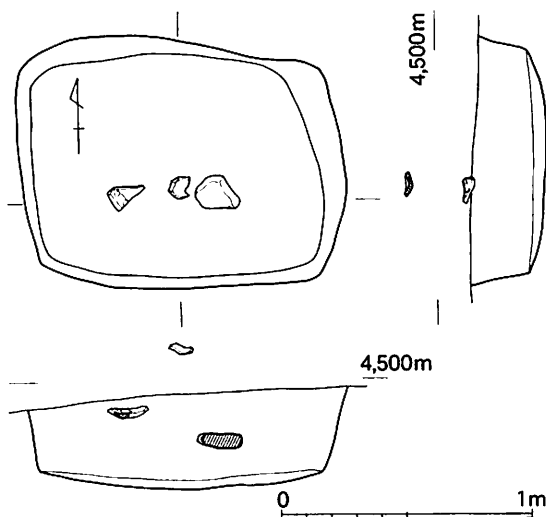
埋納土坑

B-SK 047は調査区の東南部L-47区で検出された埋納土坑である。検出面での土坑の規模は、東西65cm、南北80cmの楕円形をしている。底面は東西45cm、南北50cmであり、深さは南西部が最深で約20cmを測る。土坑内からは、第3-68図2に図示した土師器の甕が出土した。その状況は、土坑中央部に底部を下、口縁部を上にした正位置で、埋納された状態であった。

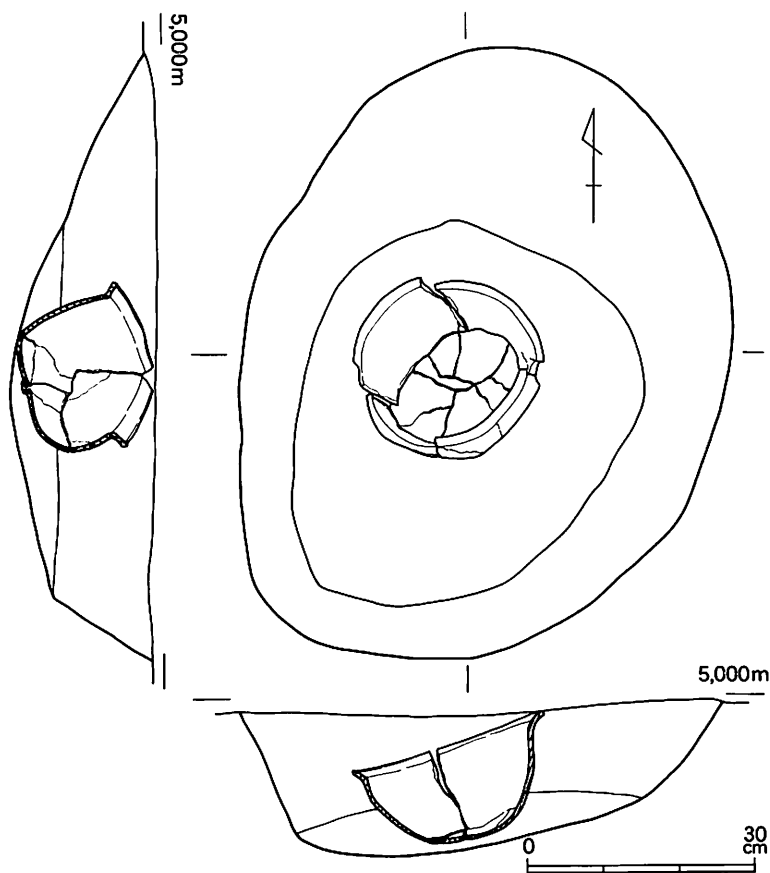
甕は底部を欠くが、ほぼ完形品で、穿孔などは確認できなかった。器形は胴部が寸胴で、ほぼ直立し、口縁部は外反し、口縁端部はやや肥厚する。底部は丸底で、一部にススが附着する。器面調整は、粘土積みの痕跡が残るが、全面横方向の撫でて仕上げられている。

1は土坑内から出土した土師器の坏である。法量は口径は13.8cm、底径7.9cm、器高3.4cmである。器面調整は、底部以外内外面とも撫でて成形しているが、その後ヘラ磨きされている。底部は回転ヘラ切りで、粘土塊から切り離されている。口縁部の器壁はほぼ一定で、口縁端部が緩く外反する。

B-SK 047の出土遺物の時期は、8世紀後半から9世紀前半で、府内町跡20次調査で出土する古代の遺物とほぼ同時期であるが、遺構として確実に認識できるのは、このB-SK 047のみである。



第3-66図 B-SK031実測図



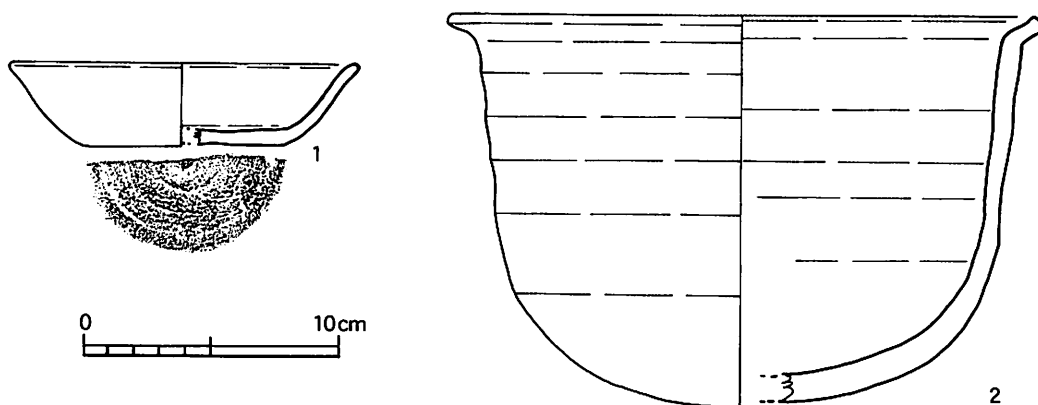
第3-67図 B-SK047実測図



B-SK048 (第3-69図)

B-SK048は調査区の南隅L-48区で、B-SD003の東壁を精査中に検出した土坑である。B-SD003を調査中は、この遺構の上面の輪郭を確認することは出来なかったため、B-SD003より古い可能性が高い。検出された遺構の規模は、上面が南北約1m、東西約1mの円形であるが、底面は東側隅が最深部となり、東側の壁はオーバーハングするが、西側の壁はそれに比較すると緩やかである。深さは、検出面から約1.2mあり、底面は約南北70cm、東西約50cmで比較的平坦である。

遺物の出土状況は図示しているように、深さ約1.2mの遺構内で、検出面から約50cm前後の位置から出土するグループ10数点と、底面近くで出土する5点のグループに明瞭に分かれる。前者を上層出土遺物、後者を下層出土遺物として報告する。



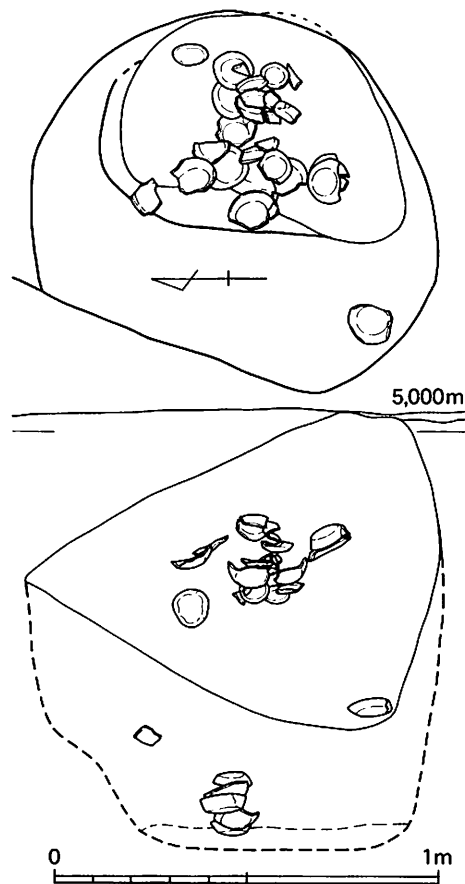
第3-68図 B-SK047出土遺物実測図

まず、上層出土遺物は第3-70図に図示した。これには、下層との間で検出された16もこれに含める。

集中して出土した遺物は、全てロクロ成形による在地系土師質土器である。このうち、1～8は皿である。

1は口径7.5cm、底径6.7cm、器高1.3cmで、2は口径9.1cm、底径7.2cm、器高1.2cmである。3はいびつであるが、口径約8.5cm、底径約7.1cm、器高1.1cmで、4は口径9cm、底径7.2cm、器高1.1cmである。5は口径8.3cm、底径6.3cm、器高1.3cmで、6は口径8.4cm、底径7.3cm、器高1.2cmである。7は口径8.3cm、底径6.6cm、器高1.3cmである。7は口径8.8cm、底径6.1cmであるが、器高が約1.7cmと他の皿に比較すると高い。これらの皿は5の底部が厚いものの、他は口縁部との差は少ない。4・5・8の底部には板状やスタレ圧痕が付く。

9～17は坏である。9は口径12.4cm、底径9.5cm、器高2.6cmで、口縁部中位の器壁が厚い。10は、口径12.2cm、底径8.1cm、器高2.9cmで、口縁部の器壁は一定で端部が尖る。11は口径13cm、底径9.8cm、器高3cmで、12は口径13.2cm、底径10.2cm、器高2.9cmで、2点とも口縁部中位の器壁が厚い。13～15は口縁部の器壁はほ



第3-69図 B-SK048実測図

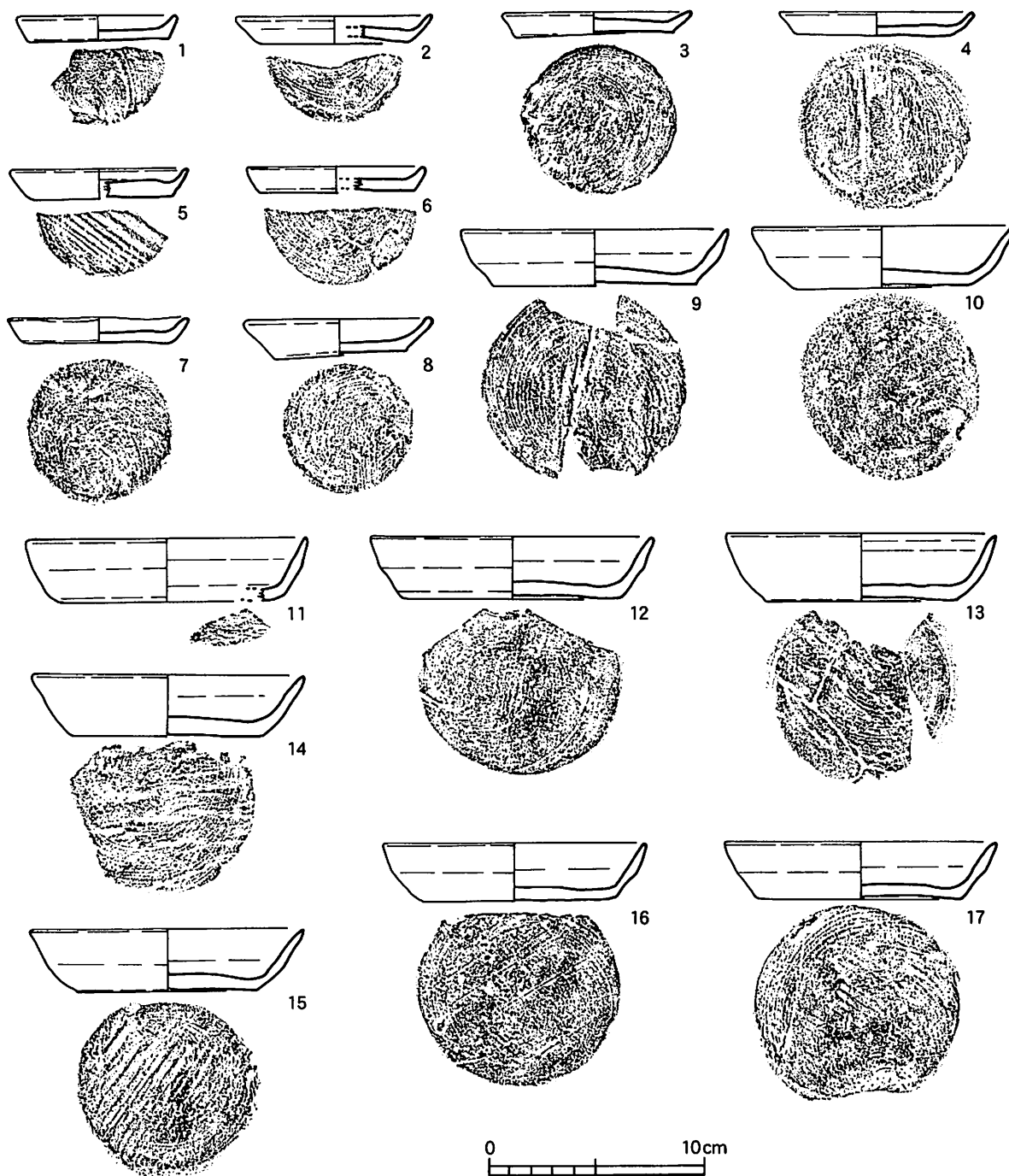
第2節 遺構と遺物

ほぼ均一である。13は口径12.4cm、底径9.1cm、器高3.2cmで、14は口径12.7cm、底径9.1cm、器高2.8cm、15は口径12.6cm、底径8.3cm、器高3cmである。16は口径12.3cm、底径9cm、器高2.2cmで、17は口径12.6cm、底径9.6cm、器高2.7cmである。15・17の底部にはスタレ状圧痕が付く。

銅銭

第3-71図は銅銭の破片である。新書体の「宋」・「通」の文字が判読でき、1038年（北宋）が初鋳年の「皇宋通寶」の可能性ある。

第3-72図は下層出土の資料を図示した。19~23はロクロ成形による在地系土師質土器の坏であるが、19と20は他の坏に比較すると、口径に対し底径が小さく、器高が高い傾向を示す。19は口径12.9cm、底径7.3cm、器高3.1cmで、20は口径12.1cm、底径7.4cm、器高3.3cmである。20の底部には

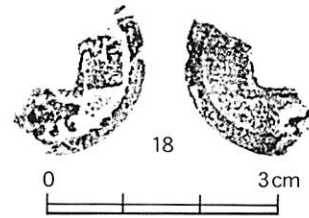


第3-70図 B-SK048出土遺物実測図（上層）

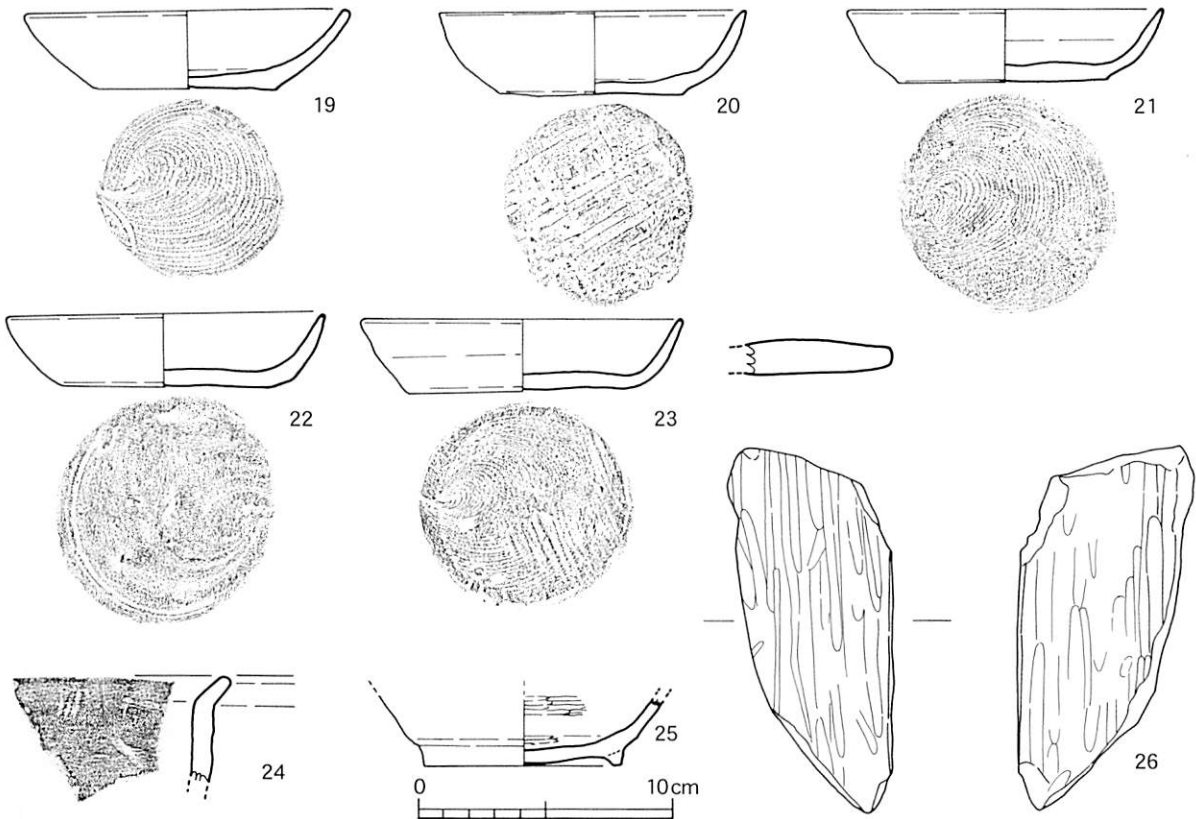
スタレ状の圧痕が付く。21は口径12.4cm、底径8.4cm、器高2.9cmで、22は口径12.6cm、底径8.8cm、器高3cmである。23は口径12.7cm、底径9cm、器高2.9cmで、18・19に比較すると口径はほぼ同じであるが、底径は1cm以上小さい。20・23の底部にはスタレ状圧痕が付く。

24は口縁部が外反する土鍋と考える。25は高台が廻る古代の碗で、器面は横方向にヘラ磨きされている。26は全面ヘラ磨きされた瓦質土器で、竈などの一部であろうか。これら3点は流入遺物である。

B-SK048から出土したロクロ成形による土師質土器は、切り合い関係にあるB-SD003と一緒に考えると、古い順に下層出土→上層出土→B-SD003出土となる。下層には口径に比較すると底径の小さい19・20があるが、上層には見られないなど、遺物相に若干の変化も見られるが、数量が少なく、遺構のも小さいため、埋没するのに長時間が考えられず、ここでは14世紀前葉から中葉と考える。



第3-71図 B-SK048出土銅銭実測図



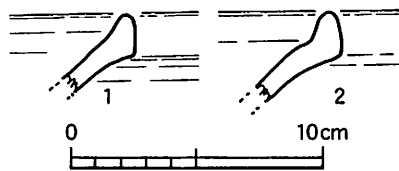
第3-72図 B-SK048出土遺物実測図（下層）

B-SK057 (第3-74図)

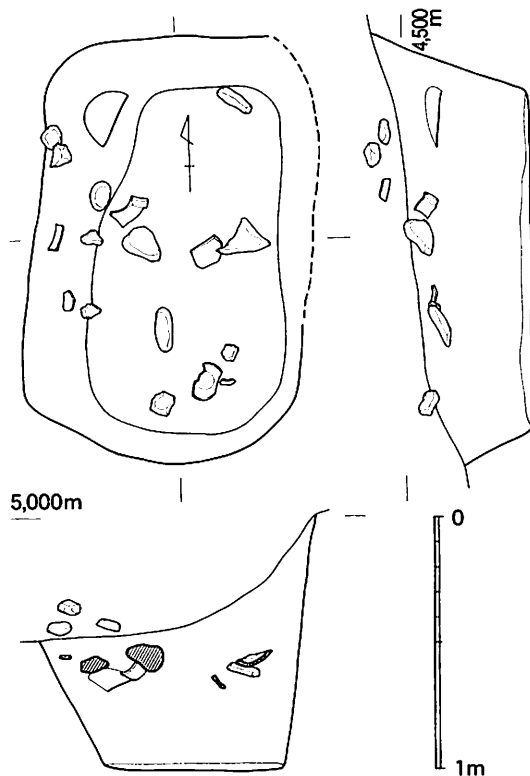
B-SK057はB-SK020の底面を精査中に東壁沿いで検出された土坑である。検出面での規模は、東西1.65m、南北1.1mの隅丸長方形をしている。底面ほぼ平坦で、検出面からの深さは約50cmであるが、B-SK020の検出面からだと約1mに達する。底面の規模も、東西0.75m、南北1.4mで、隅丸長方形をしている。

東播系

土坑内からの出土遺物は、第3-73図に東播系須恵質土器の鉢の口縁部を2点図示したが、この他、龍泉窯系青磁の小片や、ロクロ成形による在地系土師質土器の小破片が出土している。こうした傾向は、同じ状況で調査されたB-SK031と同様で、遺構内からは京都系土師器など16世紀代の遺物を出土しない。このため、B-SK057はB-SK020が掘削される以前の14世紀から15世紀前半代の遺構と考える。



第3-73図 B-SK057出土遺物実測図



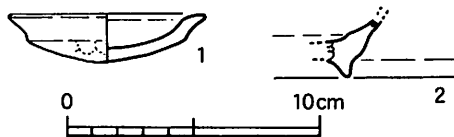
第3-74図 B-SK057物実測図

B-SK060 (第3-76図)

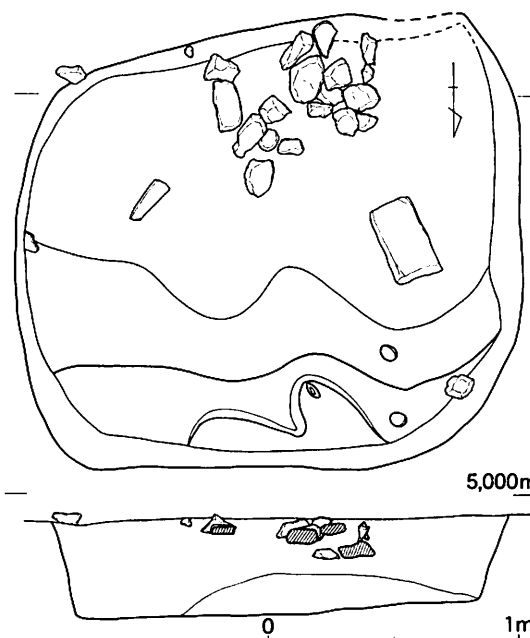
B-SK060は調査区の南、L-46区で検出された土坑である。遺構の規模は東西約2m、南北約1.8mの隅丸方形をしている。底面は明確ではなく、北側は浅く段掘りになっているが、南側は深く、約40cmで、底面は平坦である。

遺構内からは、図示している礫の他、龍泉窯産青磁や備前系陶器、ロクロ成形による在地系土師質土器のなどが出土している。第3-75図に図示した1は京都系土師器で、法量は口径7.6cm、器高2.3cmで口縁部外面を指で強く押さえて撫でている。2は高台の付いた碗の底部である。

B-SK060からは14世紀代から16世紀代の遺物が出土しているが、京都系土師器が図以外に



第3-75図 B-SK060出土遺物実測図



第3-76図 B-SK060実測図

も4点出土しており、備前系陶器にも16世紀代と考えられる破片があり、16世紀後葉から末葉と想定する。

**B-SK063 (第3-77図)**

B-SK063は調査区北寄りのL-42区で検出された小竪穴である。検出面での規模は南北90cm、東西60cmで、底面は南北60cm、東西36cmで、深さは32cmである。遺構内からは、ロクロ成形による在り系土師質土器の坏が3点、遺構が埋没する段階で流れ込んだ状態で出土している。

出土した在り系土師質土器の坏は第3-78図に図示したが、1は半分を欠くが、口径12.8cm、底径9.2cm、器高2.6cmで口縁端部が尖る。2は歪であり、口径は12.3~12.5cmで、底径は8.2~8.9cm、器高は2.8cm前後である。口縁部の器壁は、上位で肥厚する。3も歪であり、口径は12.8~13.2cmで、底径は9.4~9.6cm、器高は2.6~3.1cmである。口縁部の器壁は、底部近くが薄く、口縁端部にかけて、断面が紡錘形状に肥厚する。

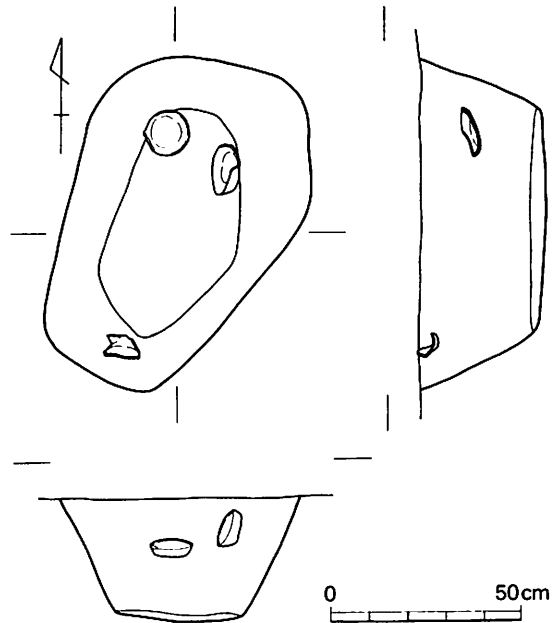
B-SK063の時期は、在り系土師質土器の形態から、14世紀代と考える。

**B-SK066 (第3-79図)**

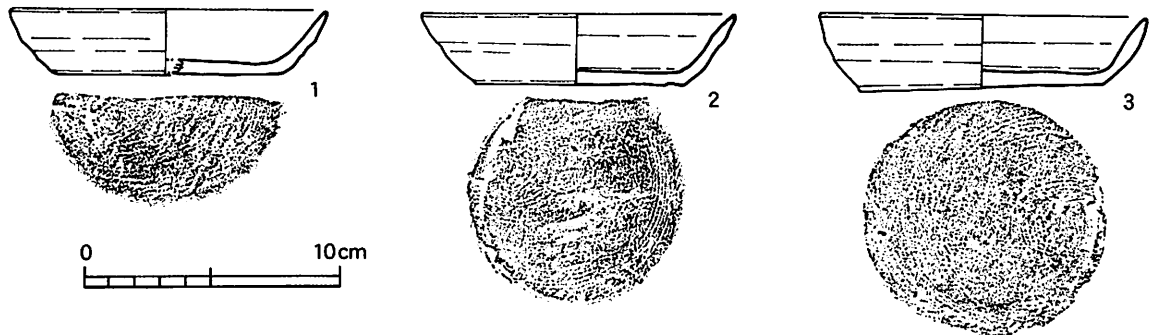
B-SK066は調査区の南寄り、L-46区の東北隅で検出された遺構である。幾つかの土坑が切り合っていた可能性もあり、不定形で、複雑な形状を呈する。全体の規模は、南北約1.1m、東西も約1.1mであるが、南側が複雑に入り組む。また深さは、南西隅に少なくとも3つの小土坑や柱穴状土坑が掘り込まれており、最深部は西壁沿いの柱穴で、約30cmである。

出土した遺物は第3-80図に図示したが、1・2はロクロ成形による在り系土師質土器の皿で、1は口径7.6cm、底径6.8cm、器高1.2cm、2は口径7.8cm、底径6.8cm、器高1.4cmで底部から口縁部をつまみ出している。3・4は坏蓋である。口径は3が口径14.6cm、4が17.8cmで、2点とも器面は横方向のヘラ研磨で調整されている。5は口径24.8cmの甕で、口縁部は内側に稜を生じて屈曲する。

このB-SK066から出土した遺物は、1・2が14世紀代と想定されるが、3~5は8世紀後半から9世紀前半である。遺構自体も幾つかの土坑が切り合った状況であり、判別はできないが、二時期の遺構で構成されている可能性が高い。



第3-77図 B-SK063実測図



第3-78図 B-SK063出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

B-SK096

B-SK096は調査区のK-43区で検出された方形の土坑で、規模は南北3.3m、東西は西側をB-S D064と切り合い関係にあるが、2.8m以上はある。形態はほぼ方形で、深さは約20cmである。

白磁 第3-81図に図示したものは、遺構内から出土した主要遺物である。1は底径5.8cmの中国産白磁  
瀬戸美濃系 で、底部を含め、全面に施釉である。2・5・7は瀬戸美濃系陶器で、2は口径10cmの折縁ソギ皿  
である。3は口径10.6cm、底径6cm、器高2.3cmの折縁皿である。4は口径8cm、底径4cm、器高2  
龍泉窯系 cmの高台の付く皿で、薄く施釉されており、胎土から判断した。5は天目茶碗の破片で、3.2cm×3.6  
cmの円盤状に加工している。7も天目茶碗の底部で、部位を利用し、径4.4cmの円盤状に仕上げ  
備前系 ている。6は底径5cmの緑色の釉がかかった碗で、底部は露胎である。龍泉窯系青磁碗の粗悪品の可  
能性もあるが、雰囲気異なる。

8~11は備前系陶器である。8は口径2.8cm、器高3.8cm、器高2.4cmの小型の製品である。口縁部  
は内湾し、端部は内側に連続して指押さえて曲げられている。9~11の挿鉢の口縁部の形態は、端  
部内側が、凹線状に窪み、口唇部が尖る。内面の挿り目は、口縁部と直角になるものと斜めになる  
ものが交差する。

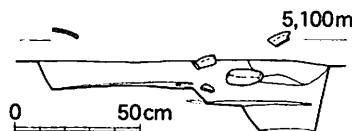
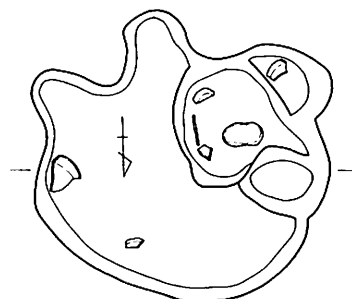
12・13はロクロ成形による在来系土師質土器である。12の皿は口径8cm、底径7cmで、器高は1.2  
cmである。13の坏は口径12cm、底径7.6cm、器高3.3cmで、口縁部の器壁は中位が厚い。

瓦質土器 14・15・17は瓦質土器で、14はB-SK022の4と同一個体と思われる。内湾する胴部に直立す  
る口縁部が付き、端部は肥厚する。頸部にはヘラによる縦方向の短沈線が連続して入れられている。  
15は口径31.8cmで、鉢状の器形をしている。17は底部に円形の穴が開く容器である。

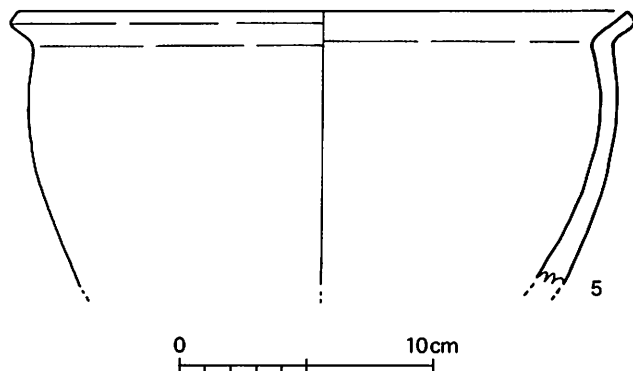
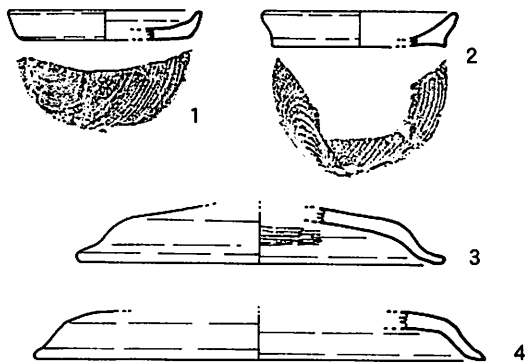
16は京都系土師器で、口径は12cm、器高は2.5cmで、器壁が厚い。

18は口径18.4cmの甕で、口縁部は横撫で、胴部は縦方向の刷毛  
目調整である。

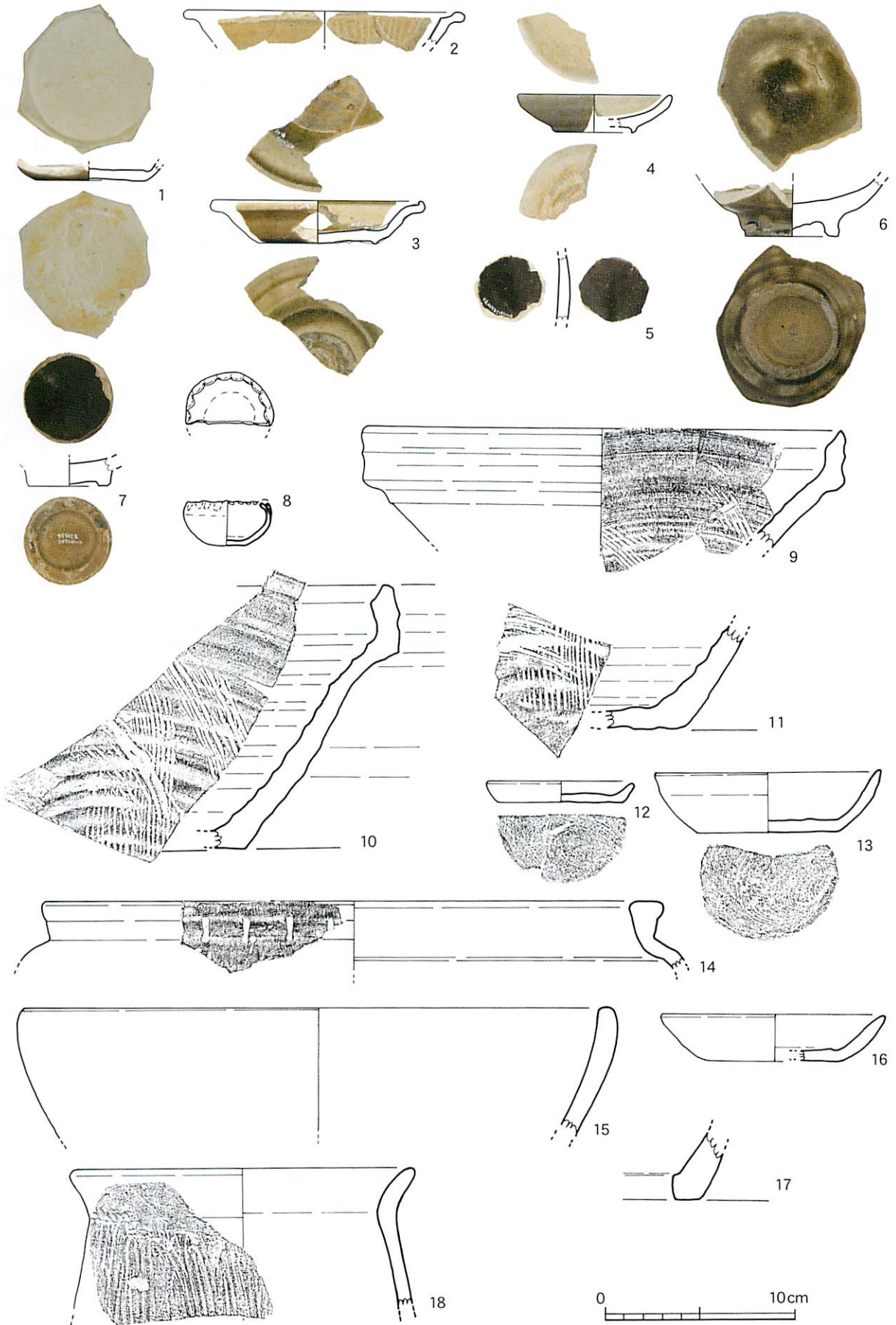
B-SK096の時期は、2の折縁ソギ皿、9~11の斜め挿り目  
の備前系陶器の挿鉢、16の京都系土師器などが出土しているこ  
とから、16世紀末葉と考える。



第3-79図 B-SK066実測図



第3-80図 B-SK066出土遺物実測図



第3-81図 B-SK096出土遺物実測図



B-SK097 (第3-82図)

B-SK097はK-44区でB-SD064を切った状態で検出された土坑である。遺構の規模は、南北約2.3m、東西1.8mの南北に長い楕円形をしており、底面は検出面から約75cmで達し、南北1.5m、東西1.2m以上ある。底面はさらに中央部が径50cmの範囲で、約30cm掘り窪められ、径20cm程度の底面を形成する。遺構内からは、土坑を埋め立てる際に、半分埋まった時点で、川原石を多量に投棄している。このため、遺構の中央部に厚さ約50cmの範囲で人頭大から拳大の川原石が集石状態で検出された。また、集石やその周辺から第3-83図に図示した遺物も出土している。

備前系  
火罨

第3-83図1~4は備前系陶器である。1は底径6.4cmで、低い高台が廻る徳利形の器形が想定できる。高台の内側中央にヘラ書きによる「太」の文字が刻まれている。また、底部から胴部にかけて、備前系陶器独特の火罨が見られる。2は大甕であり、肩部にヘラ書きによる文字が見られる。「ひねり土」の「土」の字であろうか。3は口径4cmの小壺である。口縁部は一ヶ所片口になっており、液体容器であった可能性を強くする。胴部の最大径は約9cmで、その部分に「1大」とヘラ書きされている。4は口径31.2cm、底径16.2cm、器高12.1cmの播鉢である。口縁部は注口部を一ヶ所に持ち、口唇部は斜めにカットされている。内面の播目は、口縁部から底部にかけて直角に、6本の櫛歯状工具で入れられている。

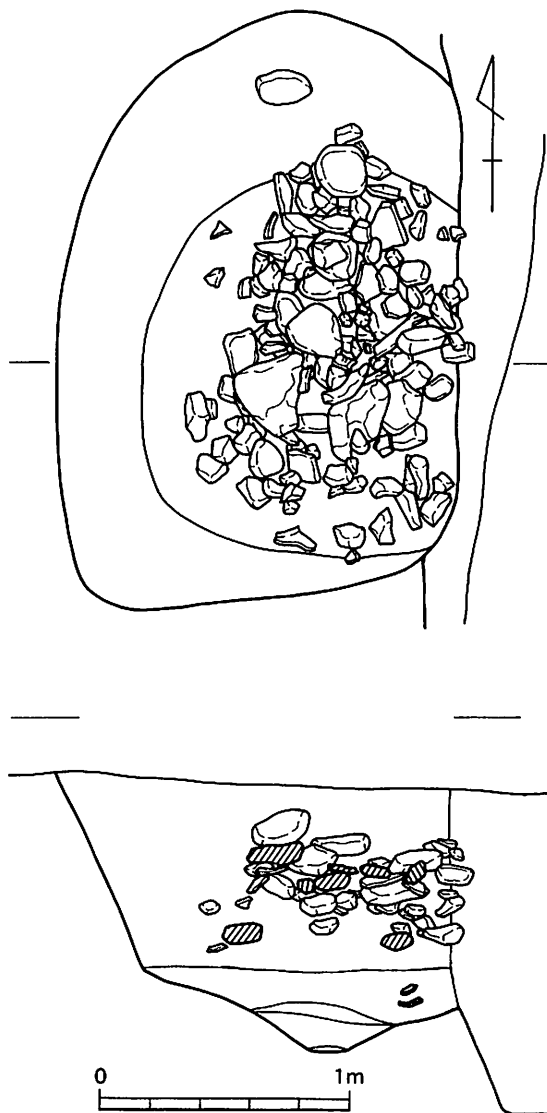
5はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。口唇部を欠くが、口径は約11.7cm、底径8.8cm、器高約2.6cmである。口縁部の器壁は、底部からほぼ均一である。

6・7は京都系土師器である。6は口縁部下に強い指押さえによる凹線状の窪みが廻る。7は口径8.8cm、器高2.2cmの小型品である。2点とも器壁が厚い。

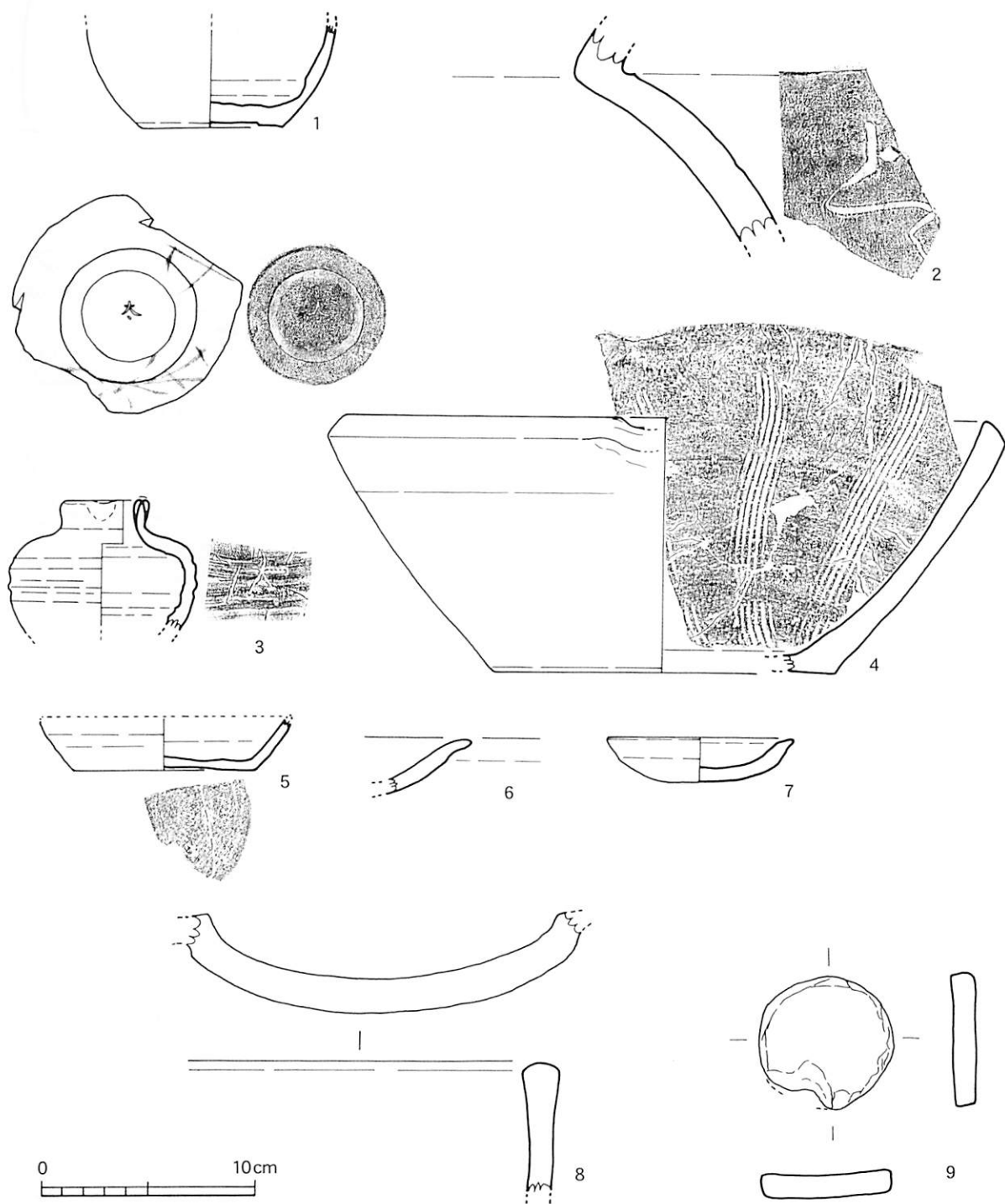
8は瓦質土器の口縁部の大きな破片である。口縁部は直立し、端部は肥厚する。器面は横方向のヘラ磨きされ、口唇部は丸く仕上げられている。口縁部の上面観は、花卉状、または方形の一部が丸く突出する形態と想定される。

9は瓦質土器の破片を敲打、研磨し、6cm×6.2cmの円盤状に仕上げた加工品で、46gある。

B-SK097の時期は、4の15世紀代に編年される備前系陶器の播鉢の良好な資料が出土している。しかし、他の備前系陶器の1・3の小物は16世紀後半に量産されるものであり、2の大甕の破片も16世紀後半に属すると考える。さらに、6・7の京都系土師器も16世紀後葉から末葉に編年されるものである。こうしたことから、16世紀後葉から末葉の時期と考える。



第3-82図 B-SK097実測図



第3-83图 B-SK097出土遺物実測図

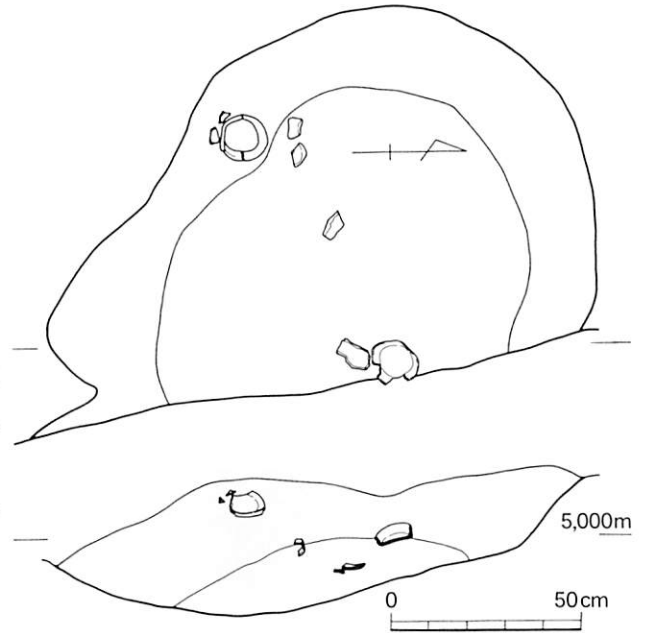
第2節 遺構と遺物

B-SK 098 (第3-84図)

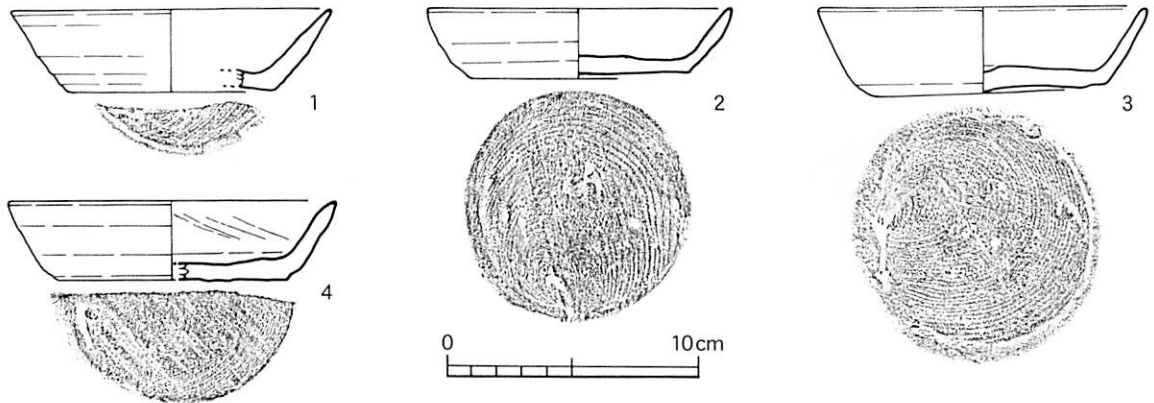
B-SK 098はB-SE009の上面で検出された土坑である。東側の一部はB-SE009を半截して掘り下げた際に失われた。遺構上面の規模は、南北1.4m、東西1m以上で、皿状に窪み、南東部が最深であるが、検出面から約20cmである。遺構内からは第3-85図に図示したロクロ成形による在地系土師質土器が、埋まっていく途中で廃棄された状態で検出された。

第3-85図1は口径12.6cm、底径8.4cm、器高3.3cmで、口縁部は底部近くの器壁が厚く、口縁端部にかけて尖るように立ち上がる。2は口径12.2cm、底径約8.8cm、器高2.7cmで、口縁部の器壁は、底部近くが薄く、上位が厚い。3は口径13.1cm、底径9.3cm、器高3.4cmで、口縁部の器壁は、ほぼ均一である。4は口径13cm、底径9.4cm、器高3.2cmで、口縁部の形態は、端部がやや外反する。底部にはスタレ状圧痕が付く。

B-SK 098の時期は14世紀中葉から後葉と考える。



第3-84図 B-SK098実測図



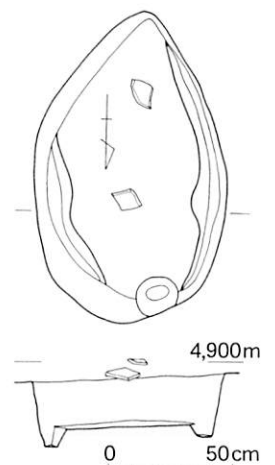
第3-85図 B-SK098出土遺物実測図

B-SK 100 (第3-86図)

B-SK 100は調査区の南、L-46区の南西隅で検出された土坑である。南北約1.2m、東西約0.8mの楕円形をしている。北端部には直径18cm深さ25cmの柱穴状の掘り込みと重複する。また、遺構の深さは、検出面から約20cmで、底面は平坦である。底面には、西側と東側に幅10cm、深さ10cm弱の側溝状の溝が付けられている。

遺構内から出土した遺物は、図示していないが、龍泉窯系青磁の小破片、京都系土師器、ロクロ成形による在地系土師質土器、瓦質土器などがわずかに出土している。

以上の状況や出土遺物から、B-SK 100の時期は、14世紀代の遺物を含むものの、京都系土師器が出土していることから、16世紀後葉と考える。



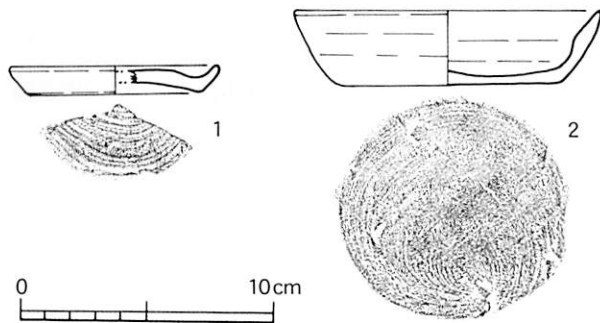
第3-86図 B-SK100実測図

B-SK107 (第3-87図)

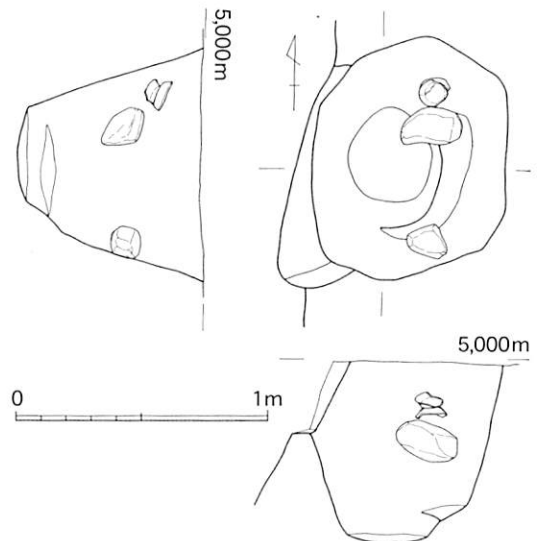
B-SK107はK-45で検出された土坑で、西側をB-SD064から切られる。確認できた規模は、東西約0.8m、南北約1mで、検出面からの深さは約70cmで、東側の壁に小さい段が付き、二段掘り状になる。遺構内からは、人頭大の川原石とともに第3-88図に図示したロクロ成形による在地系土師質土器が出土した。

第3-88図1は口径8.2cm、底径7.2cm、器高1.2cmの皿である。2は坏で、口径12cm、底径8.9cm、器高2.9cmで、口縁部の断面は、底部付近が薄く、中位が厚くなる。

B-SK107の時期は、在地系土師質土器の形態から14世紀中葉から後葉と考える。



第3-88図 B-SK107出土遺物実測図



第3-87図 B-SK107実測図

B-SK113 (第3-89図)

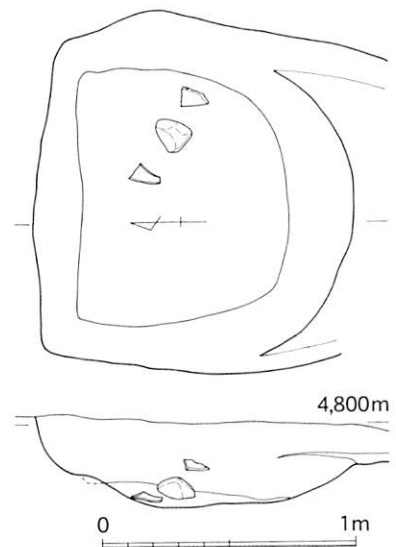
B-SK113はK-45で検出された土坑である。北を底辺にした二等辺三角形の浅い掘り込みの、北隅に掘り込まれた土坑である。規模は、東西1.2m、南北1.2mであるが、半円形となる。底面は中央部が深く約35cmである。

B-SK113から出土した遺物は第3-90図に1点のみ図化した。口径28.8cmで、口縁端部が内側に肥厚し、断面が三角形になる瓦質土器で、防長系挿鉢である。この遺物以外にも、遺構内からは、景德鎮窯系青花の小破片、備前系陶器の破片、京都系土師器などが少量であるが出土している。

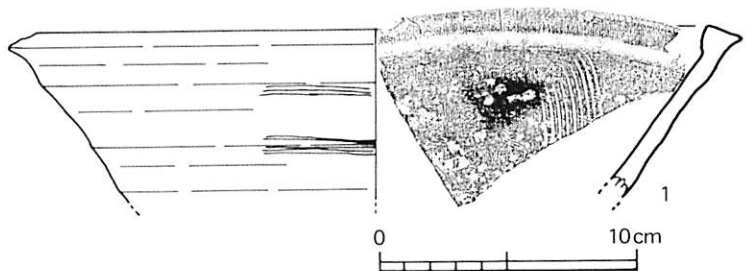
以上の出土遺物の状況から、B-SK113の時期は、16世紀後半と想定する。

B-SK122 (第3-92図)

B-SK122は調査区の西寄り、K-45で検出された土坑である。検出面での規模は東西約0.7m、南北1mの楕円形をしている。遺構内は検出面から30cmの南側で段が検出され、さらに北側を掘り下げると約25cmで底面が検出された。遺構内からは、第3-91図に図示したロク



第3-89図 B-SK113実測図

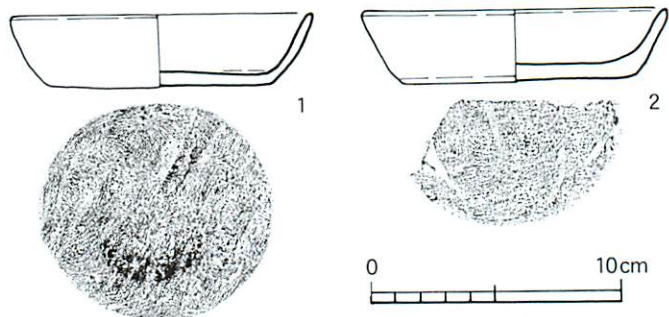


第3-90図 B-SK113出土遺物実測図

防長系挿鉢

第2節 遺構と遺物

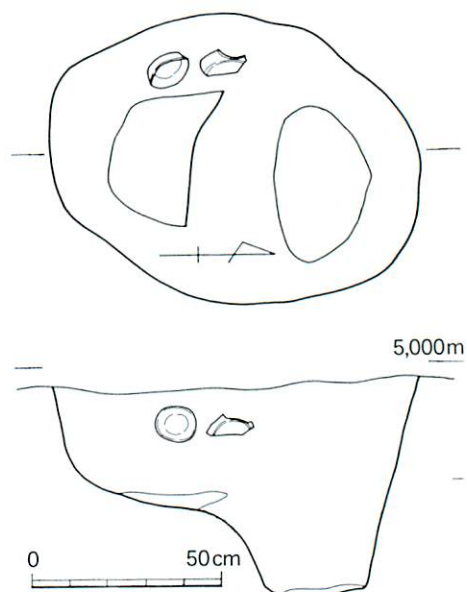
口成形による在地系土師質土器が2点、上部から出土した。この他、小破片であるが、同類の土師質土器や瓦質土器が、遺構の規模の割には多量に出土している。



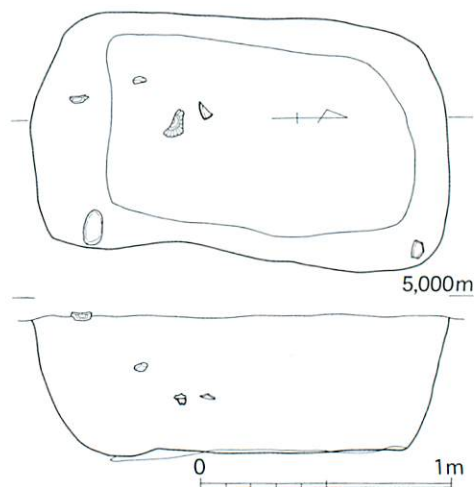
第3-91図 B-SK122出土遺物実測図

第3-91図1は口径11.9cm、底径8.7cm、器高3cmで、底面にスタレ状圧痕が付く。口縁部の形態は、底部近くが比較的薄く、中位が厚い。2は口径12.2cm、底径9.6cm、器高2.8cmである。口縁部は底部近くが厚い。

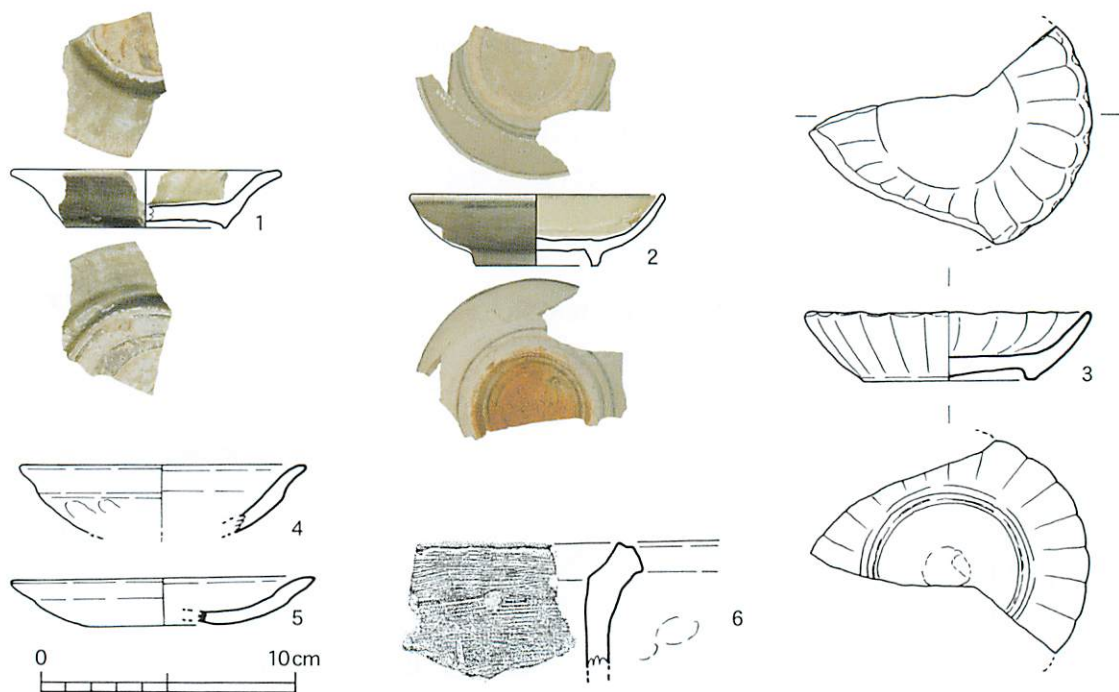
時期は14世紀中葉から後葉と考える。



第3-92図 B-SK122実測図



第3-93図 B-SK124物実測図



第3-94図 B-SK124出土遺物実測図

B-SK124 (第3-93図)

B-SK124はB-SK122の北側、K-44で検出された土坑である。規模は、上面が南北1.6m、東西0.93mの隅丸長方形をしている。深さは検出面から約53cmで、底面は概ね平坦で、南北1.2m、東西0.7mである。遺構の規模は小さいが、内部からは、第3-94図に図示した多様な遺物が出土した。

瀬戸美濃系  
漳州窯系

第3-94図1は瀬戸美濃系陶器で、大きく外反する口縁部は、口径10cm、低い高台が付く底部の径は6cm、器高は2.3cmである。全体に釉がかかる。2は口径10cm、底径5cm、器高2.8cmの漳州窯系青花の皿である。文様は口縁部内外面、底部内外面に圈線のみが入られている。底部の高台の内側は露胎である。この資料以外にも漳州窯系青花片が5点出土している。3は口径11.2cm、碁笥底状になる底径は6.4cm、器高は2.7cmの青磁の菊花皿で、底部外面は蛇の目釉剥ぎがある。4は京都系土師器である。4の口径は11.4cmで、外面に手づくねの痕跡を残す。5は口径12cm、器高1.9cmである。6は口縁部が屈曲する土鍋で、内面は横方向の刷毛目で、外面は撫でで仕上げている。この他、小破片であるが、景德鎮窯系青花、龍泉窯系青磁、備前系陶器、瓦質土器などが出土している。B-SK124の時期は、漳州窯系青花が一定量出土し、京都系土師器が伴うことから16世紀後葉から末葉と考える。

B-SK126 (第3-95図)

B-SK126はK-45で検出された遺構で、B-SD064が西側を切る。遺構を検出した時点ではひとつと想定したが、発掘調査の結果、南北に連続した大・小の二つの土坑から構成されることが判明した。遺構の規模は、南側が大きく南北約1.3m、東西1.6mの方形をしている。壁はほぼ垂直に立ち、平坦な底面までの深さは、検出面から約70cmである。この遺構の北東部に接して、小さな土坑が検出された。その規模は、南北約60cm、東西70cmで、深さは検出面から約35cmである。

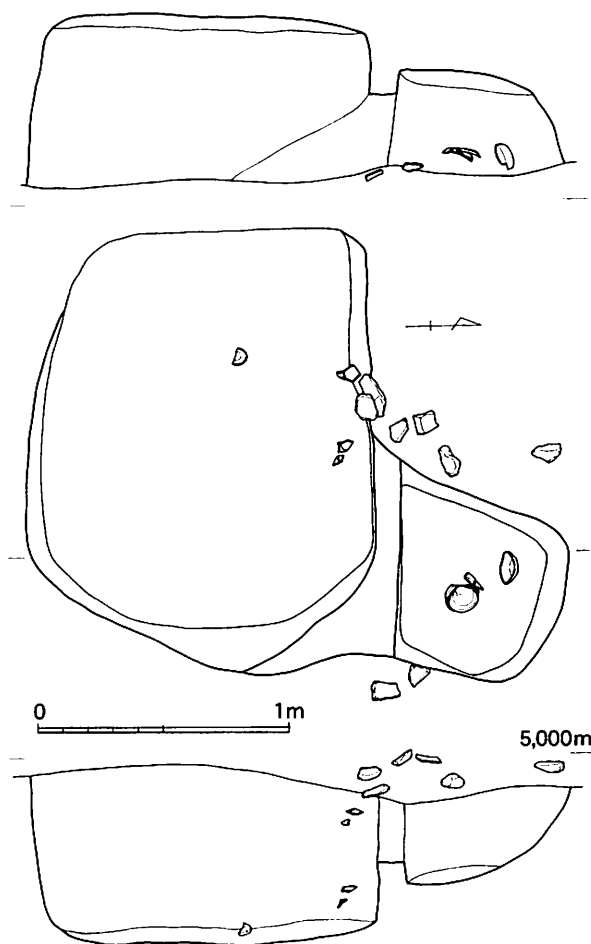
遺構内から出土した主要遺物は、第3-96図に10点を図示した。このうち、3~5は北側の小さい土坑の上面から上位で検出された遺物である。南側の大きな土坑から出土したのはそれ以外の遺物で、1は口径15.8cmの龍泉窯系青磁碗である。外面には鎬蓮弁が施文されている。2は口径9.9cm、底径4.9cm、器高2.2cmの中国産白磁の坏である。口縁部は露胎で、いわゆる口禿となっているが、この部分以外は全面釉がかかっている。

龍泉窯系  
白磁

6・7はいずれも在地系土師質土器に比較すると白色の色調をした、底径5cmの吉備系土師器である。底部には断面逆台形の高台が廻るが、6は高台より下に坏部の底部が突き出ており、器を安定させる役割を果たしていない。

吉備系土師器

8~10は瓦質土器である。8は底部の外



第3-95図 B-SK126実測図



第2節 遺構と遺物

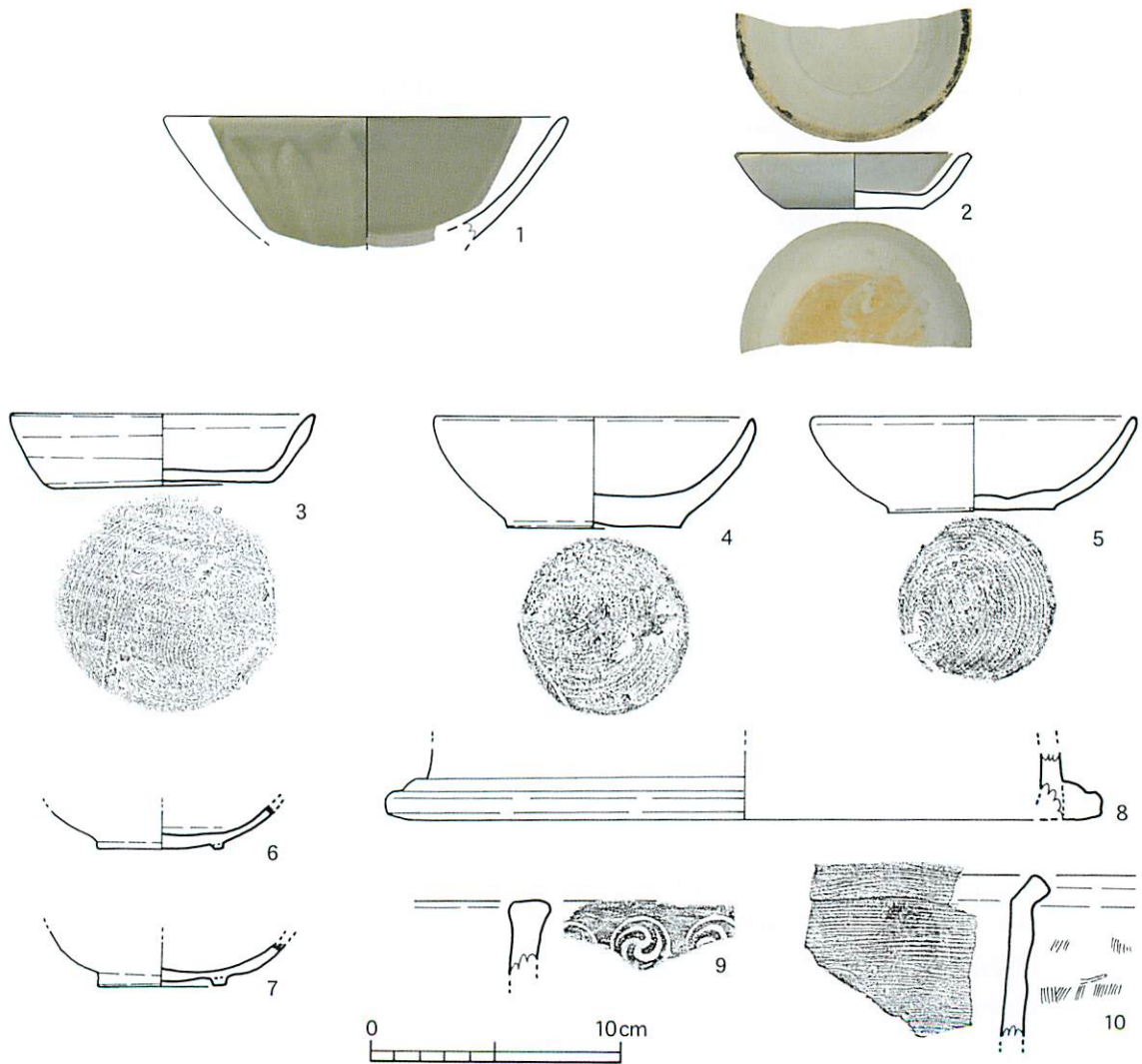
側に装飾的な段を持つ突帯が一条廻る。底部の形状は不明であるが、底径は28.4cmある。胴部はほぼ直立し、タライのような形態が想定される。9は口縁端部が肥厚し、口唇部を平坦に仕上げられ、器面調整は、横方向のヘラ磨きである。外面には直径2cmの三つ巴文のスタンプが連続的に押捺されている。10は口縁部が外反する土鍋である。器面調整は内面が横方向の刷毛目、外面は縦方向の刷毛目を付けた後、横方向の撫でや、指押さえで仕上げている。

北側の小さい土坑とかかわる3～5はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。3は口径12cm、底径9.3cm、器高2.9cmで、口縁部の形態は、底部近くの器壁が薄く、上位が厚くなり、口唇部が尖る。

4は口径12.9cm、底径7cm、器高4.4cmである。底部の器壁が厚く、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部が尖る。5も口径12.9cm、底径6.5cm、器高3.8cmで、口縁部は内湾気味に立ち上がる。3に比較すると、4・5は明らかに底径が小さく、器高が高く異なる器形を呈している。

二つの遺構の時期は、南側が、中国産白磁は白磁皿群で14世紀前半、吉備系土師器は14世紀初頭に編年されており、ほぼその時期が想定できる。

一方小さい北側の土坑は、上面や上位からの出土で、この土坑との関係は希薄な感もするが、土師質土器の器形と組成から14世紀前葉と考える。



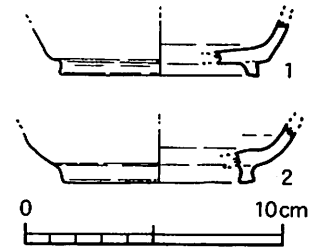
第3-96図 B-SK126出土遺物実測図



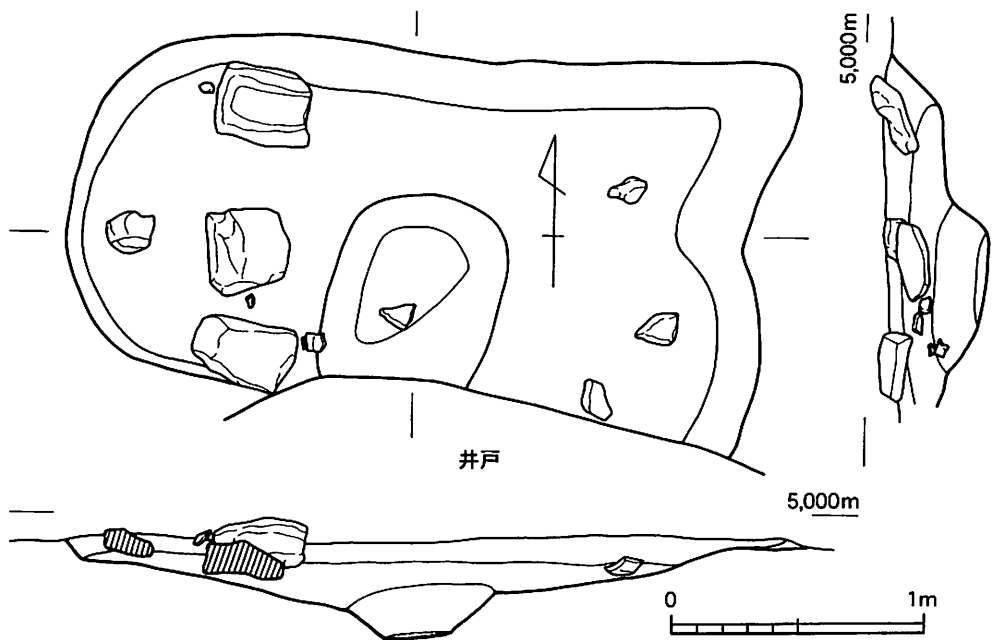
B-SK128 (第3-98図)

B-SK128はK・L-44で検出された土坑で、南側をB-SE010と重複する。遺構の規模は、東西2.7m、南北約1.5mで、検出面からの底面までの深さは約20cmで、中央部にさらに東西60cm、南北90cmで、深さ10数cmの小土坑が掘りこまれている。遺構内の西側には、人頭大の凝灰岩の角礫を3個並べた状態で検出した。

遺構内出土の遺物として第3-97図に2点の8世紀代の高台付きの須恵器碗を图示しているが、龍泉窯系青磁・中国産白磁・京都系土師器・ロクロ成形による在地系土師質土器・東播系須恵質土器など、多時期にわたる遺物が出土している。このため、遺構の時期は、最新の京都系土師器の16世紀後葉とする。



第3-97図 B-SK128出土遺物実測図



第3-98図 B-SK128出土遺物実測図

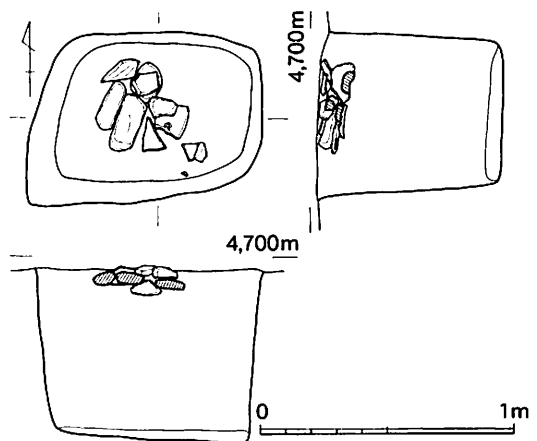
B-SK131 (第3-99図)

B-SK131はK-45区で検出された土坑である。検出面での遺構の規模は東西約1m、南北約0.7mで、隅丸方形をしている。深さは検出面から約70cmで、底面はほぼ平坦で方形である。底面から立ち上がる壁は垂直に近い。遺構内からは、上面中央で扁平な礫を敷き詰めるように配した集石が検出された。

土鍋

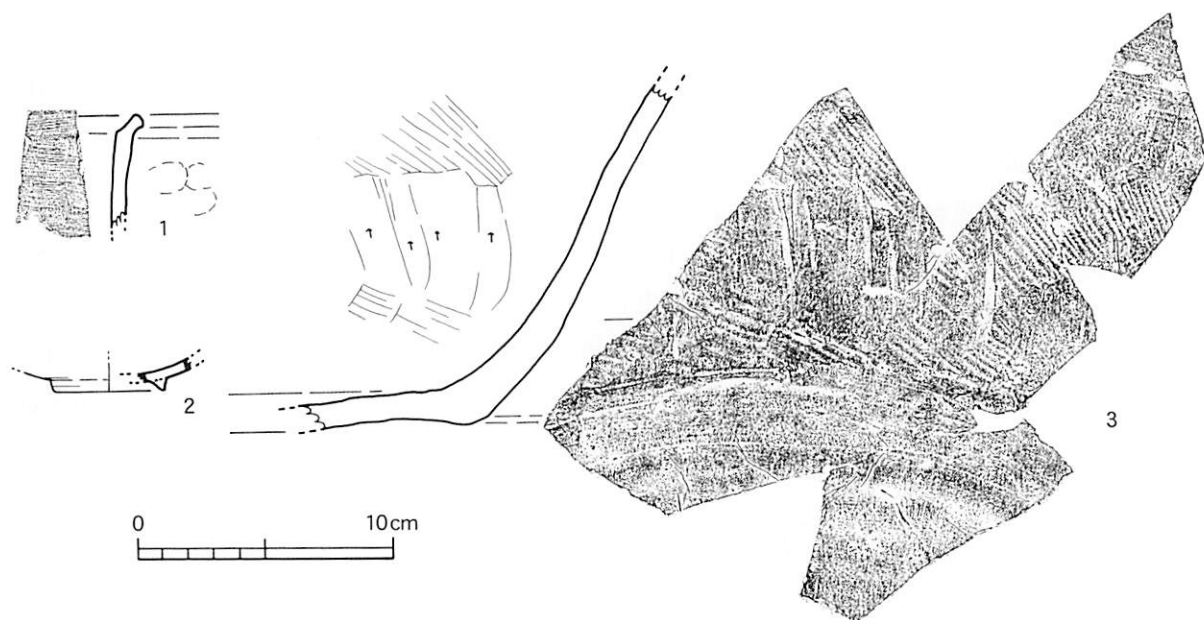
吉備系土師器

遺構内から出土した主要遺物は第3-100図に图示した。1は口縁部が外反する土鍋である。内面は横方向の刷毛目で、外面は撫でや指押さへの痕跡が残る。2は底径4.4cmの吉備系土師器である。高台は断面三角形である。3は常滑系陶器の甕の底部と考える。内外面刷毛目で器面調整されている。



第3-99図 B-SK131実測図

B-SK131の時期は吉備系土師器などから14世紀前半代と考える。

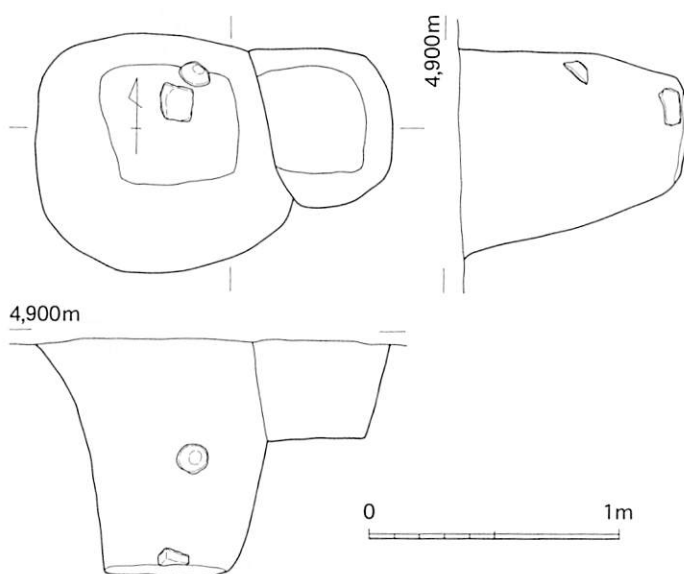


第3-100図 B-SK126出土遺物実測図

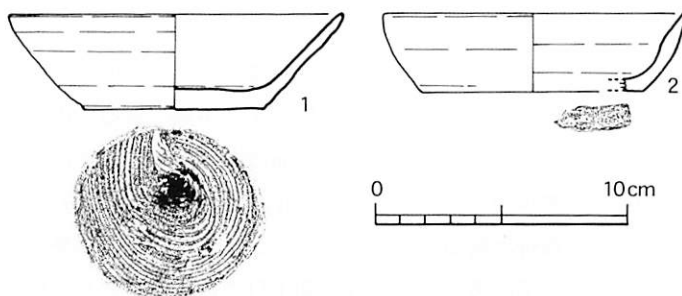
B-SK132 (第3-101図)

B-SK132はB-SK131の東側で隣接して検出された。遺構は切り合う二つの土坑で構成される。東側の規模は60cm×60cmで、深さは40cmである。西側が深く東西1m、南北1mの方形をしており、深さも約1mを測る。底面は50cm×50cmで方形をしている。

遺構内からは第3-102図に図示したが、1は遺構中位から出土したもので、口径13.2cm、底径7cm、器高3.9cmで、口縁部は「ハ」の字状に開き、器壁は均一である。2は口径12cm、底径8.7cm、器高3.1cmで、口縁部は、中位の器壁が厚く、先端は尖る。時期は15世紀中葉であろうか。



第3-101図 B-SK132実測図

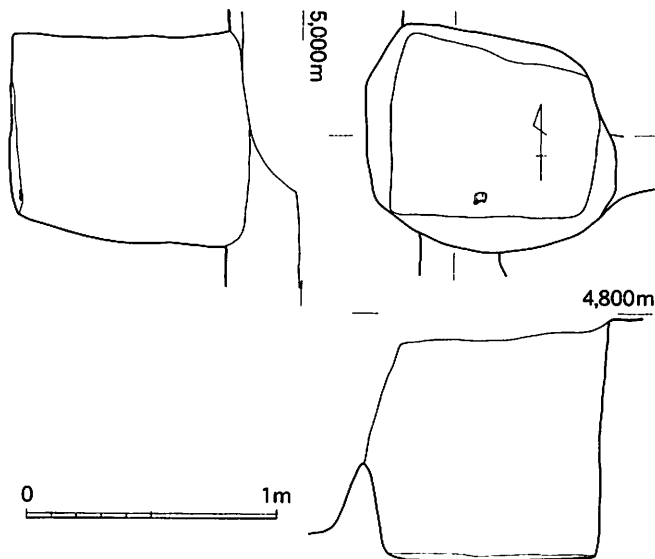


第3-102図 B-SK132出土遺物実測図

B-SK134 (第3-103図)

B-SK134は西側をB-SD064で切られた状態で検出された。規模は、南北0.9m、東西1mで方形をし、深さは検出面から約1mである。底面も方形をしており、平坦である。壁はほぼ垂直に立つ。

遺構内からは小破片であるが、龍泉窯系青磁、備前系陶器、ロクロ成形による在地系土師質土器などが出土しており、時期は14世紀代と考える。

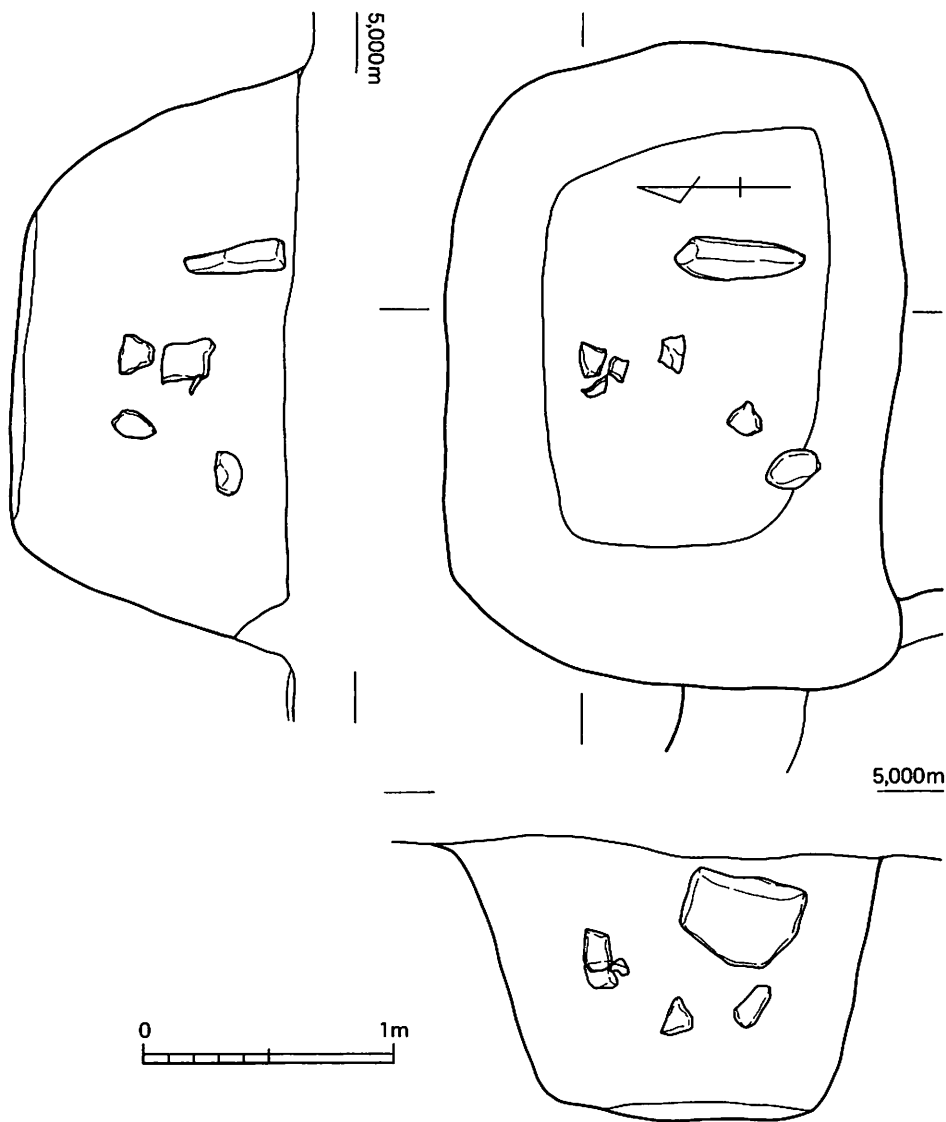


第3-103図 B-SK134実測図

B-SK145 (第3-104図)

B-SK145はL-46区で検出された土坑である。東西約1.3m、南北約0.9mの隅丸長方形で、深さは約50cmである。底面は東西約80cm、南北50cmの隅丸長方形である。遺構内からは東寄りて扁平な川原石が意図的に立てられて状態で検出した。また、遺物の出土は備前系陶器と考えられる破片と土師質土器が1点出土したのみで、極めて少ない。

B-SK145の時期は決定できる遺物の出土がなかったため、不明である。



第3-104図 B-SK145実測図

第2節 遺構と遺物

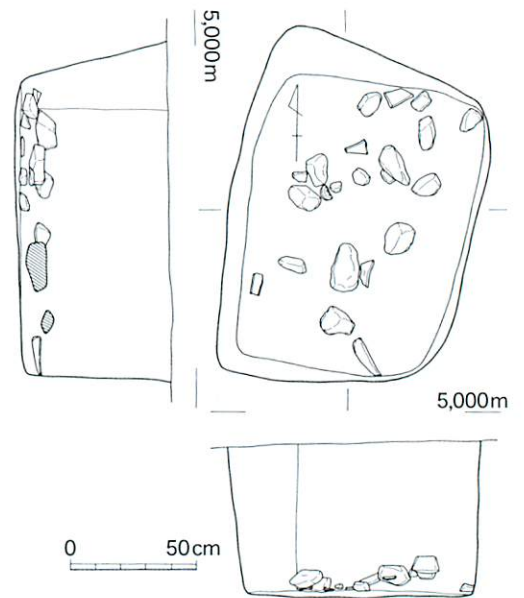
B-SK146 (第3-105図)

B-SK146はL-43区で検出した土坑である。検出面での規模は南北約1.4m、東西約1mで、深さは約60cmである。底面は平坦で、その規模は南北1.1m、東西約0.9mで、隅丸方形である。底面近くからは拳大の礫が投棄された状態で検出された。周囲の壁は北側がやや傾斜が緩いものの、ほとんど垂直に立ち上がる。

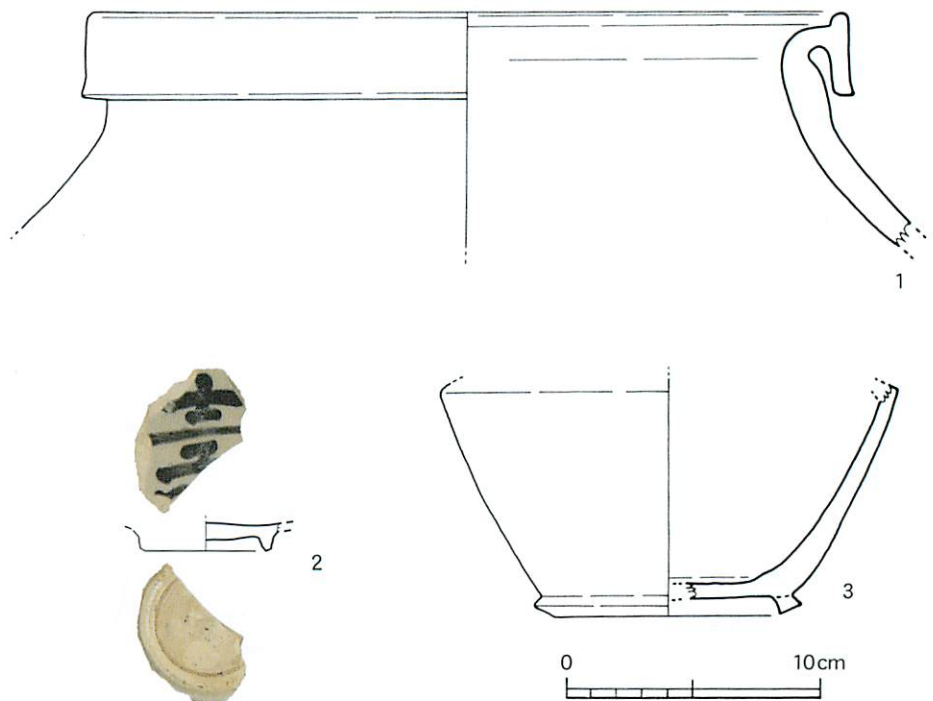
常滑系  
漳州窯系

遺構内から出土した遺物は第3-106図に図示した。1は口径30.3cmの常滑系陶器の壺で、特徴的な縁帯の幅は3.5cmである。2は底径5cmの漳州窯系青花碗で、見込みに「壽」の文字が書かれている。漳州窯系青花片はこの他5点出土している。3は8世紀後半の須恵器で短頸壺と考えられる。この他、図化していないが、京都系土師器片や備前系陶器片が出土している。

以上の状況から、B-SK146の時期は16世紀後葉から末葉と考える。



第3-105図 B-SK146実測図



第3-106図 B-SK146出土遺物実測図

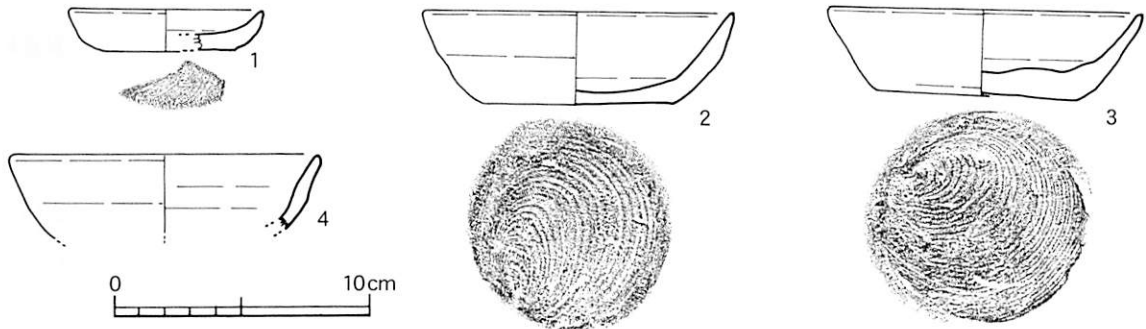
B-SK147 (第3-107図)

B-SK147はL-42・43区で検出された不定形な土坑である。検出面の規模は長軸方向に1.8m、短軸方向が約1mであったが、掘り下げた結果底面は不揃いで、南部は浅く10数cmであったが、北部は東から約35cm、60cm、30cmで、数度の掘り返しが行われた可能性が強い。

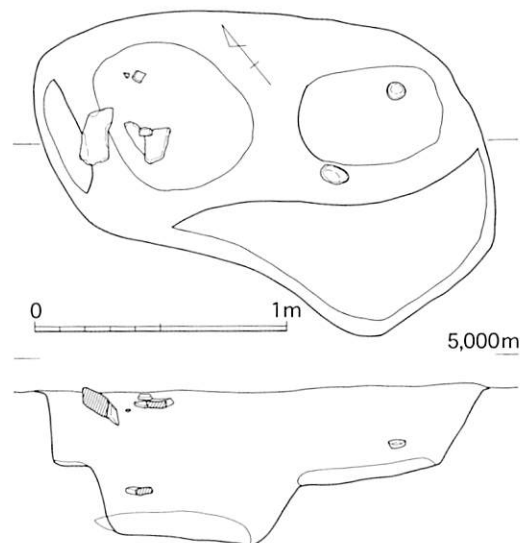
遺構内からは西側の上位で凝灰岩の角礫と扁平な川原石が出土したほか、東側の下位でロクロ成形による在地系土師質土器の坏が2点完形品で流れ込んだ状態で検出された。これらを含め、出土した主要な遺物は第3-108図に図示した。

図示した遺物はすべてロクロ成形による在地系土師質土器である。1は口径7.8cm、底径5cm、器高1.6cmの皿である。底部の器壁が厚く、口縁部は端部が尖るように引き出して、形成している。2は口径12.3cm、底径8cm、器高3.7cmの坏である。底部の器壁は薄く、口縁部は中位から下位にかけて器壁を厚くし、口唇部は尖っている。3は口径12.5cm、底径8.4cm、器高は歪なため、3.3cmから3.6cmを測る。底部の器壁は2に比較すると厚く、そのまま口縁部は端部に向けて尖るように粘土を引き出している。このため、底部近くの器壁が一番厚い。4は口径12.4cmの坏である。口縁部は横撫でで、断面はほぼ均一である。

以上の他、B-SK147からは、漳州窯系青花が2点、備前系陶器3点、吉備系土師器と思われる白色系土師質土器2点、瓦質土器2点が出土しており、遺物からみると多時期にわたる。遺構を検出した状況を見ても、底面が不揃いで数度にわたる掘り返しが行われたとしたら、こうした遺物相も理解できる。ただ、完形品の第3-108図2・3が出土した北部の約35cm掘り込まれた土坑は、14世紀中葉から後葉と考えられる。



第3-108図 B-SK147出土遺物実測図



第3-107図 B-SK147実測図

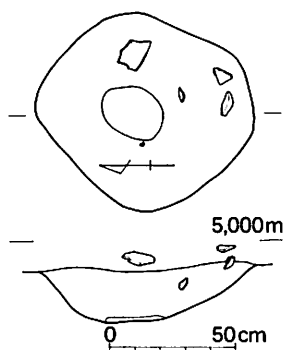
第2節 遺構と遺物

B-SK 153 (第3-109図)

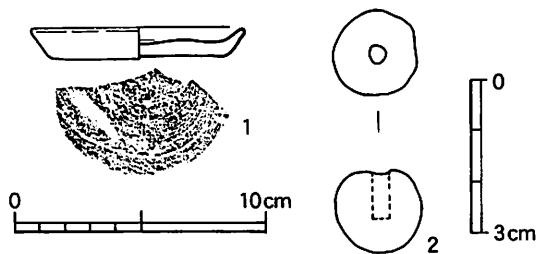
B-SK 153は調査区の北端部、L-42区で検出された土坑である。遺構の規模は検出面で南北85cm、東西78cmの円形状であった。掘り下げを行った結果、約20cmで底面に達し、その規模は直径18cmの小さい円形であった。このため、B-SK 153は断面形が浅い皿状をしている。遺構内からは扁平な掌大の礫が上面から出土した他、ロクロ成形による在地系土師質土器や瓦質土器の小片、銅銭が出土した。

第3-110図に図示した遺物はその代表である。1は口径8.6cm、底径6.8cm、器高1.2cmの皿である。土製玉 2は土製の直径1.7cmの玉状の製品である。一ヶ所に直径3mm、深さ9mmの穴を開けているが、貫通はしていない。第3-111図は「開」「元」「寶」が判読でき、621年(唐)初鑄の「開元通寶」と考えられる銅銭である。銅銭

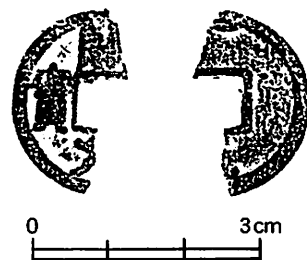
B-SK 153の時期を明確に決定づける良好な資料は出土していない。しかし、小片であるがロクロ成形による在地系土師質土器が一定量出土していることから、14世紀代と考える。



第3-109図 B-SK153実測図



第3-110図 B-SK153出土遺物実測図

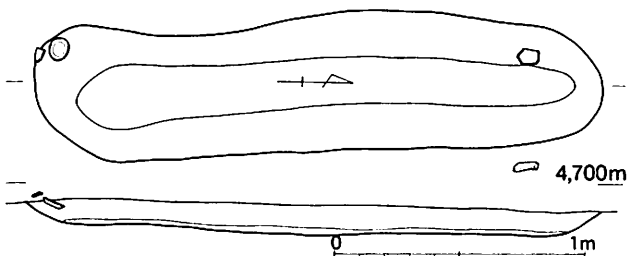


第3-111図 B-SK153出土銅銭実測図

B-SK 157 (第3-112図)

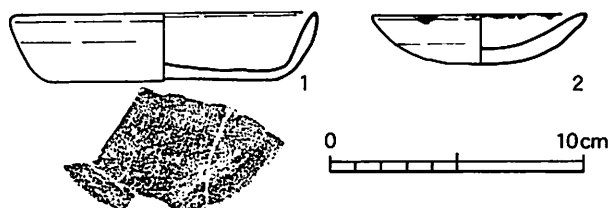
B-SK 157はK-43区で、B-SD 064の東側上面に沿って検出された南北に細長い土坑である。長さは約2.3m、幅0.55mの規模で、底面までの深さは10数cmである。また、底面は長さ2.2m、幅20cmで狭く、横断面は皿状になる。遺構内からは南隅の壁の斜面に沿って、京都系土師器の完形品が1点出土した。この他、小破片であるが景德鎮窯系青花、龍泉窯系青磁、備前系陶器、ロクロ成形による在地系土師質土器が出土している。第3-113図に図示したのはその代表である。

1の量器は口径12.2cm、底径9.1cm、器高2.7cmで、口縁部の形態は、底周辺が薄く、器壁は中位が厚くなり、断面形は紡錘形になり、端部は尖る。2は非ロクロ系である京都系土師器である。口径は5.6cmで、器高は1.4cmである。この京都系土師器は、中世大友城下町跡出土の中でも、小型に属する。また、器壁も厚い。



第3-112図 B-SK157実測図

B-SK 157の時期は、龍泉窯系青磁、ロクロ成形による在地系土師質土器が出土しているが、京都系土師器の完形品が良好な状態で出土していることから、その時期と考える。またB-SD 064との切り合い状態や京都系土師器の形態などから、16世紀末葉と考える。



第3-113図 B-SK157出土遺物実測図

B-SK 161 (第3-114図)

B-SK 161はK-43区で検出された円形の土坑であるが、東北側の壁は削平されている。残された遺構の規模は、南北約1.4m、東西約1.5mのほぼ円形を呈する。深さは約10数cmで、底面の東北部は削平され、残された壁は緩い斜面である。底面の残りの規模は直径約1m程度の円形で、遺構の断面形は浅い皿状をしている。

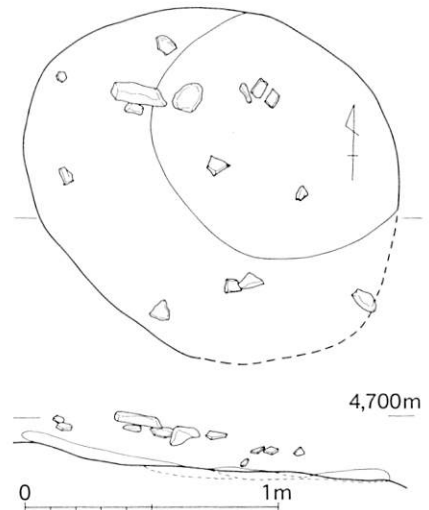
瀬戸美濃系

遺構内からは、龍泉窯系青磁、瀬戸美濃系陶器、ロクロ成形による在地系土師質土器、瓦質土器などが出土している。第3-115図に図示した3点はその代表的な遺物である。1は瀬戸美濃系陶器の小皿で、法量は口径3.1cm、底径3.0cm、器高0.6cmである。器壁は薄く、全体に薄く釉がかかっている。2は口縁部が外反するタイプの土鍋である。内面と口唇部に横方向の刷毛目が見られ、外面は撫で仕上げである。

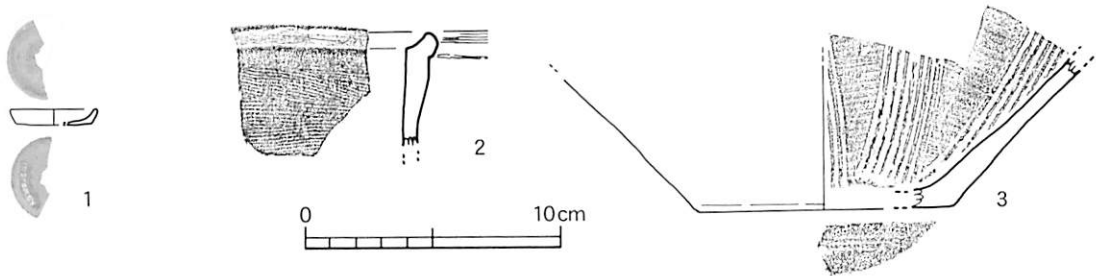
防長系挿鉢

3は底径10.2cmの瓦質土器の挿鉢である。底部の破片であるが、挿り目は、8本の櫛歯状工具で口縁部に対し直角に入れられており、防長系挿鉢と考える。

B-SK 161の時期は、遺構内から16世紀的な遺物である中国産青花や、京都系土師器、斜目挿り目の備前系陶器が出土しておらず、ロクロ成形による在地系土師質土器が一定量出土していることから、14世紀代と考える。



第3-114図 B-SK161実測図



第3-115図 B-SK161出土遺物実測図

B-SK 164 (第3-116図)

B-SK 164はK-43区で検出された小型の土坑である。検出面での規模は、長軸方向が約70cm、短軸方向が45cmの楕円形をしている。検出面から底面までの深さは約15cmで、底面の規模は長軸方向に50cm、短軸方向に約30cmで、平坦であった。

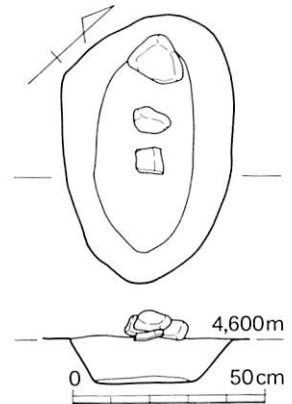
遺構内から遺物は出土せず、上面で拳大の川原石が3点並んで出土したのみである。このため、遺構の時期を想定することは出来ない。

B-SK 170 (第3-117図)

B-SK 170は調査区の西北隅、K-42区で検出した土坑である。遺構検出まで整地層が厚く、図示した遺構図は下部の状況と考えられる。確認出来た遺構の規模は、南北約2.5m、東西約1.2mで、南北に長い隅丸方形である。検出面から底面までの深さは10数cmで、規模は南北1.3m、東西0.7mである。底面には北側に直径30cm、深さ20cm、南側に直径45cm、深さ50cmの柱穴状の掘り込みがある。

常滑系

遺構内からは常滑系陶器や瓦質土器が出土している。第3-118図に図示したのはその代表である。1は常滑系陶器の壺で、口縁部の縁帯の幅



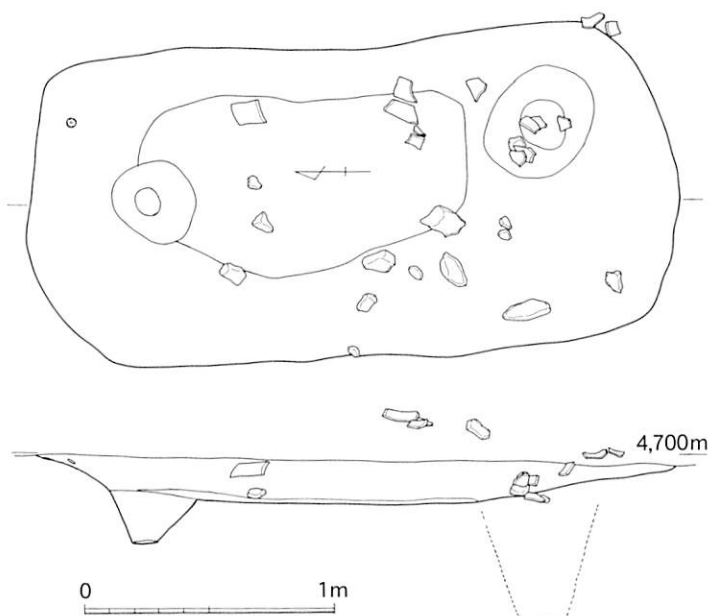
第3-116図 B-SK164実測図



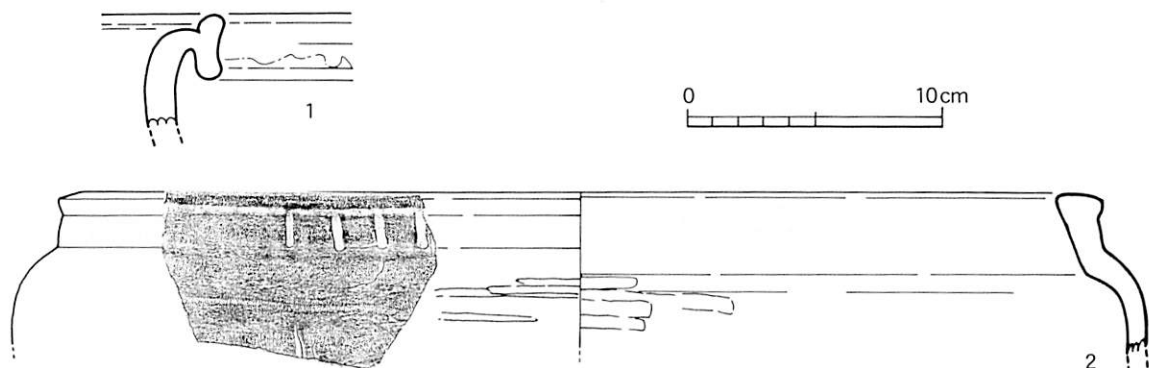
第2節 遺構と遺物

は2.7cmである。外面には自然釉がかかる。2は口径41.4cmの瓦質土器の鉢である。この鉢と同類の資料はB-SK022・B-SK096からも出土している。内湾する胴部に直立する口縁部が付き頸部を形成し、口縁端部は肥厚する。頸部外面にはヘラ描きによる刻目が4ヶ所以上の単位で付く。

B-SK170の時期は、常滑系陶器の壺は13世紀に比定できるが、他に決定できる遺物の出土がないため保留する。



第3-117図 B-SK170実測図

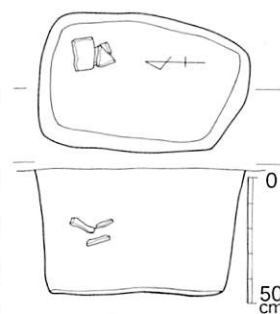


第3-118図 B-SK170出土遺物実測図

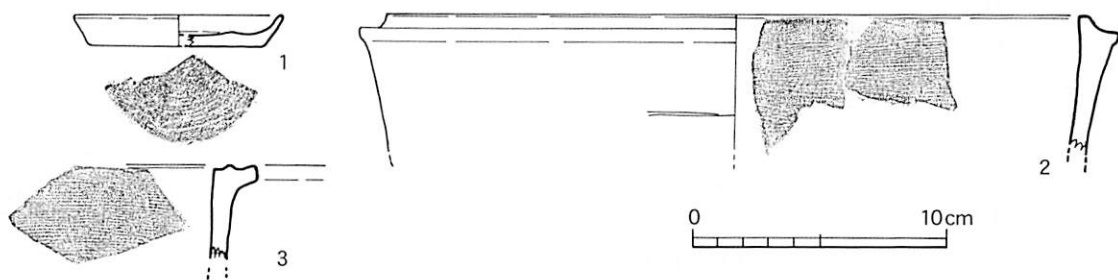
B-SK177 (第3-119図)

B-SK177は、L-43区で検出された土坑で、検出面での規模は、南北83cm、東西55cmを測り、歪な方形を呈する。検出面からの深さは50cmで、底面は平坦である。壁は全面ほぼ垂直に立つ。

遺構内から出土した主要遺物は第3-120図に3点を図示した。1は口クロ成形による在り系土師質土器の皿で、口径8.2cm、底径7cm、器高1.3cmである。2は瓦質土器であるが、口径28cmで突帯の下位が肥厚する鍔付の土鍋と考える。内外面横方向にヘラ磨きされている。3も瓦質土器



第3-119図 B-SK177実測図



第3-120図 B-SK177出土遺物実測図

であるが、口縁部が外側に直角に外反する。内面は横方向の刷毛目調整で、外面は撫で仕上げである。土鍋であろうか。

この他、景德鎮窯系青花片3点、龍泉窯系青磁1点、瀬戸美濃系陶器片1点、ロクロ成形による在地系土師質土器40点などが出土している。

B-SK177の時期は、龍泉窯系青磁1点やロクロ成形による在地系土師質土器40点などが出土し、14世紀代とも考えられるが、景德鎮窯系青花片3点出土していることから、16世紀後半代とする。

**B-SK178 (第3-121図)**

B-SK178は、K・L-42で検出された土坑である。検出面での規模は、南北約80cm、東西約70cmを測り、楕円形を呈する。検出面からの深さは75cmで、底面の規模南北55cm、東西42cmで平坦である。壁は全面ほぼ垂直に立つ。

遺構内からは、遺物の出土は少なく、ロクロ成形による在地系土師質土器や瓦質土器、吉備系土師器と想定される白色系の土器片が出土したに留まる。このため、遺構の時期を決定する良好な資料に欠けるが、在地系土師質土器の出土で、14世紀代と考える。

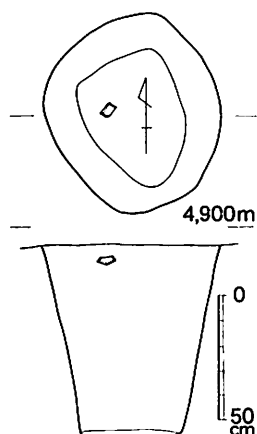
**B-SK179 (第3-122図)**

B-SK179は、L-42で検出された土坑である。検出面での規模は、南北約65cm、東西約75cmを測り、緩い方形を呈する。検出面からの深さは57cmで、底面の規模南北50cm、東西55cmで西隅が低く、緩く傾斜する。壁は全面ほぼ垂直に立つ。

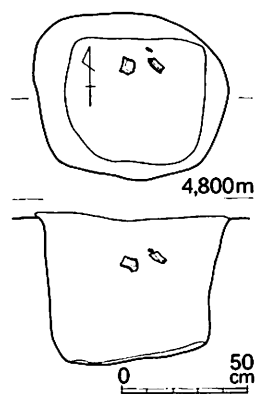
東播系

遺構内から出土した主要遺物は第3-123図に東播系須恵質土器を図示した。口径は28.3cmで、口縁端部が肥厚し、断面が三角形を呈する。器面調整は横方向の撫で仕上げである。

この他、常滑系陶器片1点、ロクロ成形による在地系土師質土器、吉備系土師器と推測される白色系土師器が出土しており、B-SK179の時期は、14世紀代と考える。



第3-121図 B-SK178実測図



第3-122図 B-SK179実測図

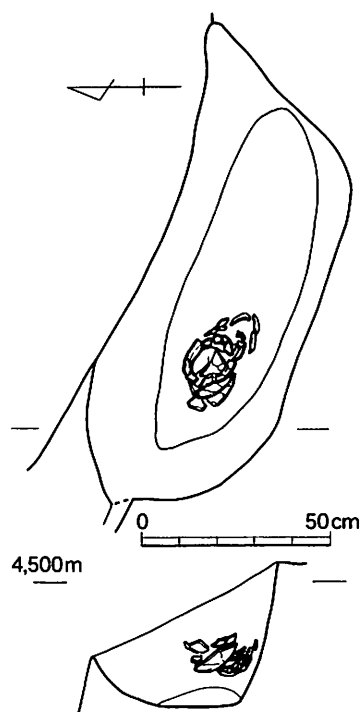


第3-123図 B-SK179出土遺物実測図

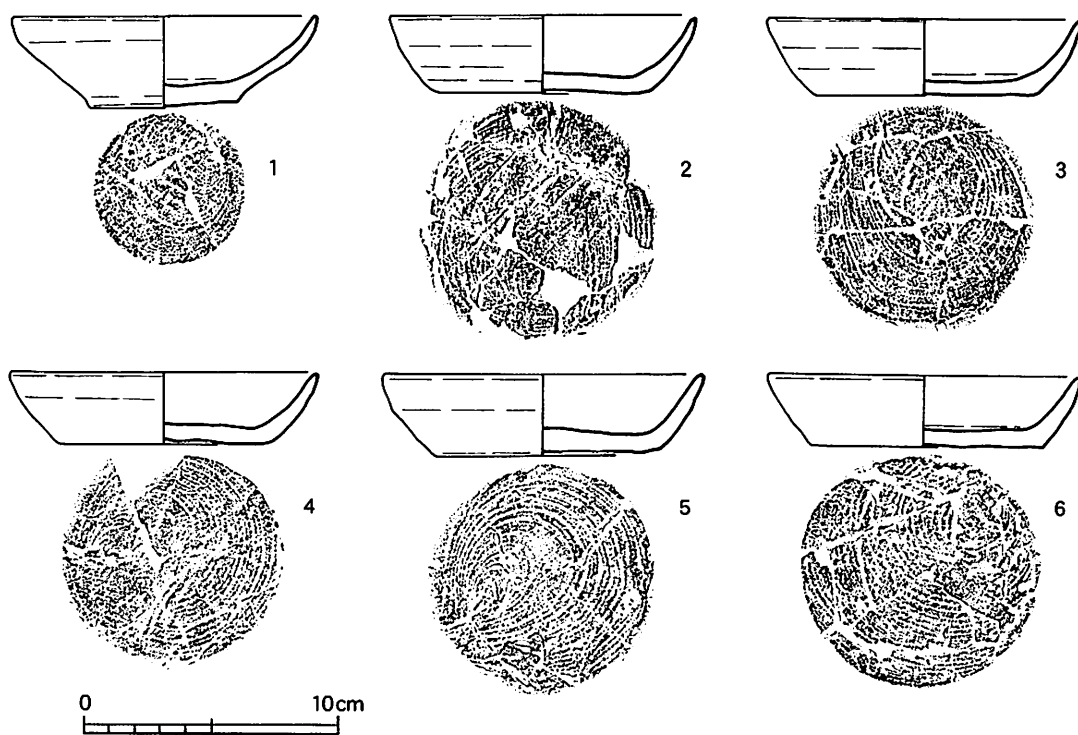
第2節 遺構と遺物

B-SK184 (第3-124図)

B-SK184はB-SE010の南側に沿って検出された。遺構の形態は細長く、その規模は、長軸方向が1.1m、短軸方向が0.45mである。検出面からの深さは約35cmで、底面も長さ96cm、幅28cmである。遺構内西寄り、底面から約10cm離れた状態で、ロクロ成形による在来系土師質土器がまとめて廃棄された状態で検出された。



第3-124図 B-SK184実測図



第3-125図 B-SK184出土遺物実測図

第3-125図に図示した6点が、一括廃棄された遺物である。1は口径12cm、底径6cm、器高3.6cmで、底径は口径の半分であり、口縁部は内湾気味に立ち上がり、碗形の形状をしている。底部の器壁も厚い。これに比べ、2～6は口径に対し底径は約70%で、安定感が高い杯である。2の法量は口径12.3cm、底径8.9cm、器高3.1cmで、3は口径12.4cm、底径8.4cm、器高3.1cmである。4は口径12.2cm、底径8.4cm、器高2.9cmで、5は口径12.9cm、底径8.7cm、器高3.2cmである。そして、6は口径12.3cm、底径9.4cm、器高2.9cmである。口縁部の形態は、底部周辺の器壁を厚くし、口縁端部が尖るように成形されている。この他、遺構内からは吉備系土師器と思われる薄手の白色系の土師器が出土している。

B-SK184の時期は出土した在地系土師質土器の形態から、14世紀中葉から後葉と考える。

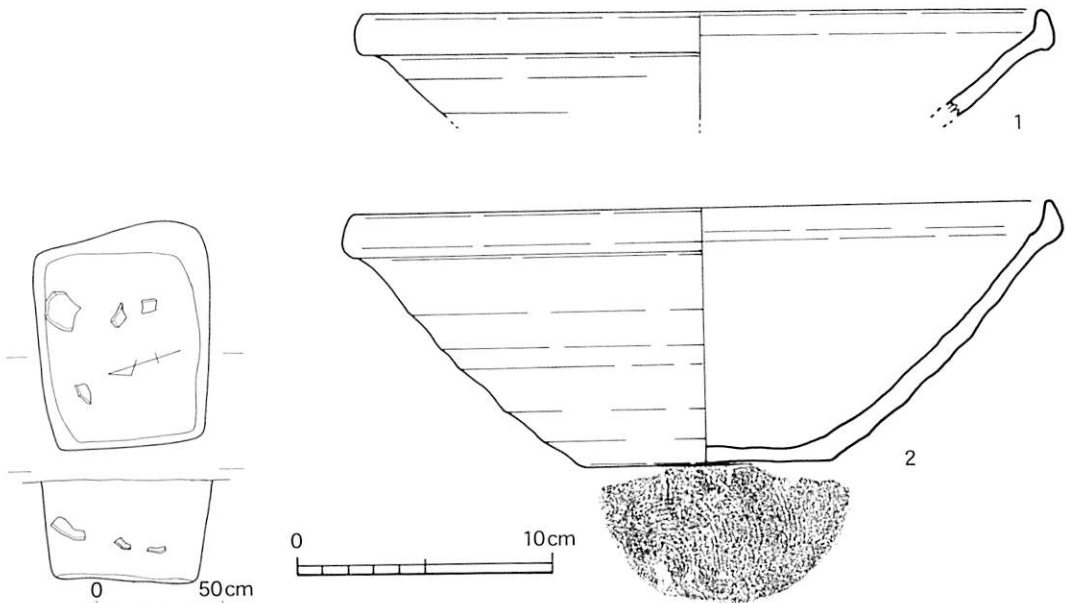
B-SK187 (第3-126図)

B-SK187はL-43区で検出された土坑である。検出面での規模は、南北65cm、東西85cmで、長方形をしている。深さは検出面から約40cmであり、底面は平坦で、規模は南北60cm、東西70cmの長方形となっている。周囲の壁はほぼ垂直に立つ。

東播系

遺構内から出土した主要な遺物は第3-127図に図示した。2点とも東播系須恵質土器の鉢で、1は口径26cmで、器面調整は全面横方向の撫で仕上げである。口縁端部は肥厚する。2は図上で復元され、口径27.4cm、底径9.8cm、器高10.3cmである。口縁端部は肥厚し、断面が三角形になる。器面は全面横方向の撫で、底部には糸切りの痕跡が残る。この他遺構内からは、小破片であるが、龍泉窯系青磁・備前系陶器・ロクロ成形による在地系土師質土器が出土している。

B-SK187の時期は、東播系須恵質土器の口縁部の形態や、その他の出土遺物から14世紀末葉から15世紀前葉と考える。



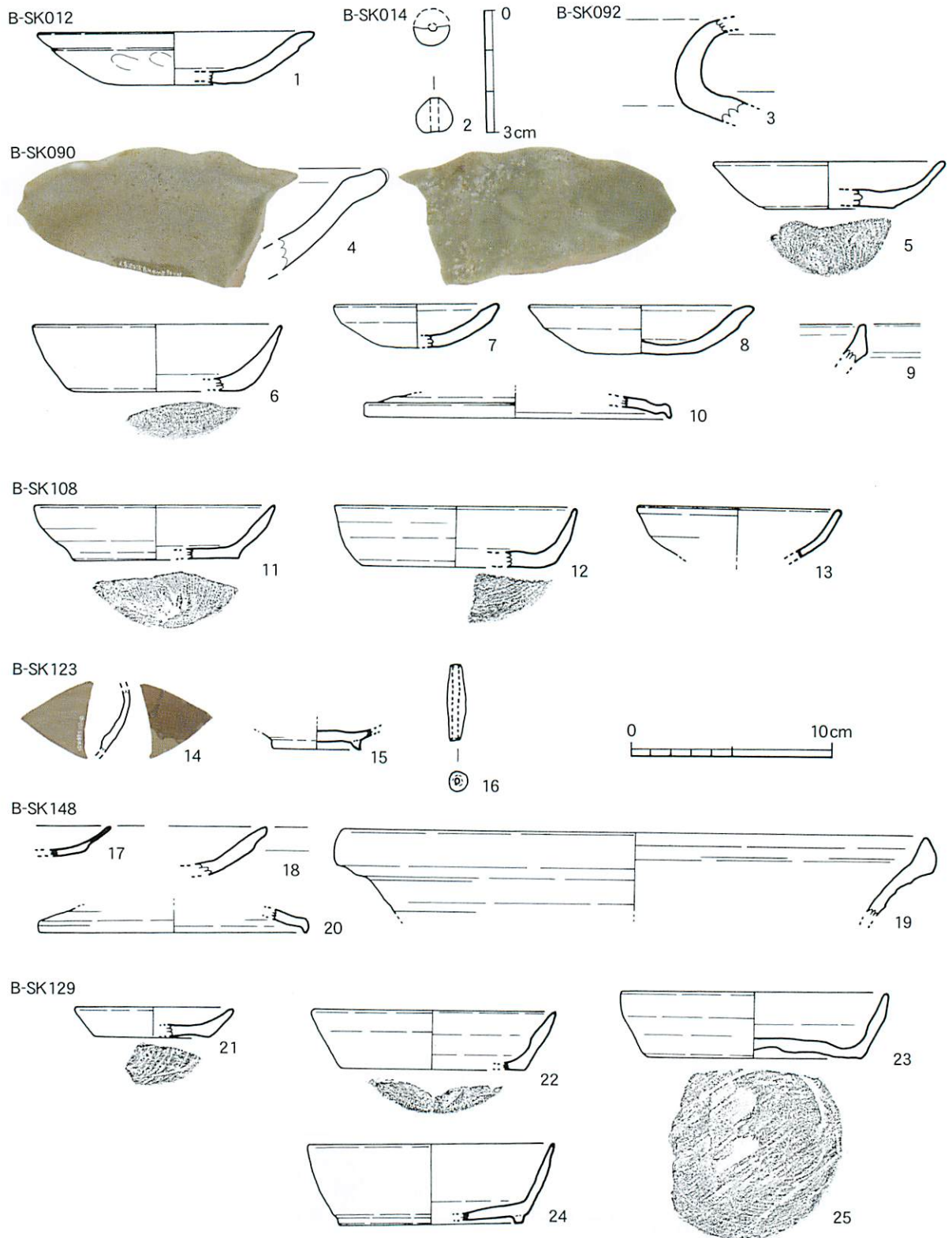
第3-126図 B-SK187実測図

第3-127図 B-SK187出土遺物実測図

その他の土坑出土遺物

府内町跡20次調査B区からは以上の主要な土坑の他、多くの土坑を調査している。ここでは、そうした土坑から出土した遺物を第3-128図と第3-129図に図示し報告する。

B-SK012はK-46区で検出された整地層の一部の可能性のある浅い土坑である。出土遺物は第3-128図1の口径13.8cm、器高2.6cmの京都系土師器が出土した。

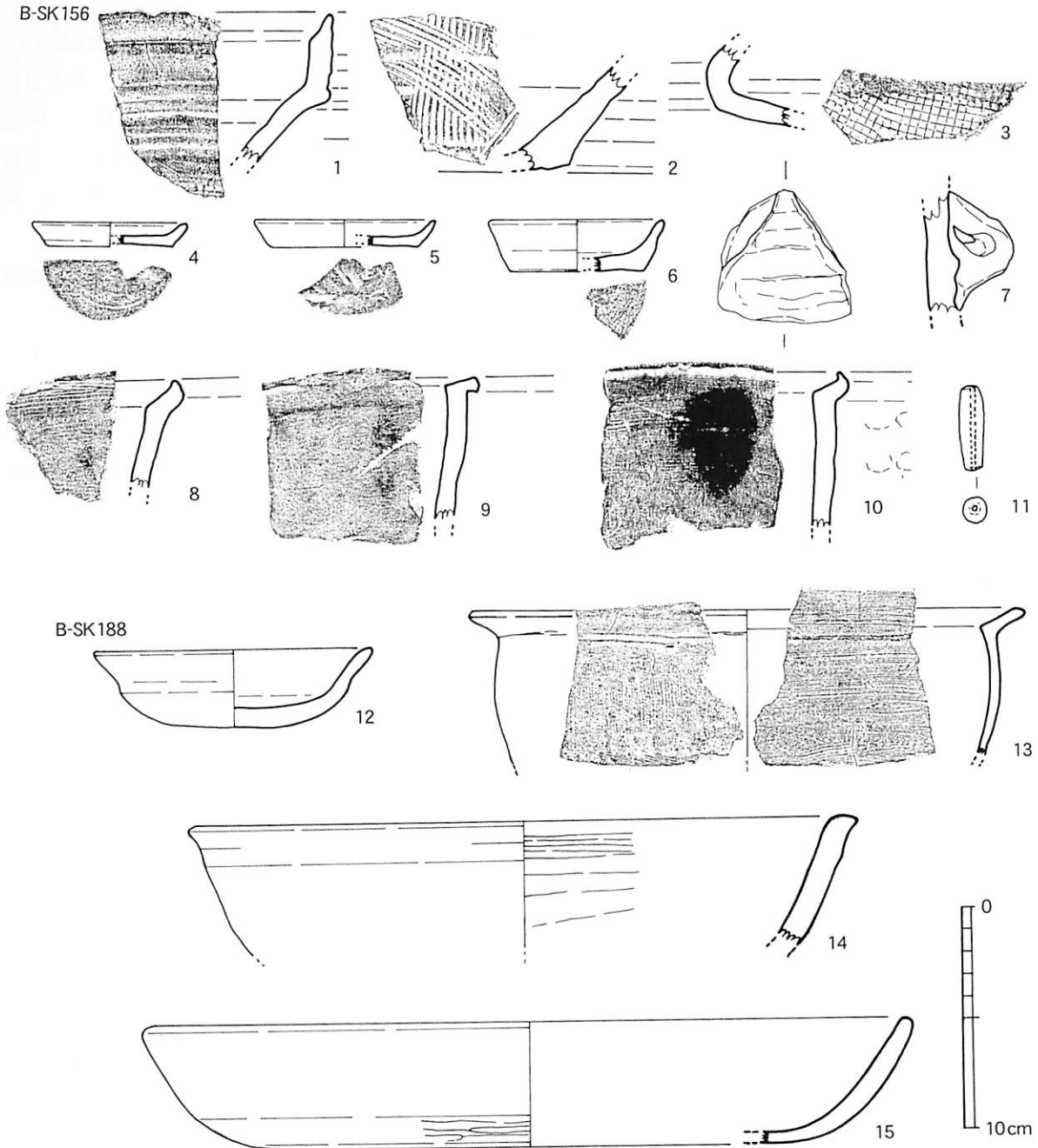


第3-128図 府内町跡20次調査A区土坑出土遺物実測図(1)

これ以外にも小片であるが、龍泉窯系青磁や中国産白磁、備前系陶器が出土しており、16世紀末葉と考える。

**ガラス製の玉** B-SK014はL-43区で検出された小土坑である。2は緑色をした直径9mmのガラス製の玉の半分である。遺物はこの他、ロクロ成形による在地系土師質土器の小破片が出土しているが、時期は不明である。

**龍泉窯系** B-SK090はK-47で検出された土坑で、B-SD064と切り合い関係にある。4は龍泉窯系青磁の大型皿である。5・6はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、5は口径11.6cm、底径6.8cm、器高2.3cmで、6は口径12.5cm、底径9.2cm、器高3.4cmである。7・8は京都系土師器で、7の口径は8.4cm、器高2.2cmで、8は口径11.2cm、器高2.4cmである。9は東播系須恵質土器の鉢の口縁部である。



第3-129図 府内町跡20次調査A区土坑出土遺物実測図(2)

## 第2節 遺構と遺物

10は8世紀後半の坏蓋である。

B-SK090の時期は、14世紀代の遺物も含まれるが、図示した遺物以外にも、景德鎮窯系青花や漳州窯系青花、備前系陶器が出土しており、16世紀後葉から末葉と考える。

B-SK092はL-42区で検出された小土坑である。出土した3は瓦質土器の壺の頸部である。

B-SK108はK-45区で検出された土坑で、図示した11・12はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、法量は11が口径12.1cm、底径8.4cm、器高2.7cmで、口縁部は中位の器壁が厚い。12は口径12.3cm、底径9cm、器高3.1cmで、口縁部の形態は底部近くの器壁が厚く、口唇部に向けて薄くなる。13は口径10.2cmの吉備系土師器である。

B-SK108の時期は、14世紀中葉から末葉と考える。

褐釉陶器 B-SK123はK-45で検出された土坑である。14は薄手の中国産褐釉陶器である。15は底径4.5cmの吉備系土師器の底部である。16は紡錘形の土錘で、長さ4.9cm、最大径9mm、重さ3.4gである。

この土坑の時期は、他にロクロ成形による在地系土師質土器が出土しており、14世紀代と考える。

B-SK129はB-SK123の西側に隣接して検出された同規模の土坑である。21~23はロクロ成形による在地系土師質土器で、21の皿は口径8cm、底径5.6cm、器高1.5cmである。22・23は坏であるが、22の口径12.4cm、底径9.4cm、器高3cmで、23は口径13.4cm、底径11.1cm、器高3.3cmである。口縁部は2点とも底部近くが薄く、中位の器壁が厚い。24は8世紀後半の須恵器の坏で、口径12.5cm、底径9.4cm、器高4cmである。

B-SK129からは図示した以外に京都系土師器がまとめて出土しており、時期は16世紀後葉から末葉と考える。

東播系 B-SK148はK-42区で検出された土坑で、B-SK064・B-SK157と重複している。17は精製粘土を使用した土師器である。18は京都系土師器で、19は口径29.6cmの東播系須恵質土器の鉢である。20は8世紀後半代の須恵器の坏蓋である。

遺構の時期は、図示した遺物以外に、景德鎮窯系青花や京都系土師器が出土しており、16世紀末葉と考える。

備前系 B-SK156はK-42区で検出された遺構であるが、整地層の一部である可能性を持つ。第3-129  
亀山系 図主要な遺物を図示したが、1・2は備前系陶器の播鉢で、斜め摺り目や口縁部に16世紀末葉の特徴を持つ。3は亀山窯系須恵質土器で、肩部は格子目の叩きで調整されている。4~6はロクロ成形による在地系土師質土器で、皿である4・5の法量は、4が口径7.1cm、底径5.8cm、器高1.1cmで、5は口径8.3cm、底径6.9cm、器高1.6cmである。6は口径8.1cm、底径6.7cm、器高2.4cmの小皿である。7は古代の甑の取手である。8~10は口縁部が屈曲する土鍋である。内面は横方向の刷毛目で、外面は撫でと指押さえである。11は土錘で、長さ4cm、最大径1.1cm、重さ5.1gの紡錘形である。

以上の他、京都系土師器も出土していることから、遺構の時期は、1・2の備前系播鉢を含め、16世紀末葉と考える。

B-SK188もK-42区で検出された遺構であるが、整地層の一部である可能性を持つ。第3-129図主要な遺物を図示したが、12は口径12.6cm、底径3.5cmの京都系土師器の坏である。13~15は瓦質土器である。13は口縁部が外反する口径25cmの甗である。器面は口縁部外面が撫でであるが、胴部外面は縦、内面は横方向の刷毛目で調整されている。14は口径30.4cmの鉢である。15も口径34.8cm、底径22.8cm、器高5.8cmのタライ状の鉢で、2点とも器面は横方向のヘラ磨きで調整されている。

以上の他、景德鎮窯系青花や備前系陶器などが出土しており、遺構の時期は、12の備前系播鉢を含め、16世紀末葉と考える。



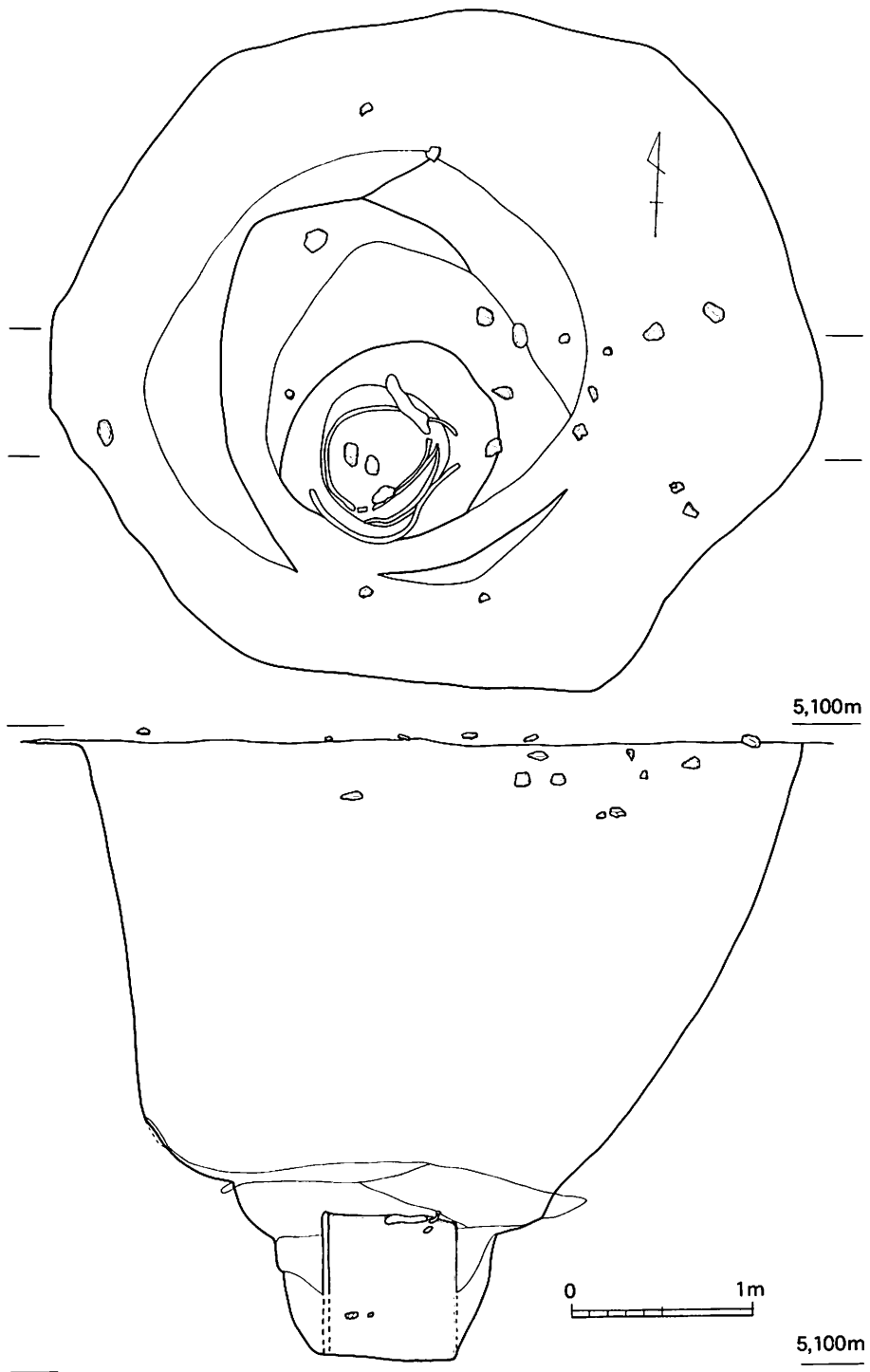
3. 井戸

府内町跡20次調査B区では井戸が5基検出された。その分布は集中する場所はなく、全体に確認できる。時期は大きく16世紀代とそれ以前に分かれる。

B-SE 006  
(第3-130図)

B-SE 006はK・L-45で検出された。検出面は、東西4m、南北3.6mの円形である。これを3.4m掘り下げ、直径60cmの結桶を被せ、水源を確保して井筒とした跡が確認できる。しかし、井筒の大部分は、再度掘り返して撤去したことが、土層で確認できる。

遺構内から出土した主要遺物は、第3-131図に図示した。1は底径4cmの龍泉窯系青磁碗の高台である。2・3は京都系土師器で、2の口径は11.2cm、器高1.9cmの皿であるが、3は口径



龍泉窯系

- 1 10YR 褐色 4/4
- 2 2.5Y 黒褐色 3/2
- 3 10YR 褐色 4/4
- 4 10YR 暗褐色 3/3
- 5 10YR 暗褐色 3/4

第3-130図 B-SE006実測図

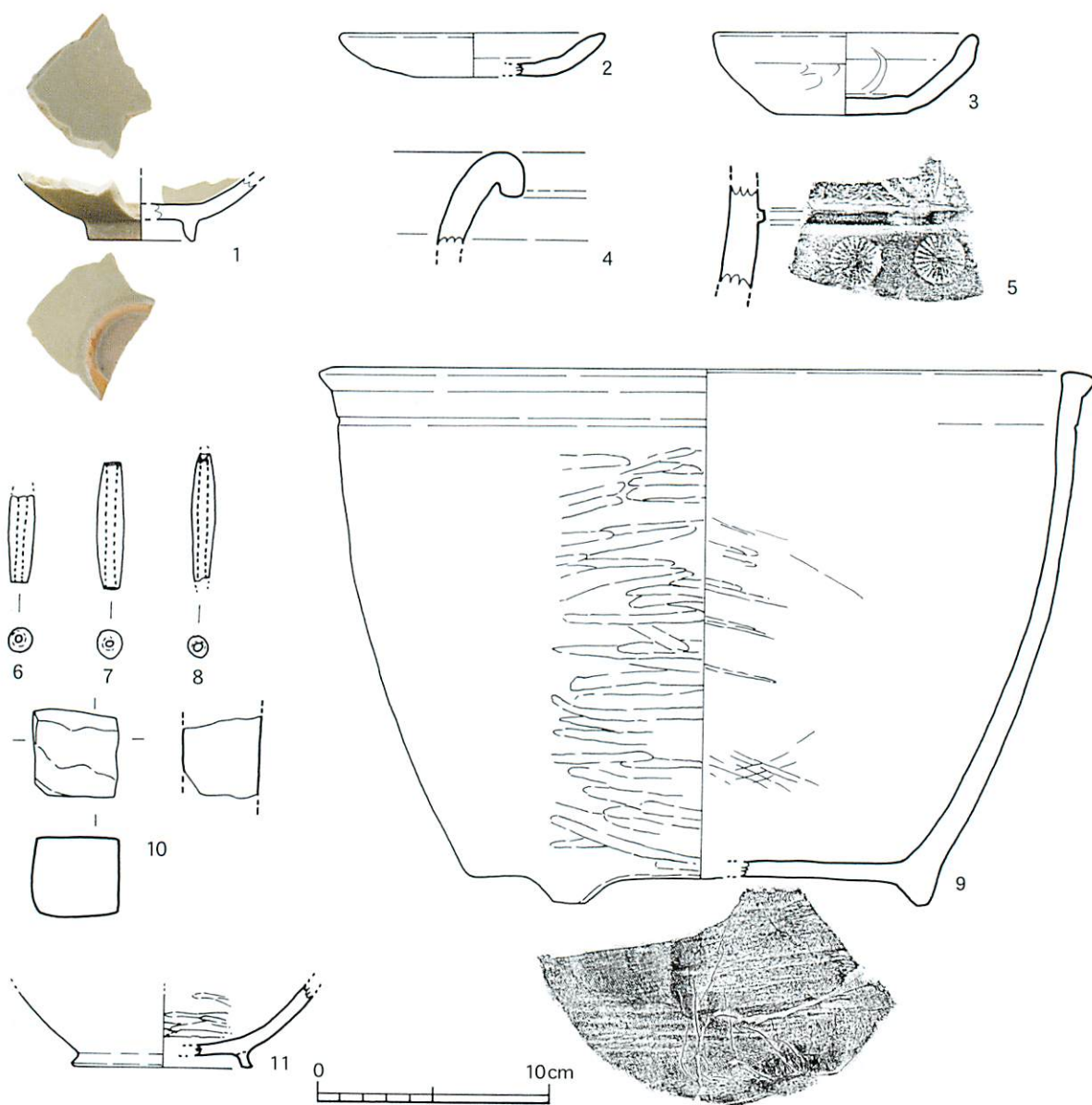
土錘

11.3cm、器高3.5cmの坏である。4は備前系陶器と考えられる壺である。5・9は瓦質土器である。5はスタンプの菊花文が付き、9は口径33cm、底径20.2cm、器高22.9cmで、口縁部は直口で、外端部が肥厚し、底部には3ヶ所脚が付く。器面は内外面とも横方向のヘラ磨きで器面調整されている。6～8は紡錘形をした土錘で、6は一部を欠くが長さ3.7cmで、最大径1cm、重さ3.8gで、完形品の7は、長さ5.4cmで、最大径1.1cm、重さ6.3gである。8は両端を欠くが、長さ5.6cm、最大径0.9cm、重さ4.1gである。10は大部分を欠くが砥石で、11は高台が付く底径7.9cmの土師器の塊である。

B-SE006からはこの他、景德鎮窯系青花が出土しており、京都系土師器も出土していることから、この井戸の時期は、16世紀後葉から末葉と考える。

B-SE009 (第3-133図)

B-SE009は、L-44・45区で検出された井戸である。検出時は南北4.4m、東西3.2mの井戸と想定し、掘り下げを行ったが、調査の結果、新・旧2基の井戸が確認された。旧井戸の規模は、最深部しか把握することは出来なかったが、検出面から深さ3.2mの位置で直径70cm程度の最下部の井戸枠を設置する面が検出された。



第3-131図 B-SE006出土遺物実測図

この先行する井戸に接して掘り込まれた新井戸は検出面からの深さは旧井戸と同じ約3.2mであるが、下部に腐食した状態で、井戸枠が確認された。その形状と規模は、平面形が方形であり、板材を組み合わせ、一辺約80cmの井戸枠であった。また最下部の水源部にも一辺約60cmの升を設置していた痕跡を確認した。なおこの井戸が埋め立てられた後、B-SK098が掘り込まれている。

銅銭

この井戸から出土した遺物は第3-132図・第3-134～第3-136図に図示した。第3-132図1の銅銭は真書体で書かれた「熙寧元寶」で初鋳年は1068年(北宋)である。周辺は作為的に周りを削り、直径が1.5cmになっている。2は草書体で書かれた「至道元寶」で初鋳年は995年(北宋)である。3は篆書体で書かれた「政和通寶」で初鋳年は1111年(北宋)である。

第3-134図1～19はロクロ成形による在地系土師質土器である。1～6は皿で、器高の高い5を除くと、法量の平均は、口径7.8cm、底径6.5cm、器高1.1cmである。3の底部には板状圧痕が残る。5は口径7.5cm、底径6cm、器高1.6cmで、他に比較すると器高が高い。7～19は坏である。法量の平均は、口径が12.1cm、底径が8.3cm、器高は3.2cmである。しかし、器形を見ると、17は口径に対し底径が小さく口縁部も内湾気味である。また口縁部の器壁の厚さは、9・14は上位が厚くなるが、他は底部近くが厚く、口縁端部に向けて、薄く仕上げている。18・19の内面にはラセン状のロクロ目が残る。

燭台

20は口径9.3cmの坏に孔を開けた粘土柱が付き、燭台と考える。

吉備系土師器

21～25は白色の色調をした薄手の吉備系土師器である。22の口径は10.2cm、底部は断面三角形の低い高台が廻る。底径は23が4.2cm、24が4.8cm、25が4.5cmである。

備前系

第3-135図26～28は備前系陶器である。26は口径32cmの挿鉢で、口縁端部がわずかに肥厚し、6本の櫛歯状工具で施文されている。27・28は口縁部が玉縁状になる。29は口径18.7cmで胴部が張り、口縁部が外反する壺である。

東播系

30～34は東播系須恵質土器である。30は口径26.9cmで、肩部に叩きのある甕である。31～33は鉢で、33の口径は32.4cmである。底径10cmの底部である40は鉢の底部と考える。

土鍋

35～39は口縁部が屈曲する土鍋で、内面は横方向の刷毛目、外面は撫でと指押さえである。器形が判る39は口径31.4cm、器高13.6cmで、丸底である。屈曲する口縁部下が肥厚し、最大の器壁の厚さとなっている。第3-136図40～43は口縁部下に突帯が廻る鍔付きの土鍋である。40・42・43は突帯部下から器壁が厚みを増し、丸底である。器面は、口縁部周辺は横撫でであるが、胴部外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目で調整されている。復元口径は41が26.7cm、42が28.8cm、43は24.6cmである。

瓦質土器

44は瓦質土器で、上面観が方形になり、器面は丁寧な横方向のヘラ磨きで調整されている。

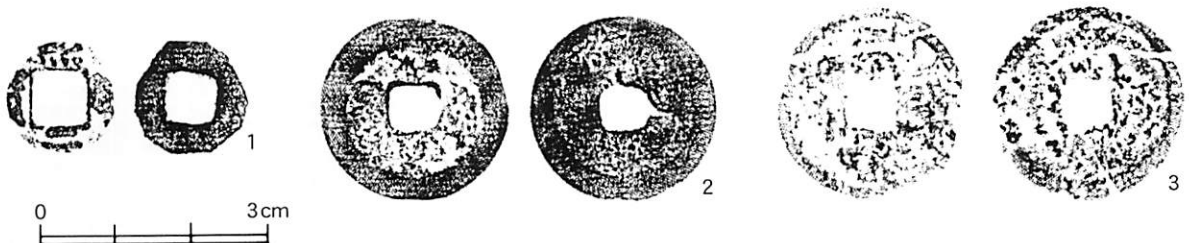
土錘

45・46は紡錘形をした土錘である。45は長さ4.4cm、最大径1.2cm、重さ5.7gで、46は長さ5cm、最大径1cm、重さ7.2gである。47は輝緑凝灰岩製の硯である。規格は幅4.8cm、厚さは1cmである。

硯

48～52は8世紀後半から9世紀前半の遺物と考える。48は口径14cmの皿で、高台を持ち、その径は7.8cmである。49・50は同一個体と考えられる皿で、口縁部は屈曲し、口径は13cmである。51は口径23.6cmの広口の鉢である。52は口径32.7cmの口縁部が外反する甕である。53は弥生時代後期の壺形

弥生土器

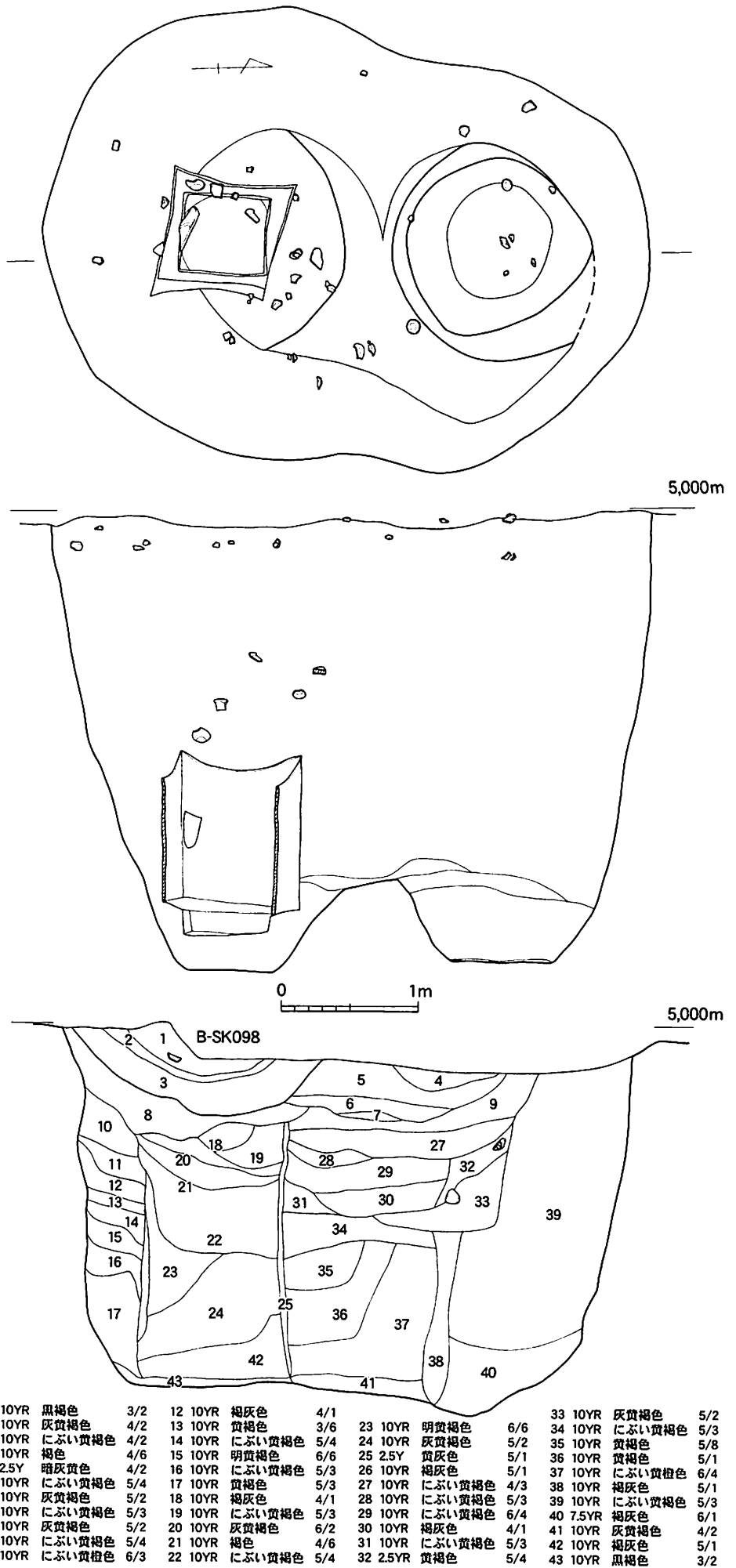


第3-132図 B-SE006出土銅銭実測図

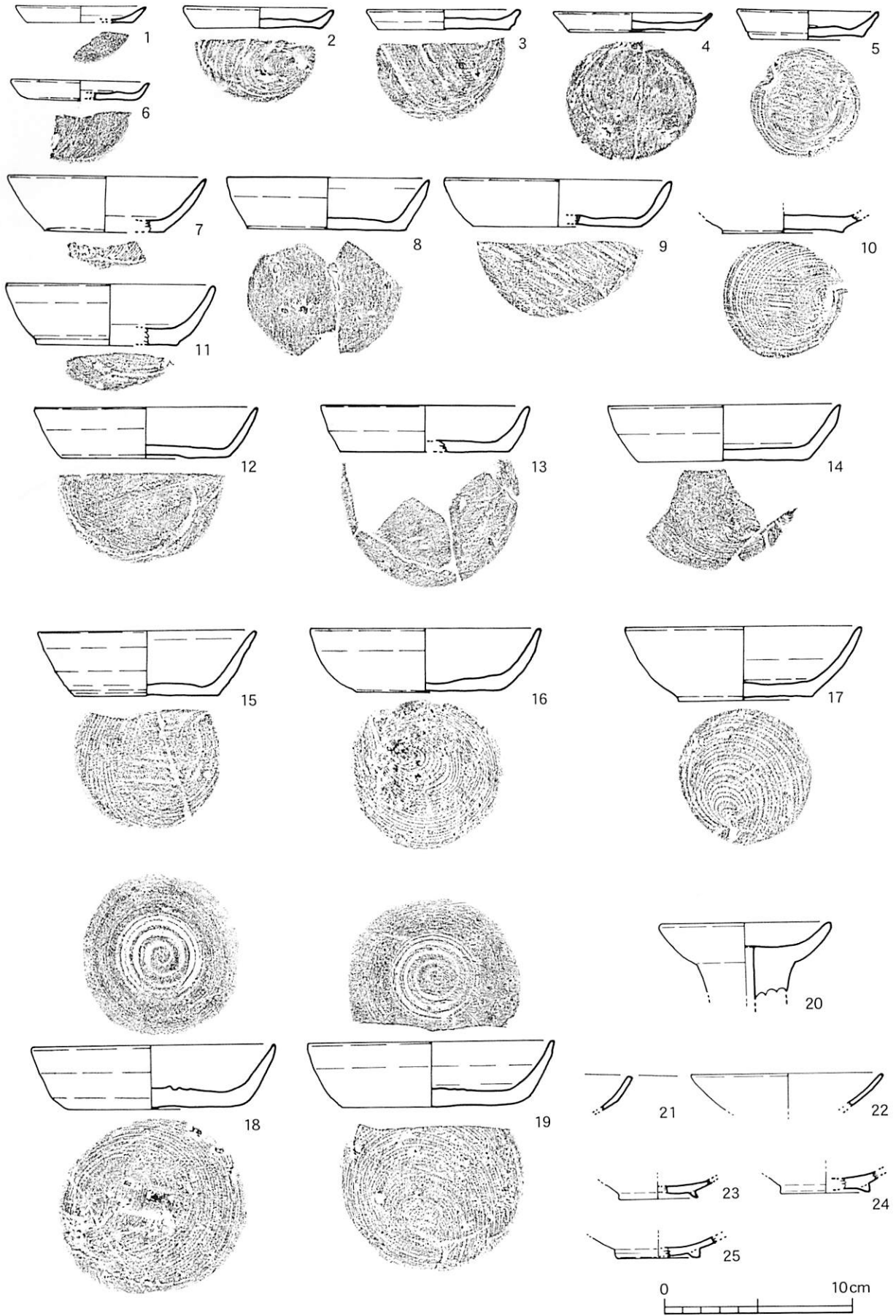
第2節 遺構と遺物

土器の頸部である。

B-S  
E 009の  
時期は、  
16世紀の  
遺物が混  
入せず、  
上面に  
14世紀中  
葉から後  
葉と想定  
される遺  
構 (B-  
SK098)  
があり、  
備前系陶  
器やロク  
ロ成形に  
よる在地  
系土師質  
土器の形  
態からも、  
ほぼ同時  
期の14世  
紀中葉か  
ら後葉と  
考える。

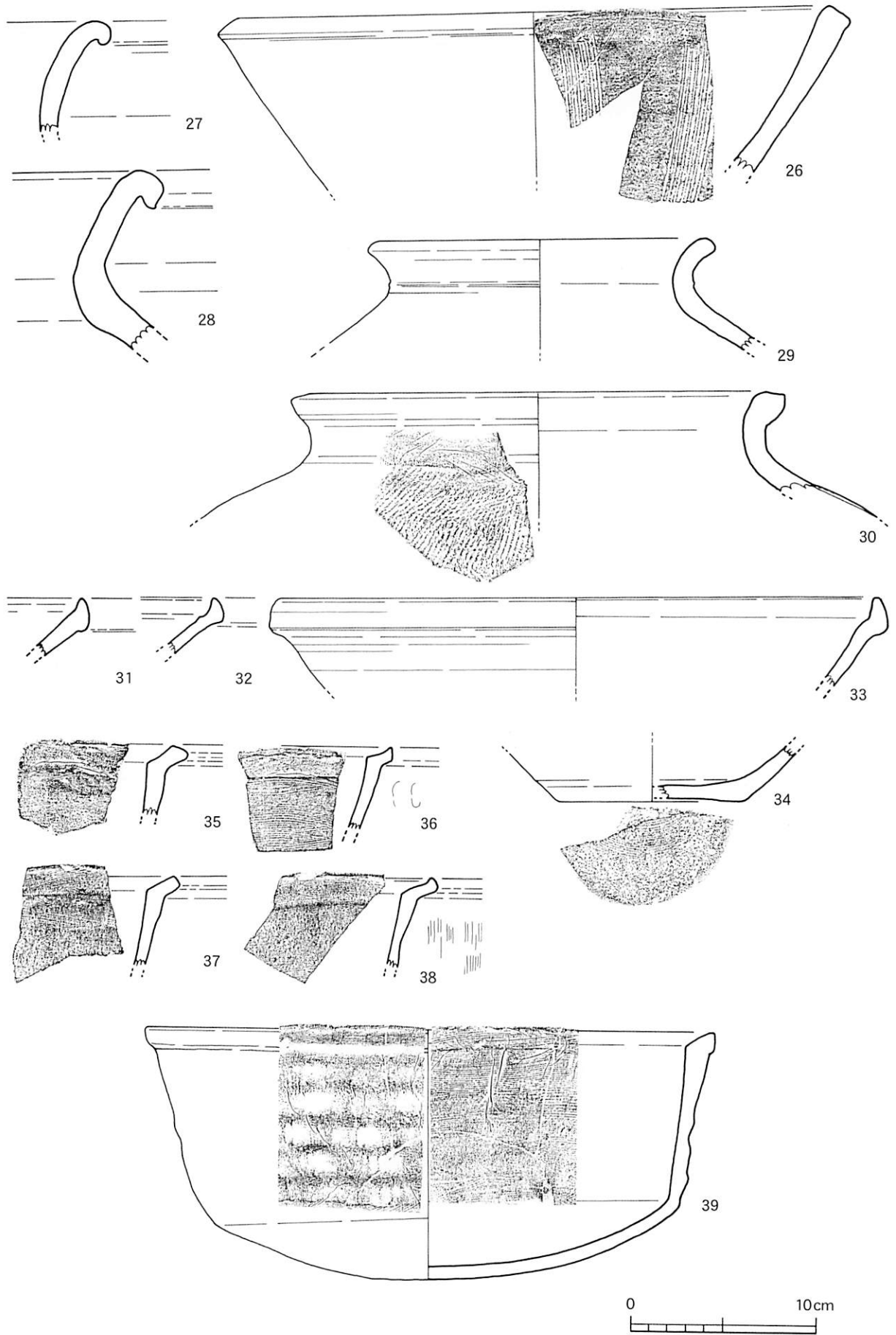


第3-133図 B-SE009実測図



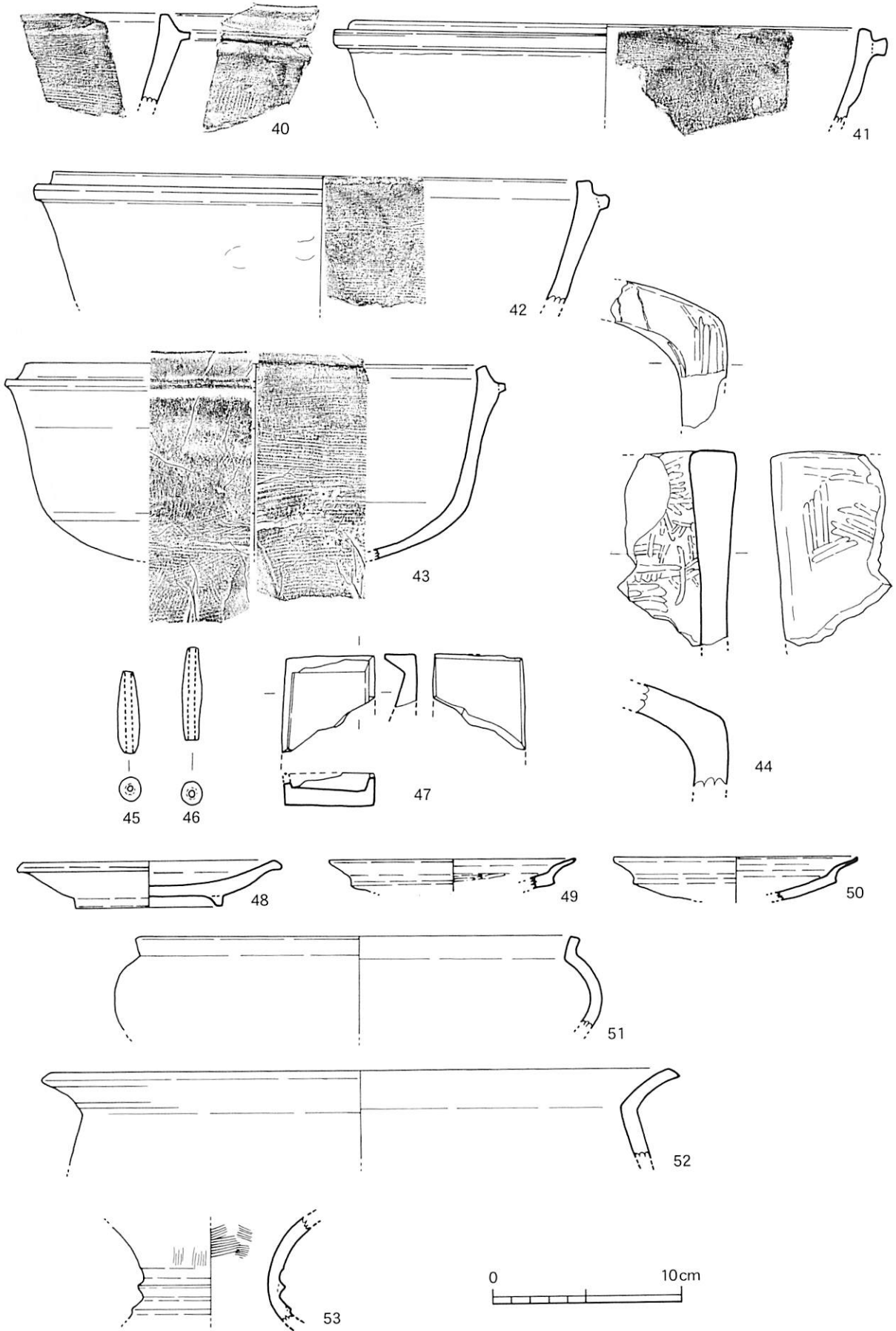
第3-134図 B-SE009出土遺物実測図(1)

第2節 遺構と遺物



第3-135図 B-SE009出土遺物実測図(2)





第3-136図 B-SE009出土遺物実測図(3)



第2節 遺構と遺物

B-SE010

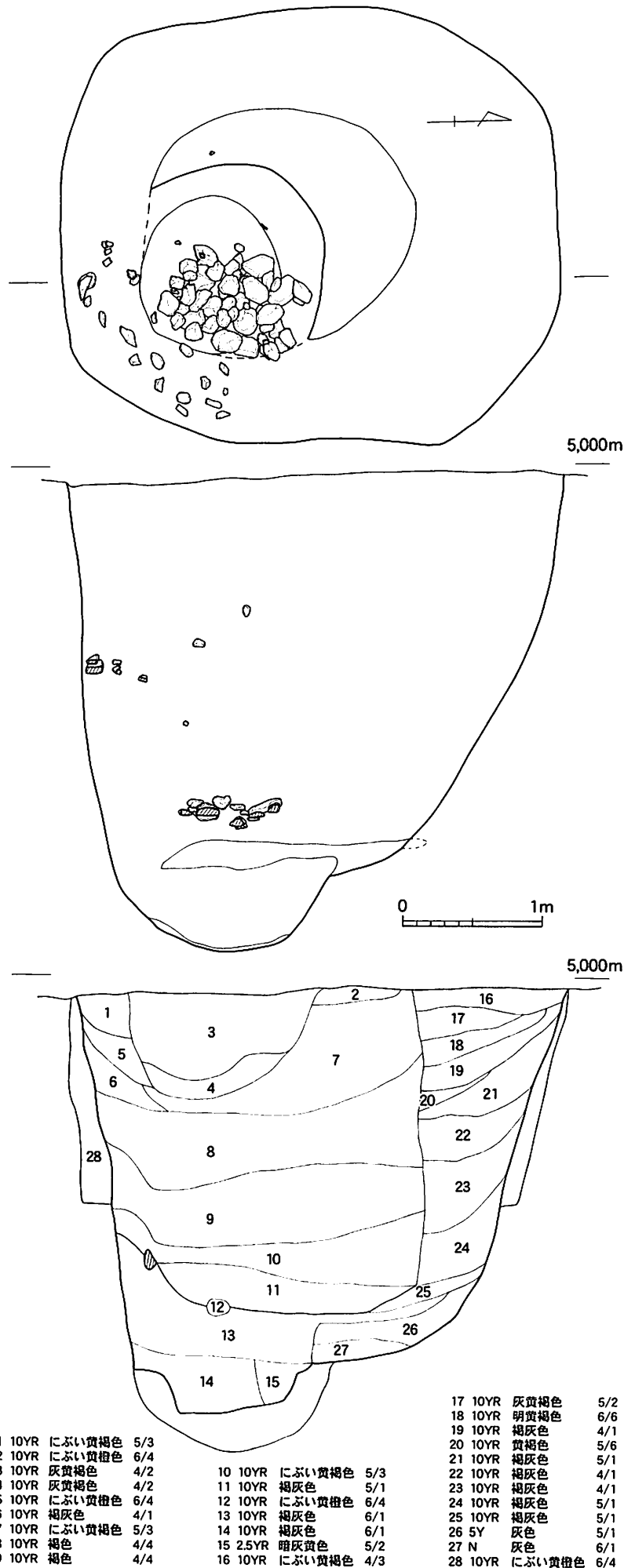
(第3-137図)

B-SE010は、B-SE006から北に15m離れた位置で検出された井戸である。検出面の規模は東西3.2m、南北3.6mの隅丸方形をしている。深さは、南東隅が最深で3.4mを測り、その場所から第3-138図1に図示した備前系陶器の播鉢が出土した。土層断面図を観察すると、井筒は掘り返しにより、完全に撤去され、再度埋め戻される時には下位に礫をまとめて投棄している。

備前系播鉢

遺構内から出土した主要な遺物は第3-138図に図示した。1はやや歪んでいる備前系陶器の播鉢である。口径は23.3cmで、底径は13.3cm、器高は9.1cmで、注口部も確認できる。口縁部は口唇部の内側を窪ませている。内面の播り目は斜目摺り目を交差させ、底面内側にも十字に入れられている。

2~6はロクロ成形による在地系土師質土器で、皿の2は口径8cm、底径7.7cm、器高1.2cmである。3~6は坏で、3は口径11.2cm、底径8.4cm、器高3.0cmで、4は口径12cm、底

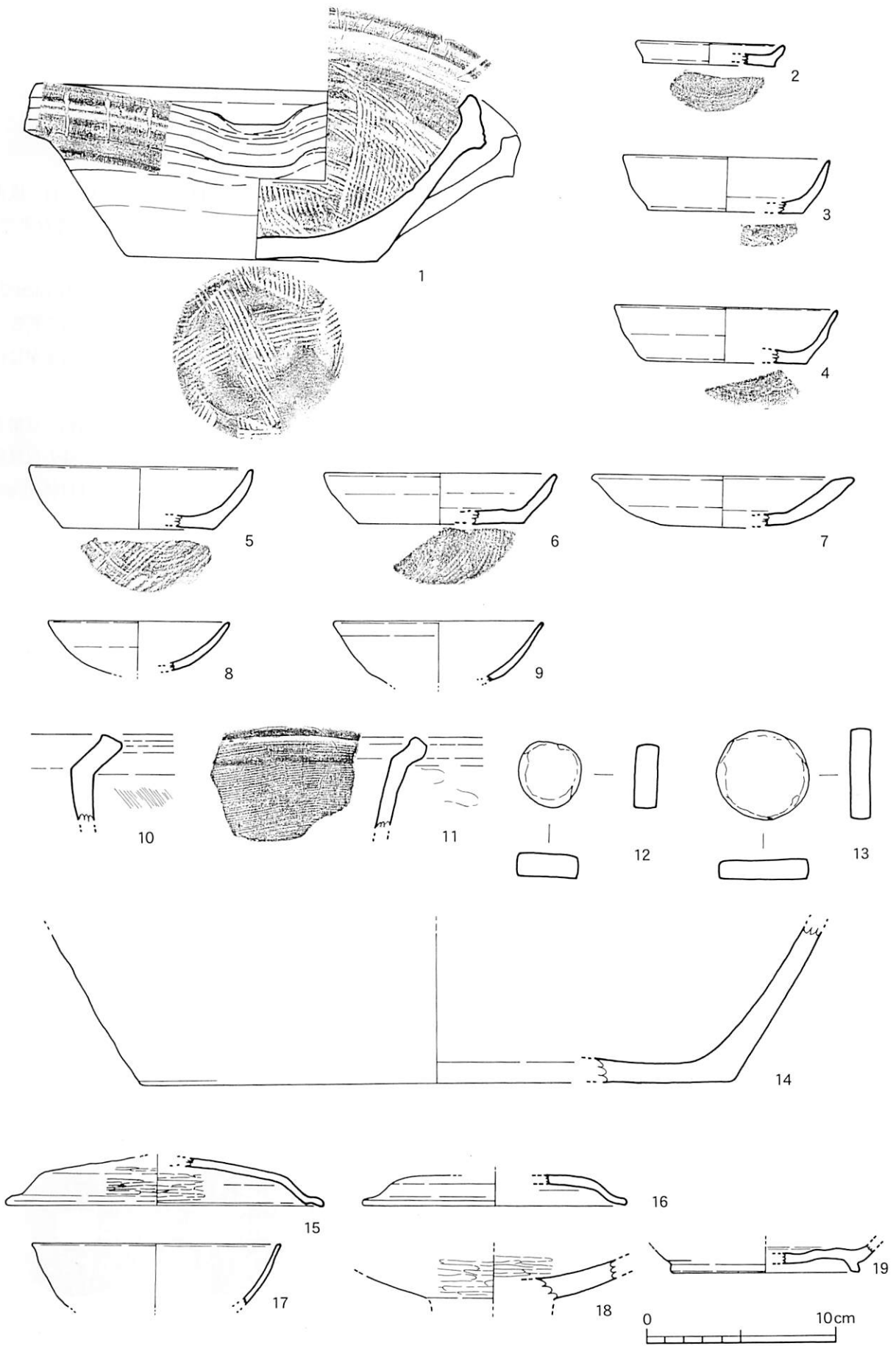


1	10YR	にぶい黄褐色	5/3
2	10YR	にぶい黄橙色	6/4
3	10YR	灰黄褐色	4/2
4	10YR	灰黄褐色	4/2
5	10YR	にぶい黄橙色	6/4
6	10YR	褐灰色	4/1
7	10YR	にぶい黄褐色	5/3
8	10YR	褐色	4/4
9	10YR	褐色	4/4

10	10YR	にぶい黄褐色	5/3
11	10YR	褐灰色	5/1
12	10YR	にぶい黄橙色	6/4
13	10YR	褐灰色	6/1
14	10YR	褐灰色	6/1
15	2.5YR	暗灰黄色	5/2
16	10YR	にぶい黄褐色	4/3

17	10YR	灰黄褐色	5/2
18	10YR	明黄褐色	6/6
19	10YR	褐灰色	4/1
20	10YR	黄褐色	5/6
21	10YR	褐灰色	5/1
22	10YR	褐灰色	4/1
23	10YR	褐灰色	4/1
24	10YR	褐灰色	5/1
25	10YR	褐灰色	5/1
26	5Y	灰色	5/1
27	N	灰色	6/1
28	10YR	にぶい黄橙色	6/4

第3-137図 B-SE010実測図



第3-138図 B-SE010出土遺物実測図

## 第2節 遺構と遺物

径8.4cm、器高3.0cmである。5は口径12.1cm、底径8.2cm、器高3.3cmで、6は口径12.5cm、底径8.9cm、器高2.8cmである。

7は京都系土師器であるが、口径14cm、器高2.8cmの皿である。口縁部周辺の器壁が厚く、新しい傾向を示す。

吉備系土師器 8・9は吉備系土師器で、口径は8が9.7cm、9が11.3cmである。

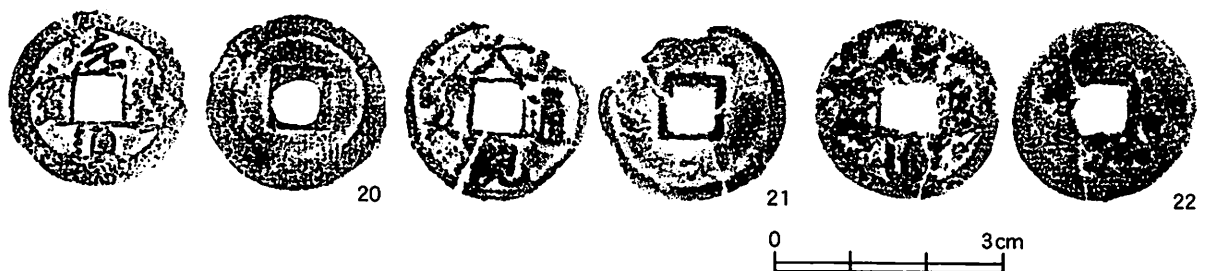
10・11は口縁部が屈曲する土鍋の口縁部である。10は内面撫で、外面は斜め方向の刷毛目の後撫で仕上げであるが、11は内面が横方向の刷毛目で、外面は横方向の撫でのあと、指押さえなどで、平滑に仕上げている。

12・13は土器片の周辺を研磨して作成した円盤状の土製品である。12は長径3.5cm、短径3.3cmで、厚さは1.3cmで、重さは17.6gである。13は直径4.8cmの円形で、厚さは1.1cm、重さは33.4cmである。14は瓦質土器の底部で、底径は31.8cmで、全面入念なへら磨きで仕上げ、器壁も底部と胴部がほぼ均一である。

15～19は古代の遺物である。15・16は土師器の坏蓋で、2点とも内面・外面ともに回転へら磨きで丁寧に仕上げられている。15は口径17.2cm、16は14.2cmである。17は口径13.6cmの坏身の口縁部と考える。18は精製粘土を使用し、内外面をへら磨きで器面調整した高坏である。19は口径10cmの高台を廻らせた須恵器の坏の底部である。

銅銭 第3-139図はB-SE010から出土した銅銭である。20は行書体で書かれた「元豊通寶」で初鑄年は1078年（北宋）である。21は「大観通寶」で初鑄年は1107年（北宋）である。22は錆が付着しており、判読が不能である。

B-SE010の時期は、井筒を抜き取られた後に、一部を欠く第3-138図1の備前系播鉢が最深部に廃棄された状態で検出された。このため、最終的な井戸廃棄の時期は、この播鉢の時期と考える。また、同時期と考える京都系土師器も器壁が厚く、新しい傾向をみせる。すなわち、B-SE010が機能していた時期は16世紀後葉から末葉と考える。



第3-139図 B-SE010出土銅銭実測図

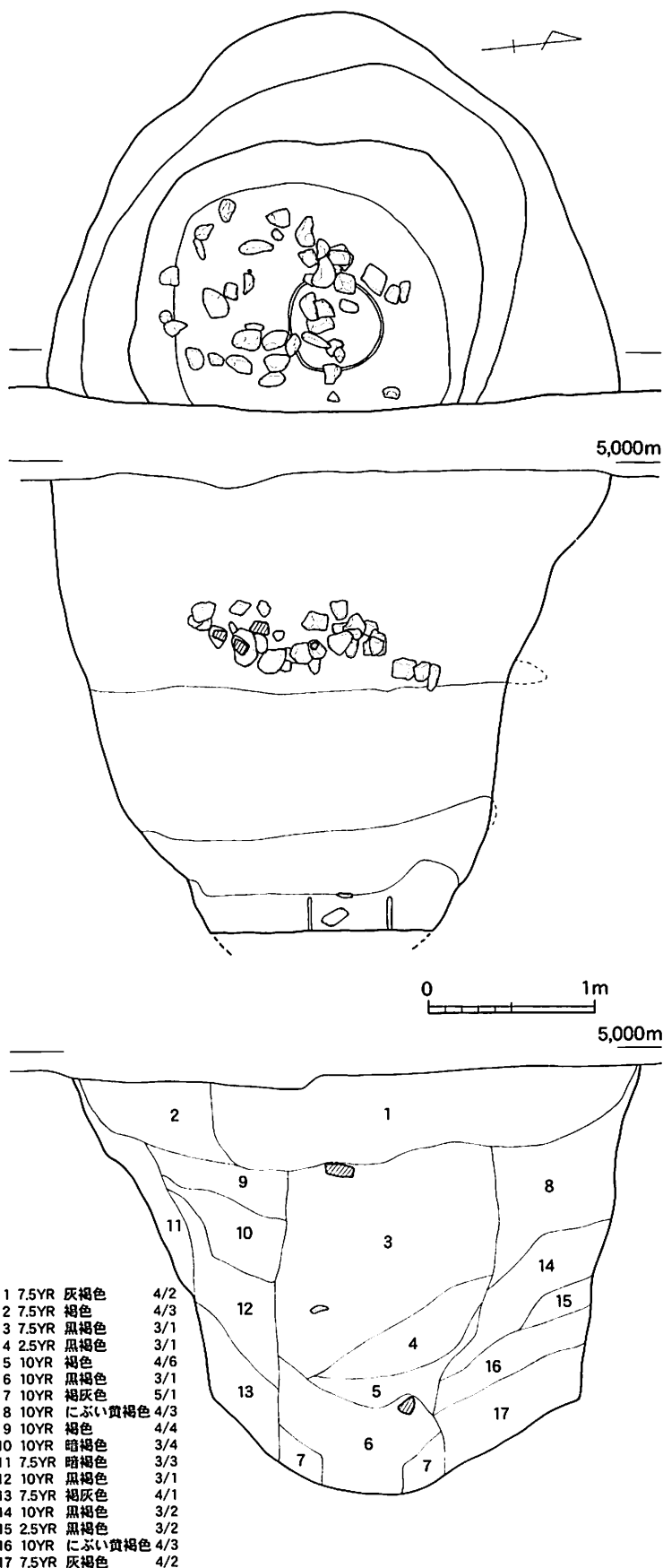
B-SE017 (第3-140図)

B-SE017は調査区の東壁沿のM-43区で検出された井戸である。検出面での規模は、南北3.4m、東西は東端が調査区外のため、計測できないが、3m以上はある。深さは、壁際のため完全に調査できなかったが、検出面から2.8mの位置で井筒を確認した。曲物の可能性が強い。土層観察によるとこの井筒から上位の井筒は掘り返され抜き取られている。さらに埋め戻しの際に、井戸の中位に礫を投棄している。

遺構内から出土した主要な遺物は第3-141図に図示した。1~5はロクロ成形による在地系土師質土器である。1の皿は歪で口径は8.3cm~9cmで、底径も6.8~7.3cmで、口縁部は低く形成され器高は1.5cmである。2は器壁が比較的薄い。口径は9.8cm、底径は7.4cmで、器高は2cmである。皿よりも器高が高く、坏より口径が小さい。小型の坏と考える。3は口径12.5cm、底径10.2cm、器高2.9cmで、口縁部は中位が肥厚し、器壁が厚くなり断面は三角形になる。4は口径12.3cm、底径7.4cm、器高3.6cmであるが、口縁部は逆「八」の字上に直線的に開き、口縁端部は尖る。5は口径12.2cm、底径9cm、器高2.7cmで口縁部の断面は緩い紡錘形をしている。

吉備系土師器

6はほぼ完形品の吉備系土師器である。口縁部は斜めに傾き、吉備系土師器の本来の器形を知ることができる。口径10.8cmで、底部には断面三角形の低い高台が廻り、その



第3-140図 B-SE017実測図

第2節 遺構と遺物

径は4.2cmである。器高は斜めのため、2.9~3.9cmを測る。胎土や色調は在地系土師器に比較すると白色で、器壁も薄い。

8は底部にロクロ成形のため、糸切り痕が残る。この資料は、吉備系土師器よりさらに胎土・色調が白く、器壁も薄い。器形は、口縁端部がやや肥厚する7も同じ色調と胎土をしており、このような口縁部が付く皿の可能性が高い。

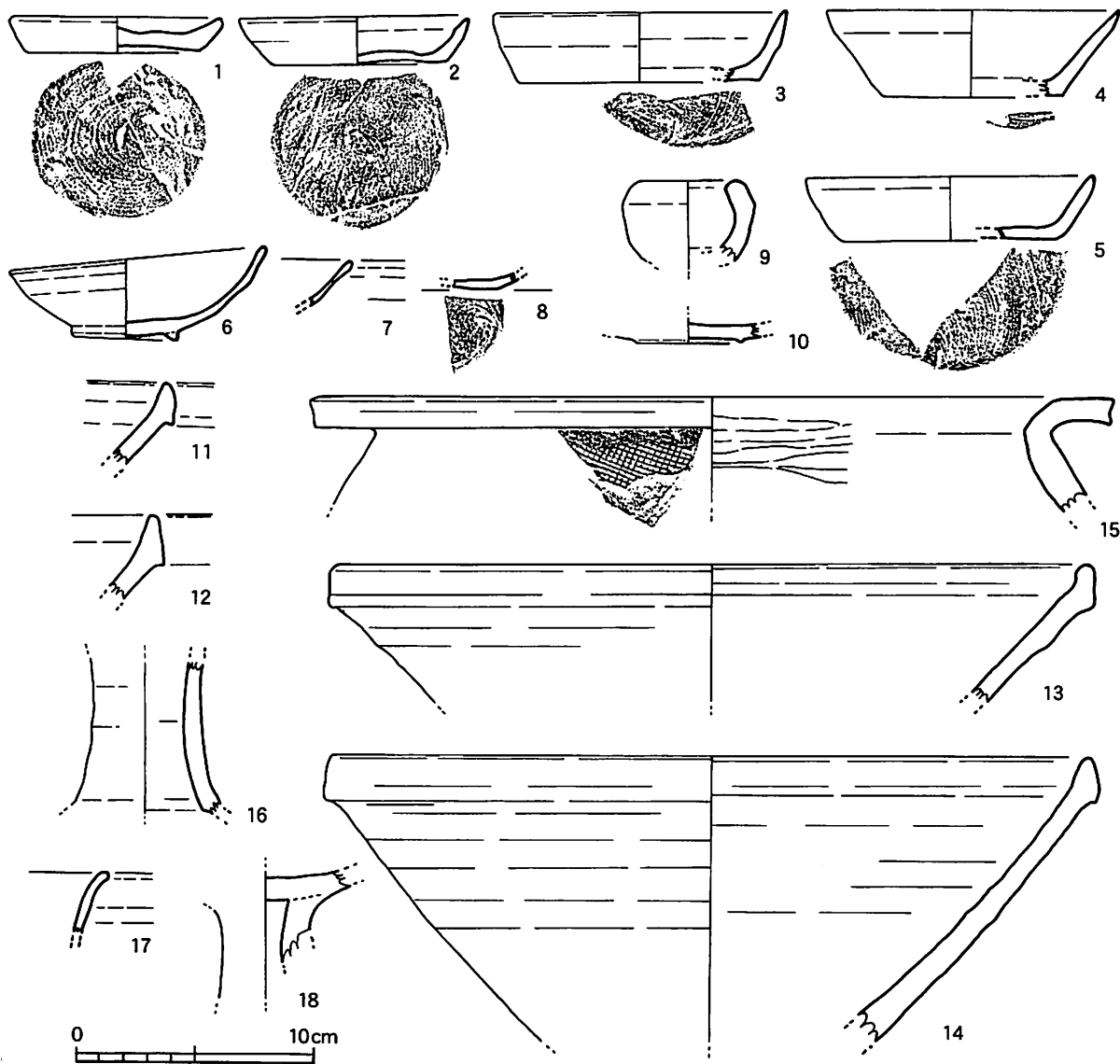
埴塙

9は口径4.3cmの埴塙である。器壁は厚く、器面は非ロクロ系のため、器面は内面が横撫で、外面は指押さへの痕跡を残す。

10は底径4.3cmの瓦質土器で、瓦器碗の底部と思われる。底部には退化した低く小さい高台が廻る。

東播系

11~15は東播系須恵質土器である。このうち11~14は鉢である。11・12は肥厚し断面が三角形になる口縁部である。器面は横方向の撫でで調整しており、色調は灰色をしている。13は口径32.7cmで、口縁端部の形態は、屈曲し立ち上がるように肥厚し、11・12とは異なる。14は口径32.6cmで口縁部の形態は断面が丸みを帯びた三角形をしている。13・14ともに、器面調整は横方向の撫でで仕上げている。色調は灰色である。15は口径34.2の甕である。肩部は格子状の叩きで器面調整されている。



第3-141図 B-SE017出土遺物実測図

16・17は須恵器である。16は長頸壺と考えられる資料で、細い部分の径は4.8cmで、下位は肩部とつながる様子がみられる。17は須恵器の坏の口縁部と思われる。18は精製粘土を使用した高坏の坏部と脚部の接合部である。これらの3点は8世紀後半から9世紀前葉に属する資料と考える。

B-SE017の時期は、出土遺物の構成から14世紀中葉から後葉と考える。

B-SE056

B-SE056はK-47区で、南半分が調査区外になる状態で検出された井戸である。確認された遺構の規模は東西3.1m、南北1.3mの半円形状で、南側の半分は調査区外に広がっている。調査は約1mを掘り下げたが、崩落の危険が生じたため、完掘を断念した。遺構の規模や深さ、壁の立ち上がり状況から、この遺構を井戸と判断した。

備前系

第3-142図に、この遺構から出土した主要な遺物を図示した。1は備前系陶器の壺である。頸部は直立し、外反する口縁端部は小さな玉縁状になる。

2～4はロクロ成形による在地系土師器の皿である。法量は、2の口径は歪なため8.4～8.8cmで、底径は7～7.2cmで、器高1～1.3cmである。3は口径8.4cm、底径6.5cm、器高1.3cmで、4は口径7.5cm、底径6.2cm、器高1.3cmである。

吉備系土師器

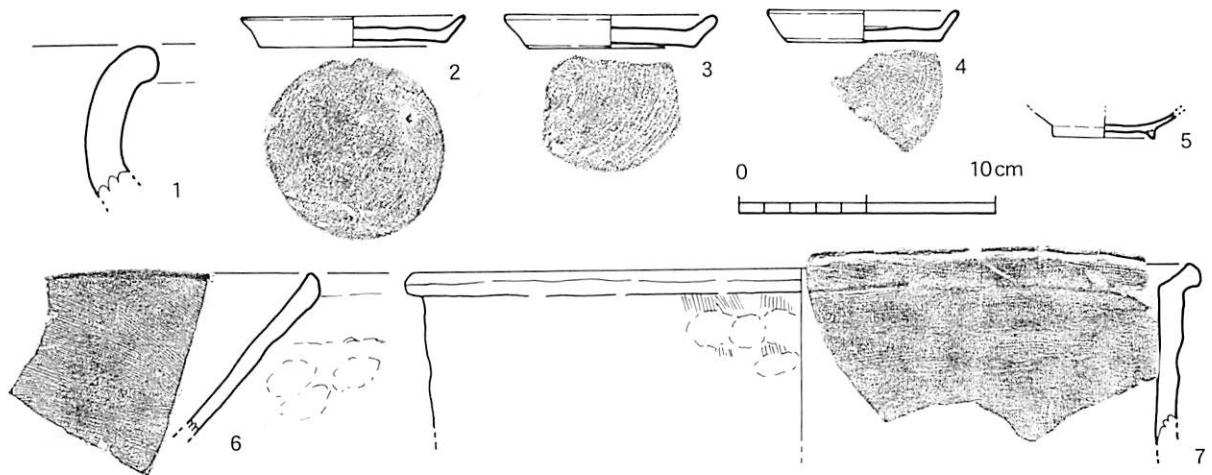
5は口径4cmの吉備系土師器の底部である。胎土・色調は白色で、断面三角形の高台が廻る。

6は瓦質土器で、内面は横や斜め方向の刷毛目調整で、外面は口縁部周辺が横撫で、下位は指押さえで器面を平滑に調整している。

7は口径31.4cmの口縁部が屈曲する土鍋である。器面調整は内面が横方向の撫で、外面は縦方向の刷毛目の後、指押さえや撫でで平滑に仕上げている。

以上の他、景德鎮窯系青花・龍泉窯系青磁・京都系土師器が出土している。

出土遺物の量は14世紀代の遺物が多いが、景德鎮窯系青花・京都系土師器なども出土している。京都系土師器はその形態から16世紀後葉から末葉と考えられ、遺構の時期もその時期に埋め立てられたと想定される。



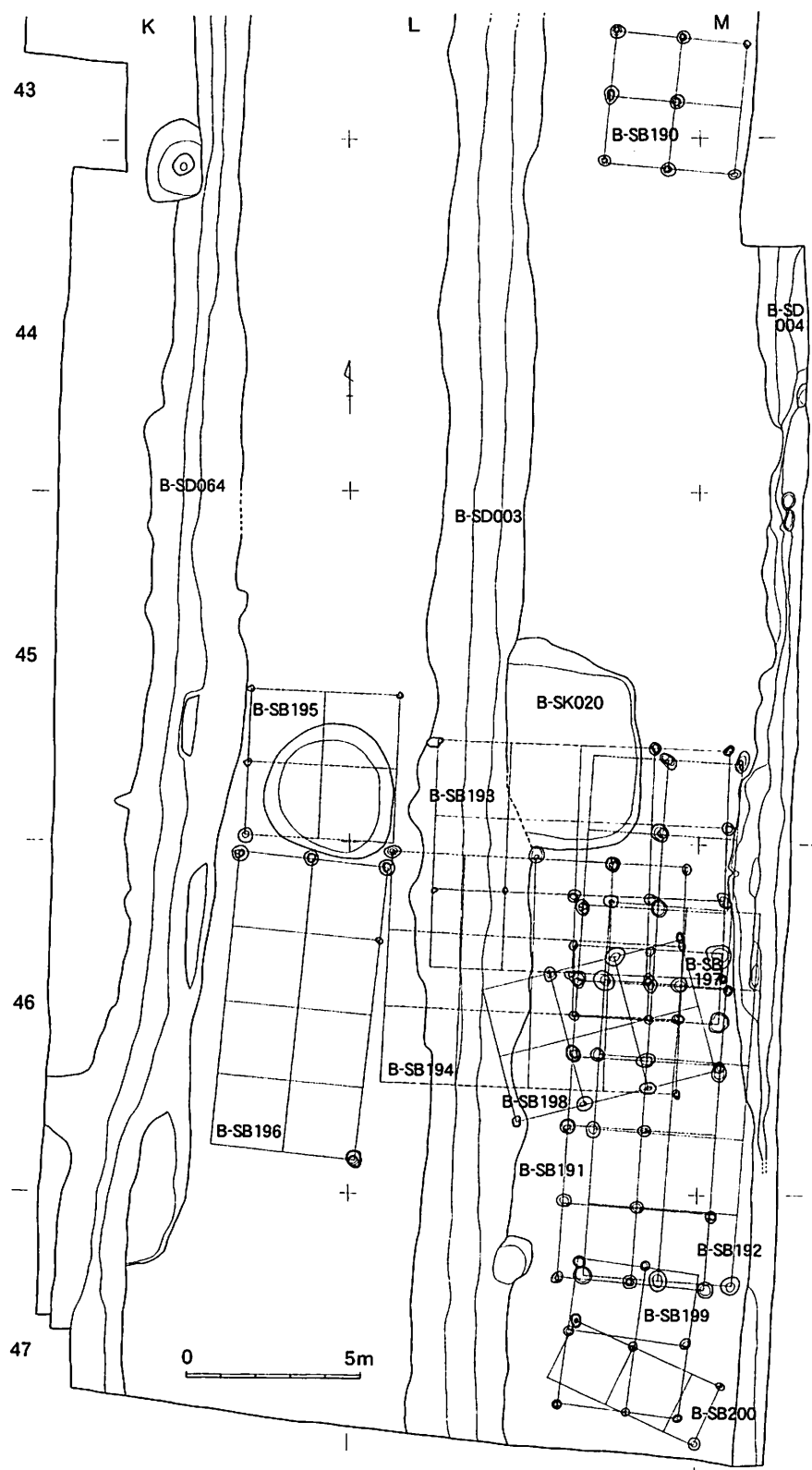
第3-142図 B-SE056出土遺物実測図

4. 建物遺構

府内町跡20次調査B区の東南隅を中心に、柱穴内に上面が平坦な川原石を据えた遺構が多数検出された。調査当時、そうした礎盤を据えた柱穴が明らかに等間隔に並び、建物遺構の存在が想定された。しかし、周辺にB-SD003・B-SD004・B-SK020・B-SE006などの大型遺構と切り合い、不明な柱穴も多い。さらに後世の削平により失われた柱穴も多い。また、柱穴内から二段に積み重ねられた川原石や隣接する柱穴なども検出され、同じ場所で建て替えが繰り返されていることも推測できた。

そこで、報告書作成にあたり、検出された礎盤を据えた柱穴や、柱穴が削平され礎石状態で検出された川原石を積極的に評価し、礎盤建物として復元を行った。その結果、少なくとも8棟の礎盤建物が存在していたことを確認した。

礎盤建物



第3-143図 府内町跡20次調査区B区建物遺構配置図



B-SB190 (第3-144図)

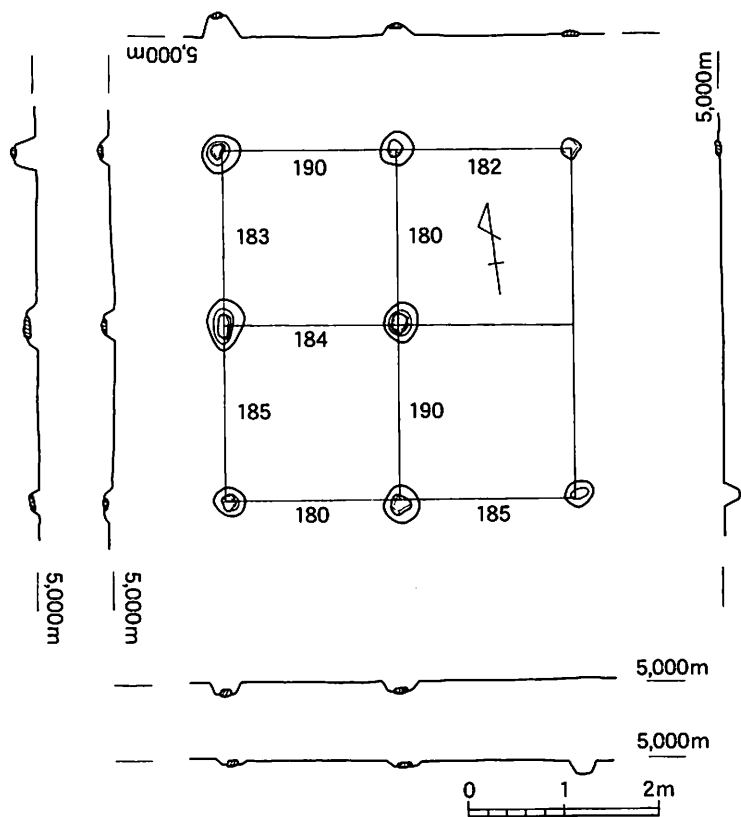
B-SB190は調査区の東側北寄りで検出された礎石建物で、方位はN-8°-Eである。建物の規模は東西2軒、南北2間を確認したが、東の調査区外に延びている可能性も残る。検出された東側の南北列の北は礎石のみ、南は柱穴のみで、その間は取り去られたためか、確認できなかった。柱間は、最大で190cm、最小で180cmであり、平均すると184cmであり、六尺を1間とした建物である可能性が高い。

柱穴内から遺物はほとんど出土せず、わずかにロクロ成形による在地系土師質器が出土したのみで、時期もその頃と考えられ、14世紀代と想定する。

B-SB191 (第3-145図)

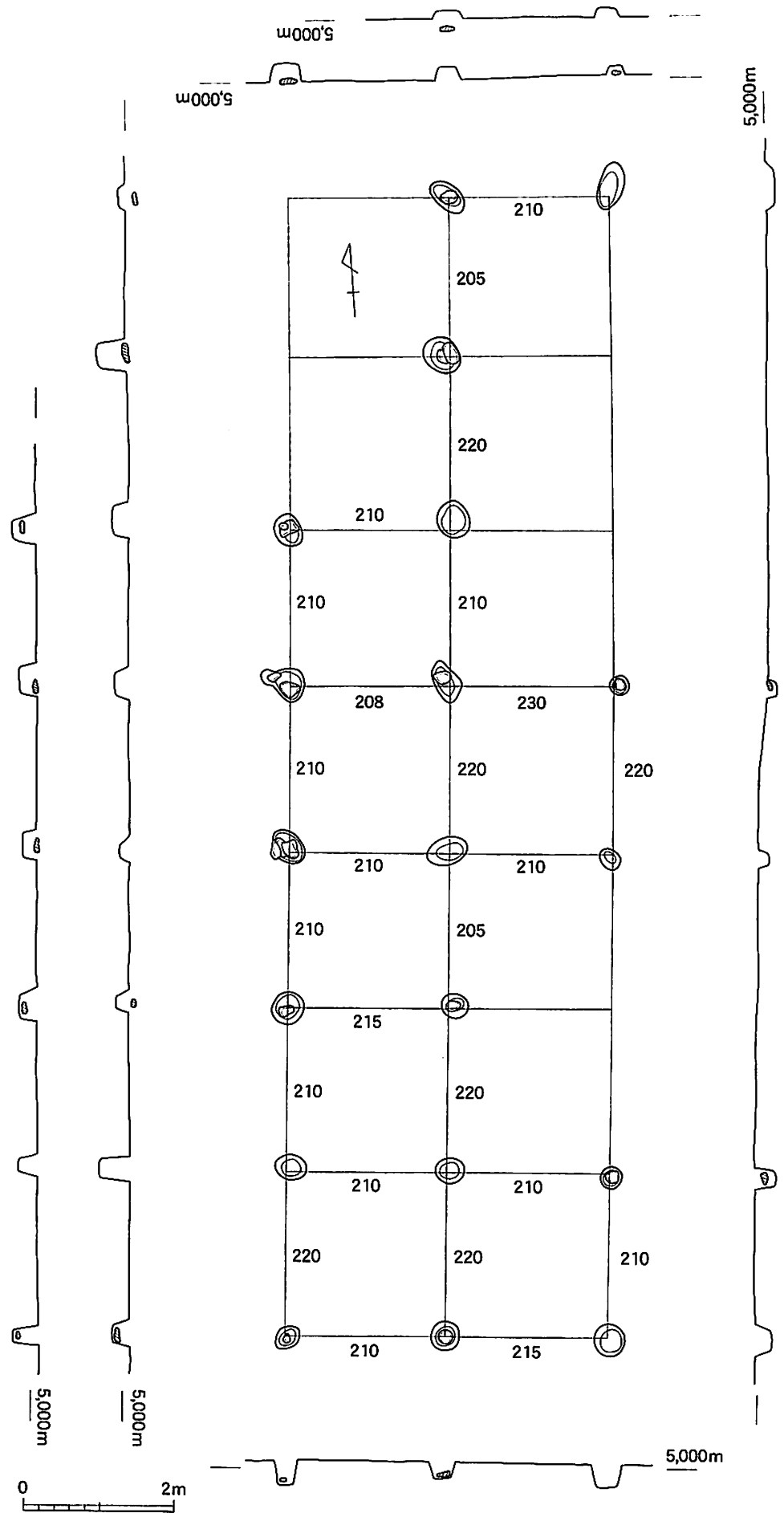
B-SB191はB-SD003とB-SD004の間に挟まれるような位置で検出された東西2間約4.2m、南北7間約15.0mの細長い建物と考える。部分的に礎盤が削平により失われているが、計測できる柱間は25ヶ所で、最も狭い柱間は205cmが2ヶ所で、208cmが1ヶ所、210cmが13ヶ所、215cmが2ヶ所、220cmが6ヶ所、230cmが1ヶ所である。平均すると213cmであり、ほぼ7尺の間尺で建てられていると想定することができる。建物の方位はN-4°-Eで、検出された柱穴19ヶ所のうち、12ヶ所の柱穴に川原石が据えられている。

柱穴内からは、龍泉窯系青磁の小破片、備前系陶器の破片、ロクロ成形による在地系土師質器の坏、瓦質土器の小破片などが出土し、14世紀代と想定するが、南西隅の柱穴からはロクロ成形で、内側に螺旋状の段が付き、口縁部が逆「ハ」の字状に開く在地系土師質土器の坏の小破片が出土しており、15世紀末から16世紀初頭の可能性も残す。



第3-144図 B-SB190実測図

第2節 遺構と遺物

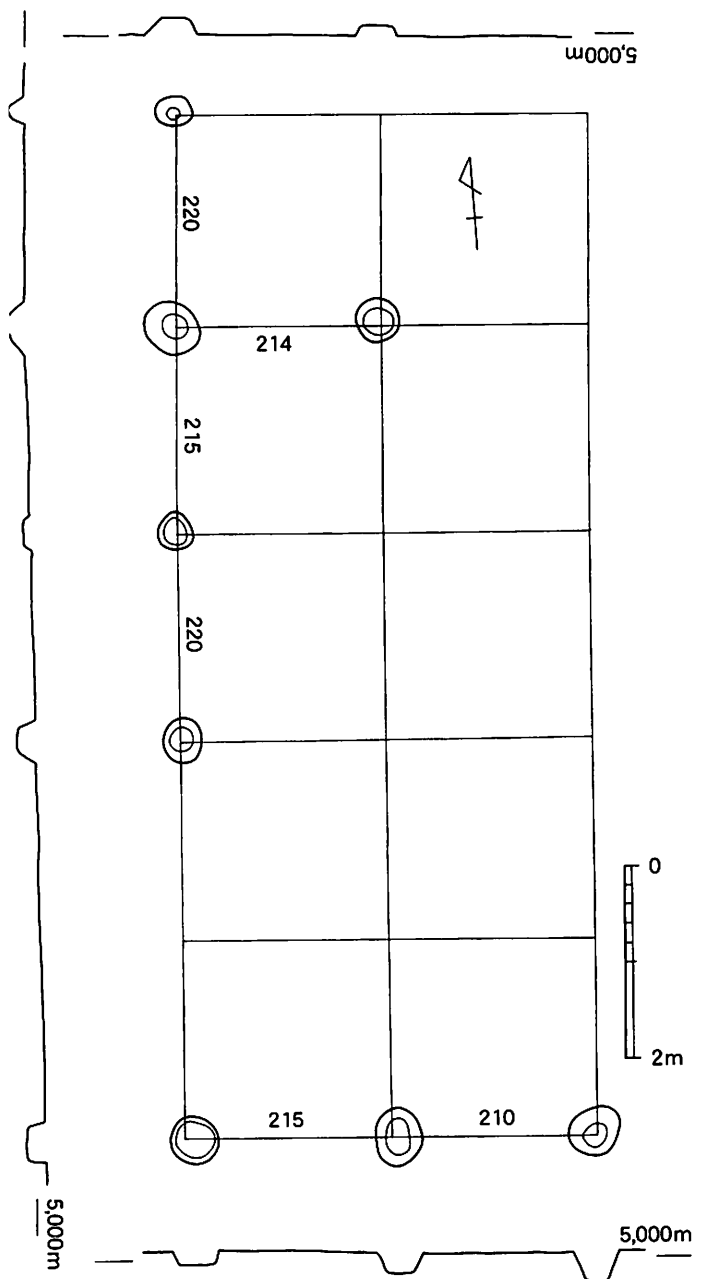


第3-145図 B-SB191実測図

B-SB192 (第3-146図)

B-SB192はB-SB191を東に約70cm平行移動した状態で検出された東西2間10.9m、南北5間約4.3mの規模で、南北に細長い建物である。このため、同じ方位を示すが、検出されたのは礎盤を持たない柱穴のみである。東北部の柱穴はさらにB-SD004と切り合うため、確認することが出来なかった。また、他の柱穴も深さが10cm~30cmと浅く、削平のため、失われているものも多い。この建物の柱穴は、本来18ヶ所存在するはずであるが、8ヶ所確認できたのみである。しかし、最南部で検出された柱穴の柱間は、215cm・210cmで、他の建物遺構と同じ規格である。さらに西側の柱穴列の柱間は、北から220cm、215cm、220cmで、方向も揃い、7尺単位を1間とする建物と想定できる。

柱穴内からは、ロクロ成形による在地系土師質土器の他に、備前系陶器の小片、瓦質土器などが出土しており、14世紀代の遺構と想定する。



第3-146図 B-SB192実測図

第2節 遺構と遺物

B-SB 193 (第3-147図)

B-SB 193は西側をB-SD003、北西部をB-SK020と切り合った南北3間、東西4間の建物と想定する。二つの遺構と重複するため、不明な部分も多い。しかし、検出された礎盤の状況を見ると、北西隅の石はB-SD003の西側の肩の部分の遺構内で検出された。また、南側から2列目の西寄りの2つの石もB-SD003の遺構内で検出されている。このように、B-SD003の遺構内に礎盤が残されることは、この建物が、溝遺構より新しいことを示す。

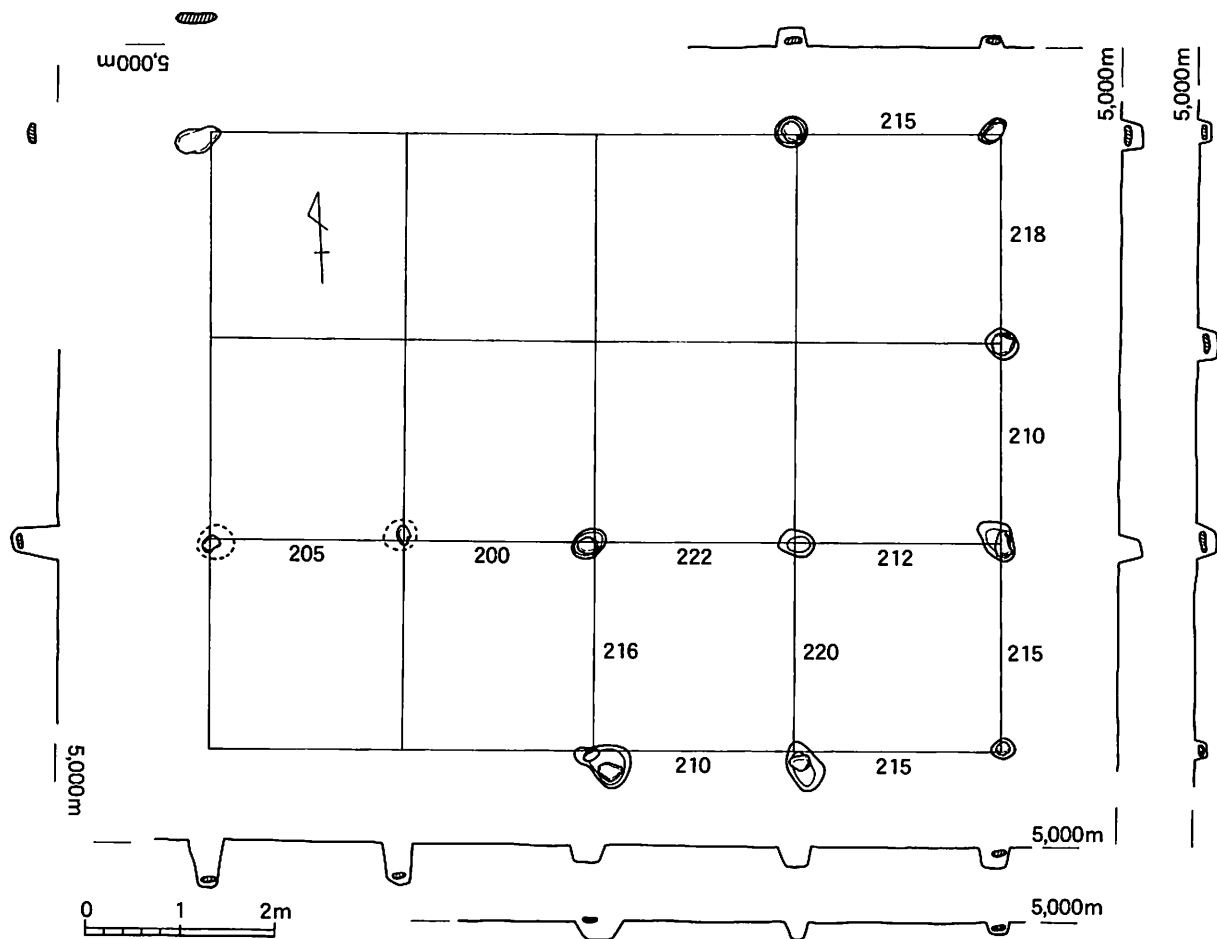
計測出来る礎盤建物の規模は、南北6.43m、東西8.36mで、柱間の平均は東西209cm、南北214cmである。全体の柱間の平均は、213cmで、7尺を1間とした建物が想定できる。また、建物の方位は、N-2.5°-Eである。

遺物は、各柱穴からロクロ成形による在地系土師質土器の小破片が少量ずつ出土しており、B-SD003より新しいものの、14世紀代と考える。

B-SB 194 (第3-148図)

B-SB 194はB-SB 193を南西方向に約4m移動した状態で検出された、東西方向に長い遺構である。

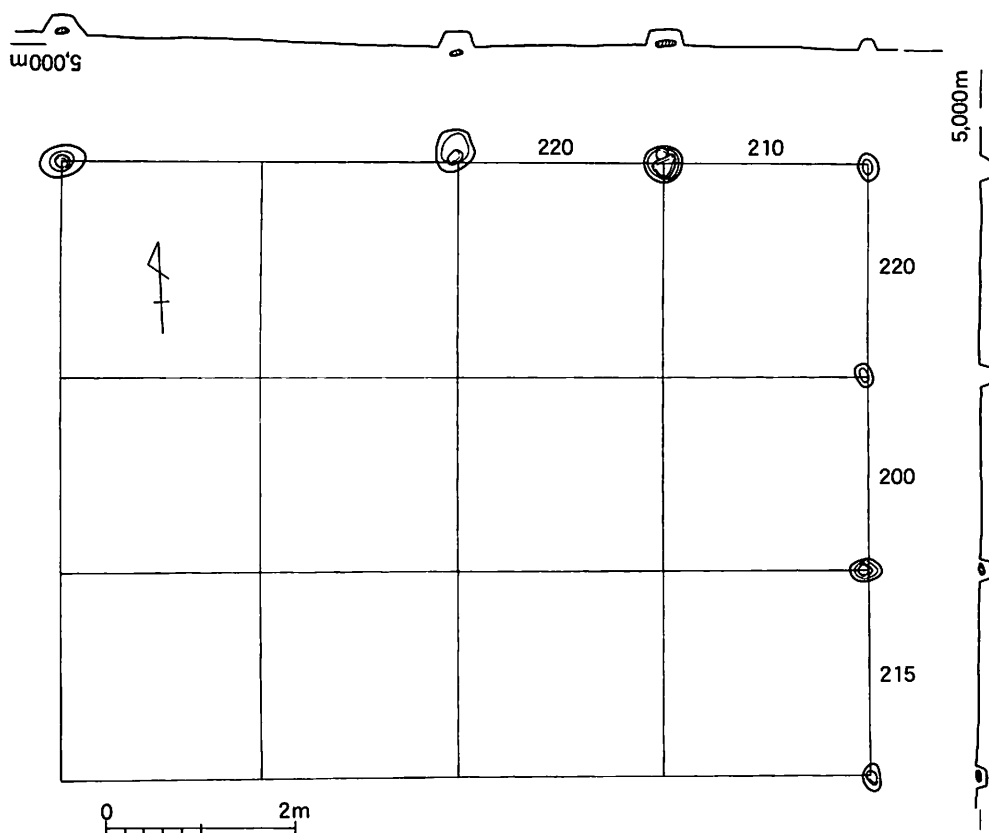
遺構の西寄りを南北にB-SD003が南北方向に掘り込まれており、その部分の柱穴は不明である。また、南西部分も削平により柱穴が失われている。ただ、西北隅の柱穴が残されており、遺構の規模を知ることができた。それによると、東西4間8.44m、南北3間6.35mである。建物の方位はN-3.5°-Eで、柱穴間の間尺は東側の柱穴列の残りが良く、北から220cm、200cm、215cmを測る。また、



第3-147図 B-SB193実測図

北側の柱穴列も東から210cm、220cmで、平均は213cmであり、この建物も7尺を1間とした単位で建てられていると想定される。

遺構の時期は、東北隅の柱穴からロクロ成形による在地系土師質土器と瓦質土器の小破片が出土しており、その西隣の柱穴からは龍泉窯系青磁碗の小片が出土している。こうしたことから、この遺構は、14世紀代と考える。

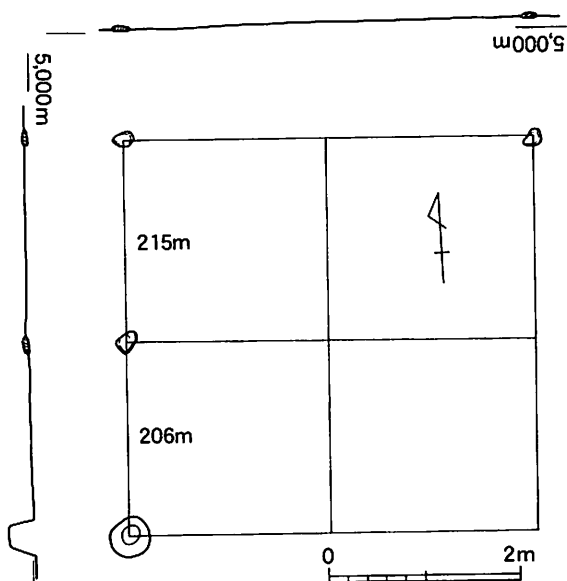


第3-148図 B-SB194実測図

**B-SB195 (第3-149図)**

B-SB195はB-SE006と切り合う状態で検出された建物遺構である。中心部を16世紀後葉から末葉の井戸が掘り込んでいるため、南東部の柱穴が不明である。また、柱の位置と認定した4ヶ所のうち、3ヶ所の柱穴はなく、遺構検出面で川原石が礎石状に据えられた状態で掘り出された。

建物の規模と形態は、B-SB190と類似し、2間四方である。規模は東西4.26m、南北4.21mで、柱穴間の距離を測ることが出来るのは西側の2間のみで、北から215cm、206cmである。このため、平均は210.5cmで、この建物も7尺を1間とした単位で建てられていると想定される。また、柱穴の方位はN-



第3-149図 B-SB195実測図

第2節 遺構と遺物

2° -Eである。

この遺構の時期は、礎石状に石が検出され、唯一発掘した南西隅の柱穴からは遺物が出土しなかった。このため、遺構の時期は不明である。

B-SB196 (第3-150図)

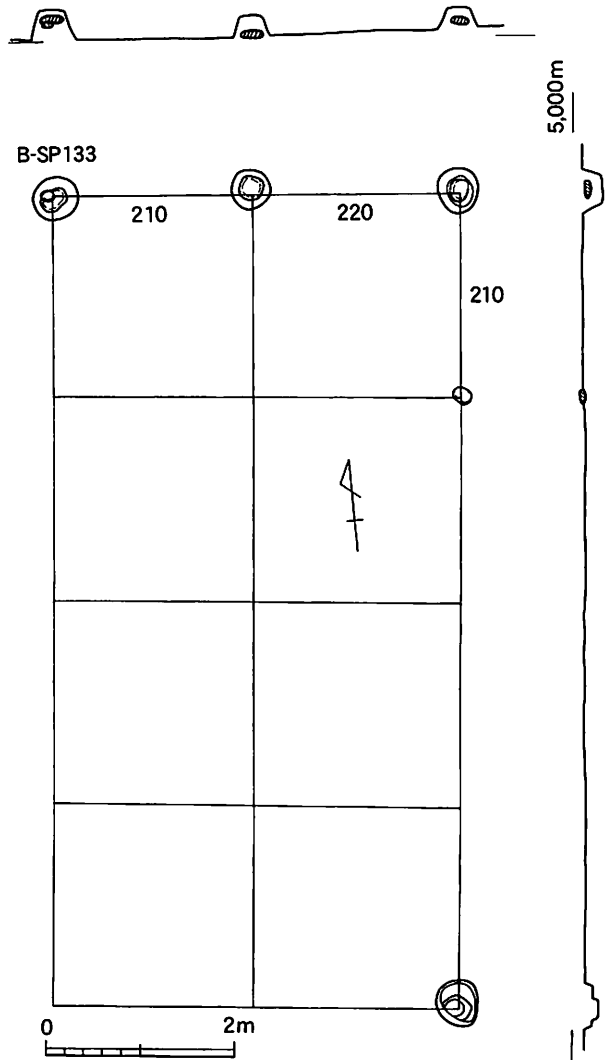
B-SB196はB-SB195の南側に隣接して検出された建物遺構である。中央部から南西部にかけては削平により、大きく抉られており、柱穴等の遺構を検出することは出来なかった。しかし、北側の3個並んだ川原石を持つ柱穴は確実に礎盤建物を構成するものである。そこで、東側の列で、礎石状に露出して検出された石をたよりに、遺構を検討した結果、東西2間4.3m、南北4間8.42mを測る。このうち、確実な北側の柱穴間の距離は、210cm、220cmである。また、南北4間の8.42mの柱穴間は210cmであり、この建物も他と同様7尺を1単位としていると考えられる。建物の方位はN-7° -Eである。

B-SB196の時期は、北西隅の川原石が2段になった柱穴 (第3-155図) から埋納された状態で第3-156図に図示したロクロ成形による在地系土師質土器の皿と坏が出土した。その遺物から判断すると、14世紀中葉から後葉と考える。

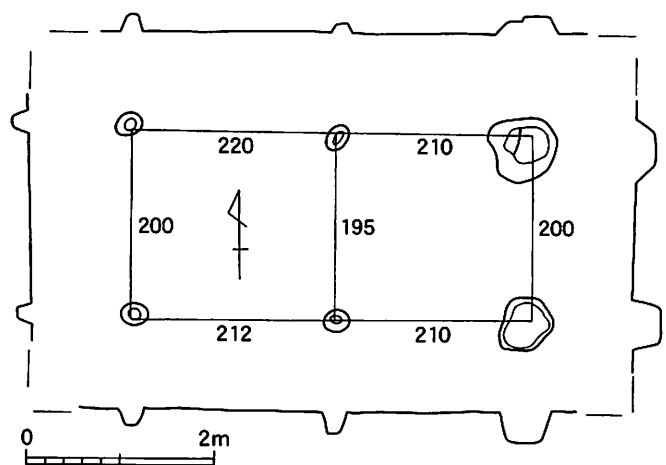
B-SB197 (第3-151図)

B-SB197は複雑に重複し合う礎盤建物群の中で、7尺1間を単位とした柱穴を探し、抽出した東西2間4.3m、南北1間2mの規模の小さい建物遺構と考える。

遺物は、全ての柱穴からロクロ成形による土師質土器の小破片が出土した他、南東隅の柱穴から吉備系土師器と土師質土器、南側柱穴列の中央からは瓦質土器、南西隅の柱穴からは中国産白磁と吉備系土師器が出土している。このような遺物組成から、この遺構は14世紀代と推測する。



第3-150図 B-SB196実測図



第3-151図 B-SB197実測図

B-SB 198 (第3-152図)

B-SB 198は複雑に重複する礎盤建物の中で、建物を抽出した後、なお、柱穴列が存在し、それをまとめたものである。このため、多少、柱穴間の距離にバラツキがある。特に、このB-SB 198は他と方位も異なり、N-15°-Wを示す。また、南側の4個の柱穴列と北側の柱穴列の間は394cmで、間があき、建物構造以外も考えられる。

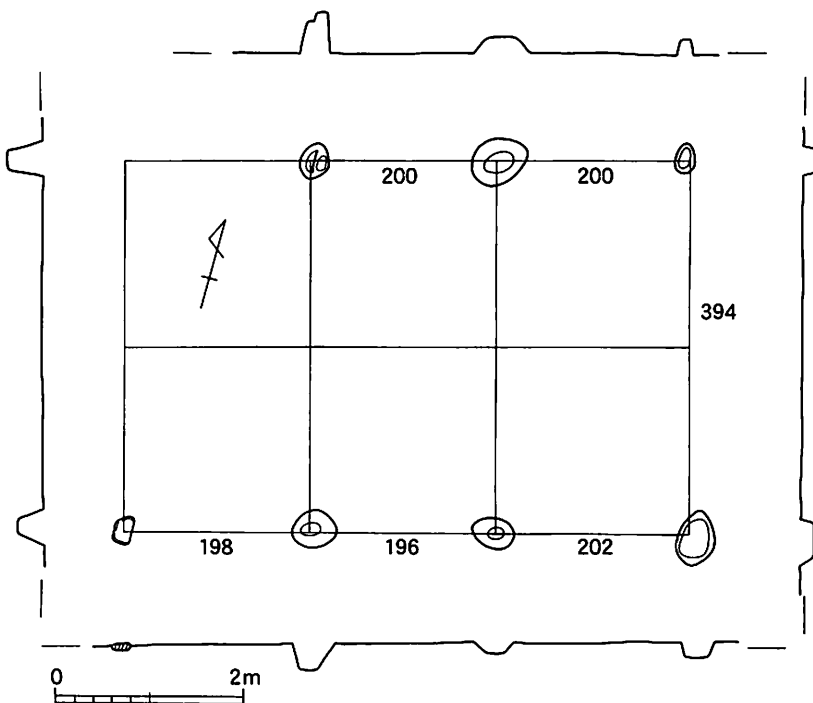
遺物は南東隅の柱穴と北側柱穴列の中央から、ロクロ成形による在地系土師質土器が出土しており、14世紀代と考える。

B-SB 199

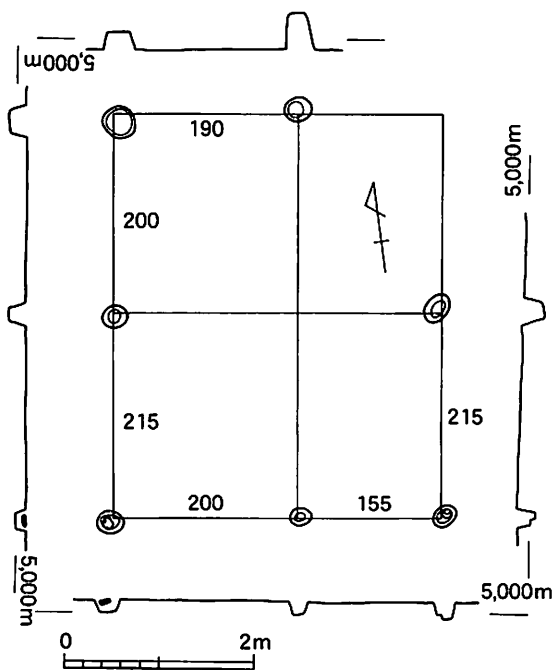
(第3-153図)

B-SB 199は調査区の南西隅に並ぶ柱穴列を組み合わせた遺構である。7個の柱穴で構成される、南側の3ヶ所と西側の3ヶ所の柱穴は直角になるが、柱穴間の距離は南北方向が北から200cm、215cmとほぼ等距離であるが、南側の列は西から200cm、155cmと不揃いである。

遺物は、西側列の中央から古代の遺物が出土しているのみで、時期は不明である。



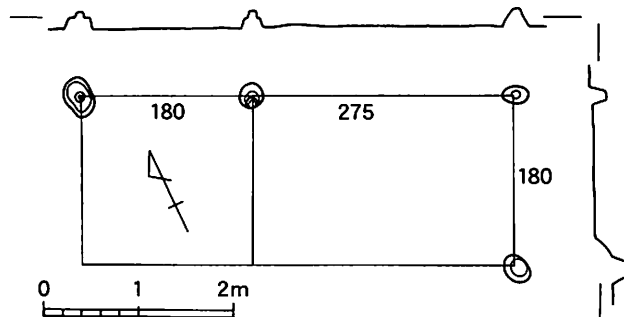
第3-152図 B-SB198実測図



第3-153図 B-SB199実測図

B-SB 200 (第3-154図) 4ヶ所の柱穴で構成され、北側の3ヶ所と南側の1ヶ所は直角になる。柱間の距離は北側が180cmと275cm、東側は180cmと微妙な間隔である。

遺物は東南隅の柱穴からロクロ成形による在地系土師質土器の小片が出土している。



第3-154図 B-SB200実測図



### 5. 柱穴及び柱穴状遺構

府内町跡20次調査B区からは、前項で報告した礎盤建物を構成する遺構として、柱穴が数多く検出された。また、それに類似する小竪穴も調査区の各所で検出された。ここでは、そうした遺構のうち、主要なものと、それから出土した遺物を報告する。

#### B-SP133 (第3-155図)

B-SP133はB-SB196の北西隅の柱穴である。遺構の規模は、上面径45cm、検出面からの深さ35cmで、遺構内下部に扁平な川原石を据え、その上にさらに1個小さい川原石を重ねている。また、その上位には第3-156図に図示したロクロ成形による在地系土師質土器の皿3点と坏1点が埋納された状態で検出された。この4点は出土位置から考えると、柱を抜き取った後に納められた、建物廃棄にかかわる祭祀行為と考えられる。

第3-156図の出土遺物の3点の皿は、口径が8.2cm、8.1cm、8.1cm、底径は6.2cm、6.8cm、6.4cm、器高は1.4cm、1.3cm、1.4cmとほぼ同じ規格であるが、断面を見ると、1は底部が外側に反り、2は内側に反る。また、3は底部の器壁が厚く、それぞれが異なる。4は図上復元であるが口径11.7cm、底径8.3cm、器高3cmである。

遺構の時期は坏の出土が少ないが14世紀後葉から末葉と考える。

次に第3-157図に遺物が出土した柱穴を中心に図化し、第3-158図1~14に遺物を図示した。

B-SP032は調査区の東南隅のM-47区で検出された。遺構の規模は、上面径は40cm、深さ25cmの柱穴状の遺構で、上位から第3-158図1の土師器の坏が出土した。口径は15cmで、高台が廻る底径は7.9cm、器高5.5cmで、全面をヘラ磨きで器面調整している。8世紀後半の遺物である。

B-SP051も調査区の東南隅のM-47区で検出された。遺構の規模と形態は長軸方向に約60cm、短軸方向に約40cmの小規模な土坑である。深さ20cmで平坦な底面を検出し、さらに、深さ17cmと10cmのピットが確認された。遺物は上面で第3-158図2が出土した。口径は13cm、底径7.2cm、器高3.8cmで、底部は回転ヘラ切である。

B-SP052はB-SB193の東側列柱穴の南から2番目の柱穴である。遺構の規模は南北42cm、東西37cmで、深さは23cmである。川原石は底面から上位に据えられている。出土遺物は第3-158図3~5で、3・4はロクロ成形による在地系土師質土器の皿と坏である。4は口径11.8cm、底径9.3cm、器高2.7cmである。5は高台が廻る底径8.6cmの古代の坏の底部である。

時期は14世紀中葉から後葉と考える。

B-SP053はB-SB197の南西隅の柱穴である。遺構の規模は上面径70cmであるが歪である。深さは17cmで浅い。出土遺物は第3-158図6で、口径12.8cm、底径7.5cm、器高3.8cmである。底部は回転ヘラ切である。この他にも古代と思われるヘラ磨きの土器片が数点出土している。

時期は8世紀後半と考える。

B-SP055はB-SB197の東南隅の柱穴である。遺構の規模は南北60cm、東西54cmで、深さは35cmである。底面にはさらにピットが検出された。出土遺物は第3-158図7~9で、7は口径13.5cm、底径8cm、器高3.8cmである。底部は回転ヘラ切で、8世紀後半と考える。8は口径10.4cm、底径3.8cmで小さい高台が廻り、器高は2.9cmの吉備系土師器である。9は鍋であろうか、内外面はヘラ磨きである。

時期は、吉備系土師器が出土しており、14世紀代と考える。

B-SP062はB-SB191の東側列の南から4番目の柱穴である。遺構の規模は南北54cm、東西40cmで、深さは8cmと17cmの2段掘りである。出土遺物は第3-158図10で、両面がヘラ磨きで、8世紀後半と考える。しかし、ロクロ成形による在地系土師質土器の皿の完形品や坏の破片が出土していることから、時期は14世紀代と考える。

B-SP067はB-SB194の北側列の東から2番目の柱穴である。遺構の規模は上面径38cmで、深さは20cmである。内部には上面が平らな川原石が据えられており、さらに固定するためか、拳大の礫が詰められている。遺構内からは龍泉窯系青磁の小破片が出土している。

B-SP081はL-46区で検出された遺構で、規模は上面径約60cmで、深さは30cmである。出土遺物は第3-158図11・12で、11は口径13.3cm、底径7.6cm、器高3.6cmで、底部は回転ヘラ切である。12は口径13.6cmで、8世紀後半と考える。

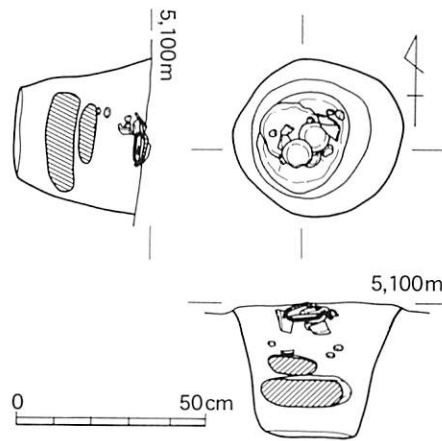
B-SP084はL-46区で検出された遺構で、規模は南北54cm、東西46cmで、深さは14cmである。出土遺物は第3-158図13で、底径6.6cm、底部は回転ヘラ切である。8世紀後半と考える。

B-SP101はL-46区で検出された遺構で、規模は南北47cm、東西44cmで、深さは15cmと24cmの二段掘りになっている。

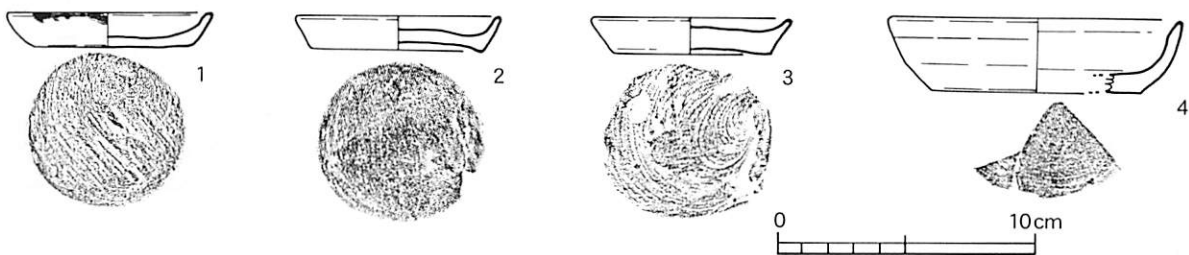
B-SP127はL-47区で検出された遺構で、規模は南北24cm、東西25cmで、深さは20cmである。遺構内からは、中国産白磁、ロクロ成形による在地系土師質土器、東播系須恵質土器、須恵質土器などの小破片が礫と共に出土している。時期は14世紀代と考える。

B-SP162はK-43区で検出された遺構で、規模は南北41cm、東西34cmで、深さは24cmである。遺構内からは遺物の出土はなかった。

B-SP185はK-42区で検出された遺構で、規模は南北70cm、東西38cmで、深さは14cmであるが、南側に南北22cm、東西30cm、深さは18cmのピットが掘り込まれている。遺構内からは第3-158図14で口径11.8cm、器高2.3cmの京都系土師器が出土している。

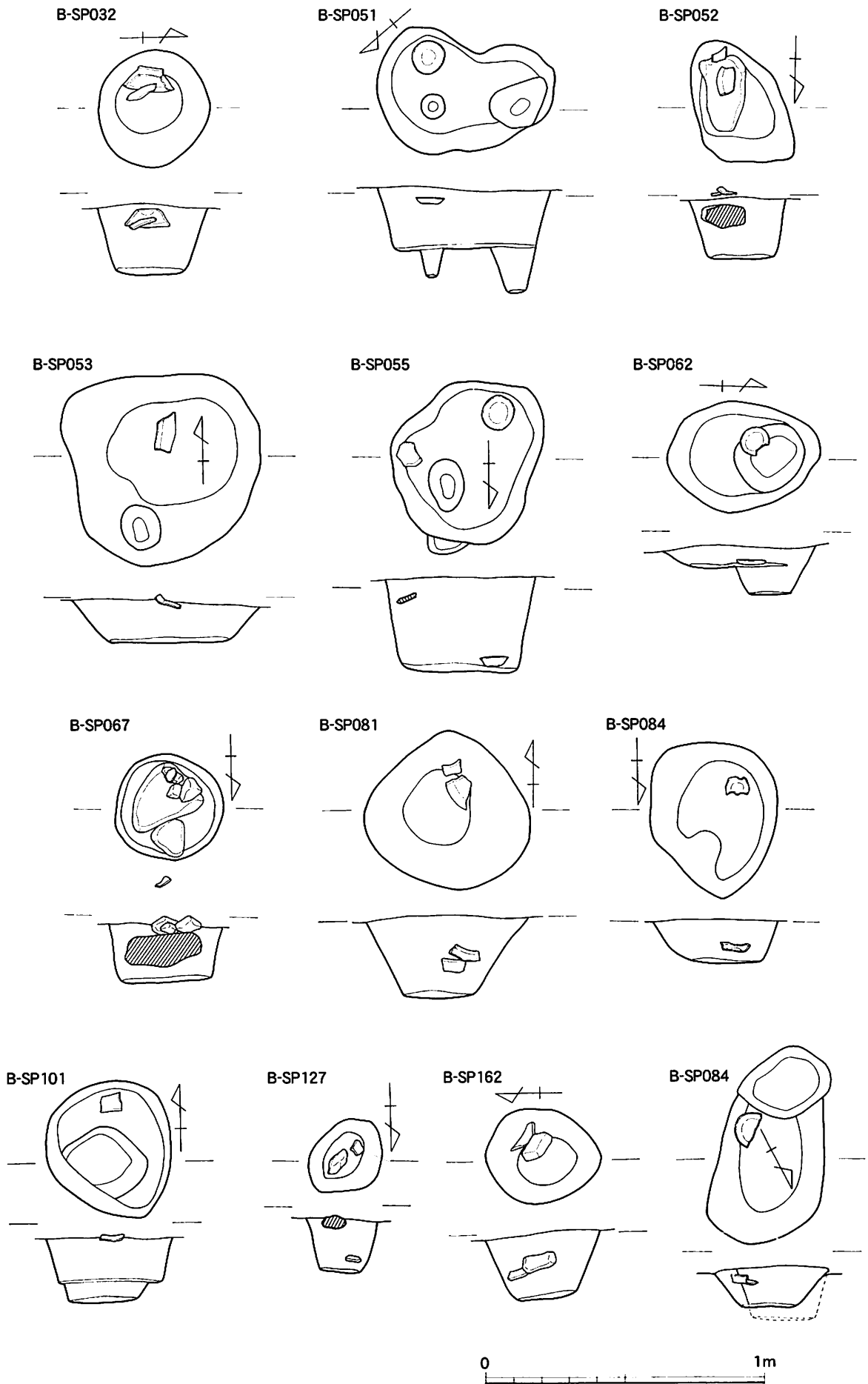


第3-155図 B-SP133実測図



第3-156図 B-SP133出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物



第3-157図 府内町跡20次調査B区主要柱穴出土実測図

6. 各土坑・柱穴出土遺物

府内町跡20次調査B区からは大小さまざまな遺構が検出され、前項まで、遺構とそこから出土した遺物を報告した。この項では、各遺構から出土した主要な遺物を第3-159図に図示し報告する。

土錘

B-SP027からは1の紡錘形の土錘が出土している。一部を欠くが長さ2.8cm、最大径1.3cm、重さ4.1gである。

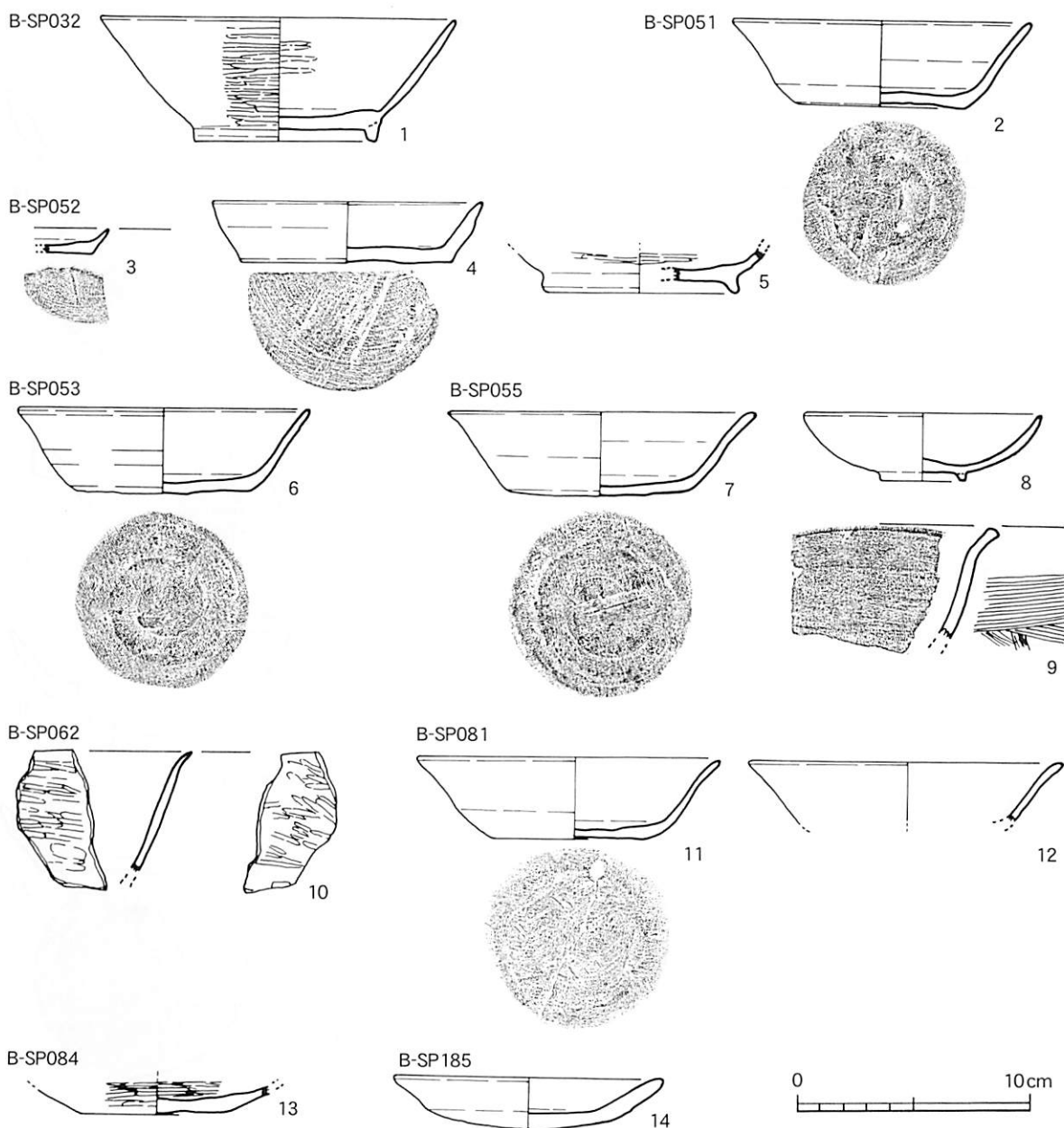
B-SP065からは2のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は口径12.1cm、底径8.5cm、器高2.7cmで口縁部は薄く尖るように仕上げている。

B-SP070からは3の口径11.6cm、底径8.7cm、器高3cmのロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。口縁部は底部近くのにの器壁を厚くし、口縁端部に向け、ハの字状に開く。

土錘

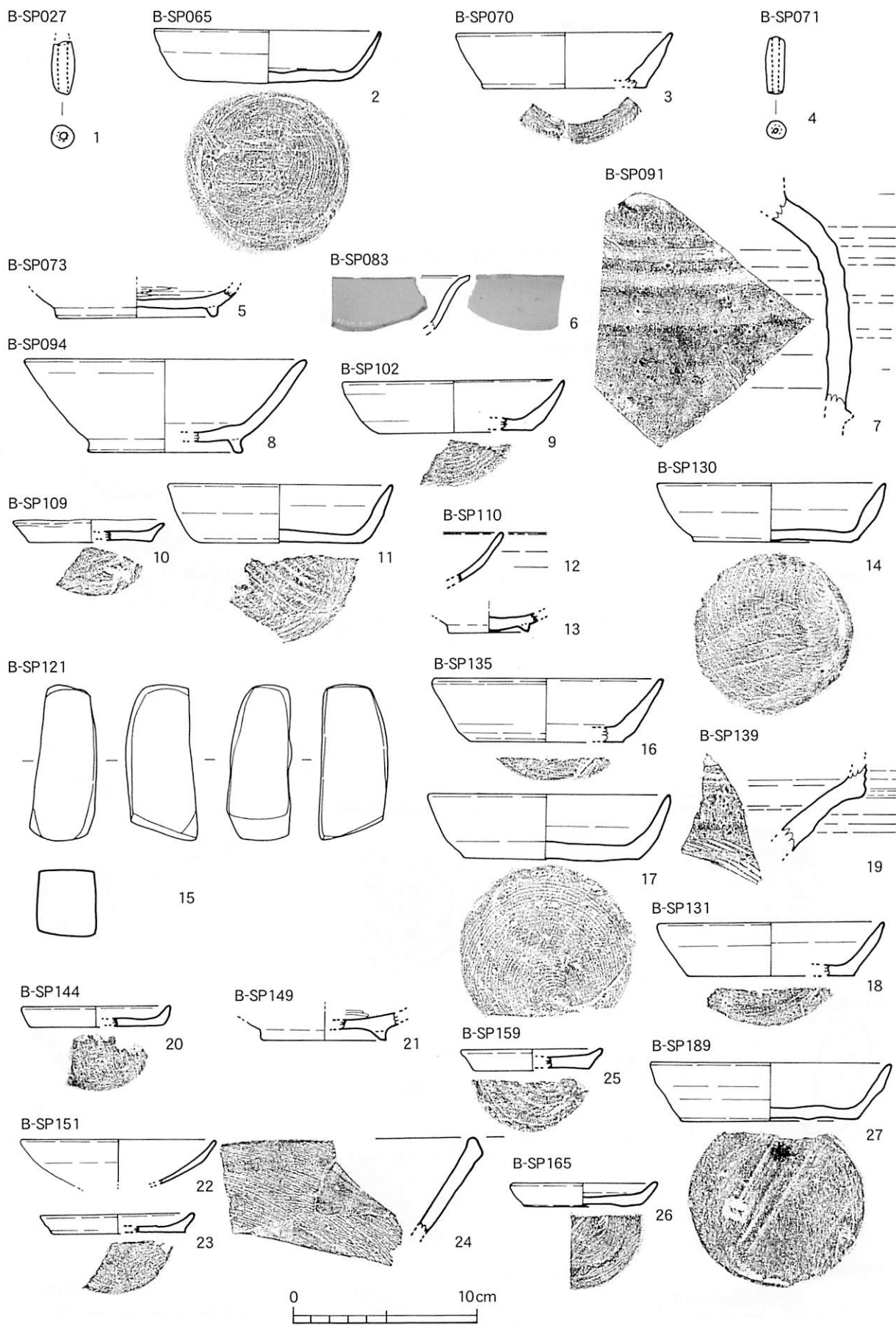
B-SP071からは長さ3.1cm、最大径1cm、重さ3gの紡錘形の土錘が出土している。

B-SP073はB-SB191を構成する柱穴であるが5の高台が付き、底径8.8cmの8世紀後半の坏が出土している。器面は横方向のへら磨きである。



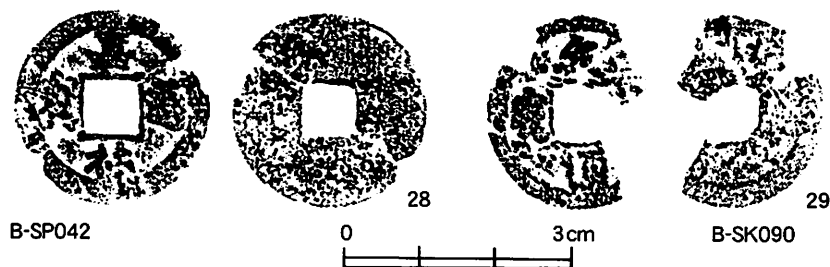
第3-158図 府内町跡20次調査B区主要柱穴出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物



第3-159図 府内町跡20次調査B区各柱穴出土遺物実測図

- 白磁 B-SP083はB-SB197の南西隅の柱穴である。出土した6は中国産白磁で、口禿である。
- 備前系 B-SP091からは7の備前系陶器が出土している。器形は胴部に廻る突帯付近まで破片が残り、水屋甕と考えられる。
- B-SP094からは8の高台付き坏が出土している。法量は、口径15.2cm、底径8.3cm、器高5.1cmで8世紀後半の土師器と考える。
- B-SPI02からは9のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は、口径12cm、底径8.4cm、器高2.8cmで底部周辺の器壁が厚く、14世紀後葉と考える。
- B-SPI09からは10・11のロクロ成形による在地系土師質土器の皿と坏が出土している。法量は、10が口径8.3cm、底径6.6cm、器高1.2cmで、11は径12.2cm、底径9cm、器高3.2cmで口縁部中位の器壁が厚く、14世紀中葉と考える。
- 吉備系土師器 B-SPI10からは12・13の吉備系土師器が出土し、13の低い高台が廻る底部の径は4.4cmである。
- 砥石 B-SPI21からは15の砥石が出土している。長さは8.5cm、幅は最大3.6cmで、全面使用されている。
- B-SPI30からは14のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は口径12.3cm、底径8.6cm、器高3.2cmで口縁部の器壁は中位が厚く、断面が紡錘形になる。
- B-SPI31からは18のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は口径12.3cm、底径9cm、器高3cmで口縁部の器壁は中位から下位が厚くなる。
- B-SPI35からは16・17のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は、16が口径12.6cm、底径8.3cm、器高3.4cmで、17は口径13.2cm、底径9.5cm、器高2.6cmで2点とも口縁部下位の器壁が厚く、14世紀後葉と考える。
- 備前系 B-SPI39からは19の備前系陶器の播鉢が出土している。斜め摺り目で16世紀末葉である。
- B-SPI44からは20の口径8cm、底径6.9cm、器高1.1cmの在地系土師質土器の皿が出土している。
- 吉備系土師器 B-SPI49からは21の高台が付き底径6.8cmの古代の坏が出土している。
- B-SPI51からは22～23が出土しており、22は口径10.4cmの吉備系土師器である。23は口径8.3cm、底径7.2cm、器高1cmの在地系土師質土器の皿で、24は内面刷毛目の瓦質土器の鉢である。
- B-SPI59からは25の口径7.8cm、底径6.1cm、器高1.2cmの在地系土師質土器の皿が出土している。
- B-SPI65からも25の口径8cm、底径6.4cm、器高1.3cmの在地系土師質土器の皿が出土している。
- B-SPI89からは27の口径13cm、底径9.4cm、器高3.1cmロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。口縁部の器壁は中位が厚い。
- 第3-160図は、各遺構から出土した銅銭である。
- B-SP042からは28の真書体で書かれた銅銭である「嘉祐通寶」が出土している。初铸年は1056年(北宋)である。
- B-SK090から出土した29の銅銭は行書体で書かれた「元」・「通」・「寶」が読めるが、銭貨名は不明である。



第3-160図 府内町跡20次調査B区土坑・柱穴出土銅銭実測図

## 第2節 遺構と遺物

### 7. 整地土及び包含層

府内町跡第20次調査B区の調査では、遺構を検出するまで整地層や遺物包含層が形成されており、どの遺構に属するか不明な遺物が多く出土した。ここでは、それらを図化し、第3-161図～第3-170図に報告する。

漳州窯系  
龍泉窯系  
白磁  
第3-161図1～13は貿易陶磁器及び瀬戸美濃系陶器である。1は口径12.3cm、底径4.8cm、器高5.1cmの漳州窯系青花碗である。2・3は龍泉窯系青磁碗で外面に鎬蓮弁が施文されている。4は黒褐色の釉がかかり、底部は露胎である。焼成の悪い青磁の可能性はある。5は口径5cmの中国産白磁の小坏である。

越州窯系  
タイ産四耳壺  
瀬戸美濃系  
6は底径5.4cmの越州窯系陶磁器の底部である。7～10は白泥釉を塗ったタイ産四耳壺の破片である。11～13は瀬戸美濃系陶器で、11は口径11.6cmの天目茶碗である。12は口径10.5cm、底径5.9cm、器高は2.5cmの皿であるが、口縁部は刻目が加えられ輪花状になる。13はヘラ描きされた上に緑色の釉がかかる梅瓶の胴部と思われる。

常滑系  
備前系  
第3-161図14は常滑系陶器の壺と考える。口縁部が肥厚している。

第3-161図15～23と第3-162図24～31は備前系陶器である。15は口縁部が内湾する鉢である。

16は口径6.6cmの小型の壺である。17は口径13.4cmの口縁部が直立する広口の壺と考える。18は注口部である。19は底径6.2cmの徳利の底部と思われ、火罨が見られる。20・21は壺の底部と思われる。底径は20が9cm、21が10.2cmである。22・23は口縁端部が内側に突き出る皿である。第3-162図24は口径39.4cmで、口縁部が玉縁状に肥厚する壺である。25～31は挿鉢である。25は口径31.6cmで、器壁は胴部から口唇部まで、同じ厚さである。26は口径27.2cm、底径13.2cm、器高12.4cmの挿鉢で、口縁部の形態は、先端部が肥厚する。27～31は同じタイプの挿鉢と考える。いずれも口縁部が立ち上がり縁帯を形成し、凹線が廻る。また、口唇部に接する内面に凹線状の窪みが廻る。挿鉢は明確でないが、斜め挿り目である。口径が復元できる31は35.8cmである。

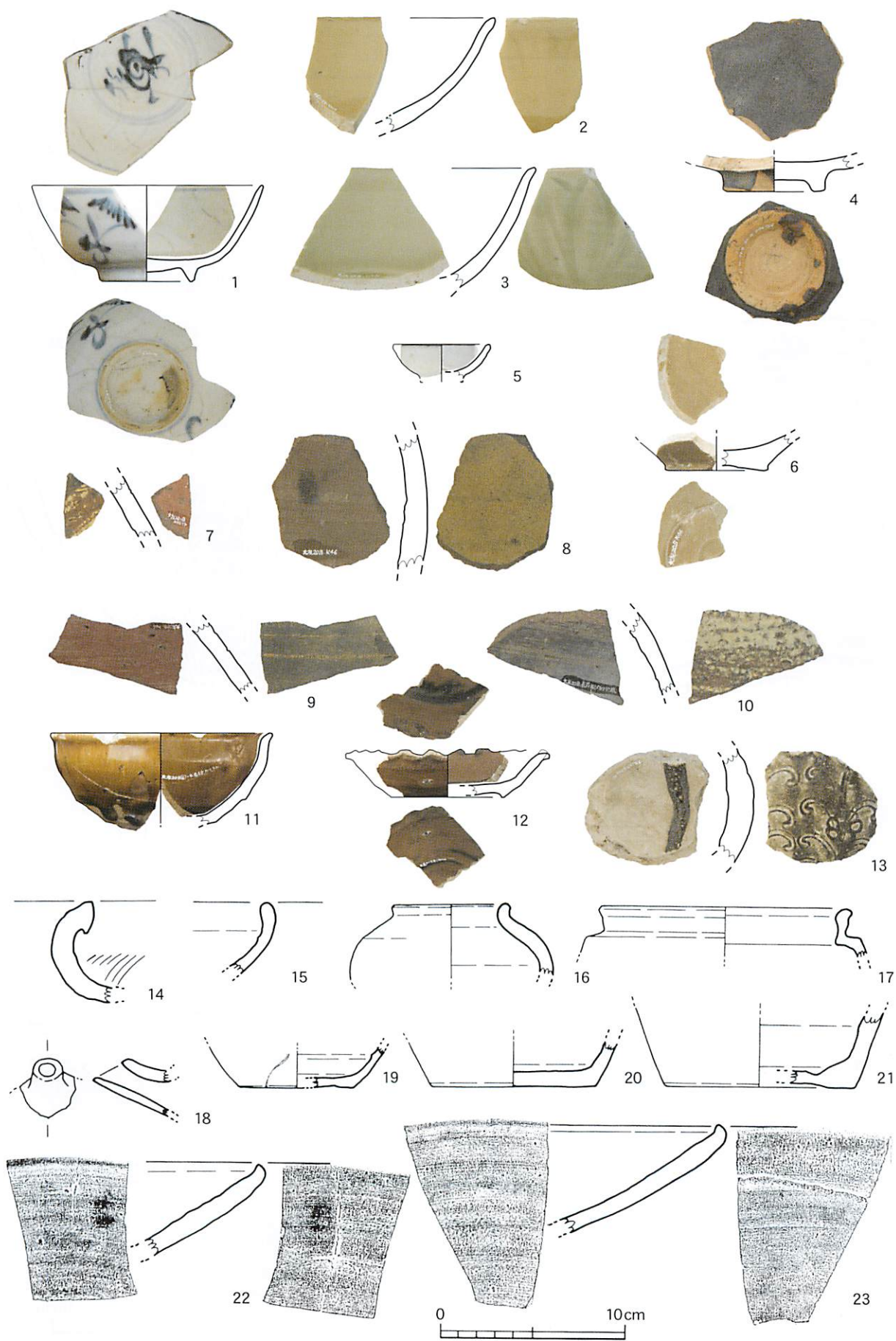
第3-162図32～41・第3-163図24～56はロクロ成形による在地系土師質土器である。32～41は皿である。口径は8.6cmから7.2cmで、平均は7.7cmである。底径は7cmから5.4cmまであり、平均は6.4cmである。器高は40が高く1.5cmであるが、他は1cm前後で、平均すると1.1cmである。42は口径が7.8cm、底径6cm、器高2cmで、小型の坏である。第3-163図43～56は坏である。口径は12.8cmから10cmまであり、底径は6.4cmから9.6cmまでである。また器高も2.1cmから3.7cmまでである。このように、大きさに差があり、口縁部の形態も、器壁が中位から上位にかけて厚くなる43～45・49・50・54や底部に近い下位が厚くなる48・51・53・55などがあり、時期幅の大きさを感じる。

吉備系土師器  
第3-163図57と58は吉備系土師器である。57は口径11.2cm、低い垂な高台の径は約4.3cm、器高は3.2cmである。また、58の高台の付く底部の径は4.5cmである。

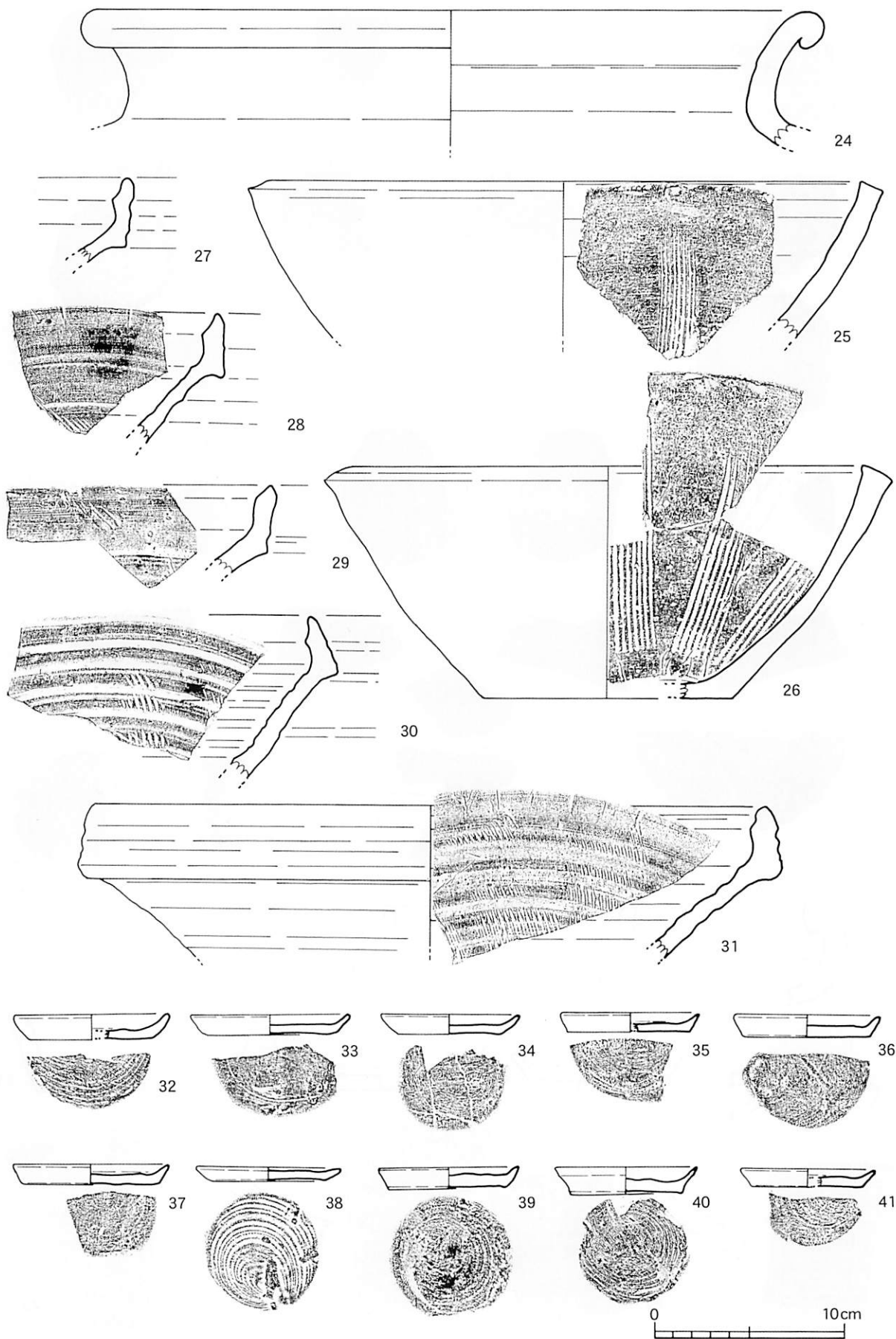
第3-163図59～74は京都系土師器である。京都系土師器は法量分化しており、59～62は口径が8.4cm～9.2cmで、最小のグループである。次に小さいグループが66の口径10.6cmである。そして、口径12cm～12.8cmの65・66・68・69・71～73グループがあり、4つめのグループが74の口径14cmである。また、「府内」出土の京都系土師器には、こうした皿形の器形と異なり、64・67・70は器高が2.5cm以上あり、坏形をするものもある。66・71の口縁部周辺にはススが付着し、灯明皿として再利用されている。

灯明皿  
第3-164図の75～79・81は口縁部が屈曲する土鍋である。サイズは多様であり、75は口径21.4cmである。76は口径24.6cmで、口縁端部を外側に折り返して口縁部を形成している。77も同様で口縁端部を折り返している。78は口径29.4cmで口縁部短く屈曲する。79は口径32.8cmで屈曲する口縁端部が肥厚する。81は口径34.8cmで口縁部が直角に屈曲する。土鍋の器面調整は、内面が横方向の刷毛目で、外面は79・81に刷毛目も残るが、横撫でや指圧痕が残る。

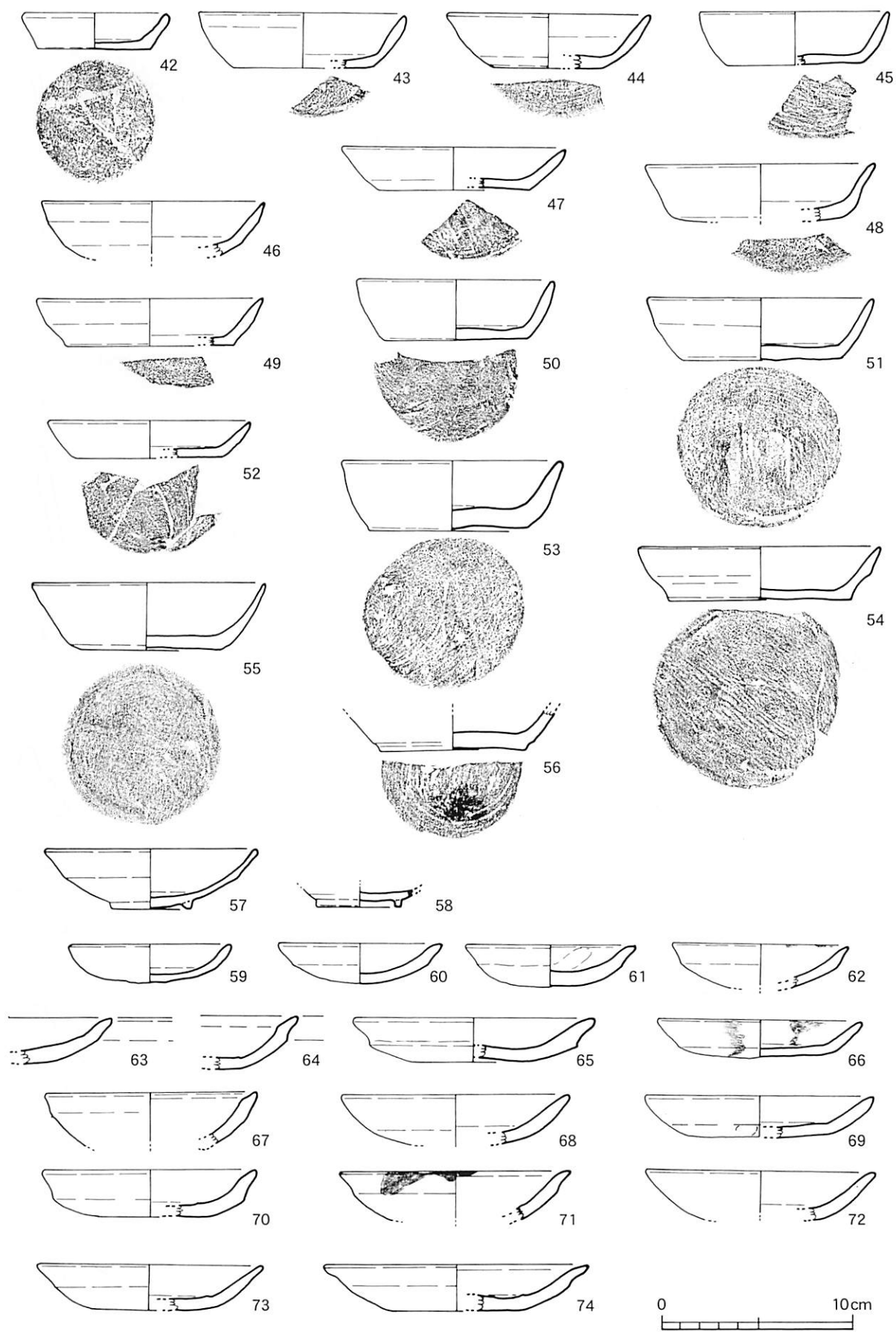




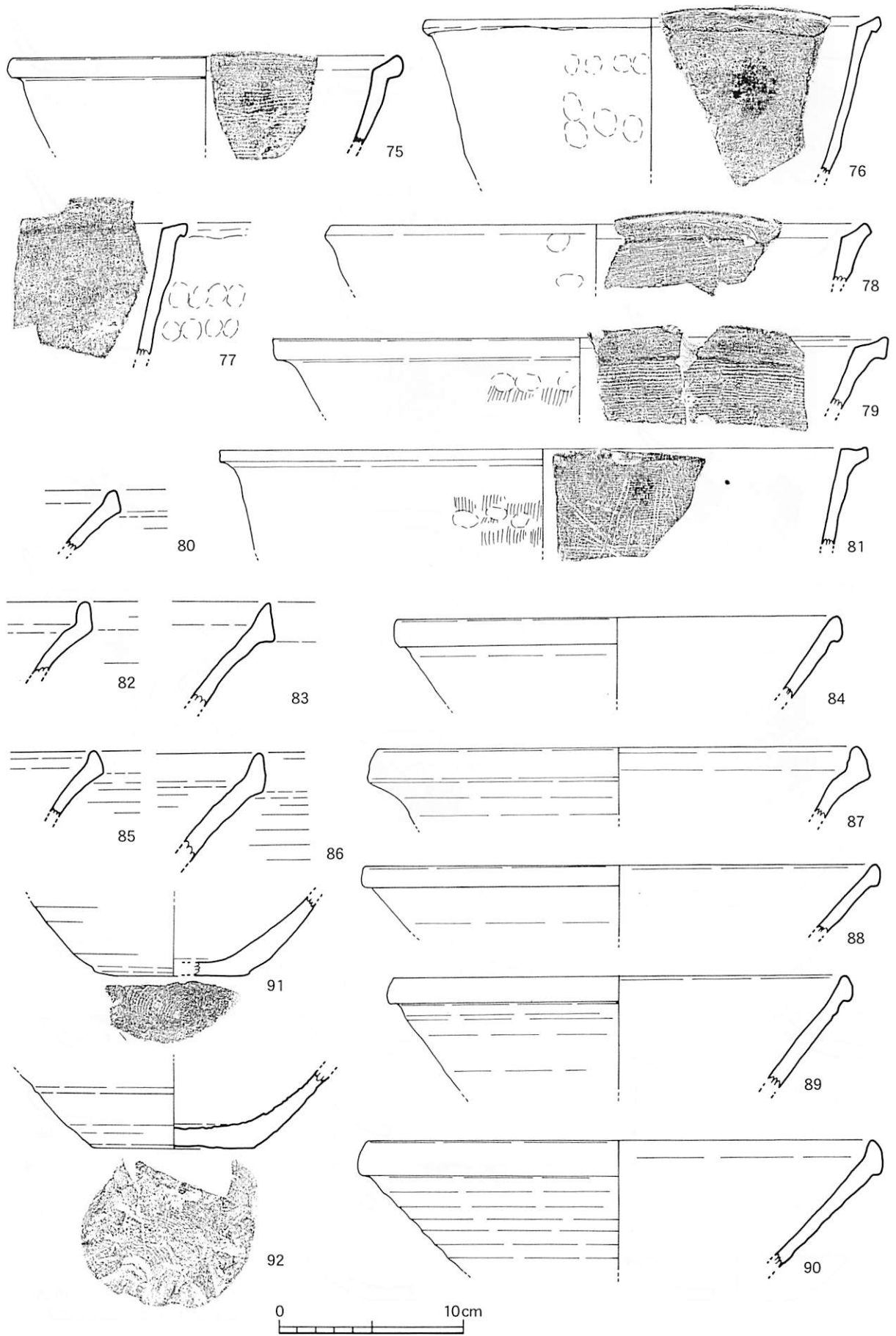
第3-161図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(1)



第3-162図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(2)



第3-163図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(3)

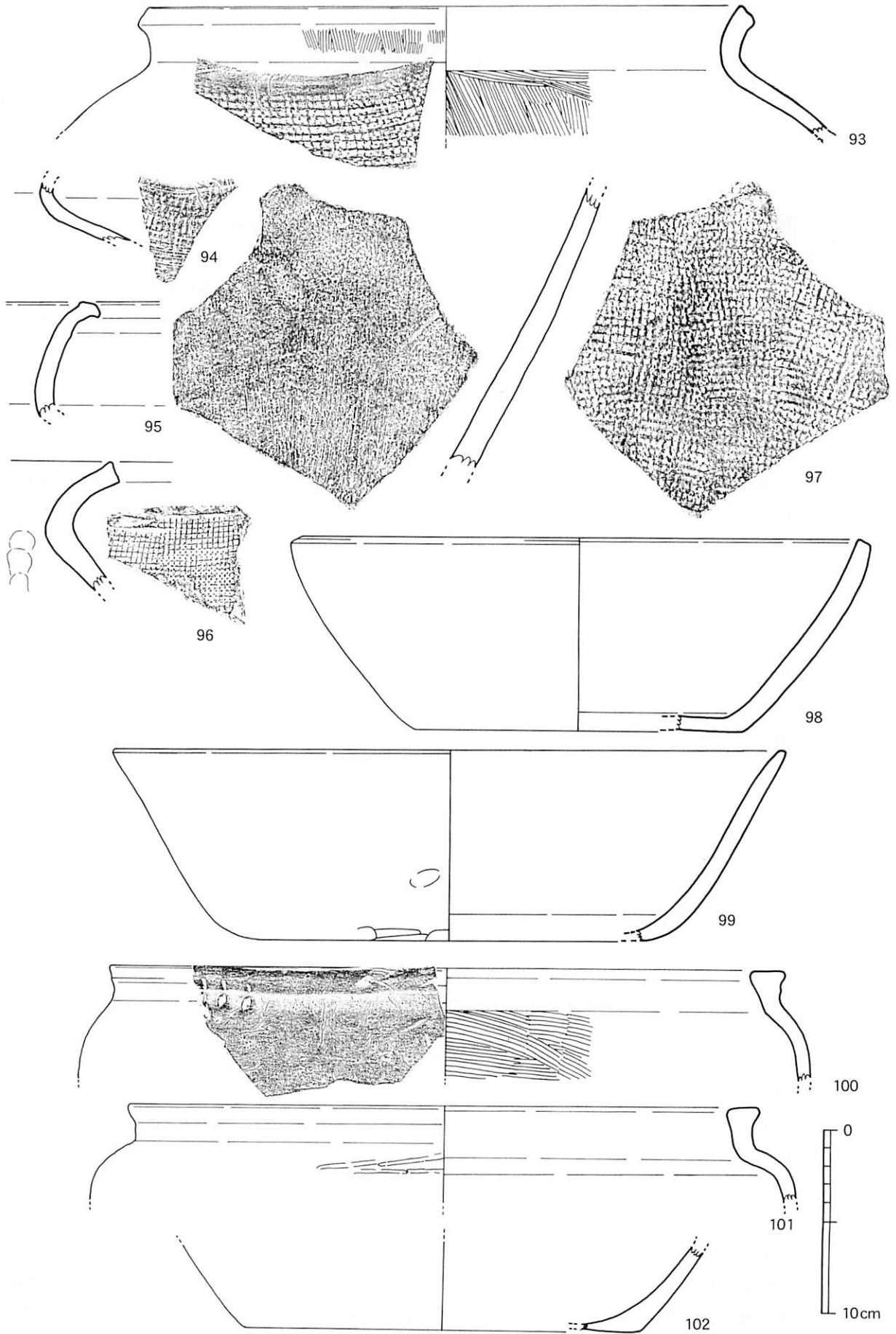


第3-164図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(4)

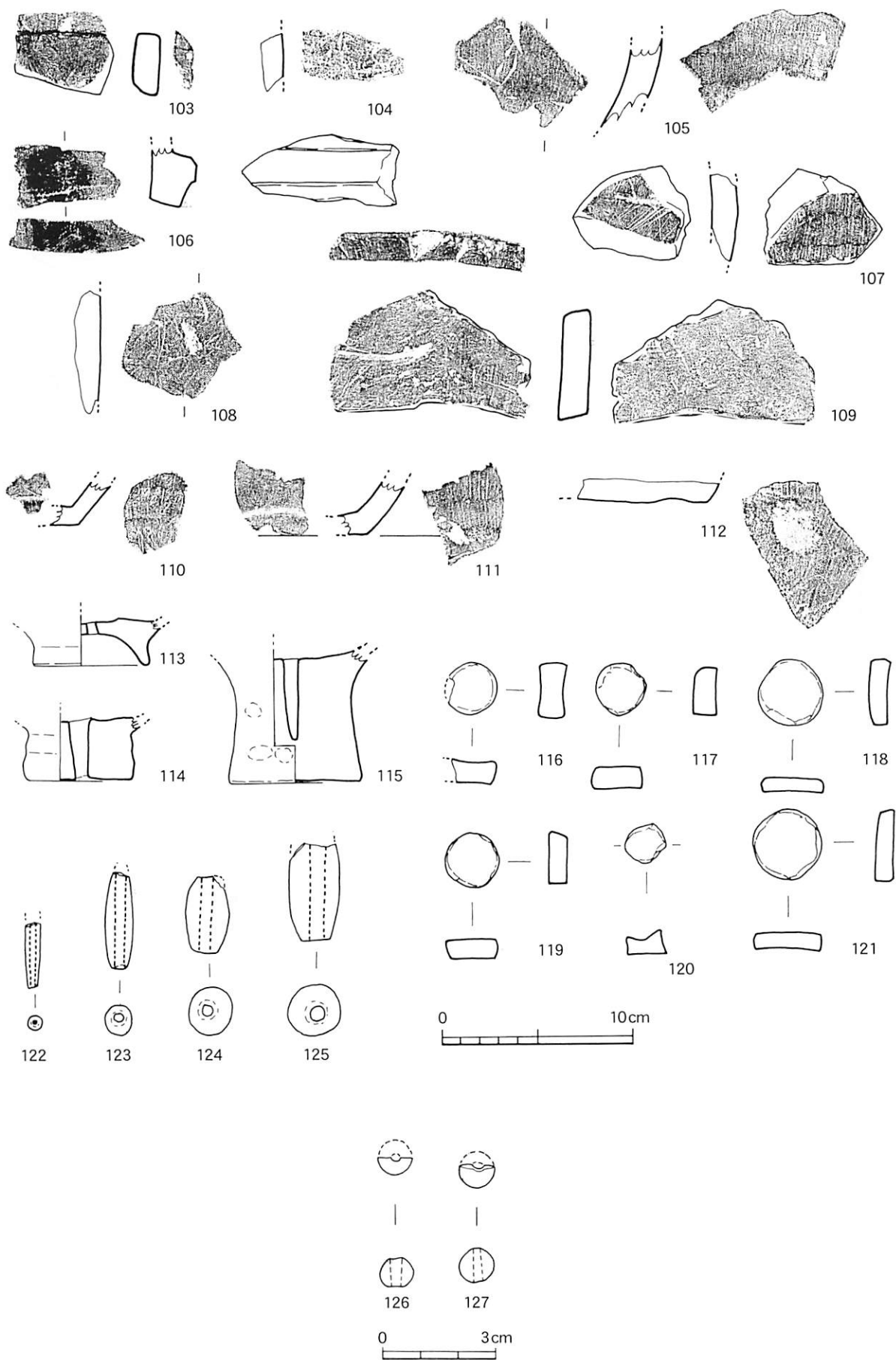
- 東播系 第3-164図の80・82～92は東播系須恵質土器の鉢である。直線的に外傾し、口縁端部の外側が肥厚する特徴を持つが、その形態はさまざまである。80や83、口径24cmの84、口径27.8cmの88、口径24.6の89は単純に口縁外端部が肥厚し、断面が三角形になる。82や86、口径26cmの87、口径27.6cmの90などは口縁端部が屈曲し直立するように肥厚する。このため、内側に屈曲線が入る。底径8.3cmの91と底径9cmの糸切り底の底部の資料は東播系須恵質土器のものである。
- 亀山系 第3-165図93～97は亀山系須恵質土器の甕である。器面は口縁部が横撫で調整されるが、93の外側には刷毛目が残る。また、胴部の外面は格子目の叩き、内面は93が刷毛目、96には指圧痕が残り、97は撫でで仕上げられている。93の口径は33.2cmである。
- 第3-165図98～102は瓦質土器である。98は口径31.4cm、底径18cm、器高10.4cmの鉢である。口縁部はやや内湾気味になり、器面は内外面とも丁寧な撫で仕上げである。99は口径36.6cm、底径23cm、器高10.3cmで、口縁部は外反気味になる。器面調整は内外面とも丁寧な撫でであるが、外面下位には指圧痕が残る。100・101は同じ器形の壺である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は内外に肥厚する。器面調整は外面がヘラ撫でであるが、100の胴部内面は刷毛目である。口径は100が36.8cm、101が34.4cmである。102は底径21.4cmの底部である。
- 滑石製石鍋 第3-166図103～112は滑石製石鍋の破片である。106は口縁部外面に付く鏝の部分である。110～112は底部の破片である。器面は縦方向に短い単位で、金属製工具により削りを入れ、形を整えている。しかし、図示した資料は破片の割れ口を研磨し再加工している。大きさは109が最大で190.3gであるが、110は20gしかない。
- 第3-166図113～115は燭台と考える遺物である。113はロクロ成形による在地系土師質土器に脚を付けたもので、底径は6cmである。上面の皿部には焼成前の穿孔がある。114は高さ約3cmの円柱の上面を皿状に仕上げ、中心部に底面まで貫く、焼成前の穿孔がある。底径は5.8cmである。115も径6.8cm、高さ6.6cmの円柱の上面を皿状にし、中央部に深さ4.2cmの焼成前の穴が開けられている。燭台としては、この中央部の穴に蠟燭を支える棒を立てたと推測する。
- 燭台 第3-166図116～121は土器片の周辺を敲打・研磨し円形に仕上げた土製品である。116は一部を欠くが直径2.9cm、重さ10.8gである。117は直径2.7cm、重さは9.3g、118は直径3.5cm、重さ12.2gである。119は直径3.1cm、重さは10.1g、120は直径2.1cm、重さ5gである。121は直径3.7cm、重さは14.5gである。
- 土錘 第3-166図122～125は土錘である。122は一部を欠くが長さ3.4cm、最大径0.8cm、重さ2.5gである。123は一部をわずかに欠くが長さ5.1cm、最大径1.4cm、重さ9.3gである。124は長さ4.1cm、最大径2.3cm、重さ18.1gである。125は一部を欠くが長さ5.2cm、最大径2.7cm、重さ34.4gである。いずれも紡錘形をし、長さ6cm前後を想定するが、重量に差がある。長さに制約があり、重量を増すためには径を大きくしたものとする。
- ガラス製の玉 第3-166図126・127は緑色をしたガラス製の玉である。2点とも半分欠けており、126は直径0.9cmで、重さ0.7g、128も直径0.9cmで、重さ0.8gである。
- 第3-167図128～149は古代の土器である。128は口径16.6cm、器高1.5cmの坏蓋である。129は口径17cm、器高2.8cmの皿と考える。130～135は坏である。130は口径13.8cm、底径6.5cm、器高3.6cmで口縁端部が外反する。131は口径12.8cm、底径は不明であるが、器高3.1cmである。132は口径13cm、丸底気味の底部は底径7cm、器高3.1cmである。133は口径13.4cmで、134は口径13.4cm、底径7.6cm、器高4.2cmである。135は口径15cm、底部は丸底気味で、器高3.7cmである。
- 136～140は高台付の坏である。137は口径12.8cm、底径7.4cm、器高3.3cmであるが、瓦質に近く中世の遺物の可能性がある。底径は136が7.8cm、138は9.6cm、139が11.5cm、140は8.2cmである。以上の蓋や坏の器面は回転を利用したヘラ磨きで仕上げられている。



第2節 遺構と遺物



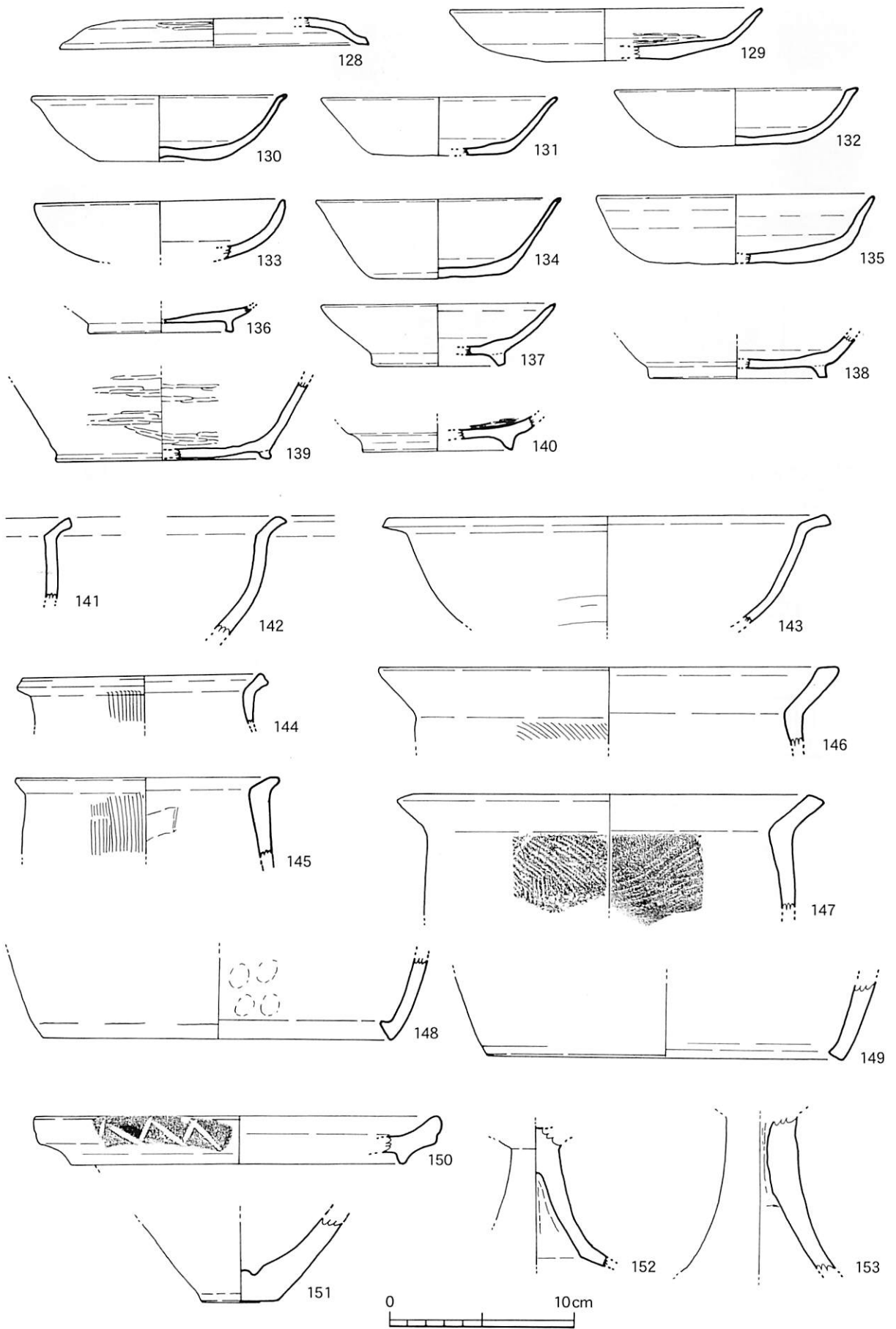
第3-165図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(5)



第3-166図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(6)



第2節 遺構と遺物



第3-167図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(7)

141～147は甕である。142・143は口径に比べ器高が低い鉢状を呈する。143の口径は24.2cmである。144～147は胴部が張らず口縁部が外反する甕である。器面調整は口縁部と胴部内面が横方向の撫であるが、胴部外面は縦方向の刷毛目である。口径は144が13.4cm、145は14.2cm、146が24.8cm、147は21.4cmである。

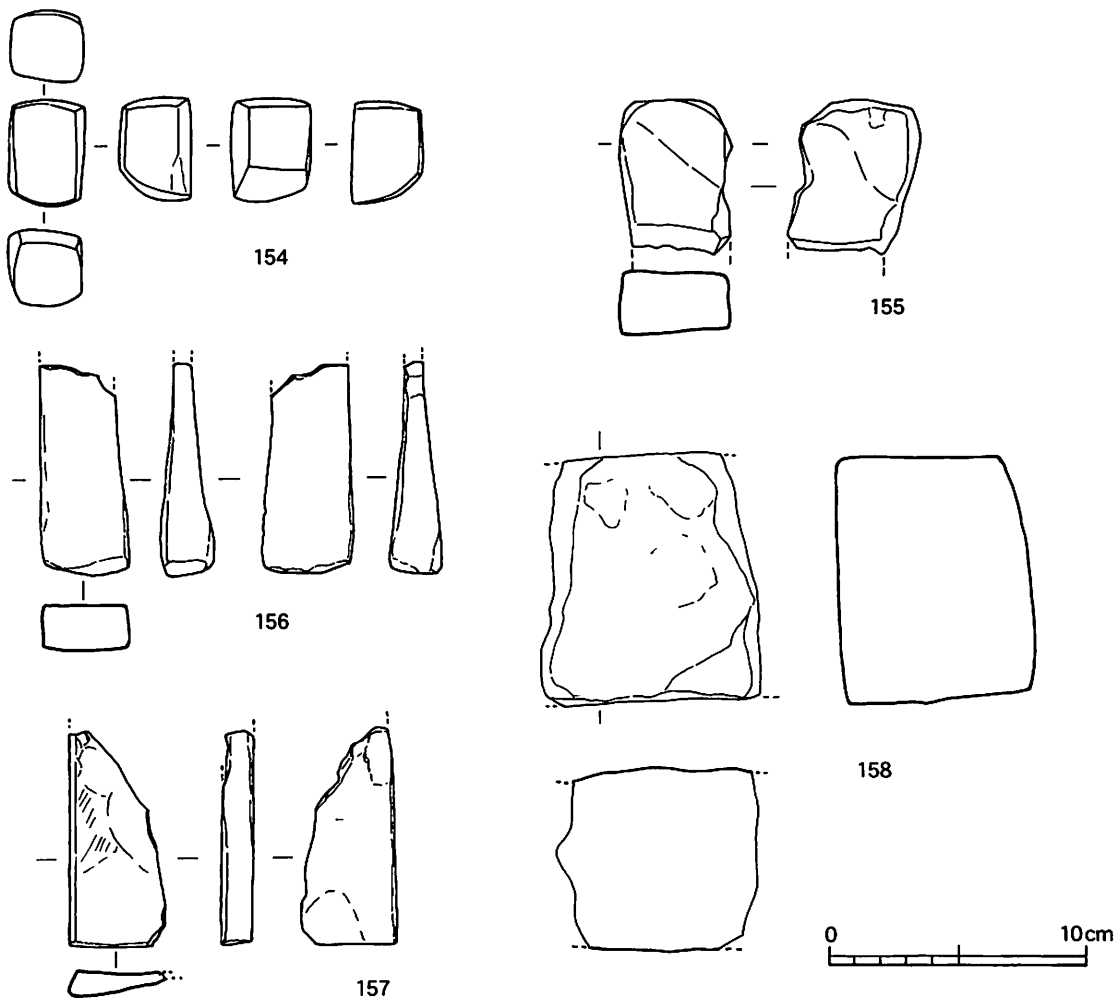
148～149は甕の底部と考える。底径は2点とも19cmで、器面調整は撫で、148には指圧痕が残る。第3-167図150～153は弥生土器である。150は外面に鋸歯文のある口径22cmの壺形土器の口縁部である。151は底部である。152と153は高坏の脚部である。これらの4点は弥生時代後期前半と考える。

弥生土器  
砥石

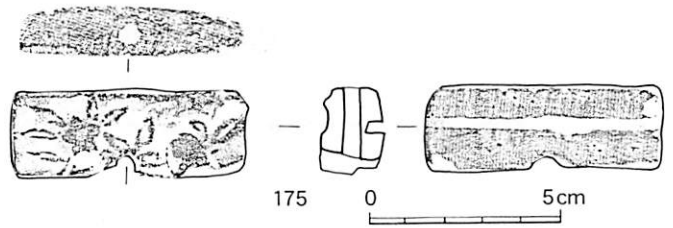
第3-168図154～158は砥石である。154は長さ4cm、幅2.5cm、厚さ2.6cm、重さ53.6gで、全面磨り面の砥石である。155は一部を欠くが、長さ5.9cm、幅4.2cm、厚さ2.9cm、重さ106.4gである。156は使用のため中央部が薄くなり、その部分が折れている。残された大きさは長さ8.3cm、幅3.4cm、厚さ0.7～2cm、重さ69.2gである。157は大部分を欠く。長さ8.7cm、幅3.8cm、厚さ1.2cm、重さ45.4gである。158も一部の破片である。長さ9.3cm、幅8.7cm、厚さ7.6cm、重さ509.6gである。

銅銭

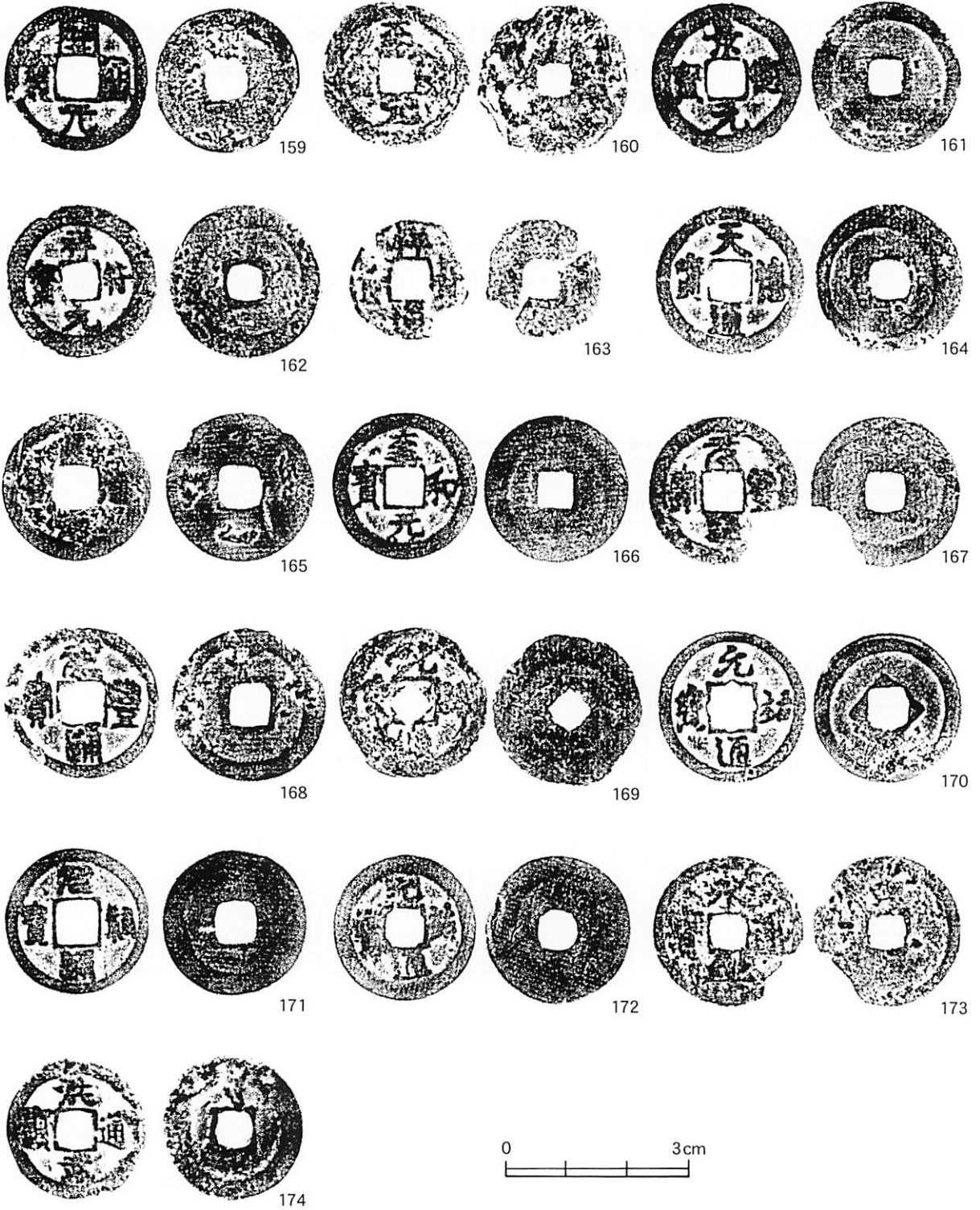
第3-169図159～174は銅銭である。159は「開元通寶」で初鑄年は621年(唐)である。169の「元祐通寶」と貼り付き出土した。160は真書体の「至道元寶」と考えられる。初鑄年は995年(北宋)である。161は「景德元寶」で、初鑄年は1004年(北宋)である。162・163は「祥符元寶」で、初鑄年は1009年(北宋)である。163は周囲を打ち欠いている。164は真書体の「天禧元寶」で初鑄年は1017年(北宋)である。165は真書体の「皇」・「通」が読め、「皇宋通寶」と考える。初鑄年は1038年(北宋)である。166は真書体の「至和元寶」で初鑄年は1054年(北宋)である。167・168は篆書体



第3-168図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(8)



第3-170図 府内町跡20次調査B区出土石製品



第3-169図 府内町跡20次調査B区出土銅銭実測図

の「元豊通寶」で初鑄年は1078年（北宋）である。169・170・172は行書体の「元祐通寶」で、初鑄年は1086年（北宋）で星形孔である。169は159と貼り付き出土した。171の「元祐通寶」は篆書体である。173は「永樂通寶」で初鑄年は1408年（明）である。174は「洪武通寶」で初鑄年は1368年（明）である。

花文のスタンプ 第3-170図175は滑石製のスタンプと考える。花文と思われる文様が陽刻されている。長さ6.2cm、幅2.4cm、厚さ1.5cmで、裏面には溝、上面から下面にかけて穿孔など加工されている。

### 第3節 小 結

府内町跡20次調査B区はA区と同様に、概ね万寿寺跡の西北隅にあたる。検出された遺構は、B-SD003やB-SD064 (A-SD1506) のように前章の府内町跡20次調査A区と連続する溝もあり、発掘調査で明らかになった内容も大きく変わることはない。検出された遺構は大きく14世紀中葉から15世紀初頭のグループと16世紀後葉から末葉のグループに分かれ、その間の遺構や遺物は希薄である。

礎盤建物 14世紀中葉から15世紀初頭のグループの主要遺構はB-SD003・B-SD004のほぼ平行する区画性の強い南北方向の溝、井戸であるB-SE009とB-SE017、L-46区を中心に検出された建て替えを繰り返された礎盤建物遺構がある。これらの遺構は調査区の東寄りを中心に分布し、特に区画性の強いB-SD003の西側に大きな遺構はない。

このB-SD003はN-2°-Eの方向性を持ち、14世紀中葉から後葉の遺物を出土することから、溝の機能はそれ以前から果たしていたと推測できる。そうすると、溝の掘削時期は1306年(徳治元年)の万寿寺創建期に近く、北端部のA区と接する部分で東に屈曲することは、当時の寺の西側境や範囲を示し、伽藍配置の方向をも意味する可能性がある。また、検出された井戸であるB-SE009とB-SE017はこの溝の東側にあり、万寿寺境内の井戸の可能性を持つ。

さらに、礎盤建物の方位も、A区で検出されたA-SB01が第1南北街路と同じN-9°-Eであるのに対し、B区ではB-SB190を除き、北から2°~4°東に振る方位で、B-SD003の溝の方位に近く、14世紀中葉以前の万寿寺創建時の一端を暗示している。

16世紀後葉から末葉のグループは、府内町跡20次調査A区と同様、調査区の西寄りを中心に遺構が分布する。検出された主要な遺構は、調査区を南北に貫きA区のA-SD1506につながる溝であるB-SD064、井戸であるB-SE006・B-SE010・B-SE056、そして、B-SK020を最大規模とするさまざまな規模の廃棄土坑である。

「西之屋敷」 16世紀後葉から末葉のこの地域は、第2章で述べたA区と同じ、「萬寿寺築地之内井西之屋敷」と称された地域に関連すると考える。すなわち、検出された井戸は、A区の南端で検出された井戸を含めると、約30m—約15m—約18mの間隔で、南北に並ぶように配置されており、町屋の裏手に、数軒単位でひとつの井戸を共有するような景観が想定できる。

島津氏の侵攻 ところが、この地域を含め「府内」は1586年(天正14)、島津氏の侵攻により、焼失する。その時の生じたと想定される焼土や瓦礫を埋め立て処理した土坑が調査区の各所で検出される。その最大のものが、B-SK020であり、遺構内から焼土や被熱した礫が多量に出土した。こうして、「府内」は再興され、17世紀初頭まで存続する。その復興後の遺構も確認されている。B-SK016・B-SK096からは16世紀末葉の遺物が出土しており、最終段階の遺構といえる。この他、同じ16世紀後葉から末葉の遺構でも切り合いが認められ、島津氏侵攻以後の遺構も含まれる。

なお、調査区の南東隅のK・L-47区からは、8世紀後半から9世紀前半の遺物がまとまって出土した。特にB-SP032やB-SP047のような小土坑からは埋納された状態で遺物が検出され、この周辺に活動の中心のひとつがあることが判明した。この場所から約200m東北に離れた府内町跡7次調査<sup>(1)</sup>で、掘建柱建物群が検出されており、それと合わせて、「府内」成立する以前のこの地域の状況をつかむ手がかりを得た。

(1)大分県教育庁埋蔵文化財センター「豊後府内3」(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第8集 2006年)

## 第4章 中世大友府内町跡第20次調査C区

### 第1節 調査の経過と概要

中世大友府内町跡第20次調査C区南調査区は大分県大分市元町に所在し、標高約4.5mの沖積低地上に立地する。一般国道10号古国府拡幅事業に伴い大分県教育委員会が2002年12月から2003年3月までかけて本調査を実施した。北側には第21次調査区、南側には第20次調査区A・B区が位置する。調査対象面積は約350㎡である。

当該調査区は、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元図」では、万寿寺北側の境及び堀之口町に相当する地点である。現在当該調査区の東側は田畑になっているが、万寿寺の北側の境推定地部分だけが、今もなお少し低くなっている。そこで当初から、当該調査区では万寿寺の北側を画する東西方向の溝が検出されるのではないかと推測がされていた。さらに、当該調査区の北側には第21次調査区が隣接して位置しているが、当調査では御内町の町屋は検出されたものの、東西方向の道路及び堀之口町の状況は把握できなかった。そこで当該調査区でそれらが明確にされるのではないかとされていた。

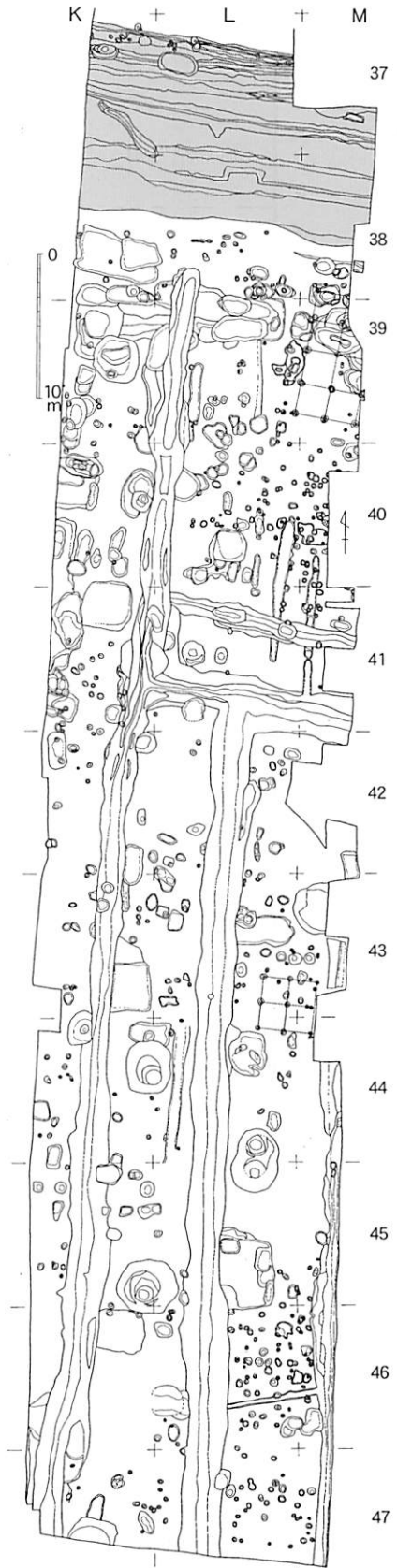
実際、調査によって東西方向の溝が検出されたが、検出された溝は1条ではなく、数条が時期を違えて存在していた。したがって、当該調査区一帯は、ある期間区画としての空間をもっていたことが判明した。また、道路も検出されたが、残存状況がよくなく明確な規模や方向を特定できるほどではなかった。ただ、検出された道路は、前述の溝がすべて埋まった後のことであり、府内古図に描かれた万寿寺の描写に、堀が描かれていないことに相応する結果が得られた。

なお、一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標に乗せた10m方眼で区画しており、それぞれの区画を西から東へA～Z、北から南へ1～30の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている（例えばK-37区、M-38区など。）本章で報告する第20次調査C区については、東西K～M区、南北36～38区の位置に相当する。（第4-1・第4-2図参照）

万寿寺  
堀之口町

御内町

府内古図



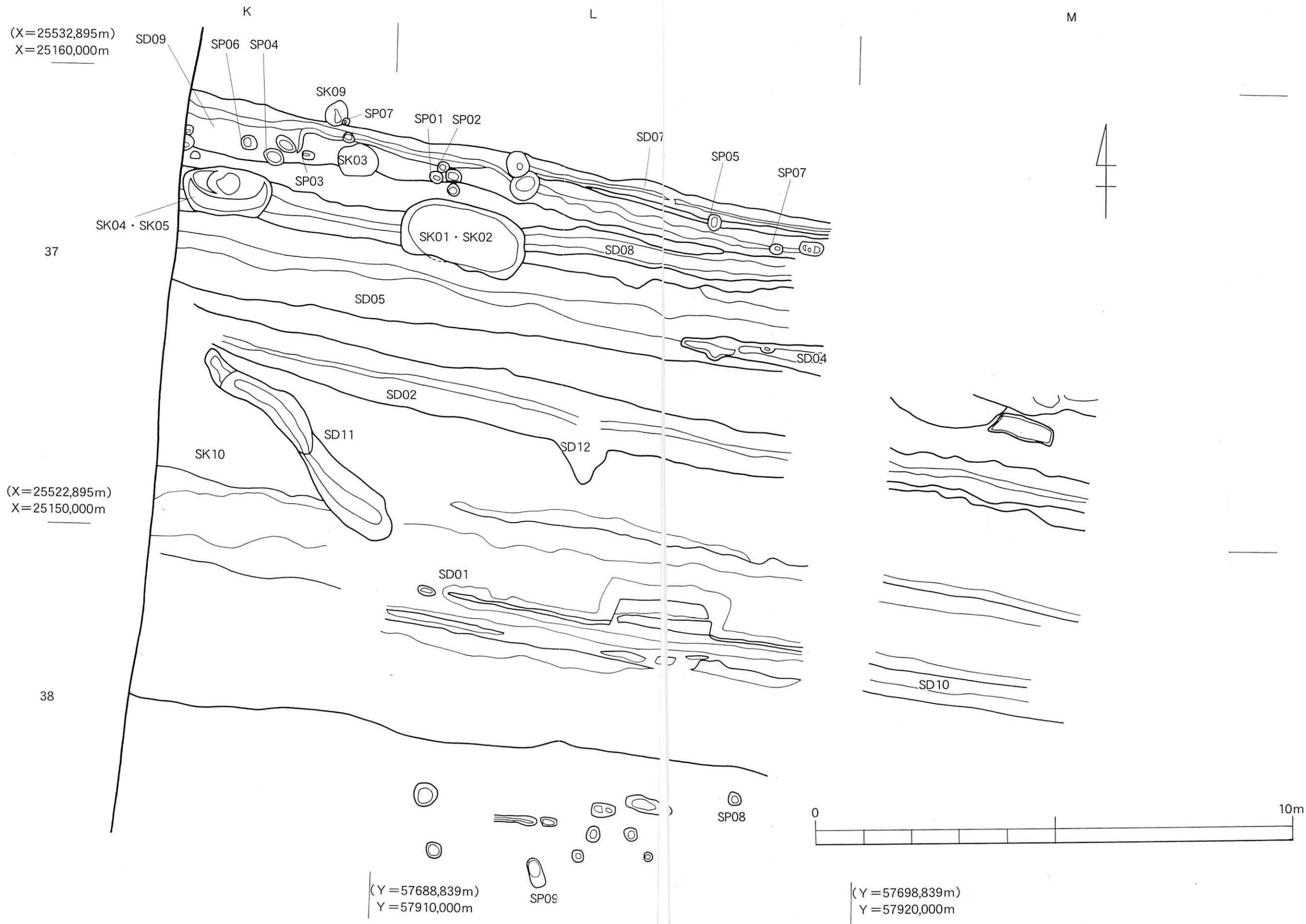
第4-1図 第20次調査C区遺構位置図(1/500)

第1節 調査の経過と概要

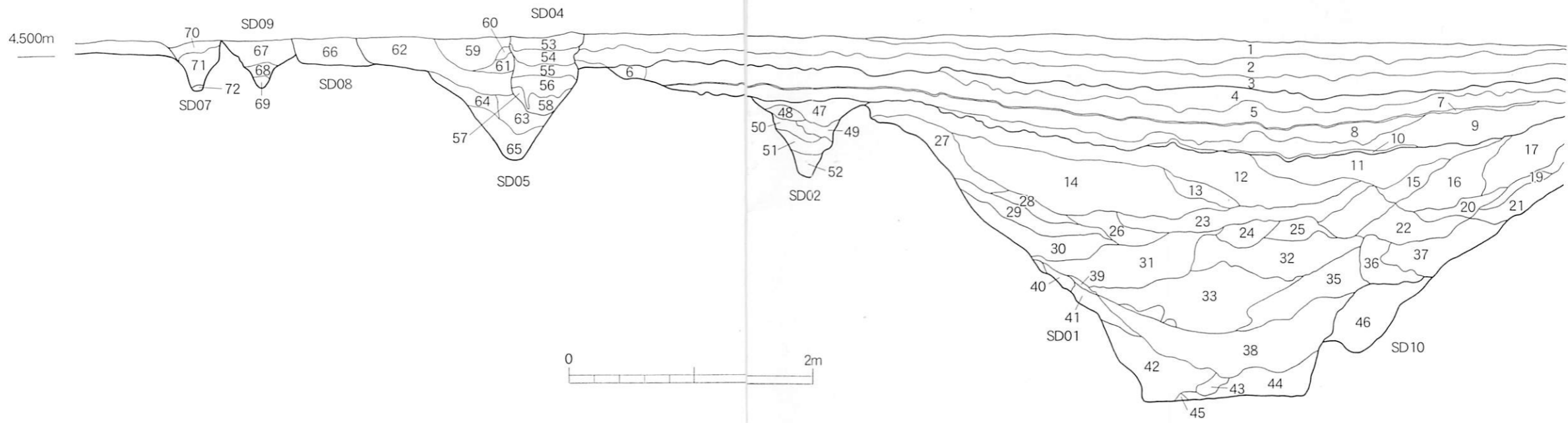
表4-1表 第20次調査C区 遺構一覧表

本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
C-SD01	SD01	溝	K37・38区・L37・38区・M37・38区	16世紀後葉	景徳鎮窯系青花・漳州窯系青花・龍泉窯系青磁・景徳鎮窯系白磁・華南三彩・翡翠釉小皿・褐釉陶器・瀬戸美濃系陶器・軟質施釉陶器・備前系陶器・京都系土師器（3期）・在地系土師質土器（京都系土師器胎土）・瓦質土器・土錘・円盤状土製品・硯・砥石・ガラス玉・真鍮製小柄・猿形木製品・漆器椀・舟形木製品・燭台（芯付）・毬杖・糸巻・箸・下駄・銅銭	259
C-SD02	SD02	溝	K37区・L37区・M37区	16世紀後葉～末葉	景徳鎮窯系青花・瀬戸美濃系陶器・備前系陶器・京都系土師器（3期）・瓦質土器・砥石・青銅製簪・銅銭	297
C-SD04	SD04	溝	L37区	16世紀後葉～末葉	備前系陶器・丹波系陶器・在地系土師器・瓦質土器	298
C-SD05	SD05	溝	K37区・L37区	15世紀代		
C-SD05	SD06	溝	K37区・L37区	15世紀代	龍泉窯系青磁・備前系陶器・在地系土師器（口縁部が直線的に外に開き内外面にロクロ目を顕著に残す）	299
C-SD07	SD07	溝	L37区	14世紀前葉～15世紀前葉	SD09に切られる	300
C-SD08	SD08	溝	K37区・L37区	14世紀前葉～15世紀前葉	SD09を切る	300
C-SD09	SD09	溝	K37区・L37区	14世紀前葉～15世紀前葉	SD08に切られ、SD07を切る	300
C-SD10	SD10	溝	K38区・L38区・M38区	16世紀前葉	龍泉窯系青磁・備前系陶器・京都系土師器（1期）・在地系土師器（口縁部が直線的に外に開き内外面にロクロ目を顕著に残す）・耳皿・瓦質土器（火鉢・焙烙）・銅銭	291
C-SD11	SD11	溝	K37区	16世紀後葉～末葉	備前系陶器・京都系土師器（3期）・瓦質土器（火鉢）・円盤状土製品・円盤状石製品・銅銭	301
C-SD12	SD12	溝	L37区	16世紀後葉～末葉	備前系陶器揃鉢（近世1期）	297
C-SK01	SK01	土坑	L37区	16世紀後葉～末葉		
C-SK01	SK02	土坑	L37区	16世紀後葉～末葉	廃棄土坑：景徳鎮窯系青花・京都系土師器（2～3期）・在地系土師器（口縁部が直線的に外に開き内外面にロクロ目を顕著に残す）・焼塩壺の蓋	303
C-SK05	SK04	土坑	K37区	16世紀後葉～末葉		
C-SK05	SK05	土坑	K37区	16世紀後葉～末葉	廃棄土坑：朝鮮王朝産舟徳利・瓦質土器（羽釜）	304
C-SK06	SK06	土坑	L37区	不明	SD09を切る	305
C-SK08	SK08	土坑	K38区	16世紀後葉～末葉	景徳鎮窯系白磁・褐釉陶器・京都系土師器（3期）	305
C-SK010	SK10	土坑	K37区・K38区	16世紀後葉～末葉	景徳鎮窯系青花・漳州窯系青花・朝鮮王朝産白磁・翡翠釉・瀬戸美濃系陶器・備前系陶器（把手付水注・二重壺）・京都系土師器（3期）・瓦質土器・石臼	307
C-SK010	SK11	土坑	K37区・K38区	16世紀後葉～末葉		

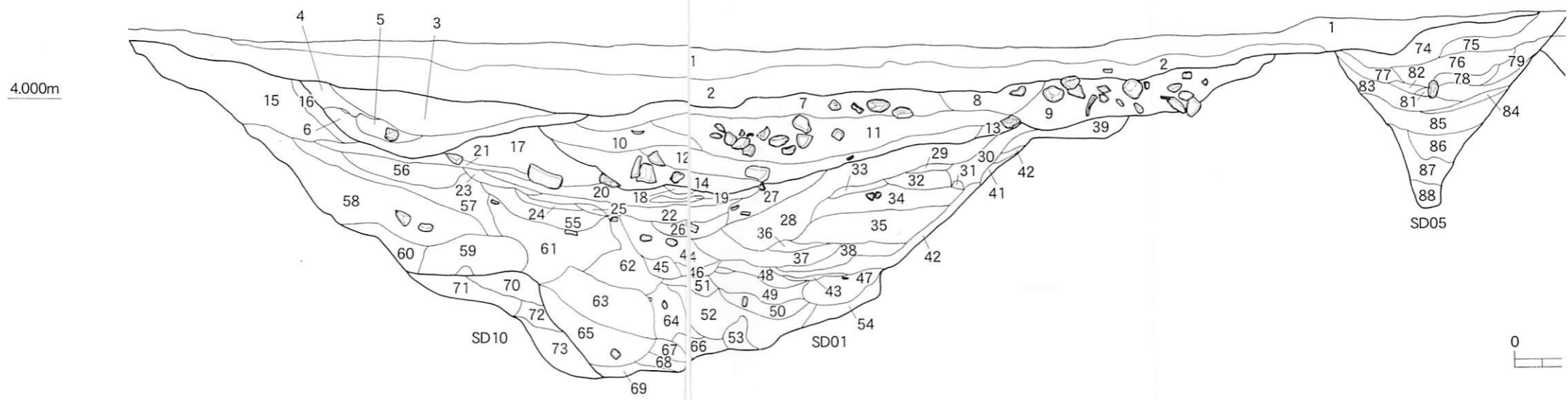




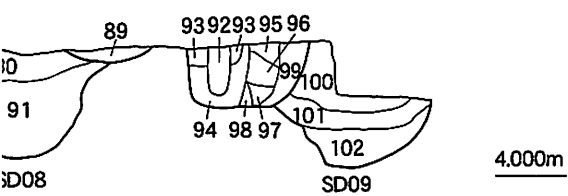
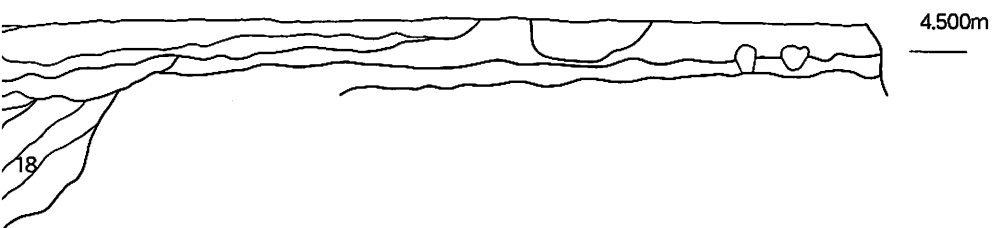
第4-2図 第20次調査 C区遺構分布図 (1/80)



第4-3図 調査区東壁土層図 (1/40)



第4-4図 調査区西壁土層図 (1/40)



第4-2表 府内町跡20次調査C区東壁土層観察表

	1層	10YR 7/3	にぶい黄橙色	砂質土	しまり悪く、小石・小粒の炭・白色の小ブロックが斑点状に混入。
	2層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	1層に類似。
	3層	7.5YR 6/4	にぶい橙色	砂質土	
	4層	10YR 4/4	褐色	弱粘質土	
	5層	5Y 5/1	灰色	砂質土	
	6層	N5/	灰色	砂質土	
	7層	N6/	灰色		シルト層。
	8層	10YR4/1	褐灰色	砂質土	
	9層	5Y4/1	灰色	砂質土	
	10層	N6/	灰色		シルト層。
	11層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	12層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	13層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	14層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	石・土器が多量混入。
	15層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	16層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	17層	N6/	灰色	砂質土	
	18層	10YR 5/1	褐灰色	砂質土	
	19層	5Y 5/2	灰オリーブ色	砂質土	
	20層	10Y 5/1	灰色	砂質土	
	21層	5Y 4/1	灰色	砂質土	
	22層	7.5YR5/1	灰色	砂質土	
	23層	10YR 5/6	黄褐色	砂質土	
	24層	10YR 4/3	にぶい黄褐色	弱粘質土	
	25層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	26層	10YR 3/4	暗灰色	砂質土	
	27層	2.5YR 4/6	赤褐色	砂質土	
C-SD01	28層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	29層	5Y 5/1	灰色	砂質土	
	30層	10YR 6/6	明黄褐色	砂質土	
	31層	2.5Y 5/2	暗灰黄色	弱粘質土	
	32層	2.5Y 4/1	黄灰色	砂質土	
	33層	N4/	灰色	粘質土	石・木器・土器等が多量混入。
	34層	N5/	灰色	粘質土	
	35層	10BG5/1	青灰色	粘質土	
	36層	5BG5/1	青灰色	粘質土	
	37層	5B5/1	青灰色	粘質土	
	38層	5B4/1	暗青灰色	粘質土	下部にマンガンブロックが帯状に混入。
	39層	5BG5/1	青灰色	粘質土	木器類の残りが良い。水がたまっていたと考えられる。
	40層	5BG4/1	青灰色	粘質土	
	41層	5B4/1	暗青灰色	粘質土	
	42層	N5/	灰色	粘質土	
	43層	5B5/1	青灰色	粘質土	
	44層	5Y 5/1	灰色	粘質土	きめの粗い砂が全体に混入。
	45層	N4/	灰色	粘質土	44層に類似。
C-SD10	46層	10YR 6/2	灰黄褐色	粘質土	
	47層	2.5Y 6/1	黄灰色	砂質土	しまり悪く、小石・小粒の炭等がまばらに混入。
	48層	10YR 4/3	にぶい黄褐色	砂質土	47層に類似。
C-SD02	49層	5Y 4/1	灰色	砂質土	褐色の小ブロックが斑点状に混入。
	50層	10YR 4/1	褐灰色	砂質土	土器混入。
	51層	10YR 6/6	明黄褐色	弱粘質土	しまり良い。
	52層	2.5Y6/1	黄灰色	弱粘質土	混入物ほとんどなし。地山に近い。
	53層	7.5Y 7/3	浅黄色	砂質土	石混入。
C-SD01	54層	5Y 5/1	灰色	弱粘質土	しまりやや悪い。
	55層	10YR5/2	灰黄褐色	弱粘質土	褐色の小ブロックが全体にまばらに混入。
	56層	5Y 5/1	灰色	弱粘質土	55層に類似。
	57層	2.5Y5/3	黄褐色	弱粘質土	粘土ブロック。
	58層	2.5Y6/4	にぶい黄色	粘質土	しまり悪い。
	59層	10YR4/1	褐灰色	弱粘質土	白色の小ブロックがまばらに混入。
	60層	10YR6/2	灰黄褐色	弱粘質土	しまり悪く、小石・小粒の炭・白色の小ブロックが斑点状に混入。
	61層	2.5Y6/1	黄灰色	弱粘質土	60層に類似。
C-SD05	62層	10Y5/1	灰色	弱粘質土	混入物少ない。
	63層	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質土	しまりが良く、混入物ほとんどなし。
	64層	10YR4/6	褐色	粘質土	63層に類似。
	65層	10YR4/4	褐色	粘質土	混入物ほとんどなし。地山に近い。
	66層	10YR6/2	灰黄褐色	砂質土	
C-SD06	67層	5Y7/3	浅黄色	砂質土	きめの細かい砂質土。
	68層	5Y 5/1	灰色	砂質土	小石・土器片がまばらに混入。
	69層	7.5Y 6/1	灰色	砂質土	混入物ほとんどなし。
	70層	7.5Y 6/2	灰オリーブ色	砂質土	きめの細かい砂質土。小粒の炭・土器片が少量混入。
C-SD07	71層	5GY 5/1	オリーブ灰色	砂質土	70層に類似。
	72層	5Y 5/2	灰オリーブ色	砂質土	混入物ほとんどなし。地山に近い。

第4-3表 第20次調査C区西壁土層観察表

C-SK08	1層	5YR4/2	灰褐色	砂質土	しまり悪く、暗褐色小ブロックが斑点状に全体に広がる。炭・土器も少量混入。
	2層	5YR5/1	褐灰色	砂質土	1層よりも粘性やや強く、暗褐色の小ブロックがまばらに広がる。
	3層	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質土	しまりやや悪く、炭・土器片・小石が少量混入。
	4層	N5/	灰色	炭層	炭層。黄褐色の中ブロックが混入。
	5層	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良く、炭・石が少量混入。
	6層	N4/	灰色	炭層	炭層。4層よりやや粘性強い。
	7層	7.5YR4/2	灰褐色	砂質土	石が多量混入。
	8層	10YR4/2	灰黄褐色	粘質土	石が多量混入。
	9層	10YR4/3	にぶい黄褐色		8層に類似。8層より砂が多く混入。
	10層	10YR5/6	黄褐色	砂質土	混入物少ない。
C-SK10	11層	10YR4/4	褐色	砂質土	石・砂利・土器片が多量混入。
	12層	10YR4/4	褐色	砂質土	石が混入するが、11層・13層より少ない。
	13層	7.5YR4/1	褐灰色	砂質土	焼土が少量、石が多量混入。
	14層	2.5Y4/2	暗黄褐色	粘質土	しまりやや悪く、炭・石・褐色のブロック混入。
	15層	7.5YR5/1	褐灰色	砂質土	しまり悪く、小石・黄褐色の小ブロックがまばらに混入。
	16層	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質土	小石が少量混入。また、褐色の小ブロックが斑点状に混入。
	17層	10YR5/2	灰黄褐色	砂質土	しまりやや良く、炭・小石が少量混入。
	18層	2.5Y5/3	黄褐色	粘質土	しまりやや良く、石・焼土が少量混入。
	19層	N7/	灰白色	粘質土	しまり良く、上部に炭・焼土を少量含む。
	20層	10YR6/3	にぶい黄褐色		きめの粗い砂質土。
C-SD01	21層	2.5Y5/2	暗黄褐色	砂質土	黄褐色の小ブロックが全体に斑点状に広がる。
	22層	7.5YR5/1	褐灰色		粘土ブロック・きめの粗い砂ブロックが帯状に混入。
	23層	N4/	灰色		炭層。
	24層	5YR5/1	褐灰色	砂質土	石・土器片・炭がまばらに混入。
	25層	10YR4/2	灰黄褐色	粘質土	小石・炭・黄褐色の小ブロックがまばらに混入。
	26層	10YR5/1	褐灰色	粘質土	しまり良く、混入物ほとんどなし。
	27層	10YR4/1	褐灰色	粘質土	22層に類似。
	28層	2.5Y5/1	赤灰色	砂質土	小石・炭・褐色の小ブロックが全体にまばらに広がる。
	29層	10YR6/2	灰黄褐色	砂質土	しまり良く、小石・炭が少量混入。
	30層	2.5Y5/1	黄灰色	砂質土	しまり良く、小石・炭が少量混入。
C-SD01	31層	5YR5/1	褐灰色	粘質土	しまり良く、暗褐色小ブロックがまばらに全体に広がる。混入物ほとんどなし。
	32層	5YR4/1	褐灰色	砂質土	31層に類似。
	33層	2.5YR5/1	赤灰色	粘質土	しまりやや良く、淡黄色砂ブロック・炭・土器片混入。暗褐色小ブロックがまばらに広がる。
	34層	2.5Y5/1	黄灰色	砂質土	しまりやや悪く、下部にマンガンが堆積。小石・炭・暗褐色小ブロックがまばらに広がる。
	35層	10YR4/2	灰黄褐色		大部分をマンガンが占める。
	36層	10GY4/1	暗緑灰色	粘質土	しまりやや悪くマンガンブロック・小石・炭が全体に混入。
	37層	N4/	灰色	粘質土	しまりやや良く、上部に灰白色細砂ブロックが帯状に広がる。石・炭が少量混入。
	38層	5G3/1	暗緑色	粘質土	白色の粘土ブロック・炭・石・木片・灰色の砂ブロックが多量混入。
	39層	10G3/1	暗緑灰色	粘質土	きめの粗い灰色の砂ブロック・白色の粘土ブロックが全体に混入。
	40層	10YR5/1	褐灰色	粘質土	粘性非常に強く、石が多量混入。マンガンの中ブロックが水玉状に広がる。
C-SD01	41層	2.5Y5/1	黄灰色	砂質土	上部がきめが細かく、下部が粗い。褐色の小ブロックが水玉状に広がる。
	42層	5Y5/1	灰色		きめの細かい灰白色の砂ブロックと淡黄色の粘土ブロックが混入。
	43層	10Y5/1	灰色	粘質土	きめの粗い暗褐色の砂のブロックが混入。
	44層	5BG3/1	暗青灰色	粘質土	灰白色の粘土ブロック・炭・石が混入。
	45層	5BG4/1	暗青灰色	粘質土	灰白色粘土ブロックが下部に堆積。全体的にきめの粗い砂が、小石・炭が少量混入。
	46層	2.5Y4/4	オリーブ褐色		マンガンブロック。
	47層	2.5Y5/2	暗黄褐色	砂質土	非常にきめ粗い。上部に暗青灰色粘土ブロック・灰白色細砂ブロックが広がる。
	48層	10BG3/1	暗青灰色	粘質土	砂ブロック以外の他の混入物ほとんどなし。
	49層	N6/	灰色	粘質土	しまり良く、きめの細かい砂混じり。
	50層	2.5Y3/1	黒褐色		焼土・炭が多量混入。
C-SD01	51層	7.5YR6/1	褐灰色	粘質土	50層より焼土・炭の量が少ない。
	52層	7.5YR4/3	褐色	粘質土	中央部に砂利ブロックが見られるほかは、混入物ほとんどなし。
	53層	10YR4/3	にぶい黄褐色		52層に類似。52層より焼土が少ない。
	54層	10YR4/4	褐色	砂質土	土器片・炭が少量混入。
	55層	7.5YR4/1	褐灰色	砂質土	砂混じりで、石・炭が少量混入。
	56層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質土	55層に類似。55層よりしまりが良い。
	57層	5YR4/1	褐灰色	砂質土	きめの細かい灰色の砂が全体に混入。
	58層	7.5YR6/1	褐灰色	粘質土	粘土層。暗褐色の小ブロックがまばらに混入。
	59層	2.5Y5/1	黄灰色		きめの細かい砂層。
	60層	5YR5/1	褐灰色	砂質土	明褐色のきめの細かい砂ブロック・炭を少量含む。
C-SD10	61層	5YR6/1	褐灰色	砂質土	きめのやや粗い灰色の砂ブロック・炭・小石が少量混入。
	62層	5YR6/2	灰褐色	粘質土	混入物ほとんどなし。
	63層	N6/	灰色	砂質土	しまり非常に悪く、焼土・炭・小石が多量混入。
	64層	N5/	灰色	砂質土	63層に類似。砂ブロックが混入。
	65層	5BG4/1	暗青灰色	粘質土	しまりやや良く、炭・小石・土器片が少量混入。
	66層	2.5Y4/1	黄灰色	粘質土	石・マンガンブロックが混入。
	67層	N6/	灰色	粘質土	非常にきめの細かい砂ブロックのほかは、混入物ほとんどなし。
	68層	7.5YR5/1	褐灰色	砂質土	きめの細かい砂層。しまり良く、混入物ほとんどなし。
	69層	2.5Y4/1	黄灰色	砂質土	68層に類似。
	70層	5B4/1	暗青灰色	粘質土	しまりの良い粘土層。褐色の大ブロックが上部に広がる。
C-SD10	71層	N5/	灰色	粘質土	しまり良く、混入物ほとんどなし。マンガンブロックが帯状に広がる。
	72層	5BG	暗青灰色	粘質土	しまり良く、石・土器片が少量混入。
	73層	10BG4/1	暗青灰色	粘質土	しまりの良い粘土層。きめの細かい砂ブロック以外の混入物ほとんどなし。
	74層	7.5YR3/2	黒褐色	砂質土	しまり良く、土器片・小石が少量見られるが、全体的に混入物少ない。
	75層	7.5YR4/3	褐色	砂質土	74層に類似。74層より砂ブロックが少ない。
	76層	5YR3/1	黒褐色	砂質土	全体的に混入物ほとんどなし。
	77層	5YR4/2	灰褐色	砂質土	土器片が少量混入。
	78層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質土	土器片・炭が少量混入。
	79層	10YR5/2	灰黄褐色	砂質土	きめの細かい砂混じり。他の混入物ほとんどなし。
	80層	7.5YR4/2	灰褐色	粘質土	しまり良く、土器片・小石が少量混入。
C-SD05	81層	7.5YR5/2	灰褐色	粘質土	しまり良く、混入物ほとんどなし。褐色の小ブロックが水玉状に混入。
	82層	5YR5/2	灰褐色	砂質土	しまり良く、褐色の小ブロックがまばらに広がる。
	83層	5YR4/2	灰褐色	砂質土	80層に類似。きめの細かい砂が全体に混入。
	84層	7.5YR5/2	灰褐色	砂質土	炭・土器片が少量混入。
	85層	7.5YR5/1	褐灰色	砂質土	褐色の粘土の大ブロックが中央部に混入。
	86層	7.5YR4/1	褐色	粘質土	粘土層。混入物ほとんどなし。
	87層	7.5YR4/4	褐色	砂質土	しまり良く、小石が少量混入。他の混入物ほとんどなし。
	88層	7.5YR4/3	褐色	砂質土	87層に類似。
	89層	7.5YR3/3	暗褐色	砂質土	非常にしまりが悪く、砂利が全体に多量混入。
	90層	7.5YR5/3	にぶい褐色	砂質土	全体的に混入物少ない。白色の砂粒の小ブロックが斑点状に広がる。
C-SD08	91層	7.5YR5/2	灰褐色	砂質土	土器片が少量混入。
	92層	7.5YR4/2	灰褐色	粘質土	しまり悪く、混入物ほとんどなし。
	93層	7.5YR4/3	褐色	砂質土	しまり悪く、混入物ほとんどなし。
	94層	7.5YR4/2	灰褐色	砂質土	93層に類似。土器片が少量混入。
	95層	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質土	しまり良く、土器片が少量混入。白色の砂粒ブロックがまばらに混入。
	96層	10YR4/4	褐色	砂質土	95層に類似。95層より混入物少ない。
	97層	5YR4/2	灰褐色	砂質土	土器片・炭が少量混入。炭が少量混入。
	98層	5YR3/2	暗赤褐色	砂質土	土器片・炭が少量混入。
	99層	10YR4/2	灰黄褐色	砂質土	97層に類似。混入物ほとんどなし。
	100層	10YR3/2	黒褐色	粘質土	しまり非常に良く、混入物ほとんどなし。
C-SD09	101層	10YR4/4	褐色	粘質土	100層に類似。
	102層	7.5YR4/4	褐色	粘質土	しまり良く、小石が少量混入。他の混入物ほとんどなし。

## 第2節 遺構と遺物

## 1. 溝

## C-SD01 (第4-5図)

C-SD01はK-37・38区～M-37・38区までの範囲で東西方向に延びる溝で、本調査区の大半の面積を占める。C-SD01の規模は、確認できている東西長で20m、幅は6.3mほどである。深さは検出面から計測して約2.5mある。溝内では、1mほど下がったあたりから泥炭層が主体となり、帯水し有機質の残存していたことを示している。この土層中では有機質の残存状況が非常によく、人骨や動植物遺体を始め、木器や金属器類が良好な状態で出土した。出土遺物は、有機質以外にも豊富で、陶磁器類や土師質軟質施釉陶器土器等がかなりの量出土している。この内陶磁器類では、漳州窯系青花や軟質施釉陶器碗、近世1期の備前系陶器播鉢等が出土していることから、この溝は16世紀後葉以降、特に1570年代以降に埋没していると思われる。

この溝の位置は、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元図」で、万寿寺北側の境にあたる。この第20次調査C区の調査後、平成15年度に第34次調査区、平成16年度に第43次調査区が調査され、そこで万寿寺の西側の堀と思われる巨大な溝が検出された。さらに翌平成17年度には、第51次調査区で、万寿寺の堀の北西隅のコーナーと思われる箇所が検出された。特に第51次調査区で検出されたコーナーは、本調査区のC-SD01に続くものであり、したがってC-SD01は万寿寺の北側を画する堀であることはまず間違いないと思われる。

ところで、この溝の埋没した後はその上に道路が形成された可能性が高い。第4-3図調査区東壁の土層図を見ると、C-SD01の直上にシルト層が堆積している状況が窺える。このシルト層の上面は、平面プラン検出時に、硬化面となっていたことが確認されている。残念ながら、第2南北街路のように道路面構築のための互層堆積等は見られず、さらにこの硬化面の広がりをも面的に拾えたのはL-37・38区～M-37・38区までで、道路面のプランとして提示できるほど明確なものは得られていない。ただ、この溝C-SD01の直上にピット等の遺構は見られないため、溝の埋没後に構築物は建てられていない可能性が高く、しばらくの間空地であったであろうと考えられる。さらに、第4-3図の土層図を見てみると、溝の直上のシルト層(硬化面)は、溝中央部分で下に窪んでいることが判る。つまり、このシルト層は溝中央部分で沈下しているものと思われる。シルト層上面が空地であるにもかかわらず沈下をするような比重がかかった状況、さらにその面が硬化しているという状況を考えると、このシルト層(硬化面)は道路と考えるのが妥当ではないかと考える。

府内古図を見ると、万寿寺の北側には東西方向の街路が描かれている。そして堀之口町はこの東西道路に面するように立ち並んでいる(下の府内古図参照)。したがって、本調査区のこの位置に東西方向の街路が存在することは、絵図の描写にも符合する。そして、さらにこの道路の形成時期は、この府内古図の描写を考える上で非常に興味深い事実を示している。

前述のように、溝C-SD01の中から出土する遺物から、この溝の埋没時期は1570年代以降である。最近の発掘調査の成果から、実はこの府内古図の描写は1570年代以降の府内の町の姿を描いたのではないかと考えられるようになった。大友氏館前に位置する桜町あたりの調査を行った第12次・48次調査区の所見から、絵図に描かれているような道路や町屋の形成が、1570年代以降の可能性が高まってきたのである<sup>①</sup>。調査の結果、桜町の東側は、16世紀後葉以前巨大な土取遺構が存在し、その時点で府内古図に描かれる町屋の姿は想像しにくい。その後この巨大な土取遺構は京都系土師器2期の段階に埋められ、その上に町屋が形成されている。そして大友氏館前を南北に通る道路(第2南北街路)が整備されていく。

(1)大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4 中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第9集 2006年)



第2節 遺構と遺物

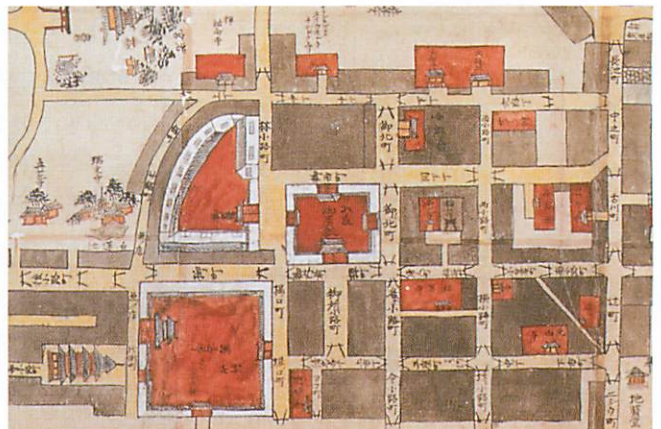
また、未報告であるが桜町の南、御内町推定地あたりでは、この第2南北街路が形成される直前には、その下に土坑が掘られ、それが直ちに埋められて道路が形成されていく過程が確認されている(第51次調査区)。その土坑からはやはり京都系土師器2期の段階の遺物が出土する。そしてさらに第2南北街路が形成される前は、巨大な溝が南北に伸びていたことも確認されている。なお、これも未報告であるが、万寿寺の西側にある溝からは漳州窯系青花や彫三島等が出土し、その溝が埋められた後に第2南北街路が形成されるという状況が確認できている(第34・43・51次調査区)<sup>(1)</sup>。以上から第2南北街路の形成は京都系土師器2期以降であり、特に漳州窯系青花、近世1期の備前系陶器擂鉢の出土等を勘案すると、1570年代以降の可能性が高い。それに伴い整備されていった町屋の形成もその頃と思われる。さらに、1570年代以降ということになると、大友氏における一つの大きな転機として、1573年(天正元年)における大友義統の家督相続がある。この大規模な町の形成の一つの要因として示唆される。

ところで、第2南北街路が整備された時期には、それ以前まで見られた巨大な溝(万寿寺の溝も含めて)はすべて埋まってしまっている。ここで今一度府内古図を見てみると、絵図の中には、堀の描写は全く無い。特に万寿寺周辺について見てみると、万寿寺を囲っているのは築地のような描写であり、堀は描かれていない。そして、その築地の前には東西方向へ道路が通り、堀之口町が面している。したがって、本調査区C-SD01で得られた、1570年代に埋められて、その上に街路が形成されるという所見は、絵図の描写に时期的にも合致しているといえる。

次に溝C-SD01が機能していた段階については、前述のように土層中に泥炭層が厚く堆積していることから、溝はある一定期間帯水していたことが判る。出土する遺物から埋没時期は1570年代以降であるが、掘削時期もさほど時期差がないと思われる<sup>(2)</sup>。



C-SD01を西側から望む



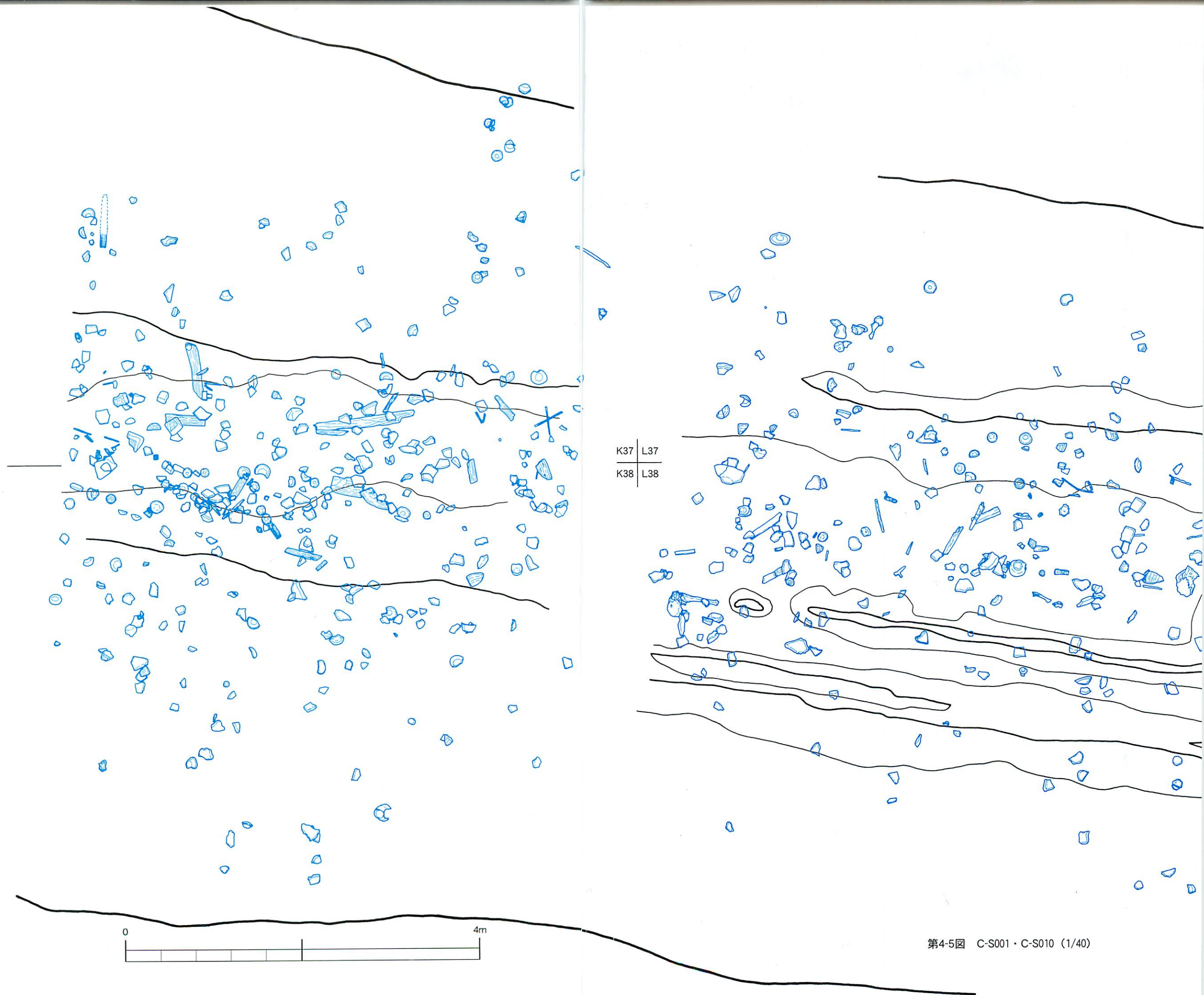
府内古図 C類

(1)これらの調査区についての正式な調査報告書は刊行されていないが、万寿寺の堀と道路の関係については、啓蒙用パンフレット「発掘された宗麟の城下町 Vol.3」で触れられている。

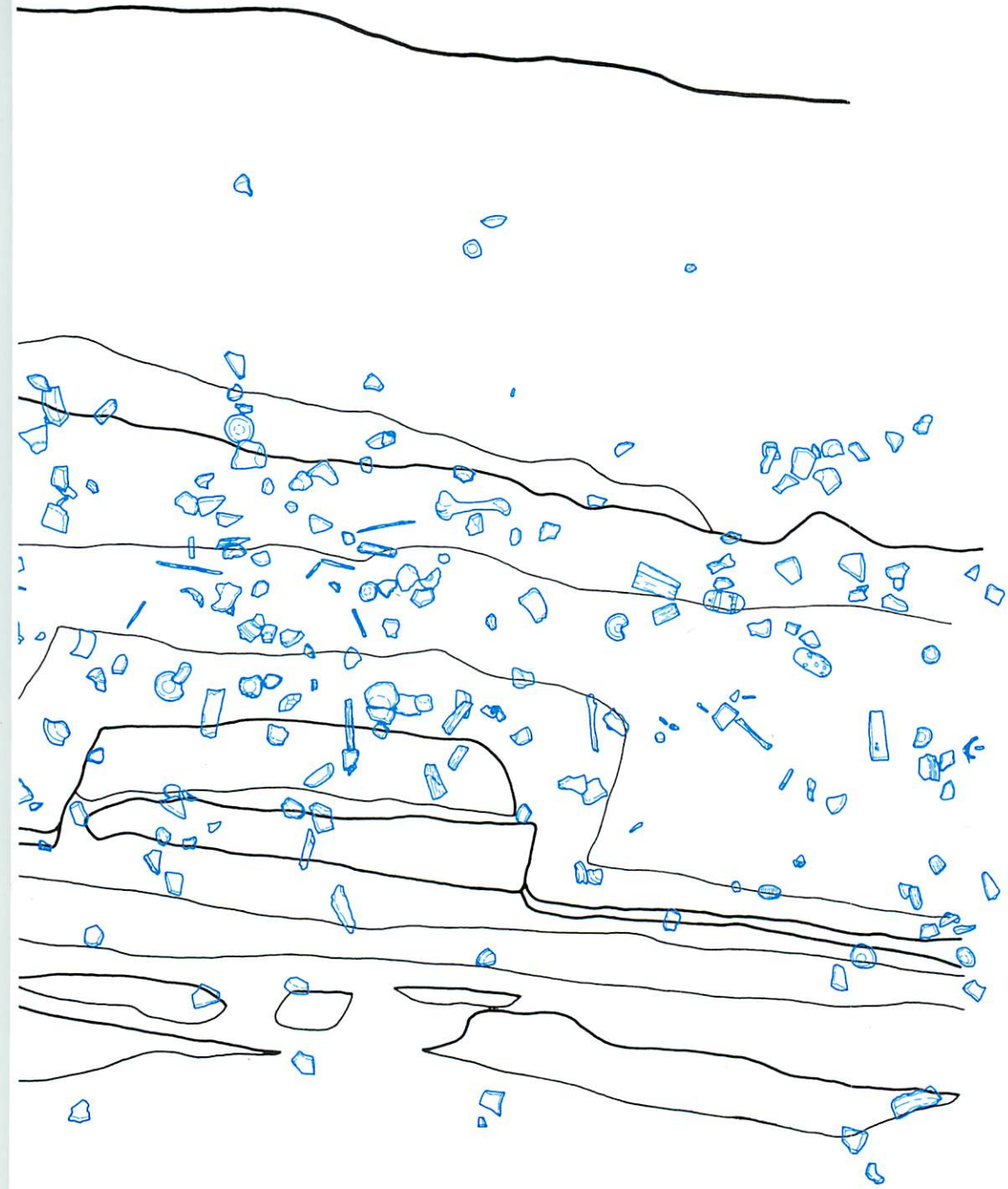
大分県教育庁埋蔵文化財センター編「発掘された宗麟の城下町 Vol.3」2006年

(2)掘削時期については認定する資料がない。唯一切り合いが認められるSD10は、16世紀前葉であるが、そこまでは遡らないことが近年の調査によって判明した。調査平成15年度～17年度にかけての調査で検出された、万寿寺の西側及び北西隅コーナーの堀は、その縁辺部に平行するように並ぶ土坑を切って形成されていることが判明し、その並んでいる土坑群からは、やはり京都系土師器2期の遺物が出土している。

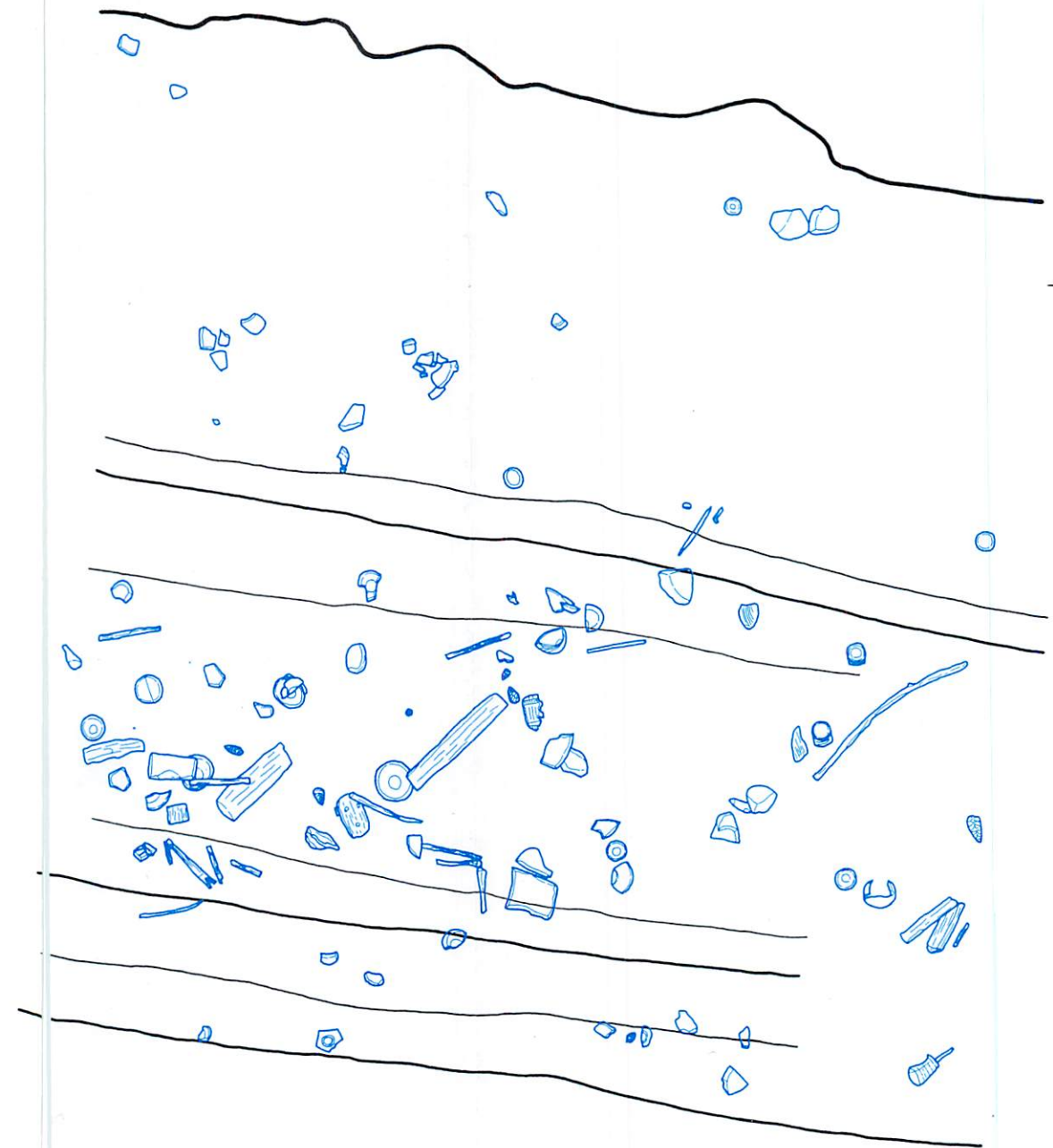




第4-5図 C-S001・C-S010 (1/40)



L37	M37
L38	M38



## 出土遺物

## 陶磁器（第4-6図-1～第4-14図-103）

景德鎮窯系青花

1～14は景德鎮窯系青花の皿である。

つば皿

1は、丸く内湾する胴部から口縁部が屈曲してつばがつく、いわゆる「つば皿」である。底部には高台が付く。つばの部分、見込、胴部外面に文様が施される。高台内には界線が認められる。2も1と同様に口縁部につばがつくつば皿である。胴部から下は欠損して不明だが、つばの部分に文様が認められる。3は、口縁部はつばがつき、輪花をなす。胴部は内外面に鎊を有す。文様はつばの内外面及び見込に施される。1～3はいずれも小野編年のF群に相当する。以下景德鎮窯系青花の分類に使用される群の名称は小野編年に準拠する。

F群

4は内湾する胴部から口縁部が端反る形態で、底部には高台を有す。口縁部内外面、胴部腰部及び見込に界線を巡らす。さらに胴部外面には牡丹唐草、見込には玉取獅子が描かれる。B1群に該当する。5は口縁部分の破片で、口縁部が端反る形態である。口縁部外面には界線が巡り、口縁部内面には四方禪文が描かれる。B2群か。

四方禪文

6は高台部分から口縁部に向け、緩やかに外反していく形態で小野編年の分類にはないタイプである。文様構成は界線のみで、口縁部内外面、見込、胴部外面腰部に巡らされる。また高台内部には「富貴佳器」の字款が描かれる。E群の時期に併行するものか。

碁筭底

7・8は底部がいわゆる「碁筭底」を呈し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。C群に該当する。7の見込には「寿」の文字が描かれ、胴部外面に描かれるのは略化した字のような文様か。8は口縁部内面に界線、外面は口縁部に波濤文帯、胴部に芭蕉葉文が描かれる。見込部分は界線と花鳥文様らしきものが描かれる。

9は皿の高台部分である。見込に文様は無い。高台内中央にわずかに文様の一部が認められるが判別ができない。

E群

10は、低く内湾する胴部を有し、高台が付く。見込には蚊龍文が描かれ、高台内部には四角で枠取りした「福」の字款が描かれる。小野編年のE群に相当する。

11～14は皿の高台部分の破片で、口縁部は欠損しているが、いずれも内湾気味立ち上がる形態のものである。11は、高台内部・外面腰部・見込に界線が巡る。見込にはさらに「長」と「富」の文字が見られ、「長命富貴」の字款が描かれているものと思われる。B群か。12は、高台内部に界線が巡り、その中に「天」「下」「平」の文字が見られる。「天下太平」の字款が描かれているものと思われる。やはりB群か。13は高台内部に界線、見込部分には何らかの文様が描かれるが判別不能である。14は高台外面と見込に文様が施される。見込の文様は花卉文か。

15～24は景德鎮窯系青花碗である。

饅頭心

15は口縁部内面に界線、外面には波濤文帯が巡る。胴部外面にも文様が施されるが、判別が難しい。16～22は見込部分が緩やかに盛り上がるいわゆる「饅頭心」を呈する形態で、E群である。16は口縁部内外面に界線が巡る。胴部外面には何かの植物の文様が描かれる。底部付近が欠損しているため正確には判らないが、恐らく饅頭心を呈していると思われる。17は胴部以下の破片で、胴部外面、見込に文様が描かれる。見込には花卉文と月が描かれる。見込には「長春佳器」の字款が描かれる。18は胴部以下の破片で、外面腰部に文様帯が巡る。また高台外面にも界線が巡る。また見込にも文様が描かれ、七宝文のような文様が配されている。

「攸同」

19は見込に文様、高台内には字の様なものが描かれている。20は見込に牡丹唐草が描かれる。胴部外面にも文様が施されるが、構図は不明である。高台内部には「攸同」の文字が見え、「萬福攸同」の字款が描かれていたものと思われる。21は見込に文様、高台内部に文字が描かれる。共に詳細は不明だが、見込は山水人物、字は「大」の字か。22は見込と外面腰部に界線が認められるのみで、



## 第2節 遺構と遺物

他の文様は見られない。高台内部にわずかに四角の枠のようなものが見られる。23は見込に折菊、高台内部には「寿」の字款が描かれる。24は碗の口縁部の破片である。口縁部内面には四方禪文が巡る。外面は口縁部に界線、胴部にも文様が描かれる。

小坏 25は青花の小坏で、見込に捻花が描かれる。高台内部は無文である。

漳州窯系青花 26～31は漳州窯系青花である。

盤 26は皿で、高台部分はいわゆる「碁笥底」を呈する。外面腰部に界線、見込には界線と文様が施される。27は盤の高台部分で、外面腰部には界線、見込にも文様が描かれるが、文様の構図は判別不能である。28は蓋である。梅瓶等の蓋か。内面は露胎で表面には唐草のような文様が描かれる。

蛇の目釉剥ぎ 29は碗で、口縁部内面に界線、外面胴部に文様が描かれる。30も碗の高台部で、見込部分が蛇の目釉剥ぎがなされ、中央に捻花状の文様が描かれる。外面は腰部に界線が巡る。31も碗の高台部と思われる。見込部分に文様の痕跡らしいものが見られる。

龍泉窯系青磁 32～37は龍泉窯系青磁である。

32は皿で、高台がつき、腰部で緩く折れて、口縁は外反気味に立ち上がる。33～35は碗である。

33は内湾気味に胴部から口縁部へ立ち上がる。34・35は高台部分で、厚い高台が巡る。36は壺か瓶の胴部で、内面は露胎である。外面は腰部あたりで突帯状に隆起が巡る。

37は青磁人物像燭台の台座部分である。台座の上に立っていた人物のものと思われる両足先が見られる。前後面の2枚の型づくりによって作られ、それを接合しているものと思われる。青磁人物像燭台の国内における出土例はさほど多くなく、総領野際遺跡出土例・一乗朝倉氏遺跡出土例・常楽寺遺跡出土例がある程度である<sup>(1)</sup>。その他に伝世品として残っているものが清浄光寺・鑿阿寺にある。ところでこれらに共通する背景として注目されるのが、そこが寺院である点である。清浄光寺・鑿阿寺・常楽寺遺跡はもとより、一乗朝倉氏遺跡についても第86次調査の西山光照寺跡から出土しており、総領野際遺跡にいたっても、関連は未確認であるが近くに正保寺の存在が知られている。今回本調査区で出土した遺構C-SD01も、前述の通り万寿寺の北限境の堀と考えられており、万寿寺関連の遺物である可能性は高い<sup>(2)</sup>。よってこの青磁人物像燭台は寺院に関係するものである可能性が高い。石川氏によれば、寺院と関連の深い遺物の特徴として台座の蓮華文を挙げているが、本調査区出土資料には蓮華文が明確には確認できない。また本調査区出土資料の37の時期についてであるが、石川氏は台座の蓮華文が模式的になり簡略化する観点から一乗朝倉氏遺跡出土例を新しく位置づけている。そうした観点に沿えば本資料37は蓮華文がほとんど確認できず、したがって一乗朝倉氏遺跡出土例よりもさらに新しい位置づけが可能かもしれない。本資料を出土したC-SD01は前述のように16世紀後葉に位置づけられる。一乗朝倉氏遺跡で出土した資料は相伴土器から15世紀末～16世紀初頭に位置づけられていることから、その前後関係は遺構の時期から見ても齟齬はない。しかしながら、寺院に関係する遺物は、中世大友府内町跡の他の調査区出土例をみると、伝世していると思われるものが見られる。したがって、遺構の時期イコール遺物の時期とはいえない点もあり、今後さらなる検証が必要であろう。

高麗青磁 38は高麗青磁である。表に象嵌による文様が描かれる。器形は不明である。

(1)石川ゆずは「青磁人物像(燭台)について—総領野際遺跡出土資料の紹介を兼ねて—」(『富山考古学研究』紀要第7号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2004.6)による。その他参考文献として『戦国時代 内と外』福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館 2003

栃木県教育委員会文化課HP <http://www.tochigi-c.ed.jp/bunkazai/bunkazai/list/630.htm>

(2)中世大友府内町跡では第34次調査区で青磁人物像燭台の顔の部分が出土している。顔は露胎で、これも他の類例と共通している。この顔が出土したのもやはり万寿寺の堀(万寿寺西側の堀)と考えられているところからである。

- 越州窯系青磁 39は越州窯系青磁の碗である。見込に目跡が認められる。
- 白磁 40～50は白磁である。  
40・41は景德鎮窯系白磁皿で、口縁部が端反る。41は被熱しており、黒斑が見られる。42は中国南方産と思われる白磁の皿で、見込は蛇の目釉剥ぎがなされる。43は景德鎮窯系菊皿である。底部は欠損しているが、高台がつくものと思われる。44は中国産の皿の底部と思われる。  
45～48は白磁の碗である。45～47は景德鎮窯系の碗で、47は口縁端部が端反る16世紀代の特徴を有している。48は中国産の白磁の高台部分である。
- 小坏 49・50は小坏である。49は景德鎮窯系、50は見込に蛇の目釉剥ぎが認められ、景德鎮窯以外の中国の窯で焼かれたものであろう。
- 華南三彩 51・52は華南三彩である。  
51は壺の蓋である。内面は露胎となり、外面は刻花文が見られる。52は水注の脚部と思われる。底部外面は露胎となる。表面には波濤文が描かれ、上部には鶴や魚がついていたものと思われる。
- 磁窰窯系盤 53は磁窰窯系盤の破片と思われる。C-SD01の時期のものではないが、南側に隣接する第20次A区では多数出土している。
- 翡翠釉 54・55は中国産翡翠釉の小皿である。口縁部が屈折して外反しつばのようになり、胴部は鏝を有する。底部には高台を有する。
- 褐釉陶器 56は中国産褐釉陶器の胴部片である。57は碗の底部付近の破片で、見込と畳付に目跡が付けられる。産地は不明である。58は中国産陶器壺の底部付近の破片と思われる。底部下半は露胎となる。59は中国産陶器の天目茶碗である。高台部分は欠損している。
- 瀬戸美濃系陶器 60～64は瀬戸美濃系陶器である。  
60・61は天目茶碗、62～64は皿である。63は高台部から口縁に向けて内湾気味に低く立ち上がる。また62・64は口縁部分が外に折れるいわゆる折縁皿である。大窯3期頃に比定できる。
- 折縁皿
- 軟質施釉陶器 65～70は軟質施釉陶器の碗である。赤褐色の胎土の表裏に釉がかけられ、同一個体と思われる。
- 備前系陶器 71～103は備前系陶器である。
- 水屋甕 71は水屋甕の口縁部、72は壺である。いずれも口縁部が短く立ち上がる。73～75は徳利である。76・77は鉢である。口径に対して器高は低く扁平な形である。胴部上位から内傾して口縁部に至る。
- 摺鉢 78～97は摺鉢である。まず時期認定の一つの鍵となるスリメの形態についてみてみたい。83・90・91・96を除いてすべてにスリメが確認される。この内大半が放射状のスリメに斜め方向のスリメをナナメスリメを加えたいわゆる「ナナメスリメ」である。図面番号の78、80～82、85、87～89、92～94がそれに該当する。残りの79・84・97は放射状スリメと思われ、86・95についてはスリメの残存部分が少ないために形態は不明である。次に時期の認定に必要なもう一つの要素である口縁部の形態について見てみたいと思う。92～94、97の資料を除きすべての資料で口縁部の形態が把握できる。それらの資料を見ると、いずれも口縁帯が発達し、口縁部外面に施される凹線が多条化している。さらに口縁端部のナデが強く先細りをしており、乗岡編年の近世1期の特徴を示している。この近世1期のもう一つの特徴としてナナメスリメが挙げられるが、先にナナメスリメではなく放射状スリメとして取り上げた資料の内79・84についても、口縁部の形態では近世1期の特徴が見られる。また、残存部分が少なくスリメの形態が不明とした86・95についても、口縁部の形態では近世1期の特徴を有している。さらにスリメが全く確認できていない資料の内、83・96についても、やはり口縁部の形態は近世1期の特徴を示している。以上より、C-SD01で出土した備前系陶器の摺鉢については、その大半が近世1期に位置づけることが可能である。なお、この時期に位置づけられなかった資料90・91・97については、まず90については、口縁帯の文様帯がさほど発達しておらず、凹線文の多条化も見られない。さらに口縁端部の先細りも認められないことから中世6期ごろであろうか。口

## 第2節 遺構と遺物

径も小さく、多少他の播鉢とは性格を異にするものかもしれない。91は口縁帯が全く発達しておらず、古い様相を示している。中世3期頃に比定される資料と思われ、混入品であろう。97については、口縁部がないため時期の認定は困難である。スリメは放射状であるが、79・84が近世1期に位置づけられることもあり、それらに併存することも十分あり得る。

小型壺 98・99は壺である。98は胴部が丸みを帯びて膨らむ小型の壺である。99は胴部下半に刻印の一部が認められる。

大甕 100～103は大甕である。100は肩部あたりに刻印が認められる。101・102は口縁部、103は底部の破片であるが、口縁部の形態より16世紀後半代に位置づけられそうである。

### 土師質土器（第4-14図-104～第4-17図-206）

京都系土師器皿 104～176は京都系土師器皿である。いずれも器壁が比較的厚くなり、口縁部下のナデが強く、胴部上半に稜を有するものも含まれてくる。塩地編年の2～3期に位置づけられる。さらに掲載している資料95点中58点の口縁部に、ススの付着が認められ、灯明皿として使用されていたものと思われる。割合的には約61%に及び、かなり高い頻度で見られる。

糸切り痕 また、177～185については、京都系土師器の胎土を有し、底部に糸切り痕を残す在地系土師器である。ここでは京都系土師器と在地系土師器の「折衷様式」と仮称しておく。

坏 186～197は京都系土師器の坏である。底部から口縁部に向け内湾気味に立ち上がり、口縁部下では強いナデが巡り、稜を有す。器高も3cm～4cmを超えるものが含まれ、皿とは別形態である。

在地系土師器 198～206は在地系土師器である。いずれも底部に糸切り痕を残す。201～203のようにススが付着し灯明皿として使用されたと思われる資料も含まれる。器形的には、底部から口縁部に向けて直線的に開き、内面に顕著にロクロ目を残すタイプ（198・199・203）と、底部から口縁部に向けて内湾気味に低く立ち上がる（202～206）タイプがある。これらの資料は坂本編年で15世紀末葉から16世紀初頭に位置づけられる一群であるが、この時期まで残る資料なのか、混入しているのかが問題となる。この資料が出土しているC-SD01の下にはC-SD10があり、C-SD01はC-SD10の大半を切って形成されていることが判っている。このC-SD10からは京都系土師器1期の資料と、前述の底部から口縁部に向けて直線的に開き、内面に顕著にロクロ目を残すタイプがまとめて出土している。したがって、C-SD01から出土している在地系土師器は、この時期の他の資料と相伴していると考えられるよりも、C-SD10の遺物が混入していると考えの方が妥当であろう。

### 瓦質土器（第4-17図-207～第4-19図-231）

207～210は瓦質土器の壺である。いずれも胴部が内湾気味に立ち上がり、底部には高台が付く。高台は207が断面台形状、208・209は三角形状を呈す。

香炉 211は香炉で、三脚が付く。212も香炉もしくは火鉢の底部付近の破片で、双頭蕨手流雲文が描かれる。213は皿の底部で、中央に穿孔が見られる。また見込部分に雷文が刻印される。214は鉢で直立ぎみに立ち上がる胴部から、口縁部が緩やかに内傾する。SK10で出土した破片と接合した。215と216も鉢である。215は口縁部が内傾し、口縁部屈曲部外面に2条の突帯が巡る。217は防長系の播鉢である。口縁部が肥厚し、内面には放射状にスリメが施される。スリメは見込にまで及ぶ。

火鉢 218～226は火鉢である。218・219は口縁部が内側に台形状に肥厚する。220は口縁部外面に雷文が巡る。221は台形状に肥厚した口縁部とその下に巡る突帯間に縦方向の沈線が5本単位で施される。222は口縁部外面に1条の突帯が巡り、その下に花文が刻印される。223は口縁部下に2条の低い突帯が巡り、その間に雷文が描かれる。224～226は火鉢の脚部で、225は脚の上に2条の低い突帯が巡りその間に双頭蕨手流雲文が施される。

内耳付鍋 227・228は壺、229は内耳付鍋である。口縁部内側に吊し用の穿孔部分が設けられる。230は鍋の焙烙  
焙烙 口縁部で、胴部上半に突帯が巡る。231は焙烙で、胴部下半に柄を受けるための筒部がある。

## 土製品・石製品・金属製品（第4-19図-232～第4-21図-270）

232～234は土錘、235は土玉である。

円盤状土製品 236～244は円盤状土製品である。236～238は土師質土器を加工し、239～243は瓦質土器を加工して作られている。また244は瓦を加工して作られていると思われる。こうした円盤状の土製品が本遺構から比較的まとまって出土している。

硯 245～248は硯、249～257は砥石である。258は円盤状の石製品で前述の円盤状土製品と一連のものであると思われる。259も石製品であるが、環状に加工された中央部に穿孔が施されている。260  
石臼 260～263は石臼、264は方形柱状を呈す石製品であるが、用途は不明である。265は、恐らく方形に加工された部分に足が付き、テーブル状を呈す石製品であろうと思われるが、詳細は不明である。266は球形の穴が複数穿たれている石で、人工的に加工されたものであろうが、用途は不明。

ボタン状  
ガラス製品 267・268はガラス製品である。267は白色を呈するボタン状ガラス製品である。裏面は平らになって接着痕らしき跡が見られる。用途は不明である。中世大友府内町跡では複数例が知られており、白色の他に青色のものが存在している。269は青銅製品で、簪と思われる。

小柄  
真鍮製 270は、小柄の柄の部分である。蛍光X線分析の結果、金の成分は含まれておらず、鍍金ではないことが判明した。そして銅と亜鉛が検出されていることから、この小柄は真鍮製であると考えられる（詳細は第5章自然科学的分析の項を参照）。真鍮製品は17世紀以降キセル等において国内でも類例は多いものの、戦国期ではさほど多くはない。真鍮は金よりも安価に手に入るため、現代でもイミテーションゴールドとして普及しているが、その製作には特別の技術が必要である。特に亜鉛の製錬は、真空状態で行わなければならないが、この技術が日本で駆使できるようになるのは、17世紀以降のことと考えられている。したがって戦国期における真鍮製品の国内製作については、現段階では考えにくい。本遺跡で出土したこの真鍮製の小柄も鉛同位体比の結果、含まれる鉛は華南産のデータが得られている（詳細は第5章自然科学的分析の項を参照）。したがって素材に着眼すれば、中国から輸入された可能性が考えられよう。

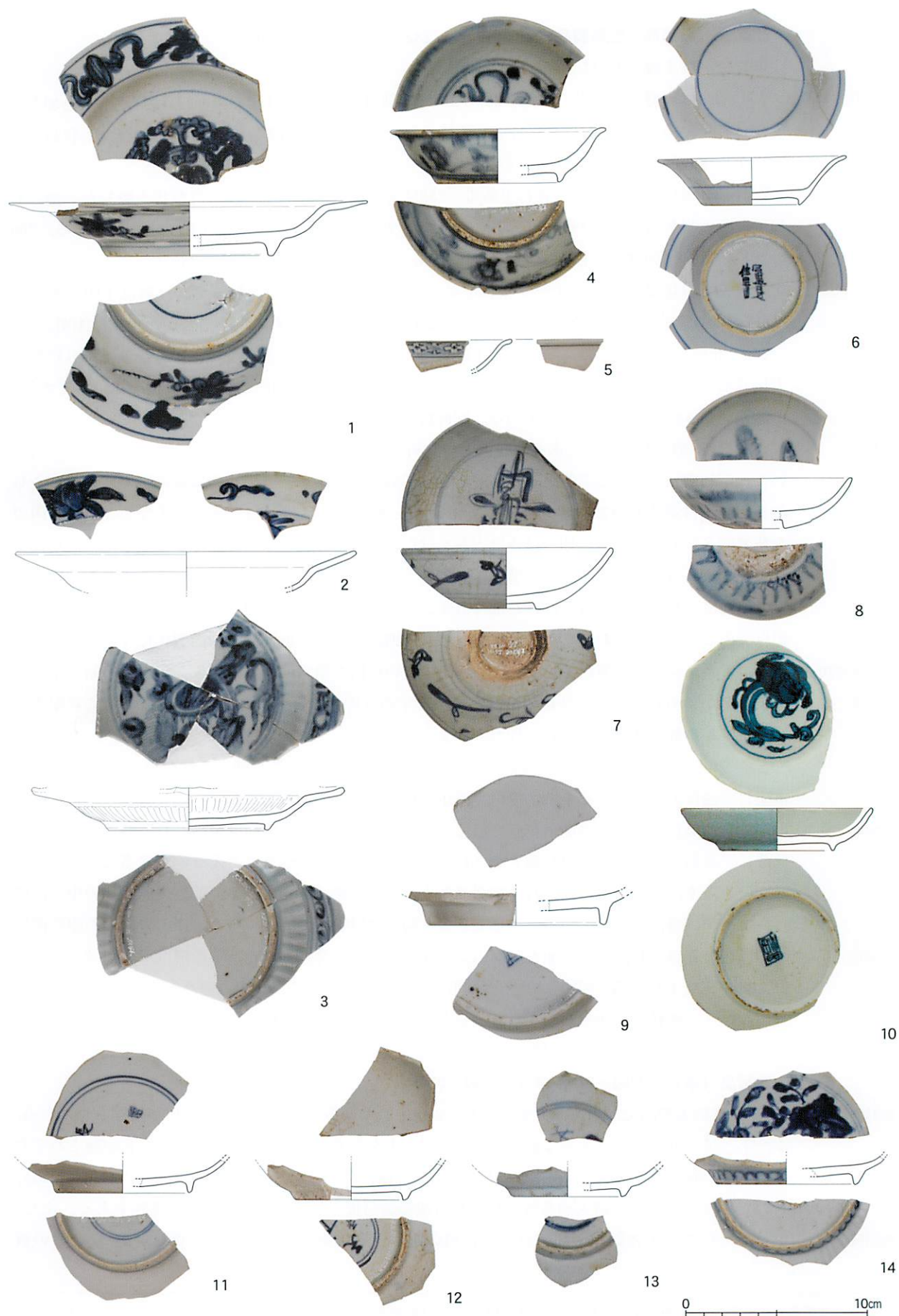
ところが、ここで問題となるのは、この小柄が製品として中国から輸入されたかという点である。本来日本独自の製品である小柄が中国で製作されたというのは考えにくい。そしてこの小柄には日本の伝統的技法とされる魚鱗地が施されている。したがってこの小柄は製品として輸入されたのではなく、真鍮そのものの素材が輸入をされ、それを国内で加工したと考えるのが妥当ではなかろうか。ところで、この小柄に描かれる文様でもう一つ注目すべき点がある。前述の魚鱗地の中に、細長い方形の絵が描かれている。そしてその一端は台形状を呈し屈曲する。この方形枠の中は幾何学的模様で充填され、その周囲をツタのようなものが取り巻いている。この形は「火繩銃」によく似ている。出土した溝C-SD01の時期が16世紀末葉であることや、地点は違うがC-SD01と同じ万寿寺の堀から火繩銃の火挟みが出土している点、さらに同時期の遺構から鉛玉が出土している事などを考えると、十分にありうる図像である。

## 木製品（第4-22図-271～第4-28図-329）

猿形木製品 271は猿形木製品である。顔と臀部が赤く着色されている。顔には目・鼻・口が描写されている。また手と足を前で組んだような形をしているが、組んだ手の中央部と足の部分に穿孔が施されており、ここに細い棒が通されていたと思われる。この棒に沿って猿が上下に移動するような玩具であったのではなかろうか。職人歌合等に描かれる傀儡師が扱う人形の一つである可能性もある。また、  
玩具  
鹿田遺跡 中世における猿形木製品の類例としては岡山県鹿田遺跡第7次調査出土の資料がある<sup>1)</sup>。この資

(1)岡山大学埋蔵文化財調査室「岡山市鹿田遺跡出土の猿型木製品」(『動物考古学』第13号 動物考古学研究会 1999. 11)  
なお、山本悦代氏から資料を実見させて頂き、御指導を賜った。



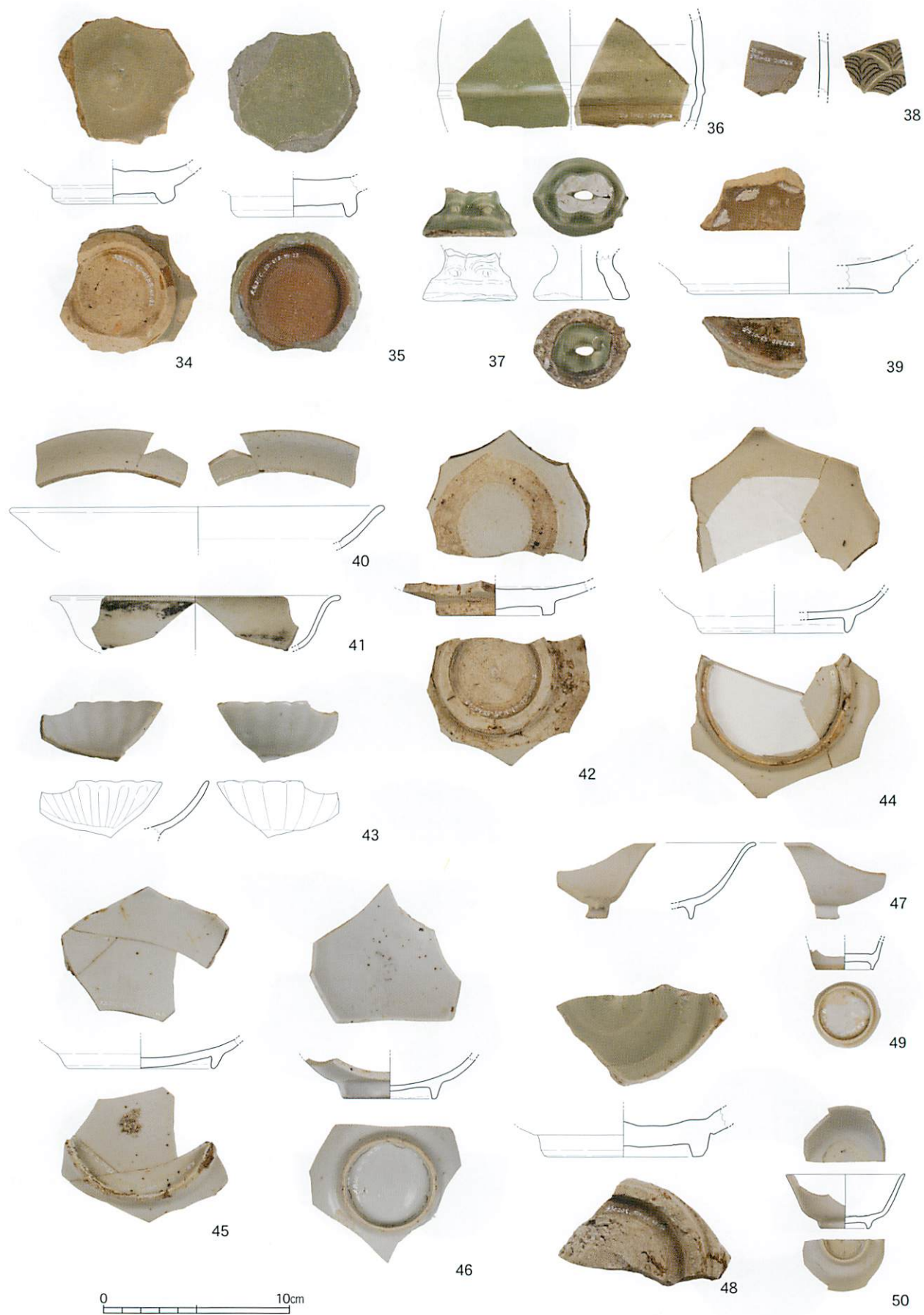


第4-6図 C-SD01出土遺物実測図(1) (1/3)



第4-7図 C-SD01出土遺物実測図(2) (1/3)



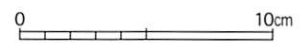
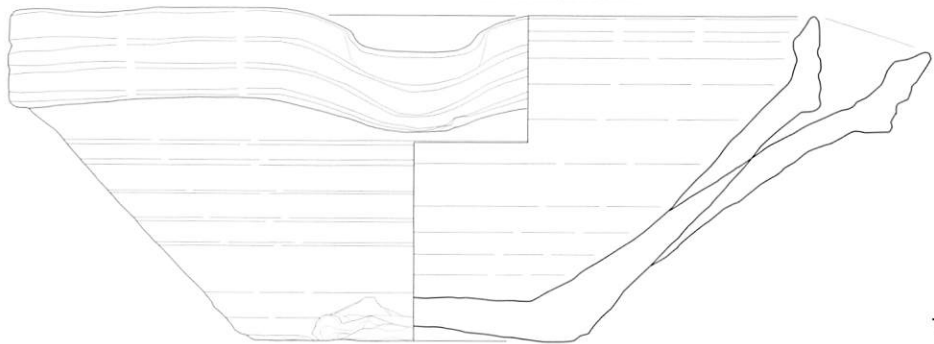
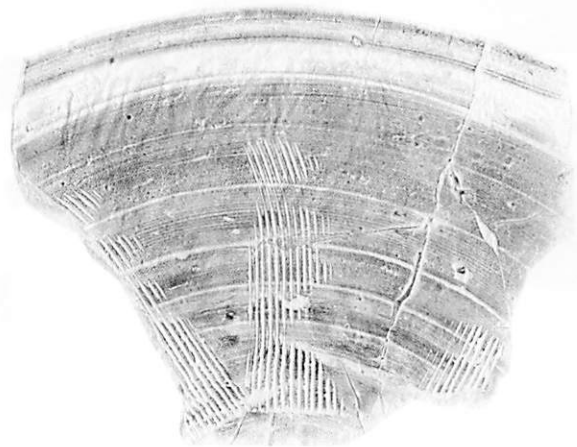
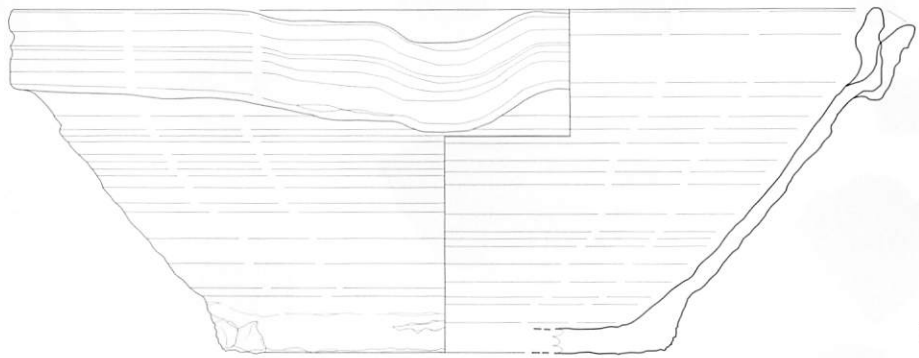
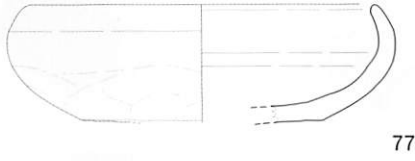
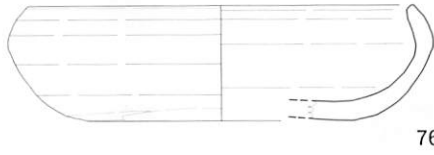


第4-8図 C-SD01出土遺物実測図(3) (1/3)

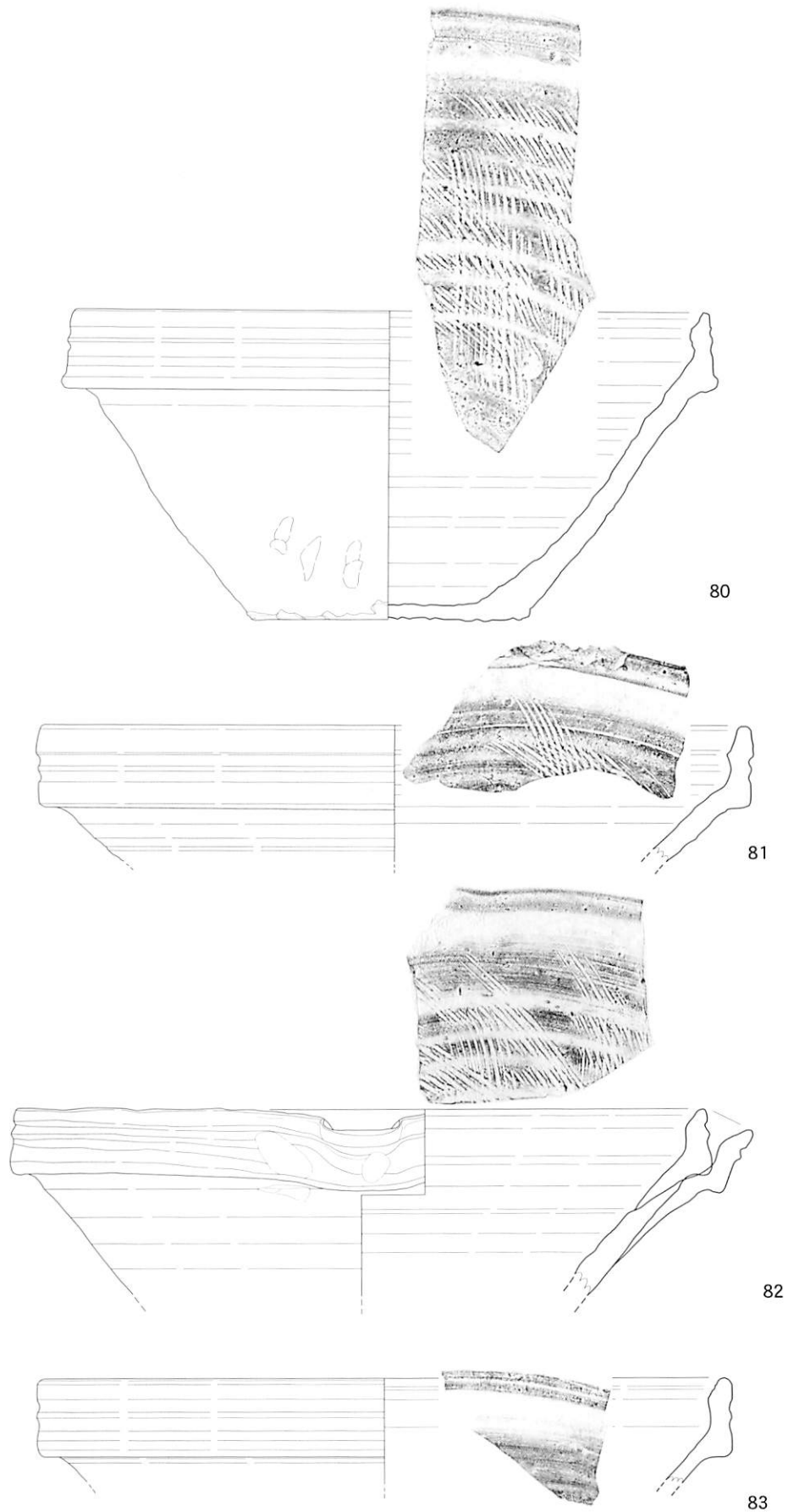


第4-9図 C-SD01出土遺物実測図(4) (1/3)

第2節 遺構と遺物

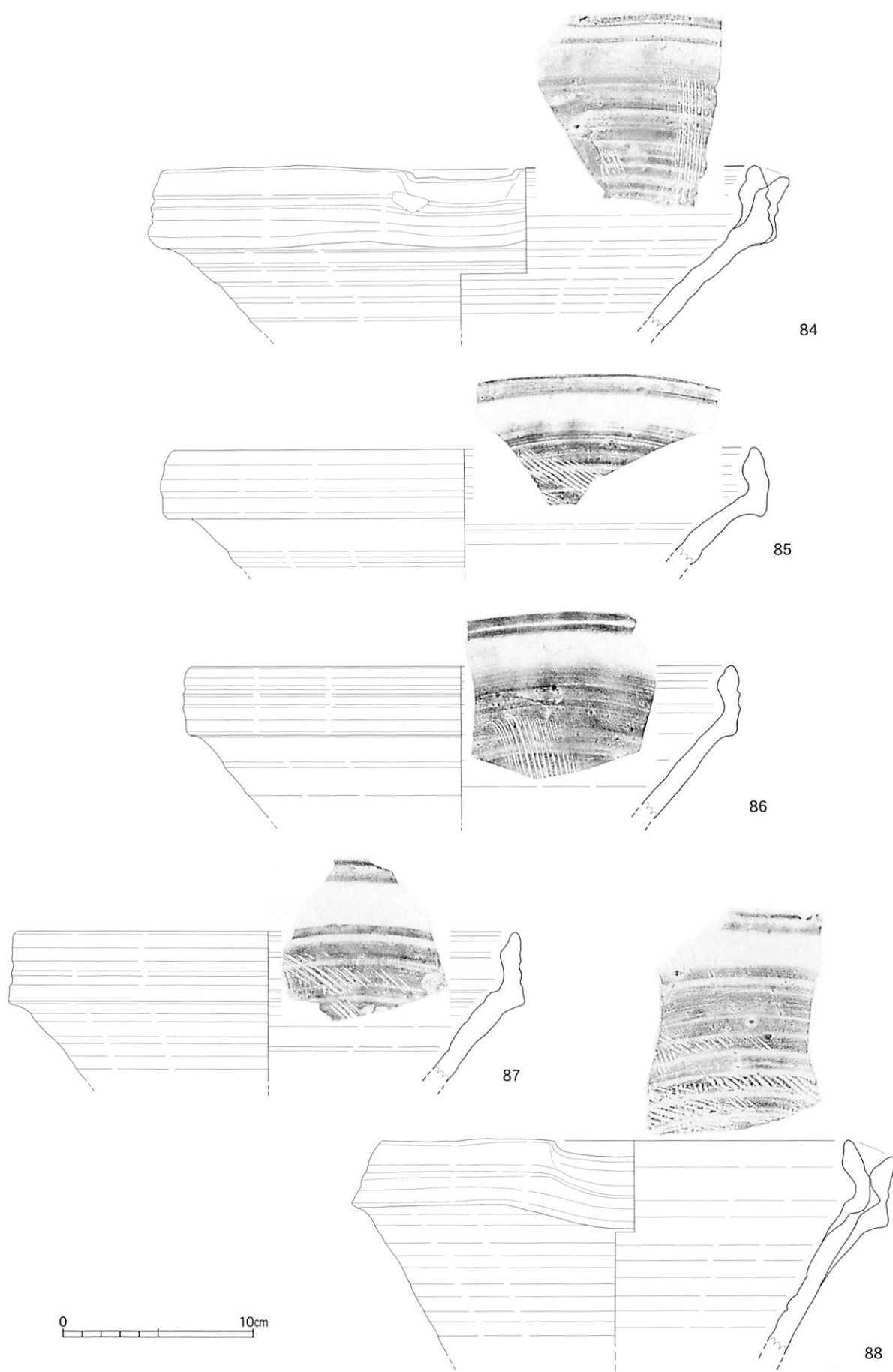


第4-10図 C-SD01出土遺物実測図(5) (1/3)



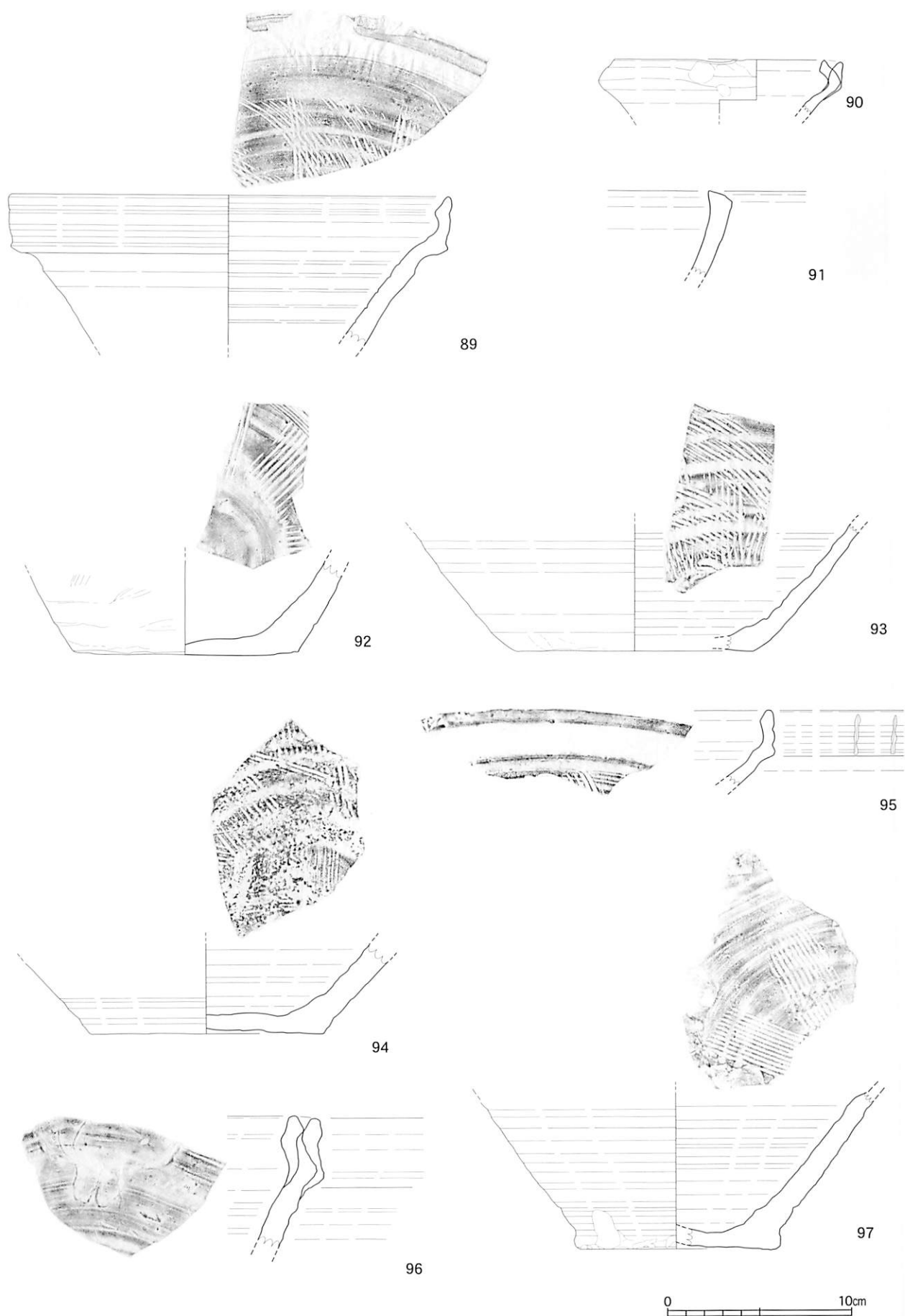
0 10cm

第4-11図 C-SD01出土遺物実測図(6) (1/3)



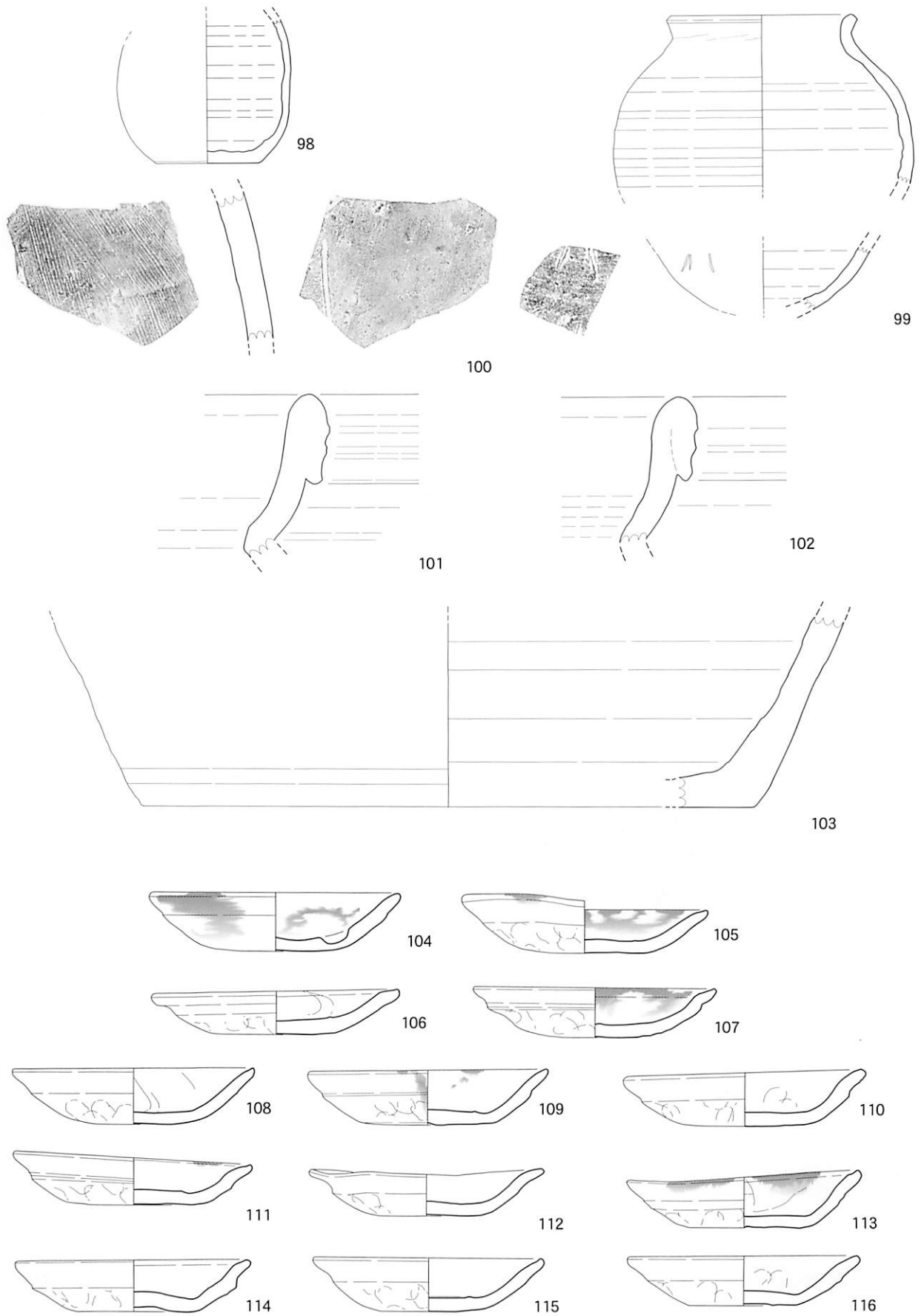
第4-12図 C-SD01出土遺物実測図(7) (1/3)





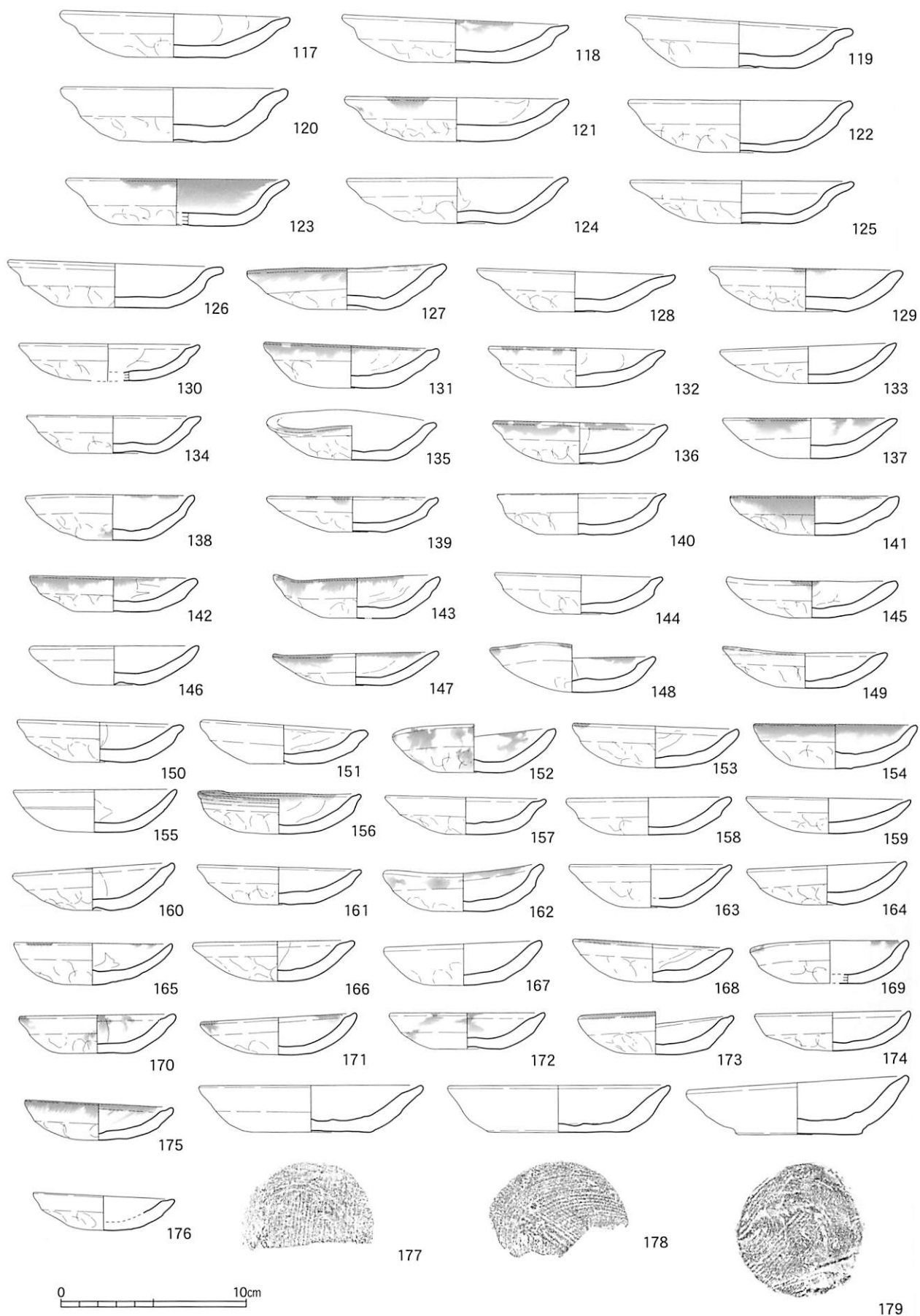
第4-13図 C-SD01出土遺物実測図(8) (1/3)

第2節 遺構と遺物



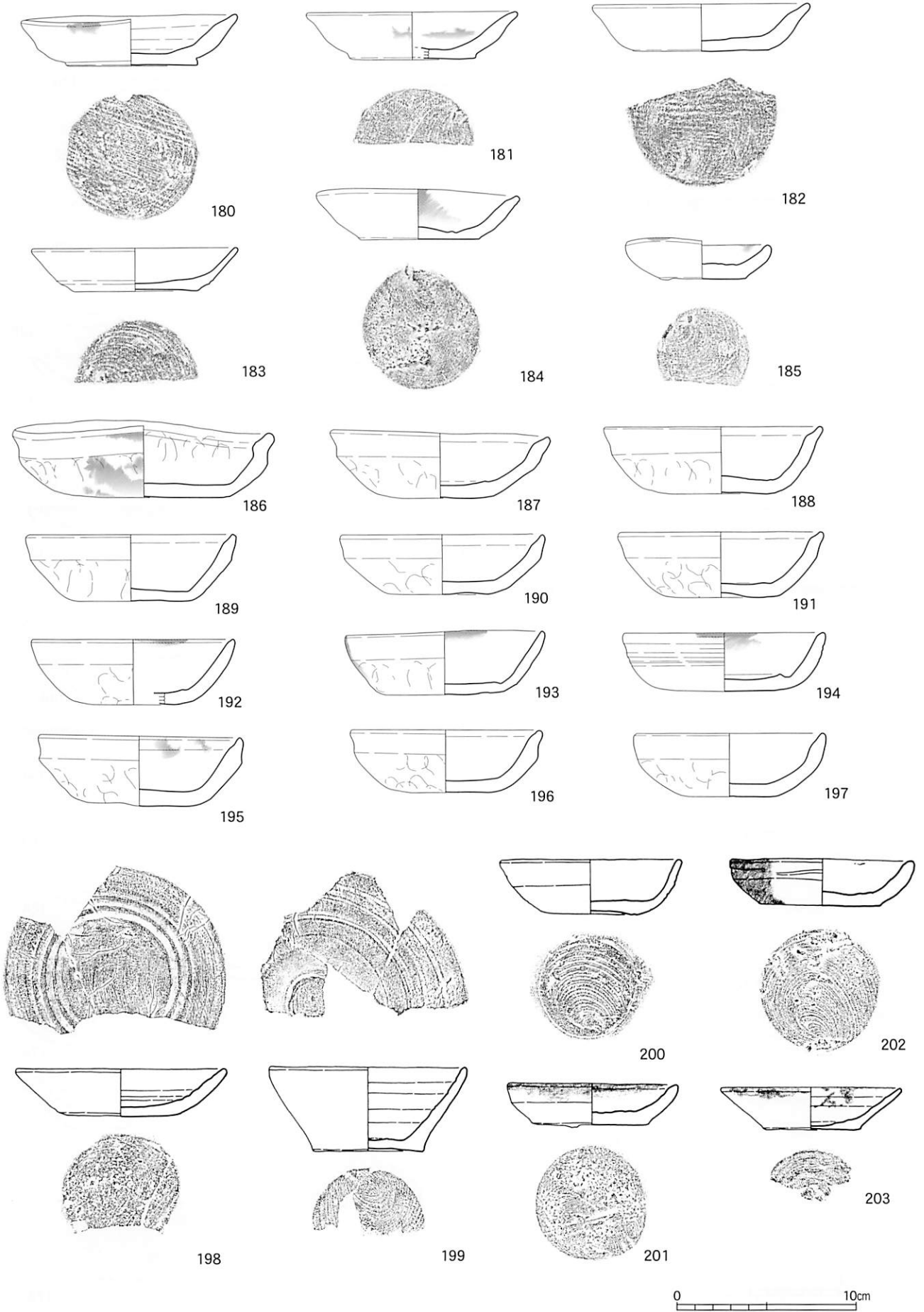
0 10cm

第4-14図 C-SD01出土遺物実測図(9) (1/3)

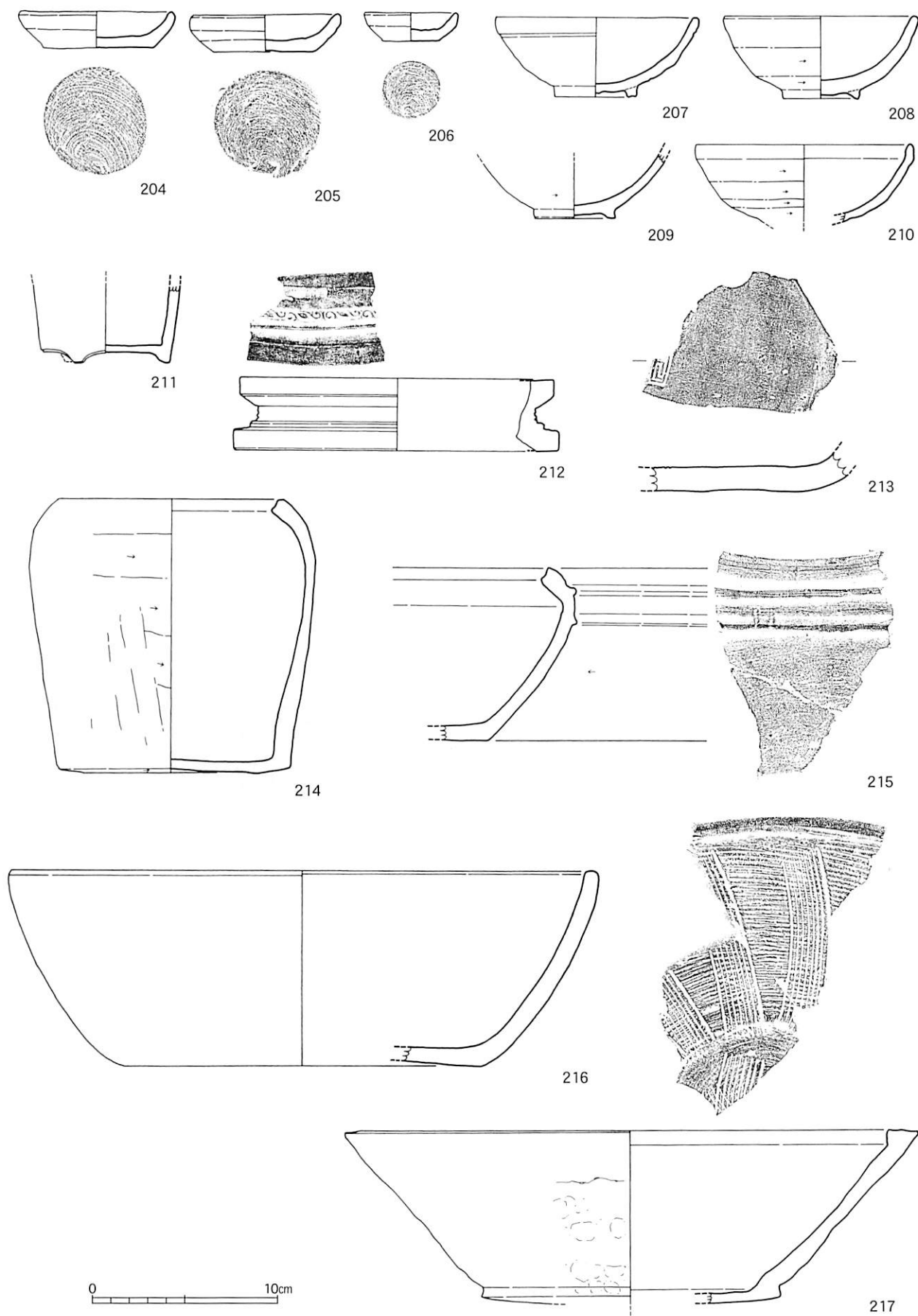


第4-15図 C-SD01出土遺物実測図(10) (1/3)

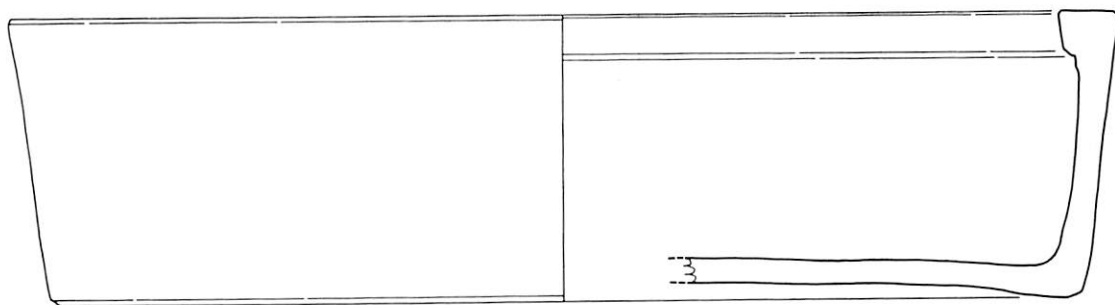
第2節 遺構と遺物



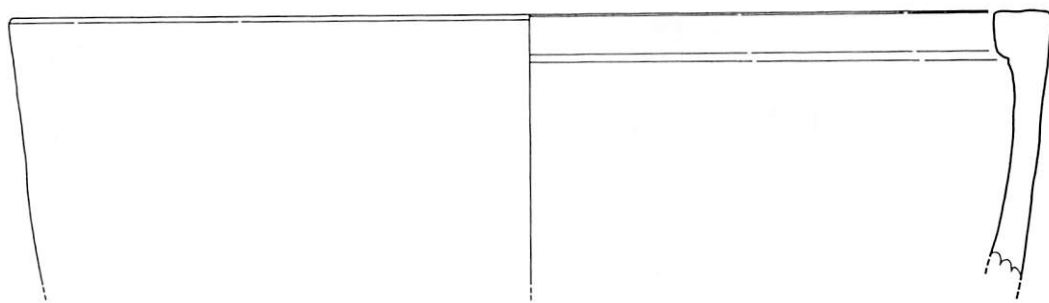
第4-16図 C-SD01出土遺物実測図(1) (1/3)



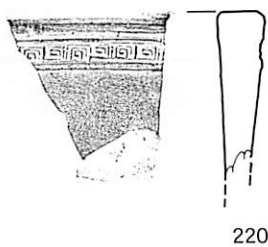
第4-17図 C-SD01出土遺物実測図(12) (1/3)



218



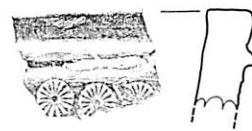
219



220



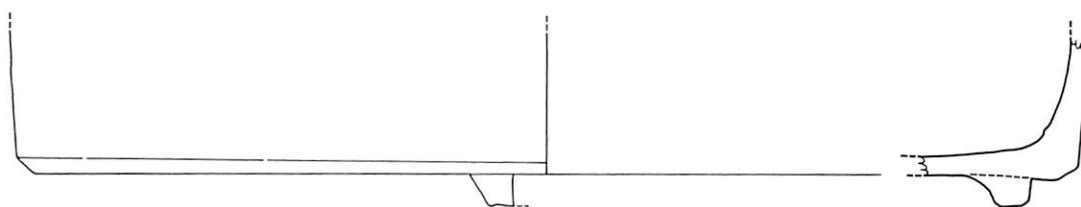
221



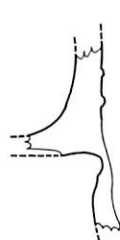
222



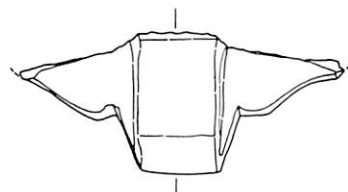
223



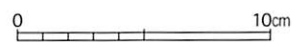
224



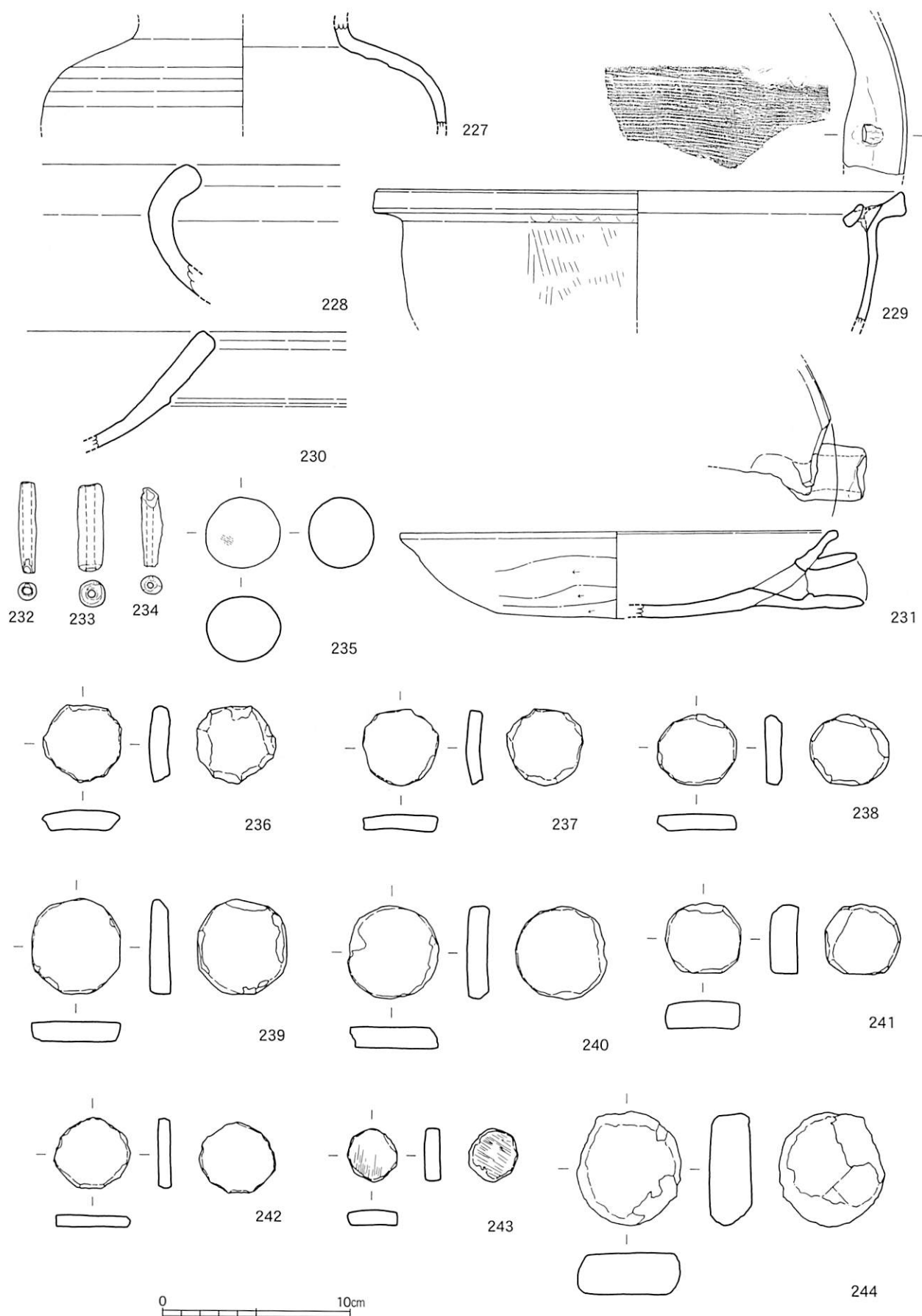
225



226



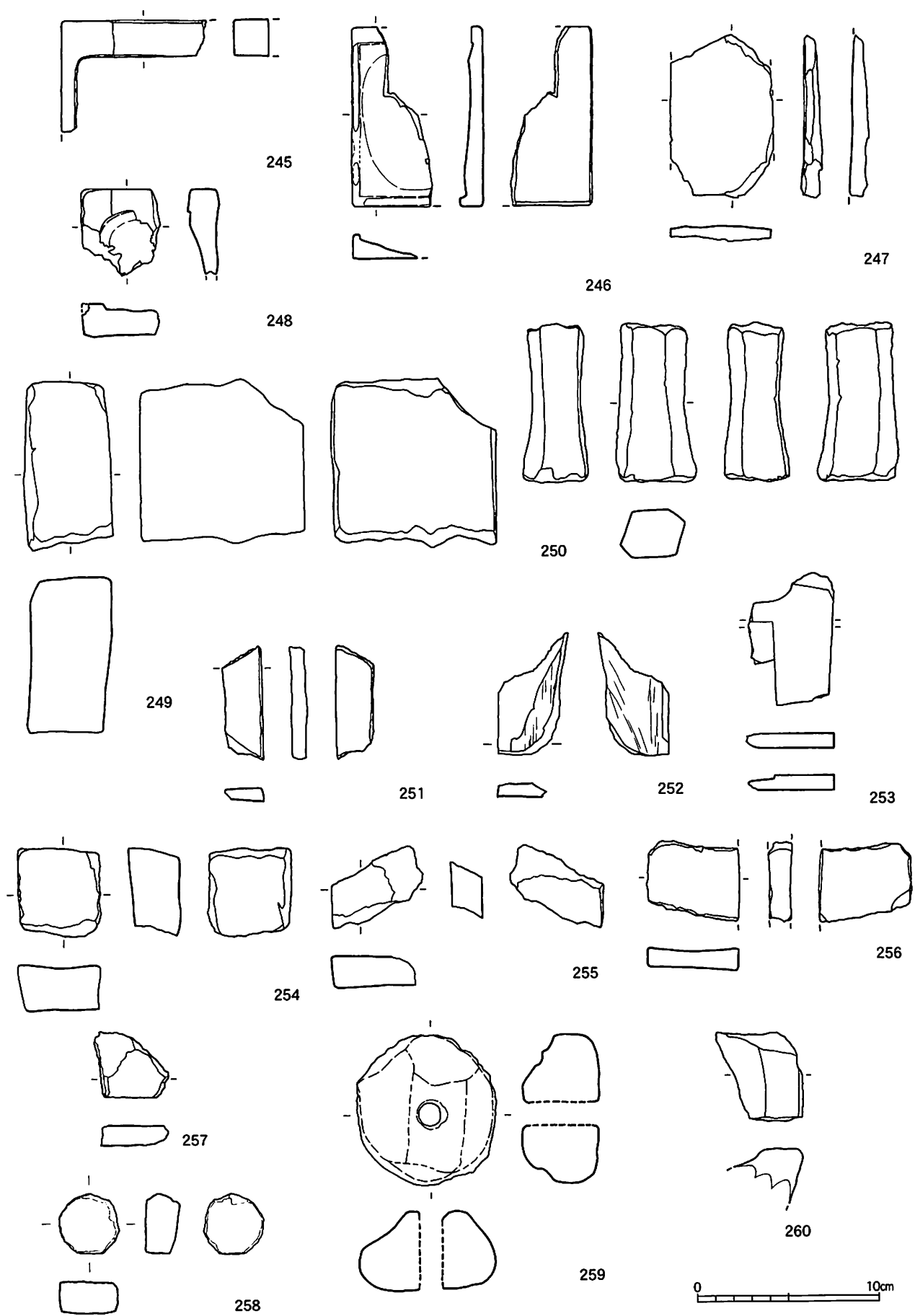
第4-18図 C-SD01出土遺物実測図(13) (1/3)



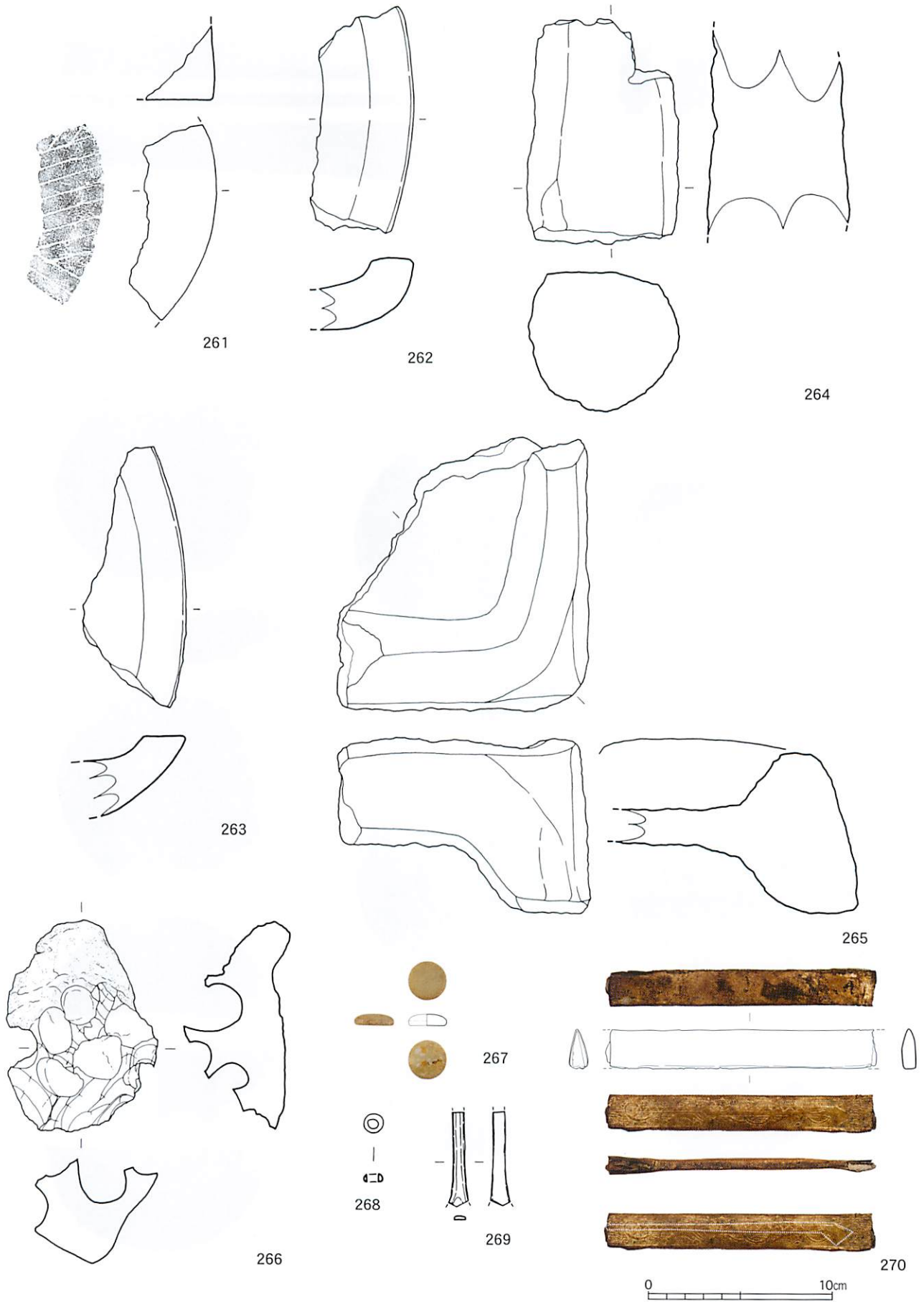
第4-19図 C-SD01出土遺物実測図(14) (1/3)



第2節 遺構と遺物

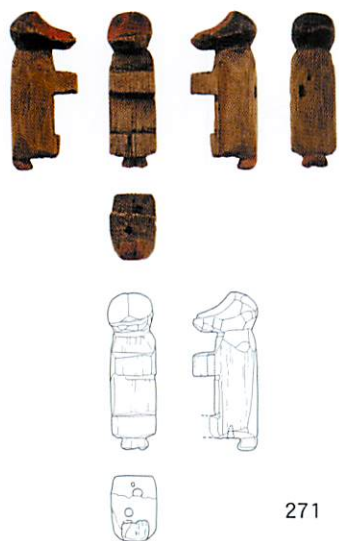


第4-20図 C-SD01出土遺物実測図(15) (1/3)



第4-21図 C-SD01出土遺物実測図(16) (1/3) ※270のみ1/2

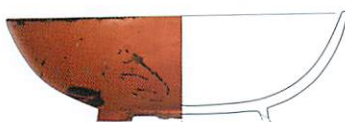
第2節 遺構と遺物



271



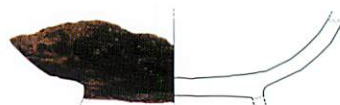
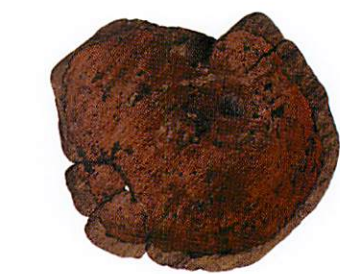
272



273



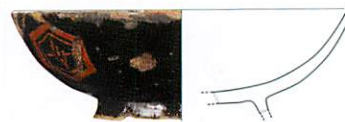
274



275



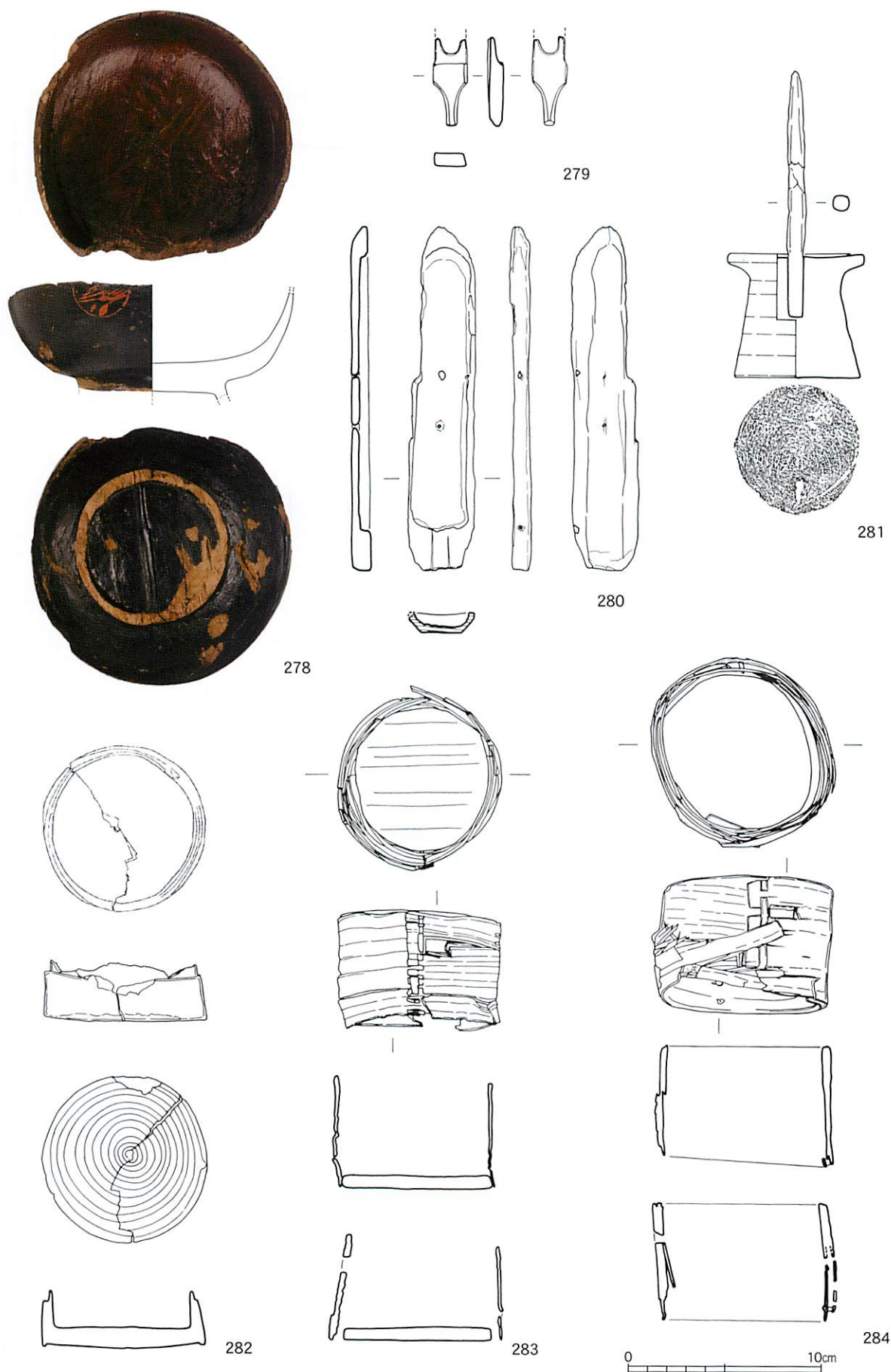
276



277



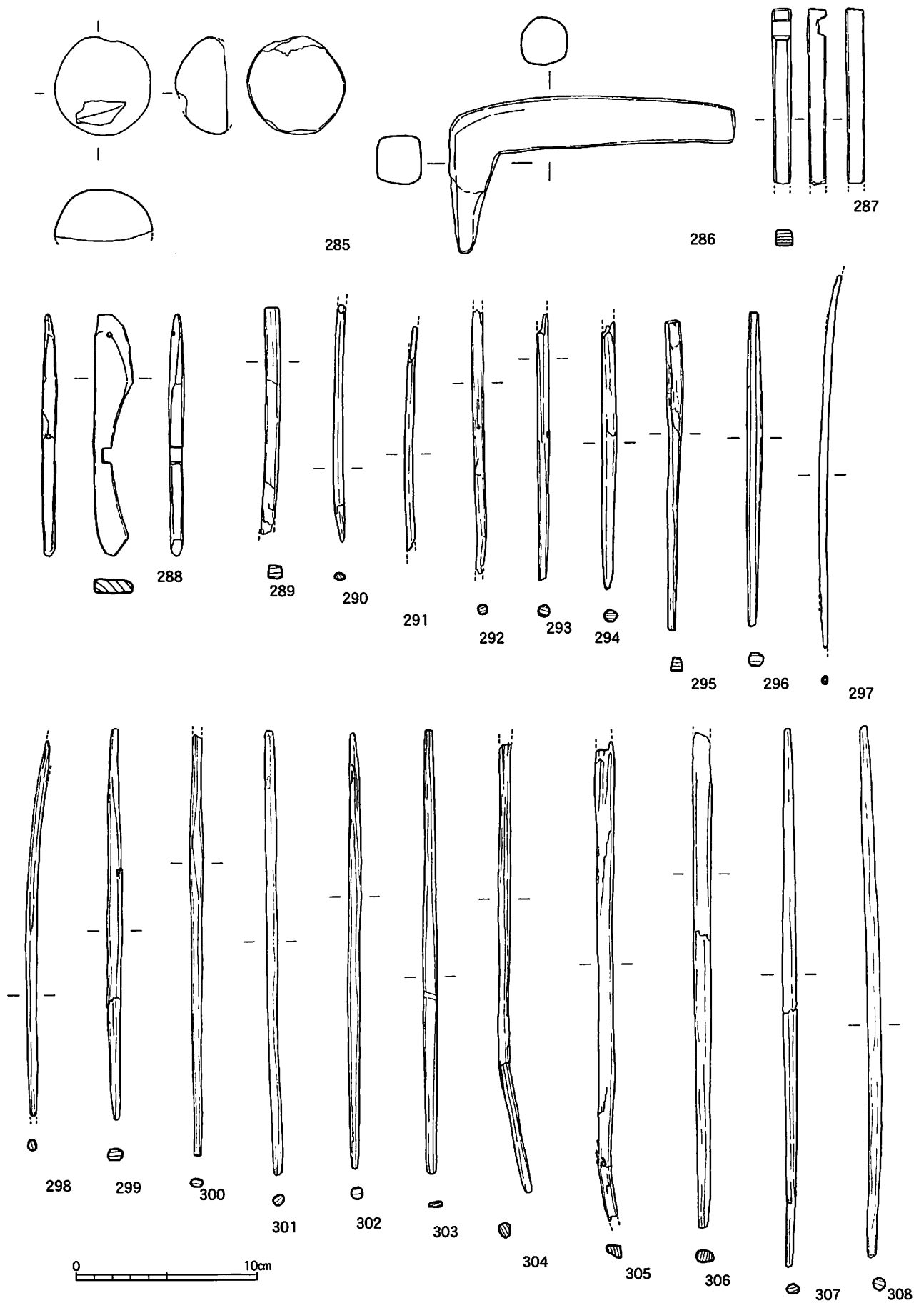
第4-22図 C-SD01出土遺物実測図(17) (1/3)



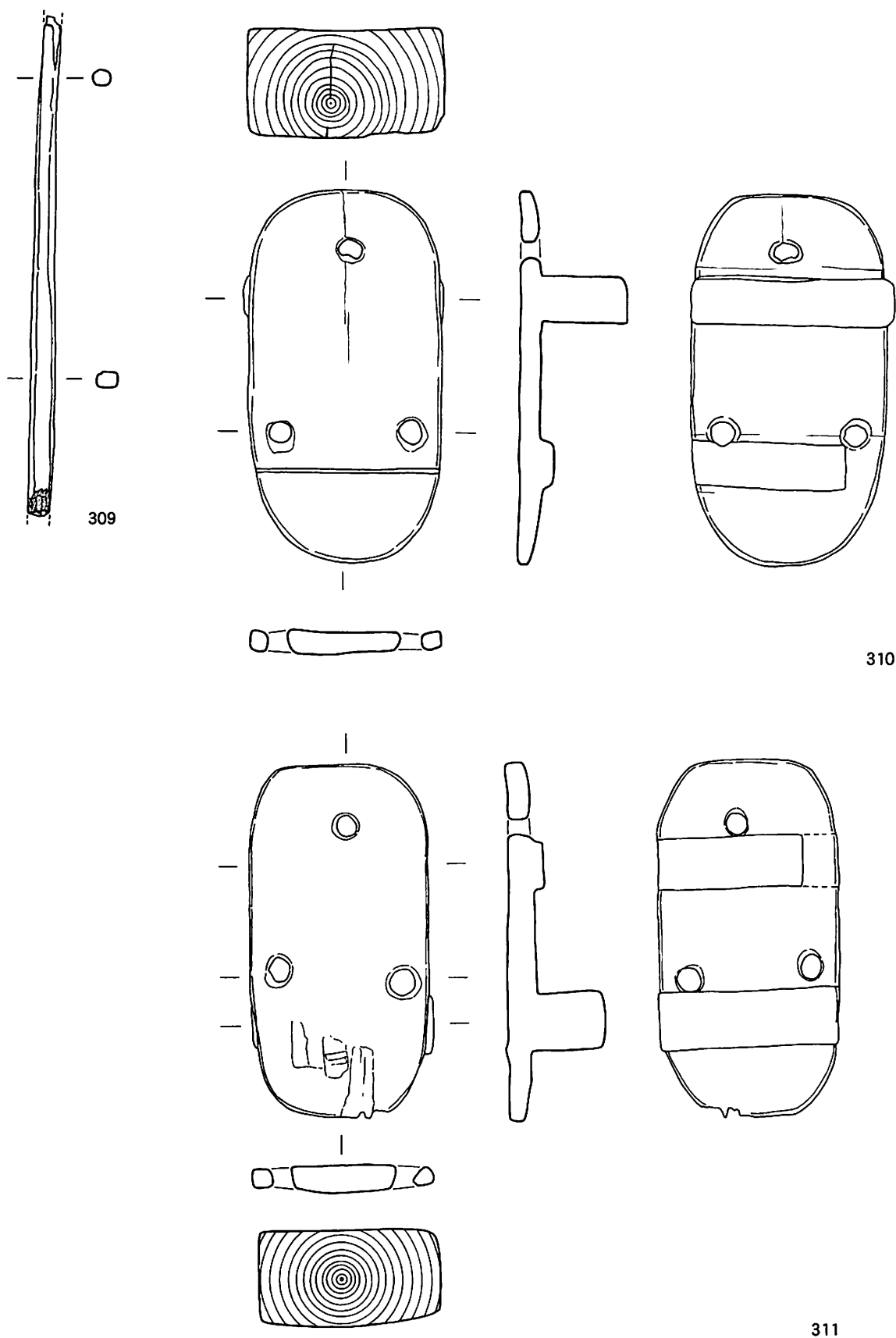
第4-23図 C-SD01出土遺物実測図(18) (1/3)



第2節 遺構と遺物

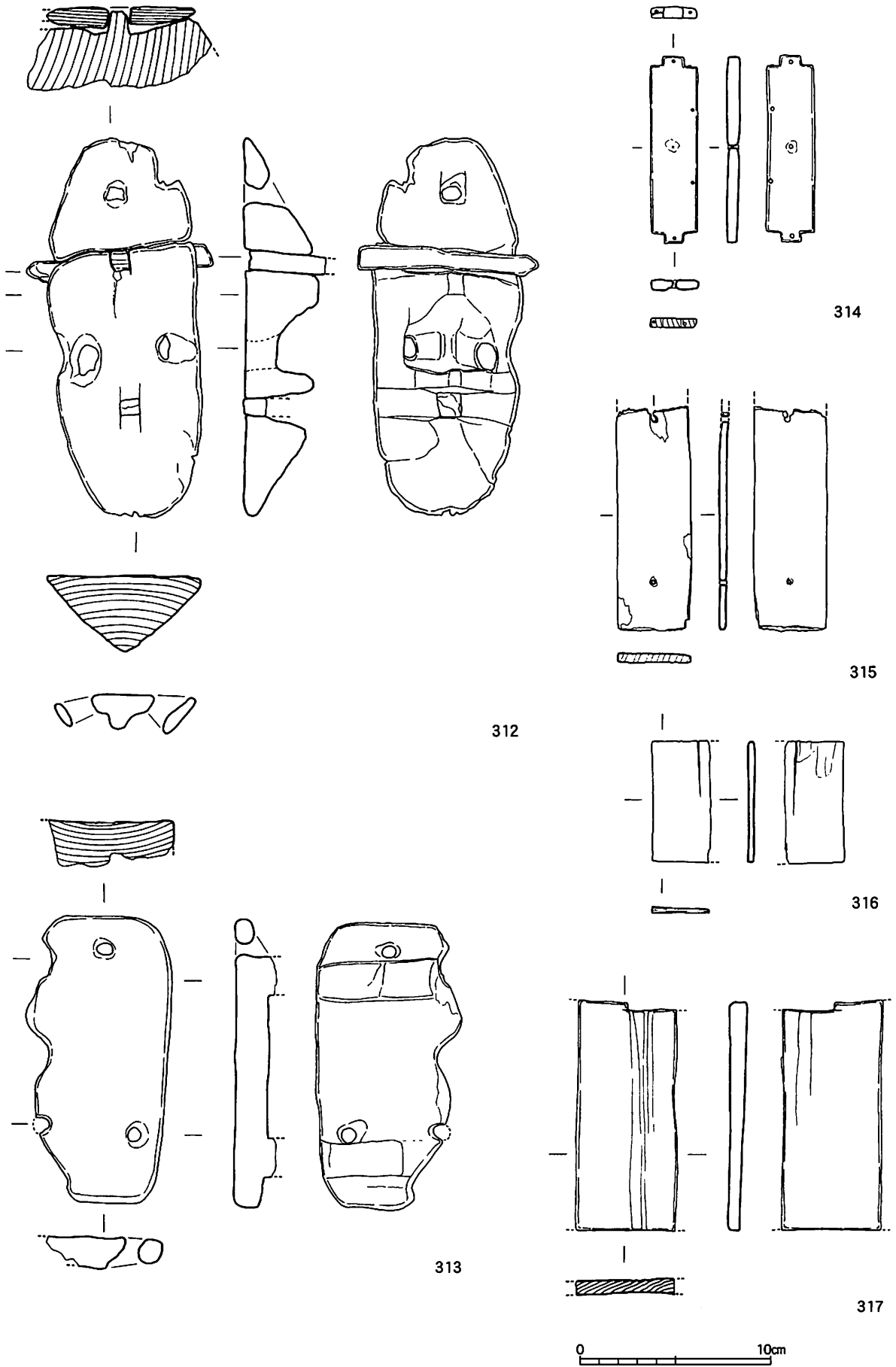


第4-24図 C-SD01出土遺物実測図(19) (1/3)



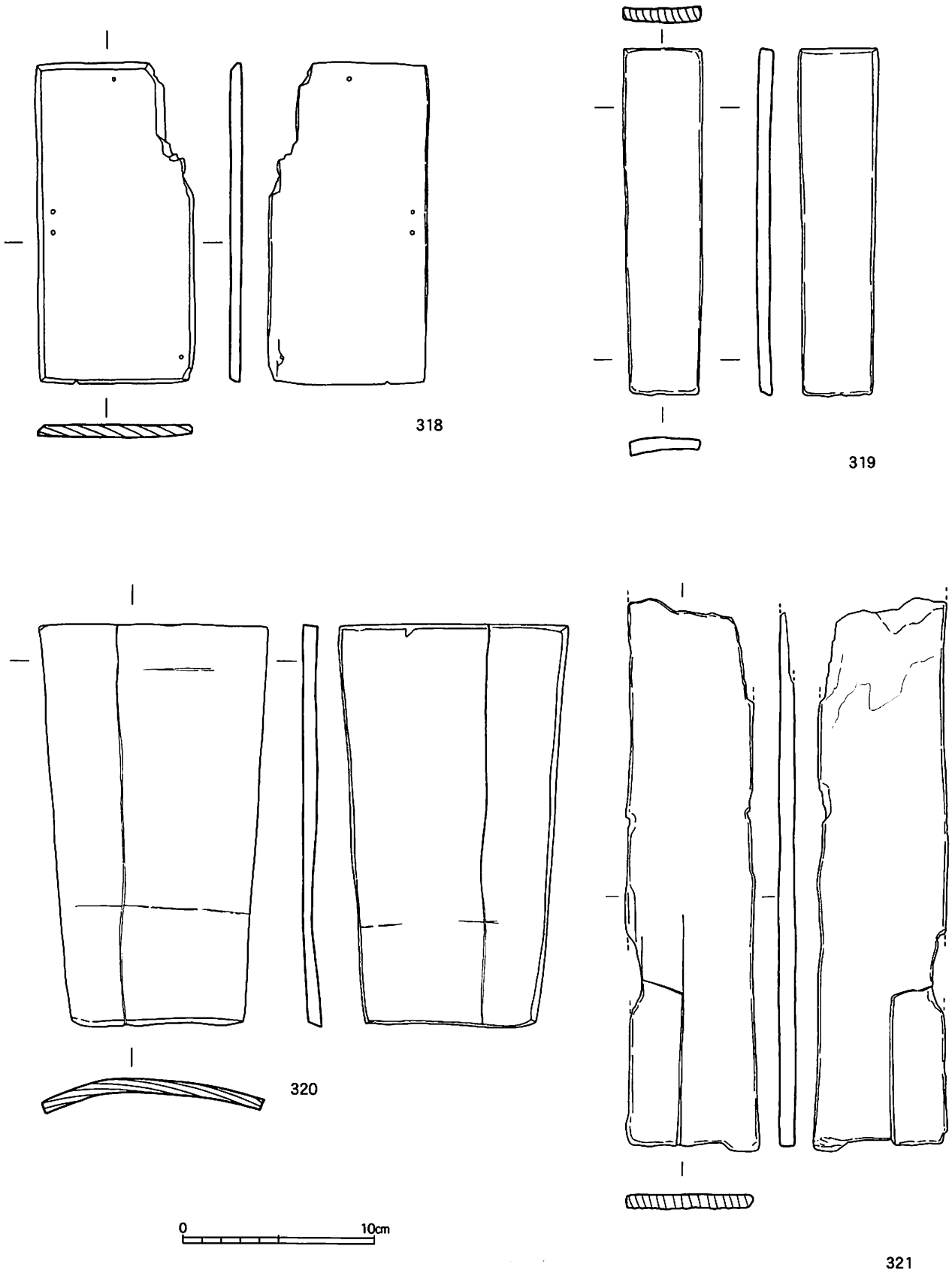
第4-25図 C-SD01出土遺物実測図(20) (1/3)

第2節 遺構と遺物



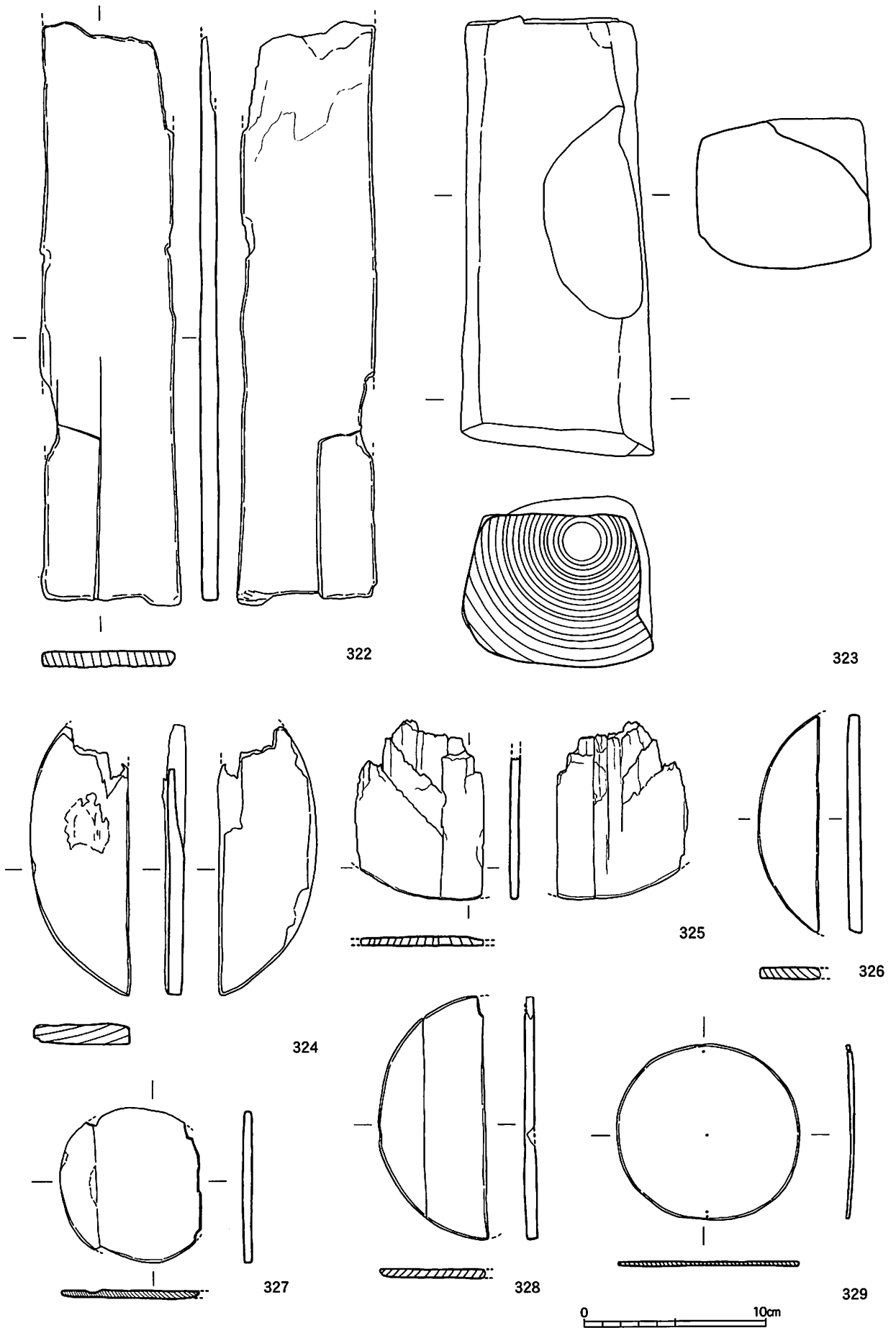
第4-26図 C-SD01出土遺物実測図(21) (1/3)





第4-27図 C-SD01出土遺物実測図(22) (1/3)

第2節 遺構と遺物



第4-28図 C-SD01出土遺物実測図(23) (1/3)

料は14世紀頃のもので時期が若干異なる。また烏帽子をかぶり形態も異なっていることから、別の用途が考えられる。また中世大友府内町跡においては第13次調査区で猿形の土製品が出土している<sup>(1)</sup>。

- 漆器椀 272は細長扁平の板で用途は不明である。273～278は漆器椀である。273は胴部外面に木の葉文様、277は胴部外面と見込に六角形の文様、278は胴部外面に文様が施される。  
279は機織り用糸巻きの軸の部分である。
- 舟形木製品 280は舟形木製品で、中央部分にある穿孔は帆柱用のものと思われる。
- 燭台 281は燭台である。台の部分は在地系の土師質土器である。C-SD01の泥炭層中から出土したため、芯の木製品が刺さった状態で残っていた。芯の部分は中位あたりで抉りのようなものが入る。これが蠟燭の芯としたら、蠟燭はかなり大型のものとなる。
- 柄杓 282～284は柄杓である。柄の部分はない。いずれも曲物である。
- 毬杖の玉 285は毬杖の玉で、半分が欠けている。286はし字状に曲がる棒状製品で、用途は不明である。  
287は柱状の木製品で端部に抉りが入る。他の部材と組み合わされていたものと思うが、用途は不明である。288は扁平板状製品であるが、一方の辺が内側に湾曲し、中央に抉りが入る。端部には穿孔が入る。組み合わせて使用されたものであろう。
- 箸状木製品 289～309は箸状木製品で、部分的に欠損しているものも多いが、数サイズが存在しそうである。
- 下駄 310～313は下駄である。310・311・313は連歯下駄、312は差歯下駄である。  
314～322は板状の木製品である。314は両端部が方形に張り出し、穿孔が施される。315は両端部に穿孔、318は各辺に穿孔が設けられている。用途についてはいずれも不明である。  
323は角柱状木製品である。大きさも大きいので建築部材かもしれない。
- 曲物 324～329は曲物の底もしくは蓋である。いずれも扁平で円形を呈す。特に329は穿孔が施され、他のものとは異なった用途が推測される。

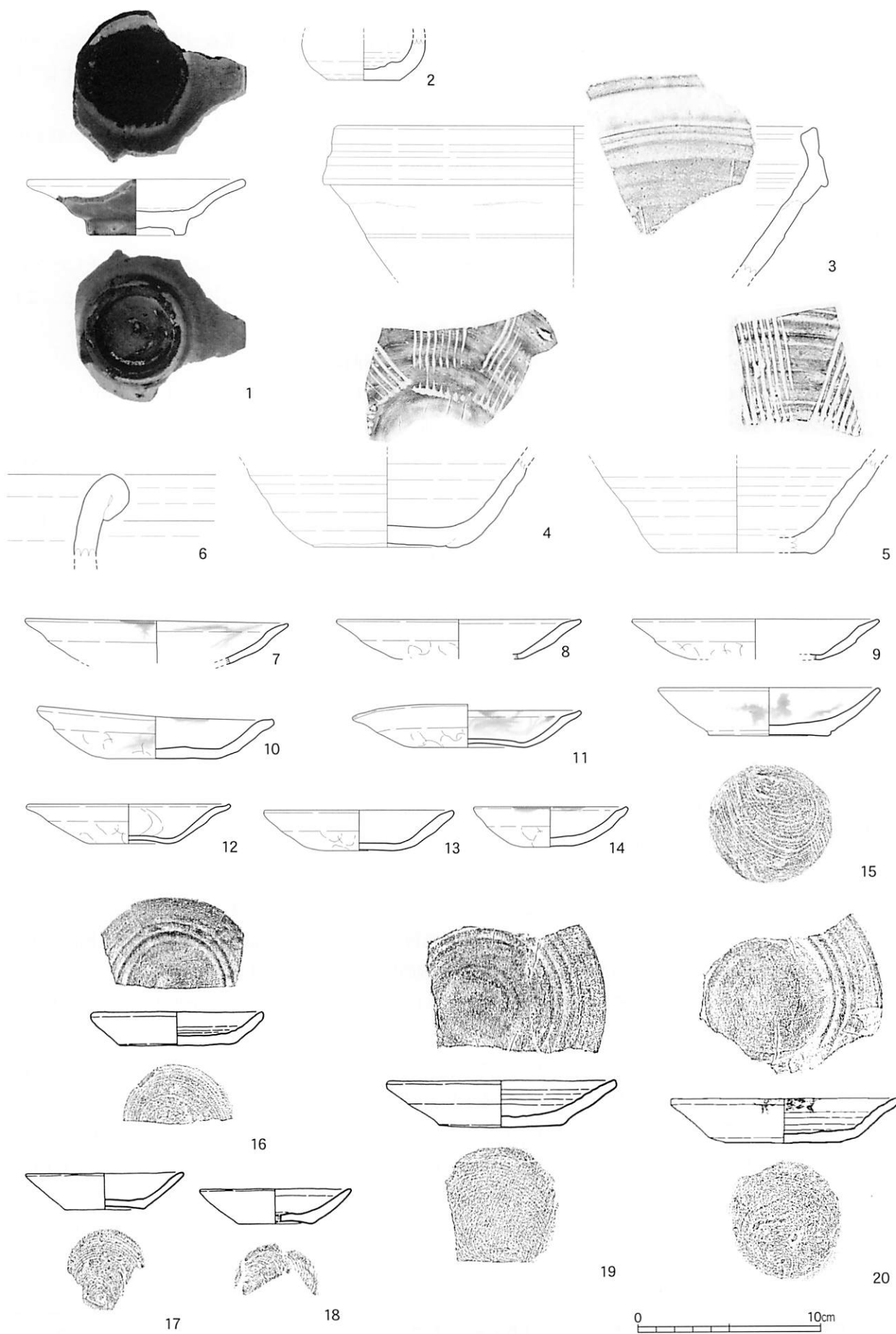
#### C-SD10 (第4 - 5図)

- C-SD10はK-37・38区～M-37・38区までの範囲で東西方向に延びる溝で、規模は確認できているだけで東西長で20m、深さは検出面から計測して約2.5mある。大半をC-SD01に切られているため、詳細は不明である。ただ、2.5mの深さからしてC-SD01に近い規模を有すると推測され、その位置
- 万寿寺北側を  
画する堀 関係から考えても、万寿寺北側を画する堀である可能性が高いと思われる。その場合、堀の時期が問題となってくるが、C-SD10から出土する遺物は、まず土師質土器に関してみれば1期段階の京都系土師器皿と、底部から口縁部に向けて直線的に開き内面にロクロ目を顕著に残す在地系土師器皿がセットとなる。そして、備前系陶器についてはナナムスリメを有する近世1期の播鉢は見られず、中世6期のものが主体となる。遺物のセット関係は切り合っているC-SD01とは明らかに異なっており、C-SD10の時期は16世紀前葉に比定できる。これは、C-SD10を徳治元年(1306年)に創建され16世紀末まで存続した万寿寺の堀とするのに矛盾しない。またこのC-SD10の時期と、これを切って形成されたC-SD01とは若干のタイムラグがある。C-SD10が完全に埋まってしまった後に、C-SD01は掘り返されたのであろう。ただ少なくとも15世紀末葉から16世紀末までは、万寿寺の北限に関する空間認識は変わっていないと考えられる。

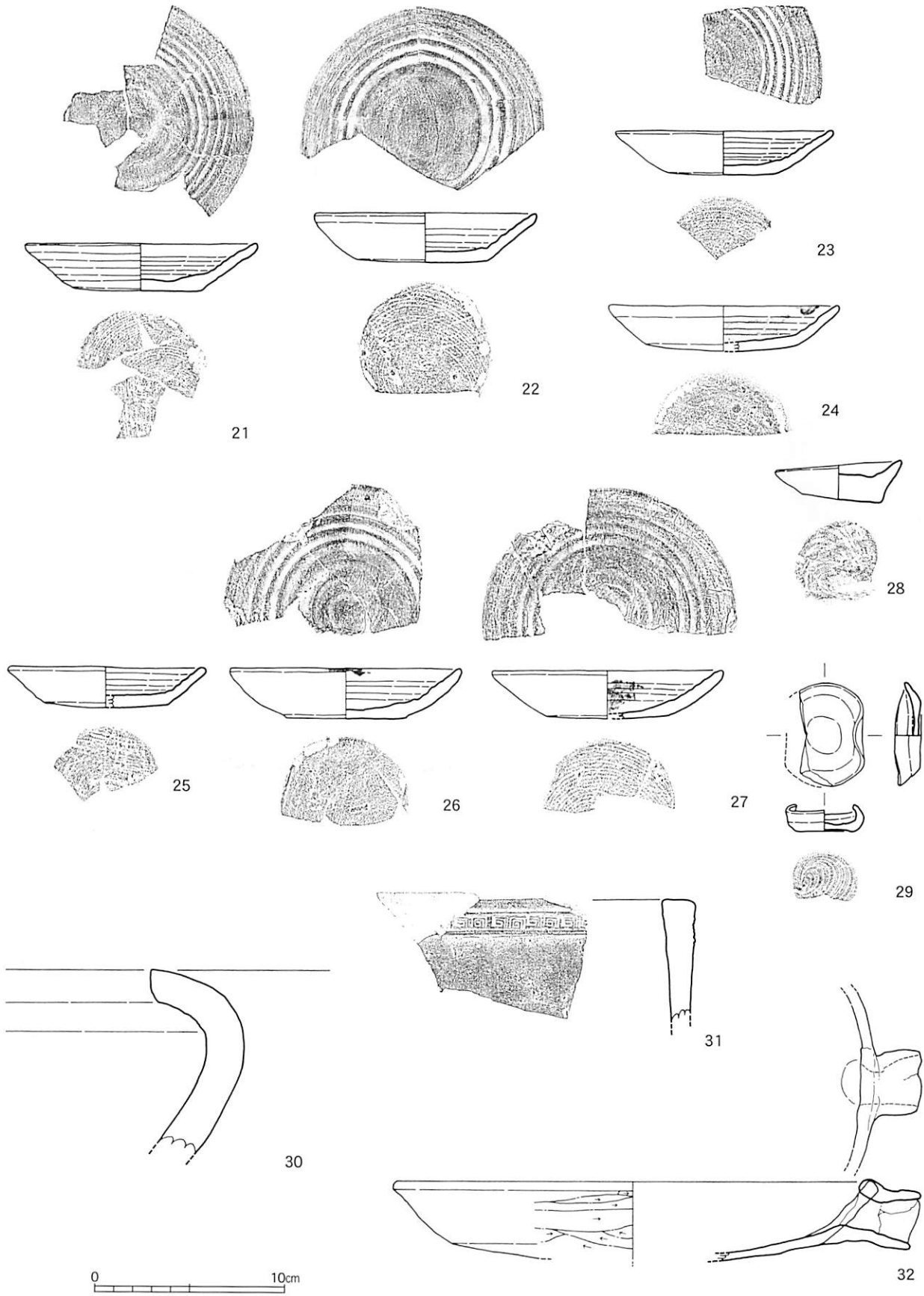
また、C-SD10からは人骨の頭部が出土しており、第5章自然科学的分析の項を参照されたい。

(1)大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内2 中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 2005年)

第2節 遺構と遺物

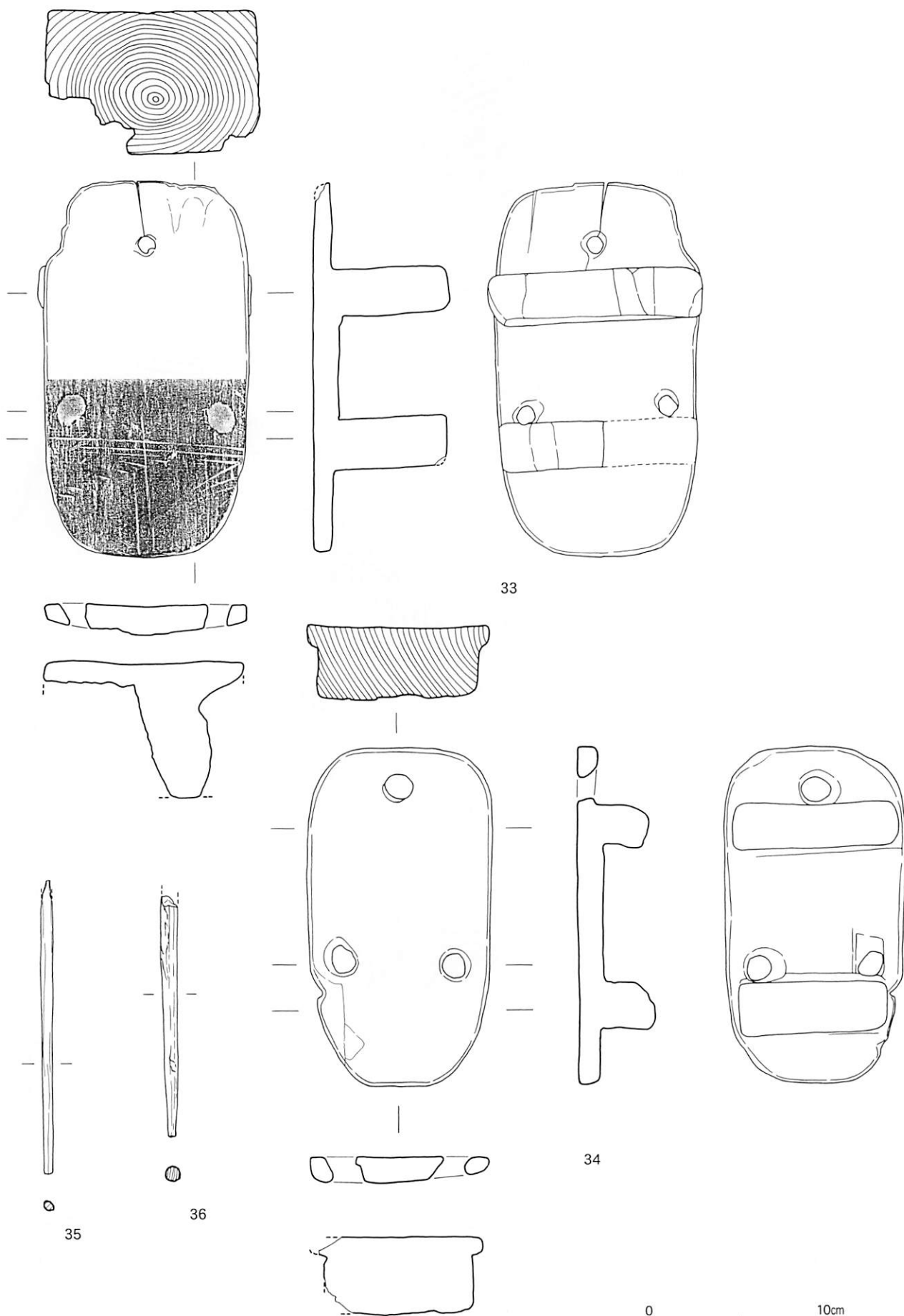


第4-29図 C-SD10出土遺物実測図(1) (1/3)



第4-30図 C-SD10出土遺物実測図(2) (1/3)

第2節 遺構と遺物



33

34

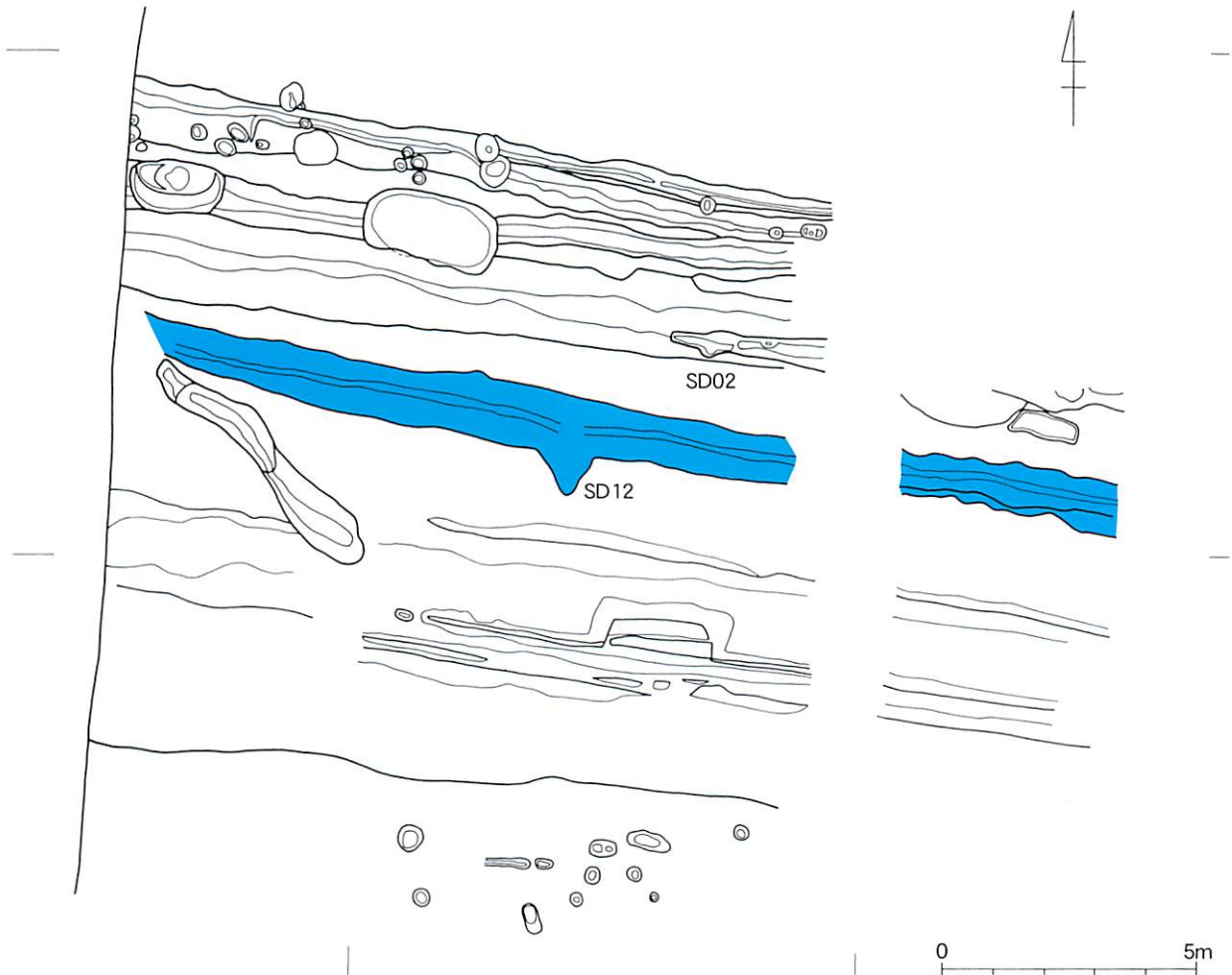
35

36

第4-31図 C-SD10出土遺物実測図(3) (1/3)

出土遺物（第4-29図-1～第4-31図-36）

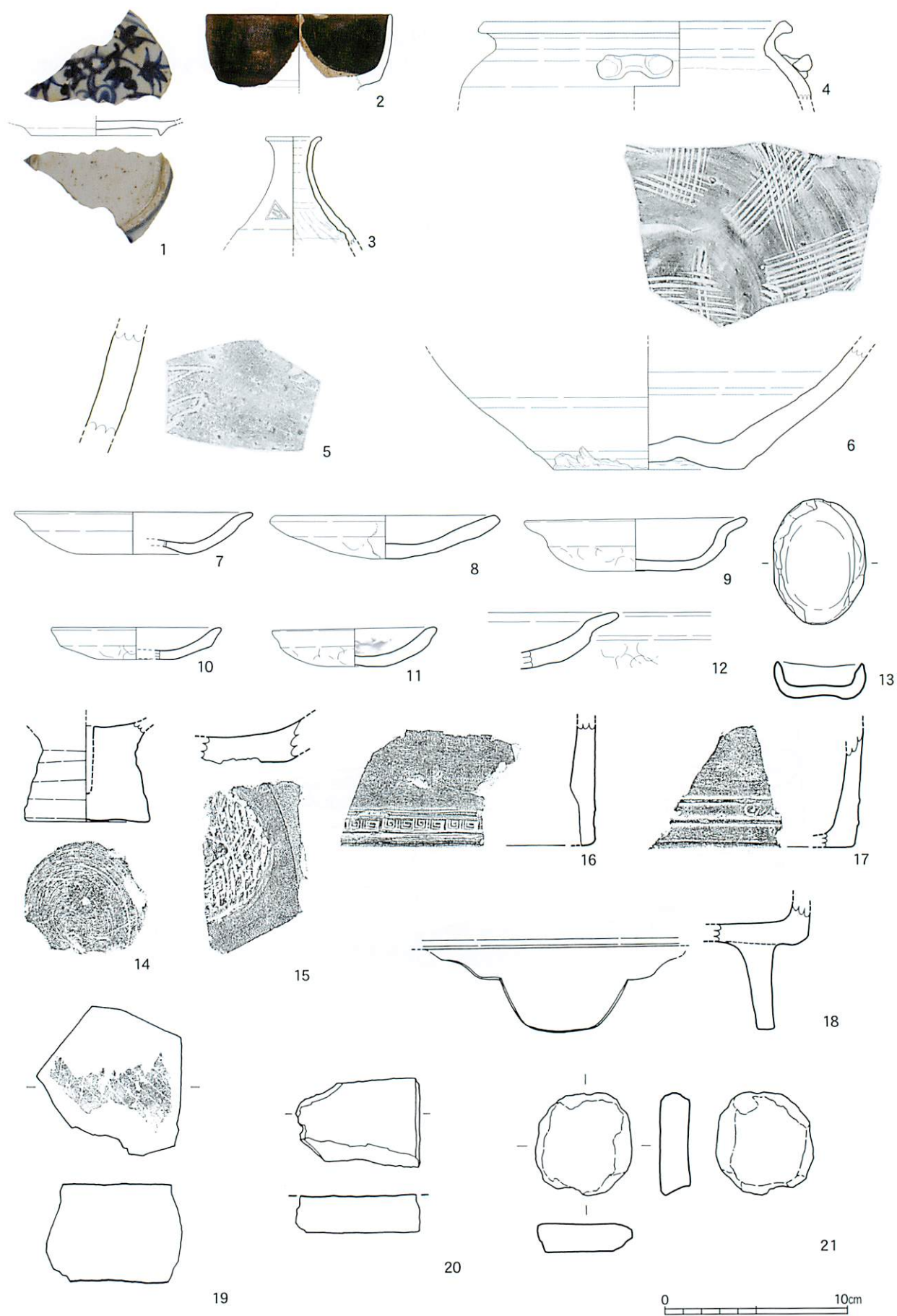
- 龍泉窯系青磁皿 1は、龍泉窯系青磁皿である。底部には高台が付き、腰部下で折れて外反気味に口縁部が開く。
- 放射状スリメ 2～6は備前系陶器である。2は小壺、3～5は播鉢、6は甕である。播鉢に関してはナナメスリメが見られず、すべて放射状スリメである。また口縁部の形態が判る3については、口縁部文様帯が発達するものの、凹線はさほど多条化しておらず、口縁端部のナデによる先細りも見られない。
- 中世6期 したがって中世6期に比定できるものと思われる。
- 京都系土師器 7～14は京都系土師器の皿である。C-SD01のものとは明らかに異なり、大半の資料の器壁が薄く、1期に位置づけられると思われる。中には10のように器壁が厚くナデが明瞭なものや15のように京都系土師器の胎土を持ち、糸切り痕を有する「折衷様式」のものも見られるが、これはC-SD01資料の混入として捉えておきたい。
- 顕著なロクロ目 16～28は在地系土師質土器の皿である。底部から口縁部に向けて直線的に開き、内面に顕著なロクロ目を残す。また底部には糸切り痕が見られる。中には20・24・26・27のように口唇部にススの付着が認められるものがあり、灯明皿として使用されたものと思われる。器高が15世紀末葉～16世紀初頭頃の資料に比べると低くなっている傾向があり、16世紀前葉に比定できよう。28の小皿については、若干形態が異なり混入品かもしれない。また29は耳皿である。
- 連歯下駄 30～32は瓦質土器で30は鉢、31は火鉢である。31は口縁部に雷文帯が巡る。32は焙烙である。
- 33～36は木製品である。33・34は下駄で、いずれも連歯下駄である。35・36は箸状木製品である。これらの木製品はC-SD01でかなりの出土が見られており、その混入かもしれない。



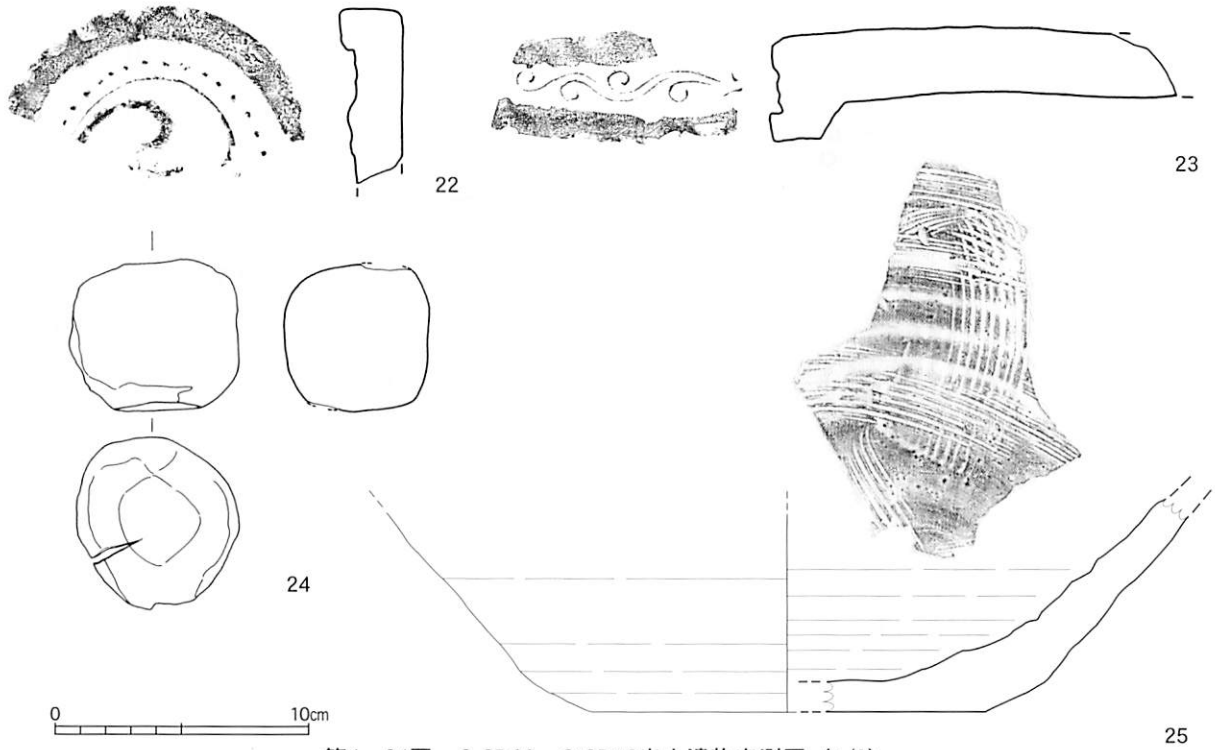
第4-32図 C-SD02・SD12実測図 (1/150)



第2節 遺構と遺物



第4-33図 C-SD02出土遺物実測図 (1/3)



第4-34図 C-SD02・C-SD12出土遺物実測図 (1/3)

C-SD02・C-SD12 (第4-32図)

近世1期

空閑地

道路

C-SD02は、C-SD01とほぼ併行して東西に延びる溝で、確認できている長さで約20m、幅1m、深さ0.6mの規模を有す。C-SD01の北側に接するように延びており、両者の切り合い関係は東壁の土層観察からも判別できない。出土する遺物も3期の京都系土師器の皿や近世1期の備前系陶器插鉢などが主体で、C-SD01とほとんど時期差が認められない。したがって、C-SD01とは併存したか、もしくはさほど時期を置かない段階で存在したのと考えられる。ただ一つの可能性として、C-SD01直上の10層(第4-3図の調査区東壁土層図参照)がシルト層であり、C-SD01が埋まった後しばらくの間空閑地であった可能性を示している(道路の可能性もある)。このシルト層の面を北側(図面では左側)へ追っていくとC-SD02の掘形へつながっていく。高さはかなり違うが、C-SD01の直上が沈下したと考えれば、このシルト層の面の段階に、C-SD02は併存していた可能性があり、そうした場合C-SD02はC-SD01よりも新しいということになる。また、このシルト層がもし道路であったならば、併存するC-SD02は道路側溝としての位置づけも可能であるが、今のところこのシルト層を道路と断定できる材料もなく、今後更なる検証が必要である。

次にC-SD12は、C-SD02に直交するように短く延びる溝で、長さ2m、幅1.2m、深さ0.5mの規模を有す。近世1期の備前系陶器插鉢が出土しており、C-SD02とさほど時期差がないと思われ、併存した可能性もある。

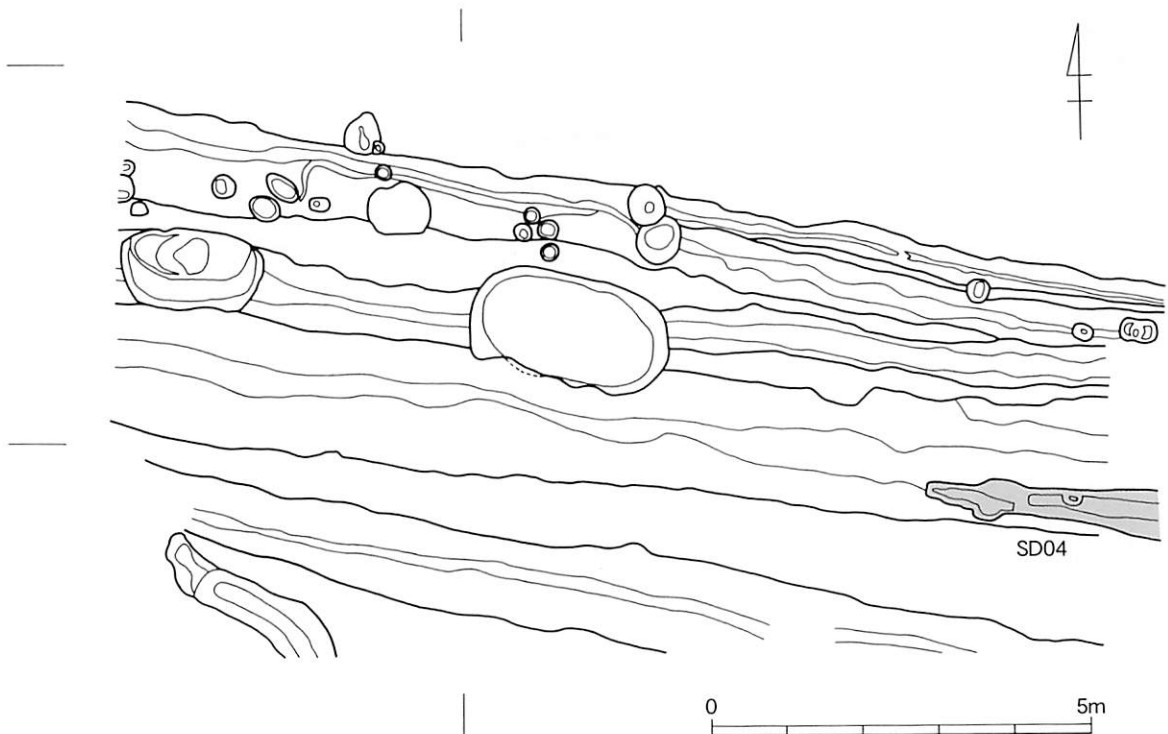
出土遺物(第4-33図-1~第4-34図-25)

瀬戸美濃系陶器

耳皿

毬杖の毬

1は景徳鎮窯系の皿で、見込に文様が描かれる。2は瀬戸美濃系陶器で碗と思われる。3~6は備前系陶器で、3は徳利、4は四耳壺である。5は甕で胴部に文字が刻まれる。6は插鉢で、ナナムスリメが見られ、近世1期のものと思われる。7~12は京都系土師器の皿で器壁が厚く、口縁部下のナデも明瞭であることから2期~3期のものと思われる。13は耳皿、14は燭台でいずれも土師質土器である。15~18は瓦質土器で、15は風炉、16~18は火鉢である。16は雷文、17は双頭蔵手流雲文が施される。19は石白か茶白、20は砥石、21は円盤状土製品である。22は軒丸瓦、23は軒平瓦、24は毬杖の毬である。25のみがC-SD12出土で、備前系陶器插鉢である。



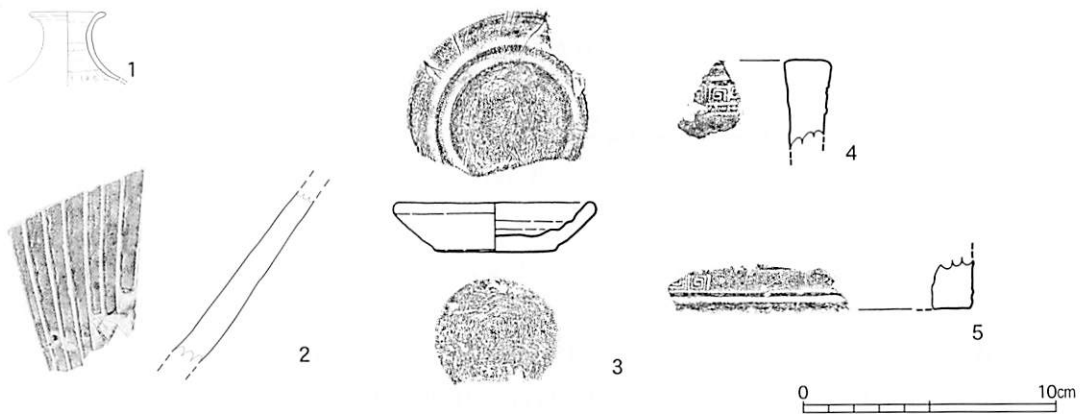
第4-35図 C-SD04実測図 (1/100)

C-SD04 (第4-35図)

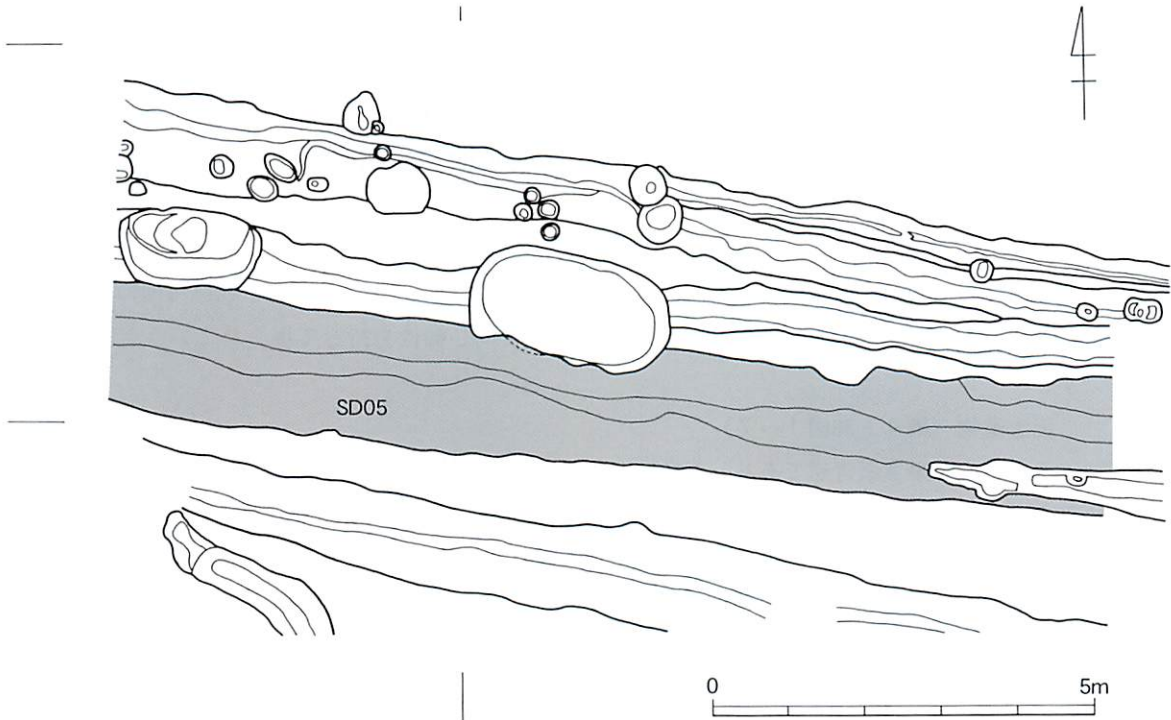
調査区の東隅L-37区で検出された短い溝で、確認長3.2m、幅0.6m、深さ0.6mの規模を有して東西方向へ延びる。調査区東壁の土層を見る限り、C-SD01が埋まった後その上に堆積した層も切っ  
 16世紀代 ているので、C-SD01等よりも新しく近世まで下るかもしれない。しかしながら、出土する遺物は16世紀代のものが主体であり、C-SD04の上部にある2層(53・54層)は掘り返し後の層かもしれない。出土遺物が希少なために、遺物から時期の認定を明確にすることは困難であるが、ただいずれにしても、C-SD01が埋まった後の溝であることは間違いないと思われ、万寿寺の区画とは別のものであろう。

出土遺物(第4-36図1~5)

徳利 1は備前系陶器の徳利で、2は丹波系陶器の搗鉢であろうか。3は、15世紀末葉~16世紀前葉に位置づけられる在地系土師質土器の小皿で、胴部は直線的に外傾して立ち上がり、内面には顕著に  
 雷文 ロクロ目が残る。底部は糸切り痕が残る。4・5は瓦質土器の火鉢の口縁部と底部付近の破片で、両者とも雷文が巡る。



第4-36図 C-SD04出土遺物実測図 (1/3)

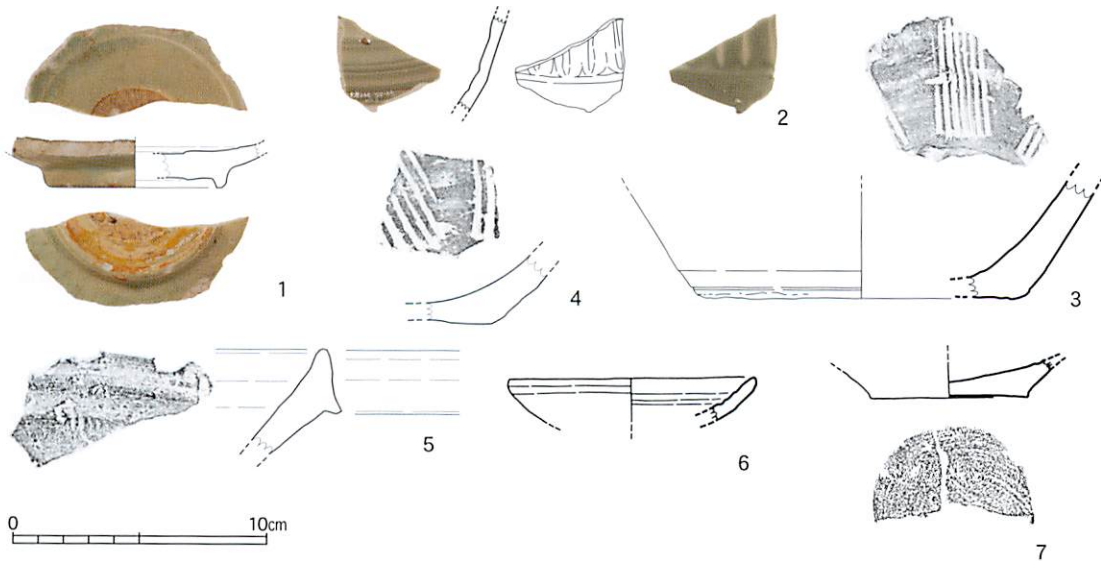


第4-37図 C-SD05実測図 (1/100)

C-SD05 (第4-37図)

V字形の掘形 深さ1.5mの規模を有する。溝は断面V字形の掘形をなす。土層観察から把握できる前後関係については(第4-3・4図参照)、まず調査区東壁の土層より、C-SD04よりは古く、C-SD08より新しいことが判る。C-SD01とは接しておらず、前後関係は不明である。次に調査区西壁の土層では、SK08とSK10の上に堆積する1・2層には切られているが、SK08・SK10との前後関係については土層からだけでは不明といわざるを得ない。北側のC-SD08との関係については、東壁同様C-SD08よりも新しいことが判る。

次に出土遺物を見てみると、出土量はさほど多くはないが、中世4期の備前系陶器埴鉢や内外面にロクロ目を顕著に残すタイプの在地系土師質土器の皿等が出土しており、出土する遺物の大半は15世紀代のものである。さらに昨年度本調査区の西側隣接部分を調査しており(第51次調査区)、



第4-38図 C-SD05出土遺物実測図 (1/3)



第2節 遺構と遺物

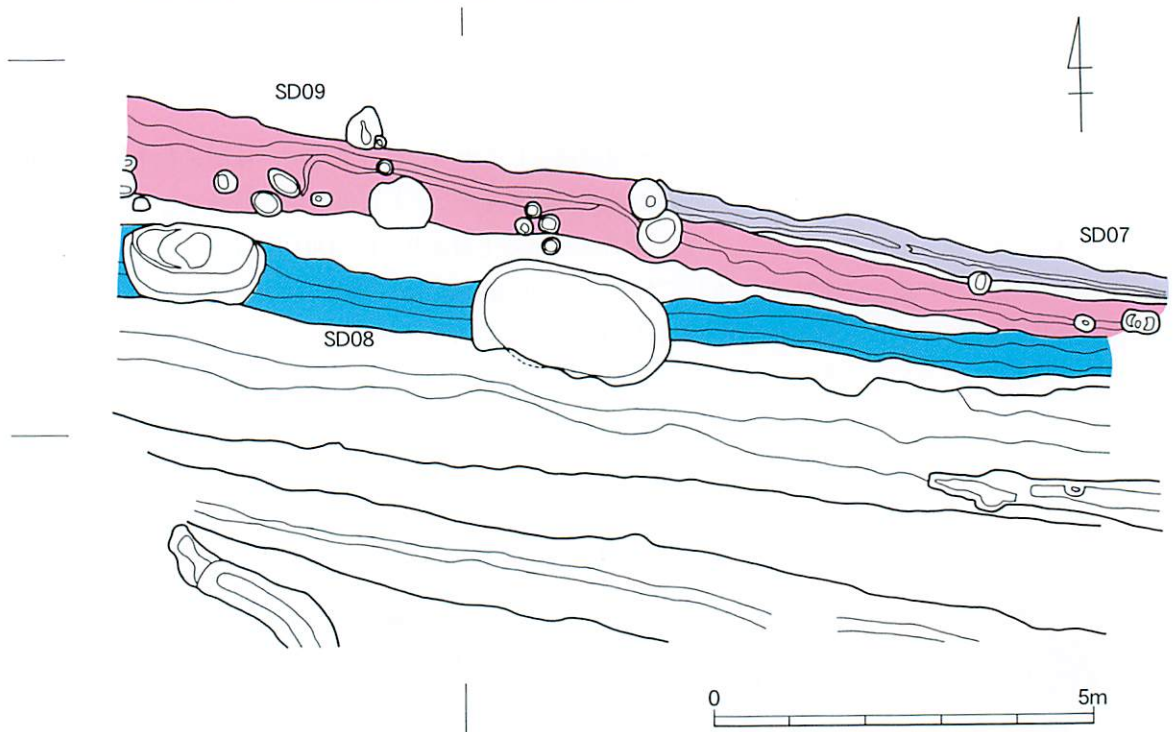
このC-SD05の延長部分と思われる溝が検出されている。そこから、胎土は白色を呈し、薄手の器壁で、内外面にロクロ目を顕著に残す土師質土器が出土している。このタイプの土師質土器は、中世大友府内町跡では15世紀後葉の遺構から出土しており、本調査区で出土する遺物と時期的にも齟齬がない。よって遺物から判断する限りでは、C-SD05は15世紀代に掘られ、15世紀後葉～末葉の段階で埋まっているものと考えられる。

溝の方向から考えると、C-SD01等と同じような性格が感じ取られるが、果たしてこれが万寿寺の北の区画に関連するものであるかどうかは現時点では不明である。ただ、構築時期の順序で考えると、近接する空間にC-SD05→C-SD10→C-SD01と同じ軸性を持って掘られている点は注目に値する。

出土遺物（第4-38図1～7）

龍泉窯系青磁 1・2は龍泉窯系青磁である。1は碗の底部で高台が付く。2は碗もしくは香炉か。表には蓮弁のような文様が描かれる。3～5は備前系陶器插鉢である。3・4は底部から胴部の破片で、放射状スリメが見られる。5は口縁部であるが、口縁の上方への拡張が始まりかけている段階で、口縁下角が垂下している。乗岡編年の中世4期に比定され、15世紀前半段階に位置づけられよう。

ロクロ目 6・7は在地系土師質土器の皿で、底部から口縁部に向けて直線的に開き、内部にロクロ目を顕著に残す。7は底部の破片で糸切り痕が残る。



第4-39図 C-SD07・C-SD08・C-SD09実測図 (1/100)

C-SD07・C-SD08・C-SD09（第4-39図）

本調査区の北側（K-37区・L-37区）を東西に延びる溝で、それぞれの規模はC-SD07が確認長6.9m、幅0.5m、深さ0.4m、C-SD08は確認長13.6m、幅0.9m、深さ0.2m、C-SD09は確認長14.2m、幅0.9m、深さ0.4mである。3条ともほぼ同じ方位で延びるが、すべて切り合っており、時間差がある。まず、C-SD07はK-37区とL-37区の境付近でC-SD09に切られている。またC-SD09は調査区東隅でC-SD08に切られている。よって3条の溝の前後関係は古い順にC-SD07→C-SD09→C-SD08となる。出土遺物が希少で時期の認定が困難であるが、C-SD08が15世紀代の溝C-SD09に切られていることから、3条ともそれ以前であることが判る。



第4-40図 C-SD11実測図 (1/30)

**C-SD11 (第4-40図)**

調査区西側K-37区に位置する溝状の遺構で、本調査区で検出される他の溝とは方向を違え、南方向へ軸を振っている。長さ5.6m、幅1.1m、深さ0.4mで大量の石も検出している。

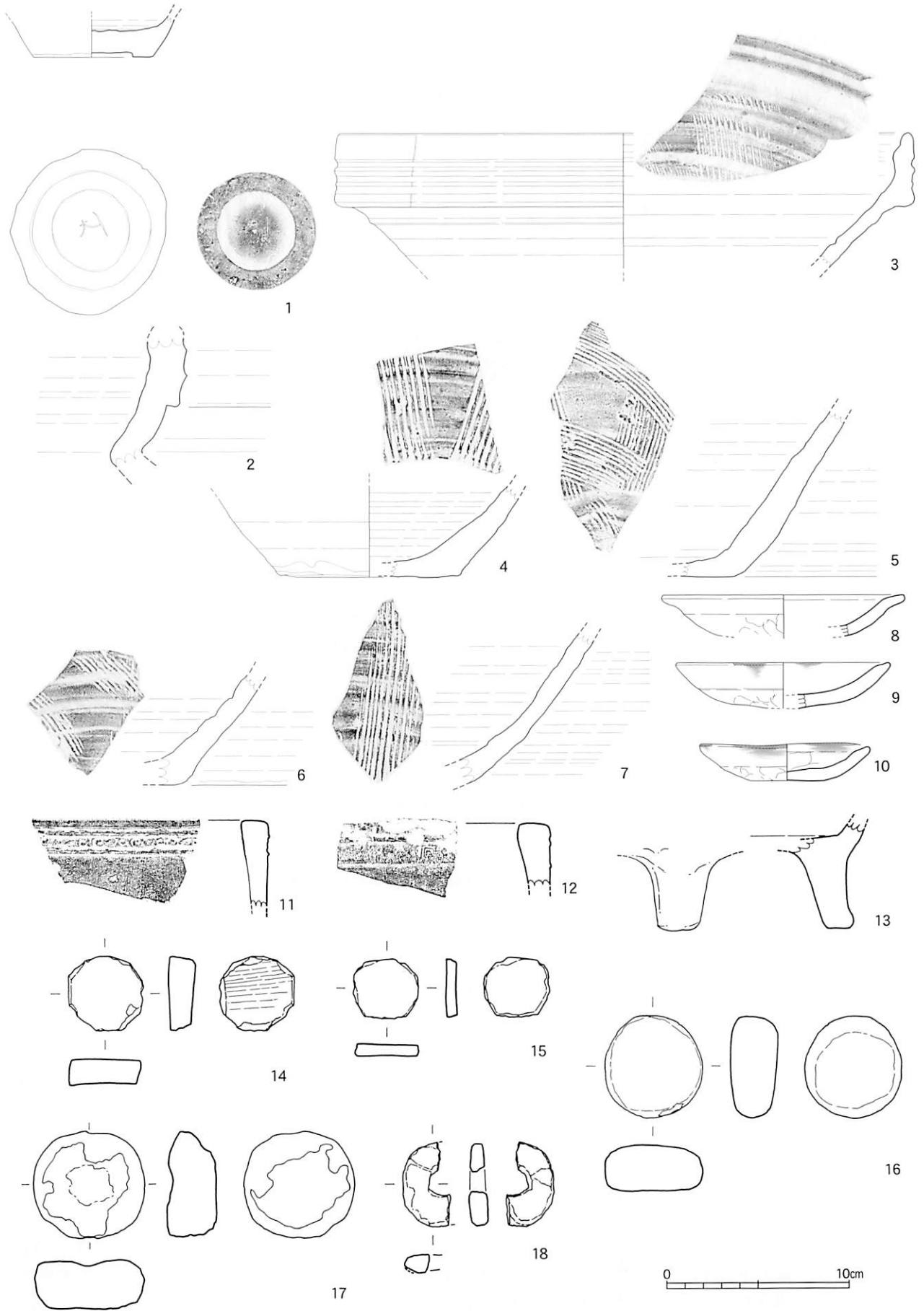
この溝の性格についてであるが、まずC-SD01の直上にありながら、C-SD01が検出された時にこのC-SD11の存在は確認されておらず、C-SD01を掘り下げていく過程で初めて検出された。溝から出土する遺物は、近世1期の備前系陶器播鉢や3期の京都系土師器皿で、16世紀後葉～末葉に位置づけられる。この遺物構成は、直下に存在するC-SD01とほとんど同じである。さらに、この溝の底は南西方向、つまりC-SD01の中央部に向けて下がりながら延びている。

以上より、C-SD01上にありながら掘形を確認できず、他の溝と方向を違えてC-SD01の中央つまり底の方へ向けて下っていくという形状、そして出土する遺物はC-SD01とほとんど同時期ということをもとにすると、このC-SD11は独立した一つの溝というよりは、C-SD01が埋まっていく形成過程で自然発生的に生じた、溝状の堆積と考えた方がよさそうである。

**出土遺物 (第4-41図-1~18)**

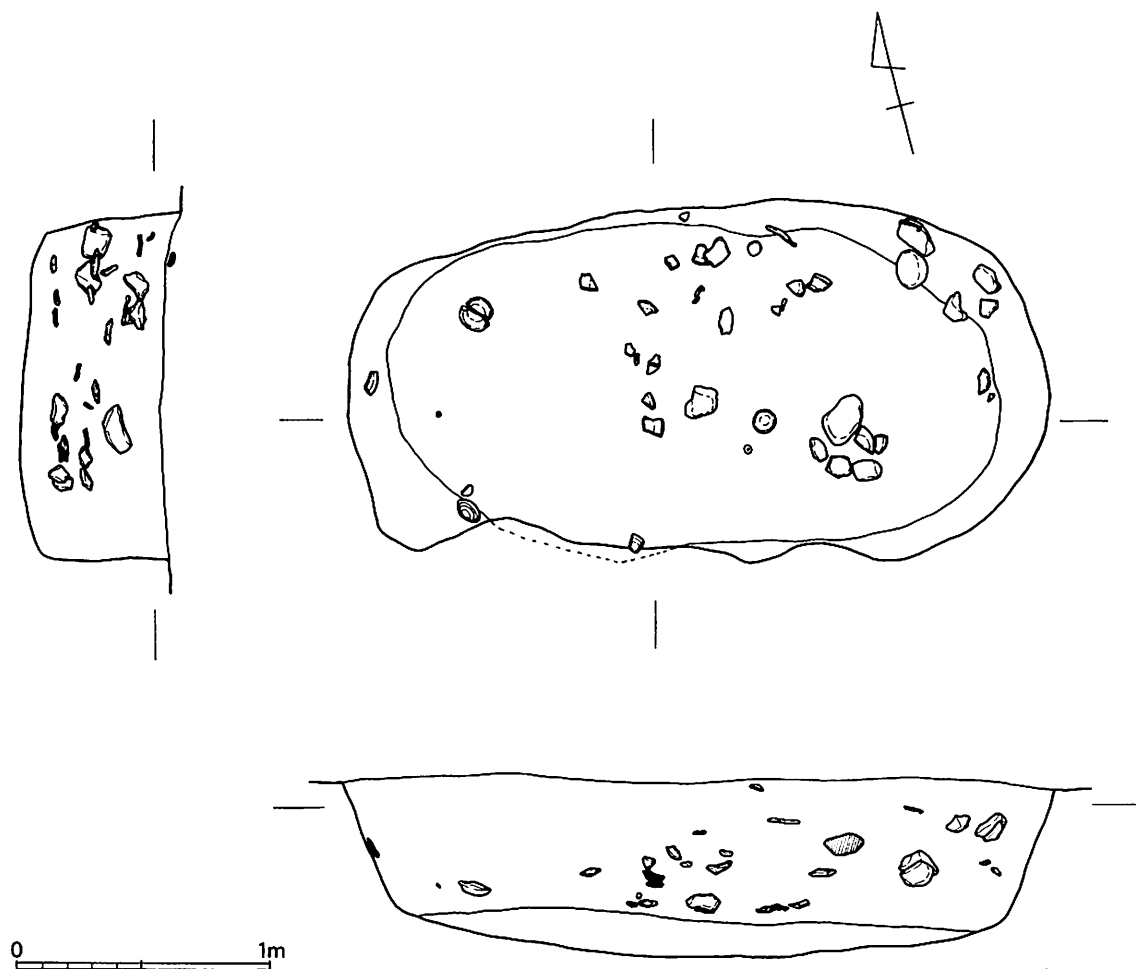
1~7は備前系陶器である。1は徳利の底部で、底面にヘラ記号がある。2は大甕の口縁部、3ナナメスリメ~7は播鉢である。先細りした口縁部やナナメスリメ等から近世1期に比定できる。8~10は京都系土師器の皿で、3期に比定できる。11・12は瓦質土器の火鉢の口縁部で、11は双頭蕨手流雲文、12は雷文が巡る。13は瓦質土器火鉢の脚部である。14~18は円盤状製品で、14は備前系陶器、15は瓦質土器、16~18は石製品である。18は中央部が穿孔され、環状になる。

第2節 遺構と遺物



第4-41図 C-SD11出土遺物実測図 (1/3)





第4-42図 C-SK01実測図 (1/30)

## 2. 土坑

### C-SK01 (第4-42図)

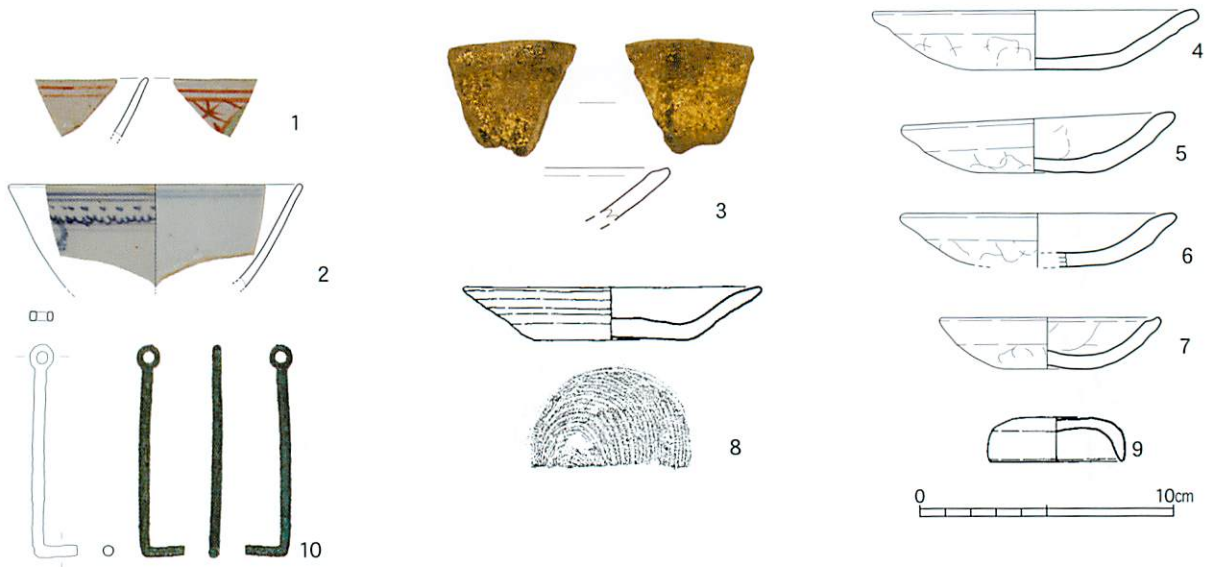
廃棄行為 L-37区に位置し、楕円形状を呈する土坑である。長径は2.8m、短径1.4m、深さは0.5mほどである。埋土は途中に炭の堆積層が認められることから、廃棄行為に伴う土坑であると考えられる。

16世紀後半代 土坑の位置する所には溝C-SD05・C-SD08が通っているが、いずれも切って形成されている。さらに遺構内からは、中国産の五彩、景德鎮窯系青花、2～3期の京都系土師器の皿等が出土していることから、遺構の時期は16世紀後半代に位置づけられる。

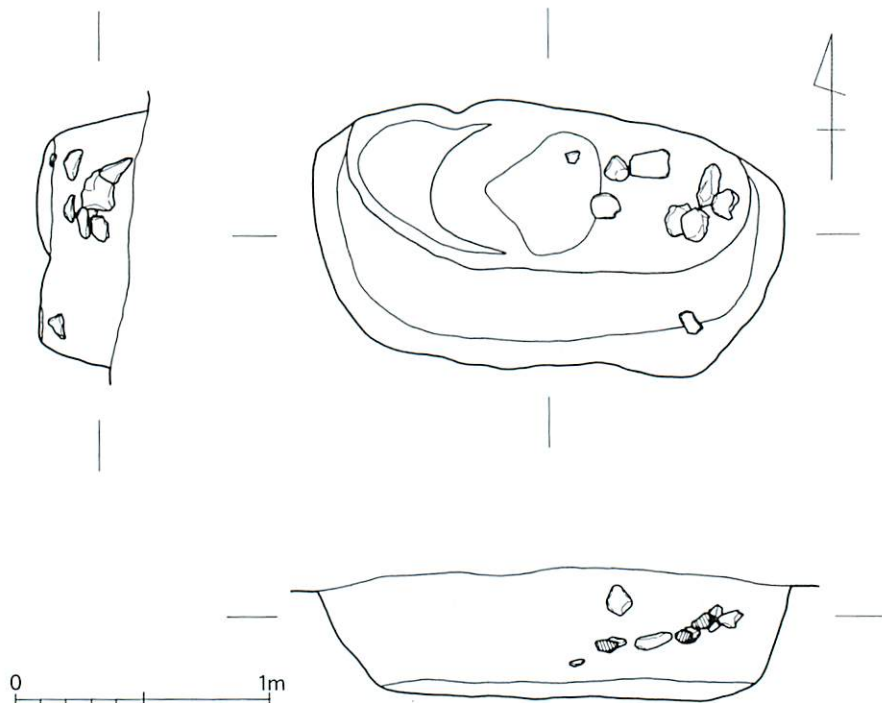
寺域外 御内町 この土坑C-SK01は、ほぼ同時期に存在したと思われる万寿寺の堀であるC-SD01の北側に位置することから、万寿寺の寺域外の遺構である。万寿寺の北側には、府内古図によれば「御内町」が存在している。この北側延長線上は既に第21次調査区等で発掘調査が行われており、御内町の裏手の遺構と思われるものが確認されている。具体的には井戸や廃棄土坑が中心となって検出されており、本遺構C-SK01もその一連のものである可能性がある。

### 出土遺物 (第4-43図-1～10)

五彩 1は景德鎮窯系五彩の碗で、口縁部内面に界線、外面にも界線とその下に文様が描かれる。2は景德鎮窯系青花の碗で、口縁部外面に波濤文の崩れたような文様帯が巡る。3～7は京都系土師器の皿で、器壁が比較的厚くなり、口縁部下のナデも明瞭になっている。2～3期に位置づけられる。金箔 また、3は表裏に金箔が貼られている。8は口縁部が直線的に開き、外面に顕著にロクロ目を残す在地系土師器の皿である。9は焼塩壺の蓋と思われる。10は青銅製の鍵である。



第4-43図 C-SK01出土遺物実測図 (1/3)



第4-44図 C-SK05実測図 (1/30)

C-SK05 (第4-44図)

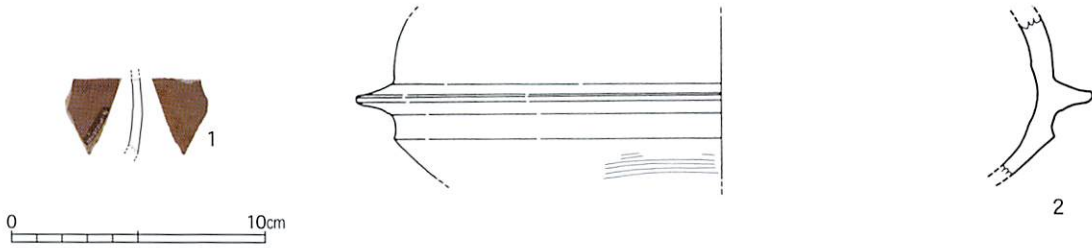
K-37区に位置する土坑で、長径1.9m、短径1.0mの隅丸形状プランを呈する。深さは0.4mほどである。出土遺物は希少であるが、朝鮮王朝産の舟徳利が出土しており、16世紀後葉～末葉にかけて掘られたものと思われる。C-SK05はC-SK01から5mほど西へ離れて、同じような軸性をもって位置している。規模はひとまわりほど小さいものの、出土する遺物から存在した時期は近いと考えられる。さらに立地的にも方向的にも近いことから、同じような性格の土坑と思われ、廃棄土坑として位置づけておく。

廃棄土坑

出土遺物 (第4-45図-1・2)

舟徳利

1は朝鮮王朝産舟徳利の胴部、2は瓦質土器の羽釜の胴部である。

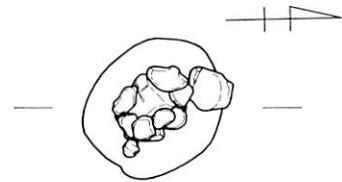


第4-45図 C-SK05出土遺物実測図 (1/3)

C-SK06 (第4-46図)

L-37区に位置し、C-SD09を切って掘られている土坑で、長径0.6m、短径0.5mのほぼ円形に近いプランを呈する。深さは0.4mほどである。土坑内にはぎっしりと礫が詰まっているが、時期を認定できるような遺物の出土は見られない。

礫



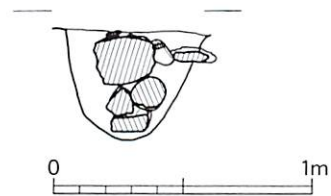
C-SK08 (第4-47図)

K-38区に位置し、C-SD01及びC-SK10を掘り下げ途中に確認された土坑である。半分が調査区外に及ぶため、プランの全形は不明であるが、楕円形状を呈するものと思われる。確認されている規模は、長径1.2m、短径0.5m、深さは0.4mほどである。埋土には炭がかなり入っており (第4-4図参照)、廃棄土坑と思われる。

炭

廃棄土坑

C-SD01が埋まった後に掘られており、さらにはC-SK10をも切っている。出土する遺物には3期の京都系土師器皿等が見られ、16世紀後葉～末葉に位置づけられる。切り合い関係からC-SD01やC-SK10よりも新しいが、それほど時間差はないものと思われる。



第4-46図 C-SK06実測図 (1/30)



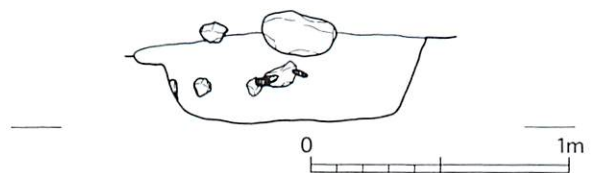
3期の京都系土師器皿

出土遺物 (第4-48図-1~3)

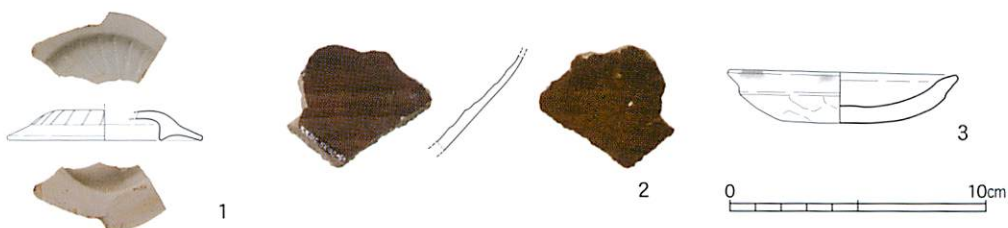
1は景德鎮窯系白磁の蓋である。2は中国産の褐釉陶器の胴部片であるが、器種は不明である。3は京都系土師器の皿で、器壁が厚くナデが明瞭であることから3期に位置づけられる。

白磁の蓋

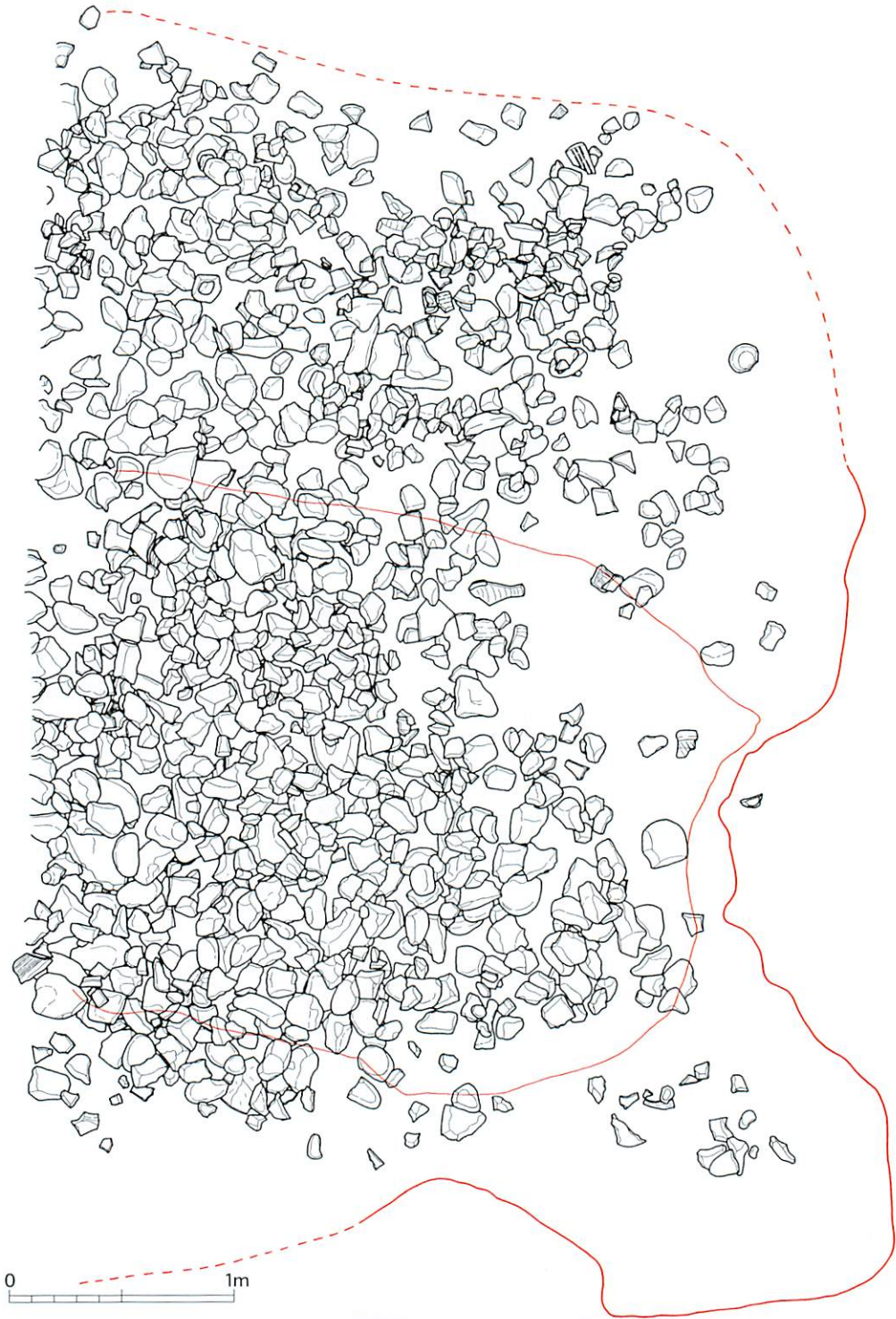
褐釉陶器



第4-47図 C-SK08実測図 (1/30)



第4-48図 C-SK08出土遺物実測図 (1/3)



第4-49図 C-SK10実測図 (1/30)



## C-SK10 (第4-49図)

大量の石 K-37区・K-38区に位置する土坑である。当初C-SD01の直上で大量の石が集中する範囲が確認され、その範囲内の遺物を分けて取上を行った。ただ、C-SD01の埋土を掘りこんで形成されているために、C-SD01とC-SK10の埋土の差を平面的に拾っていくのが非常に困難で、さらには石が大量に入っていたこともあって、土坑の底のプランは明確に把握できなかった。そこで石が集中している範囲と調査区西壁土層の所見から、おおよその規模を割り出してみると、長径5.3m、短径3.6mほどであり、深さは西壁土層にかかっている所で0.5mほどである。深さについては実際はまだ深いものと思われる。なお、この土坑は調査区西側へと続いていくが、平成17年度に実施された第51調査区でその続きが確認されている。

C-SD01の直上 出土する遺物には、近世1期の備前系陶器挿鉢や3期の京都系土師器の皿などが見られ、16世紀後葉～末葉に位置づけられる。C-SK10は万寿寺北境の堀であるC-SD01の直上に位置していることから、C-SD01が埋まった後に掘られているわけであるが、出土する遺物に大きな時期差は認められない。さらにC-SD01が埋まった後、その直上は道路になっていくことが確認されていることから、このC-SK10は掘ってすぐ埋められたものと考えられる。そして大量の石が埋められているのは、このC-SK10の直下がC-SD01のコーナー付近(万寿寺北西隅のコーナー)であるがために、かなりの地盤沈下が起こり、それを補強する目的だったのではないかと思われる。

地盤沈下 出土遺物(第4-50図-1～第4-54図-62)

漳州窯系青花 1は漳州窯系青花の皿である。底部から口縁部にむけて内湾気味に立ち上がり、底部には高台が蛇の目釉剥ぎ付く。胴部内外面と見込に文様が描かれる。見込は蛇の目釉剥ぎがなされる。2～6は景德鎮窯系青花である。2は景德鎮窯系青花の壺である。内面は露胎で、外面には鳳凰の尻尾の部分が描かれている。3は碗で、胴部外面に文様が描かれる。4も碗で、見込部分がわずかに盛り上がり、恐らく饅頭心を呈するものと思われる。見込には花卉文、高台内部には字款が描かれる。E群と思われる。5は盤で斜めにつばが付く。つばの内面には文様が描かれる。6は小壺である。外面には文様が描かれ、内面は露胎となる。

朝鮮王朝産白磁 7は朝鮮王朝産の白磁皿の高台である。高台内部まで施釉され、見込には目跡がみられる。8は中国南方産の白磁皿で、見込は蛇の目釉剥ぎがなされる。9は龍泉窯系青磁碗の高台部分である。華南三彩 10・11は華南三彩である。9は鱗か羽のような文様が見られる。11は文様が見えず、器形も不明である。12は中国産翡翠釉の皿である。口縁部はつばがつき、輪花をなす。

13は瀬戸美濃系陶器の皿である。口縁部が外側に折れるいわゆる折縁皿である。大窯の3期に比定される。14も瀬戸美濃系陶器で天目碗である。

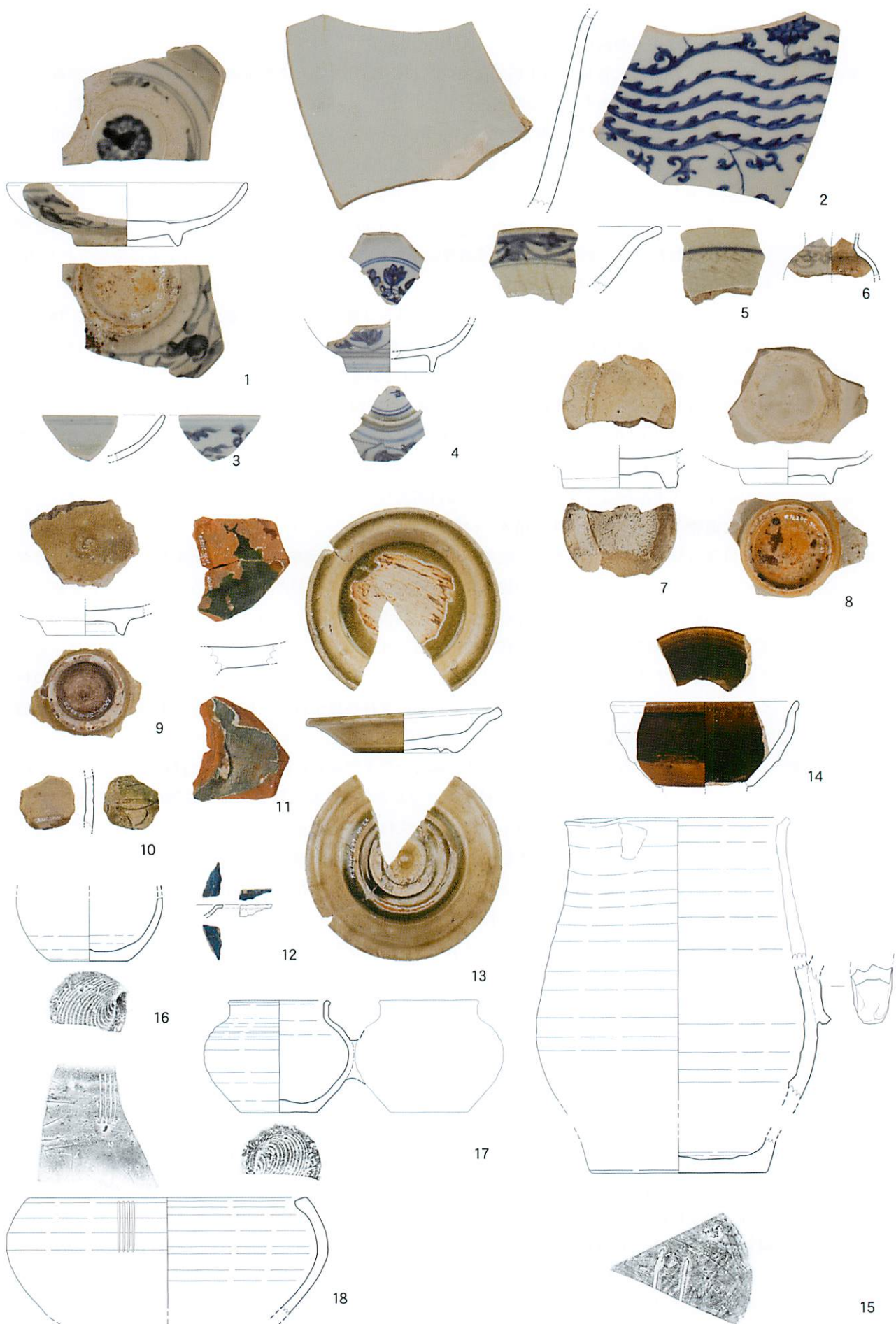
把手付水注 15～27備前系陶器である。15は把手付水注である。胴部にはロクロ成形による凹凸が残る。上端の一方には注ぎ口を付け、その反対側には粘土紐を貼り付けて把手を付けている。底面にはヘラ記号がみられる。16・17は壺であるが、この内17の壺の胴部には、もう一個体の壺の胴部と思われる部分が付着していた。よって、図に示したように2つの壺が連結した二重壺であると思われる。18・19は鉢である。いずれも胴部が内湾し、19は口縁端部が短く立ち上がる。20～24は挿鉢である。口縁帯が発達し凹線が多条化する。口縁端部が強いナデで先細りし、スリメはナナメスリメである。

水屋甕 近世1期に比定できる。25は水屋甕、26・27は大甕である。

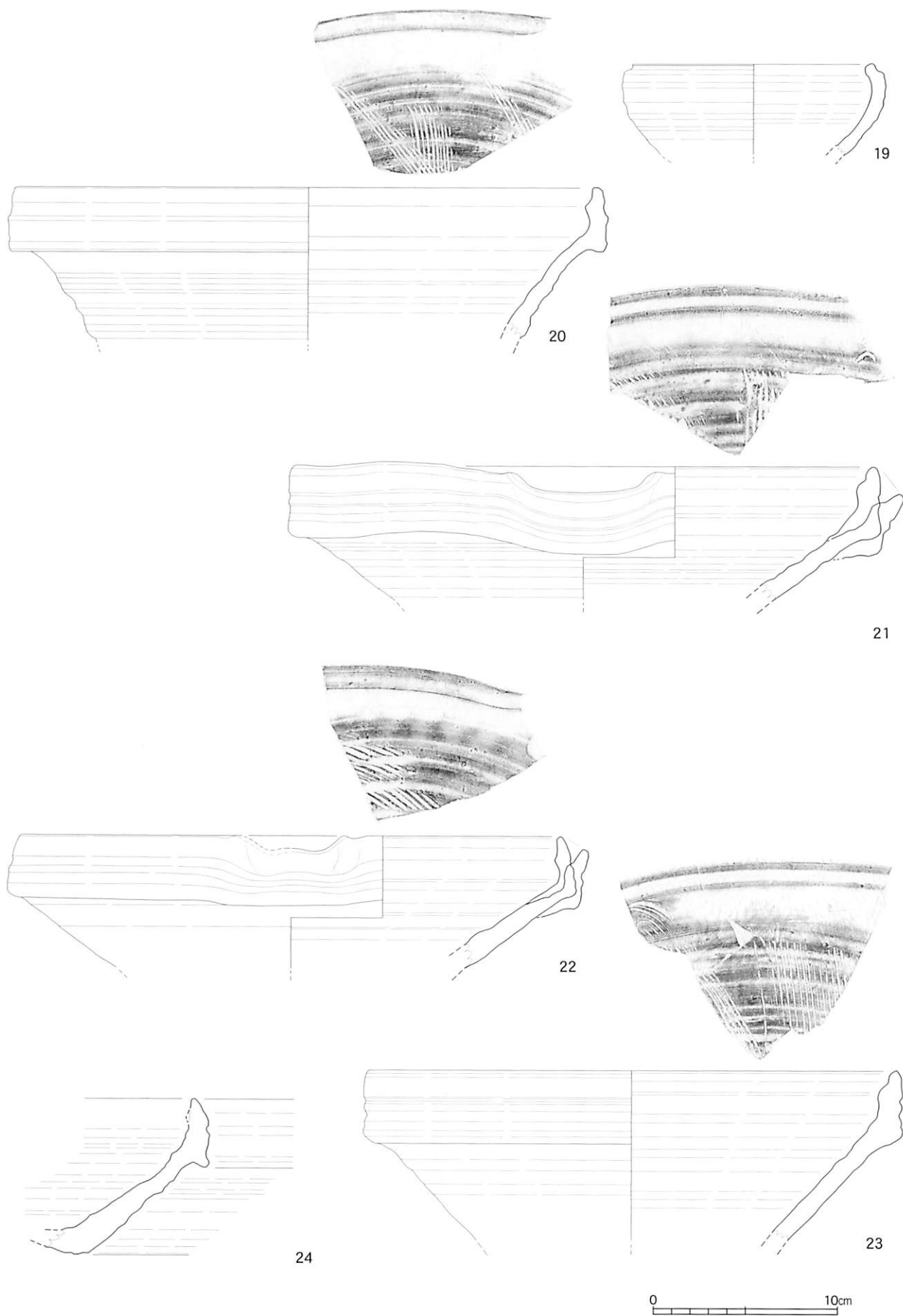
28～48は京都系土師器である。28～42は皿、43～48は坏である。いずれも器壁が厚く、口縁部下のナデが強い。3期に比定できる資料である。49・50は土師質土器の焼塩壺である。

防長系挿鉢 51～60は瓦質土器である。51～53は鉢で51は脚が付く。54～56は防長系の挿鉢で、この内55はC-SD01上層で出土した資料と接合した。57～59は火鉢である。57は脚部、58・59は口縁部の破片で、58・59は雷文が巡る。60は風炉の脚部か。

61・62は石臼である。



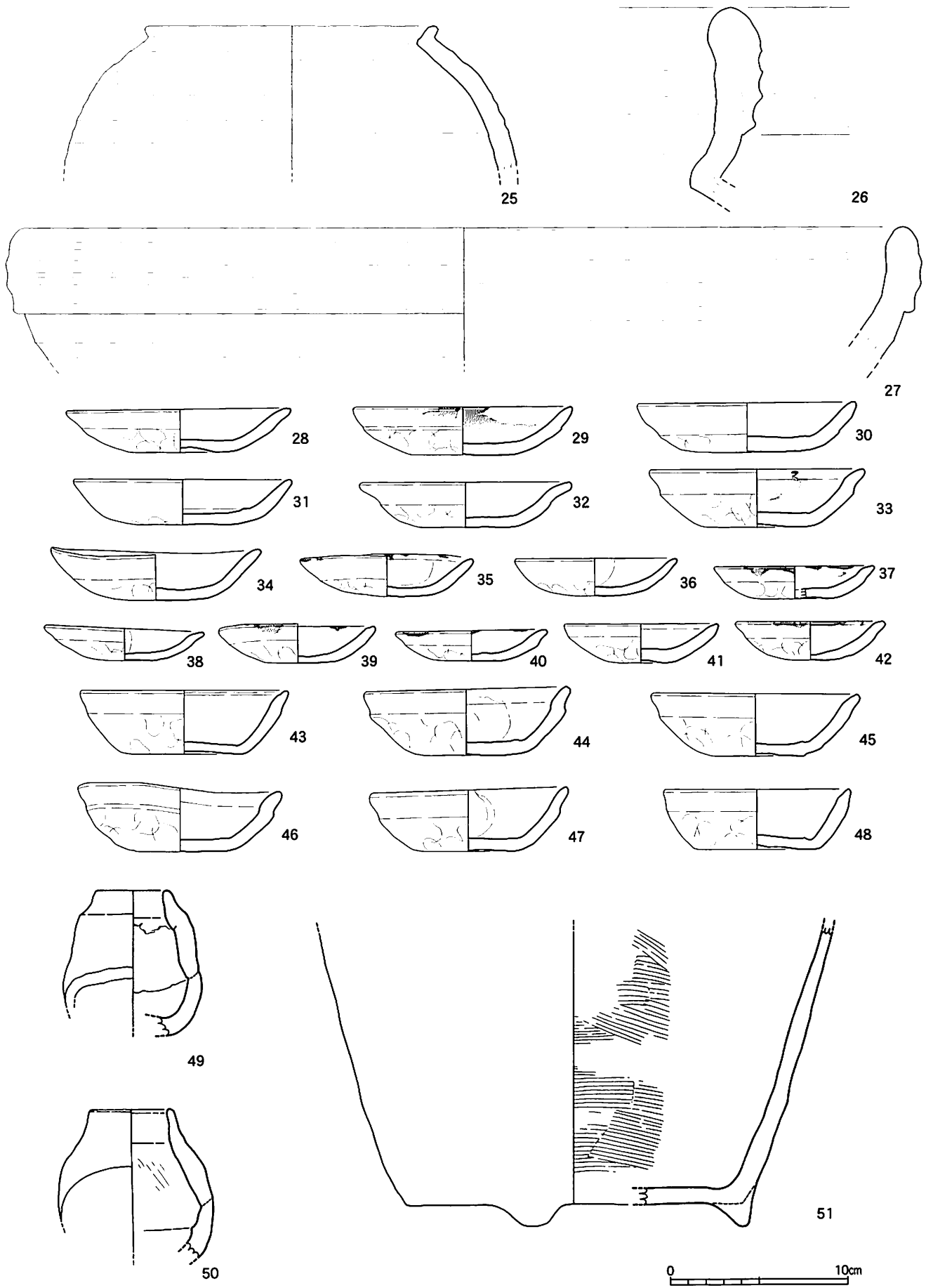
第4-50図 C-SK10出土遺物実測図 (1/3)



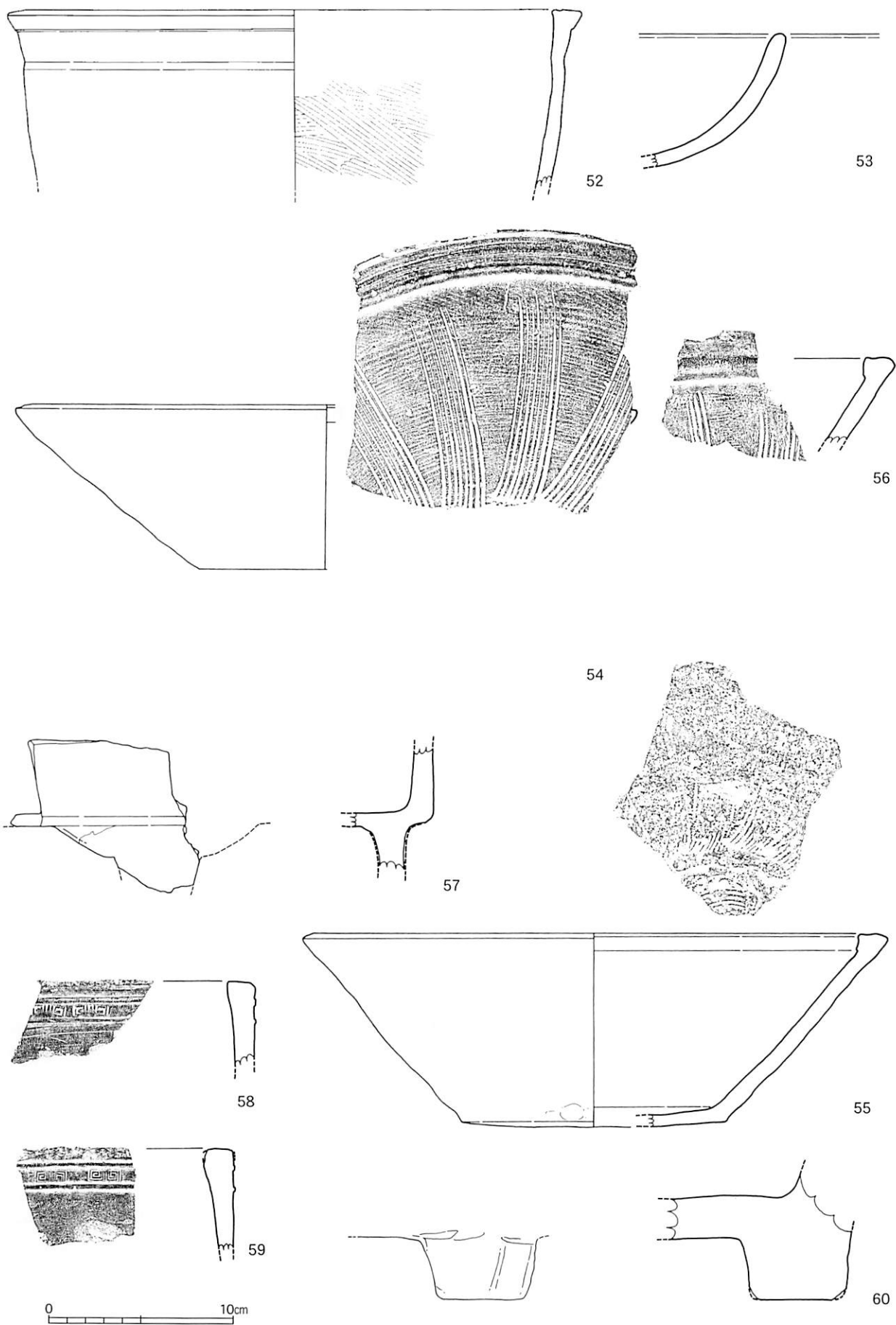
第4-51図 C-SK10出土遺物実測図 (1/3)



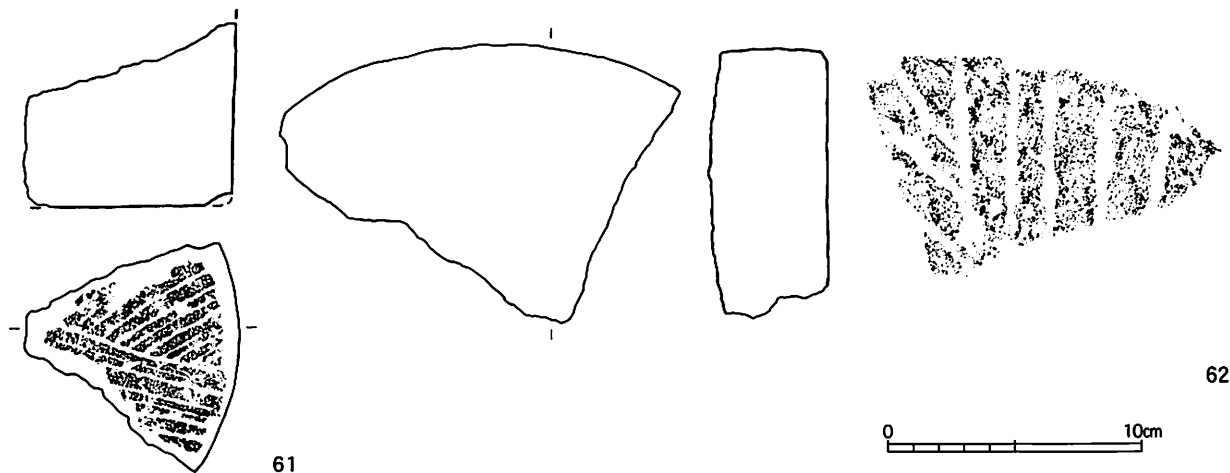
第2節 遺構と遺物



第4-52図 C-SK10出土遺物実測図 (1/3)



第4-53図 C-SK10出土遺物実測図 (1/3)



第4-54図 C-SK10出土遺物実測図(4)

3. 包含層出土遺物(第4-55図-1~第4-58図-44)

包含層・トレンチ・表土等で出土した遺物を一括して掲載した。包含層とは、各遺構の検出面より上層部分を指し、第4-3図の調査区東壁土層図で言えば1~10層、第4-4図の調査区西壁土層図で言えば1・2層が該当する。またトレンチは調査当初、調査区東隅に南北方向に入れて行い、そこから出土した遺物は大半が包含層とSD01のものである。遺物は種類毎に掲載し、以下その順にしたがって触れていく。

五彩 1~6は輸入陶磁器である。1は景德鎮窯系五彩の碗で、口縁部内外面に界線が巡り、その下に  
華南三彩 文様が描かれる。2は華南三彩で、外面には文様が描かれるが、器種は不明である。3・4は龍泉  
窯系青磁の碗である。3は高台部分、4は口縁部がくの字状に内傾し、胴部に蓮弁文がみられる。  
翡翠釉 5は中国産翡翠釉の皿である。口縁部は直線的に開く。6は朝鮮王朝産の白磁の碗である。見込には  
目跡があり、漆継ぎが認められる。

掛花入 7~14は国内産陶器で、7は常滑系陶器の甕の口縁部である。8は備前系陶器で掛花入である。  
織部系陶器 筒状の器形を呈し底部がとがる。9・10は瀬戸美濃系陶器で9は香炉、10は天目である。11は織部  
系陶器で向付である。直立する口縁の外表面と見込に文様が描かれる。12~14は肥前系陶器である。  
向付 12は皿で低い高台が付き、外反気味に口縁部が開く。見込には砂目が付く。13は碗の底部で高台が  
付く。14は鉢であろうか。内外面に文様が見られる。

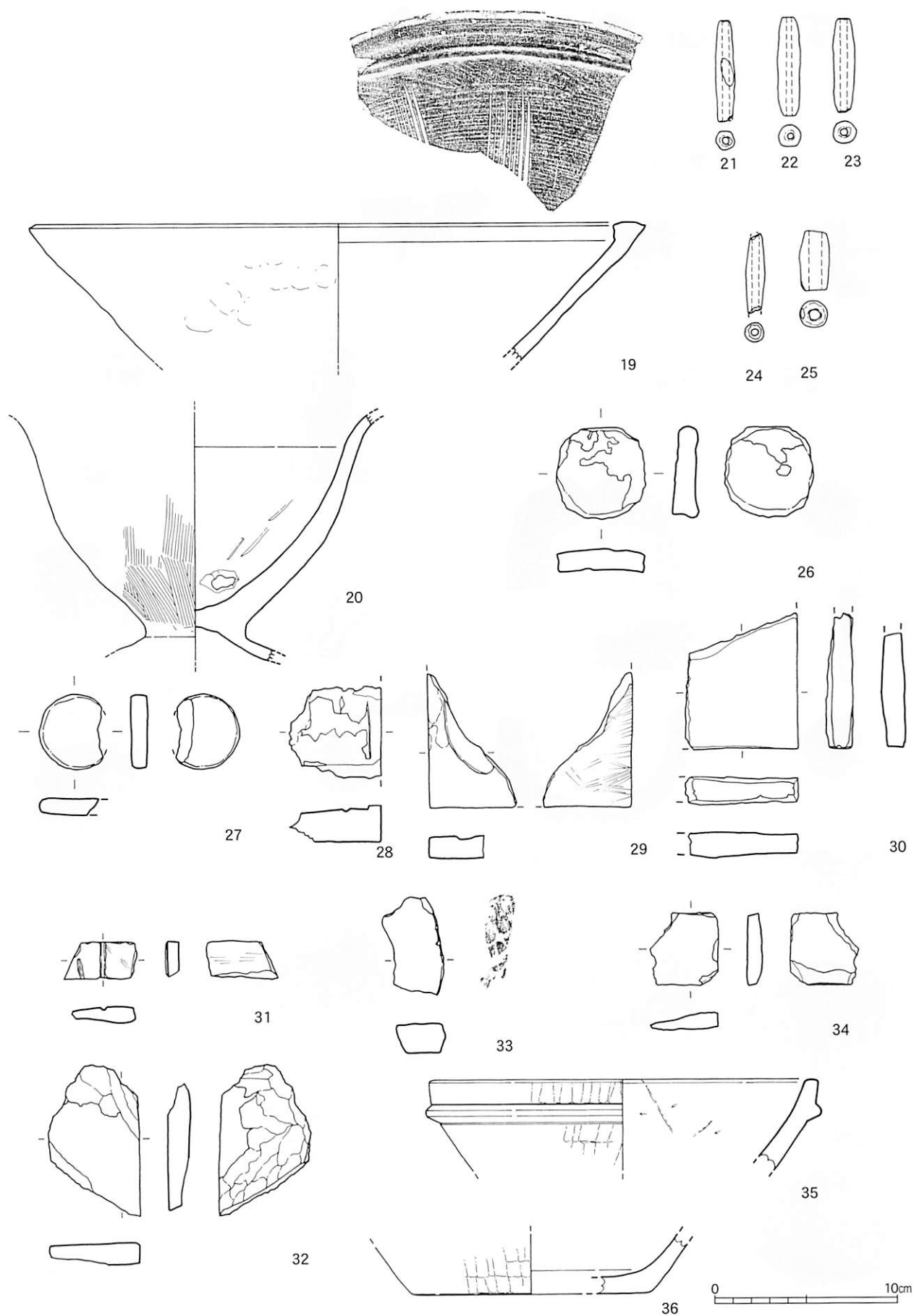
15・16は京都系土師器である。15は皿、16は坏である。いずれも器壁が厚く、口縁部下のナデも  
顕著で、3期に位置づけられる。17は在地系土師質土器で底部に糸切り痕が認められる。口唇部  
にはススが付着しており、灯明皿と思われる。18・19は瓦質土器である。18は火鉢の口縁部で雷文が  
灯明皿 巡る。19は防長系挿鉢である。20は古墳時代の甕である。

21~25は土錘である。26・27は円盤状土製品。いずれも瓦質土器を加工している。28~30は硯で  
赤間硯 ある。28・29は赤間硯、30は砥石の可能性もある。31~34は砥石である。この内31は有溝の砥石で  
滑石製石鍋 ある。35・36は滑石製の石鍋である。

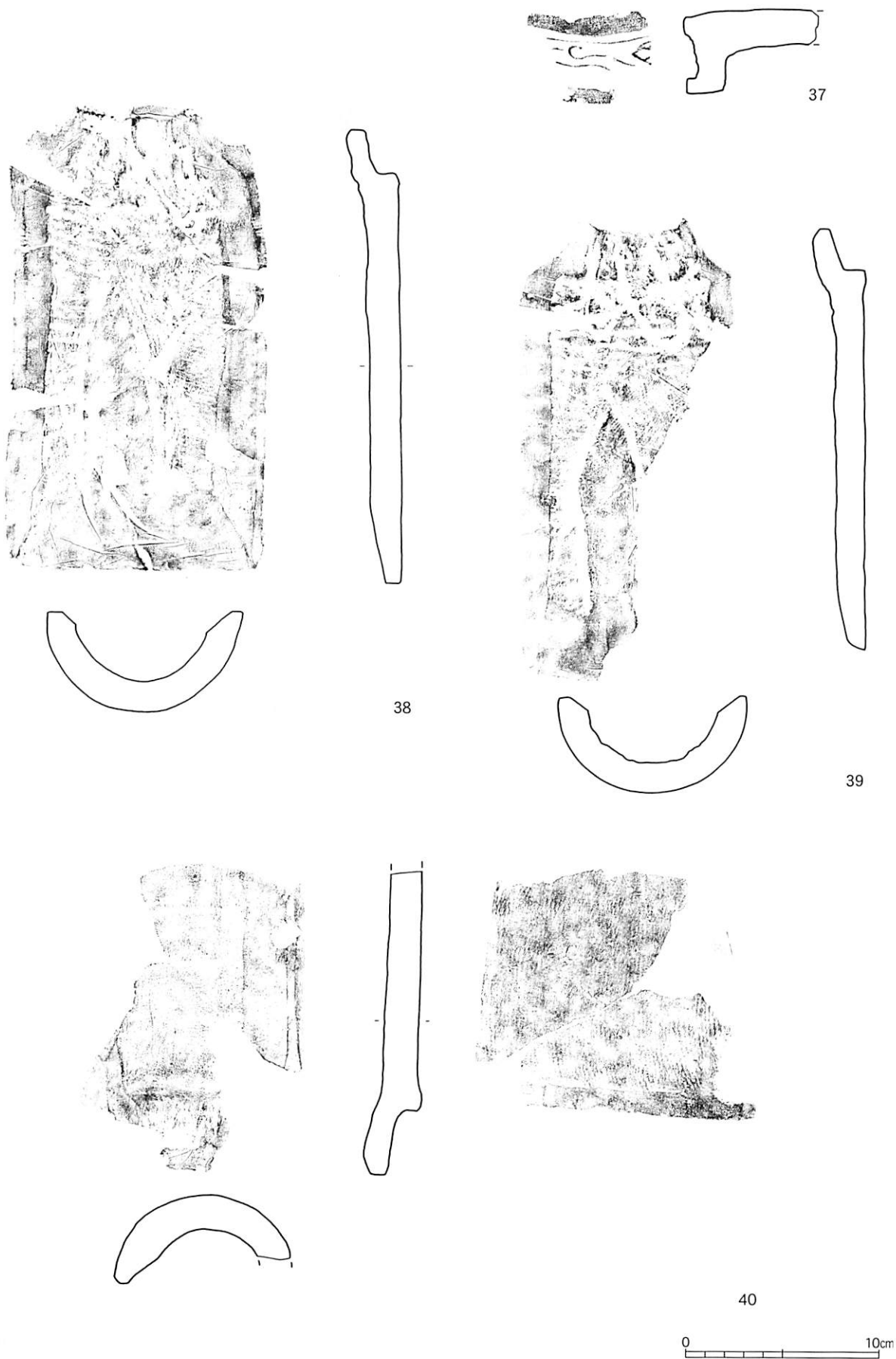
37~41は瓦で、37は均整唐草文軒平瓦で中心飾りは変形四菱文である。38~41は丸瓦である。  
メダイ様金属 42は青銅製の鍵、43は鉛玉である。44はメダイ様金属製品である。楕円形部分の上に、鈕の部分  
製品 が付く。穿孔は不明である。鉛同位体比の結果、鉛玉は国内産、メダイ様金属製品は現在未知の領域  
とされている産地データを示した。(詳細は第5章自然科学的分析の項を参照)



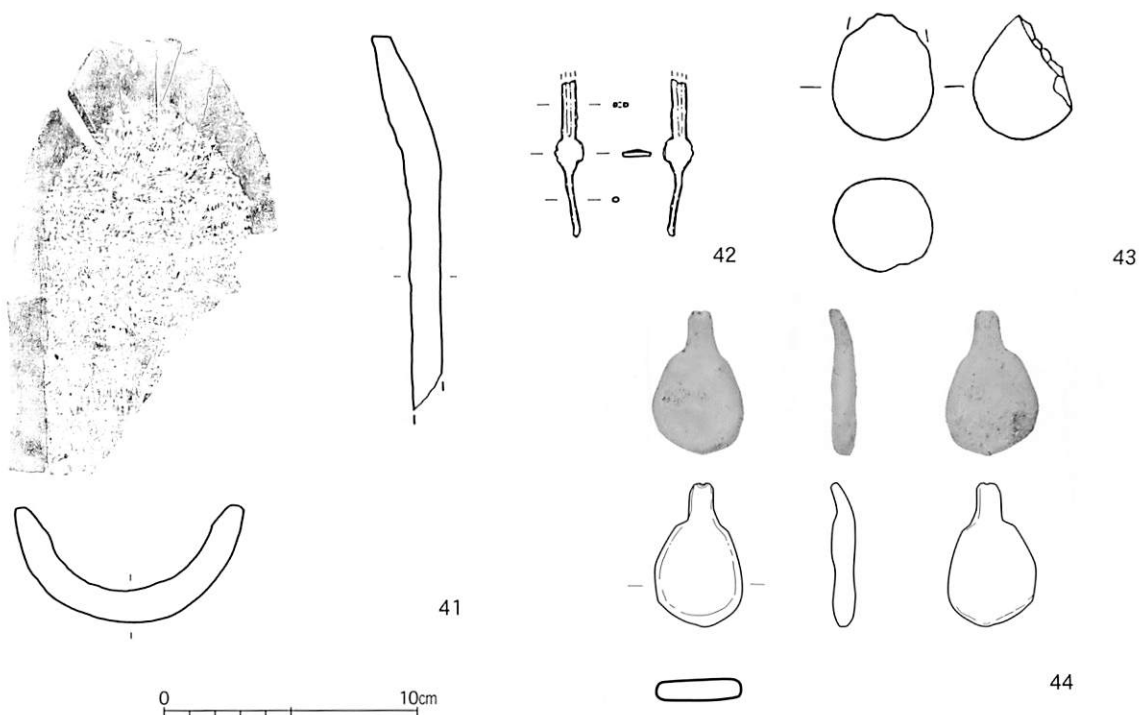
第4-55図 包含層 出土遺物実測図(1) (1/3)



第4-56図 包含層 出土遺物実測図(2) (1/3)



第4-57図 包含層 出土遺物実測図(3) (1/3)



第4-58図 包含層 出土遺物実測図(4) (1/3) ※43・44のみ1/1

銭貨 (第4-59図-1~第4-60図-36)

C-SD01・C-SD10出土銭貨 (第4-59図-1~第4-59図-13)

1は文字が判読できない。2は皇宋通寶で北宋銭。初鑄造年は1038年で、篆書である。3は元祐通寶で北宋銭。初鑄造年は1086年である。4は紹聖元寶で北宋銭、初鑄造年は1094年である。5は政和通寶で北宋銭。初鑄造年は1111年で、真書である。また 錆が付着している。6は元豐通寶で北宋銭。初鑄造年は1078年で、篆書である。7は判読できる文字が「寶」のみである。8は元豐通寶で北宋銭。鑄造年は1078年で、篆書である。9は判読できる文字が「寶」のみである。10は聖宋元寶で北宋銭。初鑄造年は1101年で、篆書である。11は熙寧元寶で北宋銭。初鑄造年は1068年で、真書である。12は紹聖元寶で北宋銭。初鑄造年は1094年で、行書である。13のみC-SD10出土で、皇宋通寶である。北宋銭で初鑄造年は1038年である。篆書である。

C-SD02出土銭貨 (第4-59図-14)

14は祥符通寶で北宋銭、初鑄造年は1008年である。

C-SD11出土銭貨 (第4-59図-15~第4-60図-19)

15~18は4枚重なった状態で出土した。錆付着しており、いずれも判読不能であった。19は、天聖元寶で北宋銭、初鑄造年は1023年である。篆書である。

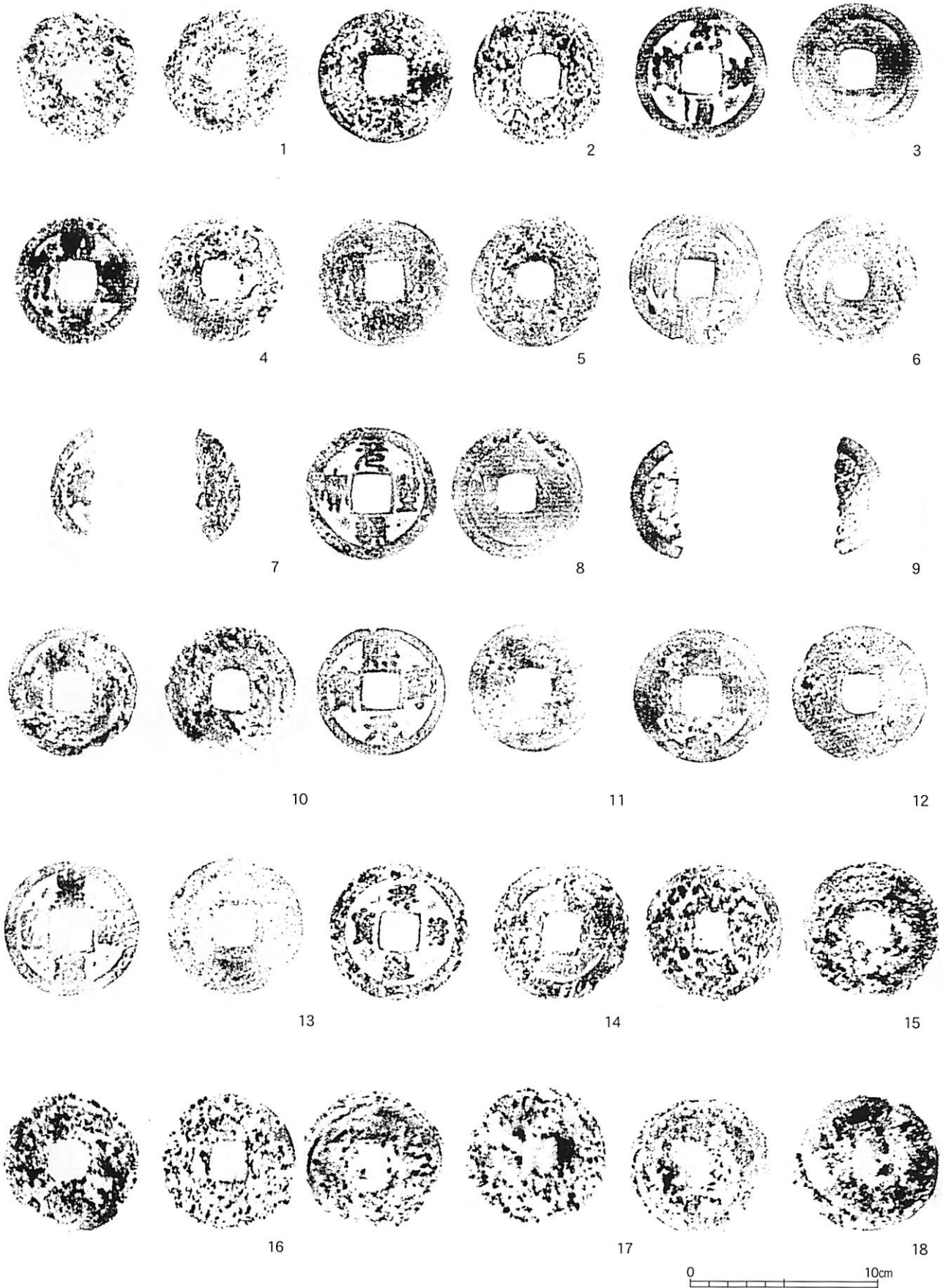
C-SK01出土銭貨 (第4-60図-20・21)・C-SK10出土銭貨 (第4-60図-22)

C-SK01で2、C-SK10で1枚出土しているが、いずれも錆で判読不能である。

包含層出土銭貨 (第4-60図-23~第4-60図-36)

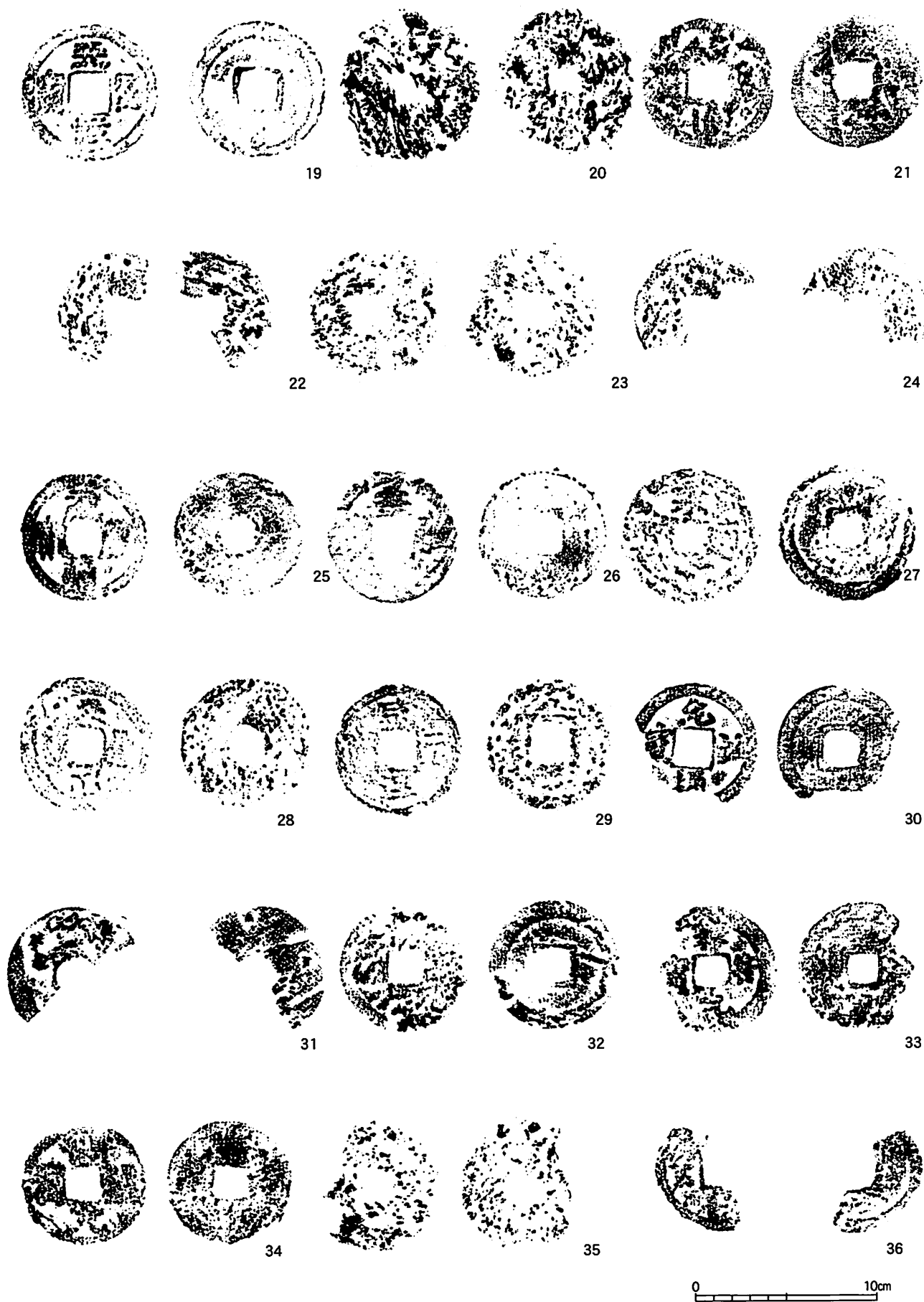
23・24は錆で判読不能である。25は元豐通寶で北宋銭、初鑄造年1078年である。篆書である。26は嘉祐通寶で北宋銭、初鑄造年は1056年である。篆書である。27は永樂通寶で明銭、初鑄造年は1408年である。28は天聖元寶で北宋銭、初鑄造年は1023年である。真書である。29は咸淳元寶で南宋銭、初鑄造年は1265年である。背八である。30は元祐通寶で北宋銭、初鑄造年は1086年、一部欠損している。31・32は判読不能である。33は祥符通寶で北宋銭、初鑄造年は1008年である。34は開元通寶、初鑄造年は621年唐の時代である。35・36は判読不能である。





第4-59図 20次調査C区 出土銭貨実測図(1) (1/1)

第2節 遺構と遺物



第4-60図 20次調査C区 出土銭貨実測図(2) (1/1)

第3節 小 結

1. 各遺構の変遷過程

{第1段階：14世紀前葉～15世紀前葉}

C-SD07・C-SD08・C-SD09が存在していた時期である。遺構の切り合い関係から古い順にC-SD07→C-SD09→C-SD08となる。いずれの溝も遺物から時期認定ができないが、最も新しいC-SD08がC-SD05に切られており、C-SD05は15世紀代に位置づけられる。したがって3条の溝は全て15世紀代以前であることは間違いない。また、この溝のすぐ北側に隣接して第21次調査区があるが、その調査所見では、調査区南側に14世紀前葉～15世紀前葉の遺構が集中することが指摘されている。つまり位置的に、14世紀前葉～15世紀前葉の遺構は本調査区の3条の溝と関連がある可能性があり、よってこの段階に位置づけておく。

{第2段階：15世紀代}

C-SD05が存在していた時期である。中世4期の備前系陶器播鉢や内外面にロクロ目を顕著に残すタイプの在来系土師質土器等が出土しており15世紀代に掘られ、15世紀後葉～末葉の段階で埋まっているものと思われる。

{第3段階：16世紀前葉}

C-SD10が存在していた時期である。C-SD10はその大半をC-SD01に切られており、正確な規模は不明である。しかし一部確認されている深さが2.5mほどあることから、C-SD01ほどはないにしても、近い規模を有した可能性がある。C-SD01が万寿寺北境の堀であれば、この段階の堀も同様の位置づけができる。

{第4段階：16世紀後葉}

C-SD01が存在していた時期である。東西長20m、幅6.3m、深さ2.5mの規模を有し、万寿寺の北境となる堀である可能性が高い。堀内からは近世1期備前系陶器播鉢や京都系土師器3期等が出土しており、16世紀後葉に埋没している。またこの堀の東側延長線上は現大分川へと向かっており、もし川まで堀が続いていたとしたら、小舟等が入ってくる運河的な要素も推測される。

{第5-1段階・第5-2段階：16世紀後葉～末葉}

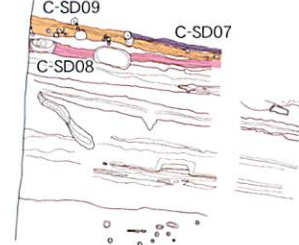
C-SD01が完全に埋没した段階で、大きく2段階認められる。この段階の溝としては、第5-1段階にC-SD02・C-SD12、第5-2段階にC-SD04がある。

第5-1段階では埋没したC-SD01の直上にシルト層の広がりが見られ、一定期間空閑地であったとみられる。この空閑地が道路として機能していれば、C-SD02はその側溝だった可能性もある。第5-2段階ではC-SD01直上に硬化面が認められ、道路の可能性が高い。位置的關係からC-SD04はその側溝の可能性はあるが、部分的にしか検出できておらず明確なところは判らない。

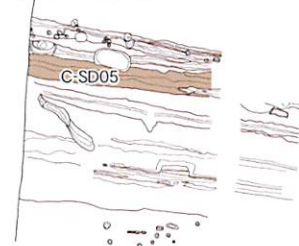
土坑については、第5-1段階から第5-2段階までの間のどこかに併存したと考えられる。中でもC-SK08・10については掘ってからすぐに埋められたものと思われる。そしてC-SK10に見られる大量の石の廃棄等は、その直上を硬化させる意図が感じられ、道路整備に伴うものであろう。また、C-SK01・05については、第2南北街路に面した、御内町の裏手に位置する廃棄土坑と思われる。

以上の道路の形成と、町屋の遺構の出現は、府内古図に描かれた万寿寺北の景観によく似ている。近年の調査成果から、府内古図は16世紀後葉以降（1570年代以降）の府内を描いた可能性が高く、本調査区の所見はその傍証となろう。

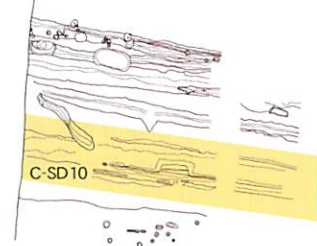
{第1段階：14世紀前葉～15世紀前葉}



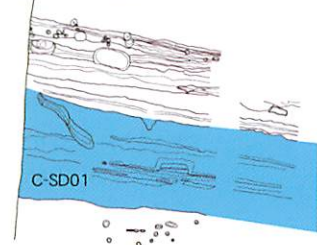
{第2段階：15世紀代}



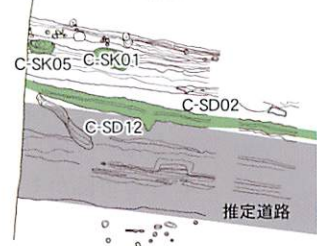
{第3段階：16世紀前葉}



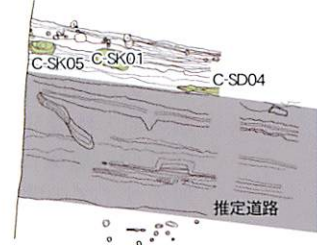
{第4段階：16世紀後葉}



{第5-1段階：16世紀後葉}



{第5-2段階：16世紀後葉～末葉}



第4-61図 府内町跡20次調査C区遺構変遷図

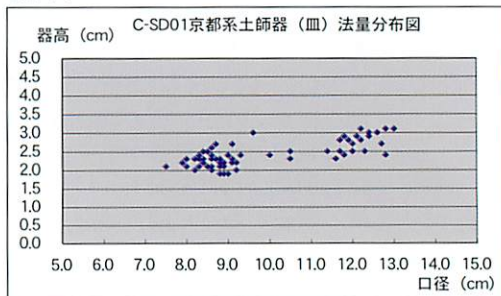


2. 16世紀後葉～末葉にかけての土師質土器について一法量を中心として一

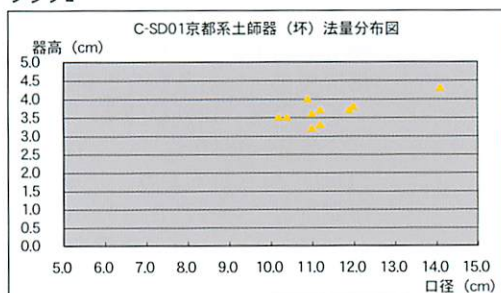
本調査区において、16世紀後葉～末葉の遺構から出土する土師質土器は、京都系土師器が主体となる。塩地編年でいえば京都系土師器3期に比定される。この段階は本調査区で見られる限り、前段階の京都系土師器2期段階で見られる、底部から口縁部に向けて直線的に開き、内外面に顕著にロクロ口目を有する在地系土師器は姿を消している。そして代わって登場する在地系土師器は、京都系土師器の胎土を有し、底部に糸切り痕を有する土師質土器である（今後「折衷様式」と仮称する）。さらに京都系土師器の中でも、皿に加えて坏の出土も増えてきており、器種分化が進んでいる傾向が看取される。そこでここではこれらの資料が比較的まとまって出土したC-SD01の資料を中心に分析し、当該期の傾向を検証していきたいと思う。

まずグラフ1にはC-SD01から出土した京都系土師器皿の法量分布を示した。これを見ると大きく2つの集中域があることが判る。一つは器高が2cm前後で口径が8～9cm前後のグループで、もう一つは器高が3cm前後で口径が12～13cm前後のグループである。そしてその中間域である、器高2.5cm前後口径10～11cm前後のグループがあるが、これは極端に少ない事が判る。次にグラフ2の坏の法量分布を見てみると、器高3～4cm前後、口径10～11cm前後に集中域があることが判る。この坏の集中域は、口径だけで見ると、前述の皿の空白域にちょうど当てはまる事が判る。さらにグラフ3の折衷様式を見てみると、口径2.5cm～3cm前後、口径11cm～12cm前後に集中していることが判り、この集中域も皿の空白域を埋める所に位置する。以上より、大きく2つに分かれた皿のサイズの間を埋めるように、坏と折衷様式が入ってきていることが判る。それを示したのがグラフ4である。この法量分布から、全部で何法量（幾サイズ）あったのかということは判別しがたいが、皿の空間域を埋める資料が、坏と折衷様式という明らかに形態の異なるものであることから、この空間域には2種類が存在していることは明らかである。こうした目で皿の2つの集中域をもう一度見てみると、口径8～9cmのグループは、8cmのグループと9cmのグループに、口径12～13cm前後のグループは口径12cmと13cmのグループに分けることも可能かもしれない。そうすると口径だけという、8cmの皿・9cmの皿・10cmの坏・11cmの折衷様式・12cmの皿・13cmの皿という6サイズのパターンが成り立つ可能性もある。ただこれはあくまで傾向であり、今後さらに資料の増加を待って検証をしていく必要がある。なお、グラフ5にはこのSD01以外の遺構から出土した京都系土師器の皿の法量分布図を示した。これを見ると、やはり他の遺構においてもC-SD01と同じように、皿のサイズの間隙に坏が入ってきており、同じような傾向を示していることが判る。

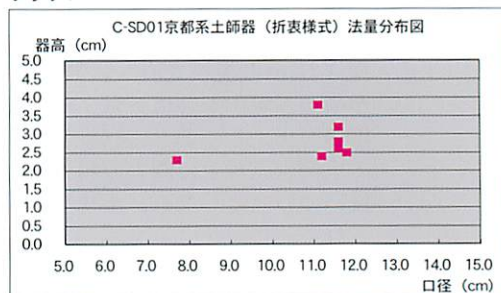
グラフ1



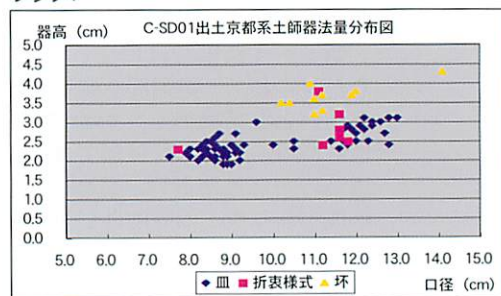
グラフ2



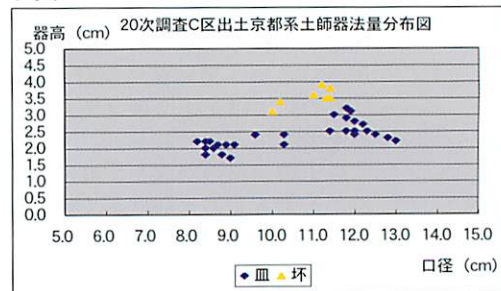
グラフ3



グラフ4



グラフ5



第4-62図 府内町跡20次調査C区 C-SD01出土京都系土師器法量分布図

## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 中世大友府内町跡第20次調査C区出土人骨について

邱鴻霖\*・舟橋京子\*\*・田中良之\*\*\*

\*九州大学大学院比較社会文化学府

\*\*九州大学大学院人文科学研究院

\*\*\*九州大学大学院比較社会文化研究院

#### 1. はじめに

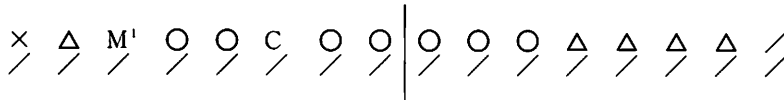
大分県中世大友府内町跡の20次調査において中世の万寿寺堀埋土中から人骨が出土し、九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座へ搬送され、同講座において、整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化学府考古人類資料室に保管されている。

#### 2. 人骨所見

##### 【保存状態】

本人骨は、頭骨の一部が遺存しているのみである。主な遺存部位は、前頭骨・鼻骨・左右上顎骨・左右頬骨・右側頭骨鱗部・蝶形骨が遺存している。眼窩上隆起の発達は顕著であり、側頭線も発達している。また、冠状縫合は外板内板ともに閉鎖している。

歯牙も一部遺存しており、残存歯牙は以下の通りである。



(○)歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 Δ歯根のみ ●遊離歯 ( )未萌出 c齲歯

咬耗度は栃原の2° bである(栃原1957)。

##### 【性別・年齢】

年齢は、縫合の癒合状況および歯牙咬耗度から熟年後半と推定される。

性別は、眼窩上隆起に顕著な発達がみられ、側頭線も発達していることから、男性と判定される。

##### 【形質的特徴】

頭蓋計測が一部可能であった。その結果は第5-1表の通りである。歯槽側面角は57°で超突顎に分類される。示数は上顔示数(V)は70.7で低上顔、眼窩示数は78.0(左)・76.0(右)で中眼窩、鼻示数は58.5で過広鼻にそれぞれ分類される。

##### 【特記事項】

左前頭鱗の外板表面が3.7cm×2.5cmの卵円形にやや陥凹している。病変部表面は正常な骨表面より粗く、癍痕を示している。これに対応する内板側には病変が現われていない。軽度の梅毒性変化あるいは結核性変化の症状との類似が認められるが、前頭部以外の観察が困難であることから、病因の推定は困難である。また、外傷性の可能性も残される。

頭蓋底部の右卵円孔内側から鱗縁に近いところまで長さ約1.3cm切創状の痕跡が見られる。切痕の縁は鋭く、鋭利な利器により生じた傷と考えられる。但し、その成因に関しては不明である。

3. まとめ

出土人骨に関して以下の点が明らかになった。

形質の特徴のうち、上顔示数(V) (70.7) は、北部九州の古墳人(70.2)に近い値であり、緒方町千人塚遺跡出土中世人骨(71.8 : 舟橋他1999)と同様に豊後古墳人 (68.6 : Doi and Tanaka1987) とは異なる傾向を示している。鼻示数(58.5)は千人塚中世人(47.1)よりも大きく、広い鼻であることを示している。眼窩示数 (左 : 78.0、右 : 76.0)は豊後古墳人(77.1)に近い値である。このように本人骨の形質は、縄文的形質を残すとされる豊後古墳人と渡来的形質を持った北部九州の弥生・古墳人の両方と類似する特徴を有している。このような特徴は千人塚中世人と共通しており、古代以来の人口移動によって渡来的形質が拡散していく過程を示しているとも見られるが、いまだ事例が不足しており資料増加が待たれる。また、吉母浜中世人にも見られる歯槽性突顎 (中橋・永井1985) が認められており、全国的に歯槽性突顎が広がっていたとする指摘 (池田1982)を裏付けるものである。

この他にも、前頭部に病変が認められ、頭蓋底付近には切創状の痕跡が認められた。

最後に本報告にあたり、大分県教育委員会各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。深謝したい。

参考文献

Doi, N. and Tanaka, Y., 1987 : A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. *J. Anthropol. Soc. Nippon*, 95-3.

舟橋京子・井村公洋・金宰賢・田中良之, 1999 : 千人塚遺跡出土人骨について. 千人塚遺跡. 緒方町教育委員会, 大分

Gertrud Hauser, G.F. De Stefano, 1989 : Epigenetic Variants of the Human Skull, E. Schweizerbart'sche Verlagsbuchhandlung Stuttgart published, Germany.

池田次郎, 1982 : 日本人の起源. 講談社, 東京

中橋孝博・永井昌文, 1985 : 人骨. 吉母浜遺跡. 下関市教育委員会, 下関

柄原博, 1957 : 日本人歯牙の咬耗に関する研究. 熊本医学会雑誌, 31. 補冊4

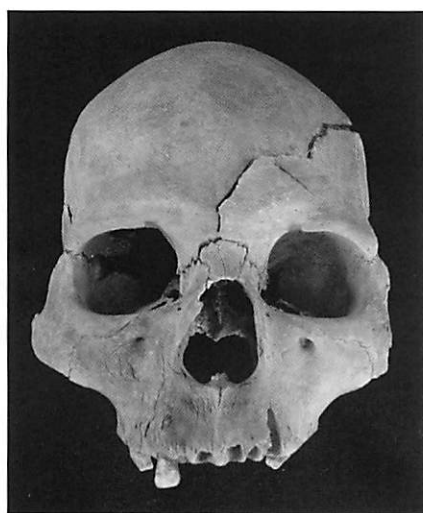
Ubelaker, D.H., 1989 : Human skeletal remains : Excavation, Analysis, Interpretation (2nd Edition). Washington, D.C. : Taraxacum.

第5-1表 頭骨計測値

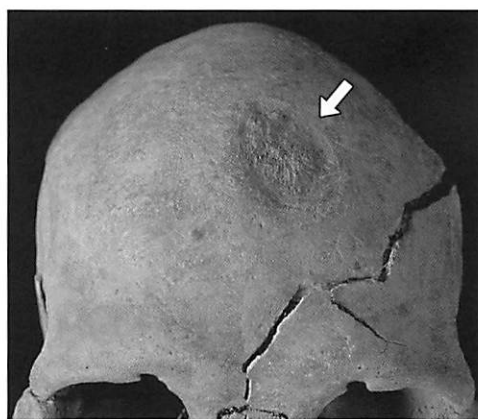
項目	計測部位	計測値(mm)		項目	計測部位	計測値(mm)
M 9	最小前頭幅	106.5		M54	鼻 幅	30.2
M43	上 顔 幅	116.2		M55	鼻 高	51.5
M44	両眼窩幅	109.2		M57	鼻骨最小幅	10.6
M46	中 顔 幅	110.2		M72	全側面角	75°
M48	上 顔 高	77.9		M74	歯槽側面角	57°
M50	前眼窩間幅	22.1		M48/46	上顔示数 (V)	70.7
M51	眼窩幅(左)(右)	40.3	40.6	M52/51	眼窩示数 (左) (右)	78   76
M52	眼窩高(左)(右)	31.5	30.9	M54/55	鼻示数	58.5

第5-2表 頭蓋小変異観察表

項目	右	左	項目	右	左
内側口蓋管骨橋	-	-	副眼窩下孔	-	-
眼窩上縁孔	-	-	二分頬骨・頬骨分裂	-	-
ヴェサリウス孔	-	+	前頭骨縫合	-	
卵円孔棘孔交通	-	-	頬骨顔面孔	+	+
眼窩上神経溝	-	-			



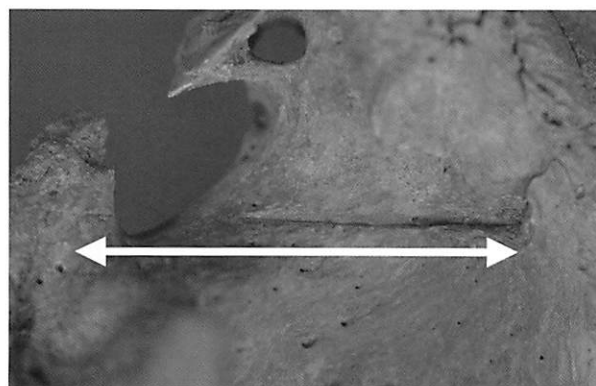
第5-1図 頭蓋骨 (正面観)



第5-2図 前頭骨病変部拡大図



第5-3図 上顎骨・歯牙



第5-4図 頭蓋底に見られる切痕



## 第2節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査

ノジヒョン  
魯禎玆・平尾良光

(別府大学大学院 文学研究科)

1. はじめに<sup>1)</sup>

中世大友府内町跡は大分県大分市内に位置する中世大友氏の城下町跡である。この遺跡がある大分市には九州の有力な戦国大名である大友義鎮の守護所がおかれていた。当時の領主であった大友義鎮は南方貿易から得られる利益のため、ポルトガル貿易と密接な関係にあるキリスト教の布教を許可し、また自らもキリスト教に帰依したため、キリシタン大名になった。

南方貿易を含め、活発な対外交流が行われたことを示すように、府内町跡からは中国、朝鮮半島、東南アジアなどからの遺物が数多く出土した。その中にはキリスト教との関連があると考えられるメダイ、ロザリオなども含まれていた。

2005年には大分県教育庁埋蔵文化財センターの依頼で中世大友府内町跡から出土した金属製品に関する自然科学的な調査を行った。その結果、メダイと推定される金属製品とガラス、鉛玉などに中国、朝鮮半島産の材料、日本産の材料または未知の地域の材料が使用されたことがわかった。特に注目される特徴は東アジアではない未知の材料が新しく使われたことで、これは当時の貿易ルートを示唆しているとも言える。

未知の地域の材料が使用されたと考えられる製品はほとんどがキリスト教と関係があるメダイあるいはメダイと推定される資料で、この地域はキリスト教との深い関係があるところの可能性を示した。

ただし、これまで測定された中世大友府内町跡出土の製品の数が少ないため、どんな製品が未知の地域の材料を利用したか、あるいは未知の地域産の材料がどんな規模で使われたかを理解するためにはより研究が必要である。そこで中世大友府内町跡から出土した他の金属製品に関して自然科学的な調査を大分県教育庁埋蔵文化財センターの依頼を受け、化学組成および鉛同位体比分析を用いた産地推定の研究を行った。

## 2. 資料

今回測定した資料は中世大友府内町跡から出土した金属製品10点である。7点はメダイ様金属製品であり、1点がソーダ石灰ガラス、1点が鉛玉、また1点が小柄である。これらの資料から鏝を微量採取し、測定用試料とした。試料採取は表面クリーニングして落ちた鏝を用い、資料の記載は第5-3表で示した。

第5-3表 府内町跡12・20次調査出土の測定金属製品の一覧表

番号	資料名	出土地	出土区	残存状況	生産地	測定番号
1	メダイ様金属製品	12次		元形	在地	BP1240
2	メダイ様金属製品	12次		元形	在地	BP1241
3	メダイ様金属製品	12次	C-S B01焼土層	元形	在地	BP1242
4	メダイ様金属製品	12次	L-12区	元形	在地	BP1243
5	メダイ様金属製品	12次	K-12区	元形	在地	BP1244
6	メダイ様金属製品	12次	南北大路町屋側測溝	元形	在地	BP1019
7	ソーダ石灰ガラス	20次C	C-S D01中層	元形		BP1245
8	メダイ様金属製品	20次C	L-37区	元形	在地	BP1246
9	鉛玉	20次C		元形	在地	BP1247
10	小柄	20次	C-S D01			BP1248

### 3. 鉛同位体比の原理<sup>2)</sup>

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、それは地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しないが、例外的ないくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛(Pb)には $^{201}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}$ の同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた $^{238}\text{U}$ は $^{206}\text{Pb}$ に、 $^{235}\text{U}$ は $^{207}\text{Pb}$ に、 $^{232}\text{Th}$ は $^{208}\text{Pb}$ に変化する。よって、U(ウラン)とTh(トリウム)が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。各鉛同位体の量は岩石中のU、Th、Pbの量比および岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表すことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない $^{201}\text{Pb}$ 量と、変化した $^{206}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}$ 量との比を調査し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる。

### 4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ビーカーに入れ、硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5 mlに希釈し、直流2 Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から $0.2\ \mu\text{g}$ の鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上にのせた。準備したフィラメントを質量分析計(本学に設置されているサーモエレクトロン社の表面電離型質量分析計MAT262)の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を $1200^\circ\text{C}$ で測定した。同一条件で標準鉛試料NBS-SRM981を測定し、規格化した。

### 5. 測定値の表し方<sup>3)</sup>

鉛同位体比測定の結果を理解するため、材料の同位体比を次のように示した。鉛には $^{201}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}$ の独立した4つの同位体があり、同位体比は $^{206}\text{Pb}/^{201}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{201}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{201}\text{Pb}$ 、 $^{201}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{201}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{201}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ という12の方法で表現される。この方法の中で一番整った図で表現でき、4種類の同位体を含む $^{206}\text{Pb}/^{201}\text{Pb} - ^{207}\text{Pb}/^{201}\text{Pb}$ と $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - ^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ という2つの図(図1と図2)を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。中国の前漢時代、後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域と表し、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域とした。

朝鮮半島産材料の領域を設定する場合、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鈕細文鏡を用い、それらが示す分布を朝鮮半島産材料の領域とした。

## 6. 化学組成

今回の測定試料である10点の製品に関して化学組成を蛍光X線分析法で測定した。測定は本学に設置されているHORIBA MESA-500Sで行った。測定された蛍光X線スペクトルを付録として末尾に付し、その化学組成を第5-4表でまとめた。化学組成の結果、試料番号2、7、10を除外した試料は鉛製品であることがわかった。また、試料番号2はほぼ純銅製品であり、7番はカルシウムを主成分とするソーダ石灰ガラスであった。鉛成分の比率が比較的に高いことは鉛が銅より手に入りやすかったためであると考えられる。資料番号10は黄銅製品であり、この時代に黄銅が日本で使われていたことを示す貴重な資料である。

第5-4表 中世大友府内町跡から出土した製品の化学組成

番号	資料名	Cu	Sn	Pb	As	Fe	測定番号
1	メダイ様金属製品	0.1	0.7	96.9	0.1	0.1	BP1240
2	メダイ様金属製品	96.6	0.1	1.7	0.1	1.7	BP1241
3	メダイ様金属製品	0.2	6.6	91.0	0.1	0.2	BP1242
4	メダイ様金属製品	0.0	0.5	96.0	0.1	0.7	BP1243
5	メダイ様金属製品	1.2	8.7	88.1	0.0	2.0	BP1244
6	メダイ様金属製品	0.0	0.5	93.9	0.1	1.5	BP1019
8	メダイ様金属製品	0.1	1.9	97.9	0.1	0.1	BP1246
9	鉛玉	0.1	0.5	95.7	0.1	3.7	BP1247

番号	資料名	測定番号
7	ソーダ石灰ガラス	BP1245
10	小柄	BP1248

## 7. 結果

測定の結果として得られた鉛同位体比を第5-5表に示し、第5-5図～第5-8図に図化した。資料番号7はカリガラスのため、鉛同位体比の測定を行わなかった。図から判断すると、今回測定した試料には日本産、中国の華南産、朝鮮半島産、未知の地域産の材料が利用されていた。資料番号1は朝鮮半島の領域に位置し、9は日本の領域に位置した。資料番号2と10は中国の華南の領域に位置した。そしてその他の資料は未知の地域のところに位置した。

この測定結果をこれまで測定した中世大友府内町跡出土の金属製品や鉛玉と比較し、図5～図6に示した。これらの図でも今までに測定した資料は日本、華南、朝鮮半島、未知の地域の領域に分布した。特に、いくつかの資料は今回測定した資料4、5、6、8と同じように未知の地域のところに重なって分布したことが注目される。

## 8. 考察

大分市に位置する中世大友府内町跡では中世の磁器、ガラス玉、鉄砲玉、金属製品、土製品などが出土しており、その中には朝鮮半島、中国、タイ、ヨーロッパとの貿易でもたらされた製品もたくさん含まれていた。この史実を示すように、2005年に測定された鉛同位体比の結果では金属製品に朝鮮半島、中国、未知の地域の材料が利用されたことがわかった。この未知の材料はどこからもたらされたかはわからないが、スペインの鉛鉱石が近い値を示していることが注目された<sup>1)</sup>。

今回鉛同位体比の測定を行った資料は10点の中9点であり、測定の結果、1点(資料番号1)が朝鮮半島産材料、2点(資料番号2、10)が中国の華南産材料、1点(資料番号9)が日本産材料で作られたことがわかった。また、4点の資料(資料番号4、5、6、8)が未知の地域産の材料を利用し

たことがわかった。ここで資料番号10の小柄は黄銅(真鍮)でできており、この真鍮が中国からもたらされていることを示す。

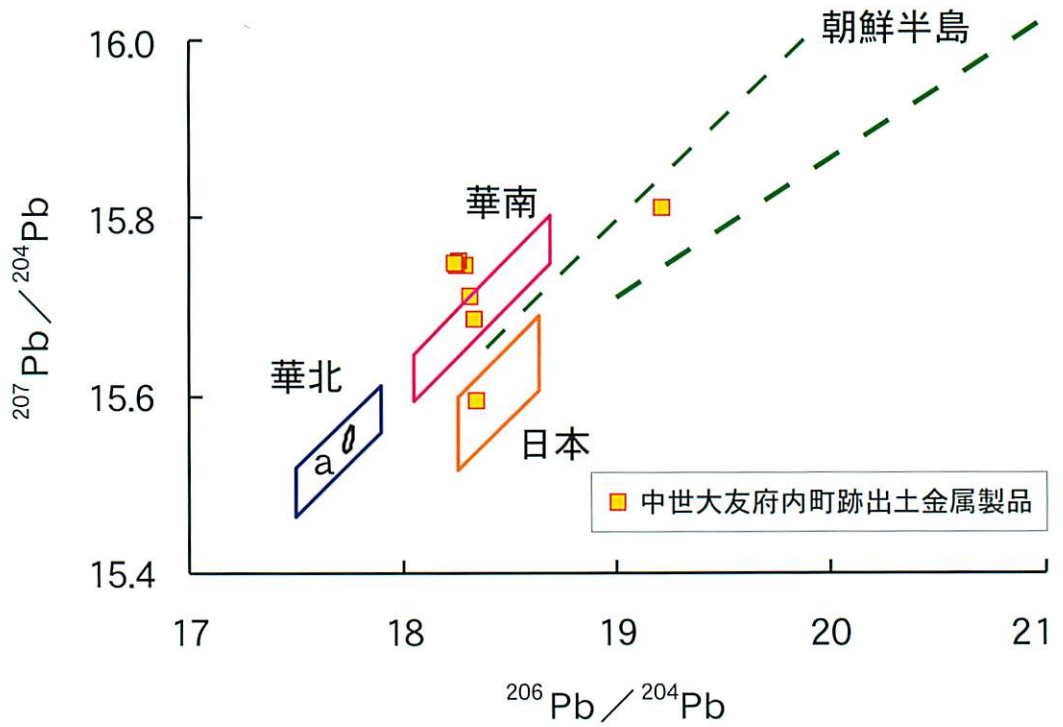
これは大友義鎮が中国、朝鮮半島、東アジアとの国際交流に力を入れた事実を示すことであろう。また、未知の地域に位置した資料に関してはその近くにスペインの鉛鉱石が分布することから、これらはスペイン付近のどこかの材料を利用した可能性があることを示唆する。しかし、このことはスペインを含むヨーロッパの金属製品及び鉛鉱石に関するより深い研究が必要である。

第5-5表 中世大友府内町跡から出土した製品に関する鉛同位体比値

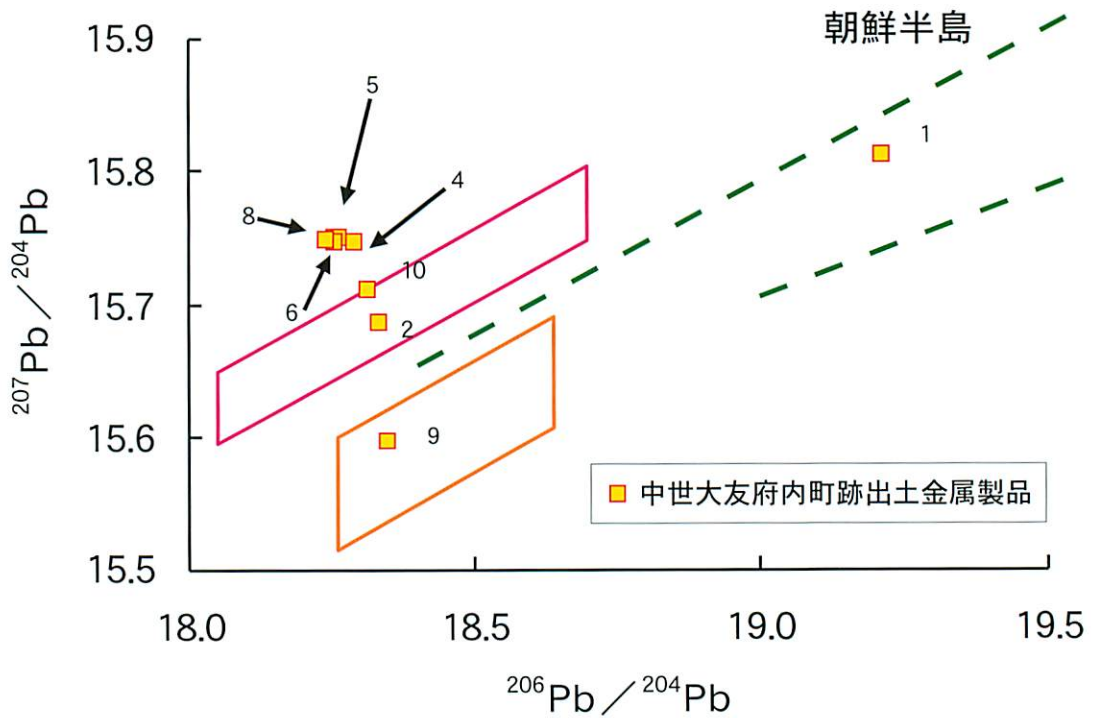
番号	資料名	$^{208}\text{Pb}/^{201}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{201}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{201}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
1	メダイ様金属製品	19.208	15.814	39.700	0.8233	2.0669	BP1240
2	メダイ様金属製品	18.331	15.678	38.834	0.8558	2.1185	BP1241
3	メダイ様金属製品	18.252	15.751	38.497	0.8630	2.1092	BP1242
4	メダイ様金属製品	18.288	15.748	38.545	0.8611	2.1076	BP1243
5	メダイ様金属製品	18.260	15.752	38.518	0.8626	2.1094	BP1244
6	メダイ様金属製品	18.252	15.749	38.487	0.8628	2.1086	BP1019
7	ソーダ石灰ガラス	なし	なし	なし	なし	なし	BP1245
8	メダイ様金属製品	18.238	15.750	38.477	0.8636	2.1097	BP1246
9	鉛玉	18.346	15.597	38.623	0.8502	2.1052	BP1247
10	小柄	18.312	15.713	38.776	0.8581	2.1175	BP1248
	誤差	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

※参考文献

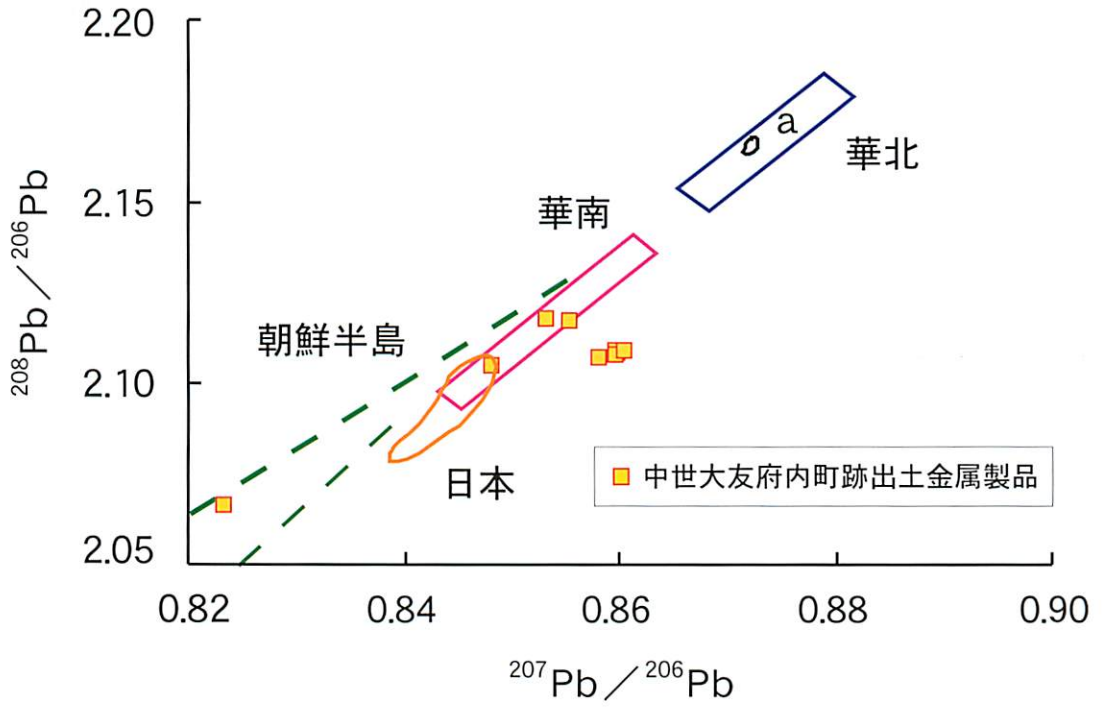
- 1) 大分市教育委員会、2006「中世大友再発見フォーラムⅡ：府内のまち宗麟の栄華」大分市教育委員会文化財課
- 2) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と铸造」鶴山堂(東京)、p31～p33
- 3) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と铸造」鶴山堂(東京)、p35～p39
- 4) 大分県教育庁埋蔵文化財センター、2006「豊後府内4」埋蔵文化財調査報告書 第8集



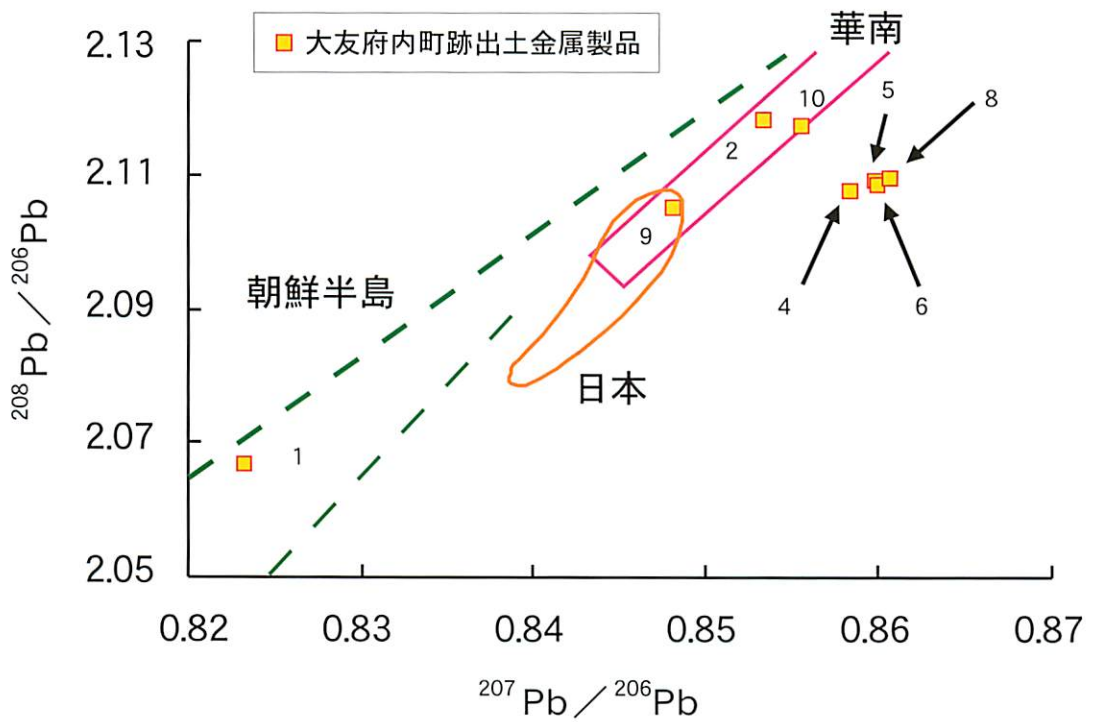
第5-5図 大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比  
( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ )



第5-6図 第5-5図の拡大図  
( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ )

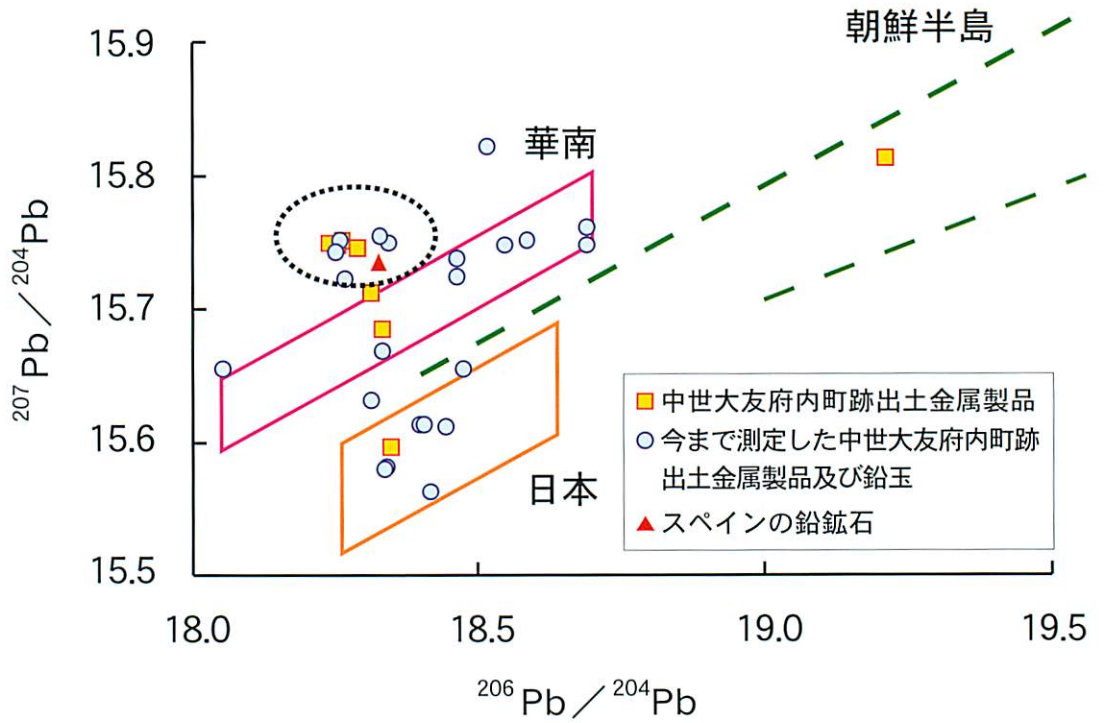


第5-7図 大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比  
( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

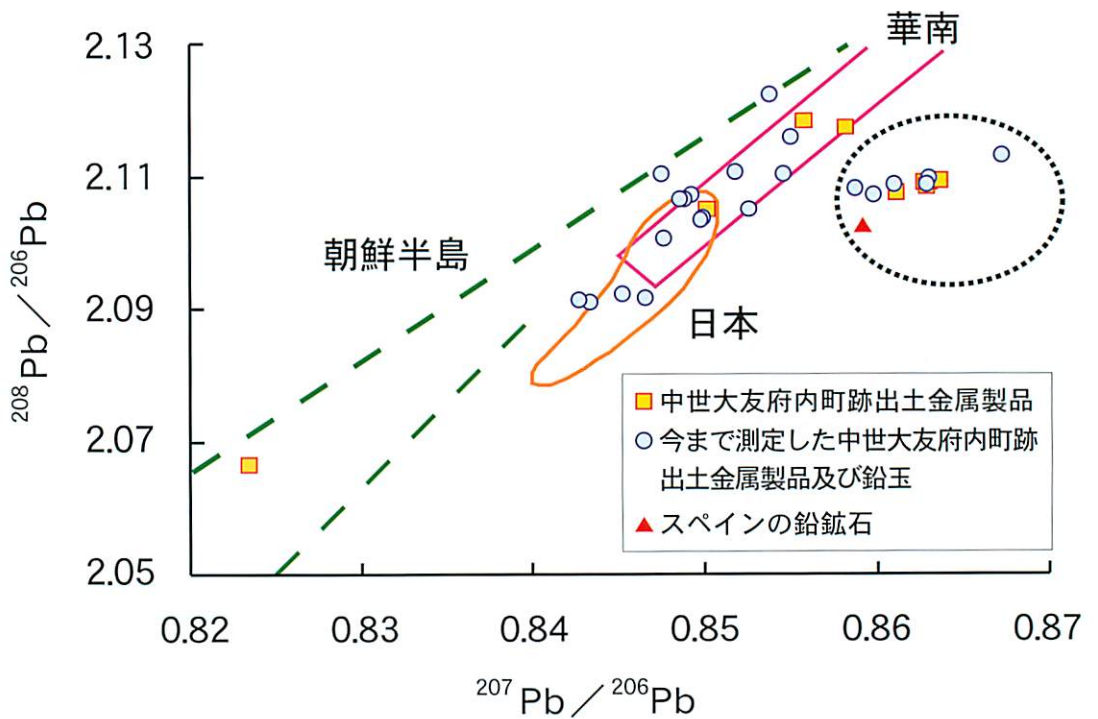


第5-8図 第5-7図の拡大図  
( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )





第5-9図 今回測定した金属製品とこれまで測定した中世大友府内町跡出土金属製品及び鉛玉の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ )



第5-10図 今回測定した金属製品とこれまで測定した中世大友府内町跡出土金属製品及び鉛玉の鉛同位体比 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

第5-6表 付録 蛍光X線スペクトル

資料番号1(大友12次)  
測定条件

日付: 06. 09. 19
時刻: 15:43:41
電圧: 50kV
電流: 10 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	0.1	0.1	0.185
Cu 銅	0.1	0.1	0.184
As 砒素	0.1	0.1	0.515
Sn スズ	0.7	0.1	0.728
Pb 鉛	96.9	0.1	169.827

資料番号6(大友12次 南北大路町屋側側溝)  
測定条件

日付: 06. 09. 19
時刻: 16:13:31
電圧: 50kV
電流: 10 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	1.5	0.1	3.341
Cu 銅	0.0	0.0	0.000
As 砒素	0.1	0.1	0.494
Sn スズ	0.5	0.1	0.526
Pb 鉛	93.9	0.2	160.682

資料番号2(大友12次)  
測定条件

日付: 06. 10. 01
時刻: 17:19:14
電圧: 50kV
電流: 22 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 23%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	1.7	0.1	4.810
Cu 銅	96.6	0.1	143.039
As 砒素	0.1	0.1	0.039
Sn スズ	0.1	0.1	0.012
Pb 鉛	1.7	0.1	0.869

資料番号7(大友20次C C-SD01中層)  
測定条件

日付: 06. 10. 05
時刻: 14:44:36
電圧: 15kV
電流: 300 $\mu$ A
時間: 1500秒
DT%: 23%
試料セル: なし
試料室: 真空

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
SiO <sub>2</sub>	82.0	1.0	6.528
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	5.5	0.1	0.230
CaO	5.3	0.1	1.968
Na <sub>2</sub> O	5.0	0.1	0.009
K <sub>2</sub> O	1.3	0.1	0.424
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.9	0.1	0.830
TiO <sub>2</sub>	0.1	0.1	0.058

資料番号3(大友12次 SD01 焼土層)  
測定条件

日付: 06. 09. 19
時刻: 16:00:52
電圧: 50kV
電流: 9 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 21%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	0.2	0.1	0.356
Cu 銅	0.2	0.1	0.560
As 砒素	0.1	0.1	0.492
Sn スズ	6.6	0.1	7.127
Pb 鉛	91.0	0.3	159.519

資料番号8(大友20次C L-37区)  
測定条件

日付: 06. 10. 01
時刻: 17:48:08
電圧: 50kV
電流: 9 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 22%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	0.1	0.1	0.168
Cu 銅	0.1	0.1	0.018
As 砒素	0.1	0.1	0.520
Sn スズ	1.9	0.1	1.999
Pb 鉛	97.9	0.1	165.406

資料番号4(大友12次 L-12区)  
測定条件

日付: 06. 09. 19
時刻: 16:25:54
電圧: 50kV
電流: 11 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	0.7	0.1	1.506
Cu 銅	0.0	0.0	0.000
As 砒素	0.1	0.1	0.476
Sn スズ	0.5	0.1	0.534
Pb 鉛	96.0	0.1	155.511

資料番号9(大友20次C)  
測定条件

日付: 06. 10. 01
時刻: 17:33:41
電圧: 50kV
電流: 14 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	3.7	0.1	5.363
Cu 銅	0.1	0.1	0.03
As 砒素	0.1	0.1	0.341
Sn スズ	0.5	0.1	0.352
Pb 鉛	95.7	0.1	106.000

資料番号5(大友12次 K-12区)  
測定条件

日付: 07. 01. 22
時刻: 15:54:30
電圧: 50kV
電流: 12 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 23%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	2.67	0.05	4.89
As 砒素	0.00	0.04	0.000
Sn スズ	7.35	0.12	6.535
Pb 鉛	89.98	0.13	122.429

資料番号10(大友20次C C-SD01)  
測定条件

日付: 06. 08. 03
時刻: 14:41:22
電圧: 50kV
電流: 62 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 25%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	0.5	0.1	0.343
Cu 銅	78.7	0.1	38.33
As 砒素	0.0	0.0	0.000
Sn スズ	0.1	0.1	0.009
Pb 鉛	0.8	0.1	0.091
Zn 亜鉛	20.0	0.1	11.34

## 第6章 総括

### 第1節 文献・絵画資料から見た万寿寺

#### 1. 万寿寺の変遷と意義

本書は平成14年に発掘調査を実施した中世大友城下町跡の中の府内町跡20次調査の報告書である。その調査範囲は、すでに述べてきたように、鎌倉・室町時代において、九州最大級の禅宗寺院であった万寿寺の北西部にあたる。そこで、万寿寺の変遷・意義、現存する禅宗寺院の伽藍配置と、文献・絵画資料に表れる万寿寺の施設名の抽出を行い、その伽藍や施設の配置の復元を試みる。

徳治元年（1306）、大分川河口に近い西岸の自然堤防上に禅宗寺院である万寿寺が建立される。『大分郡志』には「万寿寺は豊後にて最初の禅窟也。妙心寺より、舊し。」とある。その創建に当たっては、近世の史料であるが「豊筑乱記」や「豊府紀聞」によると、大友氏五代目の貞親が嘉元三年（1305）に鎌倉に参上した際に、執権北条貞時との仏心や僧衆の供養の問答から建立を決意し、博多承天寺の直翁智侃を招聘し、その任に当たらせたと、伝えられている。

直翁智侃  
雪村友梅

その後、万寿寺は、中国（元）からの渡海僧である元晦・雪村友梅・圓月・獨芳などが、来院・止住し、暦応4年（1341）に禅宗寺院の官位制である五山十刹の中で、十刹に位置づけられ、万寿寺はその第十位に、翌康永元年（1342）にはその第八位に列せられている。こうして、万寿寺は博多の聖福寺と並び、九州最大規模と格式の禅宗寺院として14世紀前半に豊後府中（府内）に出現した。この時期の万寿寺周辺の状況を物語る史料として、文和4年（1355）6月18日「緩以萬壽寺北辺屋敷島地等、」とあり、万寿寺の北側は屋敷と島地が混在する風景が広がっていたことがわかる。

雪舟  
天開図画楼

15世紀になると文明8年（1476）には雪舟が京都の戦乱を避け、万寿寺に在院していた師僧景浦玄圻を頼り来院し、府内にアトリエである「天開図画楼」を構えて創作活動を行った。このように、14・15世紀の万寿寺は、元や明への留学経験のある高僧が住持となる一方、文和元年（1352）將軍足利義詮が僧元光を万寿寺住持も命ずるなど、万寿寺－大友家－京都五山－將軍家と密接な関係が保たれていたと考えられる。

菊池武光

また、万寿寺は軍事的な拠点としても存在した。貞治元年（1362）、菊池武光は豊後高崎城に立て籠もる鎮西管領斯波氏経・大友氏時・田原氏能・志賀頼房を討とうと豊後に進軍し、9月9日に万寿寺に陣を張った。これに対し、斯波氏経は、既に8月7日に阿蘇大宮司惟村に援軍を求め、さらに9月9日に再び援助を求めた。このため、菊池武光は高崎城攻略を実行せず、5日後の9月14日に万寿寺の陣を解き、豊前へ去ったと言う。

姫岳の戦い

さらに、1430年代初め、応永6年（1399）に起った大内義弘が室町幕府と戦った応永の乱以後の影響で、室町將軍を背景に、大友持直と弟の親綱が対立し、これに大内氏・菊池氏がそれぞれに付き、豊後が戦乱状態に陥った。さらに安芸・石見・伊予からも大内氏への援軍が送られた。永享8年（1436）、府内を逃れた大友持直は臼杵市と津久見市の境にある姫岳に籠城した。その際、万寿寺は石見からの軍勢などの拠点となっている<sup>1)</sup>。

14・15世紀の万寿寺は府中（府内）において、巨大な宗教的施設としての存在以外にも、京都や中国との文化的な交流の拠点、ある時は軍事的な施設としての役割を果たしている。

#### 2. 16世紀の万寿寺

大内義興

16世紀になると、万寿寺は永正11年（1514）に、万寿寺が炎上し、「殿堂焦土」となっている。そこで、永正13年（1516）に周防の大内義興が、室町幕府の管領であったためか、朝鮮王朝に対し、万寿寺の再建費を募っている。このことから、万寿寺の存在は豊後一国に留まらず、西日本の武家社

(1)久多羅木儀一郎「豊後萬壽寺の史蹟」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第12輯 大分縣史蹟名勝天然記念物調査会 1934年

会の中で、禅宗寺院としての大きな位置を占め、国家支援の下に復興を目指していることが分かる。

工藤帯刀

16世紀の万寿寺に係わる火災の記録は、近世に編纂された「九州記」に、元亀元年(1570)正月21日、大友宗麟近習の侍工藤帯刀が臼杵で狼藉を働き、府内の万寿寺に逃げ込んだ。それを宗麟の命で追った二百余人の兵が、万寿寺に乱入し、火を放ち、全焼したと記されている。

臼杵の教会

また、ルイス＝フロイスの日本史にも万寿寺に関する火災の記録が二ヶ所に見られる。まず、1581年のことであるが「豊後の府内の市では、巡察師が同所を出発した二、三日後に、やがてもたらされることになる神仏の零落を予告するかのように、ある事件が生じた。万寿寺は、その市の最良の場所にあり、豊後の国中でもっとも主要な寺院で、建築や収入においてもっとも豪勢であったが、我らの臼杵の教会の礎石が置かれた同じ週に、一夜、突如として火災を起こし、その壮大な建築物は何一つ残らずことごとく消滅した。」<sup>(1)</sup>と記述している。

もう1ヶ所は、1585年(天正13年)に岡城主志賀親次が洗礼を受けたことを大友義統の命により派遣された高山・大津留殿に詰問され、「殿は、自らの領国に繁栄をもたらした四カ国を喪失なされた後は、幾多の貧困と窮乏に囲まれておられた。なぜなら、殿には随伴する人々もなく、兵士たちは戦いにおいて殿に奉仕したそうにも、武器がない有様であった。そこで殿は思慮(をめぐらされ)、またしかるべき勧告に基づいて、日々の損失と窮乏を補わんがために、実に当を得、かつ時宜になつた対策をおとり遊ばされた。(ほかならず)殿は密かに、府内の町において主要な僧院であり、(豊後の)国中でもっとも著名な寺院である万寿寺に放火するよう命ぜられ、そしてその莫大な収入を、戦争において殿に奉仕していた貧しい武士や兵士に分配なされた。」<sup>(2)</sup>と述べている。

この3つの火災についての文字史料のうち、時系列的に「フロイスの日本史」の2ヶ所は矛盾がないが、日本の「九州記」とは2度火災がない限り矛盾がある。

国王の居住せる府内

1570年頃の万寿寺については「1571年10月6日(元亀2年9月18日)付け、パードレ・ガルパス・ビレラがゴアよりポルトガルのアビスの住院のパードレ等に贈りし書翰に『豊後国において国王の居住せる府内という市に多数の大いなる僧院あり。特に二つは甚だ立派にしてその一つ〔萬寿寺ならん〕は坊主150人を有し、収入多く、寺は建築後年を経たるがゆえに新しからざれども、地所甚だ広く。うちに多数の庭園あり、果物ならびに薔薇、その他目を楽しましむるもの植えたり。この僧院は豊後の諸王の墓所にして、これがため収入豊なり。彼等は教壇より説教をなし、朝夕祈祷の定時あり、国王の庇護を被るがゆえに甚だ傲慢にして、各種の罪を犯して躊躇せず。…』」<sup>(3)</sup>と報告されている。

このパードレ・ガルパス・ビレラは1556年7月から1569年9月までの間、一時1566年5月に畿内へ移ることもあったが、豊後に駐在し、その後西九州に移り、病と日本情勢報告のため1570年10月末か11月初旬にインドに帰った。この書簡は、そこで書かれたものであろうが、「九州記」の万寿寺火災は1570年1月21日のことであり、ガルパス・ビレラが日本を離れるまで10ヶ月近い時間がある。しかし、書簡にはそのことが触れられていない。おそらく、万寿寺の炎上は1581年の出来事と考える<sup>(4)</sup>。

さらに、この1581年の火災の背景には「府内のかの主要な寺院がふたたび勢力を伸ばすことがないようにと、国王フランシスコの助言によるものと思われるが、嫡子(義統)は、同寺が所有していた収入を幾人かの貴人たちに配分し、その地所を、さしあたっては一人のキリシタンの貴人に授与した。かくてやがては、我らの学院がその地所に移るようになって、我らの同僚たちが早くから予言していたことが実現するかも知れない。なぜならば、国王フランシスコがキリシタンとなり、嫡

(1)松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史10』中央公論新社 1979年

(2)松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史8』中央公論新社 1978年

(3)村上直次郎訳『イエズス会士日本通信 下』新異国叢書2 雄松堂出版 1969年

(4)加藤知弘(大分大学名誉教授)先生から教示



「慈光閣」・「衆寮」・「虚空蔵」・「僧堂」・「輪蔵殿」・「東明楼」・「西明楼」・「観音殿」・「韋駄天閣」・「鐘楼」・「地藏堂」・「風呂」・「西浄」・「雪隠」・「東司」・「浄頭寮」の主要建物名が見られ、塔頭には「仏殿」・「室間」・「土地間」・「萃巖塔」が見られる。そして、諸寮舎は東西に分かれ、東分については、「東方丈并大庫」・「衣鉢閣」・「西庵」・「侍香寮」・「侍客寮」をはじめ蒙堂寮として、「都寺寮」・「監寺寮」・「副司寮」・「桂隣閣」・「祠堂寮」・「東閣」・「凌雲軒」・「妙觸軒」・「都官寮」・「修造寮」・「化城軒」・「知客寮」・「浴主寮」・「点部屋」が記され、西分については、「西方丈」・「客殿」・「礼之間」・「侍薬寮」・「侍状寮」・「雪竹軒」・「霜松軒」・「首座寮」・「双擣軒」・「有方軒」・「寮元寮」・「瑞巖軒」・「維那寮」・「悦司」・「亀蔵軒」・「龍蟠軒」・「金相軒」・「玉蘊軒」・「来青軒」・「孤芳軒」・「于倉」・「医倉」・「羅漢倉」が配置されている。これらの建物群の中で、「慈光閣」・「衣鉢閣」・「桂隣閣」・「東閣」は「四閣」と呼ばれ、先の万寿寺の石碑に見られる「四閣」を意味すると考えられる。またこうした建物群以外にも、万寿寺の境内や院外を含め、四橋と呼ばれる「青雲橋」・「豊楽橋」・「利濟橋」・「七歩橋」があり、「利濟橋」を除き、「万年松」・「上原茗」・「三生石」・「文殊剣」・「鬼氏爐」・「白蓮池」・「清客壇」を加え、十境とされている。

「当家中作  
法日記」

文禄4年(1595)に大友義統が水戸に幽閉中作成させた「当家中作法日記」にも、大友家が正月に万寿寺を公式に訪問した際、「都官寮」で、接待を受け、次に「方丈」で再度の食事を含む儀式をし、さらに「西堂寮」でくつろいだことが記されている。

以上の資料から、徳治元年(1306)に造営された万寿寺の16世紀後半の姿を推測すると、東西二百五十歩、南北三百六十歩の四周に瓦の乗った白壁の築地塀を廻らせ、その東西北の塀に小門を構え、特に南側には山門として二階楼門が建てられている。そこから境内に入ると正面に仏殿、そして北側に法堂と続く。こうした施設は廻廊で結ばれていた可能性が強い。こうした主軸となる禅宗寺院の中核の建物の周辺に「祖師堂」・「上祠堂」・「慈光閣」・「衆寮」・「虚空蔵」・「僧堂」・「輪蔵殿」・「東明楼」・「西明楼」・「観音殿」・「韋駄天閣」・「鐘楼」・「地藏堂」・「風呂」・「西浄」・「雪隠」・「東司」・「浄頭寮」などが建ち並んでいたことが想像される。

そして、この建物群の東側の奥まった場所には、「東之方丈」を中心に「衣鉢閣」・「西庵」・「侍香寮」・「侍客寮」、大友家を正月に接待する「都官寮」などがあり、西側には同じく、「西之方丈」を中心に「客殿」・「礼之間」・「侍薬寮」・「侍状寮」などが配置されていたと推測できる。

こうした、建物の間は、「多数の庭園あり、果物ならびに薔薇、その他目を楽しませるもの植えたり。」と宣教師の報告にあるように、庭園が整備されている。それは、「禅餘集」の十境にある「万年松」・「三生石」・「白蓮池」などで、そこには、四橋と言われる「青雲橋」・「豊楽橋」・「利濟橋」なども架けられていたものと考えられる。

なお、「府内古図」には万寿寺南側の築地塀の外に五重塔が描かれているが、現存する宝永三年の石碑や「禅餘集」などの文字資料には記述が見られない。ただ、永徳2年(1382)に足利義満が室町幕府東北側に建立した臨濟宗寺院である相国寺境内の東側には七重塔が建てられている<sup>1)</sup>。同じ臨濟宗寺院で、大友館の南に隣接する万寿寺にも府内のランドマークとして五重塔が建っていたのであろうか。

すなわち、万寿寺主要建物である山門・仏殿・法堂・方丈をはじめとする伽藍と、それを取り巻き、54もの寮・閣・軒・倉・庵と名前の付く建物が建ち並ぶ。その中には、「当家中作法日記」の中の記述に見られる「万寿寺大工」など職能集団も在住しており、それらを築地塀で囲み、境内が構成されていたと考えられる。「府内古図」によると、その南側の境内の外側には門前町と思われる寺小路町が形成されている。こうした状況は伊藤毅の指摘する禅宗寺院に見られる「境内」系寺院に相当する<sup>2)</sup>。

(1)高橋康夫「室町期京都の都市空間―室町殿と相国寺と土御門内裏」『中世都市研究9』中世都市研究会編 新人物往来社 2004年  
(2)伊藤毅『都市の空間史』吉川弘文館 2003年

## 第2節 考古学から見た万寿寺跡の西北隅

### 1. 万寿寺の建立期

万寿寺の創建は、徳治元年(1306)と伝えられている。そこで、出土遺物からこの時期の検証を試みる。出土遺物で最も数量の多いものはロクロ成形による在地系土師質土器であるが、この遺物は、相対編年は可能であるが、単独で実年代との比較を行うには、現時点では良好な資料がなく、困難である。そこで、ここでは、比較的編年研究が進行し、13世紀末から14世紀初頭・前葉に編年されている青磁・白磁などの貿易陶磁器、備前系陶器、吉備系土師器、常滑系陶器から探してみる。

白磁皿 貿易陶磁器の白磁であるが、第3-6図38~40・第3-36図等に図示した口禿げの白磁皿がある。この遺物は、13世紀後半から14世紀前半までに位置づけられており、府内町跡20次調査区からも溝  
龍泉窯系 や土坑から66点が出土している。同じく、この時期に編年されている龍泉窯系青磁碗がある。第3-6図24~28・第3-24図1~3・第3-10・12・14に図示した青磁碗で、外面に鎬蓮弁の模様が施文されている。この青磁碗の出土例も多く、58点を数える。このような貿易陶磁は、貴重品であり威信財として存在し、輸入から廃棄まで、長期にわたる可能性もある。

備前系陶器 これに対し、備前系陶器・吉備系土師器・常滑系陶器など国内産土器・陶器は消耗度が大きいと考える。備前系陶器は挿鉢と壺・甕が出土している。挿鉢は口縁部が第3-11図82・83・第3-24図5、第3-162図25に見られるように直線的で、挿り目が6~7本の、13世紀末から14世紀前半に編年されているそれと類似している。また、壺・甕は、口縁端部が玉縁にならない、第3-10図69~76などが見られ、これらも、先の挿鉢と同様の時期に位置づけられている。さらに、第3-141図6  
吉備系土師器 でその全形を知ることが出来る吉備系土師器<sup>(1)</sup>は、第3-13図133~144、第3-24図20~23、第3-40図109~115など、多く出土している。これらに共通する特徴は、口径が11cm前後と小さく、底部の高台も縮小して断面が三角形になる。こうした特徴は、13世紀末から14世紀初頭と考えられている。  
常滑系陶器 そして、常滑系陶器の壺・甕は、第3-3図6、第3-8図56・60・61、第3-118図1に見られるように、その特徴であるN字屈曲は、縁帯化が未発達な段階であり、このような口縁部形態は、13世紀末から14世紀前葉に編年されている<sup>(2)</sup>。

このように、万寿寺跡の西北隅である府内町跡20次調査からは、13世紀末から14世紀前葉頃の国内外の土器・陶磁器が数多く出土している。その時期は、万寿寺創建時から暦応4年(1341)に五山十刹に列せられる頃にあたる。また、この時期は、万寿寺の最初の住持である直翁智侃や圓月・雪村友梅などが、京都と豊後府中(府内)を行き来している。府内町跡20次調査からは東海地方を含み、西日本全域での物流を読み取ることが出来、在地系の遺物を含め、この時期から急激に出土遺物が増加する。

そのことは、万寿寺の造営を意味し、以後途切れることなく16世紀末まで、遺構が存在する。すなわち、万寿寺造営を契機として、府内(府中)の一角が形成されると考えることができる。

### 2. 14世紀の万寿寺の遺構

前者の遺構は区画性の強い南北方向と東西方向の溝、礎盤建物、井戸などがある。この範囲に想定される建築物は、先の「禅餘集」では「西方丈」以下約20棟の建物名が上げられている。それらを見ると、建物名称の最後に付く名称で、機能や規模が異なることが感じられる。「殿」が1・「寮」が5、「軒」が11、「倉」が3、「間」が1、「司」が1である。一方建物名称から想定すると、主要伽藍はじめ多くは礎石建てであることが想定され、B-SD004から多量の瓦が出土しているように、瓦葺きであったことが想像できる。その一方、建築名称に軒や倉または寮が付く建物の全て

(1)山本悦代「吉備南部地域における古代末~中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会 1992年

(2)中野晴久「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館 1995



が礎石建てで瓦葺きとは考えられない。A-SB001やB-SB190～B-SB200の柱穴の底に川原石を据え、礎盤とした建物で、規模の大小が認められる。これらは、倉庫と考えられる「于倉」・「医倉」・「羅漢倉」、また、万寿寺西方丈以下多く見られる建物名称の最後に「軒」が付くものの一部が想定できる。また、A-SB001など南北7尺間で5間、東西方向に3間以上の建物で、さらに西側に石の礎盤を欠く柱穴列があり、庇を想定する。この建物もこれに相当すると考える。

古庄屋遺跡

こうした建物は、近年大分県内の各所で類例を増やしており、県北の山国川の支流で、谷底平野を形成しながら流れる跡田川沿いに立地する古庄屋遺跡<sup>1)</sup>では、14世紀前葉に位置づけられる大型の川原石による礎盤建物が検出されている。その規模は、梁行3間で6.2m、桁行6間で12.8mを測り、四周の側柱列から1.1m離れた周囲に庇が廻る。報告では谷間の有力支配層の居館と理解している。

上城遺跡

また、久住山麓の高原地域に立地する上城遺跡<sup>2)</sup>は掘で囲まれた中に39棟の掘立柱建物が検出され、その内、8棟が川原石による礎盤建物であり、規模も桁行が4～5間と10間のものがある。報告では、この遺跡をⅠ～Ⅲ期に分け、13世紀前半から14世紀後半まで存続すると考えている。8棟の礎盤建物は、Ⅱ・Ⅲ期に多く、14世紀代と想定されるが、この地域を支配した有力者の居館と想定できる。

大友氏館跡  
12次調査

さらに、府内町跡20次調査区の北西約200mの位置で調査した、大友氏館跡12次調査<sup>3)</sup>では、万寿寺と同じ間尺である、7尺を1間とする15世紀前葉の企画性の強い大規模な川原石による礎盤建物が、検出されている。大友館はこの時期以後、府内(府中)の中でも特別な場所となり、継続的に土地の嵩上げが行われ、重要遺構が構築されて、最終的には16世紀後葉を描いたと言われる「府内古図」の「大友館」となる。

このように、14世紀から15世紀前葉にかけての豊前・豊後では、礎石建物と掘立柱建物の中間形態とも言える柱穴内に川原石を据え、礎盤とする建物が出現する。こうした建物は、寺院内では瓦葺きの礎石建物に次ぐ、位置を占めていたと考えることが出来、建物名称の最後に「寮」や「軒」・「倉」の付く建物に採用されていた可能性がある。寺院外では、地域の拠点的な場所の有力者の居館や守護所的な場所に採用されている可能性が強い。

次に、府内町跡で検出された14世紀代の区画性の強い溝についてであるが、調査区を南北に延びるB-SD003と東側に約9m離れて同じ方向に延びるB-SD004、そしてB-SD003が北端でT字状につながる東西方向のA-SD1501、その北側に5m離れてほぼ並行するA-SD1505がある。中でもB-SD003は断面が逆台形で規格性が強く、方位はN-2°-Eである。この溝は境内でも西側にあり、出土遺物から14世紀中葉には機能していたことが推測出来る。しかし、存続期間は短く、15世紀代には埋没している。万寿寺の西側境であることを証明するのは困難である。

ただ、何らかの区画施設であった可能性は高く、約60m延びる長さは、掘削された時期から、万寿寺の造営期の主要伽藍である総門-山門-仏殿-法堂-方丈の方向と同じ可能性はある。今後の寺域内の調査の経緯を見守りたい。

### 3. 16世紀の万寿寺西北隅

万寿寺西北隅にあたる府内町跡20次調査で、検出された遺構や遺物で、もう一時期ピークを示すのが16世紀後半である。この時期のこの場所は、「府内古図」や古文書に記述されている。「府内古図」では、万寿寺の西側は第2南北街路であり、北側は東西方向の街路が描かれ、その北側に堀之

(1)大分県教育委員会「古庄屋遺跡」大分県文化財調査報告書 第141輯 2002年

(2)久住町教育委員会「上城遺跡」2002年

(3)大分市教育委員会「大友氏館跡第12次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol.14 2002年度』2003年

## 第2節 考古学から見た万寿寺跡の西北隅

口町の名称が見られる。すなわち、南側に描かれている瓦葺きの白壁の築地が四周を廻っているとすれば、白壁の築地塀と堀之口町の町屋は万寿寺北側街路を挟み対峙している。

また、万寿寺西側については、天正10年(1582)に大友義統が柴田筑前入道(柴田礼能)に発給した「一、万寿寺築地之内并西之屋敷両所、令所望候之事」の文書がある。このことから、万寿寺の「築地之内」や「西之屋敷」と呼ばれる場所が存在していたことがわかる。

北側は地表面の観察でも表れているように、発掘調査以前から東西方向の堀が予測された。発掘調査の結果は、第4章で詳細を報告したとおりであるが、この場所からは、規模の大小や形態に差はあるが、14世紀前葉から16世紀後葉に至るまで、東西方向の幾筋もの堀や溝が検出されている。このことは、万寿寺の北境の場所として、永年にわたり認識されていたことを示している。

そして、最大規模の堀を掘削するのが16世紀である。まず、16世紀第2四半期頃に万寿寺の北側に大規模な区画性の強い堀が掘られている。その規模は、後にさらに大規模な堀が掘られるため、不明であるが、深さ2.5m底の一部から内面にロクロ目を残す在地系土師器と京都系土師器1期が相伴状態で出土しており、地表面での幅も5m以上は想像できる。

その後、北側の堀は再度掘削される。その時期は堀の中からの出土遺物で、1570年代と想定されている。その規模は、幅が6.3mで、深さは2.5mである。この堀に沿った万寿寺側はA区の調査で、遺構が希薄で、掘削をあまり受けていない部分が幅5mの範囲に認められる。その南側で検出される遺構も堀に沿って東西に細長い遺構であり、南側から続く区画性強いA-SD1506(B-SD064)の溝も堀の南側で終わる。このように、堀の万寿寺境内側は築地等の遮蔽施設の存在が予測される。しかし、この堀もすぐに埋め立てられ、1580年代には東西方向の道路として機能し、「府内古図」に描かれる状況になったものと考えられる。

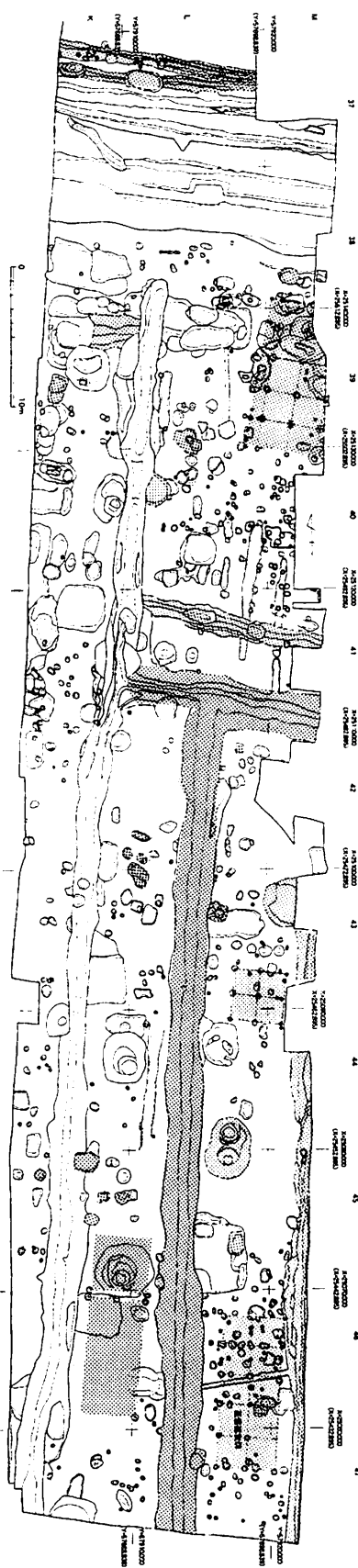
一方、「万寿寺築地之内并西之屋敷両所」も北側と、ほぼ同じ経過をたどる。平成15年の発掘調査では、万寿寺西側にも北側と同じ規模の堀が廻ることが確認されている。すなわち、1580年代にはその堀もすでに埋め立てられ、万寿寺の西側は町屋化し、万寿寺の築地の内も大友家家臣の私的所有地となっている。

府内町跡20次調査で得られた結果は、そのことを裏付けるもので、幅約20m長さ105mの調査区内で、16世紀後半の遺構が検出されたのは西半分である。しかも、検出された遺構は、廃棄物を処理するために掘られた土坑や井戸など、町屋の裏手の状況を示す。そして、井戸は一定間隔で、掘削されており、万寿寺西之屋敷が計画的に建設されていることが想像できる。こうした、町屋の裏手状況は、万寿寺の北側境の堀近くまで認められ、「万寿寺西之屋敷」の範囲を知ることができる。

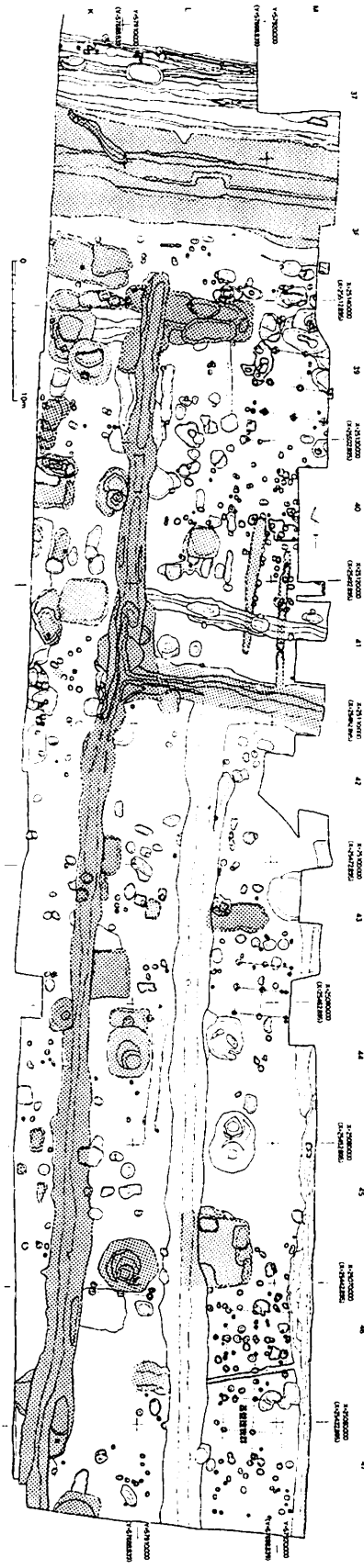
島津氏の豊後  
侵攻

この「万寿寺西之屋敷」は天正14年(1586)の島津氏の豊後侵攻により焼失するが、その後復興している可能性が強く、調査区の内から1590年代に比定されている遺物やそれを含むB-SK016・B-SK096などが検出されている。その一方、万寿寺は完全にその機能を失う。文禄2年(1593)に大友氏が除国されたこともあり、すぐには再建することなく、現在の万寿寺が姿を現すのは、寛永8年(1631)のことであった。

第6章については、故加藤知弘(大分大学名誉教授)と小野貴文(大分航空トラベル)の両氏から多くのお教えを受けた。



府内町跡20次調査区  
14世紀～15世紀前葉主要遺構



府内町跡20次調査区  
16世紀後葉～末葉主要遺跡

第6-1図 府内町跡20次調査区主要遺構変遷図

# 遺物觀察表

## 遺物観察表 1

## 府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)①

挿図No.	器種		生産地	法尺(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第2-4図1	陶器	德利	備前	—	5.6	—	A-SD1501	上層	
第2-4図2	在地系土師器	坏	在地	—	—	2.9	A-SD1501	上層	
第2-4図3	在地系土師器	坏	在地	—	4.9	—	A-SD1501	上層	
第2-4図4	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	—	A-SD1501	上層	
第2-4図5	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	A-SD1501	上層	
第2-4図6	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.5	A-SD1501	上層	
第2-4図7	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SD1501	上層	
第2-4図8	瓦質土器	土鍋	国内	23.0	—	—	A-SD1501	上層	
第2-4図9	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SD1501	上層	
第2-4図10	瓦質土器	鉢	国内	34.8	—	—	A-SD1501	上層	
第2-4図11	瓦質土器	鉢	国内	—	22.4	—	A-SD1501	上層	
第2-4図12	弥生土器	瓿形土器	在地	—	7.0	—	A-SD1501	上層	
第2-5図15	在地系土師器	皿	在地	8.8	7.6	1.4	A-SD1501	下層	
第2-5図16	在地系土師器	皿	在地	8.6	7.4	1.2	A-SD1501	下層	
第2-5図17	在地系土師器	皿	在地	8.8	7.6	1.3	A-SD1501	下層	
第2-5図18	在地系土師器	坏	在地	—	—	3.4	A-SD1501	下層	
第2-5図19	在地系土師器	坏	在地	11.6	7.6	3.1	A-SD1501	下層	
第2-5図20	在地系土師器	坏	在地	11.2	8.8	3.0	A-SD1501	下層	
第2-5図21	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.8	3.4	A-SD1501	下層	
第2-5図22	在地系土師器	坏	在地	11.8	8.4	2.9	A-SD1501	下層	
第2-5図23	在地系土師器	坏	在地	12.4	9.6	2.9	A-SD1501	下層	
第2-5図24	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.8	2.7	A-SD1501	下層	
第2-5図25	在地系土師器	坏	在地	13.4	8.1	3.2	A-SD1501	下層	
第2-5図26	在地系土師器	坏	在地	—	8.2	—	A-SD1501	下層	
第2-5図27	在地系土師器	坏	在地	—	9.6	—	A-SD1501	下層	
第2-5図28	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SD1501	下層	
第2-5図29	土師質土器	土鍋	国内	—	—	—	A-SD1501	下層	
第2-5図30	須恵質土器	鉢	東播系	—	8.8	—	A-SD1501	下層	
第2-5図31	須恵質土器	鉢	東播系	—	11.4	—	A-SD1501	下層	
第2-5図32	在地系土師器	燭台	在地	—	—	—	A-SD1501	32・33・34は同一個体	
第2-5図33	在地系土師器	燭台	在地	—	—	—	A-SD1501	下層	
第2-5図34	在地系土師器	燭台	在地	—	—	—	A-SD1501	下層	
第2-6図39	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	A-SD1501		
第2-6図40	白磁	合子	中国	7.0	—	—	A-SD1501		
第2-6図41	白磁	小壺	中国	3.1	—	—	A-SD1501		
第2-6図42	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	11.6	—	—	A-SD1501		
第2-6図43	青花	碗	景德鎮窯	11.8	—	—	A-SD1501		
第2-6図44	粉青沙器?		朝鮮王朝	—	—	—	A-SD1501		
第2-6図45	褐釉陶器	壺	中国	—	6.1	—	A-SD1501		
第2-6図46	緑釉	鉢	磁甕窯	—	—	—	A-SD1501		
第2-6図47	華南三彩	水滴	中国	—	—	—	A-SD1501		
第2-6図48	陶器	鉢	備前	—	—	—	A-SD1501		
第2-6図49	陶器	德利	備前	—	5.6	—	A-SD1501		
第2-6図50	陶器	搦鉢	備前	—	32.1	—	A-SD1501		
第2-6図51	陶器	搦鉢	備前	—	26.8	—	A-SD1501		
第2-6図52	陶器	德利	備前	—	9.2	—	A-SD1501	底面に×印のヘラ記号	
第2-6図53	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1501		
第2-6図54	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1501		
第2-6図55	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1501		
第2-7図56	在地系土師器	皿	在地	7.9	6.4	1.2	A-SD1501	底部にスタレ状圧痕	
第2-7図57	在地系土師器	坏	在地	11.4	—	—	A-SD1501		
第2-7図58	在地系土師器	坏	在地	11.1	8.6	3.3	A-SD1501		
第2-7図59	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.8	3.4	A-SD1501		
第2-7図60	在地系土師器	坏	在地	13.2	9.0	3.6	A-SD1501		
第2-7図61	在地系土師器	坏	在地	10.9	6.2	2.9	A-SD1501		
第2-7図62	在地系土師器	坏	在地	11.5	7.8	3.2	A-SD1501	板目圧痕	
第2-7図63	在地系土師器	坏	在地	14.0	8.8	3.1	A-SD1501		
第2-7図64	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.4	3.3	A-SD1501		
第2-7図65	在地系土師器	坏	在地	12.8	9.0	3.1	A-SD1501	板目圧痕	
第2-7図66	在地系土師器	坏	在地	—	7.3	—	A-SD1501		
第2-7図67	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SD1501		
第2-7図68	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SD1501		
第2-7図69	京都系土師器	皿	在地	8.2	—	2.2	A-SD1501		
第2-7図70	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	1.9	A-SD1501		
第2-7図71	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	—	A-SD1501		
第2-7図72	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.4	A-SD1501		
第2-7図73	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	—	A-SD1501		
第2-7図74	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.1	A-SD1501		
第2-7図75	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.3	A-SD1501		
第2-7図76	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.2	A-SD1501		
第2-7図77	京都系土師器	皿	在地	14.6	—	2.4	A-SD1501		
第2-7図78	京都系土師器	坏	在地	11.1	—	3.0	A-SD1501		
第2-7図79	京都系土師器	皿	在地	11.9	—	2.5	A-SD1501		
第2-7図80	土師質土器	瓿	在地	38.8	—	—	A-SD1501		
第2-8図81	須恵質土器	鉢	東播系	35.4	—	—	A-SD1501		

遺物観察表 2

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)②

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第2-8図82	瓦質土器	搦鉢	防長系	—	—	—	A-SD1501		
第2-8図83	須恵質土器	鉢	東播系	27.6	—	—	A-SD1501		
第2-8図84	須恵質土器	鉢	東播系	—	7.8	—	A-SD1501		
第2-8図85	須恵質土器	鉢	東播系	—	8.1	—	A-SD1501		
第2-8図86	陶器	甕	備前	—	18.9	—	A-SD1501		
第2-8図87	土師器	甕	在地	—	—	—	A-SD1501		
第2-8図88	土師器	甕	在地	—	—	—	A-SD1501	甕の把手	
第2-8図89	須恵器	壺	在地	—	8.9	—	A-SD1501		
第2-8図90	弥生土器	高坏	在地	—	—	—	A-SD1501		
第2-8図91	弥生土器	壺形土器	在地	—	6.0	—	A-SD1501		
第2-8図92	弥生土器	甕形土器	在地	—	6.8	—	A-SD1501		
第2-15図1	在地系土師器	皿	在地	7.8	5.9	1.6	A-SD1505	A-SK1024	
第2-15図2	在地系土師器	皿	在地	8.6	7.7	1.2	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図3	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.0	1.3	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図4	在地系土師器	皿	在地	7.0	6.0	1.0	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図5	在地系土師器	皿	在地	7.4	6.0	1.7	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図6	在地系土師器	皿	在地	8.1	6.6	1.2	A-SD1505		
第2-15図7	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.5	1.1	A-SD1505		
第2-15図8	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.5	1.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図9	在地系土師器	皿	在地	7.6	6.4	1.3	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図10	在地系土師器	皿	在地	7.6	6.3	1.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図11	在地系土師器	小型坏	在地	7.2	5.1	2.0	A-SD1505		
第2-15図12	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図13	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図14	在地系土師器	坏	在地	—	—	4.2	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図15	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図16	在地系土師器	坏	在地	—	—	3.9	A-SD1505		
第2-15図17	在地系土師器	坏	在地	10.5	7.8	3.6	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図18	在地系土師器	坏	在地	11.4	8.0	4.2	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図19	在地系土師器	坏	在地	11.1	7.0	4.2	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図20	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.2	3.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図21	在地系土師器	坏	在地	13.2	8.4	3.7	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図22	在地系土師器	坏	在地	13.2	9.0	3.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図23	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.5	4.1	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図24	在地系土師器	坏	在地	12.3	9.0	4.1	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図25	在地系土師器	坏	在地	12.3	8.5	3.6	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図26	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.0	3.9	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図27	在地系土師器	坏	在地	11.1	7.4	4.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図28	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.6	4.3	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15図29	在地系土師器	坏	在地	13.2	9.0	3.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図30	在地系土師器	坏	在地	12	9.4	3.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図31	在地系土師器	坏	在地	10.8	8.7	3.6	A-SD1505		
第2-16図32	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.8	3.4	A-SD1505		
第2-16図33	在地系土師器	坏	在地	11.2	7.8	2.8	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図34	在地系土師器	坏	在地	13.4	9.8	3.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図35	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.2	3.6	A-SD1505		
第2-16図36	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.6	4.1	A-SD1505		
第2-16図37	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.2	3.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図38	在地系土師器	坏	在地	12.3	8.7	3.1	A-SD1505		
第2-16図39	在地系土師器	坏	在地	11.4	6.8	3.6	A-SD1505		
第2-16図40	在地系土師器	坏	在地	13.0	8.1	3.6	A-SD1505	A-SK1024	
第2-16図41	在地系土師器	坏	在地	12.0	7.8	2.9	A-SD1505	A-SK1024	
第2-16図42	在地系土師器	坏	在地	12.2	7.8	3.6	A-SD1505		
第2-16図43	在地系土師器	坏	在地	13.2	9.8	3.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図44	在地系土師器	坏	在地	12.3	8.4	3.7	A-SD1505	A-SK1024	
第2-16図45	在地系土師器	坏	在地	12.0	7.7	3.3	A-SD1505	A-SK1024	
第2-16図46	在地系土師器	坏	在地	—	8.0	—	A-SD1505		
第2-16図47	在地系土師器	坏	在地	—	10.6	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図48	在地系土師器	坏	在地	—	8.5	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図49	在地系土師器	坏	在地	—	9.0	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図50	在地系土師器	坏	在地	—	7.5	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-16図51	在地系土師器	坏	在地	—	6.9	—	A-SD1505		
第2-17図52	瓦質土器	碗	在地	—	5.0	—	A-SD1505		
第2-17図53	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SD1505		
第2-17図54	須恵質土器	鉢	東播系	21.1	8.7	8.5	A-SD1505	A-SK1505 銅銭3枚出土	10
第2-17図55	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SD1505		
第2-17図56	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1505		
第2-17図57	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1505		
第2-17図58	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1505		
第2-17図59	土師質土器	甕	在地	22.2	—	—	A-SD1505		
第2-17図60	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	—	A-SD1505		11
第2-17図61	瓦質土器	鉢	国内	28.5	—	—	A-SD1505		
第2-17図63	土師質土器	埴塙	在地	—	—	—	A-SD1505		
第2-17図64	須恵器	坏	在地	—	10.6	—	A-SD1505	古代	
第2-17図65	弥生土器	高坏	在地	—	—	—	A-SD1505		

遺物観察表 3

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)③

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第2-20図1	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	—	A-SD1506	上層	
第2-20図2	京都系土師器	皿	在地	9.6	—	1.8	A-SD1506	上層	
第2-20図3	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	1.8	A-SD1506	上層	
第2-20図4	京都系土師器	皿	在地	10.2	—	—	A-SD1506	上層	
第2-20図5	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	—	A-SD1506	上層	
第2-20図6	瓦質土器	土鍋	国内	—	—	—	A-SD1506	上層	
第2-20図7	瓦質土器	土鍋	国内	31.9	—	—	A-SD1506	上層	
第2-20図8	瓦質土器	甗	国内	—	—	—	A-SD1506	上層	
第2-20図9	土師質土器	燭台	在地	—	9.4	—	A-SD1506	上層	
第2-20図13	在地系土師器	坏	在地	7.5	5.8	1.0	A-SD1506	中層	
第2-20図14	在地系土師器	坏	在地	—	8.4	—	A-SD1506	中層	
第2-20図15	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.2	2.4	A-SD1506	中層	
第2-20図16	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	A-SD1506	中層	
第2-20図17	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.3	A-SD1506	中層	
第2-20図18	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.3	A-SD1506	中層	
第2-20図19	京都系土師器	皿	在地	14.4	—	—	A-SD1506	中層	
第2-20図20	瓦質土器	土鍋	国内	—	—	—	A-SD1506	中層	
第2-20図22	須恵質土器	鉢	東播系	23.9	—	—	A-SD1506	中層	
第2-20図23	陶器	甗	常滑	—	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図24	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.2	1.3	A-SD1506	下層	
第2-20図25	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図26	土師質土器	皿	吉備系	—	4.0	—	A-SD1506	下層	
第2-20図27	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図28	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図29	須恵質土器	鉢	東播系	25.6	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図30	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図31	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図32	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図33	瓦質土器	鉢	国内	33.9	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図34	陶器	坏	瀬戸美濃	11.8	—	—	A-SD1506	下層	
第2-20図35	土師器	坏	在地	—	—	—	A-SD1506	下層	
第2-21図36	青花	皿	漳州窯	—	—	—	A-SD1506		
第2-21図37	青花	皿	景德鎮窯	—	—	—	A-SD1506		
第2-21図38	青花	碗	漳州窯	14.0	5.0	6.1	A-SD1506		
第2-21図39	青花	皿	景德鎮窯	—	11.2	—	A-SD1506		
第2-21図40	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	—	4.3	—	A-SD1506		
第2-21図41	青花	皿	景德鎮窯	—	—	—	A-SD1506		
第2-21図42	青磁	燭台	龍泉窯	—	—	—	A-SD1506	動物形	
第2-21図43	陶器	大甗	備前	—	—	—	A-SD1506		
第2-21図44	陶器	長頸壺	備前	—	5.4	—	A-SD1506		
第2-21図45	陶器	注口器	備前	—	4.8	—	A-SD1506		
第2-21図46	陶器	播鉢	備前	26.8	—	—	A-SD1506		
第2-21図47	陶器	播鉢	備前	—	15.4	—	A-SD1506		
第2-21図48	陶器	播鉢	備前	—	14.2	—	A-SD1506		
第2-22図49	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.0	1.0	A-SD1506		
第2-22図50	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SD1506		
第2-22図51	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SD1506		
第2-22図52	在地系土師器	坏	在地	—	—	2.9	A-SD1506		
第2-22図53	在地系土師器	坏	在地	—	7.1	—	A-SD1506		
第2-22図54	在地系土師器	坏	在地	11.2	8.4	2.7	A-SD1506		
第2-22図55	在地系土師器	坏	在地	12.4	9.0	2.6	A-SD1506		
第2-22図56	在地系土師器	坏	在地	—	9.8	—	A-SD1506		
第2-22図57	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.6	2.7	A-SD1506		
第2-22図58	在地系土師器	坏	在地	11.4	9.6	3.0	A-SD1506		
第2-22図59	在地系土師器	坏	在地	11.8	6.2	3.0	A-SD1506		
第2-22図60	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.2	A-SD1506		
第2-22図61	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	A-SD1506		
第2-22図62	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.2	A-SD1506		
第2-22図63	京都系土師器	皿	在地	12.1	—	2.5	A-SD1506		
第2-22図64	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.5	A-SD1506		
第2-22図65	京都系土師器	坏	在地	11.4	—	2.9	A-SD1506		
第2-22図66	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.7	A-SD1506		
第2-22図67	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SD1506		
第2-22図68	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1506		
第2-22図69	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1506		
第2-22図70	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1506		
第2-22図71	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1506		
第2-22図72	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SD1506		
第2-22図73	土師質土器	土鍋	在地	25.1	—	—	A-SD1506		
第2-23図74	陶器	甗	備前	42.2	—	—	A-SD1506		
第2-23図75	瓦質土器	蓋	国内	14.2	—	—	A-SD1506		
第2-23図76	瓦質土器	鉢	国内	24.9	—	—	A-SD1506		
第2-23図77	瓦質土器	羽釜	国内	—	—	—	A-SD1506	胴部最大径18.8cm・スタンプ文	10
第2-23図78	瓦質土器	鉢	国内	30.6	—	—	A-SD1506		
第2-23図79	瓦質土器	鉢	国内	36.1	—	—	A-SD1506		



遺物観察表 4

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)④

挿図No.	器種		生産地	法量(単位:cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第2-23図80	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SD1506		
第2-23図81	須恵質土器	鉢	東播系	—	10.0	—	A-SD1506		
第2-24図82	瓦質土器	鉢	国内	43.5	—	—	A-SD1506		
第2-24図83	瓦質土器	鉢	国内	37.7	—	—	A-SD1506		
第2-24図84	瓦質土器	鉢	国内	—	33.0	—	A-SD1506		
第2-25図91	須恵質土器	甕	亀山系	44.8	—	—	A-SD1506	92と同一個体	11
第2-25図92	須恵質土器	甕	東播系	—	—	—	A-SD1506		
第2-30図1	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SP004	A-SB01の柱穴	
第2-30図2	在地系土師器	坏	在地	4.2	—	—	A-SP005	A-SB01の柱穴	
第2-30図3	在地系土師器	燭台	在地	—	—	—	A-SP006	A-SB01の柱穴	
第2-30図4	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SP019	A-SB01の柱穴	
第2-30図5	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SP019	A-SB01の柱穴	
第2-30図6	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.4	1.6	A-SP040	A-SB01の柱穴	
第2-30図7	在地系土師器	坏	在地	12.8	8.8	3.3	A-SP101	A-SB01の柱穴	
第2-31図1	在地系土師器	皿	在地	—	—	0.9	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図2	在地系土師器	皿	在地	—	—	0.9	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図3	在地系土師器	坏	在地	11.0	7.0	2.7	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図4	在地系土師器	坏	在地	—	—	2.4	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図5	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.0	1.3	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図6	在地系土師器	皿	在地	9.0	6.4	1.3	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図7	在地系土師器	皿	在地	8.3	7.1	1.6	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図8	在地系土師器	皿	在地	7.3	6.2	2.3	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図9	在地系土師器	坏	在地	11.4	—	—	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図10	在地系土師器	坏	在地	12.6	9.4	2.7	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図11	在地系土師器	坏	在地	12.7	8.5	3.4	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図12	在地系土師器	坏	在地	13.6	9.3	3.4	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図13	在地系土師器	坏	在地	—	9.0	—	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図14	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.2	3.2	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31図15	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-34図1	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.5	1.4	A-SK041		
第2-34図2	在地系土師器	皿	在地	7.4	6.2	1.6	A-SK041		
第2-34図3	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK041		
第2-34図4	瓦質土器	鉢	国内	36.0	—	—	A-SK041		
第2-34図5	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.0	A-SK042		
第2-34図6	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK069		
第2-34図7	瓦質土器	鉢	国内	33.4	—	—	A-SK069		
第2-34図8	瓦質土器	鉢	国内	29.4	—	—	A-SK040		
第2-36図1	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SK102		
第2-36図2	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SK102		
第2-38図1	在地系土師器	皿	在地	8.7	6.3	1.9	A-SK112		
第2-38図2	在地系土師器	坏	在地	—	—	2.6	A-SK113		
第2-38図3	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SK114		
第2-38図4	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK114		
第2-38図5	在地系土師器	坏	在地	13.2	—	—	A-SK114		
第2-38図6	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SK114		
第2-40図1	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	—	A-SK1010		
第2-40図2	在地系土師器	坏	在地	6.8	6.0	1.5	A-SK1010		
第2-40図3	在地系土師器	坏	在地	—	—	0.9	A-SK1010		
第2-40図4	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1010		
第2-40図5	陶器	壺	備前	—	—	—	A-SK1010		
第2-40図6	土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1010	古代	
第2-43図2	青磁	瓶	龍泉窯	—	—	—	A-SK1013		
第2-43図3	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	—	—	—	A-SK1013		
第2-43図4	陶器	擂鉢	備前	26.1	—	—	A-SK1013		
第2-43図5	陶器	擂鉢	備前	25.2	—	—	A-SK1013		
第2-43図6	陶器	擂鉢	備前	27.6	—	—	A-SK1013		
第2-43図7	在地系土師器	坏	在地	—	—	7.2	A-SK1013		
第2-43図8	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	—	A-SK1013		
第2-43図9	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	A-SK1013		
第2-43図10	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.7	A-SK1013		
第2-43図11	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.1	A-SK1013		
第2-43図12	京都系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1013		
第2-43図13	京都系土師器	坏	在地	11.6	—	—	A-SK1013		
第2-43図14	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SK1013		
第2-43図15	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SK1013	鈔付き	
第2-43図16	瓦質土器	鉢	国内	35.8	—	—	A-SK1013		
第2-45図1	青花	碗	景德鎮窯	7.4	—	—	A-SK1014		
第2-48図1	緑釉	鉢	磁窟窯	—	—	—	A-SK1017		
第2-48図2	陶器	皿	瀬戸美濃	10.0	5.6	1.0	A-SK1017		
第2-48図3	陶器	擂鉢	備前	31.9	—	—	A-SK1017		
第2-48図4	陶器	德利	備前	—	6.8	—	A-SK1017		11
第2-48図5	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SK1017		
第2-48図6	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.5	A-SK1017		
第2-48図7	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.4	A-SK1017		
第2-48図8	須恵器	坏	在地	—	—	—	A-SK1017	古代	

遺物観察表 5

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第2-50図1	陶器	鉢	備前	8.9	—	—	A-SK1018		
第2-50図2	陶器	甕	常滑	—	—	—	A-SK1018		
第2-50図3	在地系土師器	皿	在地	7.6	6.6	0.9	A-SK1018		
第2-50図4	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SK1018		
第2-53図1	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.1	A-SK1019		
第2-53図2	在地系土師器	皿	在地	8.8	6.6	1.6	A-SK1019		
第2-53図3	在地系土師器	坏	在地	—	—	3.2	A-SK1019		
第2-53図4	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1019		
第2-53図5	在地系土師器	坏	在地	11.4	—	3.3	A-SK1019		
第2-53図6	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.6	1.0	A-SK1019		
第2-53図7	土師質土師器	皿	在地	—	—	—	A-SK1019		
第2-53図8	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SK1019	口縁部にスス	
第2-53図9	瓦質土器	鉢	国内	21.0	—	—	A-SK1019		
第2-53図10	土師質土器	甕	在地	—	—	—	A-SK1019		
第2-53図11	瓦質土器	火鉢	国内	—	—	—	A-SK1019		
第2-55図1	陶器	大甕	備前	—	—	—	A-SK1023	ひねり「土」	
第2-55図2	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1023		
第2-55図3	土師質土器	甕	在地	—	—	—	A-SK1023	摘みが付く	
第2-55図4	瓦質土器	羽釜	国内	—	—	—	A-SK1023	胴部最大径22cm	
第2-58図1	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1030		
第2-58図2	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SK1030		
第2-58図3	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.1	A-SK1030	口縁部にスス	
第2-58図4	京都系土師器	皿	在地	13.8	—	—	A-SK1030		
第2-61図1	焼締陶器	壺	タイ	—	—	—	A-SK1039		10
第2-61図2	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SK1039		
第2-61図3	瓦質土器	鉢	国内	—	—	18.0	A-SK1039	3ヶ所に足が付く	
第2-63図1	在地系土師器	坏	在地	12.0	—	—	A-SK1042		
第2-63図2	在地系土師器	坏	在地	11.5	8.4	2.8	A-SK1042		
第2-63図3	在地系土師器	坏	在地	12.2	7.6	3.5	A-SK1042		
第2-63図4	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.2	3.2	A-SK1042		
第2-63図5	在地系土師器	坏	在地	12.7	7.8	3.4	A-SK1042		
第2-63図6	在地系土師器	坏	在地	12.7	7.8	3.1	A-SK1042		
第2-63図7	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SK1042		
第2-63図8	土師質土器	甕	在地	37.6	—	—	A-SK1042		
第2-65図1	青磁	碗	龍泉窯	13.0	—	—	A-SK1043		
第2-65図2	緑釉	碗	国内	—	7.5	—	A-SK1043	古代	
第2-65図3	白磁	碗	中国	—	7.0	—	A-SK1043		
第2-65図4	在地系土師器	坏	在地	10.4	7.8	1.7	A-SK1043		
第2-65図5	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.6	3.3	A-SK1043		
第2-65図6	瓦質土器	甕	国内	—	19.8	—	A-SK1043		
第2-65図8	弥生土器	甕形土器	—	—	6	—	A-SK1043		
第2-67図1	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1051		
第2-70図1	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1058		
第2-70図2	在地系土師器	燭台	在地	9.4	8.2	2.5	A-SK1058		
第2-70図3	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SK1058	三巴文のスタンプ	
第2-70図4	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1058		
第2-71図1	在地系土師器	坏	在地	12.0	—	—	A-SK1059		
第2-71図2	在地系土師器	燭台	在地	—	7.4	—	A-SK1059		
第2-73図	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SK1065		
第2-75図	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	7.4	3.4	3.2	A-SK1068		
第2-78図1	在地系土師器	坏	在地	14.2	11.4	4.3	A-SK1069		
第2-78図2	土師質土器	土鍋	在地	30.8	—	—	A-SK1069		
第2-80図	陶器	甕	常滑	—	—	—	A-SK1081		
第2-81図	在地系土師器	皿	在地	9.2	7.8	1.7	A-SK1082		
第2-85図1	在地系土師器	坏	在地	12.3	9.5	3.1	A-SK1083		
第2-85図2	在地系土師器	坏	在地	12.4	7.1	3.5	A-SK1083		
第2-87図1	青花	碗	景德鎮窯	8.1	—	—	A-SK1084		
第2-87図2	青磁	皿	龍泉窯	10.1	—	—	A-SK1084		
第2-87図3	褐釉陶器	壺	中国	3.8	—	—	A-SK1084	3・4は同一個体	
第2-87図4	褐釉陶器	壺	中国	—	9.0	—	A-SK1084	復元器高14.4cm	
第2-87図5	京都系土師器	皿	在地	9.4	2.3	—	A-SK1084		
第2-87図6	京都系土師器	皿	在地	12.6	3.4	—	A-SK1084		
第2-87図7	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SK1084	脚付きの角火鉢	
第2-89図1	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.2	3.3	A-SK1089		
第2-89図2	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.4	3.0	A-SK1089		
第2-90図1	在地系土師器	坏	在地	10.8	9.2	3.0	A-SK1091		
第2-90図2	在地系土師器	坏	在地	12.8	8.6	2.9	A-SK1091		
第2-92図	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	3.0	A-SK1092		
第2-95図1	青花	盃	景德鎮窯	—	—	—	A-SK1093	六角形の小盃	
第2-95図2	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.6	1.1	A-SK1093		
第2-95図3	在地系土師器	坏	在地	11.4	8.5	3.3	A-SK1093		
第2-97図1	須恵器	坏	在地	—	—	—	A-SK1094	古代	
第2-97図2	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SK1094		
第2-99図1	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	A-SK1096	鍋連弁	
第2-99図2	須恵器	甕	在地	—	—	—	A-SK1096		

遺物観察表 6

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑥

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第2-99図3	陶器	大甕	備前	—	—	—	A-SK1096		
第2-101図1	陶器	搦鉢	備前	24.6	—	—	A-SK1099		
第2-104図1	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	A-SK1100		
第2-104図2	陶器	壺	備前	—	—	—	A-SK1100		
第2-104図3	在地系土師器	坏	在地	10.8	—	—	A-SK1100		
第2-104図4	在地系土師器	坏	在地	11.2	8.4	3.6	A-SK1100		
第2-104図5	京都系土師器	皿	在地	8.2	—	2.0	A-SK1100		
第2-104図6	京都系土師器	皿	在地	10.2	—	2.0	A-SK1100		
第2-104図7	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SK1100		
第2-104図9	瓦質土器	鉢	国内	42.0	—	—	A-SK1100		
第2-104図10	土師器	高坏	在地	—	—	—	A-SK1100	古代	
第2-107図1	陶器	壺	備前	—	—	—	A-SK1101		
第2-107図2	在地系土師器	皿	在地	9.2	7.0	1.3	A-SK1101		
第2-107図3	京都系土師器	皿	在地	5.0	—	1.5	A-SK1101	焼き塩壺の蓋	
第2-107図4	在地系土師器	皿	在地	10.1	5.4	2.1	A-SK1101		
第2-107図5	瓦質土器		国内	34.6	—	—	A-SK1104		
第2-110図1	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	A-SK1104		
第2-110図2	陶器	搦鉢	備前	26.4	—	—	A-SK1104		
第2-110図3	在地系土師器	坏	在地	—	—	1.7	A-SK1104		
第2-110図4	在地系土師器	坏	在地	7.2	6.0	1.6	A-SK1104		
第2-110図5	在地系土師器	坏	在地	—	6.6	—	A-SK1101		
第2-110図6	在地系土師器	坏	在地	—	—	3.0	A-SK1104	内面にロクロ目	
第2-110図7	京都系土師器	皿	在地	5.2	—	2.0	A-SK1104		
第2-110図8	須恵質土器	鉢	東播系	—	9.0	—	A-SK1104		
第2-110図9	瓦質土器	火鉢	国内	—	—	—	A-SK1104		
第2-111図1	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SK1105		
第2-114図1	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1001		
第2-114図2	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1001		
第2-114図3	京都系土師器	坏	在地	9.0	—	2.6	A-SK1005		
第2-114図5	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SK1020		
第2-114図6	土師器	坏蓋	在地	12.4	—	—	A-SK1022		
第2-114図7	在地系土師器	坏	在地	—	9.4	—	A-SK1025		
第2-114図9	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.3	A-SK1041		
第2-114図10	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.6	1.3	A-SK1041		
第2-114図11	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SK1041		
第2-114図12	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SK1041		
第2-114図13	陶器	甕	備前	—	—	—	A-SK1044		
第2-114図14	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.7	A-SK1047		
第2-114図15	在地系土師器	坏	在地	11.4	7.4	3.3	A-SK1047		
第2-114図16	在地系土師器	坏	在地	13.6	9.0	3.9	A-SK1047		
第2-114図17	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SK1047		
第2-114図18	在地系土師器	坏	在地	—	9.6	—	A-SK1047		
第2-114図19	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SK1047		
第2-114図20	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SK1047		
第2-114図21	在地系土師器	坏	在地	—	—	2.8	A-SK1049		
第2-114図22	在地系土師器	坏	在地	11.0	8.6	3.4	A-SK1049		
第2-114図23	在地系土師器	坏	在地	11.8	8.6	3.1	A-SK1049		
第2-114図24	在地系土師器	坏	在地	—	6.0	—	A-SK1053		
第2-114図25	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1060		
第2-114図26	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.3	A-SK1061		
第2-114図27	土師器	坏蓋	在地	—	—	—	A-SK1062		
第2-114図28	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.5	A-SK1062		
第2-114図29	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.4	2.9	A-SK1063		
第2-114図30	在地系土師器	坏	在地	7.8	6.4	1.6	A-SK1064		
第2-114図31	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1066		
第2-114図32	瓦質土器	碗	国内	—	—	—	A-SK1071	内黒土器	
第2-114図33	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SK1071		
第2-116図1	陶器	大甕	備前	—	—	—	A-SE1045		
第2-116図2	在地系土師器	皿	在地	7.0	6.0	0.9	A-SE1045		
第2-116図3	在地系土師器	坏	在地	—	8.4	—	A-SE1045		
第2-116図4	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.4	3.9	A-SE1045		
第2-116図5	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SE1045		
第2-116図6	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.0	A-SE1045		
第2-116図7	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SE1045		
第2-116図8	陶器	大甕	備前	—	35.0	—	A-SE1045		
第2-116図11	陶器	搦鉢	備前	42.0	—	—	A-SE1045		
第2-116図12	陶器	掛花入れ	備前	6.0	—	—	A-SE1045	10	
第2-116図13	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	A-SE1045		
第2-116図14	陶器	大甕	備前	—	35.0	—	A-SE1045		
第2-117図15	在地系土師器	坏	在地	—	—	2.3	A-SE1045		
第2-117図16	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	A-SE1045		
第2-117図17	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SE1045		
第2-117図18	須恵質土器	甕	亀山系	44.4	—	—	A-SE1045		
第2-117図19	瓦質土器	火鉢	国内	44.0	—	—	A-SE1045	口縁部に雷文	
第2-117図20	須恵器	坏	在地	—	9.0	—	A-SE1045	古代	

遺物観察表 7

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑦

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第2-117図20	須恵器	坏	在地	—	9.0	—	A-SE1045	古代	
第2-117図21	須恵質土器	鉢	東播系	—	11.8	—	A-SE1045		
第2-120図1	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SP036		
第2-120図2	陶器	坏	瀬戸美濃	—	3.6	—	A-SP036		
第2-120図3	陶器	坏	瀬戸美濃	—	6.0	—	A-SP036		
第2-120図4	在地系土師器	坏	在地	—	9.2	—	A-SP036		
第2-120図5	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.2	4.1	A-SP036		
第2-120図6	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SP043		
第2-120図7	在地系土師器	坏	在地	—	6.4	—	A-SP043		
第2-120図9	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SP045		
第2-120図10	在地系土師器	坏	在地	—	7.2	—	A-SP077		
第2-120図11	弥生土器	甕形土器	在地	—	6.0	—	A-SP081		
第2-120図12	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SP083		
第2-120図13	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SP085		
第2-120図14	京都系土師器	坏	在地	10.4	—	3.1	A-SPI17		
第2-120図15	在地系土師器	坏	在地	11.0	9.0	3.3	A-SPI080		
第2-120図16	在地系土師器	皿	在地	7.4	6.8	1.1	A-SPI054		
第2-120図17	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.0	1.4	A-SPI054		
第2-121図1	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SP020		
第2-121図2	在地系土師器	坏	在地	—	7.0	—	A-SP048		
第2-121図3	在地系土師器	坏	在地	—	9.8	—	A-SP048		
第2-121図4	在地系土師器	坏	在地	—	—	3.2	A-SP056		
第2-121図5	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SP060		
第2-121図6	在地系土師器	坏	在地	—	—	3.3	A-SP064		
第2-121図7	在地系土師器	碗	在地	11.6	6.8	3.3	A-SP065		
第2-121図9	在地系土師器	坏	在地	13.2	—	—	A-SP073		
第2-121図10	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SP078		
第2-121図11	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.0	A-SP079		
第2-121図12	在地系土師器	坏	在地	—	6.5	—	A-SP086		
第2-121図13	在地系土師器	皿	在地	7.2	6.0	1.3	A-SP090		
第2-121図14	土師質土器	碗	吉備系	—	—	—	A-SP091		
第2-121図15	在地系土師器	坏	在地	—	6.0	—	A-SP091		
第2-121図16	土師質土器	碗	吉備系	—	4.0	—	A-SP091		
第2-121図18	在地系土師器	皿	在地	7.2	6.0	1.3	A-SPI07		
第2-121図19	瓦質土器	碗	国内	—	—	—	A-SPI08		
第2-121図20	在地系土師器	坏	在地	14.0	—	—	A-SP118		
第2-121図21	陶器	水屋甕	備前	24.1	—	—	A-SPI19		
第2-121図22	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SPI21		
第2-121図23	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SPI23		
第2-121図24	京都系土師器	坏	在地	10.4	—	2.7	A-SPI25		
第2-121図25	在地系土師器	坏	在地	—	8.0	—	A-SPI26		
第2-121図26	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SPI31		
第2-121図27	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	A-SPI31		
第2-121図28	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	A-SPI31		
第2-121図29	在地系土師器	皿	在地	—	—	0.9	A-SPI63		
第2-122図1	陶器	蓋	備前	10.6	—	—	A-SK1073		
第2-122図2	在地系土師器	皿	在地	9.0	7.8	1.3	A-SK1073		
第2-122図3	在地系土師器	坏	在地	11.6	—	—	A-SK1086		
第2-122図4	在地系土師器	坏	在地	12.8	—	—	A-SK1086		
第2-122図5	在地系土師器	坏	在地	12.8	—	—	A-SK1086		
第2-122図6	在地系土師器	坏	在地	13.5	—	—	A-SK1086		
第2-122図7	須恵質土器	鉢	東播系	27.0	—	—	A-SK1086		
第2-122図10	在地系土師器	皿	在地	7.6	5.3	1.3	A-SK1102		
第2-122図11	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.1	A-SK1103		
第2-122図12	京都系土師器	皿	在地	12.9	—	—	A-SK1502		
第2-122図14	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.9	A-SK1504		
第2-122図15	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	—	3.1	—	A-SK1606		
第2-123図1	青磁	皿	同安窯	—	—	—	L-40		
第2-123図2	白磁	皿	中国	11.0	5.8	3.3	L-39		
第2-123図3	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	K-41		
第2-123図4	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	K-41		
第2-123図5	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	包含屑		
第2-123図6	青磁	碗	龍泉窯	11.8	5.4	4.9	40区	鍋煎弁	
第2-123図7	青磁	碗	龍泉窯	11.4	4.3	5.7	K-41	双魚文	
第2-123図8	白磁	碗	中国	12.2	—	4.7	K-39	被熱している	
第2-123図9	白磁	皿	中国	6.6	4.0	1.5	39区		
第2-123図10	陶器	合子	瀬戸美濃	3.2	2.2	1.6	40区		
第2-123図11	白磁	皿	中国	10.0	4.3	2.5	40区		
第2-123図12	青磁	皿	龍泉窯	10.4	5.6	3.0	40区		
第2-123図13	青磁	皿	龍泉窯	—	—	—	披張区		
第2-123図14	褐釉陶器		中国	—	—	—	K-39		
第2-124図15	青花	碗	景德鎮窯	—	—	—	40区		
第2-124図16	青花	碗	景德鎮窯	—	—	—	K-40		
第2-124図17	青花	碗	景德鎮窯	—	—	—	K-41		
第2-124図18	青花	皿	景德鎮窯	13.2	6.6	3.1	L-38		

遺物観察表 8

府内町跡20次調査 A区出土遺物観察表（土器・陶磁器類）⑧

挿図No.	器 種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第2-124図19-1	青花	皿	景德鎮窯	—	—	—	K-40		
第2-124図19-2	青花	皿	景德鎮窯	—	16.9	—	L-40		
第2-124図20	青花	小盃	景德鎮窯	—	2.1	—	41区		
第2-124図21	青花	碗	漳州窯	—	4.2	—	K-40		
第2-124図22	白磁	皿	中国	11.6	—	—	K-41		
第2-124図23	白磁	小盃	中国	—	2.6	—	K-40		
第2-124図24	陶器	長頸壺	瀬戸美濃	—	—	—	K-39		
第2-124図25	陶器	梅瓶	瀬戸美濃	—	—	—	K-38		
第2-124図26	陶器	香炉	瀬戸美濃	—	3.4	—	40区	3ヶ所に脚	
第2-124図27	陶器	天目	瀬戸美濃	—	4.8	—	M-41		
第2-125図28	陶器	皿	瀬戸美濃	9.2	5.9	2.7	41区		
第2-125図29	陶器	皿	瀬戸美濃	11.4	6.4	1.9	K-41		
第2-125図30	陶器	皿	瀬戸美濃	11.0	7.0	2.3	40区		
第2-125図31	陶器	皿	瀬戸美濃	11.0	4.4	2.9	41区	折縁ソギ皿	
第2-125図32	陶器	皿	瀬戸美濃	11.3	—	—	41区	折縁ソギ皿	
第2-125図33	陶器	皿	瀬戸美濃	—	5.0	—	40区		
第2-125図34	陶器	皿	肥前系	10.6	3.2	2.8	41区		
第2-125図35	緑釉	鉢	磁甕窯	—	—	—	包含層		
第2-125図36	緑釉	鉢	磁甕窯	—	—	—	40区		
第2-125図37	緑釉	鉢	磁甕窯	—	—	—	41区		
第2-125図38	緑釉	鉢	磁甕窯	—	—	—	包含層		
第2-125図39	緑釉	鉢	磁甕窯	—	—	—	41区		
第2-125図40	緑釉	鉢	磁甕窯	—	—	—	41区		
第2-125図41	緑釉	鉢	磁甕窯	—	—	—	39		
第2-125図42	陶器	徳利	朝鮮王朝	—	10.0	—	KL-41	舟徳利	
第2-126図43	陶器	甕	常滑	—	—	—	M-38		
第2-126図44	陶器	甕	常滑	15.2	—	—	M-41		
第2-126図45	陶器	甕	常滑	17.6	—	—	41区		
第2-126図46	陶器	掛花入れ	備前	6.2	—	—	K-39	第2-116図12と同一個体	
第2-126図47	陶器	掛花入れ	備前	—	—	—	K-39	最大径8.2cm	
第2-126図48	陶器	鉢	備前	—	—	—	包含層		
第2-126図49	陶器	鉢	備前	—	—	—	39区		
第2-126図50	陶器	皿	備前	—	—	—	包含層		
第2-126図51	陶器	皿	備前	28.2	18.0	4.2	K-39		
第2-126図52	陶器	鉢	備前	14.8	8.8	4.9	41区		
第2-126図53	陶器	徳利	備前	3.0	—	—	K-40		
第2-126図54	陶器	徳利	備前	—	5.0	—	K-40	底部にヘラ記号	
第2-126図55	陶器	徳利	備前	—	7.0	—	K-39		
第2-126図56	陶器	徳利	備前	—	5.2	—	K-39		
第2-126図57	陶器	水屋甕	備前	17.4	—	—	包含層		
第2-126図58	陶器	擂鉢	備前	30.8	—	—	包含層		
第2-126図59	陶器	擂鉢	備前	—	10.4	—	包含層		
第2-126図60	陶器	大甕	備前	—	—	—	L-40		
第2-127図61	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.0	1.1	L-39		
第2-127図62	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.0	1.0	K-41		
第2-127図63	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.2	0.9	包含層		
第2-127図64	在地系土師器	皿	在地	9.0	8.0	1.3	39区		
第2-127図65	在地系土師器	皿	在地	9.2	8.2	1.0	M-41		
第2-127図66	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.6	1.6	40区		
第2-127図67	在地系土師器	皿	在地	8.5	7.2	1.1	L-38		
第2-127図68	在地系土師器	皿	在地	8.6	6.4	1.4	41区		
第2-127図69	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.2	1.1	K-39		
第2-127図70	在地系土師器	坏	在地	6.7	4.7	1.8	M-41		
第2-127図71	在地系土師器	坏	在地	13.0	8.4	2.8	40区		
第2-127図72	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.0	3.1	M-41		
第2-127図73	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.0	4.0	包含層		
第2-127図74	在地系土師器	坏	在地	11.2	7.0	3.7	41区		
第2-127図75	在地系土師器	坏	在地	13.0	10.0	3.0	M-41		
第2-127図76	在地系土師器	坏	在地	13.4	9.0	3.3	包含層		
第2-127図77	在地系土師器	坏	在地	11.6	8.2	3.7	包含層		
第2-127図78	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	K-41	内面にロクロ目	
第2-127図79	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39		
第2-127図80	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39		
第2-127図81	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39		
第2-127図82	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39		
第2-127図83	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39		
第2-127図84	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	包含層		
第2-127図85	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	L-38		
第2-127図86	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	—	K-40		
第2-127図87	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	40区		
第2-127図88	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.8	包含層		
第2-127図89	京都系土師器	皿	在地	9.6	—	2.1	K-39		
第2-127図90	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	L-40		
第2-127図91	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	2.1	L-39		
第2-127図92	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.8	K-39		

遺物観察表 9

## 府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑨

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第2-127図93	京都系土師器	皿	在地	9.1	—	—	K-39		
第2-127図94	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.7	40区		
第2-127図95	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	—	包含層		
第2-127図96	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	1.6	41区		
第2-127図97	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	—	41区		
第2-127図98	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	2.1	L-41		
第2-127図99	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	1.9	K-39		
第2-127図100	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.2	K-39		
第2-127図101	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	2.1	K-40		
第2-127図102	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	2.1	L-38		
第2-127図103	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	—	K-39		
第2-127図104	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	—	40区		
第2-127図105	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.8	L-39		
第2-128図106	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	—	40区		
第2-128図107	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.5	L-39		
第2-128図108	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	—	包含層		
第2-128図109	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.2	K-39		
第2-128図110	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.0	40区		
第2-128図111	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	L-38		
第2-128図112	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	—	L-39		
第2-128図113	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	—	K-39		
第2-128図114	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	—	L-41		
第2-128図115	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	2.4	41区		
第2-128図116	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	2.3	40区		
第2-128図117	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	1.9	K-40		
第2-128図118	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.1	41区		
第2-128図119	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.1	K-39		
第2-128図120	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	1.9	K-40		
第2-128図121	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	—	41区		
第2-128図122	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	2.1	41		
第2-128図123	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.3	40区		
第2-128図124	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.5	K-40		
第2-128図125	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.2	41区		
第2-128図126	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.4	K-41		
第2-128図127	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.3	K-40		
第2-128図128	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.4	K-40		
第2-128図129	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	—	41区		
第2-128図130	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	2.2	K-40		
第2-128図131	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	2.0	L-38		
第2-128図132	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	—	L-41		
第2-128図133	京都系土師器	皿	在地	13.4	—	2.4	L-38		
第2-128図134	京都系土師器	坏	在地	11.8	—	2.5	K-40		
第2-128図135	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	1.9	K-40		
第2-128図136	京都系土師器	皿	在地	16.4	—	1.9	L-38		
第2-128図137	京都系土師器	坏	在地	—	—	—	39区		
第2-128図138	京都系土師器	坏	在地	10.0	—	2.7	39区		
第2-128図139	京都系土師器	坏	在地	11.2	—	3.0	L-39		
第2-128図140	京都系土師器	坏	在地	10.0	—	3.2	K-40		
第2-128図141	京都系土師器	坏	在地	11.2	—	—	K-40		
第2-128図142	京都系土師器	坏	在地	12.4	—	3.0	L-39		
第2-128図143	京都系土師器	坏	在地	11.8	—	2.9	K-41		
第2-128図144	京都系土師器	耳皿	在地	—	—	—	L-39		
第2-128図145	京都系土師器	焼塩壺	在地	—	—	—	41区	頸部径5.0cm	
第2-128図147	土師質土器	蓋	在地	8.2	—	3.1	41区		
第2-129図148	須恵質土器	甕	亀山系	36.8	—	—	L-40		11
第2-129図149	須恵質土器	甕	不明	—	—	—	包含層		
第2-129図150	瓦質土器	土鍋	在地	—	—	—	L-41		
第2-129図151	瓦質土器	土鍋	在地	21.4	—	—	41区		
第2-129図152	土師質土器	土鍋	在地	16.4	—	—	M-41		
第2-129図153	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	M-41		
第2-129図154	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	M-39		
第2-129図155	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	40区		
第2-129図156	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	40区		
第2-129図157	土師質土器	土鍋	在地	18.4	—	—	L-38		
第2-129図158	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	K-39		
第2-129図159	土師質土器	土鍋	在地	23.2	—	—	41区		
第2-129図160	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	40区		
第2-129図161	土師質土器	土鍋	在地	24.4	—	—	40区		
第2-129図162	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	KL-41		
第2-129図163	土師質土器	土鍋	在地	32.0	—	—	N-38		
第2-130図164	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	包含層		
第2-130図165	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	40区		
第2-130図166	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	40区		
第2-130図167	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	L-39		
第2-130図168	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	K-39		

遺物観察表10

府内町跡20次調査 A区出土遺物観察表（土器・陶磁器類）⑩

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第2-130図169	瓦質土器	鉢	国内	-	-	-	M-41		
第2-130図170	瓦質土器	壺	国内	12.0	-	-	40区	170~171同一個体	10
第2-130図171	瓦質土器	壺	国内	-	-	-	40区	スタンプ文	10
第2-130図172	瓦質土器	壺	国内	-	-	-	K-39	スタンプ文	10
第2-130図173	瓦質土器	鉢	国内	-	-	21.5	K-38		
第2-130図174	瓦質土器	鉢	国内	20.8	-	-	40区		
第2-130図175	瓦質土器	鉢	国内	24.1	-	-	L-40		
第2-130図176	瓦質土器	鉢	国内	-	-	-	K-39		
第2-130図177	瓦質土器	鉢	国内	-	-	-	K-39		
第2-130図178	瓦質土器	鉢	国内	-	-	-	K-41		
第2-130図179	瓦質土器	鉢	国内	-	-	-	K-39		
第2-130図180	瓦質土器	鉢	国内	33.6	-	-	41区		
第2-130図181	瓦質土器	鉢	国内	34.2	-	-	K-39		
第2-130図182	瓦質土器	鉢	国内	-	-	32.0	40区		
第2-130図183	瓦質土器	鉢	国内	-	-	-	KL-41		
第2-130図184	瓦質土器	鉢	国内	-	-	-	39区	火鉢の脚	
第2-131図194	須恵器	坏	在地	-	8.0	-	41区	古代	
第2-131図195	土師器	坏	在地	-	5.0	-	41区	古代	
第2-131図196	土師器	坏	在地	-	7.4	-	39区	古代	

遺物観察表11

府内町跡20次調査 A区出土遺物観察表（土製品・石製品）⑪

挿図No.	器 種	材質	部位	法量(単位cm)			重量 g	遺構名	備 考	図版 No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-4図13	土錘	土製		2.5	1.5	-	5.0	A-SD1501		
第2-4図14	土錘	土製		2.6	1.0	-	2.5	A-SD1501		
第2-5図35	ファイゴ	土製		-	-	-	-	A-SD1501	中空部系2.5cm	
第2-5図36	土器片加工品	土器		-	-	1.6	-	A-SD1501		
第2-5図37	土錘	土製		4.7	1.2	-	7.2	A-SD1501		
第2-5図38	砥石	石製		4.7	2.0	2.0	-	A-SD1501		
第2-17図62	石鍋	滑石		器高13.8	口径22	底径9.1	-	A-SD1505		11
第2-18図66	砥石	石製		5.7	4.9	3.0	-	A-SD1505		
第2-20図10	脚	土製	土鍋?	4.4	1.5	-	-	A-SD1506	上層	
第2-20図11	砥石	石製		3.4	4.8	0.9	-	A-SD1506	上層	
第2-20図12	砥石	石製		7.8	5.7	1.1	-	A-SD1506	上層	
第2-20図21	石鍋	滑石		-	-	-	-	A-SD1506	中層	
第2-24図85	石鍋	滑石		-	口径18	-	-	A-SD1506		
第2-24図86	石鍋	滑石		-	口径33	-	-	A-SD1506		
第2-24図88	土錘	土製		5.5	0.9	-	5.1	A-SD1506		
第2-24図89	土錘	土製		3.2	1.1	-	3.0	A-SD1506		
第2-24図90	土玉	土製		1.7	1.7	-	-	A-SD1506	貫通しない孔	
第2-31図16	脚	土製	土鍋?	5.7	1.7	-	-	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-36図3	土錘	土製		5.5	0.9	-	4.1	A-SK102		
第2-50図5	ファイゴ	土製		-	-	-	-	A-SK1018		
第2-50図6	土玉	土製		1.5	1.7	-	3.6	A-SK1018	貫通しない孔	12
第2-50図7	土玉	土製		1.5	1.4	-	2.7	A-SK1018	貫通しない孔	12
第2-53図12	石臼	石製		-	-	-	-	A-SK1019		
第2-58図5	土錘	土製		4.0	1.2	-	6.3	A-SK1030		
第2-65図7	土錘	土製		3.8	1.1	-	3.5	A-SK1043		
第2-70図5	切石	凝灰岩		-	-	-	-	A-SK1058	石塔?	
第2-97図3	土器片加工品	土器		5.8	-	1.5	-	A-SK1094		
第2-101図2	硯	石製		3.6	3.4	0.9	16.1	A-SK1099		
第2-101図3	砥石	石製		13.2	5.4	5.1	496.1	A-SK1099		
第2-110図10	土錘	土製		3.1	0.9	-	1.9	A-SK1104		
第2-114図4	砥石	石製		3.8	3.0	0.9	9.8	A-SK1009		
第2-114図8	土器片加工品	土器		5.5	-	-	-	A-SK1037	京都系土師器を利用	
第2-116図9	土錘	土製		3.7	2.0	-	12.5	A-SE1045		
第2-116図10	砥石	石製		4.5	3.7	1.3	35.2	A-SE1045		
第2-120図8	土錘	土製		4.2	1.1	-	5.4	A-SP043		
第2-121図8	土錘	土製		5.3	1.0	-	5.4	A-SP065		
第2-121図17	土錘	土製		4.5	1.2	-	4.7	A-SP091		
第2-122図8	土錘	土製		3.3	1.8	-	6.8	A-SK1095		
第2-122図9	土鍋の脚	土製		5.8	2.2	-	-	A-SK1098		
第2-122図13	土錘	土製		5.8	2.0	-	18.3	A-SK1502		
第2-128図146	土鈴	土製		-	-	-	-	K-39	最大径3.5cm	
第2-131図185	石鍋	滑石	口縁部	-	-	-	-	40区	口径29.6cm	
第2-131図186	石鍋	滑石	口縁部	-	-	-	-	41区		
第2-131図187	石鍋	滑石		-	-	-	-	L-41		
第2-131図188	石鍋	滑石		-	-	-	-	K-39		
第2-131図189	石鍋	滑石		-	-	-	-	K-38		
第2-131図190	石鍋	滑石		-	-	-	-	包含層		
第2-131図191	石鍋	滑石		-	-	-	-	K-40		
第2-131図192	石鍋	滑石		-	-	-	-	K-40		
第2-131図193	石鍋	滑石		-	-	-	-	39区		



## 遺物観察表12

## 府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土製品・石製品)②

挿図No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量 g	遺構名	備考	図版 No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-131図200	土器片加工品	土器		2.5	2.6	0.6	5.7	39区		
第2-131図201	土器片加工品	土器		3.0	3.0	0.6	7.5	包含層		
第2-131図202	土器片加工品	土器		2.9	3.4	0.8	11.3	包含層		
第2-131図203	土器片加工品	土器		3.2	5.2	1.2	22.0	39区		
第2-131図204	土器片加工品	土器		3.1	3.4	0.8	10.5	40区		
第2-131図205	土器片加工品	土器		4.3	4.4	1.0	25.5	K-39		
第2-131図206	土器片加工品	土器		4.1	4.3	2.0	32.9	40区		
第2-131図207	土器片加工品	土器		4.0	4.2	1.1	35.8	K-39		
第2-131図208	土器片加工品	土器		5.3	5.6	2.1	62.8	K-39		
第2-131図209	土器片加工品	土器		5.9	6.4	1.5	92.2	40区		
第2-131図210	土器片加工品	土器		-	-	0.7	-	40区	須恵器	
第2-131図211	脚	土製		6.9	-	2.1	-	L-40	土鍋の脚	
第2-131図212	分銅?	滑石		4.5	3.0	1.4	50.2	L-40	紐がある。	12
第2-131図213	砥石	石製		6.0	7.0	4.8	-	K-40	天草石	
第2-132図214	土鍾	土製		2.9	0.9	-	2.0	40区		
第2-132図215	土鍾	土製		3.2	1.2	-	3.7	K-39		
第2-132図216	土鍾	土製		2.7	1.0	-	2.9	40区		
第2-132図217	土鍾	土製		2.8	1.0	-	2.9	40区		
第2-132図218	土鍾	土製		3.0	1.1	-	3.3	40区		
第2-132図219	土鍾	土製		3.8	1.1	-	4.4	40区		
第2-132図220	土鍾	土製		3.2	1.2	-	3.8	40区		
第2-132図221	土鍾	土製		2.8	0.8	-	2.3	40区		
第2-132図222	土鍾	土製		3.0	1.2	-	4.3	40区		
第2-132図223	土鍾	土製		4.0	1.1	-	4.0	包含層		
第2-132図224	土鍾	土製		3.8	1.3	-	4.9	K-39		
第2-132図225	土鍾	土製		4.7	1.1	-	8.5	包含層		
第2-132図226	土鍾	土製		4.4	1.0	-	4.4	40区		
第2-132図227	土鍾	土製		5.5	1.0	-	6.3	41区		
第2-132図228	土鍾	土製		5.6	1.2	-	5.6	39区		
第2-132図229	土鍾	土製		5.7	1.2	-	6.7	40区		
第2-132図230	土鍾	土製		4.9	1.1	-	4.8	40区		
第2-132図231	土鍾	土製		5.7	1.0	-	5.0	40区		
第2-132図232	土鍾	土製		5.5	1.2	-	5.8	39区		
第2-132図233	土鍾	土製		5.2	1.1	-	6.2	41区		
第2-132図234	土鍾	土製		5.4	1.1	-	5.9	40区		
第2-132図235	土鍾	土製		5.2	1.0	-	4.8	包含層		
第2-132図236	土鍾	土製		5.8	1.1	-	5.8	39区		
第2-132図237	土鍾	土製		5.1	1.0	-	4.9	39区		
第2-132図238	土鍾	土製		5.0	1.1	-	5.6	M-38		
第2-132図239	土鍾	土製		5.2	1.0	-	4.7	M-40		
第2-132図240	土鍾	土製		6.4	1.0	-	6.2	包含層		
第2-132図241	土鍾	土製		5.5	1.0	-	4.8	39区		
第2-132図242	土鍾	土製		5.7	1.0	-	5.1	39区		
第2-132図243	土鍾	土製		5.4	1.2	-	6.6	39区		
第2-132図244	土鍾	土製		5.4	1.1	-	6.4	40区		
第2-132図245	土鍾	土製		5.7	1.1	-	5.5	L-39		
第2-132図246	土鍾	土製		3.8	1.8	-	10.8	40区		
第2-132図247	土鍾	土製		4.7	1.9	-	15.1	41区		
第2-132図248	土鍾	土製		5.9	1.8	-	17.3	包含層		
第2-132図249	土鍾	土製		6.0	2.2	-	25.5	39区		
第2-132図250	土鍾	土製		4.8	2.3	-	21.4	40区		

## 遺物観察表13

## 府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(玉・ガラス製品)

挿図No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量 g	遺構名	備考	図版 No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-46図2	玉	ヒスイ		1.55	1.35	1.33	-	A-SK1014	0.5cmの孔	
第2-133図252	玉	水晶		1.50	1.50	1.50	-	L-38		
第2-133図253	玉	水晶		1.70	1.40	0.90	-	K-39		

遺物観察表14

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表（金属製品）

挿図No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-18図67	不明	青銅		2.1	—	—	0.4	A-SD1505		
第2-18図68	不明	青銅		3.5	—	—	0.7	A-SD1505		
第2-26図93	不明	青銅		1.1	1.6	—	2.1	A-SD1505	上部に径3ミリの穴	12
第2-26図94	不明	青銅		4.1	1.2	—	—	A-SD1505		12
第2-90図3	不明	青銅		10.0	1.6	0.2	17.8	A-SK1091		
第2-133図251	分銅	青銅		0.8	0.8	0.2	0.5	包含層	三印の陽刻	12
第2-133図254		青銅		0.7	0.4	—	—	K-40		12
第2-133図255		青銅		1.5	0.9	—	1.3	L-39		12
第2-133図256		青銅		4.5	0.6	0.1	2.0	L-39		
第2-133図257		青銅		2.5	1.9	1.0	—	L-41		
第2-133図258		青銅		3.3	2.2	0.2	—	M-41		12
第2-133図259		青銅		3.5	2.1	0.1	—	K-41		
第2-133図260		鉄		8.4	1.3	0.5	16.2	K-41		12

遺物観察表15

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表（瓦）

挿図No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-10図97	平瓦	土製	軒		—	—	—	A-SD1501	瓦当の幅4.8cm	
第2-10図98	平瓦	土製			28.5	—	—	A-SD1501		
第2-10図99	平瓦	土製			21.3	—	—	A-SD1501		
第2-24図87	平瓦	土製	軒		—	—	—	A-SD1506	瓦当の幅6.0cm	
第2-34図9	平瓦	土製			—	—	—	A-SK040	格子目叩き	
第2-104図8	平瓦	土製			—	—	—	A-SK1100		
第2-131図197	丸瓦	土製	軒		—	—	—	K-38		
第2-131図198	丸瓦	土製	軒		—	—	—	40区		
第2-131図199	丸瓦	土製	軒		—	—	—	包含層		

遺物観察表16

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表（銅銭）

挿図No.	銭貨名	国・王朝名	初鋳造年	重さ(g)	直径(mm)	書体	遺構名	備考	図版No.
第2-9図93	元祐通寶	北宋	1086年	2.8	25.0	篆書	A-SD1501		
第2-9図94	天聖元寶	北宋	1023年	1.9	25.0	真書	A-SD1501	一部欠損	
第2-9図95	紹聖元寶	北宋	1094年	2.6	25.0	篆書	A-SD1501		
第2-9図96	元祐通寶	北宋	1086年	2.0	25.0	篆書	A-SD1501	一部欠損	
第2-19図69	政和通寶	北宋	1111年	3.1	25.0	篆書	A-SD1505	第2-17図54から出土	
第2-19図70	政和通寶	北宋	1111年	2.9	25.0	篆書	A-SD1505	第2-17図54から出土	
第2-19図71	宣和通寶	北宋	1119年	3.2	—	篆書	A-SD1505	第2-17図54から出土	
第2-19図72	咸・・寶	北宋		1.5	24.5		A-SD1505		
第2-19図73	熙寧元寶	北宋	1068年	2.4	24.0	真書	A-SD1505		
第2-27図95	元祐通寶	北宋	1086年	2.8	25.0	篆書	A-SD1501		
第2-33図1	元通寶	北宋		1.6	25.0	篆書	A-SK052	銭貨名は不明	
第2-41図1	政和通寶	北宋	1111年	3.0	25.5	真書	A-SK1013		
第2-51図13	元豊通寶	北宋	1078年	2.6	24.0		A-SK1019		
第2-59図1	明道通寶	北宋	1032年	2.7	25.0	真書	A-SK1035	皇宋通寶と貼りつく	
第2-59図2	皇宋通寶	北宋	1038年	1.4	23.5	真書	A-SK1035	明道通寶と貼りつく	
第2-102図4	熙寧元寶	北宋	1068年	2.4	23.0	真書	A-SK1099		
第2-105図	元豊通寶	北宋	1078年	2.6	24.0		A-SK1101		
第2-109図11	永樂通寶	明	1408年	3.0	25.0		A-SK1104		
第2-118図22	紹聖元寶	北宋	1094年	2.7	24.0	行書	A-SE1045		
第2-134図261	天禧通寶	北宋	1017年	2.2	25.0	真書	L-39		
第2-134図262	景祐元寶	北宋	1034年	1.8	25.0		K-41		
第2-134図263	皇祐通寶	北宋	1038年	1.2	24.5	篆書	K-39		
第2-134図264	元豊通寶	北宋	1078年	2.1	24.0	篆書	K-39		
第2-134図265	元豊通寶	北宋	1078年	2.0	24.0	行書	L-41		
第2-134図266	元祐通寶	北宋	1086年	2.4	24.0	篆書	L-41		
第2-134図267	元祐通寶	北宋	1086年	2.1	2.4	篆書	L-40		
第2-134図268	紹聖元寶	北宋	1094年	2.6	25.0	篆書	M-40		
第2-134図269	紹聖元寶	北宋	1094年	2.6	25.0	篆書	39区		
第2-134図270	永樂通寶	明	1408年	2.6	25.0		L-40		
第2-134図271				—	—			不明	
第2-134図272	景			0.6	—		K-39		
第2-134図273	寛永通寶	江戸	1636年	2.0	—		L-40	古寛永	

## 遺物観察表17

## 府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)①

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-3図1	陶器	播鉢	備前	—	—	—	B-SD001		
第3-3図2	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	—	B-SD001		
第3-3図3	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	—	B-SD001		
第3-3図4	瓦質土器	羽釜	国内	—	—	—	B-SD001	胴部内径25.5cm	
第3-3図5	土師器	坏	在地	13.0	7.0	2.8	B-SD001		
第3-3図6	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD002		
第3-3図7	陶器	播鉢	備前	—	—	—	B-SD002		
第3-3図8	須恵質土器	甕	龜山	—	—	—	B-SD002		
第3-3図9	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD002		
第3-3図10	須恵質土器	鉢	東播系	—	8.3	—	B-SD002		
第3-3図11	須恵質土器	鉢	東播系	—	11.0	—	B-SD002		
第3-3図12	土師器	坏	在地	—	—	—	B-SD002		
第3-3図13	土師器	坏	在地	11.7	—	—	B-SD002		
第3-3図14	土師器	坏	在地	13.6	—	—	B-SD002		
第3-3図15	土師器	甕	在地	20.5	—	—	B-SD002		
第3-3図16	土師器	坏	在地	—	7.6	—	B-SD002		
第3-3図17	土師器	坏	在地	—	9.0	—	B-SD002		
第3-5図1	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.4	1.0	B-SD003	上層	
第3-5図2	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.0	1.2	B-SD003	上層	
第3-5図3	在地系土師器	皿	在地	8.1	6.1	1.3	B-SD003	上層	
第3-5図4	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.0	1.2	B-SD003	上層	
第3-5図5	在地系土師器	皿	在地	7.6	4.2	1.9	B-SD003	上層	
第3-5図6	在地系土師器	坏	在地	13.4	9.8	3.3	B-SD003	上層	
第3-5図7	在地系土師器	坏	在地	12.8	10.0	2.6	B-SD003	上層	
第3-5図8	在地系土師器	皿	在地	7.4	5.4	1.3	B-SD003	中層	
第3-5図9	在地系土師器	皿	在地	7.6	6.0	1.0	B-SD003	中層	
第3-5図10	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.0	0.9	B-SD003	中層	
第3-5図11	在地系土師器	皿	在地	7.6	10.0	0.9	B-SD003	中層	
第3-5図12	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.2	1.1	B-SD003	中層	
第3-5図13	在地系土師器	坏	在地	7.6	5.5	2.1	B-SD003	中層	
第3-5図14	在地系土師器	坏	在地	11.6	7.0	3.1	B-SD003	中層	
第3-5図15	在地系土師器	坏	在地	11.6	8.6	2.6	B-SD003	中層	
第3-5図16	在地系土師器	坏	在地	13.0	10.0	3.0	B-SD003	中層	
第3-5図17	在地系土師器	坏	在地	12.4	7.0	2.8	B-SD003	中層	
第3-5図18	在地系土師器	皿	在地	8.7	7.0	1.1	B-SD003	下層	
第3-5図19	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.6	2.9	B-SD003	下層	
第3-5図20	在地系土師器	坏	在地	12.5	9.0	2.9	B-SD003	下層	
第3-5図21	在地系土師器	坏	在地	11.8	7.8	3.0	B-SD003	下層	
第3-5図22	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.0	3.1	B-SD003	下層	
第3-5図23	在地系土師器	坏	在地	11.8	9.0	3.2	B-SD003	下層	
第3-6図24	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD003		
第3-6図25	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD003		
第3-6図26	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD003		
第3-6図27	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD003		
第3-6図28	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD003		
第3-6図29	青磁	碗	龍泉窯	13.9	6.3	4.7	B-SD003		
第3-6図30	青磁	碗	龍泉窯	—	3.8	—	B-SD003		
第3-6図31	青磁	碗	龍泉窯	—	6.0	—	B-SD003		
第3-6図32	青磁	碗	龍泉窯	—	5.2	—	B-SD003		
第3-6図33	青磁	碗	龍泉窯	8.0	—	—	B-SD003		
第3-6図34	青磁	碗	龍泉窯	—	5.6	—	B-SD003		
第3-6図35	青磁	碗	龍泉窯	—	5.5	—	B-SD003		
第3-6図36	白磁	碗	中国	—	—	—	B-SD003	玉縁口縁	
第3-6図37	白磁	坏	中国	11.0	—	—	B-SD003		
第3-6図38	白磁	坏	中国	10.6	5.6	3.5	B-SD003	口禿	
第3-6図39	白磁	坏	中国	11.2	5.6	3.1	B-SD003	口禿	
第3-6図40	白磁	坏	中国	11.0	6.3	3.3	B-SD003	口禿	
第3-7図41	青花	碗	景德鎮窯	—	—	—	B-SD003		
第3-7図42	褐釉磁器	碗	景德鎮窯	—	—	—	B-SD003		
第3-7図43	青白磁	瓶	中国	—	—	—	B-SD003		
第3-7図44	青白磁	瓶	中国	—	—	—	B-SD003		
第3-7図45	緑青釉	瓶	中国	—	—	—	B-SD003		
第3-7図46	陶器	皿	瀬戸美濃	2.9	2.7	0.5	B-SD003		
第3-7図47	青磁	梅瓶	中国	—	10.4	—	B-SD003		
第3-7図48	緑釉	碗	国内	—	6.0	—	B-SD003	須恵器に緑釉 古代	
第3-7図49	緑釉	鉢	磁龍窯	—	—	—	B-SD003		
第3-7図50	緑釉	鉢	磁龍窯	—	—	—	B-SD003		
第3-7図51	褐釉	鉢	磁龍窯	27.7	24.7	9.2	B-SD003	見込みに「天下太平」	
第3-7図51A	褐釉	鉢	磁龍窯	—	—	—	B-SD003	第3-7図51を図化	
第3-8図52	陶器	坏	瀬戸美濃	7.2	3.6	3.0	B-SD003		
第3-8図53	陶器	坏	瀬戸美濃	9.8	4.0	3.0	B-SD003		
第3-8図54	陶器	坏	瀬戸美濃	10.6	4.6	2.8	B-SD003		14
第3-8図55	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-8図56	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-8図57	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		

遺物観察表18

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)②

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-8図58	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-8図59	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-8図60	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-8図61	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003	肩部に叩き	
第3-9図62	陶器	甕	常滑	38.6	—	—	B-SD003		13
第3-9図63	陶器	甕	常滑	47.0	—	—	B-SD003		
第3-9図64	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-9図65	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-9図66	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-9図67	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-9図68	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD003		
第3-10図69	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-10図70	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-10図71	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-10図72	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-10図73	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-10図74	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-10図75	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-10図76	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-10図77	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-10図78	陶器	壺	備前	16.4	—	—	B-SD003		
第3-10図79	陶器	壺	備前	23.6	—	—	B-SD003		
第3-10図80	陶器	鉢	備前	13.6	—	—	B-SD003		
第3-10図81	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-11図82	陶器	播鉢	備前	32.4	—	—	B-SD003		
第3-11図83	陶器	播鉢	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-11図84	陶器	播鉢	備前	31.3	11.9	14.8	B-SD003		
第3-11図85	陶器	播鉢	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-11図86	陶器	播鉢	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-11図87	陶器	播鉢	備前	—	14.0	—	B-SD003		
第3-11図88	陶器	播鉢	備前	—	—	—	B-SD003		
第3-12図89	在地系土師器	皿	在地	7.0	—	—	B-SD003		
第3-12図90	在地系土師器	皿	在地	7.6	5.6	0.8	B-SD003		
第3-12図91	在地系土師器	皿	在地	9.0	7.6	1.1	B-SD003		
第3-12図92	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.0	1.1	B-SD003		
第3-12図93	在地系土師器	皿	在地	7.8	7.0	1.2	B-SD003		
第3-12図94	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.2	1.1	B-SD003		
第3-12図95	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.0	1.1	B-SD003		
第3-12図96	在地系土師器	皿	在地	9.0	7.2	1.1	B-SD003		
第3-12図97	在地系土師器	皿	在地	7.6	5.6	1.4	B-SD003		
第3-12図98	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.4	1.2	B-SD003		
第3-12図99	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.2	1.1	B-SD003		
第3-12図100	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.0	1.1	B-SD003		
第3-12図101	在地系土師器	皿	在地	9.0	7.6	1.1	B-SD003		
第3-12図102	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.5	1.3	B-SD003		
第3-12図103	在地系土師器	皿	在地	7.6	5.8	1.5	B-SD003		
第3-12図104	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.8	1.3	B-SD003		
第3-12図105	在地系土師器	皿	在地	7.6	5.5	1.5	B-SD003		
第3-12図106	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.0	1.1	B-SD003		
第3-12図107	在地系土師器	坏	在地	7.4	4.6	1.9	B-SD003		
第3-12図108	在地系土師器	坏	在地	6.4	4.7	2.1	B-SD003		
第3-12図109	在地系土師器	坏	在地	6.9	4.6	2.5	B-SD003		
第3-12図110	在地系土師器	坏	在地	7.6	6.6	1.8	B-SD003		
第3-12図111	在地系土師器	坏	在地	8.3	6.7	3.3	B-SD003		
第3-12図112	在地系土師器	坏	在地	7.4	4.6	1.9	B-SD003		
第3-12図113	在地系土師器	皿	在地	11.4	—	2.1	B-SD003		
第3-12図114	在地系土師器	坏	在地	11.2	6.6	2.1	B-SD003		
第3-12図115	在地系土師器	坏	在地	13.0	9.0	2.5	B-SD003		
第3-12図116	在地系土師器	坏	在地	11.4	8.0	2.5	B-SD003		
第3-12図117	在地系土師器	坏	在地	11.6	6.6	2.4	B-SD003		
第3-12図118	在地系土師器	坏	在地	12.8	6.6	2.7	B-SD003		
第3-12図119	在地系土師器	坏	在地	11.8	8.4	2.9	B-SD003		
第3-12図120	在地系土師器	坏	在地	11.8	8.2	2.7	B-SD003		
第3-12図121	在地系土師器	坏	在地	13.2	7.8	3.2	B-SD003		
第3-12図122	在地系土師器	坏	在地	12.2	7.8	3.2	B-SD003		
第3-12図123	在地系土師器	坏	在地	12.0	7.7	2.8	B-SD003		
第3-13図124	在地系土師器	坏	在地	12.5	9.2	3.1	B-SD003		
第3-13図125	在地系土師器	坏	在地	12.6	9.4	3.0	B-SD003		
第3-13図126	在地系土師器	坏	在地	12.2	7.2	3.2	B-SD003		
第3-13図127	在地系土師器	坏	在地	11.8	7.8	3.2	B-SD003		
第3-13図128	在地系土師器	坏	在地	12.8	9.0	3.2	B-SD003		
第3-13図129	在地系土師器	坏	在地	11.5	7.8	2.5	B-SD003		
第3-13図130	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.2	3.2	B-SD003		
第3-13図131	在地系土師器	坏	在地	13.2	7.2	3.9	B-SD003		
第3-13図132	在地系土師器	坏	在地	11.0	6.6	3.5	B-SD003		

遺物観察表19

## 府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)③

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-13図133	土師質土器	坏	吉備系	—	—	—	B-SD003		
第3-13図134	土師質土器	坏	吉備系	12.0	—	—	B-SD003		
第3-13図135	土師質土器	坏	吉備系	11.2	—	—	B-SD003		
第3-13図136	土師質土器	坏	吉備系	10.6	—	—	B-SD003		
第3-13図137	土師質土器	坏	吉備系	—	4.1	—	B-SD003		
第3-13図138	土師質土器	坏	吉備系	—	4.6	—	B-SD003		
第3-13図139	土師質土器	坏	吉備系	—	4.6	—	B-SD003		
第3-13図140	土師質土器	坏	吉備系	—	3.6	—	B-SD003		
第3-13図141	土師質土器	坏	吉備系	—	4.8	—	B-SD003		
第3-13図142	土師質土器	坏	吉備系	—	4.1	—	B-SD003		
第3-13図143	土師質土器	坏	吉備系	—	4.1	—	B-SD003		
第3-13図144	土師質土器	坏	吉備系	—	5.0	—	B-SD003		
第3-13図145	白色系	皿		8.0	—	1.8	B-SD003	京都系土師器?	
第3-13図146	白色系	皿		—	—	—	B-SD003	京都系土師器?	
第3-13図147	在地系土師器	燭台	在地	8.7	7.6	1.2	B-SD003	底部に焼成前の穿孔	
第3-13図148	在地系土師器	燭台	在地	—	5.8	—	B-SD003		
第3-13図149	在地系土師器	燭台	在地	7.8	—	—	B-SD003		
第3-13図150	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD003		
第3-13図151	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD003		
第3-13図152	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD003		
第3-14図153	土師質土器	土鍋	在地	24.0	—	—	B-SD003		
第3-14図154	土師質土器	土鍋	在地	29.0	—	—	B-SD003		
第3-14図155	土師質土器	土鍋	在地	34.4	—	—	B-SD003		
第3-14図156	土師質土器	土鍋	在地	32.6	—	—	B-SD003		
第3-14図157	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD003		
第3-14図158	土師質土器	土鍋	在地	23.1	—	—	B-SD003		
第3-14図159	土師質土器	土鍋	在地	21.6	—	—	B-SD003		
第3-14図160	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD003		
第3-14図161	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD003		
第3-14図162	土師質土器	土鍋	在地	—	—	25.0	B-SD003		
第3-14図163	土師質土器	土鍋	在地	—	—	24.6	B-SD003		
第3-14図164	土師質土器	土鍋	在地	—	—	23.6	B-SD003		
第3-14図165	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD003	土鍋の脚	
第3-15図166	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD003		
第3-15図167	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD003		
第3-15図168	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD003		
第3-15図169	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD003		
第3-15図170	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD003		
第3-15図171	須恵質土器	鉢	東播系	20.8	—	—	B-SD003		
第3-15図172	須恵質土器	鉢	東播系	23.4	—	—	B-SD003		
第3-15図173	須恵質土器	鉢	東播系	26.2	—	—	B-SD003		
第3-15図174	須恵質土器	鉢	東播系	22.6	7.8	9.5	B-SD003		
第3-15図175	須恵質土器	鉢	東播系	—	9.0	—	B-SD003		
第3-15図176	須恵質土器	鉢	東播系	—	9.1	—	B-SD003		
第3-15図177	須恵質土器	鉢	東播系	—	8.4	—	B-SD003		
第3-16図178	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	—	B-SD003		
第3-16図179	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	—	B-SD003		
第3-16図180	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	—	B-SD003		
第3-16図181	須恵質土器	甕	東播系	24.0	—	—	B-SD003		
第3-16図182	須恵質土器	小壺	国内	—	4.0	—	B-SD003		
第3-16図183	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	—	B-SD003		
第3-16図184	須恵質土器	甕	東播系	—	—	—	B-SD003		
第3-16図185	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	—	B-SD003		
第3-16図186	須恵質土器	甕	東播系	—	10.0	—	B-SD003		
第3-16図187	瓦質土器	甕	国内	—	21.6	—	B-SD003		
第3-17図188	瓦質土器	碗	国内	12.4	—	—	B-SD003		
第3-17図189	瓦質土器	碗	国内	—	—	—	B-SD003		
第3-17図190	瓦質土器	碗	国内	—	5.0	—	B-SD003		
第3-17図191	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SD003		
第3-17図192	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SD003		
第3-17図193	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SD003		
第3-17図194	瓦質土器	鉢	国内	34.0	—	—	B-SD003		
第3-17図195	瓦質土器	鉢	国内	—	10.1	—	B-SD003		
第3-17図196	瓦質土器	鉢	国内	—	10.8	—	B-SD003		
第3-17図197	瓦質土器	鉢	国内	—	9.2	—	B-SD003		
第3-17図198	瓦質土器	鉢	国内	—	10.2	—	B-SD003		
第3-17図199	瓦質土器	鉢	国内	—	10.0	—	B-SD003		
第3-17図200	瓦質土器	溜鉢	防長系	—	11.2	—	B-SD003		
第3-18図201	土師質土器	甕	在地	42.0	—	—	B-SD003		
第3-18図202	土師質土器	甕	在地	47.8	—	—	B-SD003		
第3-18図203	瓦質土器	壺	国内	22.0	—	—	B-SD003		
第3-18図204	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SD003	角火鉢	
第3-18図205	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SD003	角火鉢	
第3-18図206	瓦質土器		国内	—	—	—	B-SD003	菊花文スタンプ	
第3-18図207	瓦質土器		国内	—	—	—	B-SD003		

遺物観察表20

府内町跡20次調査 B 区出土遺物観察表 (土器・陶磁器類) ④

挿図No.	器 種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第3-20図249	土師器	碗	国内	19.2	—	—	B-SD003	内黒土器	
第3-20図250	土師器	坏	在地	—	—	—	B-SD003		
第3-20図251	土師器	壺	在地	—	6.0	—	B-SD003		
第3-20図252	土師器	盤	在地	18.0	13.6	2.3	B-SD003		
第3-20図253	土師器	坏蓋	在地	19.0	—	—	B-SD003		
第3-20図254	土師器	坏	在地	14.4	—	—	B-SD003		
第3-20図255	土師器	坏	在地	12.8	—	—	B-SD003		
第3-20図256	土師器	坏	在地	—	6.6	—	B-SD003		
第3-20図257	土師器	坏	在地	12.4	6.6	3.7	B-SD003		
第3-20図258	土師器	坏	在地	13.6	7.3	3.7	B-SD003		
第3-20図259	土師器	坏	在地	13.4	7.4	3.4	B-SD003		
第3-20図260	土師器	坏	在地	—	9.8	—	B-SD003		
第3-20図261	土師器	坏	在地	—	9.0	—	B-SD003		
第3-20図262	須恵器	坏	在地	—	9.0	—	B-SD003		
第3-20図263	土師器	坏	在地	—	8.6	—	B-SD003		
第3-20図264	土師器	坏	在地	—	7.6	—	B-SD003		
第3-20図265	須恵器	坏	在地	—	9.6	—	B-SD003		
第3-20図266	土師器	坏	在地	—	7.6	—	B-SD003		
第3-20図267	須恵器	坏	在地	—	9.2	—	B-SD003		
第3-20図268	須恵器	壺	在地	11.2	—	—	B-SD003		
第3-20図269	須恵器	壺	在地	—	—	—	B-SD003	胴部最大径16.6cm	
第3-20図270	土師器	甗	在地	27.0	—	—	B-SD003		
第3-21図271	土師質土器	甗	在地	22.2	—	—	B-SD003		
第3-21図272	土師質土器	甗	在地	24.4	—	—	B-SD003		
第3-21図273	土師質土器	甗	在地	21.8	—	—	B-SD003		
第3-21図274	土師質土器	甗	在地	24.6	—	—	B-SD003		
第3-21図275	土師質土器	甗	在地	—	—	—	B-SD003	胴部最大径14.8cm	
第3-21図276	弥生土器	壺	在地	—	—	—	B-SD003		
第3-21図277	弥生土器	高坏	在地	—	—	—	B-SD003		
第3-24図1	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD004		
第3-24図2	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD004		
第3-24図3	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD004		
第3-24図4	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD004		
第3-24図5	陶器	捕鉢	備前	—	—	—	B-SD004		
第3-24図6	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.3	1.2	B-SD004		
第3-24図7	在地系土師器	皿	在地	7.7	6.6	0.9	B-SD004		
第3-24図8	在地系土師器	皿	在地	8.5	6.6	1.0	B-SD004		
第3-24図9	在地系土師器	皿	在地	9.0	7.4	1.2	B-SD004		
第3-24図10	在地系土師器	皿	在地	7.9	6.2	1.0	B-SD004		
第3-24図11	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.2	1.1	B-SD004		
第3-24図12	在地系土師器	皿	在地	8.6	7.4	1.3	B-SD004		
第3-24図13	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.3	1.2	B-SD004		
第3-24図14	在地系土師器	坏	在地	12.5	—	—	B-SD004		
第3-24図15	在地系土師器	坏	在地	12.9	8.9	2.4	B-SD004		
第3-24図16	在地系土師器	坏	在地	12.1	9.0	2.9	B-SD004		
第3-24図17	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.2	3.2	B-SD004		
第3-24図18	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.3	3.2	B-SD004		
第3-24図19	在地系土師器	坏	在地	12.1	8.0	3.5	B-SD004		
第3-24図20	土師質土器	坏	吉備系	—	—	—	B-SD004		
第3-24図21	土師質土器	坏	吉備系	11.2	4.3	3.1	B-SD004		
第3-24図22	土師質土器	坏	吉備系	—	5.1	—	B-SD004		
第3-24図23	土師質土器	坏	吉備系	—	4.4	—	B-SD004		
第3-24図24	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD004		
第3-24図25	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD004		
第3-24図26	土師質土器	壺	在地	—	—	—	B-SD004		
第3-24図27	須恵質土器	鉢	東播系	19.2	—	—	B-SD004		
第3-24図28	須恵質土器	鉢	東播系	36.5	—	—	B-SD004		
第3-25図29	瓦質土器	鉢	国内	11.9	—	—	B-SD004		
第3-25図30	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SD004		
第3-25図31	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SD004		
第3-25図37	須恵器	坏蓋	在地	—	—	—	B-SD004		
第3-25図38	土師器	坏蓋	在地	19.3	—	—	B-SD004		
第3-25図39	土師器	坏	在地	16.3	—	—	B-SD004		
第3-25図40	土師器	坏	在地	13.1	—	—	B-SD004		
第3-25図41	土師器	坏	在地	—	7.6	—	B-SD004		
第3-25図42	土師器	甗	在地	—	—	—	B-SD004		
第3-25図43	土師器	甗	在地	19.5	—	—	B-SD004		
第3-25図44	土師器	高坏	在地	—	—	—	B-SD004		
第3-25図45	瓦質土器	鉢	国内	24.5	—	—	B-SD004		
第3-25図46	弥生土器	壺	在地	—	—	—	B-SD004		
第3-25図47	土師質土器	甗	在地	—	35.2	—	B-SD004		
第3-36図1	青花	碗	景徳鎮窯	—	—	—	B-SD064		
第3-36図2	青花	碗	景徳鎮窯	—	—	—	B-SD064		
第3-36図3	青花	皿	景徳鎮窯	—	—	—	B-SD064		
第3-36図4	青花	碗	景徳鎮窯	—	2.0	—	B-SD064		

遺物観察表21

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-36図5	青花	皿	景德鎮窯	—	7.8	—	B-SD064		
第3-36図6	青花	皿	景德鎮窯	—	8.0	—	B-SD064		
第3-36図7	青花	碗	漳州窯	—	5.8	—	B-SD064		
第3-36図8	青花	皿	景德鎮窯	12.3	6.7	2.9	B-SD064		
第3-36図9	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD064		
第3-36図10	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD064		
第3-36図11	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-SD064		
第3-36図12	青磁	碗	龍泉窯	15.2	—	—	B-SD064		
第3-36図13	青磁	碗	龍泉窯	10.8	—	—	B-SD064		
第3-36図14	青磁	碗	龍泉窯	16.6	—	—	B-SD064		
第3-36図15	青白磁	皿	同安窯	9.6	4.2	2.3	B-SD064		
第3-36図16	青磁	碗	龍泉窯	—	4.2	—	B-SD064		
第3-36図17	白磁	皿	中国	—	—	—	B-SD064		
第3-36図18	白磁	皿	中国	—	5.0	—	B-SD064		
第3-36図19	白磁	皿	中国	—	—	—	B-SD064		
第3-36図20	白磁	皿	中国	10.4	5.2	2.9	B-SD064		
第3-36図21	白磁	碗	中国	—	—	—	B-SD064		
第3-36図22	白磁	皿	中国	—	—	—	B-SD064		
第3-36図23	白磁	碗	中国	—	—	—	B-SD064		
第3-36図24	陶器	鉢	磁甕窯	—	—	—	B-SD064		
第3-36図25	陶器	鉢	磁甕窯	—	—	—	B-SD064		
第3-36図26	陶器	鉢	磁甕窯	—	—	—	B-SD064		
第3-37図27	陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	B-SD064		
第3-37図28	陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	B-SD064		
第3-37図29	陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	B-SD064		
第3-37図30	陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	B-SD064		
第3-37図31	陶器	天目	瀬戸美濃	—	—	—	B-SD064		
第3-37図32	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SD064		
第3-37図33	陶器	坏	瀬戸美濃	—	4.2	—	B-SD064		
第3-37図34	陶器	坏	瀬戸美濃	6.6	4.4	2.0	B-SD064		
第3-37図35	陶器	德利	備前	—	6.0	—	B-SD064		
第3-37図36	陶器	水屋甕	備前	12.0	—	—	B-SD064		
第3-37図37	陶器	水屋甕	備前	—	—	—	B-SD064		
第3-37図38	陶器	水屋甕	備前	—	15.0	—	B-SD064		
第3-37図39	陶器	水屋甕	備前	—	—	—	B-SD064		
第3-37図40	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD064		
第3-37図41	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SD064		
第3-37図42	陶器	搦鉢	備前	33.0	—	—	B-SD064		
第3-37図43	陶器	搦鉢	備前	31.6	—	—	B-SD064		
第3-38図44	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	B-SD064		
第3-38図45	陶器	搦鉢	備前	28.2	—	—	B-SD064		
第3-38図46	陶器	搦鉢	備前	29.2	—	—	B-SD064		
第3-38図47	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	B-SD064		
第3-38図48	陶器	搦鉢	備前	34.0	—	—	B-SD064		
第3-38図49	陶器	搦鉢	備前	37.2	—	—	B-SD064		
第3-38図50	陶器	搦鉢	備前	32.2	12.8	12.3	B-SD064		
第3-38図51	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	B-SD064		
第3-38図52	陶器	搦鉢	備前	—	15.0	—	B-SD064		
第3-39図53	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.3	B-SD064		
第3-39図54	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.2	B-SD064		
第3-39図55	在地系土師器	皿	在地	8.9	7.9	0.9	B-SD064		
第3-39図56	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.8	1.4	B-SD064		
第3-39図57	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.4	1.4	B-SD064		
第3-39図58	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.6	1.3	B-SD064		
第3-39図59	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.0	1.5	B-SD064		
第3-39図60	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.4	1.2	B-SD064		
第3-39図61	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.8	1.0	B-SD064		
第3-39図62	在地系土師器	皿	在地	7.9	6.2	1.0	B-SD064		
第3-39図63	在地系土師器	皿	在地	7.2	5.8	1.1	B-SD064		
第3-39図64	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.2	1.1	B-SD064		
第3-39図65	在地系土師器	皿	在地	9.0	7.0	1.0	B-SD064		
第3-39図66	在地系土師器	皿	在地	9.5	7.6	1.6	B-SD064		
第3-39図67	在地系土師器	皿	在地	8.4	5.5	2.1	B-SD064		
第3-39図68	在地系土師器	坏	在地	—	—	3.9	B-SD064		
第3-39図69	在地系土師器	坏	在地	—	—	3.3	B-SD064		
第3-39図70	在地系土師器	坏	在地	11.7	8.7	2.9	B-SD064		
第3-39図71	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.2	3.0	B-SD064		
第3-39図72	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.5	3.0	B-SD064		
第3-39図73	在地系土師器	坏	在地	13.0	9.0	3.5	B-SD064		
第3-39図74	在地系土師器	坏	在地	13.0	9.8	3.0	B-SD064		
第3-39図75	在地系土師器	坏	在地	11.3	8.2	2.6	B-SD064		
第3-39図76	在地系土師器	坏	在地	12.6	9.0	2.4	B-SD064		
第3-39図77	在地系土師器	坏	在地	11.4	8.6	2.7	B-SD064		
第3-39図78	在地系土師器	坏	在地	11.6	8.2	2.6	B-SD064		
第3-39図79	在地系土師器	坏	在地	11.2	7.3	3.0	B-SD064		



遺物觀察表22

府内町跡20次調査B区出土遺物觀察表(土器・陶磁器類)⑥

挿図No.	器種		生産地	法量(単位:cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-39図80	在地系土師器	坏	在地	13.0	10.4	2.9	B-SD064		
第3-39図81	在地系土師器	坏	在地	12.0	9.4	2.9	B-SD064		
第3-39図82	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.3	2.9	B-SD064		
第3-39図83	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.4	3.0	B-SD064		
第3-40図84	在地系土師器	坏	在地	13.2	7.8	3.6	B-SD064		
第3-40図85	在地系土師器	坏	在地	13.6	8.1	3.4	B-SD064		
第3-40図86	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.2	3.0	B-SD064		
第3-40図87	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.0	3.6	B-SD064		
第3-40図88	在地系土師器	坏	在地	12.8	8.8	3.0	B-SD064		
第3-40図89	在地系土師器	坏	在地	12.4	9.0	3.0	B-SD064		
第3-40図90	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.6	3.3	B-SD064		
第3-40図91	在地系土師器	坏	在地	13.0	9.0	4.2	B-SD064		
第3-40図92	在地系土師器	坏	在地	—	8.5	—	B-SD064		
第3-40図93	在地系土師器	坏	在地	13.0	7.6	3.2	B-SD064		
第3-40図94	在地系土師器	坏	在地	13.0	6.6	3.2	B-SD064		
第3-40図95	在地系土師器	坏	在地	11.8	7.6	3.7	B-SD064		
第3-40図96	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.1	B-SD064		
第3-40図97	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	B-SD064		
第3-40図98	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.1	B-SD064		
第3-40図99	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	1.8	B-SD064		
第3-40図100	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	B-SD064		
第3-40図101	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	B-SD064		
第3-40図102	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.6	B-SD064		
第3-40図103	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	3.2	B-SD064		
第3-40図104	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.7	B-SD064		
第3-40図105	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	—	B-SD064		
第3-40図106	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	—	B-SD064		
第3-40図107	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	B-SD064		
第3-40図108	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	B-SD064		
第3-40図109	土師質土器	碗	吉備系	—	—	—	B-SD064		
第3-40図110	土師質土器	碗	吉備系	—	—	—	B-SD064		
第3-40図111	土師質土器	碗	吉備系	10.0	—	—	B-SD064		
第3-40図112	土師質土器	碗	吉備系	10.2	—	—	B-SD064		
第3-40図113	土師質土器	碗	吉備系	11.6	3.5	3.1	B-SD064		
第3-40図114	土師質土器	碗	吉備系	—	4.6	—	B-SD064		
第3-40図115	土師質土器	碗	吉備系	—	4.0	—	B-SD064		
第3-40図116	土師質土器	碗	吉備系	—	4.6	—	B-SD064		
第3-41図117	土師質土器	燭台	在地	8.0	—	—	B-SD064		
第3-41図118	土師質土器	燭台	在地	—	6.7	—	B-SD064		
第3-41図119	土師質土器	燭台	在地	8.5	7.4	7.4	B-SD064		
第3-41図120	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD064		
第3-41図121	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD064		
第3-41図122	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD064		
第3-41図123	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD064		
第3-41図124	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD064		
第3-41図125	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD064		
第3-41図126	須恵質土器	鉢	在地	27.2	—	—	B-SD064		
第3-41図127	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-41図128	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-41図129	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-41図130	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-41図131	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-41図132	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-41図133	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-41図134	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-41図135	土師質土器	土鍋	在地	32.4	—	—	B-SD064		
第3-41図136	土師質土器	甗	在地	13.4	—	—	B-SD064		
第3-41図137	土師質土器	甗	在地	22.6	—	—	B-SD064		
第3-41図138	土師質土器	甗	在地	24.0	—	—	B-SD064		
第3-42図139	瓦質土器	鉢	国内	26.4	17.0	4.3	B-SD064		
第3-42図140	瓦質土器	鉢	国内	31.2	—	—	B-SD064		
第3-42図141	瓦質土器	鉢	国内	31.8	—	—	B-SD064		
第3-42図142	瓦質土器	鉢	国内	33.0	23.0	10.4	B-SD064		
第3-42図143	瓦質土器	鉢	国内	37.6	—	—	B-SD064		
第3-42図144	瓦質土器	土鍋	国内	—	—	—	B-SD064		
第3-42図145	瓦質土器	甗	国内	—	13.2	—	B-SD064		
第3-42図146	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SD064		
第3-43図147	瓦質土器	鉢	国内	26.2	10.6	10.1	B-SD064		
第3-43図148	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD064		
第3-43図149	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD064		
第3-43図150	瓦質土器	擂鉢	防長系	28.6	11.6	8.0	B-SD064		
第3-43図152	土師質土器	埴塙	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-45図177	陶器	大甗	備前	49.2	—	—	B-SD064		
第3-46図179	土師器	坏蓋	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-46図180	土師器	坏蓋	在地	—	—	—	B-SD064		

## 遺物観察表23

## 府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑦

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-46図181	土師器	坏蓋	在地	14.6	—	2.3	B-SD064		
第3-46図182	土師器	坏蓋	在地	15.6	—	2.2	B-SD064		
第3-46図183	須恵器	坏	在地	13.2	7.8	3.8	B-SD064		
第3-46図184	須恵器	坏	在地	14.0	9.2	3.8	B-SD064		
第3-46図185	土師器	坏	在地	15.6	—	—	B-SD064		
第3-46図186	土師器	坏	在地	18.4	—	—	B-SD064		
第3-46図187	土師器	坏	在地	13.2	6.8	4.2	B-SD064		
第3-46図188	土師器	坏	在地	13.2	6.5	5.3	B-SD064		
第3-46図189	土師器	坏	在地	13.0	—	—	B-SD064		
第3-46図190	土師器	坏	在地	—	8.8	—	B-SD064	内黒土器	
第3-46図191	須恵器	坏	在地	—	7.9	—	B-SD064		
第3-46図192	土師器	坏	在地	—	8.0	—	B-SD064		
第3-46図193	土師器	坏	在地	—	8.4	—	B-SD064		
第3-46図194	土師器	坏	在地	—	10.0	—	B-SD064		
第3-46図195	土師器	坏	在地	—	8.5	—	B-SD064		
第3-46図196	須恵器	長頸壺	在地	—	8.8	—	B-SD064		
第3-46図197	土師器	坏	在地	13.9	7.8	3.0	B-SD064		
第3-46図198	土師器	坏	在地	13.4	10.2	3.4	B-SD064		
第3-46図199	土師器	坏	在地	13.2	9.0	3.5	B-SD064		
第3-46図200	土師器	坏	在地	13.4	9.0	3.5	B-SD064		
第3-46図201	土師器	坏	在地	13.6	5.4	4.1	B-SD064		
第3-46図202	土師器	坏	在地	12.4	7.6	3.0	B-SD064		
第3-46図203	土師器	坏	在地	—	8.5	—	B-SD064		
第3-46図204	土師器	坏	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-46図205	土師器	坏	在地	—	—	3.0	B-SD064		
第3-46図206	土師器	坏	在地	14.2	8.4	2.8	B-SD064		
第3-46図207	土師器	高坏	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-46図208	土師器	甗	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-46図209	須恵器	壺	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-46図210	土師器	甗	在地	19.4	—	—	B-SD064		
第3-46図211	土師器	甗	在地	19.4	—	—	B-SD064		
第3-46図212	土師器	甗	在地	23.0	—	—	B-SD064		
第3-46図213	土師器	甗	在地	—	—	—	B-SD064		
第3-46図214	土師器	脚	在地	—	9.3	—	B-SD064		
第3-46図215	土師器	小甗	在地	12.9	—	12.2	B-SD064		
第3-50図2	青花	碗	景徳鎮窯	—	—	—	B-SK015		
第3-50図3	青花	皿	景徳鎮窯	13.8	8.0	2.9	B-SK015		
第3-50図4	白磁	皿	中国	—	—	—	B-SK015		
第3-50図5	白磁	皿	中国	—	—	—	B-SK015		
第3-50図6	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	B-SK015		
第3-50図7	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.0	B-SK015		
第3-50図8	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	—	B-SK015		
第3-50図9	京都系土師器	皿	在地	12.3	—	—	B-SK015		
第3-50図10	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK015		
第3-50図11	瓦質土器	土鍋	国内	23.2	—	—	B-SK015		
第3-50図12	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK015		
第3-50図13	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK015		
第3-50図14	須恵器	甗	在地	—	—	—	B-SK015		
第3-50図15	弥生土器	甗	在地	—	6.5	—	B-SK015		
第3-52図1	白磁	皿	中国	—	—	—	B-SK016		
第3-52図2	陶器	皿	瀬戸美濃	—	—	—	B-SK016	折縁ソギ皿	
第3-52図3	在地系土師器	坏	在地	12.3	9.6	2.1	B-SK016		
第3-52図4	京都系土師器	皿	在地	9.1	1.7	—	B-SK016		
第3-52図5	須恵土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SK016		
第3-54図1	在地系土師器	皿	在地	7.8	1.3	5.7	B-SK018		
第3-54図2	在地系土師器	皿	在地	8.7	7.3	1.0	B-SK018		
第3-54図3	在地系土師器	皿	在地	9.1	7.5	1.4	B-SK018		
第3-54図4	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.2	3.4	B-SK018		
第3-54図5	在地系土師器	坏	在地	12.7	9.3	3.4	B-SK018		
第3-54図6	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.3	3.3	B-SK018		
第3-54図7	在地系土師器	坏	在地	—	6.7	—	B-SK018		
第3-54図8	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK018		
第3-56図1	褐釉陶器	小壺	中国	—	3.0	—	B-SK020		
第3-56図2	褐釉陶器	壺	中国	—	—	—	B-SK020		
第3-56図3	褐釉陶器	梅瓶	中国	—	10.0	—	B-SK020		
第3-56図4	褐釉陶器	梅瓶	中国	—	7.8	—	B-SK020		
第3-56図5	陶器	皿	備前	25.4	16.2	3.8	B-SK020		
第3-56図6	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	B-SK020		
第3-56図7	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	B-SK020		
第3-56図8	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	B-SK020		
第3-56図9	陶器	搦鉢	備前	—	13.4	—	B-SK020		
第3-56図10	陶器	搦鉢	備前	28.4	—	—	B-SK020		
第3-56図11	陶器	搦鉢	備前	—	12.1	—	B-SK020		
第3-56図12	陶器	搦鉢	備前	33.8	—	—	B-SK020		
第3-57図13	陶器	搦鉢	備前	—	13.9	—	B-SK020		

遺物観察表24

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表（土器・陶磁器類）⑧

挿図No.	器 種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第3-57図14	陶器	播鉢	備前	—	13.8	—	B-SK020		
第3-57図15	陶器	甕	常滑	—	14.4	—	B-SK020		
第3-57図16	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SK020		
第3-57図17	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK020		
第3-57図18	須恵質土器	壺	在地	—	—	—	B-SK020		
第3-57図19	瓦質土器	甕	在地	—	27.2	—	B-SK020		
第3-57図20	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SK020		
第3-57図21	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK020		
第3-57図22	須恵器	甕	在地	—	—	—	B-SK020		
第3-57図23	土師質土器	鉢	在地	19.5	—	11.0	B-SK020		
第3-58図26	土師質土器	碗	吉備系	—	—	—	B-SK020		
第3-58図27	土師質土器	碗	吉備系	—	—	—	B-SK020		
第3-58図28	土師質土器	碗	吉備系	11.2	—	—	B-SK020		
第3-58図29	土師質土器	碗	吉備系	10.4	—	—	B-SK020		
第3-58図30	土師質土器	碗	吉備系	12.0	—	—	B-SK020		
第3-58図31	土師質土器	碗	吉備系	—	5.1	—	B-SK020		
第3-58図32	在地系土師器	皿	在地	7.8	5.7	1.3	B-SK020		
第3-58図33	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.7	1.2	B-SK020		
第3-58図34	在地系土師器	皿	在地	8.3	7.3	1.4	B-SK020		
第3-58図35	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.5	1.0	B-SK020		
第3-58図36	在地系土師器	坏	在地	—	—	2.8	B-SK020		
第3-58図37	在地系土師器	坏	在地	12.6	—	—	B-SK020		
第3-58図38	在地系土師器	坏	在地	12.6	9.0	2.0	B-SK020		
第3-58図39	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.7	2.5	B-SK020		
第3-58図40	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.8	2.7	B-SK020		
第3-58図41	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.7	2.8	B-SK020		
第3-58図42	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.6	2.8	B-SK020		
第3-58図43	在地系土師器	坏	在地	12.2	10.2	2.8	B-SK020		
第3-58図44	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.7	3.0	B-SK020		
第3-58図45	在地系土師器	坏	在地	12.8	10.2	2.8	B-SK020		
第3-58図46	在地系土師器	坏	在地	12.3	9.0	2.7	B-SK020		
第3-58図47	在地系土師器	坏	在地	8.2	4.8	1.8	B-SK020	内面にロクロ目	
第3-58図48	在地系土師器	坏	在地	7.8	4.3	1.7	B-SK020	内面にロクロ目	
第3-58図49	在地系土師器	坏	在地	7.5	4.8	2.4	B-SK020	内面にロクロ目	
第3-58図50	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	2.2	B-SK020		
第3-58図51	京都系土師器	皿	在地	10.9	—	—	B-SK020		
第3-58図52	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	—	B-SK020		
第3-58図53	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	—	B-SK020		
第3-58図54	京都系土師器	皿	在地	13.5	—	—	B-SK020		
第3-58図55	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.1	B-SK020		
第3-58図56	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.7	B-SK020		
第3-58図57	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	2.8	B-SK020		
第3-58図58	京都系土師器	皿	在地	12.1	—	2.5	B-SK020		
第3-58図59	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.7	B-SK020		
第3-58図60	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	—	B-SK020		
第3-58図61	京都系土師器	坏	在地	10.2	—	3.3	B-SK020		
第3-58図62	京都系土師器	坏	在地	10.8	—	3.0	B-SK020		
第3-58図63	京都系土師器	坏	在地	12.3	—	3.0	B-SK020		
第3-58図64	京都系土師器	坏	在地	11.8	—	3.4	B-SK020		
第3-58図65	京都系土師器	坏	在地	12.0	—	3.6	B-SK020		
第3-59図67	土師器	坏蓋	在地	15.9	—	—	B-SK020		
第3-59図68	土師器	坏	在地	15.3	—	—	B-SK020		
第3-59図69	土師器	坏	在地	12.9	7.1	3.1	B-SK020		
第3-59図70	土師器	坏	在地	14.8	9.3	3.5	B-SK020		
第3-59図71	土師器	坏	在地	14.7	6.5	3.7	B-SK020		
第3-59図72	土師器	坏	在地	—	7.4	—	B-SK020		
第3-59図73	土師器	坏	在地	—	8.0	—	B-SK020		
第3-59図74	土師器	坏	在地	—	8.0	—	B-SK020		
第3-59図75	土師器	坏	在地	—	8.7	—	B-SK020		
第3-59図76	土師器	盤	在地	—	—	1.8	B-SK020		
第3-59図77	土師器	盤	在地	14.6	7.9	1.3	B-SK020		
第3-59図78	土師器	甕	在地	—	—	—	B-SK020		
第3-59図79	土師器	甕	在地	15.1	—	—	B-SK020		
第3-59図80	土師器	甕	在地	15.1	—	—	B-SK020		
第3-59図81	土師器	甕	在地	22.1	—	—	B-SK020		
第3-59図82	土師器	甕	在地	23.9	—	—	B-SK020		
第3-59図83	土師器	甕	在地	20.6	—	—	B-SK020		
第3-62図1	陶器	天目	瀬戸美濃	—	—	—	B-SK022		
第3-62図2	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK022		
第3-62図3	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK022		
第3-62図4	瓦質土器	鉢	国内	35.2	—	—	B-SK022		
第3-65図2	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.2	1.1	B-SK023		
第3-65図3	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.5	1.2	B-SK023		
第3-65図4	在地系土師器	皿	在地	8.6	7.0	1.3	B-SK023		
第3-65図5	在地系土師器	皿	在地	8.8	7.7	1.1	B-SK023		

## 遺物観察表25

## 府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑨

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-65図6	在地系土師器	皿	在地	8.8	6.8	1.1	B-SK023		
第3-65図7	在地系土師器	坏	在地	12.8	9.0	3.1	B-SK024		
第3-65図8	青磁	碗	龍泉窯	—	5.6	—	B-SK024		
第3-65図9	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.0	1.0	B-SK024		
第3-65図10	在地系土師器	皿	在地	8.9	7.6	1.6	B-SK024		
第3-65図11	在地系土師器	坏	在地	—	9.5	—	B-SK024		
第3-65図12	土師質土器	碗	吉備系	—	4.6	—	B-SK024		
第3-68図1	土師器	坏	在地	13.8	7.9	3.4	B-SK047		
第3-68図2	土師器	甗	在地	23.4	—	15.5	B-SK047	埋納土器	
第3-70図1	在地系土師器	皿	在地	7.5	6.7	1.3	B-SK048		15
第3-70図2	在地系土師器	皿	在地	9.1	7.2	1.2	B-SK048		15
第3-70図3	在地系土師器	皿	在地	8.5	7.0	1.1	B-SK048		15
第3-70図4	在地系土師器	皿	在地	9.0	7.2	1.1	B-SK048		15
第3-70図5	在地系土師器	皿	在地	8.3	6.3	1.3	B-SK048		15
第3-70図6	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.3	1.2	B-SK048		15
第3-70図7	在地系土師器	皿	在地	8.3	6.6	1.2	B-SK048		15
第3-70図8	在地系土師器	皿	在地	8.8	6.1	1.8	B-SK048		15
第3-70図9	在地系土師器	坏	在地	12.4	9.5	2.6	B-SK048		15
第3-70図10	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.1	2.9	B-SK048		15
第3-70図11	在地系土師器	坏	在地	13.0	9.8	3.0	B-SK048		15
第3-70図12	在地系土師器	坏	在地	13.2	10.2	2.9	B-SK048		15
第3-70図13	在地系土師器	坏	在地	12.4	9.1	3.2	B-SK048		15
第3-70図14	在地系土師器	坏	在地	12.7	9.1	2.8	B-SK048		15
第3-70図15	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.3	3.0	B-SK048		15
第3-70図16	在地系土師器	坏	在地	12.3	9.0	2.2	B-SK048		15
第3-70図17	在地系土師器	坏	在地	12.6	9.6	2.7	B-SK048		15
第3-72図19	在地系土師器	坏	在地	12.9	7.3	3.1	B-SK048		
第3-72図20	在地系土師器	坏	在地	12.1	7.4	3.3	B-SK048		
第3-72図21	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.4	2.7	B-SK048		
第3-72図22	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.8	3.0	B-SK048		
第3-72図23	在地系土師器	坏	在地	12.7	9.0	2.9	B-SK048		
第3-72図24	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK048		
第3-72図25	土師器	坏	在地	—	7.8	—	B-SK048	古代	
第3-72図26	瓦質土器		国内	—	—	—	B-SK048	器種不明	
第3-73図1	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SK057		
第3-73図2	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SK057		
第3-75図1	京都系土師器	皿	在地	7.6	—	2.3	B-SK060		
第3-75図2	土師器	碗	在地	—	—	—	B-SK060	古代	
第3-78図1	在地系土師器	坏	在地	12.8	9.2	2.6	B-SK063		
第3-78図2	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.6	2.8	B-SK063		
第3-78図3	在地系土師器	坏	在地	13.0	9.5	2.9	B-SK063		
第3-80図1	在地系土師器	皿	在地	7.6	6.8	1.2	B-SK066		
第3-80図2	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.8	1.4	B-SK066		
第3-80図3	土師器	坏蓋	在地	14.6	—	—	B-SK066		
第3-80図4	土師器	坏蓋	在地	17.8	—	—	B-SK066		
第3-80図5	土師器	甗	在地	24.8	—	—	B-SK066		
第3-81図1	白磁	碗	中国	—	5.8	—	B-SK096		
第3-81図2	陶器	皿	瀬戸美濃	10.0	—	—	B-SK096	折縁ソギ皿	
第3-81図3	陶器	皿	瀬戸美濃	10.6	6.0	2.2	B-SK096		
第3-81図4	陶器	皿	瀬戸美濃	8.0	4.0	2.0	B-SK096		
第3-81図6	青磁	碗	龍泉窯	—	5.0	—	B-SK096		
第3-81図8	陶器	小坏	備前	3.8	—	2.4	B-SK096		
第3-81図9	陶器	播鉢	備前	26.0	—	—	B-SK096		
第3-81図10	陶器	播鉢	備前	—	—	14.2	B-SK096		
第3-81図11	陶器	播鉢	備前	—	—	—	B-SK096		
第3-81図12	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.0	1.2	B-SK096		
第3-81図13	在地系土師器	坏	在地	12.0	7.6	3.3	B-SK096		
第3-81図14	瓦質土器	鉢	国内	33.4	—	—	B-SK096		
第3-81図15	瓦質土器	鉢	国内	31.8	—	—	B-SK096		
第3-81図16	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.5	B-SK096		
第3-81図17	土師器	甗	在地	—	—	—	B-SK096		
第3-81図18	土師器	甗	在地	18.4	—	—	B-SK096		
第3-83図1	陶器	德利	備前	—	6.4	—	B-SK097	「太」銘	13
第3-83図2	陶器	大甗	備前	—	—	—	B-SK097	「ひねり土」の銘	13
第3-83図3	陶器	小甗	備前	4.0	—	—	B-SK097	「太」銘	13
第3-83図4	陶器	播鉢	備前	31.2	16.2	12.1	B-SK097		
第3-83図5	在地系土師器	坏	在地	—	8.8	—	B-SK097		
第3-83図6	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	B-SK097		
第3-83図7	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	2.2	B-SK097		
第3-83図8	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK097		
第3-85図1	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.4	3.3	B-SK098		
第3-85図2	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.8	2.7	B-SK098		
第3-85図3	在地系土師器	坏	在地	13.1	9.3	3.5	B-SK098		
第3-85図4	在地系土師器	坏	在地	13.0	9.4	3.2	B-SK098		
第3-88図1	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.0	1.2	B-SK107		

遺物觀察表26

府内町跡20次調査B区出土遺物觀察表(土器・陶磁器類)⑩

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第3-88図2	在地系土師器	坏	在地	12.0	9.0	2.9	B-SK107	
第3-90図1	瓦質土器	擂鉢	防長系	28.8	—	—	B-SK113	
第3-91図1	在地系土師器	坏	在地	11.9	8.7	3.0	B-SK122	
第3-91図2	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.6	2.8	B-SK122	
第3-94図1	陶器	皿	瀬戸美濃	10.0	6.0	2.1	B-SK124	
第3-94図2	青花	皿	漳州窯	10.0	5.0	2.8	B-SK124	
第3-94図3	青磁	皿	景德鎮窯	11.2	6.4	2.7	B-SK124	
第3-94図4	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	—	B-SK124	
第3-94図5	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	1.9	B-SK124	
第3-94図6	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK124	
第3-96図1	青磁	碗	龍泉窯	15.8	—	—	B-SK126	
第3-96図2	白磁	皿	中国	9.9	4.9	2.2	B-SK126	
第3-96図3	在地系土師器	坏	在地	12.0	9.3	2.9	B-SK126	
第3-96図4	在地系土師器	坏	在地	12.9	7.0	4.4	B-SK126	
第3-96図5	在地系土師器	坏	在地	12.9	6.5	3.8	B-SK126	
第3-96図6	土師質土器	碗	吉備系	—	5.0	—	B-SK126	
第3-96図7	土師質土器	碗	吉備系	—	5.0	—	B-SK126	
第3-96図8	瓦質土器	鉢	国内	—	28.4	—	B-SK126	
第3-96図9	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK126	
第3-96図10	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK126	
第3-97図1	須恵器	坏	在地	—	7.8	—	B-SK128	
第3-97図2	須恵器	坏	在地	—	7.6	—	B-SK128	
第3-100図1	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK131	
第3-100図2	土師質土器	碗	吉備系	—	4.4	—	B-SK131	
第3-100図3	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SK131	
第3-102図1	在地系土師器	坏	在地	13.2	7.0	3.9	B-SK132	
第3-102図2	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.7	3.1	B-SK132	
第3-106図1	陶器	甕	常滑	30.3	—	—	B-SK146	13
第3-106図2	青花	碗	州窯	—	5.0	—	B-SK146	
第3-106図3	須恵器	長頸壺	在地	—	10.6	—	B-SK146	
第3-108図1	在地系土師器	皿	在地	7.8	5.0	1.6	B-SK147	
第3-108図2	在地系土師器	坏	在地	12.3	8.0	3.7	B-SK147	
第3-108図3	在地系土師器	坏	在地	12.5	8.4	3.5	B-SK147	
第3-108図4	在地系土師器	坏	在地	12.4	—	—	B-SK147	
第3-110図1	在地系土師器	皿	在地	8.6	6.8	1.2	B-SK153	
第3-113図1	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.1	2.7	B-SK157	
第3-113図2	京都系土師器	皿	在地	5.6	—	1.4	B-SK157	
第3-115図1	陶器	皿	瀬戸美濃	3.1	3.0	0.6	B-SK161	
第3-115図2	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK161	
第3-115図3	瓦質土器	擂鉢	防長系	—	10.2	—	B-SK161	
第3-118図1	陶器	甕	常滑	—	—	—	B-SK170	
第3-118図2	瓦質土器	鉢	国内	41.4	—	—	B-SK170	
第3-120図1	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.0	1.3	B-SK177	
第3-120図2	瓦質土器	鉢	国内	28.0	—	—	B-SK177	
第3-120図3	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK177	
第3-123図1	須恵質土器	鉢	東播系	28.3	—	—	B-SK179	
第3-125図1	在地系土師器	坏	在地	12.0	6.0	3.6	B-SK184	15
第3-125図2	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.9	3.1	B-SK184	15
第3-125図3	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.4	3.1	B-SK184	15
第3-125図4	在地系土師器	坏	在地	12.2	8.4	2.9	B-SK184	15
第3-125図5	在地系土師器	坏	在地	12.9	8.7	3.2	B-SK184	15
第3-125図6	在地系土師器	坏	在地	12.4	9.4	2.9	B-SK184	15
第3-127図1	須恵質土器	鉢	東播系	26.1	—	—	B-SK187	
第3-127図2	須恵質土器	鉢	東播系	27.4	9.8	10.3	B-SK187	14
第3-128図1	京都系土師器	皿	在地	13.8	—	7.0	B-SK012	
第3-128図3	瓦質土器	壺	国内	—	—	—	B-SK092	
第3-128図4	青磁	皿	龍泉窯	—	—	—	B-SK090	
第3-128図5	在地系土師器	坏	在地	11.6	6.8	2.3	B-SK090	
第3-128図6	在地系土師器	坏	在地	12.5	9.2	3.4	B-SK090	
第3-128図7	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.2	B-SK090	
第3-128図8	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	2.4	B-SK090	
第3-128図9	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SK090	
第3-128図10	須恵器	坏蓋	在地	15.4	—	—	B-SK090	
第3-128図11	在地系土師器	坏	在地	12.1	8.4	2.7	B-SK108	
第3-128図12	在地系土師器	坏	在地	12.3	9.0	3.1	B-SK108	
第3-128図13	土師質土器	碗	吉備系	10.2	—	—	B-SK108	
第3-128図14	褐釉陶器	小壺	中国	—	—	—	B-SK123	
第3-128図15	土師質土器	碗	吉備系	—	4.5	—	B-SK123	
第3-128図17	土師器	皿	在地	—	—	—	B-SK148	古代
第3-128図18	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	B-SK148	
第3-128図19	須恵質土器	鉢	東播系	29.6	—	—	B-SK148	
第3-128図20	須恵器	坏蓋	在地	13.4	—	—	B-SK148	古代
第3-128図21	在地系土師器	皿	在地	8.0	5.6	1.5	B-SK129	
第3-128図22	在地系土師器	坏	在地	12.4	9.4	3.0	B-SK129	
第3-128図23	在地系土師器	坏	在地	13.4	11.1	3.3	B-SK129	

遺物観察表27

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)①

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-128図24	須恵器	坏	在地	12.5	9.4	4.0	B-SK129		
第3-129図1	陶器	播鉢	備前	—	—	—	B-SK156		
第3-129図2	陶器	播鉢	備前	—	—	—	B-SK156		
第3-129図3	須恵質土器	甗	亀山系	—	—	—	B-SK156		
第3-129図4	在地系土師器	皿	在地	7.1	5.8	1.1	B-SK156		
第3-129図5	在地系土師器	皿	在地	8.3	6.9	1.2	B-SK156		
第3-129図6	在地系土師器	坏	在地	8.1	6.1	2.4	B-SK156		
第3-129図7	土師器	甗	在地	—	—	—	B-SK156	古代	
第3-129図8	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK156		
第3-129図9	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK156		
第3-129図10	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SK156		
第3-129図12	京都系土師器	坏	在地	12.6	—	3.5	B-SK188		
第3-129図13	土師質土器	甗	在地	25.0	—	—	B-SK188		
第3-129図14	瓦質土器	鉢	国内	30.4	—	—	B-SK188		
第3-129図15	瓦質土器	鉢	国内	34.8	22.8	5.8	B-SK188		
第3-131図1	青磁	碗	龍泉窯	—	4.0	—	B-SE006		
第3-131図2	京都系土師器	皿	在地	11.7	—	1.9	B-SE006		
第3-131図3	京都系土師器	坏	在地	11.3	—	3.5	B-SE006		
第3-131図4	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SE006		
第3-131図5	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SE006	菊花文スタンプ	
第3-131図9	瓦質土器	鉢	国内	33.3	20.2	22.9	B-SE006		
第3-131図11	土師器	坏	在地	—	7.9	—	B-SE006	14	
第3-134図1	在地系土師器	皿	在地	7.0	5.6	0.9	B-SE009		
第3-134図2	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.6	1.1	B-SE009		
第3-134図3	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.2	1.1	B-SE009		
第3-134図4	在地系土師器	皿	在地	8.6	6.8	1.1	B-SE009		
第3-134図5	在地系土師器	皿	在地	7.5	6.0	1.6	B-SE009		
第3-134図6	在地系土師器	皿	在地	7.6	6.6	1.1	B-SE009		
第3-134図7	在地系土師器	坏	在地	11.0	6.6	2.9	B-SE009		
第3-134図8	在地系土師器	坏	在地	11.0	8.6	2.8	B-SE009		
第3-134図9	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.0	2.6	B-SE009		
第3-134図10	在地系土師器	坏	在地	—	6.1	—	B-SE009		
第3-134図11	在地系土師器	坏	在地	11.6	7.6	3.2	B-SE009		
第3-134図12	在地系土師器	坏	在地	12.0	9.0	2.7	B-SE009		
第3-134図13	在地系土師器	坏	在地	11.2	9.2	2.5	B-SE009		
第3-134図14	在地系土師器	坏	在地	12.4	9.0	3.1	B-SE009		
第3-134図15	在地系土師器	坏	在地	11.8	7.8	3.5	B-SE009		
第3-134図16	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.1	3.5	B-SE009		
第3-134図17	在地系土師器	坏	在地	12.6	7.2	4.1	B-SE009		
第3-134図18	在地系土師器	坏	在地	13.2	9.6	3.4	B-SE009		
第3-134図19	在地系土師器	坏	在地	13.2	9.8	3.5	B-SE009		
第3-134図20	土師質土器	燭台	在地	9.3	—	—	B-SE009		
第3-134図21	土師質土器	碗	吉備系	—	—	—	B-SE009		
第3-134図22	土師質土器	碗	吉備系	10.2	—	—	B-SE009		
第3-134図23	土師質土器	碗	吉備系	—	4.2	—	B-SE009		
第3-134図24	土師質土器	碗	吉備系	—	4.8	—	B-SE009		
第3-134図25	土師質土器	碗	吉備系	—	4.5	—	B-SE009		
第3-135図26	陶器	壺	吉備系	—	—	—	B-SE009		
第3-135図27	陶器	壺	吉備系	—	—	—	B-SE009		
第3-135図28	陶器	播鉢	吉備系	32.0	—	—	B-SE009		
第3-135図29	須恵質土器	甗	東播系	18.7	—	—	B-SE009		
第3-135図30	須恵質土器	甗	東播系	26.9	—	—	B-SE009		
第3-135図31	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SE009		
第3-135図32	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SE009		
第3-135図33	須恵質土器	鉢	東播系	32.4	—	—	B-SE009		
第3-135図34	須恵質土器	鉢	東播系	—	10.0	—	B-SE009		
第3-135図35	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SE009		
第3-135図36	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SE009		
第3-135図37	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SE009		
第3-135図38	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SE009		
第3-135図39	土師質土器	土鍋	在地	31.4	—	13.6	B-SE009	14	
第3-136図40	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SE009		
第3-136図41	土師質土器	土鍋	在地	26.7	—	—	B-SE009		
第3-136図42	土師質土器	土鍋	在地	28.2	—	—	B-SE009		
第3-136図43	土師質土器	土鍋	在地	24.6	—	—	B-SE009		
第3-136図44	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SE009		
第3-136図48	土師器	皿	在地	14.0	7.8	2.5	B-SE009		
第3-136図49	土師器	皿	在地	13.0	—	—	B-SE009		
第3-136図50	土師器	皿	在地	13.0	—	—	B-SE009		
第3-136図51	土師器	鉢	在地	23.6	—	—	B-SE009		
第3-136図52	弥生土器	甗	在地	32.7	—	—	B-SE009		
第3-136図53	弥生土器	壺	在地	—	—	—	B-SE009		
第3-138図1	陶器	播鉢	備前	23.3	13.3	9.1	B-SE010	13	
第3-138図2	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.7	1.2	B-SE010		
第3-138図3	在地系土師器	坏	在地	11.2	8.4	3.0	B-SE010		

遺物観察表28

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表（土器・陶磁器類）⑫

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-138図4	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.4	3.0	B-SE010		
第3-138図5	在地系土師器	坏	在地	12.1	8.2	3.3	B-SE010		
第3-138図6	在地系土師器	坏	在地	12.5	8.9	2.8	B-SE010		
第3-138図7	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.8	B-SE010		
第3-138図8	土師質土器	碗	吉備系	9.7	—	—	B-SE010		
第3-138図9	土師質土器	碗	吉備系	11.3	—	—	B-SE010		
第3-138図10	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SE010		
第3-138図11	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	B-SE010		
第3-138図14	瓦質土器	鉢	国内	—	31.8	—	B-SE010		
第3-138図15	土師器	坏蓋	在地	17.2	—	—	B-SE010		
第3-138図16	土師器	坏蓋	在地	14.2	—	—	B-SE010		
第3-138図17	土師器	坏	在地	13.6	—	—	B-SE010		
第3-138図18	土師器	高坏	在地	—	—	—	B-SE010		
第3-138図19	須恵器	坏	在地	—	10.0	—	B-SE010		
第3-141図1	在地系土師器	皿	在地	8.6	7.0	1.5	B-SE017		
第3-141図2	在地系土師器	坏	在地	9.8	7.4	2.0	B-SE017		
第3-141図3	在地系土師器	坏	在地	12.5	10.2	2.9	B-SE017		
第3-141図4	在地系土師器	坏	在地	12.3	7.4	3.6	B-SE017		
第3-141図5	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.0	2.7	B-SE017		
第3-141図6	土師質土器	碗	吉備系	10.8	3.4	4.2	B-SE017		14
第3-141図7	土師質土器	碗	吉備系	—	—	—	B-SE017		
第3-141図8	土師質土器	皿	—	—	—	—	B-SE017	白色系	
第3-141図9	土師質土器	埴塙	在地	4.3	—	—	B-SE017		
第3-141図10	瓦質土器	碗	在地	4.3	—	—	B-SE017		
第3-141図11	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SE017		
第3-141図12	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SE017		
第3-141図13	須恵質土器	鉢	東播系	32.7	—	—	B-SE017		
第3-141図14	須恵質土器	鉢	東播系	32.6	—	—	B-SE017		
第3-141図15	須恵質土器	甗	龟山系	34.2	—	—	B-SE017		
第3-141図16	須恵器	長頸壺	在地	—	—	—	B-SE017		
第3-141図17	土師器	碗	在地	—	—	—	B-SE017		
第3-141図18	土師器	高坏	在地	—	—	—	B-SE017		
第3-142図1	陶器	壺	備前	—	—	—	B-SE056		
第3-142図2	在地系土師器	皿	在地	8.6	7.1	1.1	B-SE056		
第3-142図3	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.5	1.3	B-SE056		
第3-142図4	在地系土師器	皿	在地	7.5	6.2	1.2	B-SE056		
第3-142図5	土師質土器	碗	吉備系	—	4.0	—	B-SE056		
第3-142図6	瓦質土器	鉢	在地	—	—	—	B-SE056		
第3-142図7	土師質土器	土鍋	在地	—	31.4	—	B-SE056		
第3-156図1	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.2	1.4	B-SP113		
第3-156図2	在地系土師器	皿	在地	8.1	6.8	1.3	B-SP113		
第3-156図3	在地系土師器	皿	在地	8.1	6.4	1.4	B-SP113		
第3-156図4	在地系土師器	坏	在地	11.7	8.3	3.0	B-SP113		
第3-158図1	土師器	坏	在地	15.0	7.9	5.5	B-SP032		
第3-158図2	土師器	坏	在地	13.0	7.2	3.8	B-SP051		
第3-158図3	在地系土師器	皿	在地	—	—	1.2	B-SP052		
第3-158図4	在地系土師器	坏	在地	11.8	9.3	2.7	B-SP052		
第3-158図5	土師器	坏	在地	—	8.6	—	B-SP052		
第3-158図6	土師器	坏	在地	12.8	7.5	3.8	B-SP053		
第3-158図7	土師器	坏	在地	13.5	8.0	3.8	B-SP055		
第3-158図8	土師質土器	碗	吉備系	10.4	3.8	2.9	B-SP055		
第3-158図9	土師質土器	甗	在地	—	—	—	B-SP055		
第3-158図10	土師器	坏	在地	—	—	—	B-SP062		
第3-158図11	土師器	坏	在地	13.3	7.6	3.6	B-SP068		
第3-158図12	土師器	坏	在地	13.6	—	—	B-SP068		
第3-158図13	土師器	坏	在地	—	6.6	—	B-SP084		
第3-158図14	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.3	B-SP185		
第3-159図2	在地系土師器	坏	在地	12.1	8.5	2.8	B-SP065		
第3-159図3	在地系土師器	坏	在地	11.6	8.9	3.0	B-SP070		
第3-159図5	土師器	坏	在地	—	8.8	—	B-SP073		
第3-159図6	白磁	皿	中国	—	—	—	B-SP083		
第3-159図7	陶器	水屋甗	備前	—	—	—	B-SP091		
第3-159図8	土師器	坏	在地	15.2	8.3	5.1	B-SP094		
第3-159図9	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.4	2.8	B-SP102		
第3-159図10	在地系土師器	皿	在地	8.3	6.6	1.2	B-SP109		
第3-159図11	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.0	3.2	B-SP109		
第3-159図12	土師質土器	碗	吉備系	—	—	—	B-SP110		
第3-159図13	土師質土器	碗	吉備系	—	4.4	—	B-SP110		
第3-159図14	在地系土師器	坏	在地	12.3	8.6	3.2	B-SP130		
第3-159図16	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.3	3.4	B-SP135		
第3-159図17	在地系土師器	坏	在地	13.2	9.5	2.6	B-SP135		
第3-159図18	在地系土師器	坏	在地	12.3	9.0	3.0	B-SP131		
第3-159図19	陶器	插鉢	備前	—	—	—	B-SP139		
第3-159図20	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.9	1.1	B-SP144		
第3-159図21	土師器	坏	在地	—	6.8	—	B-SP149		



遺物観察表29

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑬

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第3-159図22	土師質土器	碗	吉備系	10.1	—	—	B-SP151		
第3-159図23	在地系土師器	皿	在地	8.3	7.2	1.0	B-SP151		
第3-159図24	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SP151		
第3-159図25	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.1	1.2	B-SP159		
第3-159図26	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.4	1.3	B-SP165		
第3-159図27	在地系土師器	坏	在地	13.0	9.4	3.1	B-SP189		
第3-161図1	青花	碗	漳州窯	12.3	4.8	5.0	K-47		
第3-161図2	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	L-42		
第3-161図3	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	L-42		
第3-161図4	青磁	碗	龍泉窯	—	5.4	—	K-46		
第3-161図5	白磁	小杯	中国	5.0	—	—	L-42		
第3-161図6	緑釉	碗	国内	—	5.4	—	L-46	古代	
第3-161図7	焼締陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	K-46		
第3-161図8	焼締陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	K-46		
第3-161図9	焼締陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	K-46		
第3-161図10	焼締陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	K-46		
第3-161図11	陶器	天目	瀬戸美濃	11.6	—	—	包含屑		
第3-161図12	陶器	皿	瀬戸美濃	10.5	5.9	2.5	L-42		
第3-161図13	陶器	梅瓶	瀬戸美濃	—	—	—	K-44		
第3-161図14	陶器	壺	備前	—	—	—	包含屑		
第3-161図15	陶器	鉢	備前	—	—	—	K-43		
第3-161図16	陶器	小壺	備前	6.6	—	—	K-46		
第3-161図17	陶器	鉢	備前	13.4	—	—	包含屑		
第3-161図18	陶器	急須	備前	—	—	—	K-43		
第3-161図19	陶器	德利	備前	—	6.2	—	K-46		
第3-161図20	陶器	德利	備前	—	9.0	—	K-43		
第3-161図21	陶器	德利	備前	—	10.2	—	包含屑		
第3-161図22	陶器	皿	備前	—	—	—	K-46		
第3-161図23	陶器	皿	備前	—	—	—	K-46		
第3-162図24	陶器	壺	備前	39.4	—	—	L-47		
第3-162図25	陶器	播鉢	備前	31.6	—	—	L-46		
第3-162図26	陶器	播鉢	備前	27.2	13.2	12.4	包含屑		
第3-162図27	陶器	播鉢	備前	—	—	—	L-46		
第3-162図28	陶器	播鉢	備前	—	—	—	K-42		
第3-162図29	陶器	播鉢	備前	—	—	—	L-46		
第3-162図30	陶器	播鉢	備前	—	—	—	包含屑		
第3-162図31	陶器	播鉢	備前	35.8	—	—	S-63 上面		
第3-162図32	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.6	1.3	K-45		
第3-162図33	在地系土師器	皿	在地	8.6	7.0	1.1	K-43		
第3-162図34	在地系土師器	皿	在地	7.4	5.4	1.0	包含屑		
第3-162図35	在地系土師器	皿	在地	7.4	6.6	1.1	K-42		
第3-162図36	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.6	1.2	K-42		
第3-162図37	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.0	1.1	K-42		
第3-162図38	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.0	0.8	K-42		
第3-162図39	在地系土師器	皿	在地	7.5	6.3	1.2	包含屑		
第3-162図40	在地系土師器	皿	在地	7.6	6.0	1.5	包含屑		
第3-162図41	在地系土師器	皿	在地	7.2	6.0	1.0	K-45		
第3-163図42	在地系土師器	坏	在地	7.8	6.0	2.0	L-42		
第3-163図43	在地系土師器	坏	在地	11.0	7.2	3.0	K-43		
第3-163図44	在地系土師器	坏	在地	10.8	6.4	2.8	M-42		
第3-163図45	在地系土師器	坏	在地	10.0	7.0	2.8	K-43		
第3-163図46	在地系土師器	坏	在地	12.0	—	—	K-43		
第3-163図47	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.0	2.3	K-44		
第3-163図48	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.0	—	L-47		
第3-163図49	在地系土師器	坏	在地	12.0	9.0	2.5	K-46		
第3-163図50	在地系土師器	坏	在地	10.4	7.8	3.2	K-43		
第3-163図51	在地系土師器	坏	在地	12.3	8.4	3.3	K-45		
第3-163図52	在地系土師器	坏	在地	10.8	7.8	2.1	K-42		
第3-163図53	在地系土師器	坏	在地	11.7	8.2	3.7	L-42		
第3-163図54	在地系土師器	坏	在地	12.8	9.6	2.9	包含屑		
第3-163図55	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.5	3.7	L-43		
第3-163図56	在地系土師器	坏	在地	—	7.6	—	L-44		
第3-163図57	土師質土器	碗	吉備系	11.2	4.4	3.2	K-43		
第3-163図58	土師質土器	碗	吉備系	—	4.5	—	K-44		
第3-163図59	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.1	包含屑		
第3-163図60	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	2.1	K-46		
第3-163図61	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.2	K-42		
第3-163図62	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	—	K-44		
第3-163図63	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	K-43		
第3-163図64	京都系土師器	坏	在地	—	—	3.0	K-46		
第3-163図65	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.3	K-46		
第3-163図66	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.0	K-43		
第3-163図67	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	—	包含屑		
第3-163図68	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	—	K-42		
第3-163図69	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.2	K-44		

遺物観察表30

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑭

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-163図70	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	2.5	K-46		
第3-163図71	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	—	包含層		
第3-163図72	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	包含層		
第3-163図73	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.5	K-42		
第3-163図74	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.5	包含層		
第3-164図75	土師質土器	土鍋	在地	21.4	—	—	包含層		
第3-164図76	土師質土器	土鍋	在地	24.6	—	—	K-42		
第3-164図77	土師質土器	土鍋	在地	—	—	—	包含層		
第3-164図78	土師質土器	土鍋	在地	29.4	—	—	包含層		
第3-164図79	土師質土器	土鍋	在地	32.8	—	—	包含層		
第3-164図80	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	L-43		
第3-164図81	土師質土器	土鍋	在地	34.8	—	—	包含層		
第3-164図82	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	K-43		
第3-164図83	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	包含層		
第3-164図84	須恵質土器	鉢	東播系	24.0	—	—	K-43		
第3-164図85	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	L-43		
第3-164図86	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	L-46		
第3-164図87	須恵質土器	鉢	東播系	26.0	—	—	K-43		
第3-164図88	須恵質土器	鉢	東播系	27.8	—	—	K-43		
第3-164図89	須恵質土器	鉢	東播系	24.6	—	—	K-43		
第3-164図90	須恵質土器	鉢	東播系	27.6	—	—	包含層		
第3-164図91	須恵質土器	鉢	東播系	—	8.3	—	L-43		
第3-164図92	須恵質土器	鉢	東播系	—	9.0	—	包含層		
第3-165図93	須恵質土器	甗	亀山系	33.2	—	—	包含層		
第3-165図94	須恵質土器	甗	亀山系	—	—	—	包含層		
第3-165図95	須恵質土器	甗	亀山系	—	—	—	包含層		
第3-165図96	須恵質土器	甗	亀山系	—	—	—	L-43		
第3-165図97	須恵質土器	甗	亀山系	—	—	—	K-42		
第3-165図98	瓦質土器	鉢	国内	31.4	18.0	10.4	K-45		
第3-165図99	瓦質土器	鉢	国内	36.3	23.0	10.3	K-42		
第3-165図100	瓦質土器	鉢	国内	36.8	—	—	包含層		
第3-165図101	瓦質土器	鉢	国内	34.4	—	—	包含層		
第3-165図102	瓦質土器	鉢	国内	—	21.4	—	K-42		
第3-166図113	土師質土器	燭台	在地	—	6.0	—	K-43		
第3-166図114	土師質土器	燭台	在地	—	5.8	—	包含層		
第3-166図115	土師質土器	燭台	在地	—	6.8	—	K-45		
第3-167図128	土師器	坏蓋	在地	16.6	—	1.5	L-42		
第3-167図129	土師器	皿	在地	17.0	—	2.8	K-44		
第3-167図130	土師器	坏	在地	13.8	6.5	3.6	L-46		
第3-167図131	土師器	坏	在地	12.8	—	3.1	K-46		
第3-167図132	土師器	坏	在地	13.0	7.0	3.1	L-45		
第3-167図133	土師器	坏	在地	13.4	—	—	包含層		
第3-167図134	土師器	坏	在地	13.4	7.6	4.2	L-46		
第3-167図135	土師器	坏	在地	15.0	—	3.7	K-42		
第3-167図136	土師器	坏	在地	—	7.8	—	L-46		
第3-167図137	瓦質土器	坏	在地	12.8	7.4	3.3	L-47		
第3-167図138	土師器	坏	在地	—	9.6	—	K-46		
第3-167図139	土師器	坏	在地	—	11.5	—	包含層		
第3-167図140	土師器	坏	在地	—	8.2	—	K-46		
第3-167図141	土師器	甗	在地	—	—	—	K-44		
第3-167図142	土師器	甗	在地	—	—	—	L-46		
第3-167図143	土師器	甗	在地	24.2	—	—	L-45		
第3-167図144	土師器	甗	在地	13.4	—	—	K-46		
第3-167図145	土師器	甗	在地	14.2	—	—	包含層		
第3-167図146	土師器	甗	在地	24.8	—	—	K-45		
第3-167図147	土師器	甗	在地	21.4	—	—	L-46		
第3-167図148	土師器	甗	在地	—	19.0	—	K-46		
第3-167図149	土師器	甗	在地	—	19.0	—	包含層		
第3-167図150	弥生土器	甗	在地	22.0	—	—	K-47	複合口縁の鋸歯文	
第3-167図151	弥生土器	甗	在地	—	4.2	—	K-42		
第3-167図152	弥生土器	高坏	在地	—	—	—	K-44		
第3-167図153	弥生土器	高坏	在地	—	—	—	包含層		

遺物観察表31

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土製品・石製品)①

挿図No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第3-19図208	石鍋	滑石		—	—	—	22.2	B-SD003		
第3-19図209	石鍋	滑石		—	—	—	14.2	B-SD003		
第3-19図210	石鍋	滑石		—	—	—	118.2	B-SD003	再加工品	
第3-19図211	石鍋	滑石		—	—	—	113.8	B-SD003		
第3-19図212	石鍋	滑石		—	—	—	78.8	B-SD003	底部径20.8cm	
第3-19図213	砥石	石製		4.3	4.0	0.5	20.8	B-SD003		
第3-19図214	土錘	土製		2.6	—	1.0	2.7	B-SD003		
第3-19図215	土錘	土製		3.1	—	1.0	2.9	B-SD003		
第3-19図216	土錘	土製		2.7	—	0.9	2.7	B-SD003		
第3-19図217	土錘	土製		23.0	—	1.5	2.2	B-SD003		
第3-19図218	土錘	土製		2.7	—	1.2	4.2	B-SD003		
第3-19図219	土錘	土製		2.9	—	0.9	1.8	B-SD003		
第3-19図220	土錘	土製		2.7	—	1.1	3.0	B-SD003		
第3-19図221	土錘	土製		4.1	—	1.1	3.8	B-SD003		
第3-19図222	土錘	土製		4.5	—	1.0	4.2	B-SD003		
第3-19図223	土錘	土製		3.5	—	1.1	4.0	B-SD003		
第3-19図224	土錘	土製		3.8	—	0.8	2.5	B-SD003		
第3-19図225	土錘	土製		4.0	—	1.3	7.8	B-SD003		
第3-19図226	土錘	土製		4.4	—	1.0	3.8	B-SD003		
第3-19図227	土錘	土製		4.1	—	0.9	3.8	B-SD003		
第3-19図228	土錘	土製		4.5	—	1.0	4.3	B-SD003		
第3-19図229	土錘	土製		3.2	—	1.1	5.5	B-SD003		
第3-19図230	土錘	土製		4.5	—	1.0	4.0	B-SD003		
第3-19図231	土錘	土製		4.7	—	0.8	2.8	B-SD003		
第3-19図232	土錘	土製		4.9	—	1.0	4.6	B-SD003		
第3-19図233	土錘	土製		4.7	—	1.0	4.9	B-SD003		
第3-19図234	土錘	土製		4.6	—	1.0	5.0	B-SD003		
第3-19図235	土錘	土製		4.7	—	0.8	3.5	B-SD003		
第3-19図236	土錘	土製		5.5	—	1.0	5.3	B-SD003		
第3-19図237	土錘	土製		5.1	—	1.1	5.0	B-SD003		
第3-19図238	土錘	土製		5.0	—	1.0	4.3	B-SD003		
第3-19図239	土錘	土製		3.4	—	1.1	4.9	B-SD003		
第3-19図240	土錘	土製		3.8	—	1.3	5.1	B-SD003		
第3-19図241	土錘	土製		3.3	—	1.8	11.1	B-SD003		
第3-25図32	土錘	土製		3.3	—	1.3	5.5	B-SD004		
第3-25図33	土錘	土製		5.1	—	1.0	5.0	B-SD004		
第3-25図34	土錘	土製		6.3	—	2.9	49.3	B-SD004		
第3-25図35	砥石	石製		7.5	2.6	0.9	35.0	B-SD004		
第3-43図151	フイゴ	土製	羽口	12.0	9.3	3.4	—	B-SD064	中空部は径3.1cm	
第3-43図153	石鍋	滑石		—	—	—	—	B-SD064	再加工品	
第3-43図154	石鍋	滑石		—	—	—	—	B-SD064	再加工品	
第3-43図155	土器片加工品	土器		3.4	3.4	1.0	12.6	B-SD064		
第3-43図156	土器片加工品	土器		5.4	6.2	1.0	39.4	B-SD064		
第3-43図157	土錘	土製		3.5	—	1.1	4.3	B-SD064		
第3-43図158	土錘	土製		3.9	—	0.8	2.6	B-SD064		
第3-43図159	土錘	土製		3.4	—	1.0	2.8	B-SD064		
第3-43図160	土錘	土製		3.7	—	1.1	4.2	B-SD064		
第3-43図161	土錘	土製		3.6	—	1.1	4.9	B-SD064		
第3-43図162	土錘	土製		3.1	—	1.1	4.0	B-SD064		
第3-43図163	土錘	土製		4.5	—	1.1	4.2	B-SD064		
第3-43図164	土錘	土製		4.6	—	1.2	6.2	B-SD064		
第3-43図165	土錘	土製		4.9	—	1.0	4.9	B-SD064		
第3-43図166	土錘	土製		5.3	—	1.0	4.9	B-SD064		
第3-43図167	土錘	土製		5.2	—	1.0	5.8	B-SD064		
第3-43図168	土錘	土製		5.2	—	1.0	5.8	B-SD064		
第3-43図169	土錘	土製		5.0	—	1.6	11.2	B-SD064		
第3-43図170	土錘	土製		4.7	—	1.0	4.6	B-SD064		
第3-43図171	土錘	土製		5.0	—	1.0	4.6	B-SD064		
第3-43図172	土錘	土製		4.9	—	1.3	8.3	B-SD064		
第3-44図175	石製容器	凝灰岩		26.4	15.0	14.4	—	B-SD064	口径・底径・高さの順	
第3-44図176	石塔	凝灰岩		—	—	16.8	—	B-SD064	八角形の台座	
第3-44図178	石製台	凝灰岩		12.9	—	11.6	—			
第3-50図16	石鍋	滑石		—	—	—	16.1	B-SK015		
第3-50図17	石鍋	滑石		—	—	—	46.8	B-SK015		
第3-50図18	土錘	土製		3.5	—	1.3	6.5	B-SK015		
第3-50図19	砥石	石製		5.4	3.7	0.9	37.3	B-SK015		
第3-57図24	石鍋	滑石		—	—	—	—	B-SK020		
第3-57図25	石鍋	滑石		—	—	—	—	B-SK020		
第3-59図84	土器片加工品	土器		3.0	2.7	0.7	5.7	B-SK020		
第3-59図85	土器片加工品	土器		4.8	3.5	1.0	14.5	B-SK020		
第3-59図87	土錘	土製		3.2	—	1.1	3.5	B-SK020		
第3-59図88	土錘	土製		3.4	—	1.1	4.1	B-SK020		
第3-59図89	土錘	土製		3.7	—	1.1	4.4	B-SK020		
第3-59図90	土錘	土製		4.0	—	0.9	3.2	B-SK020		
第3-59図91	土錘	土製		2.9	—	1.0	3.2	B-SK020		

遺物観察表32

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表（土製品・石製品）②

挿図No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第3-59図92	土錘	土製		4.5	—	1.1	4.6	B-SK020		
第3-59図93	土錘	土製		3.8	—	2.1	12.9	B-SK020		
第3-59図94	土錘	土製		4.3	—	1.6	11.5	B-SK020		
第3-81図5	土器片加工品	陶製		3.2	3.6	—	—	B-SK096	瀬戸美濃の天目	
第3-81図7	土器片加工品	陶製		4.4	4.4	—	—	B-SK096	瀬戸美濃の天目の底部	
第3-83図9	土器片加工品	土製		6.2	6.0	1.0	46.2	B-SK097		
第3-128図16	土錘	土製		4.9	—	0.9	3.4	B-SK123		
第3-129図11	土錘	土製		4.0	—	1.1	5.1	B-SK156		
第3-131図6	土錘	土製		3.7	—	1.0	3.8	B-SE006		
第3-131図7	土錘	土製		5.4	—	1.1	6.3	B-SE006		
第3-131図8	土錘	土製		5.6	—	0.9	4.1	B-SE006		
第3-131図10	砥石	石製		3.2	3.5	3.4	76.4	B-SE006		
第3-136図45	土錘	土製		4.4	—	1.2	5.7	B-SE009		
第3-136図46	土錘	土製		5.0	—	1.0	7.2	B-SE009		
第3-136図47	硯	石製		5.0	4.8	1.0	—	B-SE009	赤間石	
第3-138図12	土器片加工品	土製		3.5	3.3	1.3	17.6	B-SE010		
第3-138図13	土器片加工品	土製		4.8	4.8	1.1	33.4	B-SE010		
第3-159図1	土錘	土製		2.8	—	1.3	4.1	B-SP027		
第3-159図4	土錘	土製		3.1	—	1.0	3.0	B-SP071		
第3-159図15	砥石	石製		8.5	3.6	2.5	162.4	B-SP121		
第3-166図103	石鍋	滑石		—	—	—	43.7	L-47		
第3-166図104	石鍋	滑石		—	—	—	25.6	M-46		
第3-166図105	石鍋	滑石		—	—	—	111.6	K-43		
第3-166図106	石鍋	滑石		—	—	—	100.7	L-42		
第3-166図107	石鍋	滑石		—	—	—	48.5	包含層		
第3-166図108	石鍋	滑石		—	—	—	86.2	包含層		
第3-166図109	石鍋	滑石		—	—	—	190.3	包含層		
第3-166図110	石鍋	滑石		—	—	—	20.0	包含層	底部	
第3-166図111	石鍋	滑石		—	—	—	37.0	M-42	底部	
第3-166図112	石鍋	滑石		—	—	—	59.5	K-43	底部	
第3-166図116	土器片加工品	土器		2.9	2.5	1.3	10.8	包含層		
第3-166図117	土器片加工品	土器		2.6	2.7	1.2	9.3			
第3-166図118	土器片加工品	土器		3.6	3.4	0.8	12.2			
第3-166図119	土器片加工品	土器		3.1	2.8	1.0	10.1	K-43		
第3-166図120	土器片加工品	土器		2.1	2.1	1.3	5.0	K-42		
第3-166図121	土器片加工品	土器		3.8	3.5	1.0	14.5	包含層		
第3-166図122	土錘	土製		3.4	—	0.8	2.5	K-42		
第3-166図123	土錘	土製		5.1	—	1.4	9.3	K-42		
第3-166図124	土錘	土製		4.1	—	2.3	18.1	M-47		
第3-166図125	土錘	土製		5.2	—	2.7	34.4	包含層		
第3-168図	砥石	石製		4.0	2.5	2.6	53.6	K-46		
第3-168図	砥石	石製		5.9	4.2	2.9	106.4	K-45		
第3-168図	砥石	石製		8.3	3.4	2.0	69.2	包含層		
第3-168図	砥石	石製		9.3	8.7	7.6	509.6	包含層		
第3-168図	砥石	石製		8.7	3.8	1.2	45.5	包含層		
第3-170図	スタンプ	滑石		2.3	6.2	1.7	47.3	K-47	花卉文様	

遺物観察表33

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表（玉・ガラス製品）

挿図No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第3-19図242	玉	ガラス		0.3	0.2	—	0.1	B-SD003	らせん状にねじれる	
第3-19図243	玉	ガラス		0.3	0.2	—	0.1	B-SD003	らせん状にねじれる	
第3-19図244	玉	ガラス		0.3	0.2	—	0.1	B-SD003	らせん状にねじれる	
第3-19図245	玉	ガラス		0.8	0.8	—	0.7	B-SD003		
第3-19図246	玉	ガラス		1.0	0.9	—	0.9	B-SD003		
第3-19図247	玉	ガラス		0.9	0.8	—	0.7	B-SD003		
第3-19図248	玉	土製		1.7	1.6	—	21.0	B-SD003	貫通しない穿孔	
第3-43図173	玉	ガラス		1.0	1.0	—	0.8	B-SD064	径2mm穿孔	
第3-43図174	玉	ガラス		1.0	0.8	—	1.0	B-SD064	径2mm穿孔	
第3-59図86	玉	ガラス		0.8	0.9	—	0.7	B-SK020	径2mm穿孔	
第3-110図2	玉	土製		1.7	1.7	—	22.0	B-SK153	貫通しない穿孔	
第3-128図2	玉	ガラス		0.9	0.9	—	0.7	B-SK014	径2mm穿孔	
第3-166図126	玉	ガラス		0.9	0.8	—	0.7		包含層	
第3-166図127	玉	ガラス		1.4	0.9	—	0.8		包含層	

遺物観察表34

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(瓦類)①

挿図No.	器種	部位	法量(単位:cm)			遺構名	備考	図版No.
			長さ	幅	厚さ			
第3-26図48	鬼瓦	側縁	—	—	2.8	B-SD004		17
第3-26図49	鬼瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-26図50	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004	鳥衾?	17
第3-26図51	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		17
第3-26図52	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004	鳥衾?	
第3-26図53	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		17
第3-26図54	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		
第3-26図55	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		
第3-26図56	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		
第3-26図57	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		
第3-26図58	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004	コビキAの擦過痕	
第3-26図59	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		17
第3-27図60	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		
第3-27図61	丸瓦		—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り紐	
第3-27図62	丸瓦		—	17.0	—	B-SD004		
第3-27図63	丸瓦		—	16.8	—	B-SD004	九州タイプの吊り紐	17
第3-27図64	丸瓦		—	—	—	B-SD004	瓦当の接合痕	
第3-28図65	丸瓦		—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り紐	
第3-28図66	丸瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-28図67	丸瓦		—	16.8	—	B-SD004		
第3-28図68	丸瓦		—	14.4	—	B-SD004	九州タイプの吊り紐	
第3-28図69	丸瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-29図70	丸瓦		—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り紐痕	17
第3-29図71	丸瓦		—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り紐痕	
第3-29図72	丸瓦		—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り紐痕	
第3-29図73	丸瓦		—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り紐痕	
第3-29図74	丸瓦		—	14.0	—	B-SD004	本州タイプの吊り紐痕	
第3-29図75	丸瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-29図76	丸瓦		—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り紐	
第3-29図77	丸瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-30図78	丸瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-30図79	丸瓦		—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り紐	
第3-30図80	丸瓦		—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り紐痕	17
第3-30図81	丸瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-30図82	丸瓦		—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り紐	17
第3-30図83	丸瓦		—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り紐痕	
第3-30図84	丸瓦		—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り紐	
第3-30図85	丸瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-31図86	平瓦	軒平	—	—	3.6	B-SD004	瓦当の幅3.6cm	
第3-31図87	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004	瓦当の幅5.9cm	17
第3-31図88	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004	瓦当の幅4.4cm	17
第3-31図89	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004		
第3-31図90	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004	瓦当の幅5.5cm	
第3-31図91	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004	瓦当の幅5.9cm	17
第3-31図92	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004		
第3-31図93	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004		17
第3-31図94	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004	瓦当の幅5.6cm	
第3-32図95	平瓦		—	—	—	B-SD004	釘穴	
第3-32図96	平瓦		30.4	24.0	—	B-SD004		
第3-32図97	平瓦		—	24.0	—	B-SD004		
第3-33図98	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-33図99	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-33図100	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-33図101	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-33図102	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-33図103	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-33図104	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-33図105	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-33図106	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-33図107	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-34図108	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-34図109	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-34図110	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-34図111	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-34図112	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-34図113	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-34図114	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-34図115	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-34図116	平瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-35図117	雁振瓦		—	—	—	B-SD004		
第3-35図118	埴		—	—	2.6	B-SD004	菊花文のスタンプ	
第3-35図119	埴		—	—	3.2	B-SD004		
第3-35図120	埴		—	—	2.1	B-SD004	コビキAの擦過痕	
第3-35図121	埴		—	—	2.6	B-SD004		
第3-35図122	埴		—	—	3.3	B-SD004		

遺物観察表35

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(瓦類)②

挿図No.	器種	部位	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			長さ	幅	厚さ			
第3-35図123	埴		—	—	3.6	B-SD004		
第3-35図124	埴		—	—	3.3	B-SD004		
第3-35図125	埴		—	—	3.5	B-SD004		
第3-35図126	埴		—	—	3.4	B-SD004		
第3-35図127	埴		—	—	2.8	B-SD004		
第3-35図128	埴		—	—	2.9	B-SD004		

遺物観察表36

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(銅銭)

挿図No.	銭貨名	国・王朝名	初鋳造年	重さ(g)	直径(mm)	書体	遺構名	備考	図版No.
第3-22図278	開元通寶	唐	845年	1.3	—		B-SD003		
第3-22図279	咸平通寶	北宋	998年	0.9	25.0		B-SD003	磨輪銭?	
第3-22図280	景德元寶	北宋	1004年	2.0	24.5		B-SD003		
第3-22図281	天聖元寶	北宋	1023年	2.0	24.5	篆書	B-SD003	星形孔状	
第3-22図282	嘉祐通寶	北宋	1956年	3.1	24.0	真書	B-SD003	291と貼り付き出土	
第3-22図283	治平元寶	北宋	1064年	2.8	24.5	真書	B-SD003		
第3-22図284	元豊通寶	北宋	1078年	2.1	24.5	行書	B-SD003		
第3-22図285	元豊通寶	北宋	1078年	2.0	2.5	行書	B-SD003		
第3-22図286	元豊通寶	北宋	1078年	2.5	24.0	篆書	B-SD003		
第3-22図287	熙寧元寶	北宋	1068年	2.7	24.5	篆書	B-SD003		
第3-22図288	元祐通寶	北宋	1086年	2.4	24.0	行書	B-SD003	星形孔状	
第3-22図289	元祐通寶	北宋	1086年	2.2	24.0	篆書	B-SD003		
第3-22図290	元祐通寶	北宋	1086年	1.3	24.0	行書	B-SD003		
第3-22図291	元祐通寶	北宋	1086年	2.1	23.0	行書	B-SD003	282と貼り付き出土	
第3-22図292	元祐通寶	北宋	1086年	2.0	24.0	篆書	B-SD003		
第3-22図293	紹聖元寶	北宋	1094年	3.1	24.0	篆書	B-SD003		
第3-22図294	紹聖元寶	北宋	1094年	2.5	24.0	篆書	B-SD003		
第3-22図295	政和通寶	北宋	1111年	2.0	24.0	真書	B-SD003		
第3-22図296				3.8	25.0		B-SD003	不明	
第3-22図297				1.1	—		B-SD003	「元」・「寶」のみ判読	
第3-23図47	熙寧元寶	北宋	1068年	2.3	24.0	真書	B-SD004		
第3-47図216	至道元寶	北宋	995年	3.2	24.0	草書	B-SD064		
第3-47図217	皇宋通寶	北宋	1038年	1.9	24.0	真書	B-SD064		
第3-47図218	皇宋通寶	北宋	1038年	2.6	25.0	真書	B-SD064		
第3-47図219	皇宋通寶	北宋	1038年	1.8	25.0	真書	B-SD064		
第3-47図220	皇宋通寶	北宋	1038年	1.5	23.0	篆書	B-SD064		
第3-47図221	熙寧元寶	北宋	1068年	1.3	24.0	真書	B-SD064		
第3-47図222	元符通寶	北宋	1098年	2.8	24.0	行書	B-SD064		
第3-47図223	不明			2.3	24.0		B-SD064		
第3-48図1	不明			2.7	24.0		B-SK015	錆のため判読不能	
第3-60図95	天聖元寶	北宋	1023年	1.7	23.0	篆書	B-SK020		
第3-60図96	嘉定通寶	南宋	1208年	2.2	25.0		B-SK020		
第3-60図97				2.3	25.0	篆書	B-SK020	「政」・「通」・「寶」が判読	
第3-60図98	天聖元寶	北宋	1023年	3.1	24.5	行書	B-SK020	「聖」・「元」・「寶」が判読	
第3-64図1	天聖元寶	北宋	1023年	1.8	25.5	篆書	B-SK020	4ヶ所を穿孔	
第3-71図18	皇宋通寶	北宋	1038年	—	—	真書	B-SD064	「宋」・「通」が判読	
第3-111図	開元通寶	唐	845年	—	—		B-SK153	半分欠ける	
第3-132図1	熙寧元寶	北宋	1068年	1.1	15.0	真書	B-SE009	作爲的に周辺を削る	
第3-132図2	至道元寶?	北宋	995年	2.4	25.0	草書	B-SE009		
第3-132図3	政和通寶	北宋	1111年	3.3	25.0	篆書	B-SE009		
第3-139図1	元豊通寶	北宋	1078年	2.0	2.5	行書	B-SE010		
第3-139図2	大觀通寶	北宋	1107年	2.6	24.0		B-SE010		
第3-139図3	不明			—	24.0		B-SE010		
第3-160図28	嘉祐通寶	北宋	1056年	1.9	25.0	真書	B-SP042		
第3-160図29				1.4	25.0	行書	B-SP090	「元」・「通」・「寶」が判読	
第3-169図159	開元通寶	唐	845年	1.2	24.0		K-42	169と貼りつく	
第3-169図160	至道元寶?	北宋	995年	2.5	25.0	草書	L-45		
第3-169図161	景德元寶	北宋	1004年	2.9	24.0	真書	K-43		
第3-169図162	祥符元寶	北宋	1009年	3.1	25.0		包含層		
第3-169図163	祥符通寶	北宋	1009年	0.9	19.0		包含層	周辺を欠く	
第3-169図164	天禧元寶		1017年	2.4	24.5	真書	L-44		
第3-169図165	皇宋通寶	北宋	1038年	2.4	25.0	真書	K-42	「皇」・「通」が判読	
第3-169図166	至和元寶		1054年	3.5	24.0	真書	L-43		
第3-169図167	元豊通寶	北宋	1078年	2.5	24.0	篆書	K-43		
第3-169図168	元豊通寶	北宋	1078年	2.5	24.0	篆書	K-42		
第3-169図169	元祐通寶	北宋	1086年	3.4	25.0	行書	包含層	159と貼りつき出土 星形孔	
第3-169図170	元祐通寶	北宋	1086年	3.1	25.0	行書	包含層	星形孔	
第3-169図171	元祐通寶	北宋	1086年	2.0	24.0	篆書	K-42		
第3-169図172	元祐通寶	北宋	1086年	2.4	24.0	行書	K-42		
第3-169図173	永樂通寶	明	1408年	2.2	25.0		K-43		
第3-169図174	洪武通寶	明	1368年	2.3	23.0		K-43		

## 遺物観察表37

## 府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)①

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-6図001	青花	皿	景德鎮窯	(19.4)	9.0	3.0	C-SD01	F群	
第4-6図002	青花	皿	景德鎮窯	(18.4)	—	(2.2)	C-SD01	F群(つば皿)	
第4-6図003	青花	皿	景德鎮窯	(16.8)	8.6	2.4	C-SD01		
第4-6図004	青花	皿	景德鎮窯	(11.8)	6.8	2.9	C-SD01	B群	
第4-6図005	青花	皿	景德鎮窯	—	—	(1.7)	C-SD01	B群	
第4-6図006	青花	皿	景德鎮窯	(10.2)	5.2	2.6	C-SD01		
第4-6図007	青花	皿	景德鎮窯	(11.6)	3.2	3.3	C-SD01	C群(碁筭底)	
第4-6図008	青花	皿	景德鎮窯	(10.0)	2.6	2.7	C-SD01	C群(碁筭底)	
第4-6図009	青花	皿	景德鎮窯	—	9.8	(1.8)	C-SD01		
第4-6図010	青花	皿	景德鎮窯	(10.4)	6.0	2.3	C-SD01		
第4-6図011	青花	皿	景德鎮窯	—	7.2	(1.8)	C-SD01	「長命富貴」	
第4-6図012	青花	皿	景德鎮窯	—	6.0	(2.0)	C-SD01	「天下太平」	
第4-6図013	青花	皿	景德鎮窯	—	6.0	(1.6)	C-SD01		
第4-6図014	青花	皿	景德鎮窯	—	7.6	(1.5)	C-SD01		
第4-7図015	青花	碗	景德鎮窯	(14.2)	—	(4.2)	C-SD01		
第4-7図016	青花	碗	景德鎮窯	(13.0)	—	(6.0)	C-SD01	E群(饅頭心)	
第4-7図017	青花	碗	景德鎮窯	—	4.8	(4.6)	C-SD01	E群(饅頭心)	
第4-7図018	青花	碗	景德鎮窯	—	5.5	(3.6)	C-SD01	E群(饅頭心)	
第4-7図019	青花	碗	景德鎮窯	—	4.3	(1.7)	C-SD01	E群(饅頭心)	
第4-7図020	青花	碗	景德鎮窯	—	5.0	(1.9)	C-SD01	E群(饅頭心)	
第4-7図021	青花	碗	景德鎮窯	—	4.6	(2.0)	C-SD01	E群(饅頭心)	
第4-7図022	青花	碗	景德鎮窯	—	4.1	(4.9)	C-SD01	E群(饅頭心)	
第4-7図023	青花	碗	景德鎮窯	—	3.7	(1.4)	C-SD01	「寿」	
第4-7図024	青花	碗	景德鎮窯	—	—	(3.6)	C-SD01		
第4-7図025	青花	小坏	景德鎮窯	—	2.9	(1.5)	C-SD01		
第4-7図026	青花	皿	漳州窯	—	3.9	(2.0)	C-SD01	碁筭底	
第4-7図027	青花	盤	漳州窯	—	—	(2.7)	C-SD01		
第4-7図028	青花	蓋	漳州窯	(15.3)	—	(3.4)	C-SD01		
第4-7図029	青花	碗	漳州窯	(17.4)	—	(6.4)	C-SD01		
第4-7図030	青花	碗	漳州窯	—	5.6	(2.1)	C-SD01		
第4-7図031	青花	碗	漳州窯	—	—	(1.5)	C-SD01		
第4-7図032	青磁	皿	龍泉窯	(12.2)	7.8	3.4	C-SD01		
第4-7図033	青磁	碗	龍泉窯	(14.4)	—	(4.6)	C-SD01		
第4-8図034	青磁	碗	龍泉窯	—	6.3	(2.1)	C-SD01		
第4-8図035	青磁	碗	龍泉窯	—	6.0	(2.1)	C-SD01		
第4-8図036	青磁	壺or瓶	龍泉窯	—	—	(5.5)	C-SD01		
第4-8図037	青磁	燭台	龍泉窯	—	4.7	(2.6)	C-SD01	青磁人物像燭台	
第4-8図038	青磁	碗	高麗	—	—	(3.0)	C-SD01		
第4-8図039	青磁	碗	越州窯	—	10.8	(2.2)	C-SD01		
第4-8図040	白磁	皿	景德鎮窯	(19.8)	—	(2.3)	C-SD01		
第4-8図041	白磁	皿	景德鎮窯	(15.4)	—	(2.9)	C-SD01		
第4-8図042	白磁	菊皿	中国	—	—	(2.9)	C-SD01		
第4-8図043	白磁	皿	中国南方	—	6.0	(1.8)	C-SD01		
第4-8図044	白磁	皿	中国	—	7.8	(2.2)	C-SD01		
第4-8図045	白磁	碗	景德鎮窯	—	7.8	(1.6)	C-SD01		
第4-8図046	白磁	碗	景德鎮窯	—	5.0	(2.2)	C-SD01		
第4-8図047	白磁	碗	景德鎮窯	—	—	(4.0)	C-SD01		
第4-8図048	白磁	碗	中国	—	8.6	(2.5)	C-SD01		
第4-8図049	白磁	小坏	景德鎮窯	—	3.0	(1.5)	C-SD01		
第4-8図050	白磁	小坏	中国南方	(6.3)	2.6	2.9	C-SD01		
第4-9図051	華南三彩	蓋	中国	—	—	(3.5)	C-SD01	壺	
第4-9図052	華南三彩	水注台座	中国	—	8.8	(3.1)	C-SD01		
第4-9図053	華南三彩		中国	—	—	(2.5)	C-SD01		
第4-9図054	翡翠釉	皿	中国	(7.0)	4.2	1.4	C-SD01		
第4-9図055	翡翠釉	皿	中国	(6.1)	—	(1.2)	C-SD01	包含刷一括を含む	
第4-9図056	褐釉陶器		中国	—	—	(4.2)	C-SD01		
第4-9図057	陶器	碗		—	5.0	(3.1)	C-SD01		
第4-9図058	陶器	壺	中国	—	—	(6.4)	C-SD01		
第4-9図059	陶器	天目	中国	(12.0)	—	(5.6)	C-SD01		
第4-9図060	陶器	天目	瀬戸美濃	(8.0)	—	(3.4)	C-SD01		
第4-9図061	陶器	天目	瀬戸美濃	—	4.2	(1.3)	C-SD01		
第4-9図062	陶器	折縁皿	瀬戸美濃	10.7	5.7	2.0	C-SD01		
第4-9図063	陶器	皿	瀬戸美濃	(10.1)	6.6	2.1	C-SD01		
第4-9図064	陶器	皿	瀬戸美濃	(10.4)	5.5	2.2	C-SD01	折縁皿	
第4-9図065	陶器	碗	軟質施釉陶器	—	—	(1.9)	C-SD01		
第4-9図066	陶器	碗	軟質施釉陶器	—	—	(2.2)	C-SD01		
第4-9図067	陶器	碗	軟質施釉陶器	—	—	(1.2)	C-SD01		
第4-9図068	陶器	碗	軟質施釉陶器	—	—	(2.4)	C-SD01		
第4-9図069	陶器	碗	軟質施釉陶器	—	—	(1.5)	C-SD01		
第4-9図070	陶器	碗	軟質施釉陶器	—	—	(3.2)	C-SD01		
第4-9図071	陶器	水屋甕	備前	(18.7)	—	(1.7)	C-SD01		22
第4-9図072	陶器	壺	備前	(14.2)	—	(17.9)	C-SD01		22
第4-9図073	陶器	德利	備前	(4.6)	—	(4.2)	C-SD01		22
第4-9図074	陶器	德利	備前	—	—	(11.7)	C-SD01		22
第4-10図075	陶器	德利	備前	—	—	(11.3)	C-SD01		



遺物観察表38

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表（土器・陶磁器）②

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-10図076	陶器	鉢	備前	(15.0)	—	4.5	C-SD01		22
第4-10図077	陶器	鉢	備前	(13.7)	—	(4.6)	C-SD01		22
第4-10図078	陶器	播鉢	備前	(34.4)	(17.6)	13.5	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	22
第4-10図079	陶器	播鉢	備前	31.8	12.8	12.9	C-SD01	近世1期	22
第4-11図080	陶器	播鉢	備前	29.4	12.0	14.2	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-11図081	陶器	播鉢	備前	(32.8)	—	(6.3)	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-11図082	陶器	播鉢	備前	(32.0)	—	(8.7)	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-11図083	陶器	播鉢	備前	(31.8)	—	(5.0)	C-SD01	近世1期	
第4-12図084	陶器	播鉢	備前	(31.1)	—	(8.5)	C-SD01	近世1期	
第4-12図085	陶器	播鉢	備前	(30.9)	—	(6.2)	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-12図086	陶器	播鉢	備前	(28.6)	—	(8.0)	C-SD01	近世1期	
第4-12図087	陶器	播鉢	備前	(26.4)	—	(7.9)	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-12図088	陶器	播鉢	備前	(24.6)	—	(11.4)	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-13図089	陶器	播鉢	備前	(24.0)	—	(8.1)	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-13図090	陶器	播鉢	備前	(11.4)	—	(3.0)	C-SD01	中世6期	
第4-13図091	陶器	播鉢	備前	—	—	(4.7)	C-SD01	中世3期	
第4-13図092	陶器	播鉢	備前	—	(12.4)	(5.2)	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-13図093	陶器	播鉢	備前	—	(12.8)	(7.0)	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-13図094	陶器	播鉢	備前	—	(14.8)	(5.0)	C-SD01	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-13図095	陶器	播鉢	備前	—	—	(4.2)	C-SD01	近世1期	
第4-13図096	陶器	播鉢	備前	—	—	(5.3)	C-SD01	近世1期	
第4-13図097	陶器	播鉢	備前	—	(10.5)	(8.9)	C-SD01	近世1期?	
第4-14図098	陶器	壺	備前	—	5.5	(7.6)	C-SD01		22
第4-14図099	陶器	甕	備前	(9.6)	—	(9.0)	C-SD01		22
第4-14図100	陶器	大甕	備前	—	—	(7.8)	C-SD01		
第4-14図101	陶器	大甕	備前	—	—	(8.6)	C-SD01		
第4-14図102	陶器	大甕	備前	—	—	(7.7)	C-SD01		
第4-14図103	陶器	大甕	備前	—	(32.7)	(9.9)	C-SD01		
第4-14図104	京都系土師器	皿	在地	13.0	3.8	3.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-14図105	京都系土師器	皿	在地	12.8	4.2	3.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-14図106	京都系土師器	皿	在地	12.8	5.0	2.4	C-SD01		
第4-14図107	京都系土師器	皿	在地	12.7	3.6	2.7	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-14図108	京都系土師器	皿	在地	12.6	3.8	3.0	C-SD01		
第4-14図109	京都系土師器	皿	在地	12.6	7.0	3.0	C-SD01	灯明皿・スス付着	22
第4-14図110	京都系土師器	皿	在地	12.4	3.9	3.0	C-SD01	灯明皿	
第4-14図111	京都系土師器	皿	在地	12.4	5.5	2.9	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-14図112	京都系土師器	皿	在地	12.3	5.0	2.5	C-SD01		
第4-14図113	京都系土師器	皿	在地	12.2	5.8	3.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-14図114	京都系土師器	皿	在地	12.2	6.0	2.8	C-SD01		
第4-14図115	京都系土師器	皿	在地	12.1	5.4	2.9	C-SD01	灯明皿・スス付着?	
第4-14図116	京都系土師器	皿	在地	12.0	5.6	2.7	C-SD01	灯明皿?スス付着?	
第4-15図117	京都系土師器	皿	在地	12.0	5.2	2.5	C-SD01		
第4-15図118	京都系土師器	皿	在地	12.0	5.3	2.5	C-SD01	スス付着	22
第4-15図119	京都系土師器	皿	在地	11.9	6.0	2.8	C-SD01		
第4-15図120	京都系土師器	皿	在地	11.8	5.8	2.9	C-SD01	砂付	
第4-15図121	京都系土師器	皿	在地	11.8	4.0	2.4	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図122	京都系土師器	皿	在地	11.7	4.0	2.8	C-SD01		
第4-15図123	京都系土師器	皿	在地	11.7	6.0	2.5	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図124	京都系土師器	皿	在地	11.7	4.3	2.5	C-SD01		
第4-15図125	京都系土師器	皿	在地	11.6	4.0	2.3	C-SD01		
第4-15図126	京都系土師器	皿	在地	11.4	5.2	2.5	C-SD01		
第4-15図127	京都系土師器	皿	在地	10.5	4.0	2.5	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図128	京都系土師器	皿	在地	10.5	3.6	2.3	C-SD01		
第4-15図129	京都系土師器	皿	在地	10.0	3.6	2.4	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図130	京都系土師器	皿	在地	9.6	—	(3.0)	C-SD01		
第4-15図131	京都系土師器	皿	在地	9.3	3.0	2.4	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図132	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	2.2	C-SD01	灯明皿・砂、スス付着	
第4-15図133	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	2.2	C-SD01	底面:ムシロ痕か?	
第4-15図134	京都系土師器	皿	在地	9.2	4.4	2.0	C-SD01	内面付着物有、ススか?	
第4-15図135	京都系土師器	皿	在地	9.1	—	2.7	C-SD01	灯明皿・スス付着	22
第4-15図136	京都系土師器	皿	在地	9.1	2.2	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図137	京都系土師器	皿	在地	9.1	2.5	2.2	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図138	京都系土師器	皿	在地	9.0	3.0	2.4	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図139	京都系土師器	皿	在地	9.0	3.0	1.9	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図140	京都系土師器	皿	在地	8.9	3.6	2.2	C-SD01		
第4-15図141	京都系土師器	皿	在地	8.9	—	2.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図142	京都系土師器	皿	在地	8.9	3.8	1.9	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図143	京都系土師器	皿	在地	8.8	3.4	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図144	京都系土師器	皿	在地	8.8	3.2	2.2	C-SD01	内面に付着物有	
第4-15図145	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	2.2	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図146	京都系土師器	皿	在地	8.8	2.8	2.1	C-SD01	内面:スス付着?	
第4-15図147	京都系土師器	皿	在地	8.8	2.7	1.9	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図148	京都系土師器	皿	在地	8.7	—	2.7	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図149	京都系土師器	皿	在地	8.7	—	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図150	京都系土師器	皿	在地	8.7	3.0	2.3	C-SD01		

遺物観察表39

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)③

挿図No.	器種		生産地	法尺(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-15図151	京都系土師器	皿	在地	8.7	3.3	2.3	C-SD01		
第4-15図152	京都系土師器	皿	在地	8.6	3.1	2.6	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図153	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.4	C-SD01	灯明皿・スス付着・内面布目痕か?	
第4-15図154	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.4	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図155	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.3	C-SD01		
第4-15図156	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図157	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.1	C-SD01		
第4-15図158	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.1	C-SD01		
第4-15図159	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.0	C-SD01		
第4-15図160	京都系土師器	皿	在地	8.5	2.3	2.5	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図161	京都系土師器	皿	在地	8.5	2.0	2.1	C-SD01	外面付着物有	
第4-15図162	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	2.5	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図163	京都系土師器	皿	在地	8.4	2.0	2.3	C-SD01		
第4-15図164	京都系土師器	皿	在地	8.4	2.0	2.3	C-SD01		
第4-15図165	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図166	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	2.2	C-SD01	底面：ムシ口痕か?	
第4-15図167	京都系土師器	皿	在地	8.3	-	2.4	C-SD01		
第4-15図168	京都系土師器	皿	在地	8.3	2.5	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図169	京都系土師器	皿	在地	8.3	3.6	2.3	C-SD01	スス付着	
第4-15図170	京都系土師器	皿	在地	8.3	3.6	2.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	22
第4-15図171	京都系土師器	皿	在地	8.2	-	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図172	京都系土師器	皿	在地	8.2	3.6	2.0	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図173	京都系土師器	皿	在地	8.0	-	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図174	京都系土師器	皿	在地	8.0	-	2.1	C-SD01		
第4-15図175	京都系土師器	皿	在地	7.9	-	2.2	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-15図176	京都系土師器	皿	在地	7.5	-	2.1	C-SD01	内面付着物有	
第4-15図177	京都系土師器	皿	在地	11.8	6.4	2.5	C-SD01	折衷様式・灯明皿・内面：スス付着	
第4-15図178	京都系土師器	皿	在地	11.8	7.6	2.5	C-SD01	折衷様式・灯明皿・内面ススカ	
第4-15図179	京都系土師器	皿	在地	11.6	6.7	3.2	C-SD01	折衷様式	
第4-16図180	京都系土師器	皿	在地	11.6	6.9	2.8	C-SD01	折衷様式・スス付着	22
第4-16図181	京都系土師器	皿	在地	11.6	6.8	2.6	C-SD01	折衷様式・スス付着	
第4-16図182	京都系土師器	皿	在地	11.6	7.4	2.6	C-SD01	折衷様式	
第4-16図183	京都系土師器	皿	在地	11.2	6.6	2.4	C-SD01	折衷様式	
第4-16図184	京都系土師器	皿	在地	11.1	6.6	3.8	C-SD01	折衷様式・スス付着	
第4-16図185	京都系土師器	皿	在地	7.7	4.8	2.3	C-SD01	折衷様式・スス付着	
第4-16図186	京都系土師器	坏	在地	14.1	6.9	4.3	C-SD01	スス付着	
第4-16図187	京都系土師器	坏	在地	12.0	4.0	3.8	C-SD01		
第4-16図188	京都系土師器	坏	在地	11.9	5.0	3.7	C-SD01		
第4-16図189	京都系土師器	坏	在地	11.2	5.8	3.7	C-SD01		
第4-16図190	京都系土師器	坏	在地	11.2	5.0	3.3	C-SD01	底面：原体痕?	22
第4-16図191	京都系土師器	坏	在地	11.0	4.2	3.6	C-SD01		
第4-16図192	京都系土師器	坏	在地	11.0	4.0	3.6	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-16図193	京都系土師器	坏	在地	11.0	6.6	3.6	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-16図194	京都系土師器	坏	在地	11.0	5.0	3.2	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第4-16図195	京都系土師器	坏	在地	10.9	5.7	4.0	C-SD01	スス付着	
第4-16図196	京都系土師器	坏	在地	10.1	4.4	3.5	C-SD01		
第4-16図197	京都系土師器	坏	在地	10.2	4.4	3.5	C-SD01		
第4-16図198	在地系土師器	皿	在地	11.4	5.4	2.6	C-SD01	ロクロ目・灯明皿	
第4-16図199	在地系土師器	皿	在地	10.8	6.1	4.7	C-SD01	ロクロ目・灯明皿	
第4-16図200	在地系土師器	皿	在地	9.9	4.5	3.0	C-SD01	ロクロ目	
第4-16図201	在地系土師器	皿	在地	8.5	5.3	2.2	C-SD01	灯明皿	
第4-16図202	在地系土師器	皿	在地	8.4	5.6	2.1	C-SD01	灯明皿	
第4-16図203	在地系土師器	皿	在地	8.3	4.1	2.1	C-SD01	ロクロ目・灯明皿	
第4-17図204	在地系土師器	皿	在地	8.1	5.9	2.0	C-SD01		
第4-17図205	在地系土師器	皿	在地	7.7	5.1	2.0	C-SD01		
第4-17図206	在地系土師器	小皿	在地	4.9	3.1	1.5	C-SD01		
第4-17図207	瓦質土器	?	在地	10.7	4.3	4.2	C-SD01		23
第4-17図208	瓦質土器	?	在地	-	4.5	4.4	C-SD01		
第4-17図209	瓦質土器	?	在地	-	4.3	3.5	C-SD01		
第4-17図210	瓦質土器	?	在地	-	-	4.2	C-SD01		
第4-17図211	瓦質土器	香炉	在地	7.9	6.8	4.2	C-SD01		23
第4-17図212	瓦質土器	香炉	在地	-	-	3.8	C-SD01	もしくは火鉢	23
第4-17図213	瓦質土器	鉢か皿	在地	-	-	2.1	C-SD01	穿孔有り	23
第4-17図214	瓦質土器	鉢	在地	12.1	12.3	14.7	C-SD01	S K10-117・139と接合	23
第4-17図215	瓦質土器	鉢	在地	-	-	9.3	C-SD01	S D01上層と接合	23
第4-17図216	瓦質土器	鉢	在地	-	19.2	10.5	C-SD01		
第4-17図217	瓦質土器	摺鉢	防長	28.8	-	9.4	C-SD01	S K10-116・191と接合	23
第4-18図218	瓦質土器	火鉢	在地	43.4	-	11.2	C-SD01		
第4-18図219	瓦質土器	火鉢	在地	4.7	-	10.7	C-SD01	砂付	
第4-18図220	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	6.6	C-SD01		23
第4-18図221	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	6.3	C-SD01		23
第4-18図222	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	3.8	C-SD01		23
第4-18図223	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	5.7	C-SD01		
第4-18図224	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	5.5	C-SD01	もしくは鉢	
第4-18図225	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	7.3	C-SD01		23

遺物観察表40

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)④

挿図No.	器 種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-18図226	瓦質土器	火鉢脚	在地	-	-	5.7	C-SD01		23
第4-18図227	瓦質土器	壺	在地	-	-	5.3	C-SD01		23
第4-18図228	瓦質土器	甗	在地	-	-	7.0	C-SD01		
第4-18図229	瓦質土器	裏用鉢	在地	-	-	6.8	C-SD01		23
第4-18図230	瓦質土器	鍋	在地	-	-	6.2	C-SD01		23
第4-18図231	瓦質土器	焙烙	在地	-	-	4.6	C-SD01	取手付鍋	23
第4-29図001	青磁	皿	龍泉窯	(11.6)	5.0	3.0	C-SD10		
第4-29図002	陶器	小壺	備前	-	4.0	(2.2)	C-SD10		25
第4-29図003	陶器	播鉢	備前	(26.2)	-	(8.1)	C-SD10		25
第4-29図004	陶器	播鉢	備前	-	(8.1)	(4.9)	C-SD10		25
第4-29図005	陶器	播鉢	備前	-	(8.5)	(4.9)	C-SD10		
第4-29図006	陶器	甗	備前	-	-	(4.4)	C-SD10		
第4-29図007	京都系土師器	皿	在地	14.0	-	(2.3)	C-SD10	灯明皿・スス付着	
第4-29図008	京都系土師器	皿	在地	13.2	-	2.2	C-SD10		
第4-29図009	京都系土師器	皿	在地	13.2	-	(2.2)	C-SD10		
第4-29図010	京都系土師器	皿	在地	12.6	5.8	2.8	C-SD10	灯明皿?・スス付着	
第4-29図011	京都系土師器	皿	在地	12.4	6.0	2.3	C-SD10	灯明皿・スス付着	26
第4-29図012	京都系土師器	皿	在地	10.8	4.2	2.2	C-SD10		26
第4-29図013	京都系土師器	皿	在地	10.2	3.6	2.2	C-SD10		
第4-29図014	京都系土師器	皿	在地	8.2	-	2.2	C-SD10	灯明皿・スス付着	
第4-29図015	京都系土師器	皿	在地	11.8	6.6	2.6	C-SD10	折衷様式・スス付着	
第4-30図016	在地系土師器	皿	在地	9.1	6.3	1.3	C-SD10	段々土師器	
第4-30図017	在地系土師器	皿	在地	8.4	4.3	2.0	C-SD10	灯明皿	
第4-30図018	在地系土師器	皿	在地	8.2	-	1.9	C-SD10		
第4-30図019	在地系土師器	皿	在地	12.5	6.8	2.5	C-SD10	ロクロ目	
第4-30図020	在地系土師器	皿	在地	12.3	6.2	2.4	C-SD10	ロクロ目・灯明皿	
第4-30図021	在地系土師器	皿	在地	11.9	6.3	2.5	C-SD10	ロクロ目	
第4-30図022	在地系土師器	皿	在地	11.6	6.6	2.6	C-SD10	ロクロ目	26
第4-30図023	在地系土師器	皿	在地	11.2	3.5	2.2	C-SD10	ロクロ目	
第4-30図024	在地系土師器	皿	在地	11.2	-	2.4	C-SD10	ロクロ目・灯明皿	
第4-30図025	在地系土師器	皿	在地	10.0	6.5	2.2	C-SD10	ロクロ目	
第4-30図026	在地系土師器	皿	在地	12.0	6.3	2.1	C-SD10	ロクロ目・灯明皿	
第4-30図027	在地系土師器	皿	在地	12.0	-	2.5	C-SD10	ロクロ目・灯明皿	26
第4-30図028	在地系土師器	小皿	在地	6.5	4.0	2.2	C-SD10	金雲母多く含む	
第4-30図029	在地系土師器	耳皿	在地	5.3	3.5	1.4	C-SD10		
第4-30図030	赤焼瓦質土器	不明	在地	-	-	9.0	C-SD10		
第4-30図031	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	6.4	C-SD10		
第4-30図032	瓦質土器	焙烙	在地	-	-	4.2	C-SD10	取手付鍋・SD01上層・中下層	
第4-33図001	青花	皿	景徳鎮窯	-	(7.0)	(0.8)	C-SD02		
第4-33図002	陶器	碗	瀬戸美濃	(10.0)	-	(3.9)	C-SD02		
第4-33図003	陶器	德利	備前	(3.0)	-	(5.6)	C-SD02		26
第4-33図004	陶器	四耳壺	備前	(16.6)	-	(4.2)	C-SD02		26
第4-33図005	陶器	甗	備前	-	-	(5.8)	C-SD02		26
第4-33図006	陶器	播鉢	備前	-	10.4	(6.7)	C-SD02	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-33図007	京都系土師器	皿	在地	12.8	6.0	2.3	C-SD02		
第4-33図008	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.4	C-SD02	粘土の継目痕有	26
第4-33図009	京都系土師器	皿	在地	11.8	4.7	2.9	C-SD02		
第4-33図010	京都系土師器	皿	在地	9.0	3.9	1.7	C-SD02		
第4-33図011	京都系土師器	皿	在地	8.9	3.0	2.1	C-SD02	スス付着	
第4-33図012	京都系土師器	皿	在地	-	-	(3.0)	C-SD02		
第4-33図013	京都系土師器	耳皿?	在地	6.8	-	(2.0)	C-SD02		
第4-33図014	土師質土器	燗台	在地	-	6.5	5.2	C-SD02		26
第4-33図015	瓦質土器	風炉	在地	-	-	2.5	C-SD02	脚部剥離	26
第4-33図016	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	6.5	C-SD02		
第4-33図017	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	6.4	C-SD02		26
第4-33図018	瓦質土器	火鉢脚	在地	-	-	7.0	C-SD02		26
第4-34図025	陶器	播鉢	備前	-	(10.5)	(5.3)	C-SD12	近世1期(ナナメスリメ)	26
第4-36図001	陶器	德利	備前	(5.4)	-	(5.4)	C-SD04		
第4-36図002	陶器	播鉢	丹波	-	-	(7.1)	C-SD04		27
第4-36図003	在地系土師器	皿	在地	7.5	3.9	2.0	C-SD04	ロクロ目	
第4-36図004	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	3.5	C-SD04		
第4-36図005	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	1.9	C-SD04		
第4-38図001	青磁	碗	龍泉窯	-	(6.8)	(1.7)	C-SD05		
第4-38図002	青磁	碗	龍泉窯	-	-	(3.8)	C-SD05		
第4-38図003	陶器	播鉢	備前	-	(13.2)	(4.7)	C-SD05		
第4-38図004	陶器	播鉢	備前	-	-	(2.8)	C-SD05		
第4-38図005	陶器	播鉢	備前	-	-	(4.2)	C-SD05		27
第4-38図006	在地系土師器	皿	在地	-	-	1.7	C-SD05	ロクロ目	
第4-38図007	在地系土師器	皿	在地	-	-	1.4	C-SD05	ロクロ目	
第4-41図001	陶器	德利	備前	-	6.5	(8.9)	C-SD11	底部ヘラ記号	27
第4-41図002	陶器	大甗	備前	-	-	(5.8)	C-SD11		
第4-41図003	陶器	播鉢	備前	(31.2)	-	(7.3)	C-SD11		
第4-41図004	陶器	播鉢	備前	-	(10.0)	(4.9)	C-SD11		
第4-41図005	陶器	播鉢	備前	-	-	(9.2)	C-SD11	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-41図006	陶器	播鉢	備前	-	-	(6.0)	C-SD11	近世1期(ナナメスリメ)	

遺物観察表41

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)⑤

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-41図007	陶器	播鉢	備前	-	-	(8.3)	C-SD11		
第4-41図008	京都系土師器	皿	在地	13.0	-	(2.2)	C-SD11		
第4-41図009	京都系土師器	皿	在地	11.4	-	(2.5)	C-SD11	灯明皿・スス付着	
第4-41図010	京都系土師器	皿	在地	9.1	4.0	2.1	C-SD11	灯明皿・スス付着	
第4-41図011	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	4.7	C-SD11		
第4-41図012	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	3.2	C-SD11		
第4-41図013	瓦質土器	火鉢脚	在地	-	-	6.2	C-SD11		
第4-43図001	五彩	碗	景德鎮窯	-	-	(2.3)	C-SK01		
第4-43図002	青花	碗	景德鎮窯	(11.4)	-	(4.0)	C-SK01		
第4-43図003	京都系土師器	皿	在地	-	-	(2.6)	C-SK01	金箔貼り付け	
第4-43図004	京都系土師器	皿	在地	12.5	5.0	2.4	C-SK01		
第4-43図005	京都系土師器	皿	在地	10.3	4.4	2.4	C-SK01	灯明皿	
第4-43図006	京都系土師器	皿	在地	10.3	-	(2.1)	C-SK01		
第4-43図007	京都系土師器	皿	在地	8.4	3.4	2.0	C-SK01		
第4-43図008	在地系土師器	皿	在地	11.7	6.1	2.1	C-SK01	ロクロ目	
第4-43図009	土師質土器	焼塩壺の蓋	在地	5.1	3.0	1.7	C-SK01		
第4-45図001	陶器	舟德利	朝鮮王朝	-	-	(3.0)	C-SK05		27
第4-45図002	瓦質土器	羽釜	在地	-	-	6.3	C-SK05		
第4-48図001	白磁	蓋	景德鎮窯	(4.4)	-	(1.2)	C-SK08		
第4-48図002	褐釉陶器?	?	中国	-	-	(3.8)	C-SK08		
第4-48図003	京都系土師器	皿	在地	8.7	-	2.1	C-SK08	灯明皿・スス付着	
第4-50図001	青花	皿	漳州窯	(13.4)	(5.6)	3.5	C-SK10		
第4-50図002	青花	壺	景德鎮窯	-	-	(10.7)			
第4-50図003	青花	碗	景德鎮窯	-	-	(2.6)	C-SK10		
第4-50図004	青花	碗	景德鎮窯	-	(4.8)	(2.7)	C-SK10		
第4-50図005	青花	盤	景德鎮窯	-	-	(3.4)	C-SK10	F群	
第4-50図006	青花	小壺	景德鎮窯	-	-	(2.2)	C-SK10		
第4-50図007	白磁	碗	朝鮮王朝	-	(6.3)	(2.0)	C-SK10		
第4-50図008	白磁	皿	中国南方	-	4.7	(1.6)	C-SK10		
第4-50図009	青磁	碗	龍泉窯	-	4.3	(1.6)	C-SK10		
第4-50図010	華南三彩		中国	-	-	(3.1)	C-SK10		
第4-50図011	華南三彩		中国	-	-	(1.6)	C-SK10		
第4-50図012	翡翠釉	皿	中国	-	-	(0.6)	C-SK10		
第4-50図013	陶器	折縁皿	瀬戸美濃	10.8	5.8	2.5	C-SK10		
第4-50図014	陶器	天目	瀬戸美濃	(10.4)	-	(4.7)	C-SK10		
第4-50図015	陶器	花生	備前	(12.3)	(9.8)	-	C-SK10		27
第4-50図016	陶器	小壺	備前	-	(4.2)	(3.6)	C-SK10		
第4-50図017	陶器	二重壺	備前	(5.4)	4.3	6.3	C-SK10		27
第4-50図018	陶器	鉢	備前	(15.6)	-	(6.8)	C-SK10		
第4-50図019	陶器	鉢	備前	(14.5)	-	(7.0)	C-SK10		
第4-50図020	陶器	播鉢	備前	(32.0)	-	(8.5)	C-SK10	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-50図021	陶器	播鉢	備前	(31.8)	-	(7.4)	C-SK10	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-50図022	陶器	播鉢	備前	(29.6)	-	(7.3)	C-SK10	近世1期(ナナメスリメ)	
第4-50図023	陶器	播鉢	備前	(28.8)	-	(9.3)	C-SK10		
第4-50図024	陶器	播鉢	備前	-	-	8.7	C-SK10		
第4-50図025	陶器	水屋瓿	備前	(16.0)	-	(8.0)	C-SK10		27
第4-50図026	陶器	大甕	備前	-	-	(10.8)	C-SK10		
第4-50図027	陶器	大甕	備前	-	-	(7.4)	C-SK10		
第4-50図028	京都系土師器	皿	在地	12.3	5.2	2.5	C-SK10		
第4-50図029	京都系土師器	皿	在地	12.2	5.6	2.7	C-SK10	灯明皿・スス付着	27
第4-50図030	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.8	C-SK10		
第4-50図031	京都系土師器	皿	在地	12.0	5.0	2.5	C-SK10	灯明皿・内面:付着物有、ススか?	
第4-50図032	京都系土師器	皿	在地	11.8	5.2	2.5	C-SK10	灯明皿	
第4-50図033	京都系土師器	皿	在地	11.8	5.0	3.2	C-SK10	スス付着	
第4-50図034	京都系土師器	皿	在地	11.5	3.4	3.0	C-SK10	灯明皿	
第4-50図035	京都系土師器	皿	在地	9.6	-	2.1	C-SK10	灯明皿・スス付着	
第4-50図036	京都系土師器	皿	在地	8.9	-	2.1	C-SK10		
第4-50図037	京都系土師器	皿	在地	8.8	3.6	1.8	C-SK10	灯明皿・スス付着	
第4-50図038	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.0	C-SK10		
第4-50図039	京都系土師器	皿	在地	8.5	-	2.2	C-SK10	灯明皿・スス付着	
第4-50図040	京都系土師器	皿	在地	8.4	3.0	1.8	C-SK10	灯明皿・スス付着	
第4-50図041	京都系土師器	皿	在地	8.4	2.6	2.2	C-SK10		
第4-50図042	京都系土師器	皿	在地	8.2	-	2.2	C-SK10	灯明皿・スス付着	
第4-50図043	京都系土師器	坏	在地	11.4	6.0	3.5	C-SK10		
第4-50図044	京都系土師器	坏	在地	11.4	4.6	3.8	C-SK10		27
第4-50図045	京都系土師器	坏	在地	11.3	5.1	3.5	C-SK10	底面:ムシ口痕?	
第4-50図046	京都系土師器	坏	在地	11.2	4.6	3.9	C-SK10	スス付着?	
第4-50図047	京都系土師器	坏	在地	11.0	5.0	3.6	C-SK10	灯明皿	
第4-50図048	京都系土師器	坏	在地	10.2	6.2	3.4	C-SK10		
第4-50図049	土師質土器	焼塩壺	在地	4.0	-	8.1	C-SK10	S D01上層・K37・38下層と接合	27
第4-50図050	土師質土器	焼塩壺	在地	4.1	-	8.1	C-SK10		
第4-50図051	瓦質土器	鉢	在地	-	-	16.6	C-SK10	S D01上層ベルト・S D11・SK10	
第4-50図052	瓦質土器	鉢	在地	-	-	9.6	C-SK10		
第4-50図053	瓦質土器	鉢	在地	-	-	5.6	C-SK10		
第4-50図054	瓦質土器	播鉢	防長	33.6	-	8.7	C-SK10	周防型播鉢	27

遺物観察表42

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表（土器・陶磁器）⑥

挿図No.	器 種		生産地	法量（単位cm）			遺構名	備 考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-50図055	瓦質土器	播鉢	防長	30.3	-	10.5	C-SK10	SD01上層・SK10と接合	
第4-53図056	瓦質土器	播鉢	防長	-	-	4.5	C-SK10	周防型播鉢	
第4-53図057	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	6.5	C-SK10		
第4-53図058	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	3.7	C-SK10		
第4-53図059	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	5.4	C-SK10		
第4-53図060	瓦質土器	風炉	在地	-	-	7.1	C-SK10		
第4-55図001	五彩	碗	中国	-	-	(2.6)	包含層		
第4-55図002	華南三彩	?	中国	-	-	(2.4)	道路		
第4-55図003	青磁	碗	龍泉窯	-	-	(3.4)	包含層		
第4-55図004	青磁	碗	龍泉窯	(11.2)	-	(4.7)	SX05		
第4-55図005	翡翠釉	皿	中国	-	-	(2.0)	トレンチ		
第4-55図006	白磁	碗	朝鮮王朝	-	(7.0)	(2.8)	包含層	漆継ぎ	
第4-55図007	陶器	壺	常滑	-	-	(8.9)	包含層		
第4-55図008	陶器	掛花入	備前	-	-	(7.6)	包含層		
第4-55図009	陶器	香炉	瀬戸美濃	(6.8)	-	(3.3)	トレンチ		
第4-55図010	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	(3.6)	SX01		
第4-55図011	陶器	向付	織部	-	-	-	包含層		
第4-55図012	肥前系陶器	皿	肥前	(11.4)	(4.4)	3.0	包含層	胎土目?唐津	
第4-55図013	肥前系陶器	碗	肥前	-	4.8	(2.9)	包含層		
第4-55図014	肥前系陶器	鉢?	肥前	-	-	(5.2)	包含層		
第4-55図015	京都系土師器	皿	在地	11.9	3.0	3.1	西壁		
第4-55図016	京都系土師器	坏	在地	(10.0)	(5.5)	3.1	SX01		
第4-55図017	在地系土師器	皿	在地	8.6	4.7	2.4	SX01	灯明皿	
第4-55図018	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	8.5	SX01		
第4-55図019	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	7.4	西壁	周防型火鉢	
第4-55図020	土師器	甕		-	-	13.3	S1501	トレンチ S150	

遺物観察表43

20次調査区C出土遺物観察表（土製品・石製品）①

挿図No.	品 種	材質	部位	寸法（単位cm）							重量(g)	遺構名	備 考	図版No.
				長さ	幅	厚さ	器高	厚さ	厚さ	厚さ				
第4-19図232	土鍾			長さ	4.8	幅	1.0	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-19図233	土鍾			長さ	4.6	幅	0.7	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-19図234	土鍾			長さ	4.2	幅	1.1	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-19図235	土玉	土師質		長さ	3.8	幅	4.0	厚さ	-	-	C-SD01		23	
第4-19図236	土師質円盤土製品			長さ	4.1	幅	4.1	厚さ	-	-	C-SD01		23	
第4-19図237	土師質円盤土製品			長さ	4.0	幅	4.0	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-19図238	土師質円盤土製品			長さ	3.8	幅	4.2	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-19図239	瓦質円盤状土製品			長さ	5.1	幅	4.8	厚さ	-	-	C-SD01		23	
第4-19図240	瓦質円盤状土製品			長さ	5.0	幅	4.8	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-19図241	瓦質円盤状土製品			長さ	3.7	幅	4.0	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-19図242	瓦質円盤状土製品			長さ	3.3	幅	4.1	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-19図243	瓦質円盤状土製品			長さ	2.8	幅	2.6	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-19図244	瓦加工品			長さ	-	器高	6.1	厚さ	-	-	C-SD01		23	
第4-20図245	硯			長さ	6.1	幅	7.9	厚さ	2.0	-	C-SD01		24	
第4-20図246	硯			長さ	9.8	幅	4.5	厚さ	1.3	-	C-SD01		24	
第4-20図247	硯			長さ	8.8	幅	5.6	厚さ	1.1	-	C-SD01			
第4-20図248	硯			長さ	4.6	幅	4.3	厚さ	1.8	-	C-SD01		24	
第4-20図249	砥石			長さ	9.0	幅	8.9	厚さ	8.8	-	C-SD01			
第4-20図250	砥石			長さ	8.6	幅	4.4	厚さ	3.6	-	C-SD01		24	
第4-20図251	砥石			長さ	6.1	幅	2.1	厚さ	1.0	-	C-SD01			
第4-20図252	砥石			長さ	6.6	幅	3.9	厚さ	0.8	-	C-SD01			
第4-20図253	砥石			長さ	7.1	幅	4.6	厚さ	0.8	-	C-SD01		24	
第4-20図254	砥石			長さ	4.8	幅	4.5	厚さ	2.8	-	C-SD01			
第4-20図255	砥石			長さ	4.5	幅	5.1	厚さ	1.7	-	C-SD01			
第4-20図256	砥石			長さ	4.3	幅	5.0	厚さ	1.2	-	C-SD01			
第4-20図257	砥石			長さ	3.5	幅	4.1	厚さ	1.2	-	C-SD01			
第4-20図258	円盤状石製品			長さ	3.3	幅	3.3	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-20図259	環状石			長さ	8.1	幅	7.4	厚さ	4.2	-	C-SD01		24	
第4-20図260	石臼			長さ	4.8	幅	4.8	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-21図261	石臼			長さ	-	器高	4.0	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-21図262	石臼			長さ	-	器高	3.9	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-21図263	石臼			長さ	-	器高	4.4	厚さ	-	-	C-SD01			
第4-21図264	石製品	不明		長さ	12.1	幅	8.3	厚さ	7.7	-	C-SD01			
第4-21図265	石製品	不明		長さ	14.9	幅	14.9	厚さ	9.5	-	C-SD01		24	
第4-21図266	石製品	不明		長さ	11.5	幅	8.5	厚さ	5.8	-	C-SD01		24	
第4-33図019	石臼か茶臼			-	-	幅	8.1	厚さ	7.9	-	C-SD02			
第4-33図020	砥石			長さ	6.9	幅	4.9	-	-	2.1	C-SD02	結晶片岩		
第4-33図021	土師質土製品			長さ	5.6	幅	5.3	-	-	-	C-SD02			
第4-41図014	備前焼円盤状土製品			長さ	4.1	幅	4.0	-	-	-	C-SD11		27	
第4-41図015	瓦質円盤状土製品			長さ	3.7	幅	3.6	-	-	-	C-SD11			
第4-41図016	円盤状石製品			長さ	5.5	幅	5.3	-	-	-	C-SD11	軽石		
第4-41図017	円盤状石製品			長さ	6.0	幅	5.8	-	-	-	C-SD11	軽石		
第4-41図018	有孔石製品			長さ	4.1	幅	-	-	-	-	C-SD11		27	
第4-54図061	石臼			長さ	-	幅	7.0	-	-	-	C-SK10			

遺物観察表44

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土製品・石製品)②

図版No.	品名	材質	長さ	幅	厚さ	重量	遺構名	備考	図版No.
第4-54図062	石臼		長さ 6.8	幅 -	-	-	C-SK10		
第4-56図021	土鍾		長さ 5.4	幅 1.0	-	-	包含層		
第4-56図022	土鍾		長さ 5.3	幅 1.2	-	-	トレンチ		
第4-56図023	土鍾		長さ 5.0	幅 1.2	-	-	トレンチ		
第4-56図024	土鍾		長さ 4.3	幅 1.0	-	-	包含層		
第4-56図025	土鍾		長さ 3.2	幅 1.5	-	-	包含層		
第4-56図026	瓦質円盤状土製品		長さ 4.9	幅 4.8	-	-	包含層		
第4-56図027	瓦質円盤状土製品		長さ 4.1	幅 3.5	-	-	包含層		
第4-56図028	赤間硯		長さ 5.0	幅 5.0	-	2.0	包含層		27
第4-56図029	赤間硯		長さ 7.2	幅 4.8	-	1.2	包含層		27
第4-56図030	硯		長さ 7.0	幅 6.1	-	1.4	トレンチ	砥石の可能性もあり	
第4-56図031	有溝砥石		長さ 2.1	幅 3.9	-	-	トレンチ		
第4-56図032	砥石		長さ 8.2	幅 5.0	-	1.3	トレンチ		
第4-56図033	砥石		長さ 5.8	幅 -	-	-	包含層	砥石?	
第4-56図034	砥石		長さ 3.9	幅 3.7	-	1.0	包含層		
第4-56図035	滑石製石鍋		長さ 21.2	幅 -	-	-	包含層		27
第4-56図036	滑石製石鍋		長さ 13.0	幅 -	-	-	包含層		

遺物観察表44

府内町跡20次調査区C出土遺物観察表(金属製品・ガラス製品)

挿図No.	品名	材質	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.
			部位	長さ	幅	厚さ				
第4-21図267	扁平玉	ガラス		長さ 2.2	幅 2	厚さ 1.0	-	C-SD01		
第4-21図268	ガラス玉			長さ -	幅 1	厚さ 1.0	-	C-SD01	青色	24
第4-21図269	銅製品	銅		長さ 5.2	幅 -	厚さ -	-	C-SD01		24
第4-21図270	小柄	金属		長さ (9.9)	幅 (1.4)	厚さ (0.70)	-	C-SD01		
第4-43図010	鍔	青銅		長さ 8.3	幅 -	径 0.40	-	C-SK02		
第4-58図042	青銅製品	銅		長さ 6.1	幅 1.2			包含層	近世か?	27
第4-58図043	鉛玉			長さ 1.6	幅 1.3			表土		
第4-58図044	メダイ様金属製品	鉛		長さ 1.9	幅 1.2	厚さ 0.30	3.5	包含層		

遺物観察表46

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(木製品)①

挿図No.	品名	材質	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.
			部位	長さ	幅	厚さ				
第4-22図271	猿形木製品	木製		長さ 6.0	幅 1.8	厚さ 2.5		C-SD01		
第4-22図272	木製加工品	木製		長さ 26.2	幅 3.4	厚さ 0.8		C-SD01		
第4-22図273	椀	漆器		口径 13.4	底径 -	器高 (4.2)		C-SD01		
第4-22図274	椀	漆器		口径 12.6	底径 5.8	器高 4.5		C-SD01		
第4-22図275	椀	漆器		口径 -	底径 -	器高 (3.1)		C-SD01		
第4-22図276	椀	漆器		口径 -	底径 -	器高 (5.9)		C-SD01		
第4-22図277	椀	漆器		口径 13.3	底径 -	器高 (4.1)		C-SD01		
第4-23図278	椀	漆器		口径 -	底径 -	器高 (5.6)		C-SD01		
第4-23図279	糸巻	木器		長さ 4.7	幅 1.8			C-SD01		24
第4-23図280	舟形木製品	木器		長さ 17.8	幅 3.5	高さ 1.1		C-SD01		24
第4-23図281	燭台	木器	芯	長さ 12.8	幅 0.9			C-SD01		24
第4-23図282	柄杓	木器		口径 8.5	高さ -			C-SD01		24
第4-23図283	柄杓	木器		口径 7.8	高さ 5.5			C-SD01		24
第4-23図284	柄杓	木器		口径 9.8	高さ 6.3			C-SD01		24
第4-24図285	毬杖	木器		長さ 5.4	厚さ 2.7			C-SD01		24
第4-24図286	不明	木器	棒状	長さ 15.7	幅 2.6			C-SD01		25
第4-24図287	部材	木器	角状	長さ 9.6	幅 0.9			C-SD01		25
第4-24図288	不明	木器	板状	長さ 18.2	幅 2.1	厚さ 0.8		C-SD01		25
第4-24図289	箸	木器		長さ -	幅 0.8			C-SD01		
第4-24図290	箸	木器		長さ -	幅 0.6			C-SD01		
第4-24図291	箸	木器		長さ -	幅 0.5			C-SD01	竹製品 (B13に同じ)	
第4-24図292	箸	木器		長さ -	幅 0.6			C-SD01		
第4-24図293	箸	木器		長さ -	幅 0.6			C-SD01		
第4-24図294	箸	木器		長さ -	幅 0.8			C-SD01		
第4-24図295	箸	木器		長さ 17.0	幅 0.8			C-SD01		
第4-24図296	箸	木器		長さ 17.2	幅 0.8			C-SD01		
第4-24図297	箸	木器		長さ -	幅 0.3			C-SD01	竹製品	
第4-24図298	箸	木器		長さ 20.6	幅 0.5			C-SD01		
第4-24図299	箸	木器		長さ 21.3	幅 0.8			C-SD01		
第4-24図300	箸	木器		長さ -	幅 0.7			C-SD01		
第4-24図301	箸	木器		長さ 24.3	幅 0.6			C-SD01		
第4-24図302	箸	木器		長さ 23.9	幅 0.8			C-SD01		
第4-24図303	箸	木器		長さ 24.3	幅 0.8			C-SD01		
第4-24図304	箸	木器		長さ -	幅 0.8			C-SD01		
第4-24図305	箸	木器		長さ -	幅 0.9			C-SD01		
第4-24図306	箸	木器		長さ -	幅 1.1			C-SD01		
第4-24図307	箸	木器		長さ 29.6	幅 0.8			C-SD01		25
第4-24図308	箸	木器		長さ 29.3	幅 0.8			C-SD01		
第4-25図309	棒状製品	木器		長さ 25.0	幅 1.4			C-SD01		
第4-25図310	下駄	木器		長さ 18.5	幅 10.0	高さ 5.5		C-SD01		25
第4-25図311	下駄	木器		長さ 17.7	幅 9.0	高さ 4.9		C-SD01		25
第4-25図312	下駄	木器		長さ 19.5	幅 7.8	高さ 4.3		C-SD01		25
第4-25図313	下駄	木器		長さ 14.9	幅 -	高さ 2.4		C-SD01		25

遺物観察表47

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表（木製品）①

第4-26図314	不明	木器	板状	長さ	9.6	幅	2.4	厚さ	0.5	C-SD01	25
第4-26図315	板状製品	木器		長さ	11.6	幅	3.8	厚さ	0.4	C-SD01	25
第4-26図316	不明	木器	板状	長さ	6.2	幅	—	厚さ	0.4	C-SD01	
第4-26図317	不明	木器	板状	長さ	12.0	幅	—	厚さ	0.9	C-SD01	
第4-27図318	不明	木器	板状	長さ	16.7	幅	8.3	厚さ	0.6	C-SD01	25
第4-27図319	不明	木器	板状	長さ	17.8	幅	4.0	厚さ	0.7	C-SD01	
第4-27図320	板状製品	木器		長さ	20.8	幅	9.2	厚さ	0.6	C-SD01	
第4-27図321	不明	木器	板状	長さ	28.0	幅	5.4	厚さ	0.8	C-SD01	
第4-28図322	不明	木器	板状	長さ	31.5	幅	7.5	厚さ	0.8	C-SD01	
第4-28図323	角材	木器		長さ	23.5	幅	10.4			C-SD01	
第4-28図324	曲物	木器	蓋	長さ	12.3	幅	5.4	厚さ	0.7	C-SD01	
第4-28図325	曲物	木器	蓋	長さ	—	幅	—	厚さ	0.4	C-SD01	
第4-28図326	曲物	木器		長さ	11.5	厚さ	0.5			C-SD01	
第4-28図327	曲物	木器		径	8.4	厚さ	0.4			C-SD01	
第4-28図328	曲物	木器		長さ	13.3	厚さ	0.5			C-SD01	25
第4-28図329	曲物	木器		径	10.0	厚さ	0.2			C-SD01	
第4-31図033	下駄	木器		長さ	20.5	幅	11.3	高さ	7.6	C-SD10	25
第4-31図034	下駄	木器		長さ	18.5	幅	10.0	高さ	4.2	C-SD10	26
第4-31図035	箸	木器		長さ	—	幅	0.6			C-SD10	
第4-31図036	箸	木器		長さ	—	幅	0.8			C-SD10	
第4-34図024	毬杖	木器	毬	長さ	6.6	厚さ	5.6			C-SD02	26

遺物観察表48

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表（瓦）

挿図No.	品 種	材質	部位	寸法 (単位:cm)				重量 (g)	遺構名	備 考	図版 No.
				長さ	幅	厚さ	径				
第4-34図022	軒丸瓦			長さ	—	幅	6.8	厚さ	—	C-SD02	26
第4-34図023	軒平瓦			長さ	—	幅	4.5	厚さ	—	C-SD02	26
第4-57図037	軒平瓦			長さ	—	幅	—	厚さ	—	トレンチ	
第4-57図038	丸瓦			長さ	31.5	幅	—	厚さ	—	C-SK10	
第4-57図039	丸瓦			長さ	31.0	幅	—	厚さ	—	C-SK10	
第4-57図040	丸瓦			長さ	(21.8)	幅	—	厚さ	—	C-SK10	
第4-57図041	丸瓦			長さ	(22.9)	幅	—	厚さ	—	C-SK10	

遺物観察表49

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表（銅銭）

挿図No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	遺構名	備 考	図版 No.
第4-59図01	不明			4.5	2.4		C-SD01	錆付着	
第4-59図02	皇宋通寶	1038年	北宋	3.0	2.4	篆書	C-SD01		
第4-59図03	元祐通寶	1086年	北宋	3.2	2.4		C-SD01		
第4-59図04	紹聖元寶	1094年	北宋	2.3	2.3		C-SD01		
第4-59図05	政和通寶	1111年	北宋	2.3	2.4	真書	C-SD01		
第4-59図06	元豐通寶	1078年	北宋	2.9	2.4	篆書	C-SD01		
第4-59図07	不明			0.6	—		C-SD01		
第4-59図08	元豐通寶	1078年	北宋	2.7	2.4	篆書	C-SD01		
第4-59図09	不明			1.1	—		C-SD01	「寶」のみ	
第4-59図10	聖宋元寶	1101年	北宋	2.0	2.4	篆書	C-SD01		
第4-59図11	熙寧元寶	1068年	北宋	3.5	2.3	真書	C-SD01		
第4-59図12	紹聖元寶	1094年	北宋	2.1	2.4	行書	C-SD01		
第4-59図13	皇宋通寶	1038年	北宋	3.2	2.4	篆書	C-SD10		
第4-59図14	祥符通寶	1008年	北宋	2.1	2.5		C-SD02		
第4-59図15	不明			3.4	2.5		C-SD11	錆で読めず 4枚重なっている	
第4-59図16	不明			3.5	2.5		C-SD11	錆で読めず 4枚重なっている	
第4-59図17	不明			4.0	2.5		C-SD11	錆で読めず 4枚重なっている	
第4-59図18	不明			3.5	2.4		C-SD11	錆で読めず 4枚重なっている	
第4-60図19	天聖元寶	1023年	北宋	3.1	2.5	篆書	C-SD11		
第4-60図20	不明			6.8	2.5		C-SK02	錆で読めず	
第4-60図21	不明			1.0	—		C-SK02		
第4-60図22	不明			2.3	—		C-SK10		
第4-60図23	不明			3.4	2.5			錆付着	
第4-60図24	不明			1.3	2.4			包含層 錆付着 半分欠損	
第4-60図25	元豐通寶	1078年	北宋	2.6	2.3	篆書	包含層		
第4-60図26	嘉祐通寶	1056年	北宋	2.7	2.4	篆書	包含層		
第4-60図27	永樂通寶	1408年	明	3.0	2.5		包含層		
第4-60図28	天聖元寶	1023年	北宋	2.5	2.4	真書	包含層		
第4-60図29	咸淳元寶	1265年	南宋	2.1	2.4		包含層	背八	
第4-60図30	元祐通寶	1086年	北宋	1.8	2.4		包含層	一部欠損	
第4-60図31	不明			1.2	2.5		包含層	一部のみ	
第4-60図32	不明			3.1	2.5		包含層	錆で読めず	
第4-60図33	祥符通寶	1008年	北宋	1.8	2.4		包含層	一部欠損	
第4-60図34	開元通寶	621年	唐	2.5	2.3		包含層		
第4-60図35	不明			2.6	2.4		包含層	錆付着	
第4-60図36	不明			1.1	—		包含層	半分欠損	



# 写 真 图 版



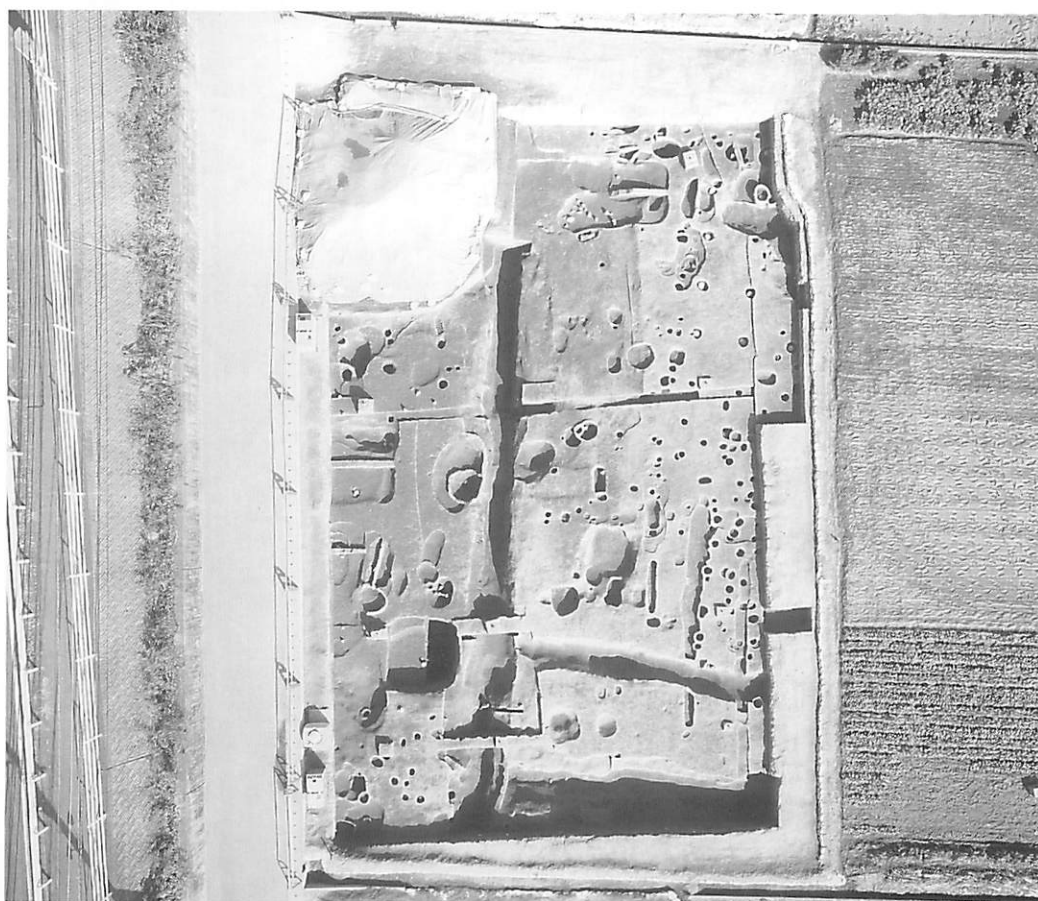
府内町跡20次調査区と万寿寺跡（西上空から）



府内町跡20次調査 全景写真



府内町跡20次調査と国道10号線



府内町跡20次調査 A区 全景





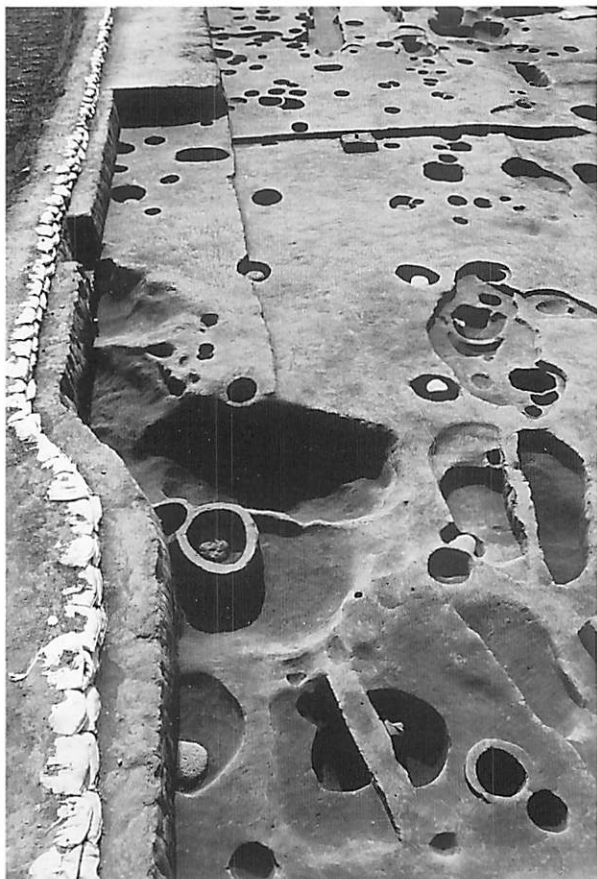
府内町跡20次調査 各溝の接合部



府内町跡20調査 B区 礎 建物群



A-SB01 近景 1



A-SB01 近景 2



A-SB01 の基盤の川厚石 (A-SP026)



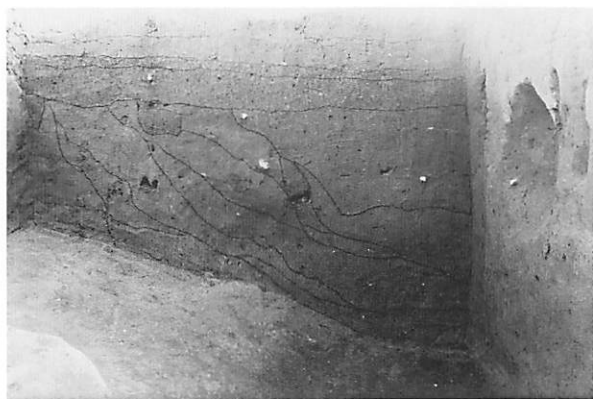
A-SK1505



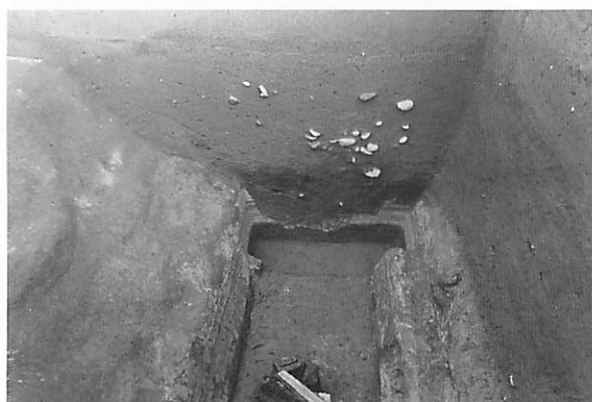
A-SD1505



A-SD1501



A-SD1501 土層断面



A-SD1506



A-SK1017



A-SE1045 (井戸)



A-SK1039

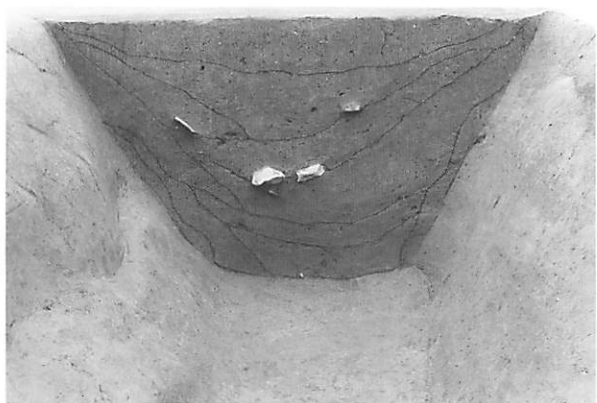




B-SK047



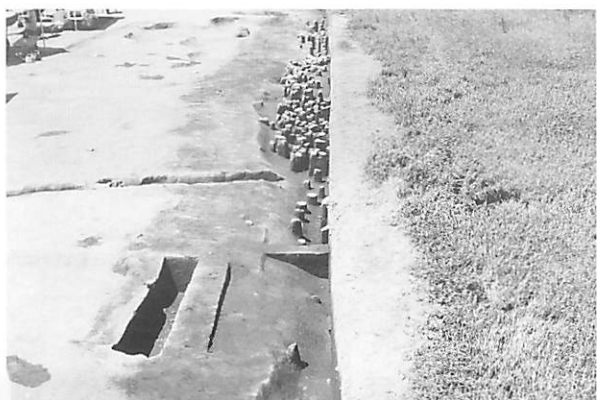
B-SD003



B-SD003 土層断面



B-SD064 土層断面



B-SD004 瓦出土状況



B-SD004



B-SD003 と B-SK020



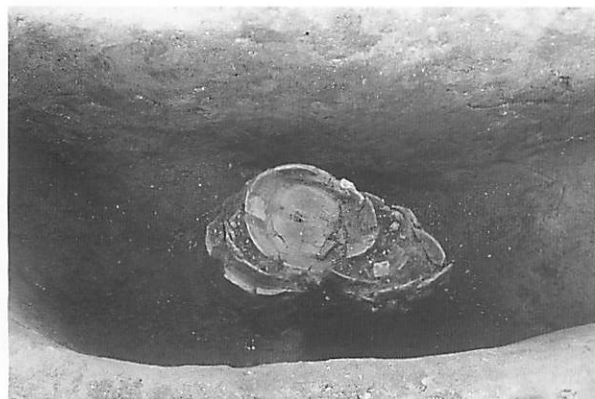
B-SK020 全景



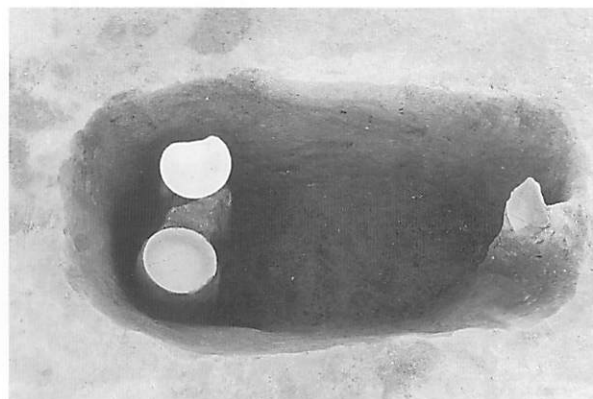
B-SK020 近景



B-SK048



B-SK184



B-SK063



B-SE009 (井戸)



B-SE006 (井筒)



B-SE010 井戸内搗鉢



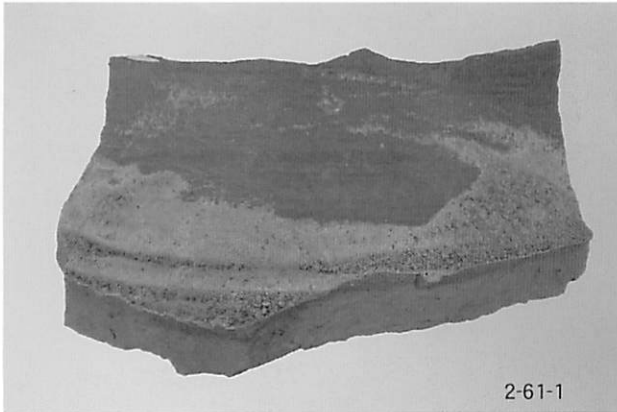
B-SE010 裏込めの石



B-SK015

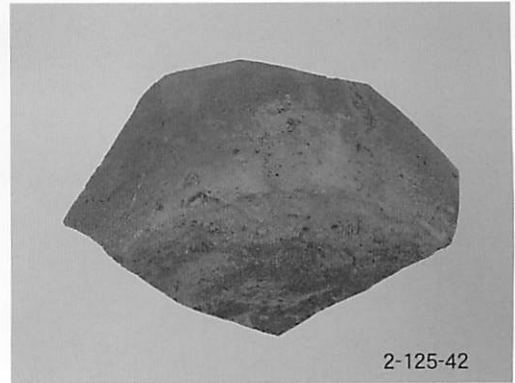


B-SD004 瓦出土状況



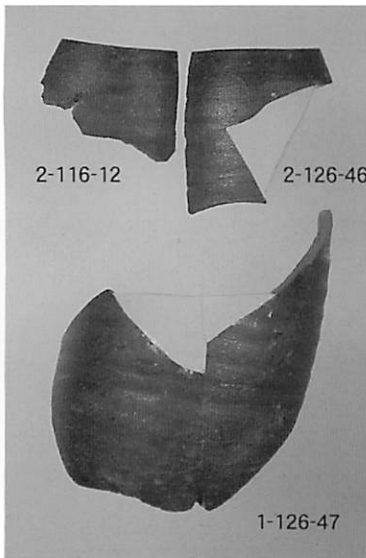
2-61-1

タイ産陶器(四耳壺)



2-125-42

朝鮮王朝産(舟徳利)



2-116-12

2-126-46

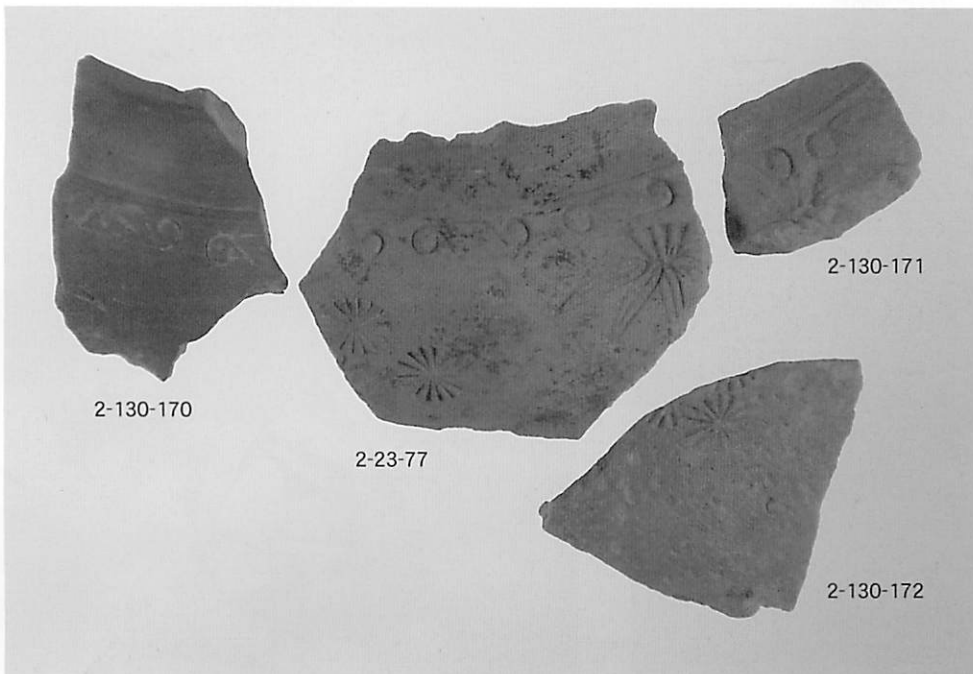
1-126-47

備前系陶器(掛花入)



2-17-59

A-SK1505のこね鉢



2-130-170

2-23-77

2-130-171

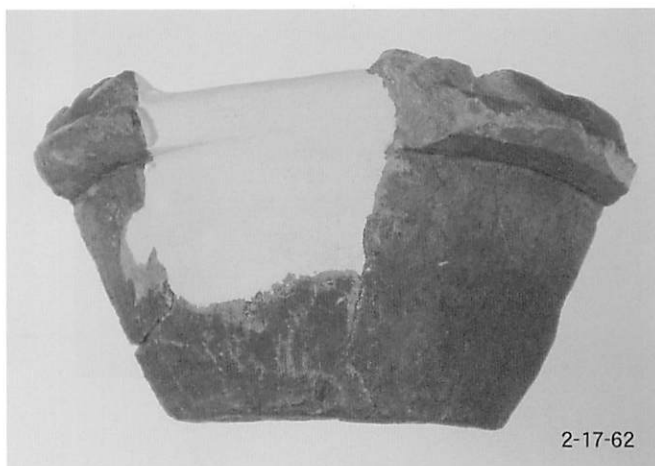
2-130-172

瓦質土器



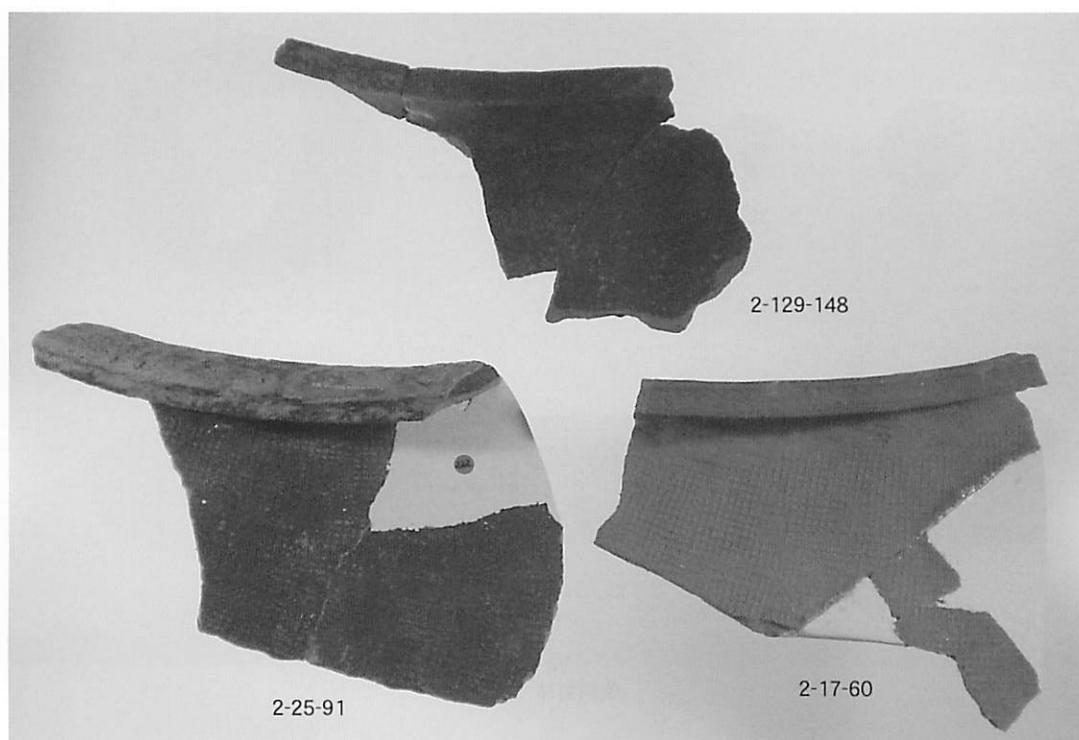
2-48-4

備前系陶器のヘラ記号



2-17-62

石鍋



2-129-148

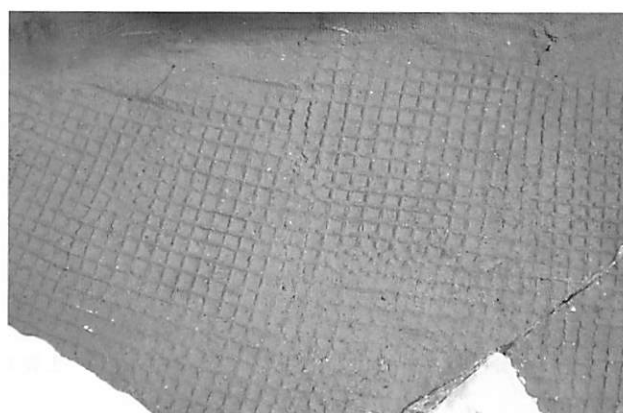
2-25-91

2-17-60



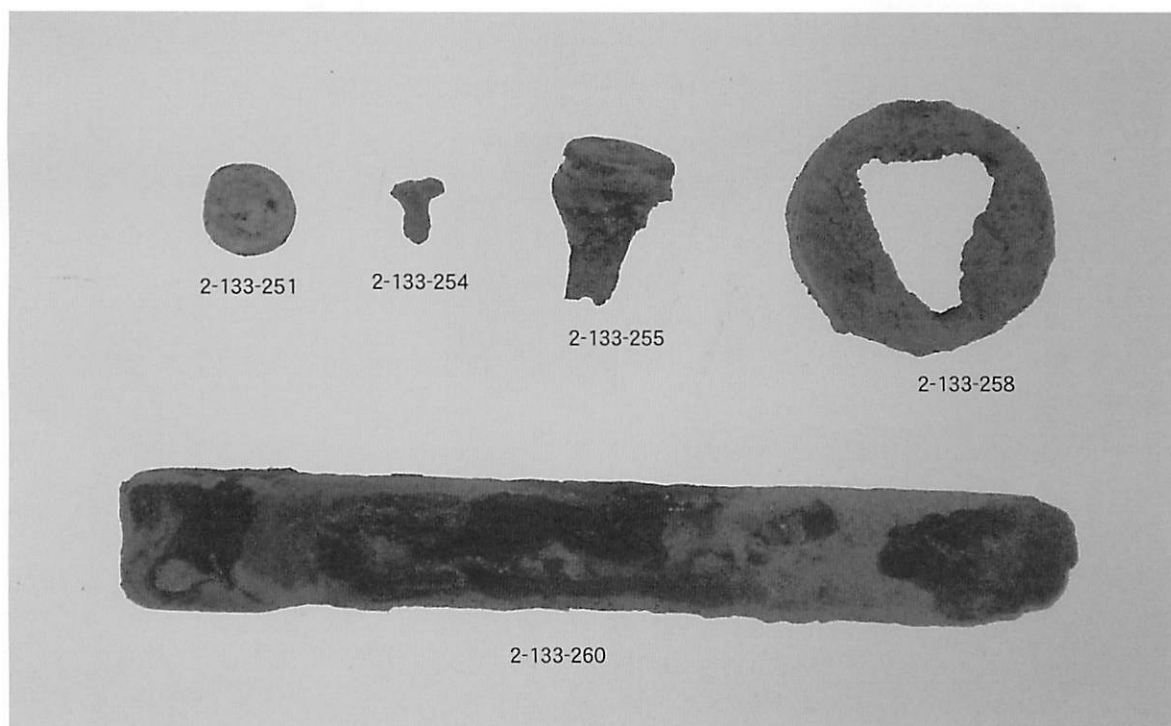
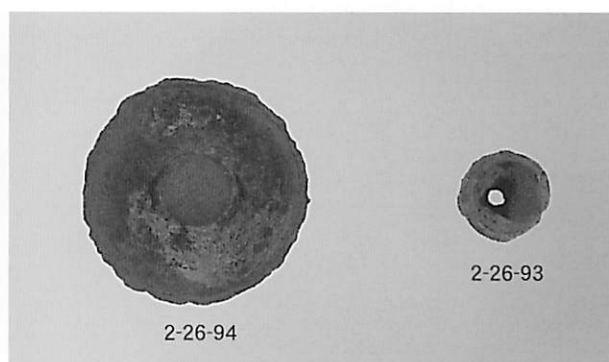
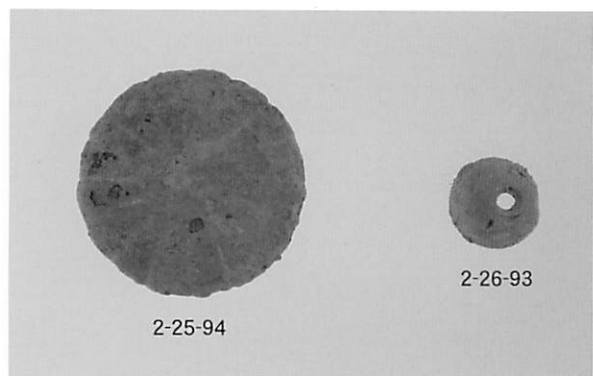
亀山系須恵質土器

2-25-91

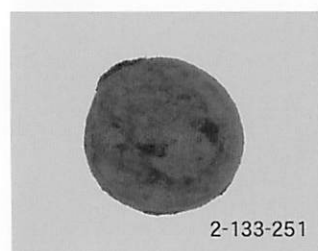


2-17-60

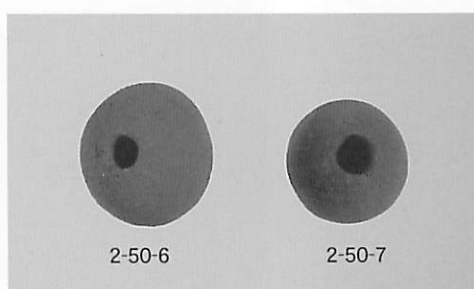




金銅製品



分銅



土製玉



石製品 (滑石製)



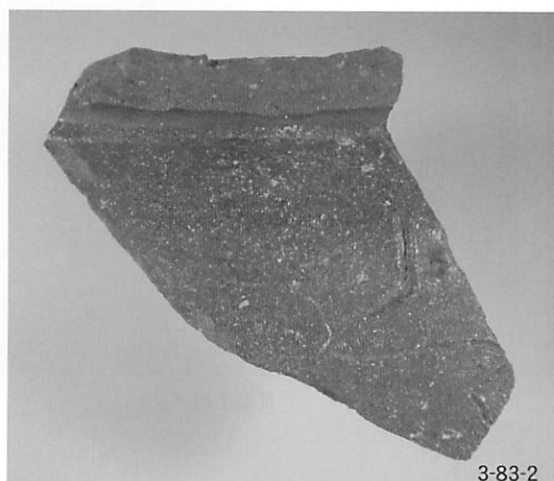
常滑系陶器



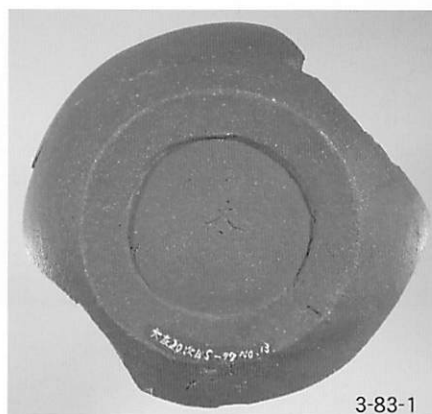
備前系陶器 (播鉢)



備前系陶器ヘラ記号



備前系陶器大甕のヘラ記号



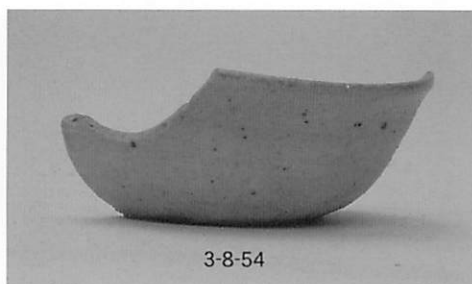
備前系陶器ヘラ記号





3-141-6

吉備系土師器



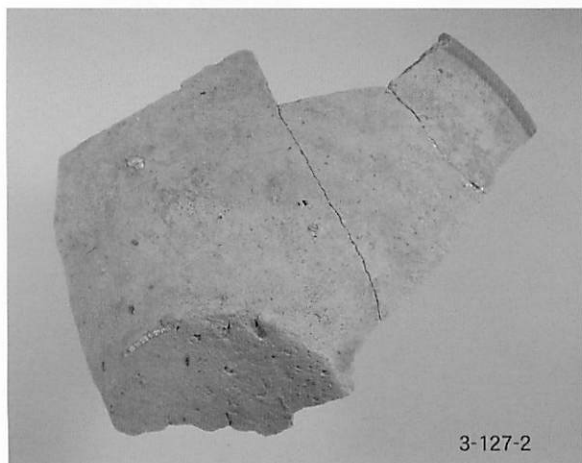
3-8-54

瀬戸美濃系陶器



3-135-39

土 鍋



3-127-2

東播系須恵質土器



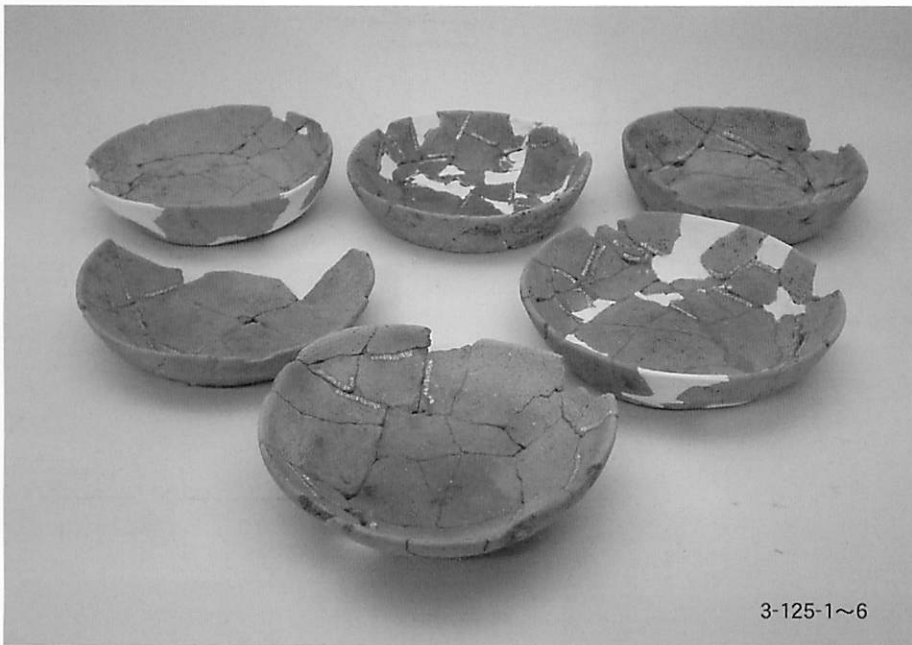
3-131-9

瓦製土器（鉢）



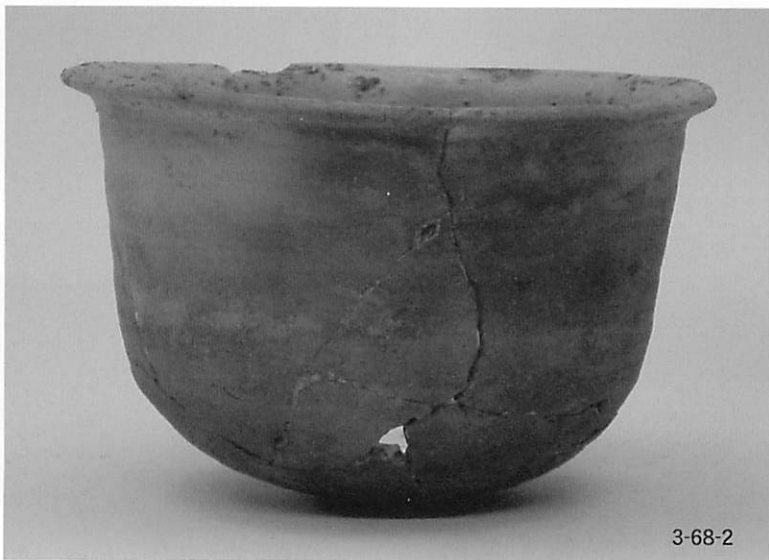
B-SK048 出土 在地系土師質土器

3-70-



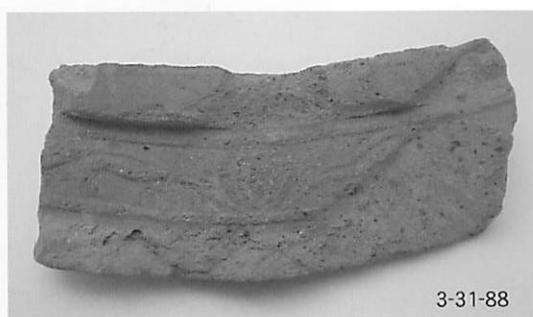
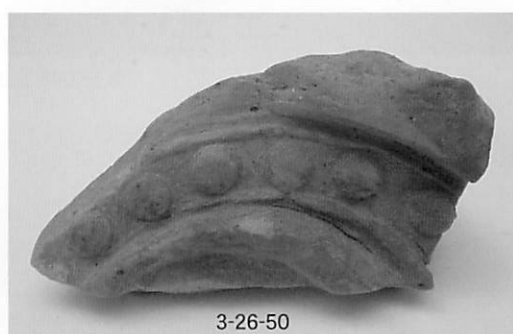
B-SK184 出土 在地系土師質土器

3-125-1~6

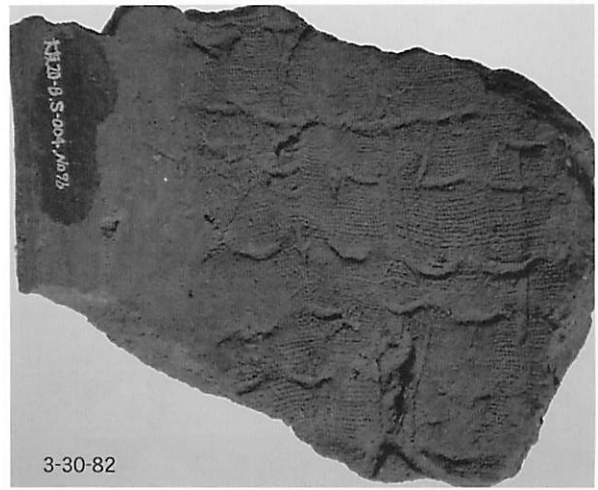


B-SK047 出土 土師器

3-68-2



B-SD004 出土 瓦



九州タイプの吊り紐痕



本州タイプの吊り紐痕

B-SD004 出土 丸瓦の製作痕





C-SD01[上層]遺物出土状況



C-SD01[上層]青磁人物像燭台出土状況



C-SD01[中層]遺物出土状況



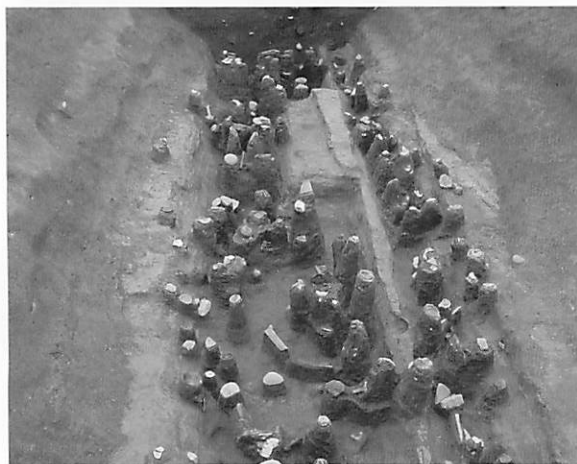
C-SD01[中層]粘質土内遺物出土状況



C-SD01[中層]猿形木製品出土状況



C-SD01[中層]華南三彩・舟徳利出土状況



C-SD01[下層]遺物出土状況(1)



C-SD01[下層]遺物出土状況(2)



C-SD01[下層]燭台出土状況



C-SD01[下層]土師質土器出土状況



C-SD01[下層]下駄出土状況



C-SD01[下層]舟形木製品出土状況



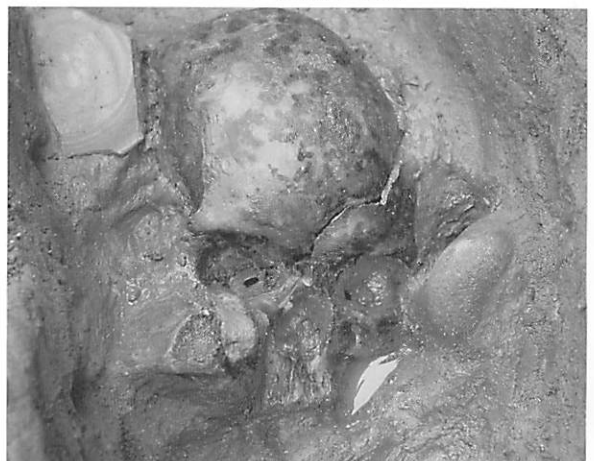
C-SD01・SD10切り合い状況(左:SD10 右:SD01)



C-SD10 遺物出土状況



C-SD10 人骨出土状況(1)



C-SD10 人骨出土状況(2)



C-SD01直上 道路検出状況(東から)



C-SD01・C-SD10 完掘状況(東から)



C-SD02 遺物出土状況



C-SD12 遺物出土状況



遺物出土状況

C-SD04 遺物出土状況



C-SD11 遺物出土状況



C-SD05・C-SD07・C-SD08・C-SD09 遺物出土状況



C-SD05・C-SD07・C-SD08・C-SD09 完掘状況





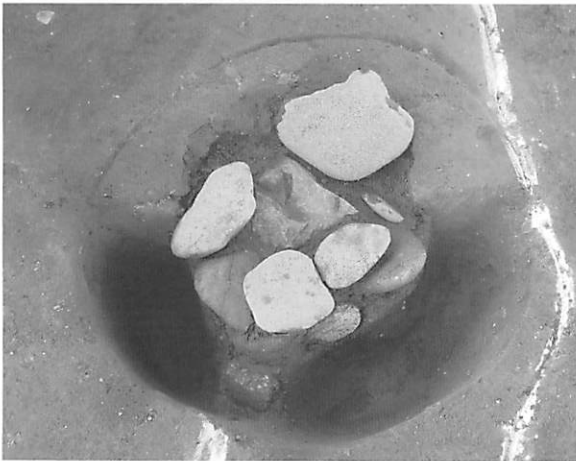
金箔土師器出土状況

SK01 遺物出土状況



遺物出土状況

SK05 完掘状況



SK06 遺物出土状況



SK08 遺物出土状況



SK10 遺物出土状況(1)



SK10 遺物出土状況(2)



瀬戸美濃系陶器出土状況



備前系陶器出土状況

京都系土師器出土状況





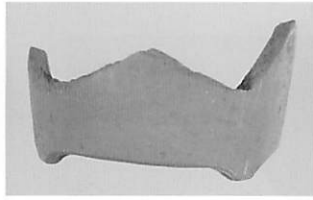
C-SD01出土遺物[備前系陶器] (第4-9図～第4-14図)



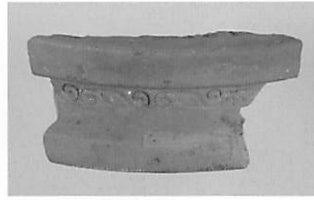
C-SD01出土遺物[土師質土器] (第4-14図～第4-16図)



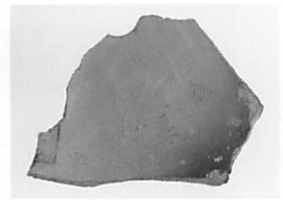
4-17-207



4-17-211



4-17-212



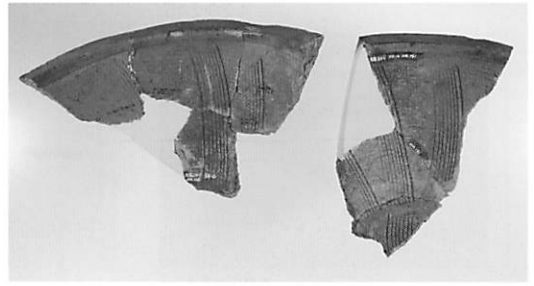
4-17-213



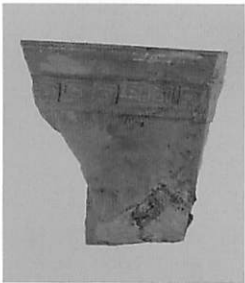
4-17-214



4-17-215



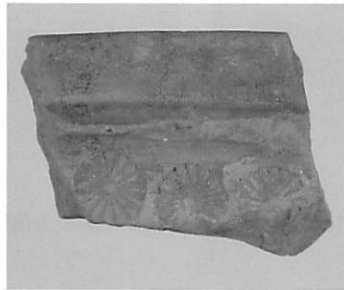
4-17-217



4-18-220



4-18-221



4-18-222



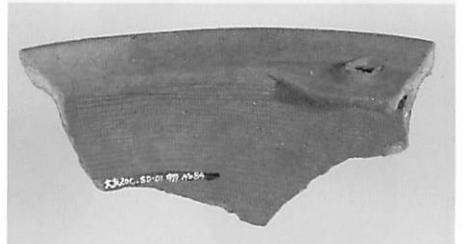
4-18-225



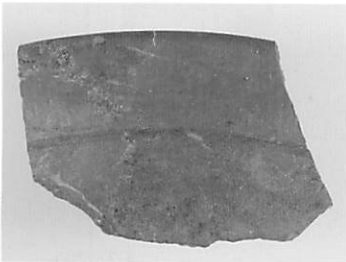
4-18-226



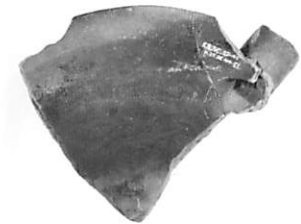
4-19-227



4-19-229



4-19-230

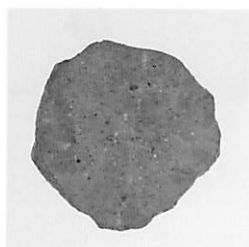


4-19-231

C-SD01出土遺物[瓦質土器] (第4-17図~第4-19図)



4-19-235



4-19-236

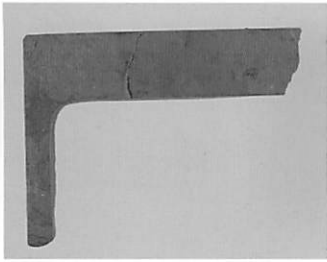


4-19-239

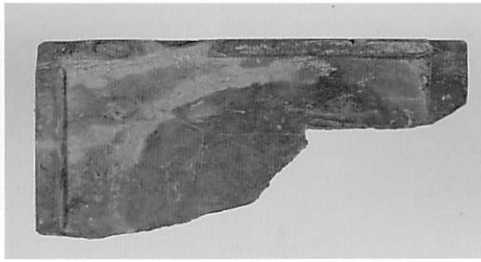


4-19-244

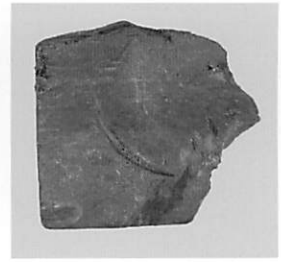
C-SD01出土遺物[土製品] (第4-19図)



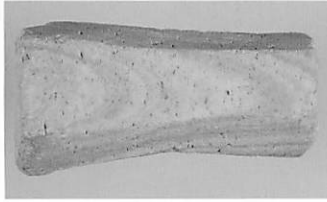
4-20-245



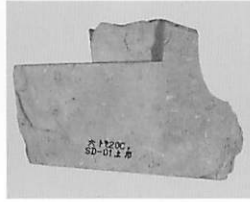
4-20-246



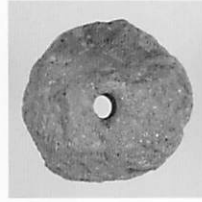
4-20-248



4-20-250



4-20-253



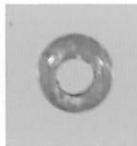
4-20-259



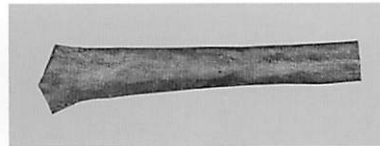
4-21-265



4-21-266

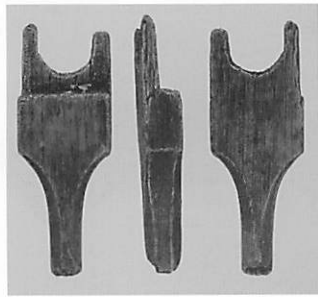


4-21-268

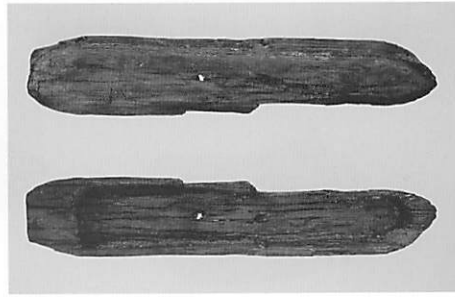


4-21-269

C-SD01出土遺物[石製品・ガラス製品・金属製品] (第4-20図・第4-21図)



4-23-279



4-23-280



4-23-281



4-23-282



4-23-283



4-23-284

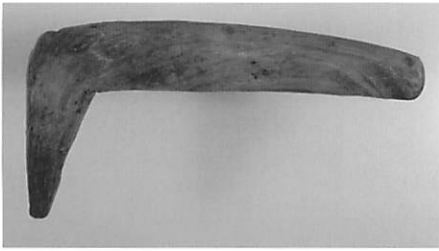


4-24-285

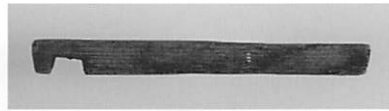


C-SD01出土遺物[木製品] (1) (第4-23図～第4-24図)

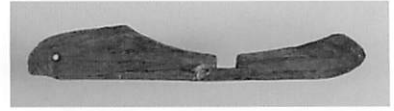




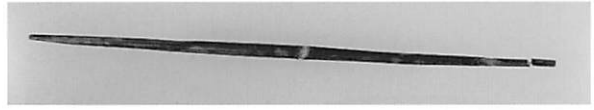
4-24-286



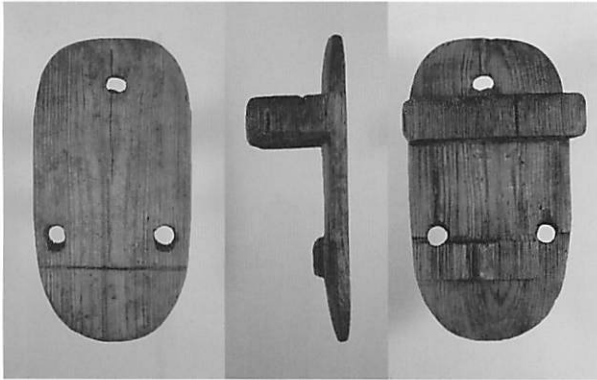
4-24-287



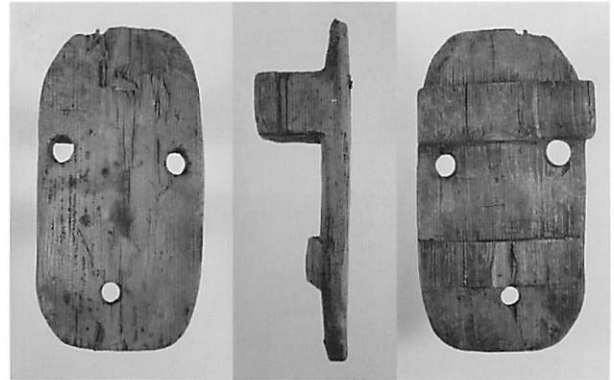
4-24-288



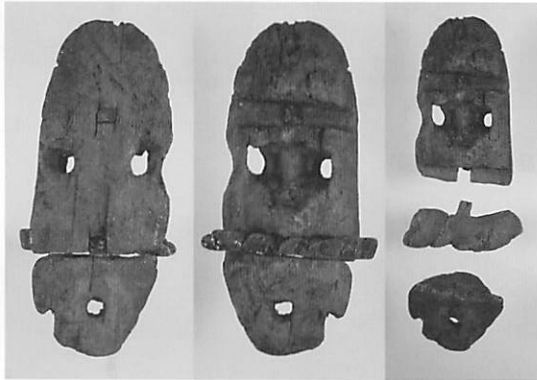
4-24-307



4-25-310



4-25-311



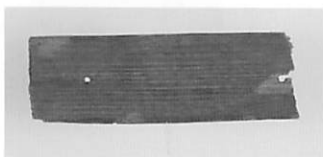
4-26-312



4-26-313



4-26-314



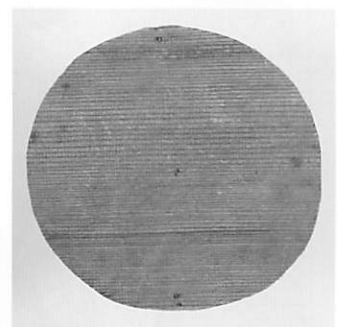
4-26-315



4-27-318

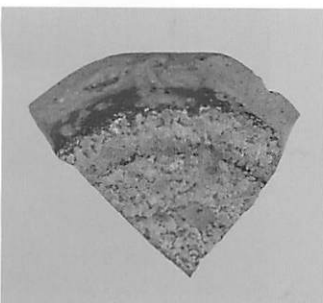


4-28-327



4-28-329

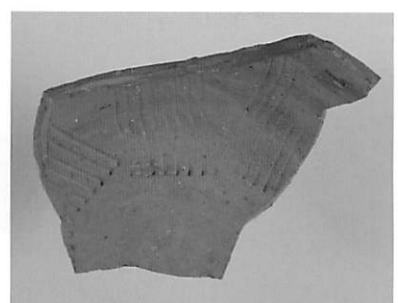
C-SD01出土遺物[木製品](2) (第4-20図・第4-21図)



4-29-2

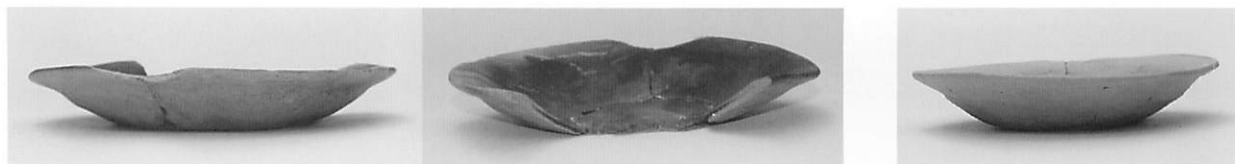


4-29-3



4-29-4

C-SD10出土遺物[備前系陶器] (第4-29図)

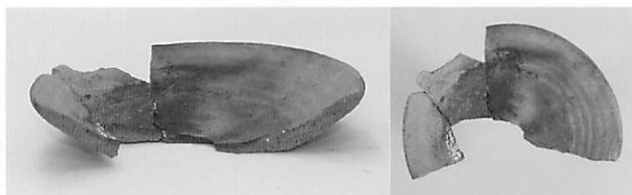


4-29-11

4-29-12

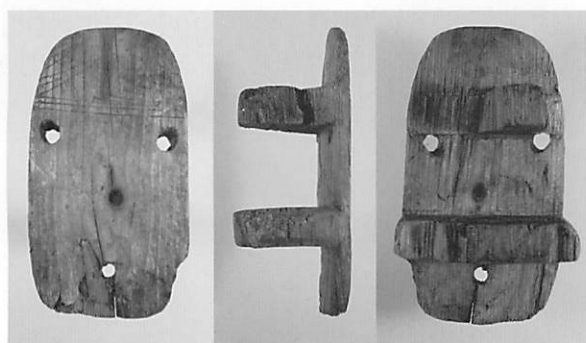


4-30-22

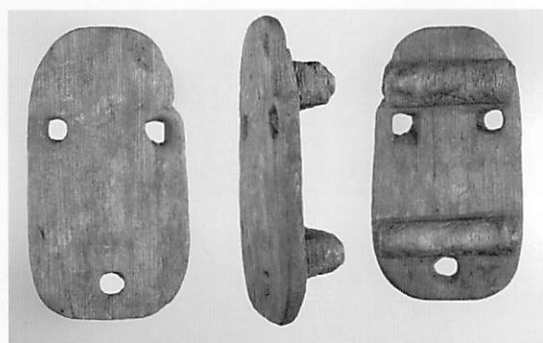


4-30-27

C-SD10出土遺物[土師質土器] (第4-29図・第4-30図)



4-31-33

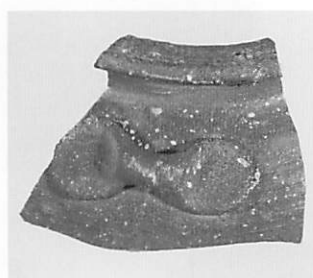


4-31-34

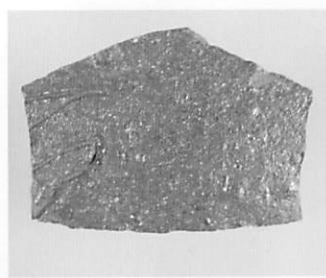
C-SD10出土遺物[木製品] (第4-31図)



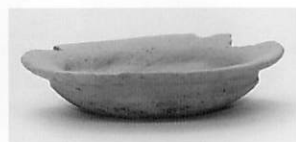
4-33-3



4-33-4



4-33-5



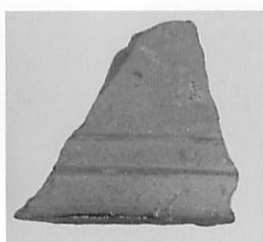
4-33-9



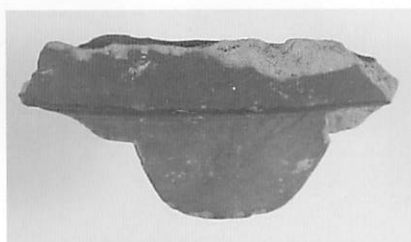
4-33-14



4-33-15



4-33-17



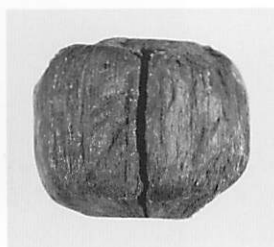
4-33-18



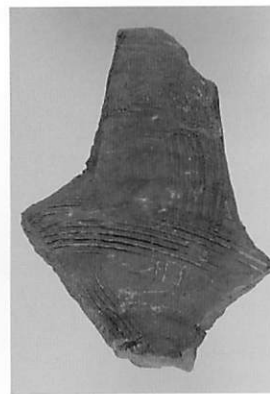
4-34-22



4-34-23



4-34-24

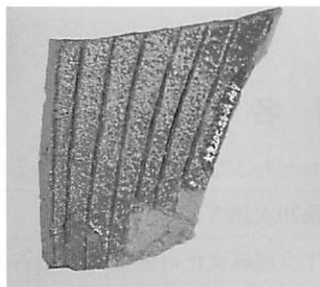


4-34-25

C-SD02・C-SD12出土遺物 (第4-33図・第4-34図)

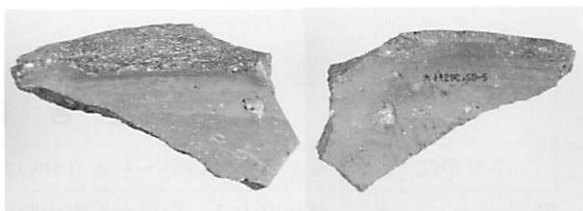


4-36-1



4-36-2

C-SD04出土遺物 (第4-36図)

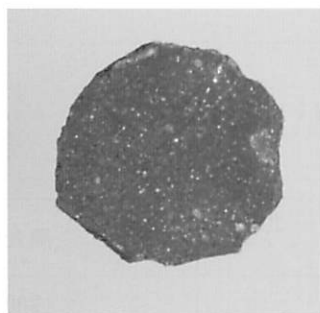


4-38-5

C-SD05出土遺物 (第4-38図)



4-41-1

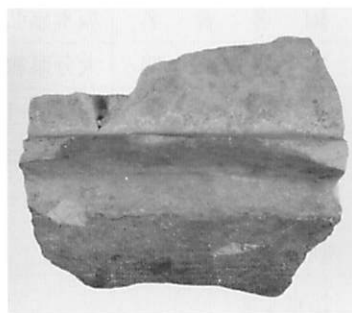


4-41-14

C-SD11出土遺物 (第4-41図)



4-41-18

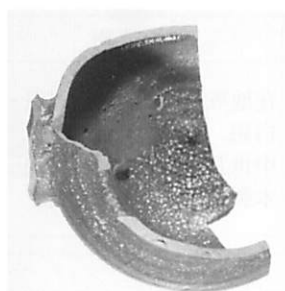


4-45-2

C-SK05出土遺物 (第4-45図)

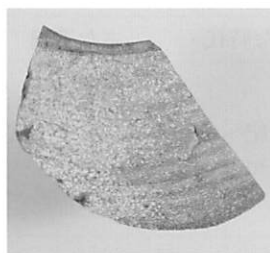


4-50-15



4-50-17

C-SK10出土遺物 (第4-50図~第4-53図)



4-52-25



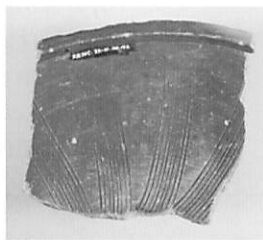
4-52-49



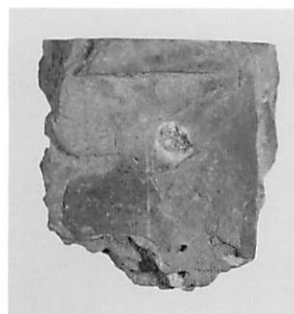
4-52-29



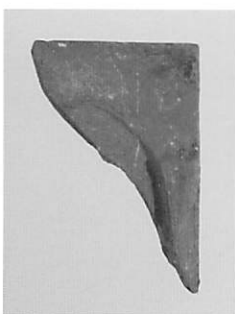
4-52-44



4-53-54



4-56-28

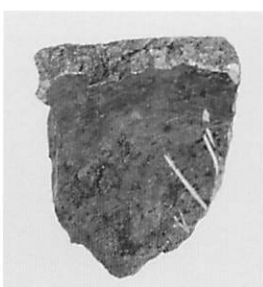


4-56-29



4-56-35

含有層出土遺物 (第4-56図~第4-58図)



4-56-36



4-58-42



## 報告書名抄録

ふりがな	ぶんごふない7-ちゅうせいおおもふないまちあとだい20じちょうさー
書名	豊後府内7-中世大友府内町跡第20次調査-
副書名	一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(3)
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	坂本嘉弘・後藤晃一
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
発行年月日	平成19年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中世大友 府内町跡 第20次 調査区	大分市元町	322	051	33° 13' 28"	131° 37' 17"	2002年 5月 ～ 2003年 3月	2,100㎡	一般国道 10号古国府 拡幅事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中世大友府内町跡第20次調査区	包蔵地 ほか	中世 14世紀～ 16世紀	区画性の強い堀と 溝・井戸・土坑 礎盤建物	在地系土師質土器、青磁・ 白磁、青花等貿易陶磁、 中世瓦、銅銭、ガラス玉、 木製人形、各種木製品	調査区は豊後「府内」の中核的 寺院の西北部隅にあたり、北境 の区画施設やこの部分の区画や 建物を検出した。

要 約	<p>中世大友城下町跡の中でも最大の占有面積を占める万寿寺の西北隅の調査を実施した。その結果、万寿寺の創建時である14世紀初頭から、焼失し機能を失う16世紀末までの遺構を検出した。14世紀代では区画性の強い南北方向や東西方向の溝を検出し、ほぼ同じ時期の建物である川原石を礎盤とする建物を検出した。また、16世紀後半においては、文献に見られる万寿寺西之屋敷の裏手の状況を検出した。さらに北側では、万寿寺と御内町との境になる大規模な堀を検出した。この堀の周辺は14世紀代からの東西方向の溝が幾筋も検出され、古くから北側の境であったことが推測された。</p>
-----	--

